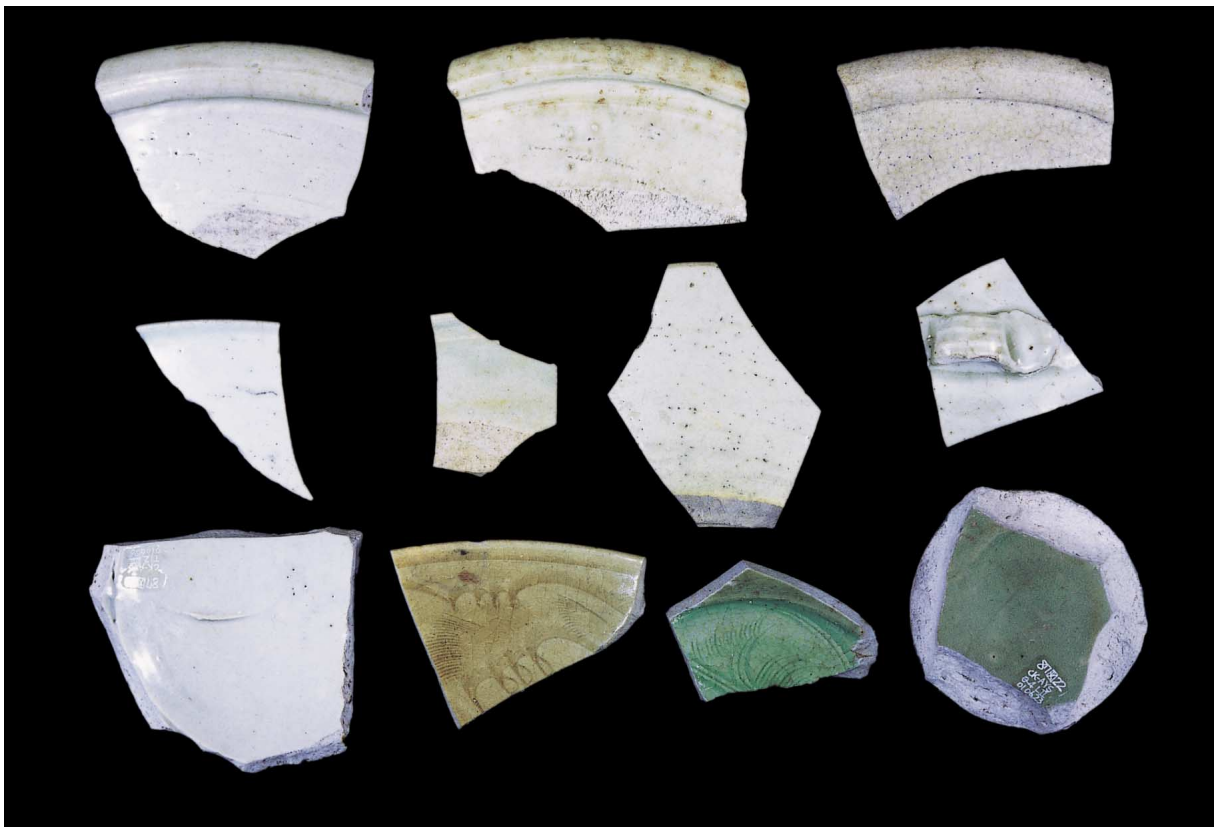
# 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 2

荒屋敷遺跡

口絵１　遺跡全景（空中写真撮影：合成写真）



口絵２　遺跡出土貿易陶磁器（白磁・青磁）

# 序　　文

「会津縦貫北道路」は，喜多方市と会津若松市を結ぶ延長約13.1㎞の地域高規格道路です。平成８年度に都市計画道路として決定され，平成９年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この路線が発表された区間には，先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており，福島県教育委員会は周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡を確認してきました。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史や文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

このため，福島県教育委員会では，国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，平成13年度から現状保存が困難な遺跡について記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，耶麻郡塩川町に所在する荒屋敷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に，この発掘調査にあたり，御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成15年３月

福島県教育委員会
教育長　　髙　城　俊　春

# あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。会津縦貫北道路に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成13年度より本格的に事業を開始いたしました。

平成13年度は，予定路線上で工事が優先される塩川町遠田地区の麻生館遺跡と荒屋敷遺跡について発掘調査を実施いたしました。本報告書は，このうち荒屋敷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

荒屋敷遺跡は日橋川右岸の自然堤防上に立地する遺跡で発掘調査により縄文時代と平安時代及び中近世の複合遺跡であることがわかってまいりました。出土遺物の多くは平安時代に属する土師器や須恵器でありますが，これに加えて中世の白磁や青磁も出土しており，当該期の会津地域はもとより他地域との流通経路を知る上で，貴重な資料になるものと思われます。

今後，これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として，さらに地域社会の理解や生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，発掘調査当初から報告書刊行に至るまで，御指導・御協力いただきました関係諸機関並びに関係各位に対し，深く感謝申し上げますとともに，埋蔵文化財の保護に対し，今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成15年３月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　佐　藤　栄　佐　久

# 緒　　言

1．本書は平成13年度に実施した会津縦貫北道路（会津若松～喜多方間）遺跡発掘調査の報告書である。埋蔵文化財番号：403―00073　荒屋敷遺跡；耶麻郡塩川町遠田字荒屋敷　他

2．当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し，調査に係る費用は国土交通省が負担した。

3．福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

4．財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配して調査にあたった。

文化財主査　高橋　信一　　文化財主査　小笠原　啓美
文化財副主査　菊田　順幸　　文化財副主査　井　憲治

なお，臨時的に次の職員の参加・協力を得た。

専門文化財主査　大越　道正　　文化財主査　斎藤　竜一
文化財副主査　香川　愼一　　文化財主事　小野　忠大
文化財主事　三浦　武司

5．本書の執筆は，担当職員が分担して行い，各文末に文責を明記した。

6．本書に使用した地図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１地形図・２万５千分の１地形図を複製したものである（承認番号　平14東複第444号）。

7．本書に掲載した自然科学分析については，次の機関の協力を得，付章にその結果と考察を掲載している。（順位不同・敬称略）

自然科学分析　：　土壌分析・種実同定　・・・（株）古環境研究所
　　樹種同定　・・・（株）パリノ・サーヴェイ

8．古代文字資料の鑑定・指導には，平川　南氏（国立歴史民俗博物館）・三上　喜孝氏（山形県立米沢女子短期大学講師）の御協力を賜った。

9．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10．発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の機関及び個人の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順位不同・敬称略）

国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所・福島県喜多方建設事務所・塩川町教育委員会・喜多方市教育委員会・湯川村教育委員会・遠田地区

和田　聡・植村　泰徳・山中　雄志・飯村　均

# 用　　例

1．本文中および遺物整理に使用した略記号は次のとおりである。

塩川町　…ＣＫ　荒屋敷　…ＡＹＳ

竪穴状遺構…ＳＩ　掘立柱建物跡…ＳＢ　柱列跡　…ＳＡ　土　坑…ＳＫ

溝　跡　…ＳＤ　小穴・ピット…Ｐ　グリッド…Ｇ　トレンチ…Ｔ

遺構外堆積土…Ｌ　遺構内堆積土…ℓ

2．本書における遺構実測図の用例は，以下のとおりである。

（1）方位記号の表記がないものは，全て真上を真北とする。

（2）遺構平面図は，原則として座標軸経線の北を上にして割り付けを行った。

（3）遺構図は原則として，竪穴状遺構・建物跡・柱列跡を1/50，土坑を1/40，溝跡を1/100～1/300の縮尺とした。スケール脇に縮尺率を表示した。

（4）原則として遺構内の傾斜面は ⅢⅢで表示したが，相対的に緩傾斜の部分は ⅢⅢで表している。また，後世の削平や人為的な削土部分は ⅢⅢ の記号で表記した。風倒木跡やその他の撹乱による範囲には，ⅢⅢのケバを使用し，「カクラン」などの語句を記している。なお，これら「カクラン」や盛土等には，必要に応じて網点を貼り付けている。

（5）断面図および地形図における標高・水糸レベルは海抜標高を示す。また，断面図における水準線脇の数値は標高である。

（6）遺構外の自然堆積土はローマ数字，遺構内堆積土は算用数字で表記した。

［例］遺構外自然堆積土：ＬⅠ・ＬⅡ…　，遺構内堆積土：ℓ１・ℓ２…

（7）各ピットの深さは，平面図に示したピット番号の側に（　）付数値，または一覧表に明記している。単位㎝。

3．本書における遺物実測図の用例は，以下のとおりである。

（1）縮尺率はスケールの脇に表示したが，原則として土器は1/3，石器は1/2・1/3に縮小し，他の遺物については大きさ・性格等により適宜決定した。

（2）土器の断面は，土師器を白ヌキ，須恵器をベタ黒，中世陶器類を網点とし，必要に応じて凡例を設けた。粘土紐の積み上げ痕は器面で実線，断面図では一点鎖線で表記した。また，土師器内面の黒色処理の不明な資料は「△」印を付して表記している。

（3）遺物番号は各挿図版ごととし，文中では下記のように省略している。また，掲載土器の出土位置・層位は，右下に示している。

［例］図35の18番の土器　…　図35－18

（4）計測値は一覧表として章末に掲載した。推定値（　），遺存値［　］で表示した。

4．文章中の土器などの点数は，接合・復元された遺物も含め，すべて破片点数である。

5．本書における遺物写真の中で個々に付した番号は，挿図番号と一致する。

6．引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略し，章末に収めた。

# 目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査経過 …… 1

１．平成12年度までの調査（１）　２．平成13年度の調査（２）

第３節　遺跡の位置と自然環境 …… 6

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 8

第５節　調査の方法 …… 13

第２章　遺構と遺物 …… 16

第１節　遺跡の概要と基本土層 …… 16

１．遺構の分布と出土遺物（16）　２．基本層序（19）

第２節　竪穴状遺構 …… 25

１号竪穴状遺構（25）

第３節　掘立柱建物跡・柱列跡 …… 26

１号建物跡（26）　１号柱列跡（29）

第４節　土　　坑 …… 29

１号土坑（30）　２号土坑（30）　３号土坑（30）　４号土坑（31）
５号土坑（31）　６号土坑（33）　７号土坑（33）　８号土坑（33）
９号土坑（34）　10号土坑（34）　11号土坑（34）　12号土坑（36）
13号土坑（36）　14号土坑（36）　15号土坑（37）　16号土坑（39）
17号土坑（39）　18号土坑（39）　19号土坑（40）　20号土坑（40）
21号土坑（42）　22号土坑（42）　23号土坑（42）　24号土坑（44）
25号土坑（44）　26号土坑（45）　27号土坑（45）　28号土坑（45）
29号土坑（47）　30号土坑（47）　31号土坑（47）　32号土坑（49）
33号土坑（49）　34号土坑（50）　35号土坑（50）　36号土坑（50）
37号土坑（52）　38号土坑（52）　39号土坑（52）　40号土坑（54）
41号土坑（54）　42号土坑（54）　43号土坑（55）　44号土坑（55）
45号土坑（55）　46号土坑（57）　47号土坑（57）　48号土坑（58）
49号土坑（58）　50号土坑（60）　51号土坑（60）　52号土坑（60）
53号土坑（62）　54号土坑（62）　55号土坑（62）　56号土坑（63）
57号土坑（63）　58号土坑（65）　59号土坑（65）　60号土坑（65）

第５節　溝　　跡 …… 73
１．調査区中央付近（1～17・20号溝跡）
１～３号溝跡（73）　４号溝跡（75）　５号溝跡（75）　６～８号溝跡（78）
９号溝跡（79）　10・11号溝跡（79）　12・13号溝跡（80）　14号溝跡（82）
15・16号溝跡（82）　17号溝跡（84）　20号溝跡（84）
２．調査区北側（22・26～31・35号溝跡）
22号溝跡（87）　26号溝跡（88）　27号溝跡（90）　28号溝跡（90）
29号溝跡（92）　30号溝跡（93）　31号溝跡（93）　35号溝跡（93）
３．調査区南側（21・23～25・32～34号溝跡）
21号溝跡（96）　23号溝跡（114）　24号溝跡（114）　25号溝跡（117）
32号溝跡（118）　33号溝跡（119）　34号溝跡（119）
第６節　ピット群 …… 124
１．地点１（124）　２．地点２（130）　３．地点３（130）　４．地点４（130）
５．その他のピット（132）
第７節　遺構外出土遺物 …… 134

第３章　ま　と　め …… 158

第１節　平安時代の遺物 …… 158
第２節　中世の遺構と遺物 …… 165
１．遺物（165）　２．遺構（171）
第３節　調査の成果と今後の課題 …… 172
引用・参考文献（175）

付　　章　―自然科学分析― …… 229

第１節　土壌分析　（株）古環境研究所 …… 229
第２節　種実同定　（株）古環境研究所 …… 241
第３節　樹種同定　（株）パリノ・サーヴェイ …… 244

# 挿図・表・写真目次

〔挿　図〕


図１　会津縦貫北道路位置図 …… 1
図２　調査遺跡位置図・一覧表 …… 3
図３　会津盆地及び遺跡周辺地形
　　・地質概略図 …… 7
図４　遺跡周辺の遺跡 ……10
図５　調査範囲と予定路線図 ……14
図６　遺構配置図とグリッド配置 ……17
図７　グリッド別遺物出土点数と内訳 ……18
図８　基本土層図（１）……20
図９　基本土層図（２）……21
図10　基本土層図（３）……22
図11　基本土層図（４）……23
図12　基本土層図（５）……24
図13　１号竪穴状遺構 ……25
図14　１号掘立柱建物跡，出土遺物 ……27
図15　１号柱列跡 ……28
図16　１～５号土坑 ……32
図17　６～10号土坑 ……35
図18　11～13・15・30号土坑 ……38
図19　14・16～18号土坑 ……41
図20　19～22号土坑 ……43
図21　23～26号土坑 ……46
図22　27～29・31号土坑 ……48
図23　32～35号土坑 ……51
図24　36～39・42号土坑 ……53
図25　40・41・43～45号土坑 ……56
図26　46～48号土坑 ……59
図27　49～51号土坑 ……61
図28　52～55号土坑 ……64
図29　56～60号土坑 ……66
図30　１・５・６・８号
　　土坑出土遺物 ……67
図31　14号土坑出土遺物（１）……68
図32　14号土坑出土遺物（２）……69
図33　16・19・22～24・26・27・32号
　　土坑出土遺物 ……70
図34　33・37・39・42・43号
　　土坑出土遺物 ……71
図35　46～49・51・53～56・58号
　　土坑出土遺物 ……72
図36　調査区中央付近溝跡（１）……74
図37　調査区中央付近溝跡（２）……76
図38　調査区中央付近溝跡（３）……77
図39　２・４～８号溝跡 ……78
図40　10・11号溝跡 ……80
図41　12・13・20号溝跡（１）……81
図42　12・13・20号溝跡（２）……82
図43　14～16号溝跡 ……83
図44　17号溝跡 ……85
図45　１・２・10・12・20号
　　溝跡出土遺物 ……86
図46　調査区北側溝跡 ……87
図47　22号溝跡 ……88
図48　26・28号溝跡 ……89
図49　27号溝跡 ……91
図50　29号溝跡 ……92
図51　30・35号溝跡 ……94
図52　31号溝跡 ……95
図53　26～30号溝跡出土遺物 ……96
図54　21号溝跡（１）……97
図55　21号溝跡（２）　Ａ ……98
図56　21号溝跡（３）　Ｂ ……99
図57　21・23号溝跡（４）…… 101
図58　21号溝跡出土遺物（１）…… 103
図59　21号溝跡出土遺物（２）…… 104
図60　21号溝跡出土遺物（３）…… 105
図61　21号溝跡出土遺物（４）…… 106
図62　21号溝跡出土遺物（５）…… 107
図63　21号溝跡出土遺物（６）…… 108
図64　21号溝跡出土遺物（７）…… 109
図65　21号溝跡出土遺物（８）…… 110
図66　21号溝跡出土遺物（９）…… 111
図67　21号溝跡出土遺物(10)…… 112
図68　21号溝跡出土遺物(11)…… 113
図69　調査区南側検出溝跡 …… 115
図70　23・24・32号溝跡 …… 116
図71　33・34号溝跡 …… 120
図72　25号溝跡・溝跡変遷模式図 …… 121
図73　23・24号溝跡出土遺物 …… 122
図74　25号溝跡出土遺物 …… 123
図75　ピット群（１）　Ａ・Ｂ，出土遺物 …… 125
図76　ピット群（２）　Ｃ …… 126

図77　ピット群（３）　Ｄ …… 127
図78　ピット群（４）　Ｅ，出土遺物 …… 128
図79　ピット群（５）　Ｆ，出土遺物 …… 129
図80　ピット群（６）　Ｇ，出土遺物 …… 131
図81　ピット群（７）　Ｈ …… 132
図82　ピット群（８）　Ｉ …… 133
図83　遺構外出土遺物
　　グリッド別点数 …… 135
図84　遺構外出土遺物（１）…… 137
図85　遺構外出土遺物（２）…… 139
図86　遺構外出土遺物（３）…… 140
図87　遺構外出土遺物（４）…… 141
図88　遺構外出土遺物（５）…… 142
図89　平安時代及び中世土器の法量・構成比 …… 159
図90　荒屋敷遺跡出土遺物（１）
　　土師器・須恵器 …… 162
図91　荒屋敷遺跡出土遺物（２）
　　貿易陶磁器 …… 166
図92　荒屋敷遺跡出土遺物（３）
　　かわらけ・中世陶器 …… 169
図93　荒屋敷遺跡周辺の主な遺跡
　　（古代末頃～中世） …… 174

〔表〕

表１　遺跡周辺の遺跡一覧（１）……11
表２　遺跡周辺の遺跡一覧（２）……12
表３　土器観察表（１）…… 143
表４　土器観察表（２）…… 144
表５　土器観察表（３）…… 145
表６　土器観察表（４）…… 146
表７　土器観察表（５）…… 147
表８　土器観察表（６）…… 148
表９　土器観察表（７）…… 149
表10　土器観察表（８）…… 150
表11　土器観察表（９）…… 151
表12　土器観察表(10)…… 152
表13　土器観察表(11)…… 153
表14　土器観察表(12)…… 154
表15　木製品観察表 …… 155
表16　石製品観察表 …… 156
表17　荒屋敷遺跡における溝跡の整合性 …… 156
表18　各遺構内外における土器組成 …… 157
表19　古代末～中世の土器・陶磁器編年 …… 164

〔写真図版〕

1　航空写真１ …… 179
2　航空写真２ …… 179
3　遺跡遠景 …… 180
4　遺跡全景 …… 180
5　調査区北側全景 …… 181
6　調査区南側全景 …… 181
7　調査区南半西側溝跡・土坑群等 …… 182
8　調査区中央付近全景 …… 182
9　１号竪穴状遺構全景 …… 183
10　１号掘立柱建物跡 …… 183
11　１号掘立柱建物跡 …… 184
12　１号掘立柱建物跡，１号柱列跡 …… 184
13　１～４号土坑 …… 185
14　５・６号土坑 …… 185
15　７・８号土坑 …… 186
16　９～12号土坑 …… 186
17　13～15号土坑 …… 187
18　16～18号土坑 …… 187
19　19～21号土坑 …… 188
20　22・23号土坑 …… 188
21　24～26号土坑 …… 189
22　27～30号土坑 …… 189
23　31～33号土坑 …… 190
24　34～37号土坑 …… 190
25　38～41号土坑 …… 191
26　42～45号土坑 …… 191
27　46・47号土坑 …… 192
28　47～49号土坑 …… 192
29　50～53号土坑 …… 193
30　54～56号土坑 …… 193
31　57～60号土坑 …… 194
32　調査区基本土層 …… 194
33　調査区中央南西側全景 …… 195
34　調査区中央付近全景 …… 195

35　1～4号溝跡 …… 196
36　5～8号溝跡 …… 196
37　2・10～13・15～17号溝跡,
　1号掘立柱建物跡 …… 197
38　20号溝跡完掘 …… 198
39　21号溝跡調査風景 …… 198
40　10～13号溝跡 …… 199
41　14・15・20号溝跡 …… 199
42　21号溝跡全景 …… 200
43　21・23号溝跡 …… 200
44　21号溝跡遺物出土状況（1）…… 201
45　21号溝跡遺物出土状況（2）…… 201
46　21号溝跡遺物出土状況（3）…… 202
47　21号溝跡遺物出土状況（4）…… 202
48　22・23号溝跡完掘 …… 203
49　21・23～25号溝跡 …… 203
50　26・27号溝跡完掘 …… 204
51　26・27号溝跡 …… 204
52　26号溝跡周辺 …… 205
53　30・35号溝跡完掘 …… 205
54　28～30号溝跡 …… 206
55　31・34・35号溝跡 …… 206
56　調査区北西側ピット群
　（地点2）…… 207
57　U7Gピット群（地点4）
　検出状況 …… 207
58　ピット群 …… 208
59　1・5・6・8・14号
　土坑出土遺物 …… 209
60　14・16号土坑出土遺物 …… 210
61　22～24・26・39号
　土坑出土遺物 …… 211
62　土坑出土貿易陶磁器 …… 212
63　33・49号土坑出土遺物 …… 212
64　43・46・54号土坑出土遺物 …… 213
65　1・2・12号溝跡出土遺物 …… 213
66　20号溝跡出土遺物 …… 214
67　21号溝跡出土遺物（1）…… 214
68　21号溝跡出土遺物（2）…… 215
69　21号溝跡出土遺物（3）…… 216
70　21号溝跡出土遺物（4）…… 217
71　21号溝跡出土遺物（5）…… 218
72　21号溝跡出土遺物（6）…… 219
73　21号溝跡出土遺物（7）…… 220
74　21号溝跡出土遺物（8）…… 221
75　21号溝跡出土遺物（9）…… 222
76　21号溝跡出土遺物(10)…… 222
77　21号溝跡出土遺物(11)…… 223
78　23～25号溝跡出土遺物 …… 224
79　遺構外出土遺物（1）…… 225
80　遺構外出土遺物（2）…… 226
81　遺構外出土遺物（3）…… 227
82　遺構外出土遺物（4）…… 228

〔挿　図〕

図1　荒屋敷遺跡における
　花粉ダイアグラム …… 238

〔表〕

表1　荒屋敷遺跡における
　寄生虫卵分析結果 …… 235
表2　荒屋敷遺跡における
　花粉分析結果 …… 236
表3　荒屋敷遺跡における
　種実同定結果 …… 237
表4　荒屋敷遺跡における選別
　済み種実の同定結果 …… 242
表5　種実同定結果 …… 244

〔写真図版〕

1　花粉・寄生虫卵顕微鏡写真 …… 239
2　種実顕微鏡写真（1）…… 240
3　種実顕微鏡写真（2）…… 243
4　木製品樹種顕微鏡写真（1）…… 247
5　木製品樹種顕微鏡写真（2）…… 248

# 第１章　遺跡の環境と調査経過

## 第１節　調査に至る経緯

会津縦貫北道路（地域高規格道路）は，喜多方市関柴町大字西勝から耶麻郡塩川町・河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字木流の２市１町１村に至る延長13.1㎞の4車線自動車専用道路である。平成８年度に都市計画道路の決定が行われ，平成９年度から建設省（現国土交通省）直轄事業として進められている。

この事業は喜多方市と会津若松市の会津北部地域の縦軸を強化し，「会津地方拠点都市地域」・「会津リフレッシュ構想」・「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジュクトを支援し，会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成より磐越自動車道との一体化によって会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ，産業・経済の発展が期待される。将来的には北へ向かっては東北中央道路の米沢ＩＣ（仮称）と，南では会津縦貫南道路を経て栃木県北部とを結ぶ計画である。　（高　橋）

## 第２節　調　査　経　過

### １．平成12年度までの調査経過

福島県教育委員会では，路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため，平成９年度に財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に表面調査を委託した。表面調査は，建

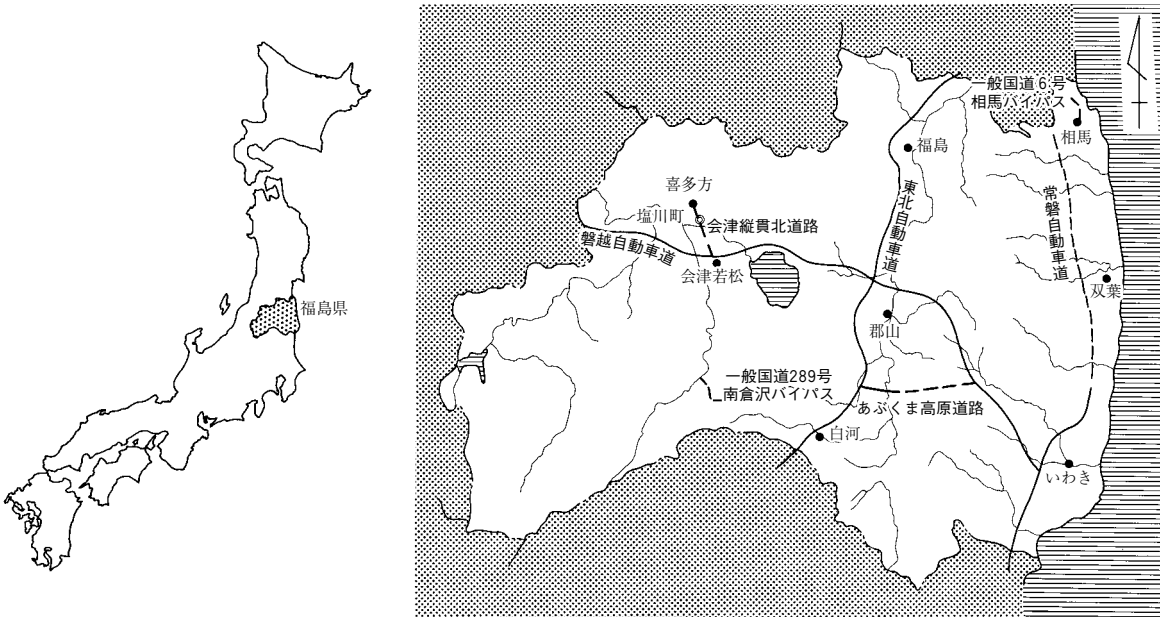



図１　会津縦貫北道路位置図

設省（現国土交通省）東北地方建設局（現東北地方整備局）郡山国道工事事務所から提供された計画路線図（１：2,500）を基に，喜多方市から会津若松市までの延長約12.3㎞・幅150ｍを対象として，平成９年11月12～26日まで現地調査を実施した。調査対象地点の登録は，遺物が表面採集できた地点を遺跡（Ａ）として認定した。また，遺構や遺物は発見できなかったが地形的条件から遺跡の可能性が高く，試掘調査を必要とする遺跡推定地（Ｂ）とに分けた。前者には原則として遺物散布地の小字名を遺跡名としたが，複数の小字にまたがる場合には大字名を遺跡名とした。遺跡推定地（Ｂ）については，市町村名の頭文字に該当するアルファベットを用いてＹ―Ｂ1（湯川村遺跡推定地No.１）のように示した。また，周知の遺跡についても，今回の表面調査で遺跡範囲を再確認した。名称・所在地・遺跡範囲に関しては，『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳』ならびに『福島県遺跡地図　会津地方』（福島県教育委員会 1996）に準拠したが，所在地について一部補足して表記している。当初，道路予定全区間を対象に計画したが，会津若松市中沼地区12haは除外した。調査の結果，２市２町１村で21遺跡と遺跡推定地３箇所を確認した。その内訳は，喜多方市で５遺跡，塩川町で５遺跡，湯川村は河東町側に広がる範囲も含めて４遺跡と遺跡推定地３地点，会津若松市で７遺跡である。この調査結果は，平成10年刊行の『福島県内遺跡分布調査報告４』（藤谷他：1998）に掲載した。

平成12年度は，福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所との協議の結果，最初に建設工事に着手する塩川町遠田地区の麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100㎡を対象とした試掘調査を実施した。この調査は，10月２～27日と11月27～30日まで実施された。麻生館跡は館跡との関連が想定される建物跡の他，奈良・平安時代の建物跡・井戸跡やピット群など集落跡が確認されたため，名称を麻生館遺跡と変更した。また，荒屋敷遺跡では，古墳時代後期及び平安時代の竪穴住居跡や土師器・須恵器などの遺構・遺物を確認した。この調査成果については，同年度刊行の『福島県内遺跡分布調査報告７』（斎藤他：2001）に掲載した。なお，同年度には会津縦貫北道路建設に伴う付属施設整備のため，麻生館遺跡・荒屋敷遺跡について10月４～７日と20～27日にかけて塩川町教育委員会で試掘調査を実施している。試掘調査の結果，荒屋敷遺跡から土坑や溝跡など，奈良～平安時代・中世の遺構が検出された。このため，塩川町教育委員会では大型排水路建設に伴う1,180㎡を11月22日～12月20日に本発掘調査を実施した。調査の結果，土坑18基・溝跡16条・ピット約226個・遺物包含層１ヵ所と旧河川（河川跡）５条が検出・確認された。遺物は，縄文土器及び古代・中世の土器類などが出土している。各遺構や遺物を検討すると，時期は奈良～平安時代と中世初頭の大きく２時期に分かれる。その後，年が明けて平成13年３月には荒屋敷遺跡にかかる路線の測道や上水道管敷設に関連して工事立会や立会調査を実施している。以上のような調査経過を経て，平成13年５月７日から荒屋敷遺跡にかかる本線部分の発掘調査が開始された。　　（高　橋）

## ２．平成13年度の調査

荒屋敷遺跡は，平成９年度に福島県教育委員会が実施した表面調査で登録された周知の遺跡で

網点…予定路線に係るおそれのある遺跡，斜線…予定路線に係るおそれのない周知の遺跡

| | No. | 遺　跡　名 | 遺跡番号 | 所　在　地 | 時　代 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 塩川町 | 1 | 麻生館遺跡 | 4030049 | 塩川町遠田字麻生館 | 平安・中世 | H13発掘調査 |
| | 2 | 荒屋敷遺跡 | 4030073 | 遠田字荒屋敷・灰塚他 | 縄文～古墳<br>平安・中近世 | H13発掘調査 |
| | 3 | 下遠田館跡 | 4030050 | 遠田字荒屋敷・館ノ腰 | 中　世 | |
| 湯川村 | 4 | 浜崎城跡 | 4220001 | 湯川村浜崎字北殿町 | 中近世 | |
| | 5 | 沼ノ上遺跡 | 4220020 | 湊字沼ノ上 | 奈良・平安 | |
| | 6 | 浜崎館跡 | 4220029 | 浜崎字宮前 | 中　世 | |
| | 7 | 北田城跡 | 4220002 | 三川字大館 | 中　世 | |
| | 8 | 上田谷地遺跡 | 4220021 | 湊字上田谷地 | 奈良・平安 | |
| | 9 | 下川原遺跡 | 4220022 | 笈川字下川原 | 奈良・平安 | |
| | 10 | 西川原遺跡 | 4220023 | 笈川字西川原 | 奈良・平安 | |

図2　調査遺跡位置図・一覧表

ある。下遠田集落から日橋川河岸の畑地と水田部におよぶ広い範囲に土師器・須恵器の散布が確認され，奈良・平安時代の集落跡として44,100㎡を遺跡の推定範囲とした（藤谷他：1998）。平成12年度には県道会津坂下・塩川線を挟む宅地およびその周辺部を除いた14,400㎡を対象に試掘調査を実施した。その結果，設定した40本のトレンチのうち31本から遺構・遺物が確認され，古墳時代後期・奈良～平安時代の集落跡として，予定路線内における9,700㎡（未試掘調査部分を含まない）が要保存面積とした（香川他：2001）。この試掘調査の結果を踏まえ，同年９月には連絡調整会議が持たれ，道路本線および整備敷地内の調査を県側で，これ以外の地区を塩川町で対応する運びとなった。そのため，道路建設に伴う大型排水路計画予定部分と遺跡南西の側道予定地区の2,500㎡および遺跡北西の再ほ場整備予定地区の850㎡については，塩川町教育委員会が調査を実施した（和田：2001・2002）。この平成12年度と平成13年度に町教育委員会が実施した試掘調査や大型排水路計画予定部分（1,180㎡）の調査（１次），遺跡北西の再ほ場整備予定地区部分（850㎡）の調査（２次）によって，中世の遺構・遺物における新たな知見が得られている。

本年度の会津縦貫北道路遺跡発掘調査は，麻生館遺跡6,200㎡と荒屋敷遺跡9,700㎡の合わせて15,900㎡を対象に，調査員５名を配して行われた。発掘調査に先立ち，国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所・福島県喜多方建設事務所・福島県教育庁文化課・（財）福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課の各担当職員立会いのもとに，現状確認，調査区範囲や路線幅，排土置き場の確認等を行った。遺跡内における盛土や表土撤去による土量が路線内に予定していた排土置き場で対応することが困難であることや，遺構・遺物の密度を考慮し，調査区中央側の下位段丘面（約8,500㎡）の作業を先行させて行うこととした。また，調査にあたっては，塩川町教育委員会と連絡調整を諮り，遺跡の範囲や性格，時期等の解明に努めた。なお，今回の調査は，町発掘調査部分（１・２次）を考慮すれば３次調査ということになるが，１次調査（大型排水路計画予定部分）の整理報告が現段階で未報告であったことや，２次調査（遺跡北西の再ほ場整備予定地区）が一時同時進行で行われていたこともあって，遺構番号の呼称やグリッド設定方法については町と県側では独自に行っている。これらのグリッド設定の差異や各遺構における呼称番号・数等の整合性については，本章第５節や第２章各節の冒頭，表17等において記述した。

今回の荒屋敷遺跡の発掘調査は，麻生館遺跡の表土剥ぎや条件整備等がある程度整った５月16日から開始し，第１段階として調査区中央の北側から基本土層第Ⅱ層上面まで重機による表土剥ぎを行った。５月下旬には，現地調査連絡所や駐車場を予定路線内の県道会津坂下・塩川線沿いに設け，発掘資材搬入等に備えた。

６月上旬には麻生館遺跡から約半数の作業員を移動し，手掘りによる表土除去作業を開始した。遺跡及び周辺地域は，大正７年頃の基盤整備や平成６年度の大規模なほ場整備事業が実施された地域であり，調査区内でも削平や盛土によって地形が著しく改変された区域も存在した。そのため，手掘り作業に加え重機による掘削も並行し，遺構の検出作業を行っている。旧地形が比較的遺存する部分では，中世の土坑や溝跡のほか，該期の土器類も少数認められたが，北東側のＯ～Ｕ－14～

27グリッドや南側のＴ～Ｚ－98～５グリッド付近では後世の削平・盛土が顕著であった。また，Ｏ～Ｒ－22～26グリッド付近においては，大型排水路建設に伴い調査段階で既に著しい削平を受けていた（図６）。

６月中旬には，遺構の検出・精査作業と並行して測量基準杭の設定と水準点の移動を業者に委託し，Ｉ－18・30，Ｎ－13・18・23，Ｓ－13・18グリッドの７地点について測量基準杭の打設をした。さらにこれを基準に５ｍ間隔でグリッド杭の設定と水準点の移動を調査員が随時行った。６月から７月上旬にかけては，梅雨による長雨が続き調査の進捗に遅れを来したが，中旬頃には麻生館遺跡から作業員の増員もあり，調査が飛躍的に進んだ。それに伴い，休憩用の仮説プレハブやトイレの増設，テント等も合わせて設置し条件整備を整えた。７月下旬には調査が本格化し，土坑や溝跡等の掘り込みを精力的に進め，古代末～中世の土器・陶磁器等を発見するに至った。

８月は比較的好天に恵まれたが，遺跡の基盤層が粘土質のため，乾燥して固くなり遺構検出には苦渋を強いられた。８月８日には高所作業車により，各地点の全体撮影を行った。お盆明けの21～24日には，（財）福島県文化センター白河館（通称まほろん）が主催する土坑研修が当遺跡で行われ，県内から９名の参加者が訪れた。

９月には雷雨や台風の接近もあり，水中ポンプ等による排水作業を随時行いながら調査を展開した。９月下旬には調査区中央付近の掘り込みも終盤を迎えたため，北側調査区（1,200㎡）の表土剥ぎを開始した。水道管や下水道管，農道部分の基礎工事など，削平や盛土を伴う改変が著しく，現地表から1.6m以上におよぶ区域もあった。そのため，基本土層第Ⅱ層の遺存状態が悪く，中世の遺構・遺物の多くは失われていることが判明した。また，Ｇ～Ｋ－30～32グリッド付近では，第Ⅲ層が部分的に認められ，本層において縄文時代後・晩期や弥生時代の資料を発見することができた。

10月上旬には，調査区南側で検出された平安時代の河川跡（ＳＤ21）から多量の土器類が出土した。出土土器類中主体を占める土師器杯の中には，墨書土器や刻書土器等も認められ，内面に蓮華，外面底部に「岡本」の線刻が施された仏教的色彩の濃厚な土器も出土した。10月27日には，麻生館遺跡とともに地元住民を対象とした現地見学会を開催し，これらの出土資料も公開した。

11月には調査区南側における古墳時代～平安時代頃の流路跡（ＳＤ21・24・25・32・34）の調査が難航したことや，悪天候も重なって調査は遅れ気味となった。

12月初旬には，悪天候の合間を縫って高所作業車やラジコンヘリにより高度からの写真撮影を行った（口絵１）。同月上旬には地形測量を行い，その後全面的に遺構の基盤面を下げ，遺構の存否の再確認を行った。12月中旬には，発掘器材の撤収と重機による埋め戻し作業を行い，現地における調査の全工程を完了した。

さらに，12月中旬には，県道会津坂下・塩川線の南側で路線と日橋川堤防とに挟まれた範囲についても事業計画に含まれたため県教育委員会・（財）福島県文化振興事業団が試掘調査も実施し，2,100㎡を要保存範囲とした（横須賀他：2002）。なお，遺跡北側の宅地やその周辺部は民家の移転後に試掘調査を予定している。（井）

## 第３節　遺跡の位置と自然環境

福島県は，東北地方の最南端に位置し，首都圏からの玄関口の役割を持つ。面積は13,782㎢で，県としては岩手県に次いで全国２番目の面積を持つ。県土のおよそ８割は山地で占められていて，東は太平洋に面し，中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖がある。また阿武隈川・久慈川・阿賀川など大きな河川も流れている。東部には太平洋岸に沿って阿武隈高地が，中央部は磐梯吾妻を含む那須火山帯に属する奥羽山脈が連なり，西には越後山脈が迫っている。これらの山地山脈により，県全体は３つの地方に区分される。太平洋に面した浜通り地方，阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ阿武隈川の流れに沿って広がる中通り地方，奥羽山脈から西側の山々や高原，盆地を含めた会津地方である。

会津地方の気候は内陸性気候を示し，冬は寒冷で積雪が多く，山間部では数ｍに及ぶことも多い。春は雪解け水により河川が増水するが，治水工事が発達している現在では被害はない。梅雨時は中・浜通りに比較すれば好天の日が多く降水量もあまり多くない。夏は高温多湿であり，雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し，時として視界が大変悪くなり交通事故等の原因にもなる。

荒屋敷・麻生館両遺跡がある耶麻郡塩川町は，会津地方の中央北部に広がる会津盆地のほぼ中心に当たり，地質学上は西南日本内帯の東端に位置する。会津盆地は，南北におよそ30㎞，東西およそ12㎞の南北に長い形状を示す。盆地の地表部は，北からは濁川，東からは猪苗代湖を源流とする日橋川，南からは南会津の山々を源流とする大川とその支流が葉脈状に盆地内を西進している。これらの河川により盆地内は，周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ，なだらかな沖積平野および扇状地となっている。これら堆積物は，年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は喜多方市慶徳町付近で一つに合流し，阿賀川となって越後山地の地峡をさらに西進し，新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟市から日本海に注ぐ。

会津盆地の周辺は，東に奥羽山脈，西に越後山地が南北に走る。東の山々は，新第三紀層を基岩とし，南部の会津若松市南東域では背中炙山安山岩，北部の塩川～喜多方市東部では猫魔ヶ岳火山噴出物が地表を覆っている。西の山々は，新第三紀鮮新世および第四紀更新世の堆積岩層を基岩とし，只見川流域には沼沢火山噴出物が堆積する。盆地の南東部および北西部にそれぞれ南北に断層が走るが，この断層は有史以来しばしば活動しており，特に江戸初期の1611年の地震では，慶徳町付近の地峡で崩落および断層隆起があり，阿賀川がせき止められて「山崎新湖」が形成され，付近の集落が水没して多大な被害を生じ，元どおり開削するまでに34年もの年月を要したことが記録として残っている。

今回発掘した荒屋敷遺跡は，盆地内堆積土のうち，氾濫原と段丘・扇状地の境界に位置する。そのため，遺跡東南部は旧河川流路，西北部は自然堤防および微高地となっている。また麻生館遺跡は，段丘・扇状地上に位置し，ごく僅かに南に傾斜した平坦面となっている。　　（菊　田）

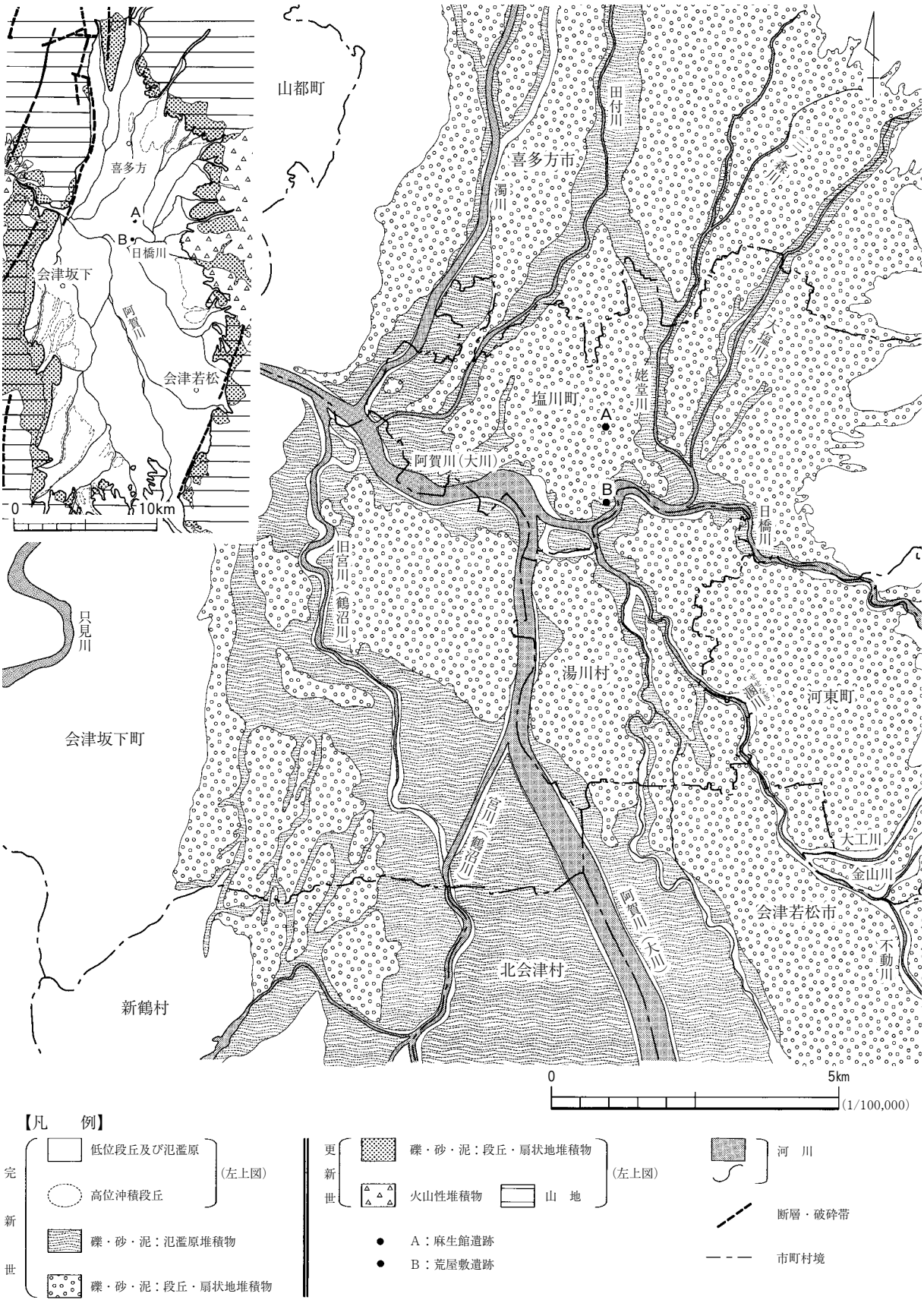



図３　会津盆地及び遺跡周辺地形・地質概略図　（鈴木・吉田・真鍋他：1976,1987をもとに作成・簡略化）

## 第４節　周辺の遺跡と歴史的環境

町内では埋蔵文化財分布調査が終了していないので，歴史的環境については不明な点が多い。そこで,『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』(1984・10刊行),『福島県遺跡地図』(1996・３刊行),最近の文化財調査報告書を参考に概観していく。『福島県遺跡地図』では町内には69ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。その後，遺跡数は次第に増加しており現在では74ヵ所を数える。

旧石器時代の遺跡・遺物は現在まで町内では確認されていない。近隣では旧石器時代後期の遺跡として西会津町山本遺跡や高郷村塩坪遺跡がある。

縄文時代の遺跡は，町東部にある標高1,271.2ｍの雄国山の西側山麓を中心に数多く発見されている。地形的には西側に広がる扇状地の扇央から扇端に分布する傾向にある。遺跡地図には11ヵ所が確認されている。これらの遺跡の中で，常世原田遺跡は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文系土器群で「常世式期」の標識遺跡である。常世式土器は，貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と底部が乳房状を呈する尖底土器等の特徴を持ち，その分布は広く東北地方一円に及んでいる。この他に，縄文時代の遺跡として上ノ台・南原・堀込・大原・森台・鶴塚(14)遺跡がある。今回発掘調査を実施した麻生館(１)・荒屋敷(２)遺跡からは縄文時代後期～晩期にあたる新地式期・大洞ＢＣ式期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡は，町内平坦部の沖積地に立地する舘ノ内(20)・堂後(36)・村南(38)・長内(51)・高畑(91)遺跡から土器片が出土している。まだ本格的な調査が実施されておらず，遺跡の性格や時期等は不明点が多い。荒屋敷遺跡からは弥生土器の小片が出土しているが，時期は明確でない。

古墳時代に入ると会津盆地内でも数多くの古墳が築造されており，周辺の開発が進み支配階級の台頭が著しい時期である。会津盆地内では，前期の古墳群として塩川町から喜多方市周辺の深沢・田中舟森山・観音森(竹屋古墳群)・高森山古墳・十九壇古墳群等が，会津若松市周辺では会津大塚山・堂ヶ作古墳等が，会津坂下町の亀ヶ森(85)・鎮守森(86)古墳等が分布している。これらの古墳分布から会津盆地には，盆地東部・北西部・北東部に大きな勢力を持つ豪族の存在が考えられてきた。近年，塩川町舘ノ内遺跡から２基の方形周溝墓が発見されている。共に一辺10ｍ程の規模で周溝のみの確認であったが，いずれも四隅が張り出す平面形態を示しており，周溝内からは北陸系土器も出土している。これらの特徴から山陰・北陸地方で確認されている「四隅突出型墳丘墓」の影響が推定され，東北地方における最古段階の周溝墓と考えられている。このような古墳を形成する有力者の出現の背景には，会津盆地北部の地域が濁川・田付川・姥堂川・大塩川・日橋川等の中小河川の洪水等がもたらした肥沃な土壌が生産性の高い地域を形成していたからと考えられる。

次の中期～後期の古墳は，前期古墳同様に雄国山麓の末端部に数多く築造されており，七ツ壇(5)・金森(12)・狐壇・松崎・前畑・常世竹花・茶臼森古墳，明蓮寺・深沢前山古墳群などが確認されている。また，中通り地方で特色的な横穴墓の発見例は少なく，盆地西側の丘陵縁部に分布し

ている喜多方市山崎横穴群や盆地東側の丘陵縁部に分布する河東町駒板新田横穴群等があるものの概して会津盆地では５地点と少ない。

古墳時代の集落跡では，塩川町の西端で濁川の自然堤防上に古墳時代中期の豪族（首長）居館跡とされる古屋敷遺跡（13）で，盆地平坦部の鶴塚遺跡や舘ノ内遺跡などが後期の集落跡として確認されているが，町内に多くの古墳群が築造されているのに比べて現在のところ集落跡の数は少ない。今後の可能性として阿賀川（大川）に注ぐ中小河川流域の自然堤防や沖積地に集落遺跡の発見が期待される。

奈良・平安時代に入ると，律令体制の地方浸透に伴い安定した社会が形成されたものと考えられ，会津盆地内では集落跡を中心として遺跡の数は爆発的に激増する。町内においても，沖積地にも遺跡が多く分布しており，盆地平坦部の田付川沿いに位置する鏡ノ町遺跡Ａを中心に舘ノ内遺跡をはじめとして，古屋敷・鶴塚・墓の前（15）・鏡ノ町Ｂ（17）・妙見（18）・内屋敷（19）・沼の上（33）遺跡などが確認されている。鏡ノ町遺跡Ａ（16）からは，数多くの建物や倉庫群，そして奈良三彩小壺や瓦塔片等の遺物が出土しており，地方官衙に関連する在庁官人の居宅跡と推定されている。麻生館遺跡からは３×５間の大型建物跡が検出されたほか，同時期と推定される比較的小型な建物跡，土師器・須恵器片が検出され，同時代の集落の様相が明らかになってきた。また，荒屋敷遺跡からも平安時代の９世紀後半を中心とした土師器，須恵器が流路跡を中心に数多く出土しており，土師器杯には墨書や線刻が施されたものもあり，遺跡の性格を考える上でも興味深いものがある。

中世に入ると武家社会が成立し，新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では，三浦蘆名氏の勢力が伸び，その一族が各地を領していったと考えられている。本町内も位置的に北田城の北田氏と，新宮城の新宮氏の支配下にあったものと推定される。中世以降に城館跡を中心として町内外で多く確認されており，今回発掘調査を実施した麻生館遺跡近隣には沖館跡（25）・上江館跡（26）が，荒屋敷遺跡近隣には下遠田館跡（21）・新屋敷跡（31）が確認されている。城主名は記録も少ないが，沖館跡には山口沙弥道光，上江館跡には栗村弾正清政，下遠田館跡には三橋備前定重と二男の刑部重治との伝承が残っている。本年度発掘調査を実施した荒屋敷遺跡でも貿易陶磁器である白磁・青磁が出土しており，当時日本海側での海運が発達していたことを窺わせる。

戦国時代に入ると，会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いであり，文亀２（1502）年には常世・三橋など会津盆地北東部の在地領主らが追い払われ，天文年間（1532～1554年）には，会津地方の領主達の殆どは蘆名氏に服属し，蘆名氏は盛氏の時代に全盛期を迎える。その後，蘆名氏の支配体制の矛盾が顕在化したり，家督相続や重臣間の対立が深まって，次第に家勢も衰えてきた。天正17（1589）年６月には蘆名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが行われ，伊達政宗が勝利した。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗により，金川・三橋・塩川などが片倉景綱へ安堵されている。その後，豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は，蒲生氏郷・秀行から上杉景勝と支配者が変遷し，関ヶ原の戦いを向かえる。遺跡の周辺には，中世～近世にかけての塚・供養塔・石造物等が建立されており，当時の人々の信仰に関連する

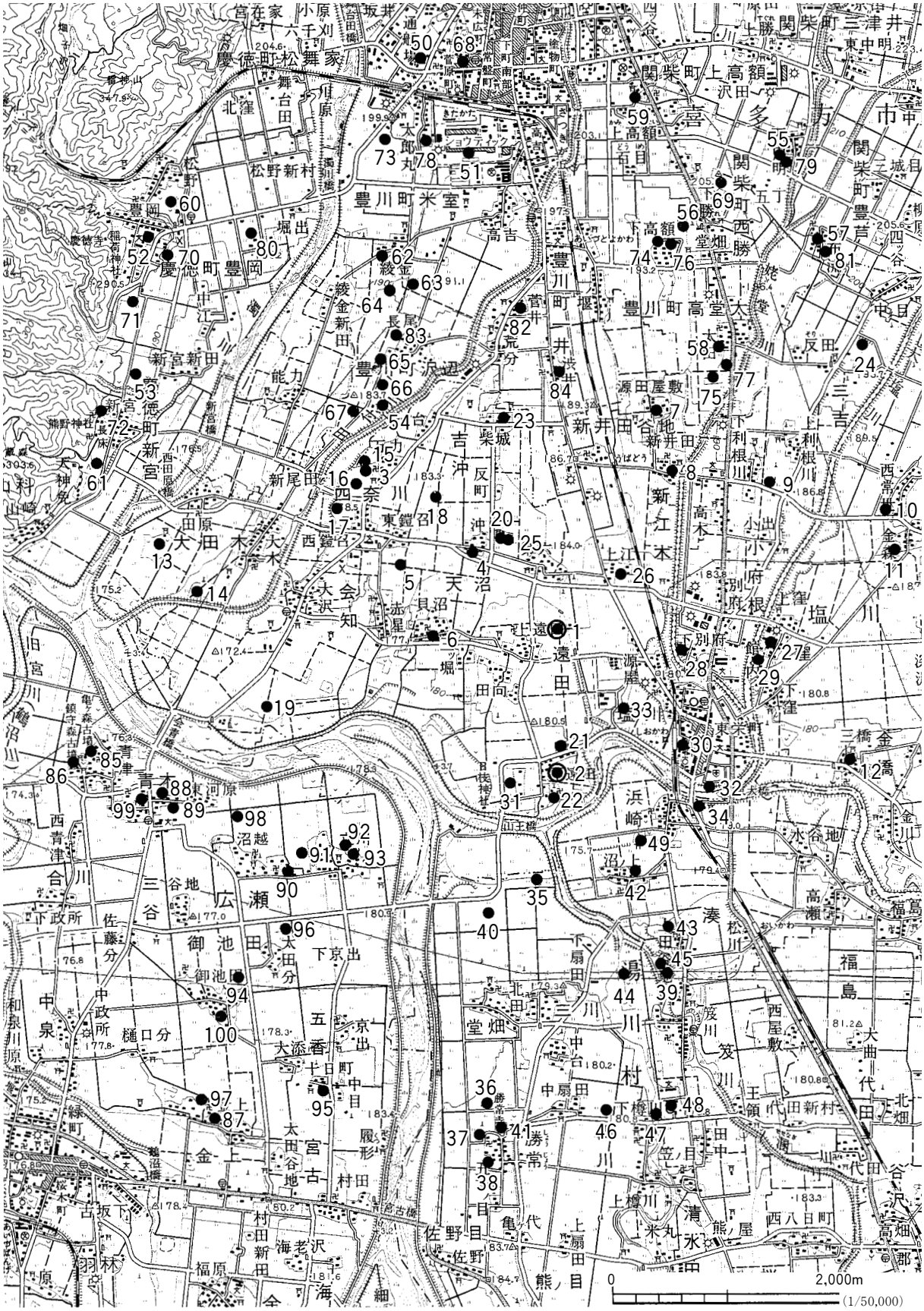



図４　遺跡周辺の遺跡

**表１**　遺跡周辺の遺跡一覧（１）　※No.は図４，遺跡番号は『福島県遺跡地図』(1996)に対応

| No. | 遺跡番号 | 遺　跡　名 | 所　在　地 | | 遺　跡　の　概　要 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 40300049 | **麻生館遺跡（麻生館跡）** | 塩川町 | 遠田字麻生館 | 平安の集落跡・中世の館跡 |
| 2 | 40300073 | **荒屋敷遺跡** | | 遠田字荒屋敷・灰塚他 | 縄文～古墳・平安・中近世の散布地 |
| 3 | 40300001 | 牛塚 | | 四奈川字墓ノ前 | 古墳時代～近世の塚 |
| 4 | 40300002 | 沖舎利塔 | | 吉沖字村前 | 中世・近世の石造物 |
| 5 | 40300003 | 鎧召・七ツ壇塚群 | | 四奈川字千刈 | 古墳時代～近世の塚 |
| 6 | 40300004 | 貝沼館跡 | | 天沼字貝沼 | 中世の城館跡 |
| 7 | 40300005 | 鏡ケ城跡 | | 源太屋敷字前畑・館ノ腰 | 中世の城館跡 |
| 8 | 40300007 | 新井田・田辺館跡 | | 新江木字新井田 | 中世の城館跡 |
| 9 | 40300008 | 下利根川石造供養塔 | | 下利根川字仲田 | 中世の石造物 |
| 10 | 40300010 | 常世館跡 | | 常世字西町 | 中世の城館跡 |
| 11 | 40300023 | 三橋館跡 | | 金橋字舘ノ内 | 中世の城館跡 |
| 12 | 40300039 | 金森古墳 | | 五合字金森甲 | 古墳時代の古墳 |
| 13 | 40300040 | 古屋敷遺跡 | | 大田木字古屋敷 | 縄文・古墳～平安時代の散布地 |
| 14 | 40300042 | 鶴塚遺跡 | | 大田木字鶴塚・下屋敷 | 縄文～平安時代の散布地 |
| 15 | 40300043 | 墓ノ前遺跡 | | 四奈川字墓ノ前 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 16 | 40300044 | 鏡ノ町遺跡Ａ | | 四奈川字鏡ノ町 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 17 | 40300045 | 鏡ノ町遺跡Ｂ | | 四奈川字鏡ノ町 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 18 | 40300046 | 妙見遺跡 | | 吉沖字妙見 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 19 | 40300047 | 内屋敷遺跡 | | 会知字内屋敷甲 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 20 | 40300048 | 舘ノ内遺跡 | | 吉沖字舘ノ内 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 21 | 40300050 | 下遠田館跡 | | 遠田字荒屋敷・館ノ腰 | 中世の城館跡 |
| 22 | 40300051 | 下遠田石造供養塔 | | 遠田字谷地中 | 中世の石造物 |
| 23 | 40300054 | 柴城跡 | | 吉沖字柴城 | 中世の城館跡 |
| 24 | 40300056 | 南館館跡 | | 三吉字南館・内屋敷・沢田 | 中世の城館跡 |
| 25 | 40300057 | 沖館跡 | | 吉沖字館ノ内 | 中世の城館跡 |
| 26 | 40300060 | 上江館跡 | | 新江木字館跡 | 中世の城館跡 |
| 27 | 40300061 | 丹波館跡 | | 窪字館 | 中世の城館跡 |
| 28 | 40300063 | 別府館跡 | | 小符根字館ノ内 | 中世の城館跡 |
| 29 | 40300064 | 上窪南館跡 | | 窪字館ノ内・館野 | 中世の城館跡 |
| 30 | 40300066 | 小十郎館跡 | | 塩川字館ノ内・堀目 | 中世の城館跡 |
| 31 | 40300067 | 新屋敷跡 | | 遠田字新屋敷 | 中世の城館跡 |
| 32 | 40300068 | 柏木城館 | | 塩川字古町・古城 | 中世の城館跡 |
| 33 | 40300069 | 沼ノ上遺跡 | | 遠田字沼ノ上 | 縄文時代の貝塚，弥生・平安時代の散布地 |
| 34 | 42200001 | 浜崎城跡 | 湯川村 | 浜崎字北殿町 | 中世・近世の城館跡 |
| 35 | 42200002 | 北田城跡 | | 三川字大館 | 中世の城館跡 |
| 36 | 42200003 | 堂後遺跡 | | 勝常字堂後 | 弥生・奈良・平安時代の散布地 |
| 37 | 42200004 | 覚成上人墓 | | 勝常字堂後 | 中世の墳墓 |
| 38 | 42200005 | 村南遺跡 | | 勝常字村南 | 弥生時代の散布地 |
| 39 | 42200008 | 笈川館跡 | | 笈川字舘 | 中世の城館跡 |
| 40 | 42200018 | 堂畑館跡 | | 堂畑字大舘 | 中世の城館跡 |
| 41 | 42200019 | 勝常寺薬師堂 | | 勝常字代舞 | 中世の社寺跡 |
| 42 | 42200020 | 沼ノ上遺跡 | | 湊字沼ノ上 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 43 | 42200021 | 上田谷地遺跡 | | 湊字上田谷地 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 44 | 42200022 | 下川原遺跡 | | 笈川字下川原 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 45 | 42200023 | 西川原北遺跡 | | 笈川字西川原 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 46 | 42200024 | 下樽川西遺跡 | | 笈川字下樽川 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 47 | 42200025 | 下樽川遺跡 | | 笈川字下樽川 | 近　世 |
| 48 | 42200026 | 殿田遺跡 | | 笈川字殿田 | 縄文時代の散布地 |
| 49 | 42200029 | 浜崎館跡 | | 湊字宮前 | 中世の城館跡 |
| 50 | 20800017 | 塚原壇 | 喜多方市 | 長源壇 | 中世の塚 |

表２　遺跡周辺の遺跡一覧（２）　※No.は図４，遺跡番号は『福島県遺跡地図』(1996)に対応

| No. | 遺跡番号 | 遺　跡　名 | 所　在　地 | 遺　跡　の　概　要 |
|---|---|---|---|---|
| 51 | 20800019 | 長内遺跡 | 喜多方市　豊川町米室字長内 | 弥生時代の散布地 |
| 52 | 20800020 | 慶徳城跡 | 慶徳町富岡字今町 | 中世の城館跡 |
| 53 | 20800021 | 新宮城跡 | 慶徳町新宮字館内 | 中世の城館跡 |
| 54 | 20800022 | 八幡塚古墳 | 豊川町沢部字宮下 | 古墳時代の古墳 |
| 55 | 20800030 | 西中明板碑 | 関柴町西勝字三島 | 中世の石造物 |
| 56 | 20800036 | 水谷地古墳 | 豊川町高堂太字水谷地 | 古墳時代の古墳 |
| 57 | 20800037 | 布流板碑群 | 関柴町豊芦字村中 | 中世の石造物 |
| 58 | 20800041 | 太田板碑 | 豊川町高堂太字村中 | 中世の石造物 |
| 59 | 20800058 | 台畑遺跡 | 関柴町上高額字宮越 | 平安時代の散布地 |
| 60 | 20800067 | 木曽原遺跡 | 慶徳町豊岡字木曽原 | 古墳・平安時代の散布地 |
| 61 | 20800068 | 招木遺跡 | 慶徳町新宮字招木 | 平安時代の散布地 |
| 62 | 20800069 | 村前遺跡 | 豊川町米室字村前・綾金 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 63 | 20800070 | 塚田Ａ遺跡 | 豊川町沢部字塚田 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 64 | 20800071 | 塚田Ｂ遺跡 | 豊川町沢部字塚田 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 65 | 20800072 | 長尾遺跡 | 豊川町沢部字長尾 | 平安時代・中世の散布地 |
| 66 | 20800073 | 前田遺跡 | 豊川町沢部字前田 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 67 | 20800074 | 四十苅遺跡 | 豊川町沢部字四十苅 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 68 | 20800076 | 塚原館跡 | 天満前 | 中世の城館跡 |
| 69 | 20800089 | 下勝館跡 | 関柴町西勝字館ノ内 | 中世の城館跡 |
| 70 | 20800094 | 新館跡 | 慶徳町豊岡字本町 | 中世の城館跡 |
| 71 | 20800095 | 八幡館跡 | 慶徳町豊岡字不動前 | 中世の城館跡 |
| 72 | 20800097 | 駿河館跡 | 慶徳町新宮字熊野 | 中世の城館跡 |
| 73 | 20800098 | 太郎丸西館跡 | 豊川町米室字館跡 | 中世の城館跡 |
| 74 | 20800099 | 下高額館跡 | 豊川町高堂太字千苅・村東 | 中世の城館跡 |
| 75 | 20800100 | 太田館跡 | 豊川町高堂太字館ノ内 | 奈良時代の散布地，中世の城館跡 |
| 76 | 20800108 | 下高額板碑 | 豊川町高堂太字村東 | 中世の石造物 |
| 77 | 20800110 | 於壇遺跡 | 豊川町高堂太字於壇 | 奈良・平安時代の散布地 |
| 78 | 20800129 | 太郎丸東館跡 | 豊川町米室字太郎丸 | 中世の城館跡 |
| 79 | 20800130 | 中明館跡 | 関柴町西勝字館ノ内 | 中世の城館跡 |
| 80 | 20800133 | 谷地ノ城館 | 慶徳町豊岡字柳町 | 中世の城館跡 |
| 81 | 20800134 | 布流館跡 | 関柴町豊芦字布流 | 中世の城館跡 |
| 82 | 20800135 | 菅井館跡 | 豊川町一井 | 中世の城館跡 |
| 83 | 20800136 | 長尾館跡 | 豊川町沢部字長尾 | 中世の城館跡 |
| 84 | 20800137 | 渋井館跡 | 豊川町一井 | 中世の城館跡 |
| 85 | 42100009 | 亀ケ森古墳 | 会津坂下町青津字館ノ越 | 古墳時代の古墳 |
| 86 | 42100010 | 鎮守森古墳 | 青津字館ノ越・中西 | 古墳時代の古墳 |
| 87 | 42100030 | 金上城跡 | 金上字館 | 中世の城館跡 |
| 88 | 42100093 | 吉原遺跡 | 青木字吉原 | 縄文・古墳・平安時代の散布地 |
| 89 | 42100094 | 青木遺跡 | 青木字青木 | 平安時代の散布地 |
| 90 | 42100099 | 辻田遺跡 | 沼越字辻田 | 平安時代の散布地 |
| 91 | 42100100 | 高畑遺跡 | 沼越字高畑 | 縄文・弥生・平安時代・中世の散布地 |
| 92 | 42100101 | 中立川遺跡 | 立川字中立川 | 平安時代の散布地 |
| 93 | 42100102 | 東立川遺跡 | 立川字東立川 | 平安時代の散布地 |
| 94 | 42100105 | 御池田山ノ神遺跡 | 御池田字山ノ神・江免 | 平安時代・中世の散布地 |
| 95 | 42100131 | 中目経塚 | 五番字家ノ西 | 中世の塚 |
| 96 | 42100133 | 稲荷北遺跡 | 沼越字稲荷北 | 平安時代の散布地 |
| 97 | 42100163 | 金上村東遺跡 | 金上字村東 | 弥生・平安時代の散布地 |
| 98 | 42100176 | 古舘遺跡 | 沼越字古舘 | 平安時代・中世の散布地 |
| 99 | 42100179 | 樋渡館跡 | 樋島字樋渡 | 中世の城館跡 |
| 100 | 42100181 | 旭田館跡 | 御池田字旭田 | 中世の城館跡 |

遺構が多数残っている。

近世（江戸時代）に入り幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し，会津地方でも上杉景勝から蒲生秀行（再蒲生）・忠郷，加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科（松平）氏の治世を迎え，明治時代に至る。現在では町の中心地である旧塩川村は，慶長13（1608）年出羽米沢に通じる檜原峠越米沢街道の宿駅に定められた。また，毎年暮れには旧塩川村に詰市と称される市が開設され，諸産物の売買が盛んに行われた。当時の塩川は会津藩内における阿賀川水運の起点であり，このため船問屋・米問屋が軒を並べ，藩の大阪廻米を納めるための蔵などが建ち並び，阿賀川水運や米沢街道の陸運の中継地として栄えたと伝えられる。この地域の主な特産物は米であったが，この他に薬用ニンジンの栽培があり，藩の専売品として全国有数の生産高を誇った。　（菊田・高橋）

## 第５節　調 査 の 方 法

今回の荒屋敷遺跡の調査では，遺跡・遺構の明確な位置を記録するために，国土座標第Ⅸ系を基準としたグリッド網を設定した。測量基準杭の設定と水準点の移動にあたっては，業者委託により，調査区内の７地点に設けた。基準杭の設定にあたっては，高規格道路計画用基準点（基－９・10）を視準点とし，Ｘ:176,325.00，Ｙ:4,225.00の十字ライン（Ｎ－18）を中心とする25ｍ間隔の基準杭を調査区ほぼ中央に設けた。この延長線上となる調査区北側と南東側の２地点（Ｉ－30，Ｓ－13グリッド）も含めて，本遺跡のグリッド設定における基準杭としている。

この基準杭のデータを基に，遺跡内に５ｍ四方のグリッド網を設定した（図５）。各グリッドは，Ｘ:176,230.00，Ｙ:4,160.00を起点（Ａ0）に南から北に向かって１・２・３……35・36と付した算用数字と，西から東に向かってＡ・Ｂ・Ｃ……Ｘ・Ｙ・Ｚと付したアルファベットとの組み合わせによって表示し，Ｒ10グリッドやＪ32グリッド等と呼称した。これらの各グリッドは，遺物の出土位置表示，遺構の大まかな位置表示を行うためのものであり，さらに平面図作成のための基準線を１ｍ方眼で規定している。地点の表記については，国土座標のＸ・Ｙ座標をそれぞれＮ（北）・Ｅ（東）に置換し，下３桁の数字を使用することとした（起点がＮ230・Ｅ160）。調査区内においては，測量基準点が調査区南西外に設定されているため，Ｎ○○とＥ○○のみが存在する。

上述のグリッド設定方法は，塩川町教育委員会が行った１・２次調査の方法と基本的には国土座標第ｖ系を基準としている点で同様であるが，15ｍ四方の大グリッド網を用いている点や基準点等で異なっている（本章第２節（２）参照）。図５に示したとおり，町調査区の起点ｂ－１はＸ:176,220.00，Ｙ:4,095.00であり，南北軸１が98～０，２が１～３……13が34～36，東西軸ＤはＣ～Ｅ，ＥはＦ～Ｈ……ＩはＲ～Ｔに各々対応する。

今回の調査区は道路計画予定地ということもあって，南北に縦長であることから，調査区を東西に横切る農業用水路（町１次調査）や12・13号溝跡等が位置する段丘南側境を目安とし，調査区を大きく北側・中央付近・南側などと便宜的に呼称した。これは第２章の事実報告記載に於いても，

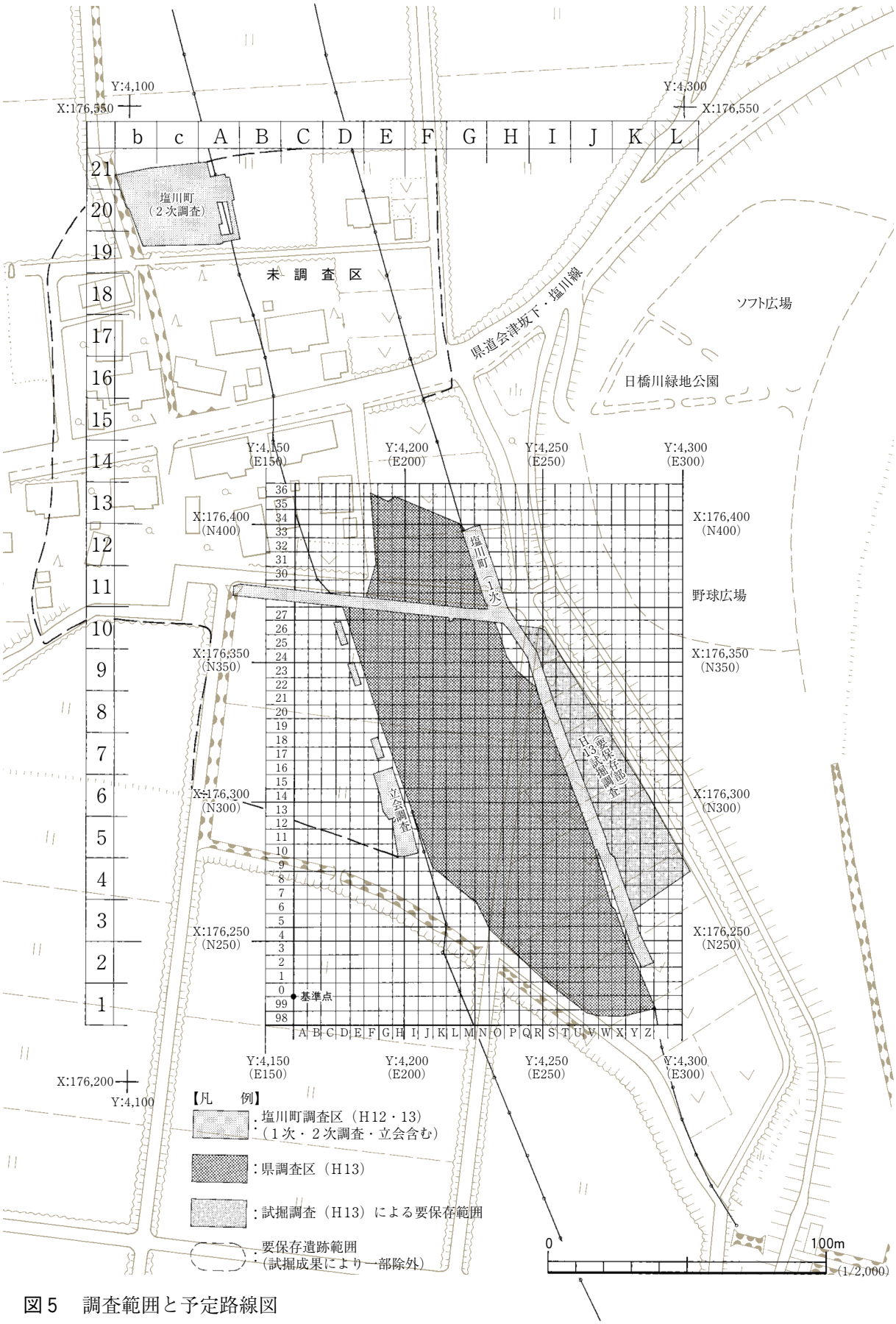



図５　調査範囲と予定路線図

調査区内におけるおおよその位置関係を示す場合に使用している。

遺構の掘り込みにあたっては，遺構の大きさや重複関係を考慮して，土層観察用ベルトを随時設定し，写真撮影や実測図等の作成を行った。土層の注記には，新版標準土色帖（1997年版）を使用した。また，溝跡等の長く大きい遺構から出土した遺物については，グリッド名や遺物No.を記載し，遺構外出土遺物は基本土層に準拠して取り上げている。

記録写真撮影は，調査の進捗に合わせて随時35㎜判の小型カメラを使用，遺物出土状態や全景など必要に応じて６×4.5判の中型カメラも併用した。フィルムは，モノクロームとカラーリバーサルフィルム２種を使用し，遺構の検出・土層断面・完掘状況のほか，遺物の出土状態の撮影を適宜行った。また，遺構図は１/20の縮尺を基本とし，小ピット等は１/10の縮尺で作成したが，大型の溝跡等は遺構の性格上，平面図と断面図の縮尺率を変えて作成している。

これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料は，当事業団の整理基準に準拠して整理を行い，報告書作成終了後，それぞれの台帳を作成し，福島県教育委員会が収蔵・保管する予定である。（井）

【参考・引用文献】


小山正忠・竹原秀雄他　1997版　新版　標準土色帖

香川　愼一　他　2001　「福島県内遺跡分布調査報告７」福島県教育委員会

久保田鉄工株式会社　1987　「URBAN　KUBOTA　26」　久保田鉄工株式会社

塩川町史編纂委員会　1966　『塩川町史』　塩川町

鈴木　敬治　他　1973　「喜多方地域の地質」　福島県

福島県教育委員会　1988　『福島県の中世城館跡』

福島県教育委員会　1996　『福島県遺跡地図　会津地方』　福島県

藤谷　誠　他　1998　「福島県内遺跡分布調査報告４」福島県教育委員会

文化６年会津藩編　1983　『新編会津風土記』　雄山閣

森　幸彦　他　1999　『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』福島県立博物館

横須賀　倫達　他　2002　「福島県内遺跡分布調査報告８」福島県教育委員会

和田　聡　他　1998　「舘ノ内遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書３』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　他　1999　「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書４』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　他　2001　「鏡ノ町遺跡Ｂ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会

和田　聡　2002　「荒屋敷遺跡」福島県耶麻郡塩川町教育委員会　第10集

# 第２章　遺 構 と 遺 物

## 第１節　遺跡の概要と基本土層

### １．遺構の分布と出土遺物

今回の荒屋敷遺跡の調査で検出された遺構は，竪穴状遺構１軒，掘立柱建物跡１棟，柱列跡１基，土坑60基，溝跡33条，ピット群４箇所である。塩川町１・２次調査で検出された遺構数を合わせると，竪穴状遺構１軒，掘立柱建物跡１棟，柱列跡１基，土坑78基，溝跡51条，小ピット多数となる。また，この他に遺跡南西の立会調査部分では，土坑10基，溝跡３条，柵列（建物跡？）１条，小ピット13個が確認されている（和田：2002）。ただ，溝跡については表17に整合性を示したとおり，連続する同一の遺構でありながら別番号を付したものもあり，本来は40条ほどの検出数と考えられる。

遺構全体の配置は図６に掲載した。また，これとは別に地形や隣接する遺構同士の関係を明確化するため図36～38・46に区域ごとの遺構分布を示し，ピット群は便宜的にＡ～Ｉなどの区割りを設けた。検出された遺構の分布状況を概観すると，全体的に遺跡内に散在しているが，旧地形が遺存する比較的標高が高い地域に遺構が多く認められている。検出された遺構は，中世の溝跡（区画溝）や土坑が大半を占め，調査区北側から中央南西段丘境にある程度の密度が認められる。調査区南西付近では該期頃の竪穴状遺構や掘立柱建物跡，柱列跡なども僅かに認められてはいるが，中央東半では遺構・遺物ともに希少であった。塩川町１次調査Ｂ・Ｃ区では，遺構の集中区域が認められ，東側調査区外へさらに伸びるＬ字状の区画溝（町ＳＤ04～07・10・16）の存在を考慮すると，本遺跡の中心的な施設が集中した区域と判断される。これらの区画溝や土坑，小ピット群等とは対称的に，調査区南側では古墳時代から平安時代に至る自然流路（旧河川）が数時期に渡って氾濫を繰り返しながら存在しており（ＳＤ23～25・32～34），中世における生活域とは分布域が異なっている。

遺跡周辺においては，大正７年頃の基盤整備や平成６年度の大規模なほ場整備事業等が実施され，水道管や用水路，農道建設等に伴う著しい削平や整地によって改変された地域も存在している。このことは，これまでの試掘調査成果や町調査の所見で明らかなように，僅か数ｍ離れた隣接する地域であっても，遺構の遺存状況が一変していることからも窺える。Ｏ～Ｒ－22～26グリッド付近では，大型排水路建設に伴う削平を受け，不鮮明さを残す結果となったが，東側堤防沿いは旧地形が残っている部分もあり次年度以降の詳細な調査成果が期待される。

出土遺物は遺構の分布状況とほぼ同様な傾向を示しており，遺物の出土状況とその内訳について図７に掲載した。遺構内から4,070点（約44％），遺構外から5,256点（約56％）の総数9,326点が出土した。出土土器の内訳は，縄文・弥生土器片709点，土師器片7,384点，かわらけ206点，筒型土器片488点，須恵器片135点，中世陶器22点，貿易陶磁器22点，木質遺物約80点，種子類53点，石製品・鉄製品等その他遺物類が227点であり，平安時代（９世紀代）と中世前半期の資料が主体

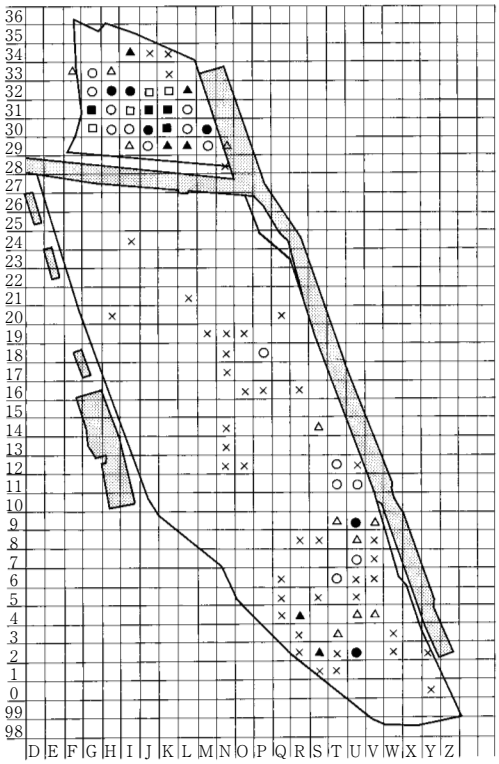
図６　遺構配置図とグリット配置

となる。

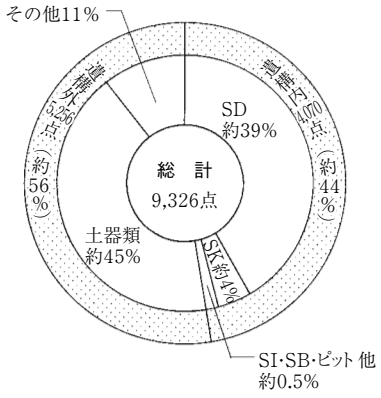
遺構内から出土した遺物の約90％は溝跡内からの出土であり，うち約65％（2,632点）は21号溝跡から出土している。21号溝跡から出土した遺物の大半は，平安時代に集約される資料である。内訳は土師器杯が約83％（2,258点）と多くを占め，次いで筒型土器が約12％（314点），須恵器類が約５％（60点）である。出土量が少ない須恵器類の中では，特に杯類が少なく，比較的筒型土器片が多い傾向がある。土師器は墨書土器や刻書土器が認められ，内面に蓮華状の文様，外面底部に「岡本」の文字が刻書された図64－１は，仏教関連の金工品の模倣的な資料として特筆される。また，遺構は確認できなかったが，椀型滓や羽口片も流路やその近辺から数点認められ，律令期における生産域の場や集落内の水辺の利用法などを窺わせる資料も得られている。

その後，調査区内では12世紀後半から13世紀に本遺跡における第二の画期が訪れる。古代末～中世の土器や珠洲系陶器，白磁・青磁などの貿易陶磁器は特筆される資料である。近世～近代に至ると，本郷焼き等の陶磁器類も認められるが，縄文・弥生時代・古墳時代の資料と同様，遺跡内における出土量は希少であり，該期に所属する明確な遺構の存在は認められなかった。

なお，報告に当たっては，「須恵系土器・須恵質土器」・「土師質土器」・「赤焼土器」等と呼称されている土器を総称して「かわらけ」の語句を便宜上用いた。また，遺物の詳細については各報告文中でも触れているが，土師器の出土量が多かった21号溝跡を中心に土器観察一覧表や土器組成表にまとめ（表３～16・18），貿易陶磁器類は出来るだけ復元図化して掲載した。




合　　計　5,256点　（遺溝外）



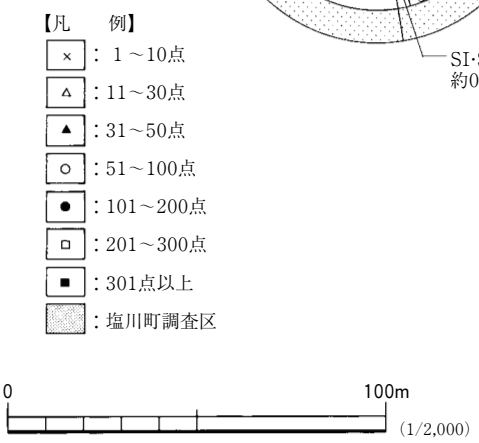




図７　グリッド別遺物出土点数と内訳

## ２．基本層序

荒屋敷遺跡は，阿賀川の支流である日橋川右岸の標高178.00m～175.50m程の低位段丘に位置する。第１章第３節で述べたとおり，塩川町の東から北部の山々にかけては，新第三紀鮮新世及び第四紀更新世の堆積岩層を基岩とする火山性の堆積物（猫魔ヶ岳火山噴出物）が覆い，西側平野部はなだらかな沖積層及び扇状地となっている。本遺跡が所在する遠田地区は，複数の扇状地の先端部が集まってできた三角州性の低地に分類されている。現在，遺跡周辺は日橋川の氾濫を抑える堤防が築かれ，南へ緩やかに傾斜する畑地・水田跡地となっている。大正７年頃の基盤整備や平成６年のほ場整備等によって地形が著しく改変されているが，遠田地区南側では幾分残った旧地形の観察から日橋川の蛇行の痕跡が読みとれる。

遺跡内における基本土層は，調査区が南北に長く，整地・盛土が著しい場所が存在することや地形的にも氾濫原及び低位の段丘境に位置することから，調査区の各地点で異なった堆積状態を示している。そのため，遺跡各所に設定した土層の観察地点と，その断面図及び土層柱状図を図８～12に出来る限り掲載した。図８・10脇に示した○数字の地点と，土層柱状図の○数字は対応する。また，図10・11に示した調査区東半の土層断面図①～⑨層は，炭化物・木質遺物等を多く含む褐色砂質土と灰褐色砂質土がラミナ状に相互に堆積する旧河川氾濫の堆積層であり，基本土層第Ⅶ層に対応するものと判断される。

今回の荒屋敷遺跡の調査では，平成６・９年度の試掘調査成果『福島県内遺跡分布調査報告４・７』に基づいて基本土層を設定している。ただ，調査区北側等では水道管埋設や農道建設等に伴い，基盤層（ＬＶ）まで大きく掘削を受けた部分も認められ，調査区中央以南の土層とは必ずしも一様ではない。Ｆ～Ｍ－31～34グリッド付近では，1.6m以上の盛土による地形の改変が著しく，第Ⅱ・Ⅲ層が大きく欠層している。また，調査区北側と中央南東に各々堆積する第Ⅲ層とした土層については，当該地点の層順を意味し，両者は対応していない。以下，各堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

ＬＩ：10ＹＲ3/3　暗褐色土。調査区全体を覆う耕作土で，旧水田跡及び北東付近では欠層する。調査区西側等では２層に分層され，層厚は平均して15㎝程である。平安時代から現代に至る遺物を包含する。

ＬⅡ：10ＹＲ3/1　黒褐色土。調査区中央付近と北東側では遺存状態が悪く欠層するが，調査区内に広く堆積する。中世以降の遺構検出面であり，土坑の大半や29号溝跡等はＬⅡからの検出である。層厚は平均して８～15㎝ほどで，中世から近世頃の遺物を多く包含する。

ＬⅢ：褐色系の堆積土で，調査区北側と中央南東では土質・色調・包含遺物等で異なる。両地点における前後関係は判然としないが，前者はＬⅡとＬＶの漸移層，後者は河川の氾濫堆積層である。調査区北側では28・30・35号溝跡等が上面で検出され，縄文・弥生・平安時代頃の遺物を多く包含している。段丘境南東のＴ～Ｗ－15～０グリッド付近の河川氾濫地帯では，古代の遺物が比較的多く認められた。

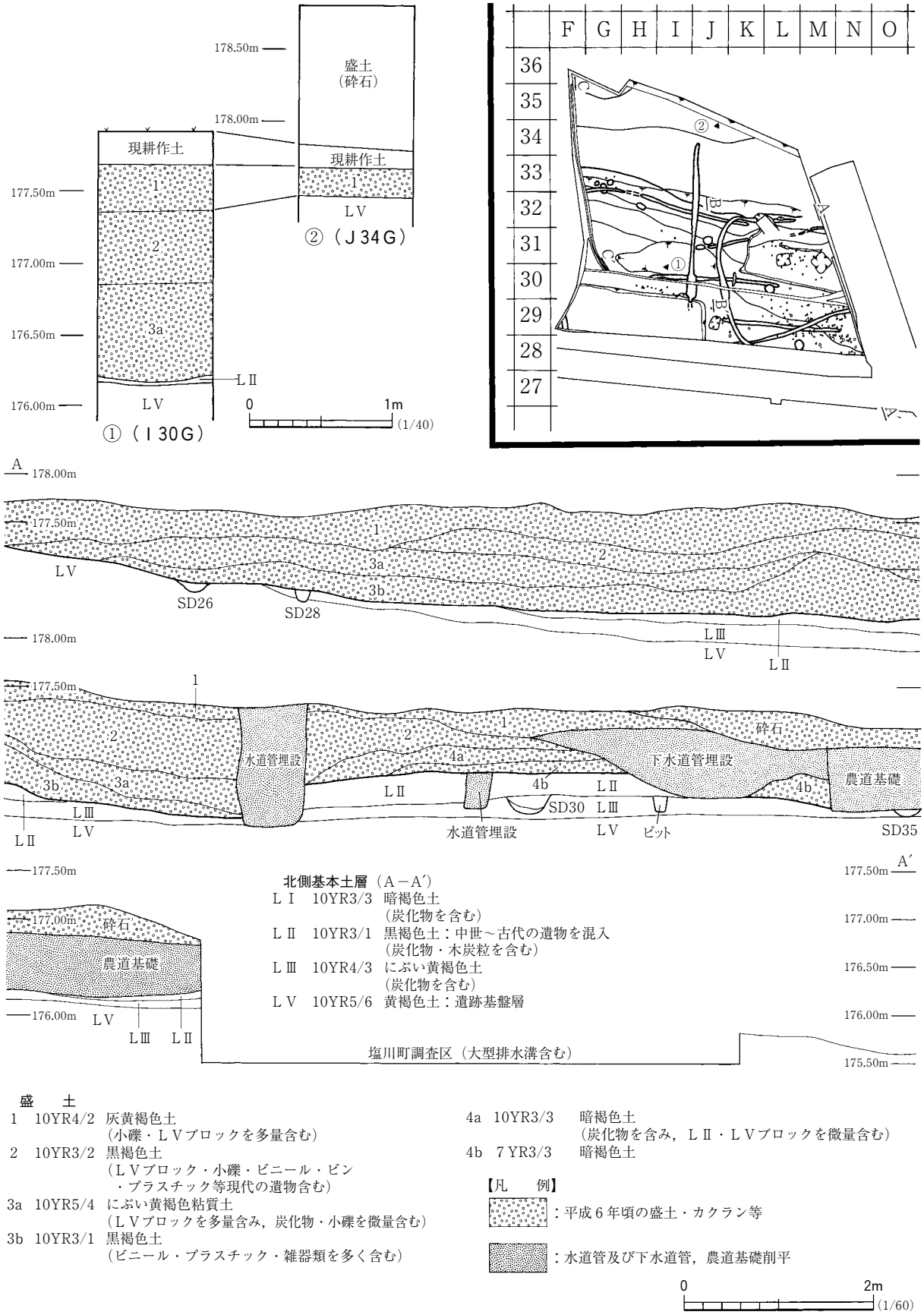

178.50m
178.00m
177.50m
177.00m
176.50m
176.00m
盛土
（砕石）
現耕作土
1
2
3a
LⅡ
LV
①（I 30G）
②（J 34G）
0
1m
(1/40)
F G H I J K L M N O
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
A
A′
3b
SD26
SD28
LⅢ
4a
4b
水道管埋設
下水道管埋設
砕石
農道基礎
SD30
SD35
ピット
177.00m
176.00m
175.50m
北側基本土層（A－A′）
LⅠ　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を含む）
LⅡ　10YR3/1　黒褐色土：中世～古代の遺物を混入
（炭化物・木炭粒を含む）
LⅢ　10YR4/3　にぶい黄褐色土
（炭化物を含む）
LV　10YR5/6　黄褐色土：遺跡基盤層
塩川町調査区（大型排水溝含む）
盛　土
1　10YR4/2　灰黄褐色土
（小礫・LVブロックを多量含む）
2　10YR3/2　黒褐色土
（LVブロック・小礫・ビニール・ビン
・プラスチック等現代の遺物含む）
3a　10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土
（LVブロックを多量含み，炭化物・小礫を微量含む）
3b　10YR3/1　黒褐色土
（ビニール・プラスチック・雑器類を多く含む）
4a　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を含み，LⅡ・LVブロックを微量含む）
4b　7YR3/3　暗褐色土
【凡　例】
：平成６年頃の盛土・カクラン等
：水道管及び下水道管，農道基礎削平
0
2m
(1/60)

図８　基本土層図（１）

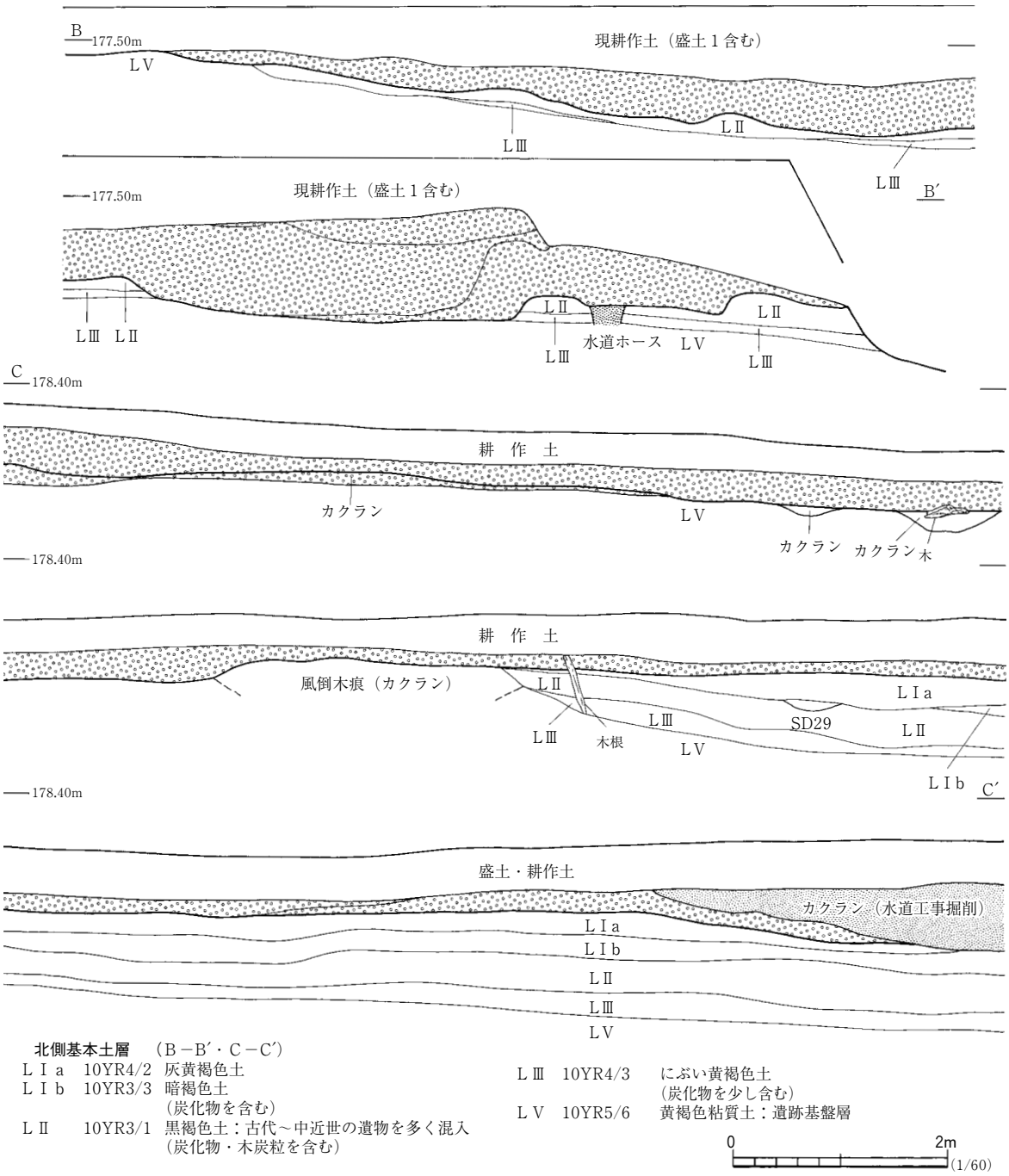
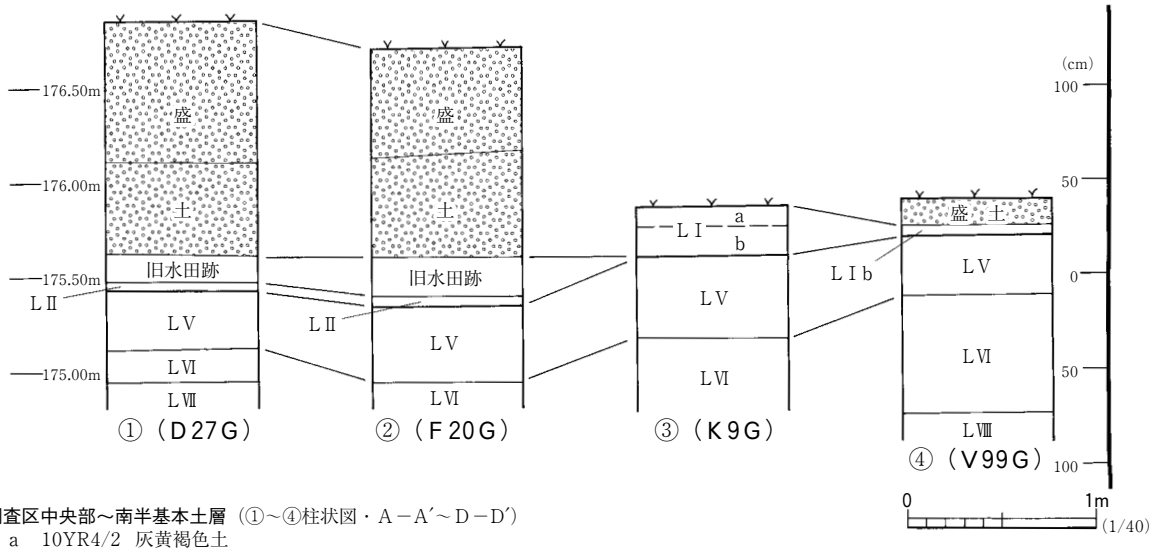



図９　基本土層図（２）

ＬⅣ：10ＹＲ3/1　黒褐色粘質土。調査区南東以南に堆積するＬⅢと堆積状況やその分布域がほぼ同様で，炭化物・木炭粒・小礫等を含む。旧河川の氾濫堆積層である。多数の土師器が出土した21号溝跡等の検出面であり，古墳時代から古代にかけての遺物を包含する。

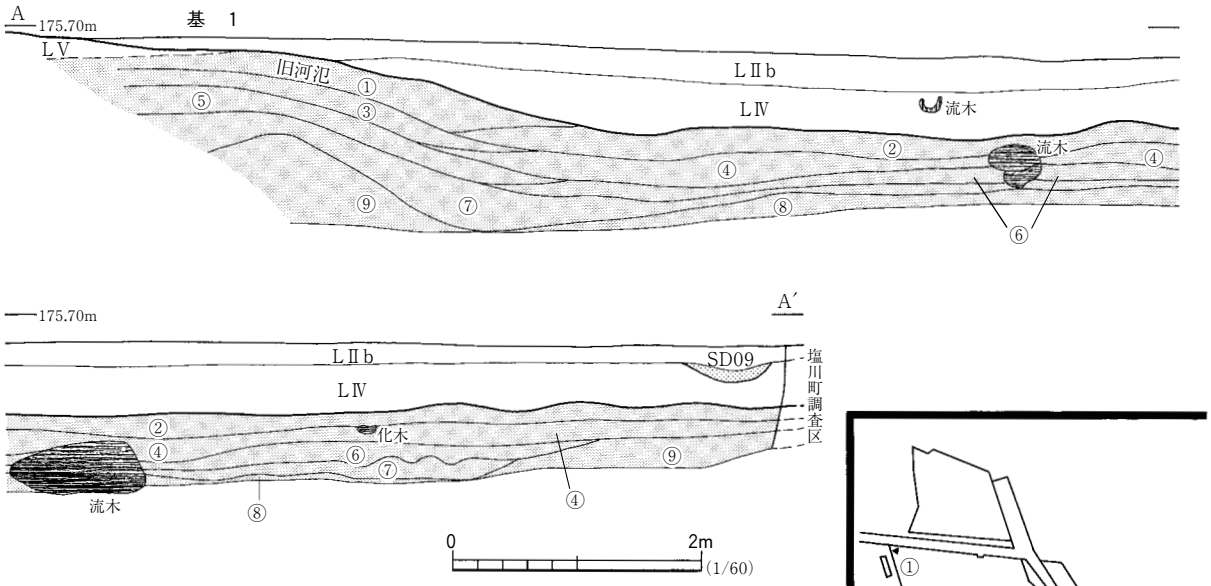
ＬＶ：黄褐色系の粘質土で，遺跡の基底面である。整地・削平等が著しい調査区北側の一部や中央付近では，ＬⅡ～Ⅳが欠層するため，遺構の検出面となる。これより下層は無遺物層である。

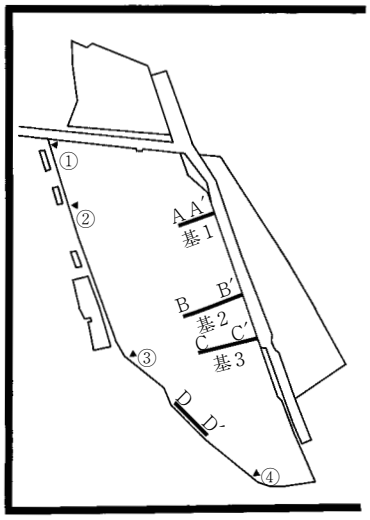
（井）




**調査区中央部～南半基本土層**（①～④柱状図・Ａ－Ａ′～Ｄ－Ｄ′）

ＬＩａ　10YR4/2　灰黄褐色土
ＬＩｂ　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を含む）
ＬⅡ　10YR3/1　黒褐色土：古代～中近世の遺物を多く混入
（炭化物・木炭粒を含む）
ＬⅡｂ　10YR3/2　黒褐色粘質土
ＬⅢ　7.5YR4/4　褐色粘質土
（炭化物を少し含む）
ＬⅣ　10YR3/1　黒褐色粘質土
（炭化物を少し含む）
ＬⅤ　10YR5/6　黄褐色粘質土：遺跡基盤層
ＬⅥ　10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土
ＬⅦ　2.5YR5/3　黄褐色砂質土：旧河川・低位氾濫原（①～⑨相当）
（炭化物・流木等含む）
ＬⅧ　5Y4/2　灰オリーブ色グライ層
（小礫を多量に含む）




**旧河川低位氾濫原**（ＬⅦ相当）

旧河氾①　2.5Y5/3　黄褐色シルト（炭化物を少し含む）
旧河氾②　10YR2/3　褐色シルト（炭化物・木片等含む）
旧河氾③　2.5Y4/2　暗灰褐色シルト（炭化物を少し含む）
旧河氾④　10YR3/2　黒褐色シルト（炭化物・木片・有機質を含む）
旧河氾⑤　2.5Y5/3　黄褐色シルト（炭化物を少し含む）
旧河氾⑥　10YR2/1　黒色シルト
（炭化物・木片（流木）・有機質を多く含む）
旧河氾⑦　10YR2/2　黒褐色砂質シルト（炭化物を少量含む）
旧河氾⑧　10YR5/6　黄褐色粘質土
旧河氾⑨　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土
（炭化物を含み，数度のラミナ状の堆積土含む）

図10　基本土層図（３）

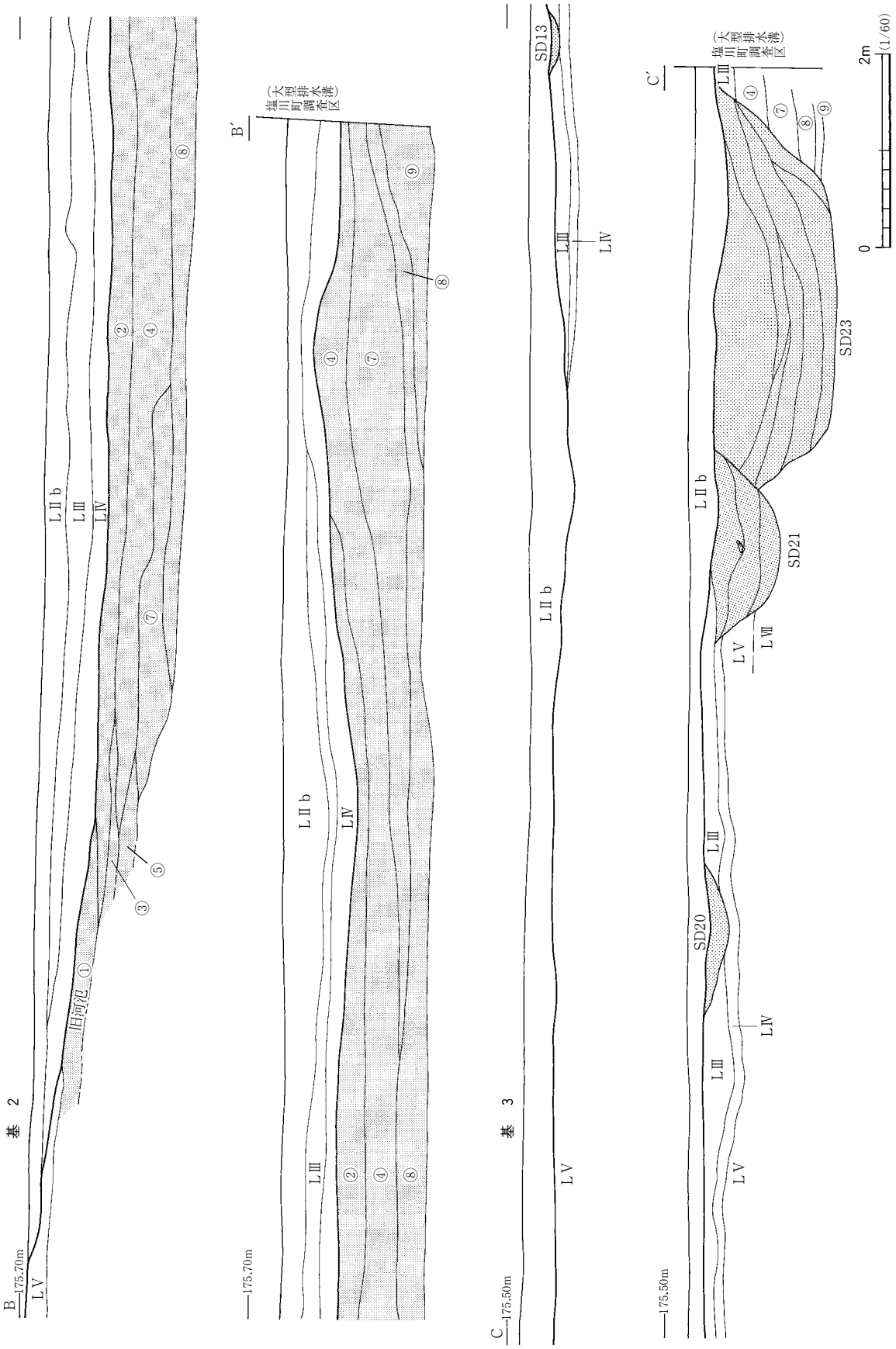

基 2
B
175.70m
LⅡb
LⅢ
LⅣ
LⅤ
旧河道
①
②
③
④
⑤
⑦
⑧
B′
175.70m
塩川町調査区（大型排水港）
⑨
基 3
C
175.50m
SD13
C′
175.50m
SD20
SD21
SD23
LⅦ
0
2m
(1/60)

図11　基本土層図（４）

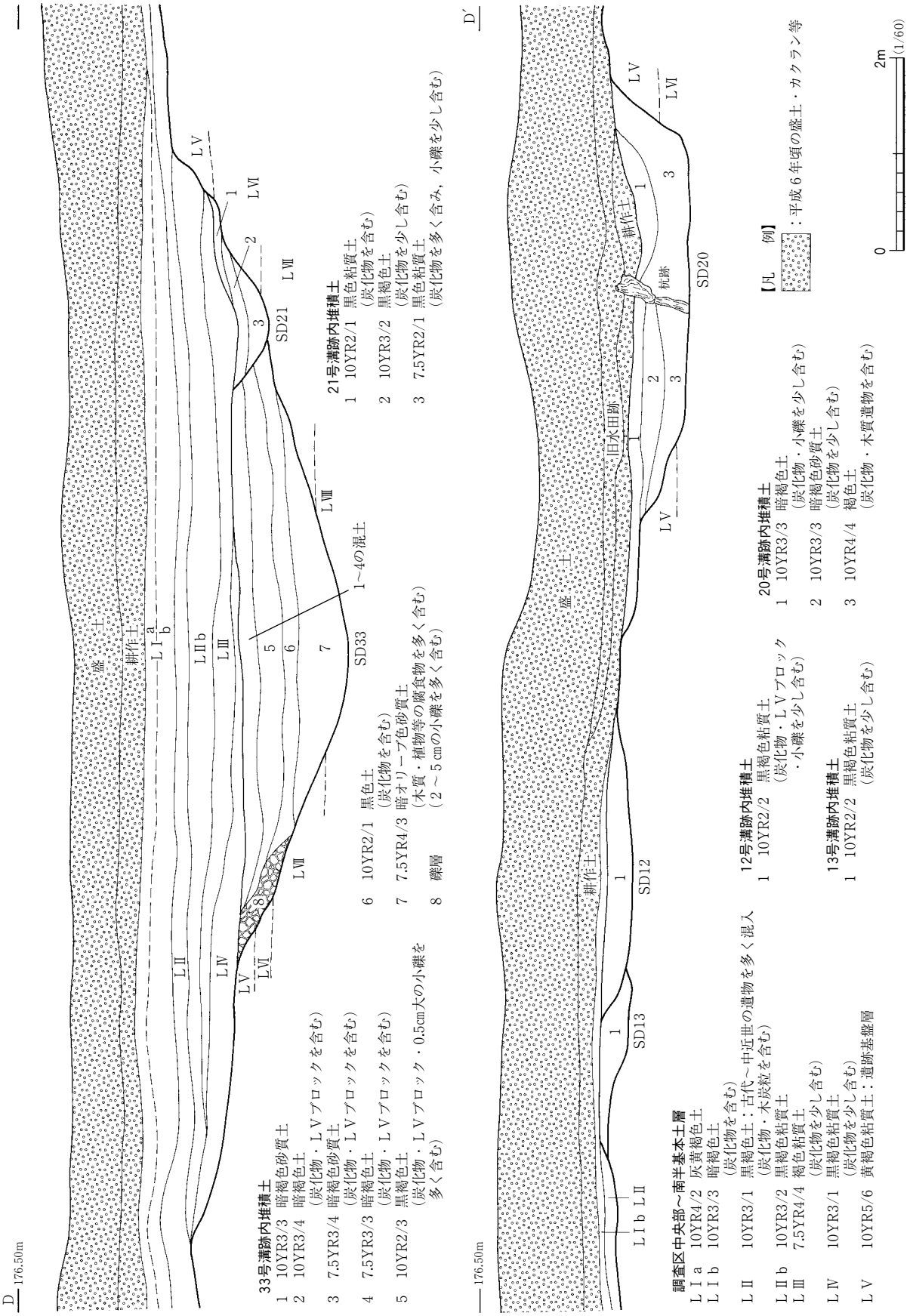

D
D′
176.50m
盛土
耕作土
旧水田跡
杭跡
SD12
SD13
SD20
SD21
SD33
LⅠa
LⅠb
LⅡb
LⅡ
LⅢ
LⅣ
LⅤ
LⅥ
LⅦ
LⅧ
1～4の混土
33号溝跡内堆積土
1　10YR3/3　暗褐色砂質土
2　10YR3/4　暗褐色土（炭化物・ＬＶブロックを含む）
3　7.5YR3/4　暗褐色砂質土（炭化物・ＬＶブロックを含む）
4　7.5YR3/3　暗褐色土（炭化物・ＬＶブロックを含む）
5　10YR2/3　黒褐色土（炭化物・ＬＶブロック・0.5cm大の小礫を多く含む）
6　10YR2/1　黒色土（炭化物を含む）
7　7.5YR4/3　暗オリーブ色砂質土（木質・植物等の腐食物を多く含む）
8　礫層（２～５cmの小礫を多く含む）
21号溝跡内堆積土
1　10YR2/1　黒色粘質土（炭化物を含む）
2　10YR3/2　黒褐色土（炭化物を少し含む）
3　7.5YR2/1　黒色粘質土（炭化物を多く含み，小礫を少し含む）
調査区中央部～南半基本土層
ＬＩａ　10YR4/2　灰黄褐色土
ＬＩｂ　10YR3/3　暗褐色土（炭化物を含む）
ＬⅡ　10YR3/1　黒褐色土：古代～中近世の遺物を多く混入（炭化物・木炭粒を含む）
ＬⅡｂ　10YR3/2　黒褐色粘質土
ＬⅢ　7.5YR4/4　褐色粘質土（炭化物を少し含む）
ＬⅣ　10YR3/1　黒褐色粘質土（炭化物を少し含む）
ＬⅤ　10YR5/6　黄褐色粘質土：遺跡基盤層
12号溝跡内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色粘質土（炭化物・ＬＶブロック・小礫を少し含む）
13号溝跡内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色粘質土（炭化物を少し含む）
20号溝跡内堆積土
1　10YR3/3　暗褐色土（炭化物・小礫を少し含む）
2　10YR3/3　暗褐色砂質土（炭化物を少し含む）
3　10YR4/4　褐色土（炭化物・木質遺物を含む）
【凡　例】
：平成６年頃の盛土・カクラン等
0
2m
(1/60)

図12　基本土層図（５）

# 第２節　竪 穴 状 遺 構

本節で扱う遺構は，比較的整った形状や規模及び床面の踏み締まり痕等竪穴住居跡に近い要素があるものの，カマドや炉あるいは柱穴等が検出されなかったことから竪穴状遺構と呼称して報告するものである。検出数は１軒のみである。

## １号竪穴状遺構　ＳＩ01

**遺　　構**（図13，写真９）

本竪穴状遺構は，調査区南西隅境，Ｐ・Ｑ－４グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，段丘からやや南側へ緩傾斜し，１段低くなる比較的平坦な立地を呈する場所で，12号溝跡及び基盤層である黄褐色粘土層（ＬＶ）の上面で検出した。重複関係は，遺構確認状況から12号溝跡より新しい。遺構内堆積土は４層に分層され，炭化物・ＬＶブロックを含む黒褐色系の土層を主体とする。下層のℓ２・４は壁側からの流れ込みが観察され，自然堆積の様相を呈するが，厚く堆積する上層のℓ１からは20㎝程の礫が多く認められ，基盤層である黄褐色粘土塊の混入も顕著であることから，人為的に埋め戻されたものと判断している。

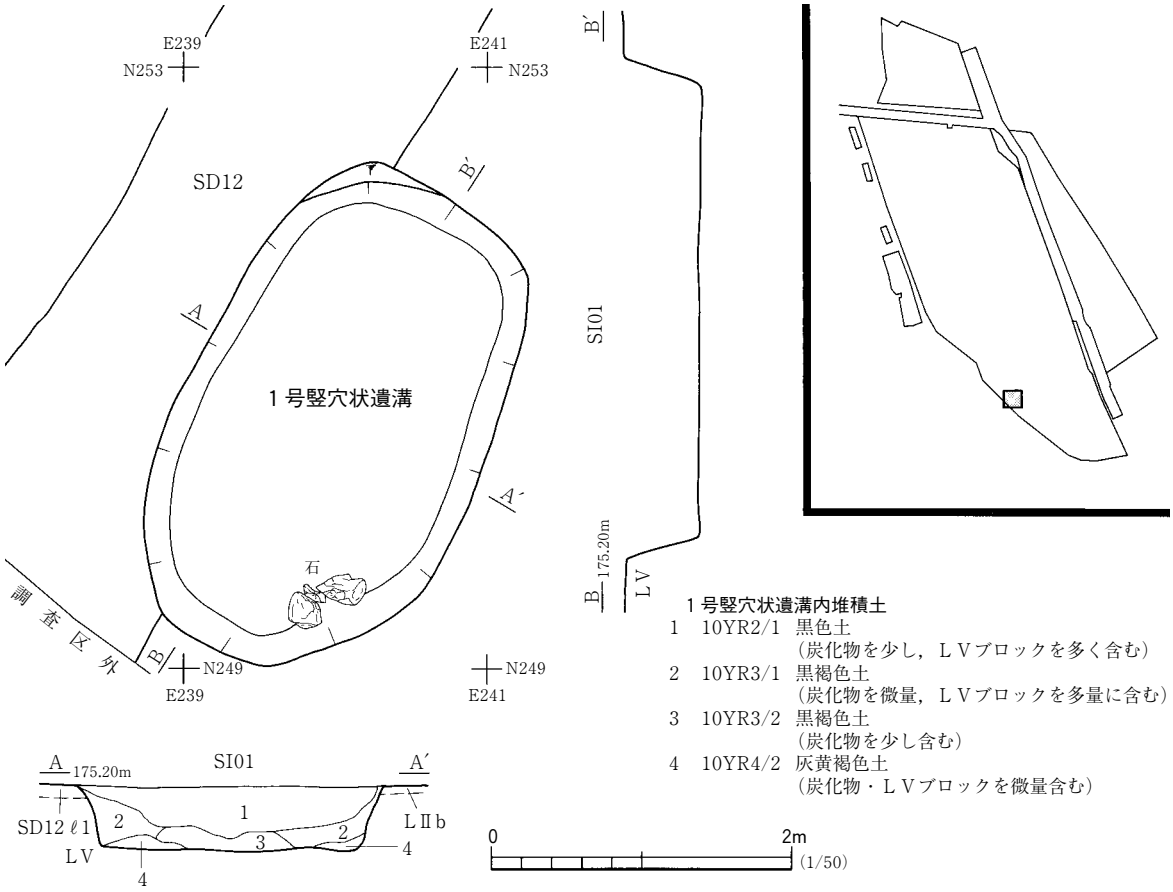



図13　１号竪穴状遺溝

平面形は四隅が丸くなる不整楕円形を呈し，特に西側の両隅は整っていない。規模は，長軸の東西辺が3.38m，短軸の南北辺が2.08mである。東西の主軸はN9°Eを示す。周壁は床面からほぼ垂直に立ち上がり，壁高は検出面から床面までの最深部で43㎝を測る。床面は基盤層を掘り込んだままの平坦な直床で，固く締まっていた。床面からは炉跡やピット，壁溝等の施設は認められなかった。

本遺構内からは土器片が４点出土しているが，いずれもℓ１からの出土であり，明確に本遺構に伴うものではない。資料は細片で摩滅が著しいため図示できなかったが，内黒土師器片やかわらけ片が認められた。

**ま　と　め**

本遺構は，平面形が不整隅丸長方形を呈する中型の竪穴状遺構である。柱穴や炉跡などは認められず上屋の有無さえ明らかではないが，床面の踏み締まりから一時的な居住あるいは作業場に使われた施設と考えられる。所属時期は，出土遺物が少なく特定することは難しいが，12号溝跡との重複関係から判断して，少なくとも中世前半期を遡ることはない。（井）

## 第３節　掘立柱建物跡・柱列跡

今回の調査では，１棟の掘立柱建物跡と柱列跡を検出した。調査区やや南西の比較的平坦な場所に位置し，これらは２号溝跡と平行して配列されていた。報告にあたっては，柱列跡が建物跡に付随する施設と判断されたため，別節を設けず本節で合わせて報告する。

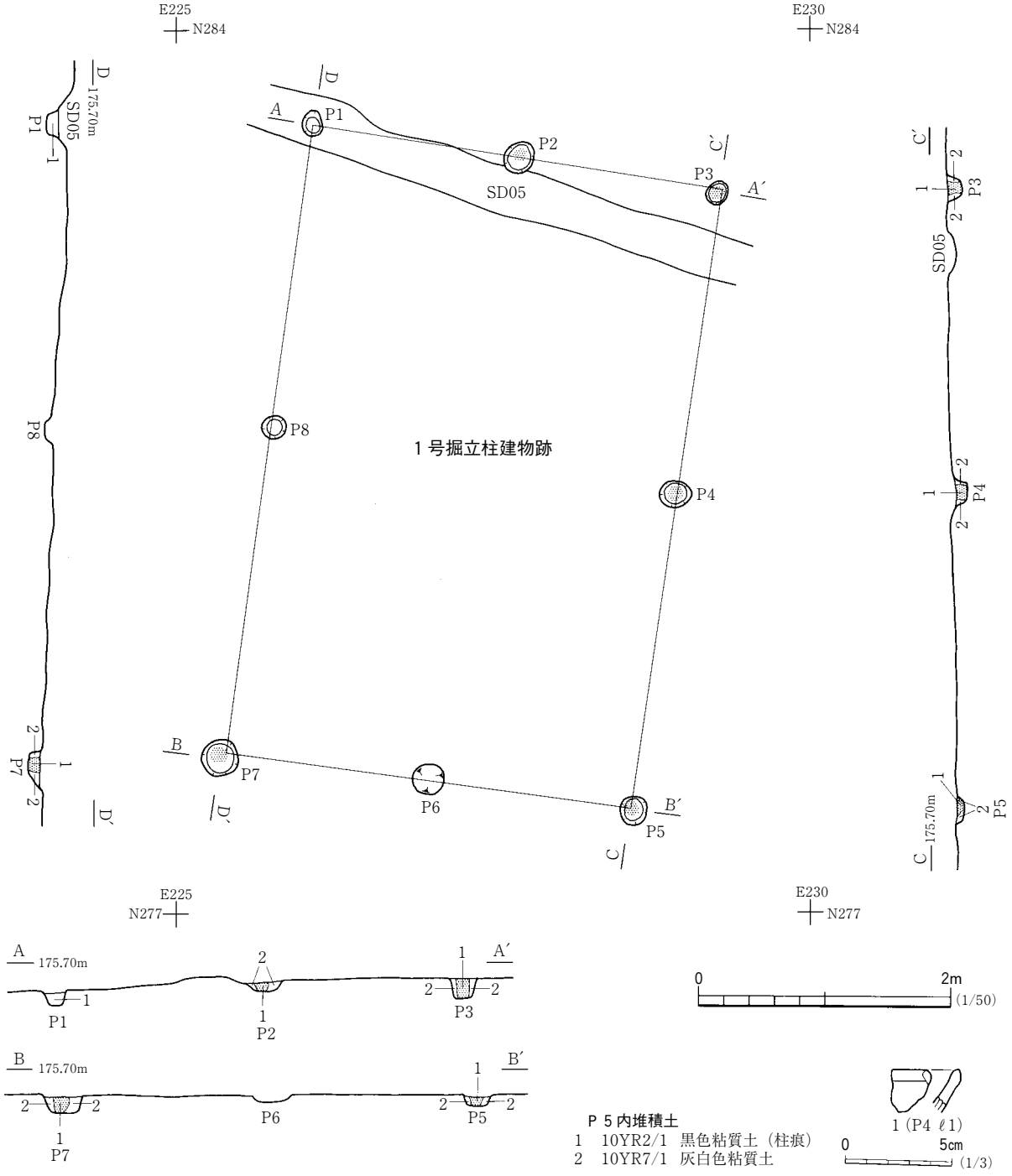
### １号建物跡　ＳＢ01

**遺　　構**（図14，写真10～12）

本建物跡は，調査区南西のＮ－９・10グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高175.60m程の比較的平坦な地形を呈し，規則的な配列構成が認められた８個の柱穴跡を本建物跡と認定した。検出面は，基盤層であるＬＶ上面である。5号溝跡より新しく，近接して24～28・42号土坑等が存在し，１号柱列跡や２号溝跡と軸線が一致している。各柱穴規模や柱間距離（芯々間）などについては，１号柱列跡も同様に図14・15に掲載した。

本建物跡は南北２間，東西２間の側柱建物跡で，平面形は整った長方形を呈する。主軸方向は，南北側柱列を基本軸とした場合N9°Eである。各柱列の全長は，南北軸のＰ１－Ｐ７（西側柱列）が5.00m，Ｐ３－Ｐ５（東側柱列）が4.95m，東西軸のＰ１－Ｐ３（北側柱列）が3.23m，Ｐ５－Ｐ７（南側柱列）が3.20mを測る。南北柱列の１間は約８尺，東西柱列の１間はほぼ５尺で規則的である。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は16.1㎡ほどである。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は，ほぼ円形である。規模は径18～25㎝と均一であるが，Ｐ７はやや大きい。検出面からの深さは，平均して約15㎝を測り，四隅の柱穴が深い。掘形内堆




**Ｐ５内堆積土**
1　10YR2/1　黒色粘質土（柱痕）
2　10YR7/1　灰白色粘質土

**Ｐ１内堆積土**
1　10YR3/3　暗褐色粘質土

**Ｐ２内堆積土**
1　10YR3/1　黒褐色粘質土（柱痕）
2　10YR3/4　暗褐色粘質土

**Ｐ３内堆積土**
1　10YR2/1　黒色粘質土（柱痕）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土

**Ｐ４内堆積土**
1　10YR3/1　黒褐色粘質土（柱痕）
2　10YR3/3　暗褐色粘質土

**Ｐ７内堆積土**
1　10YR3/1　黒褐色粘質土（柱痕）
2　10YR5/2　灰黄褐色粘質土

| PNo. | 形　状 | 規　模(cm) | 深さ(cm) | 底面標高(m) | 柱痕 | 柱間距離(m) | | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| P1 | 楕円形 | 25×17 | 14 | 175.36 | | Ｐ１―Ｐ３：3.23 | | P1>SD05 |
| P2 | 楕円形 | 26×22 | 12 | 175.46 | 有 | P1―P2：1.63 | P2―P3：1.60 | P2>SD05 |
| P3 | 楕円形 | 18×15 | 19 | 175.40 | 有 | Ｐ３―Ｐ５：4.95 | | |
| P4 | 円　形 | 24 | 14 | 175.40 | 有 | P3―P4：2.45 | P4―P5：2.50 | 土器片 |
| P5 | 楕円形 | 24×21 | 11 | 175.40 | 有 | Ｐ５―Ｐ７：3.20 | | |
| P6 | 円　形 | 25 | 6 | 175.43 | | P5―P6：1.60 | P6―P7：1.60 | |
| P7 | 円　形 | 27 | 18 | 175.35 | 有 | Ｐ７―Ｐ１：5.00 | | |
| P8 | 円　形 | 18 | 7 | 175.32 | | P7―P8：2.55 | P8―P1：2.45 | |

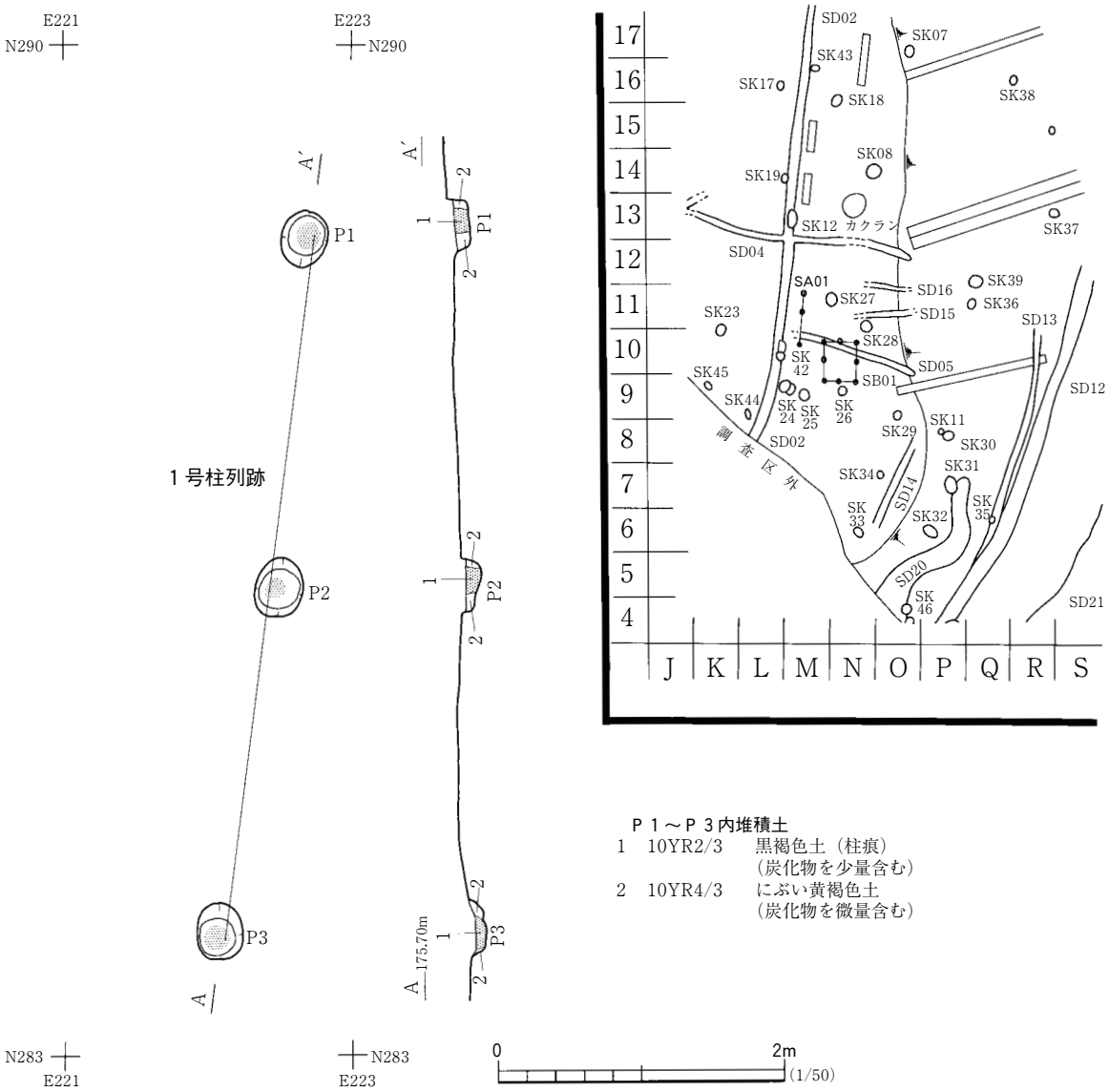
図14　１号掘立柱建物跡，出土遺物

積土は，炭化物を含む暗褐色粘質土を呈し，いずれも土質に締まりがあまり認められない。Ｐ２～Ｐ５・Ｐ７の５個からは，径10～14㎝程の柱痕が検出された。

本建物跡Ｐ４内から土器片が３点出土した。全て細片試料で摩滅が著しいため１点のみの図示にとどめた。図14－１は，かわらけの口縁部と思われる破片である。

ま　と　め

本遺構は南北２間，東西２間の長方形を呈する側柱建物跡である。柱の抜き取り痕跡や礎石・根石等の設置は認められなかった。本建物跡の機能時期については出土遺物に乏しく，その出自についての正確な時期は限定し得ないが，５号溝跡よりは新しく，近接して確認された小穴群との類似性等からも時期的にやや新しいものと判断される。１号柱列跡や２号溝跡と軸線方位を同




| PNo. | 形　状 | 規　模(cm) | 深さ(cm) | 底面標高(m) | 柱痕 | 柱間距離(m) | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| P1 | 楕円形 | 30×25 | 18 | 175.36 | 有 | Ｐ１―Ｐ３：4.90 | |
| P2 | 楕円形 | 28×20 | 15 | 175.29 | 有 | Ｐ１―Ｐ２：2.45 | |
| P3 | 楕円形 | 30×24 | 14 | 175.28 | 有 | Ｐ２―Ｐ３：2.45 | |

図15　１号柱列跡

じくする配置関係も考慮すると，これらの遺構と同様，古代～中世頃に機能していた施設と考えられる。（井）

### １号柱列跡　ＳＡ01

**遺　　構**（図15，写真12）

本遺構は，１号建物跡北西側のＭ－10・11グリッドに位置し，２号溝跡に並列して検出された。検出面はＬＶ上面で，等間隔に一直線に並ぶ位置関係や堆積土などから３個の小穴を柱列跡として認定した。柱穴の平面形はほぼ円形で，規模は径24～28㎝を測る。Ｐ１・Ｐ３はＰ２と比してやや大きい。検出面からの深さは平均して16㎝を測る。各柱穴の掘形からは，径14～18㎝程の柱痕が認められ，芯々間の柱間距離はＰ１－Ｐ２・Ｐ２－Ｐ３ともに2.45ｍを測る。いずれも規則的で１間の距離が約８尺である。掘形内堆積土は，炭化物を含むにぶい黄褐色土を呈し，締まりがあまり認められない。本遺構内からは遺物は出土していない。

**ま　と　め**

本遺構は小規模な柱穴が直線的に並ぶ柱列跡である。出土遺物がなく所属時期を特定することは困難であるが，１号建物跡と軸線を同一にして存在することを考慮すると，これらの遺構と関連する施設であった可能性が考えられる。（井）

## 第４節　土　　坑

今回の調査で検出された土坑は，60基である。塩川町調査区において18基の土坑が調査されているため，荒屋敷遺跡で確認された土坑は総計78基となる。これらの土坑は，重複して存在するものはほとんどなく，調査区内でも比較的標高が高い平坦な場所や，段丘境付近から散在して認められた。時期・性格については，出土遺物が僅かなため不明なものが多いが，規模・形態・土層の堆積状況が比較的類似するものが多く，大半は中世に帰属するものと判断される。

なお，今回検出された全ての土坑については，調査当初からトイレ遺構の可能性が想定されたため，土壌分析用にサンプルを採取している。採取した試料のうち，１・５・６・８・14・16・22・31・46号土坑の10点について分析を行ったが（寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定），結果として消化残渣は検出されず，トイレ遺構である蓋然性は低いと判断された。

また，木質遺物は１・５～８・14・22・24・30・32・33・39・46・47号土坑から認められ，１・５・８・14・22・24・39・46号土坑から出土した20点の遺物について樹種同定を行った。種子類は，総計53点出土し，うち47点が土坑内（ＳＫ01：９点，ＳＫ05：５点，ＳＫ08：５点，ＳＫ14：17点，ＳＫ32：３点，ＳＫ43：８点）からの出土であった。これらの分析結果の詳細については，各報文と併せて付章を参照願いたい。

### １号土坑　ＳＫ01（図16・30，写真13・59）

本土坑は調査区北東部，Ｏ－26グリッドに位置する。検出面はＬ・上面で，近接する遺構はない。遺構内堆積土は５層に分けられ，ℓ１～３・５は黒色を基調としており，ℓ４は褐灰色を呈する。いずれの層も粘性・締まりが確認でき，ℓ１～３から土器及び種子類が出土した。レンズ状に窪んでいる堆積状況と土質から，すべて自然流入土と考えた。

平面形は長径79㎝，短径63㎝の楕円形を呈し，深さは65㎝を測る。底面は中央部が緩やかに窪んでおり，断面形はマッシュルーム形を呈する。周壁は下位では緩やかに立ち上がり，中央付近で大きくオーバーハングし最大幅となる。上位の開口部付近ではほぼ垂直気味に立ち上がる。

本土坑から出土した遺物は，土師器片・かわらけ・木質遺物等の計18点である。比較的遺存状態が良い９点について掲載した。図30－１～３はロクロ成形による底部回転糸切りのかわらけである。１は器厚が比較的厚く，器形的に大皿（椀状）を呈する。内外面ともに摩滅しており，寸法は推定口径13.6㎝，底径6.0㎝，器高4.2㎝を測る。２・３は小皿で，やや底部付近が厚くなる器形を呈する。２の口端部はやや引き上げられ，ともに器高が浅い。２の寸法は推定口径9.6㎝，推定底径7.5㎝，器高2.2㎝，３が推定口径7.4㎝，推定底径4.7㎝，遺存器高1.9㎝を測る。４～９は木質遺物で，大半が欠損品である。４は曲物側板と思われ，木取りは柾目，材質はスギである。片側端は穿孔され，桜皮が遺存している。形状的に５・７は板状，６は先端部が丸く加工された箆状製品，９は面取りされた用途不明の欠損品で，８の先端には焦げた痕跡が認められる。材質は全てスギである。

本土坑の性格は明らかにできなかったが，所属時期は出土遺物等から判断して12世紀前半頃と考えられる。（小笠原）

### ２号土坑　ＳＫ02（図16，写真13）

本土坑は調査区中央部の北側，Ｌ－26グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面で周辺に遺構はない。遺構内堆積土は４層に分けられ，ℓ１～３は黒色を基調とし，ℓ４は灰褐色を呈する。土質はシルトであるが粘性・締まりがあることから１号土坑の土層及び堆積状況と似ている。堆積状況及び土質からすべて自然堆積土と考えた。

平面形は直径90㎝の円形を呈し，深さは31㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁は底面から検出面までほぼ直角に立ち上がっており断面形は蒲鉾形を呈する。

遺物はℓ１よりかわらけ片が２点出土したのみで，遺存状況も悪く図示することはできなかった。本土坑の明確な所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### ３号土坑　ＳＫ03（図16，写真13）

本土坑は調査区北西側，Ｈ－24・25グリッドにまたがって位置し，北側ピット群（地点２）の中央部よりやや西側に存在する。検出面はＬＶとした黄褐色シルト上面で，他遺構との重複関係は

ない。遺構内堆積土は３層に分けることができた。ℓ１・２は茶色の砂がブロック状に混入する粘性・締まりのあるシルトである。ℓ３は炭化物と地山がブロック状に混入している粘質土である。堆積状況及び土質からすべて自然堆積土と考えた。

平面形は長軸1.18ｍ，短軸1.17ｍの整った隅丸方形を呈し，深さは0.39ｍを測る。底面はほぼ平坦で，周壁は緩やかに検出面まで立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。

調査区北側ピット群（地点２）の中に位置するが，遺物の出土もないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### ４号土坑　ＳＫ04（図16，写真13）

本土坑は調査区中央部より北側，Ｋ－23グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は３層に分けられ，いずれの層も黒色を基調とし，下層に行くに従い粘性・締まりも強くなっている。堆積状況や土質から判断して自然堆積土と考えた。

平面形は直径68㎝のよく整った円形を呈し，深さは19㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁は底面から比較的急な角度で立ち上がっており，東側でややオーバーハングする。

本土坑から遺物は出土していないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

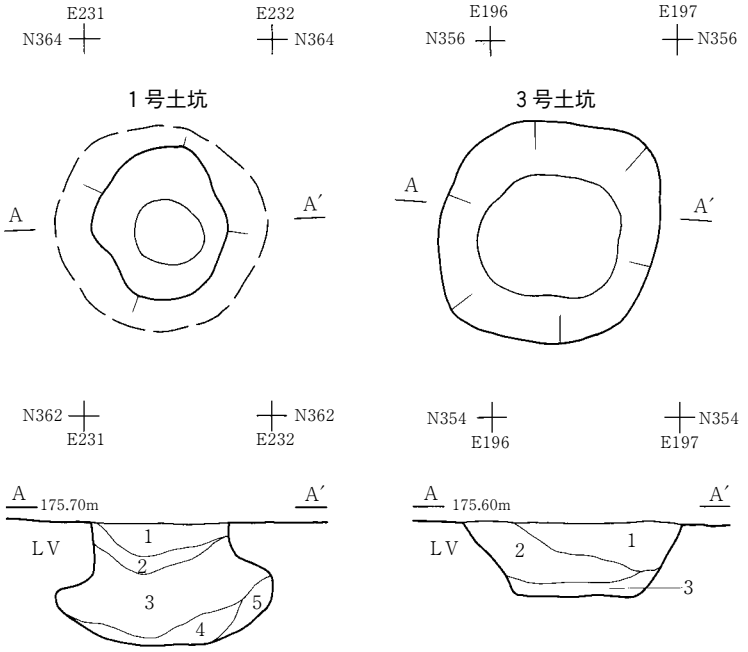
### ５号土坑　ＳＫ05（図16・30，写真14・59）

本土坑は調査区中央部より北側，Ｏ－22グリッドに位置し，ＬⅡからＬＶへかけての落ち際に存在する。検出面はＬＶ直上のＬⅡ面で他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は４層に分けることができた。ℓ２は壁崩落土であるが，ℓ１・４は褐色の砂がブロック状に混入する黒褐色のシルト質粘土である。ℓ１は１号土坑ℓ１，６号土坑ℓ１とよく似た土質で，検出面からの深さは最大で約60㎝と厚く堆積している。ℓ３は指で撫で潰すと真っ黒に跡が残り，焼け焦げた植物と思われる。土坑内に焼け面を確認することはできず，別の場所で燃えたものが土坑内に入ったものと考えられる。南側でのトレンチ断面観察や他の遺構では，ℓ１のような層は確認されなかったため，人為的に廃棄したものと思われる。ℓ２～４は，土質から自然堆積土と考えた。

平面形は長径1.03ｍ，短径0.93ｍの円形を呈し，深さは最深部で0.91ｍを測る。底面は中央部が窪んでおり，中央部から周壁にかけてＵ字形に緩やかに立ち上がった後，深さ60㎝付近から検出面へほぼ直角に向かっている。

遺物は白磁１点，木質遺物２点，種子５点が出土している。図30－10は体部が直線的に外反する白磁碗の口縁部片である。器壁は薄く，内面の見込み部分はリング状に削り落とされ，外面の釉薬は体部下半が露胎している。11・12は用途不明の木質遺物で，12の棒状製品の先端部は丸く加工されている。木取りは板目，材質はサワラである。出土した種子５個は全てモモ核である。

本遺構の性格は不明であるが，所属時期は出土遺物および検出面から判断して中世前半期，12世紀前半～中頃の所産と考えられる。（小笠原）




**1 号土坑内堆積土**

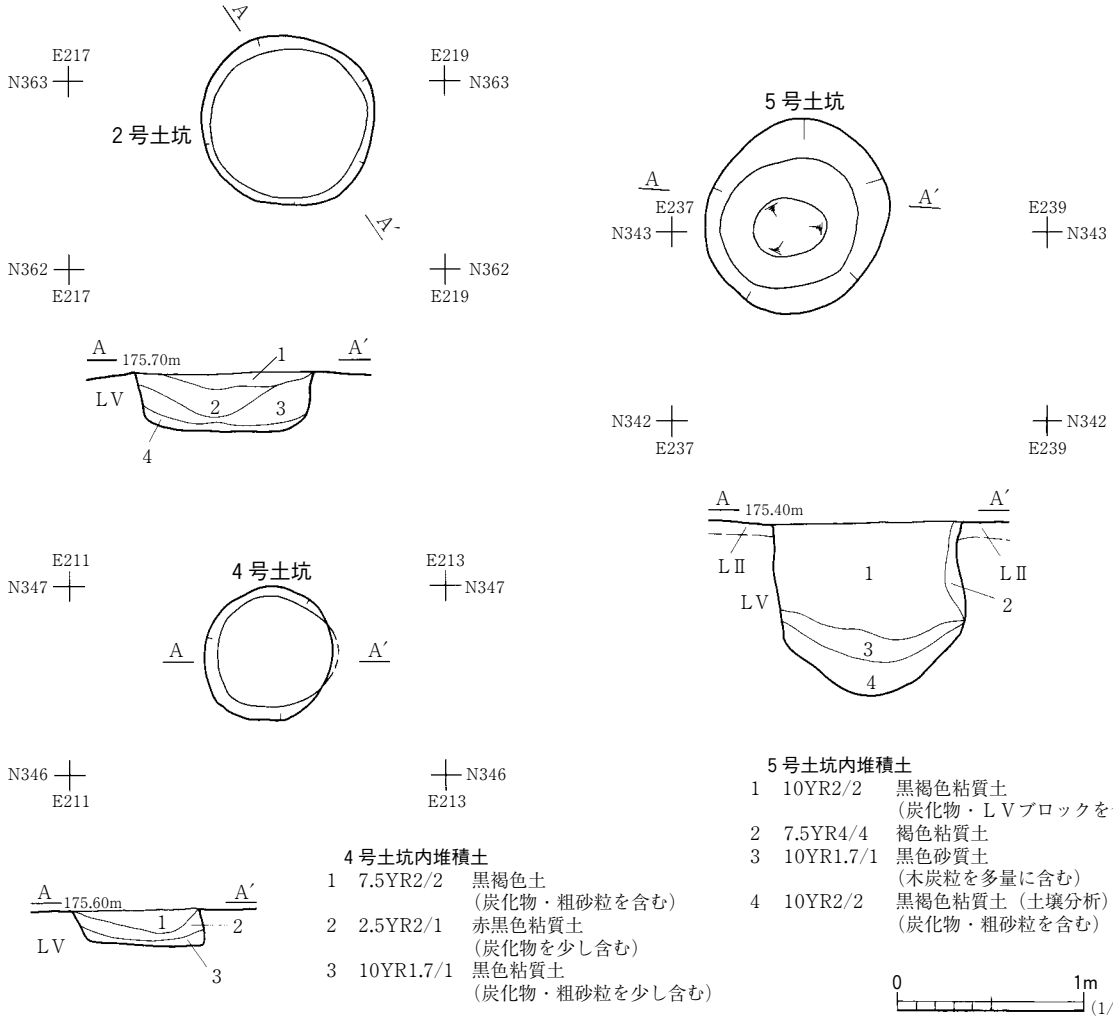
1　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物・ＬＶブロックを含む）
2　5 YR2/1　黒色粘質土
　　（炭化物・ＬＶブロックを含む）
3　10YR1.7/1　黒色粘質土
　　（炭化物を少し含む）
4　10YR5/1　褐灰色粘質土（土壌分析）
5　7.5YR3/2　黒褐色土
　　（砂粒を少し含む）

**2 号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色シルト
　　（炭化物を含む）
2　5 YR1.7/1　黒色シルト
　　（粗砂粒を含む）
3　5 YR　黒色粘質土
　　（炭化物を含む）
4　7.5YR4/2　灰褐色粘質土
　　（炭化物・ＬＶブロック含む）

**3 号土坑内堆積土**

1　7.5YR3/1　黒褐色粘質土
　　（炭化物を含む）
2　5 YR1.7/1　黒色粘質土
　　（炭化物を少し含む）
3　10YR3/2　黒褐色粘質土
　　（炭化物・ＬＶブロック含む）




**4 号土坑内堆積土**

1　7.5YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物・粗砂粒を含む）
2　2.5YR2/1　赤黒色粘質土
　　（炭化物を少し含む）
3　10YR1.7/1　黒色粘質土
　　（炭化物・粗砂粒を少し含む）

**5 号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色粘質土
　　（炭化物・ＬＶブロックを含む）
2　7.5YR4/4　褐色粘質土
3　10YR1.7/1　黒色砂質土
　　（木炭粒を多量に含む）
4　10YR2/2　黒褐色粘質土（土壌分析）
　　（炭化物・粗砂粒を含む）

0　1m
(1/40)

図16　１～５号土坑

### 6号土坑　ＳＫ06（図17，写真14・59）

本土坑は調査区中央部よりやや北側，Ｏ－19グリッドに位置する。検出面はＬⅡ面で，東側に14号土坑が近接しているが重複関係はない。遺構内堆積土は3層に分けることができ，いずれの層も土質は黒色系の色相を呈する粘性シルトである。ℓ１は1号土坑のℓ１，５号土坑のℓ１とよく似た土質である。いずれの層も褐色の砂や黄色の砂がブロック状に混じっており，ℓ１・２とも堆積土が西側に落ち込んでいることから人為的に埋めたものと考えた。

平面形は長径0.91m，短径0.71mの楕円形を呈し，深さは1.24mを測り，今回の調査した土坑の中でも深い方である。底面形はほぼ平坦で，周壁から検出面にかけてはほぼ直角に立ち上がり，検出面付近でわずかに拡がっている。断面形はＵ字形を呈する。

本土坑から出土した遺物で図示できたのは，かわらけ5点，木質遺物1点である。図30－13・14は器壁が厚く，体部の立ち上がりが強い大皿で，14はやや扁平である。15～17は器高が低く浅い小皿で，ともに口端部が上方へ引き上げられている。18は棒状製品の欠損品で，木取りは柾目，材質はスギである。

本遺構の性格は不明であるが，所属時期は出土遺物等から判断して，5号土坑より後出的であり，12世紀中頃の所産と考えられる。（小笠原）

### 7号土坑　ＳＫ07（図17，写真15）

本土坑は調査区のほぼ中央部，Ｐ－17グリッドに位置する。検出面はＬⅡで，周辺に遺構はない。遺構内堆積土は7層に分けられ，いずれの層も粘性・締まりが確認できた。ℓ１・２・４・７は黒色を基調とする粘性シルトであり，それぞれ他の混入物が確認できた。ℓ３・６は壁の崩落土がかなり混じっている。レンズ状に窪んでいる堆積状況を呈するが，ℓ１・２・４・７は土質から人為堆積土と考えた。

平面形は直径1.07mの整った円形を呈し，深さは西側で最深となり1.12mを計測した。底面は東方から西方にかけて深くなっており，周壁はほぼ直角に立ち上がったあと，検出面付近で拡がるが，東側に比べ西側の拡がり方は大きい。

遺物はℓ４から土器片が4点出土したが，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 8号土坑　ＳＫ08（図17・30，写真15・59）

本土坑は調査区のほぼ中央部，O－14グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は6層に分けられ，土質はいずれの層も粘性・締まりのあるシルトである。ℓ１～５まではいずれも黒色を基調としており，ℓ６は暗灰色を呈する。いずれの層も他の土質の塊や炭化物が混じっており，ほぼ水平に堆積していることから，人為堆積土と考えられる。

平面形は長径1.45m，短径1.40mの円形を呈し，深さは最深部で1.20mを測る。底面は中心に

向かって窪んでおり，周壁は緩やかに立ち上がったあと，検出面から約70㎝の深さで最大幅になり，その後検出面に向かい窄まっている。１号土坑同様大きくオーバーハングしており，断面形は算盤玉形を呈する。

本土坑から土師器８点，須恵器１点，かわらけ片８点，木質遺物３点，種子５点が出土し，かわらけ１点と木質遺物３点について掲載した。図30－19はかわらけの底部片でロクロ成形後底部回転糸切りされている。20～22は用途不明の箆状あるいは板状製品の欠損品で，木取りは20が柾目，21・22は板目，材質はスギである。出土した種子はオニグルミが４点，モモ核１点である。

本土坑の性格は不明であるが，所属時期は出土遺物等から中世頃の所産と考えたい。（小笠原）

### ９号土坑　ＳＫ09（図17，写真16）

本土坑は調査区中央部より北側，Ｋ－23・24グリッドにまたがって位置し，北側ピット群（地点２）の西側に存在する。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は２層に分けることができ，いずれの層も土質はシルトである。ℓ１には褐色の砂と白色の砂がブロック状に混じっており，ℓ２には茶色のシルトが混じっている。土質と歪な堆積状況を考えると，いずれも人為堆積土と思われる。

平面形は南西側でやや凹んでいるが直径65㎝の円形を呈し，深さは29㎝を測る。底面はほぼ平坦で周壁は急峻に立ち上がったあと，ほぼ直角に検出面へ向かっている。断面形はＵ字形を呈する。

遺物はℓ１から土器片が２点出土したが，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 10号土坑　ＳＫ10（図17，写真16）

本土坑は調査区中央部よりやや北側，Ｍ－22グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面で，南側に15号土坑が近接するが，重複関係はない。遺構内堆積土は黒色を呈するシルトの単層で，混入物は褐色の砂が少量確認できた程度である。検出面からの底面までの層が薄いが，堆積土が純粋な単層であるという状況を考えると自然流入土である可能性が高い。

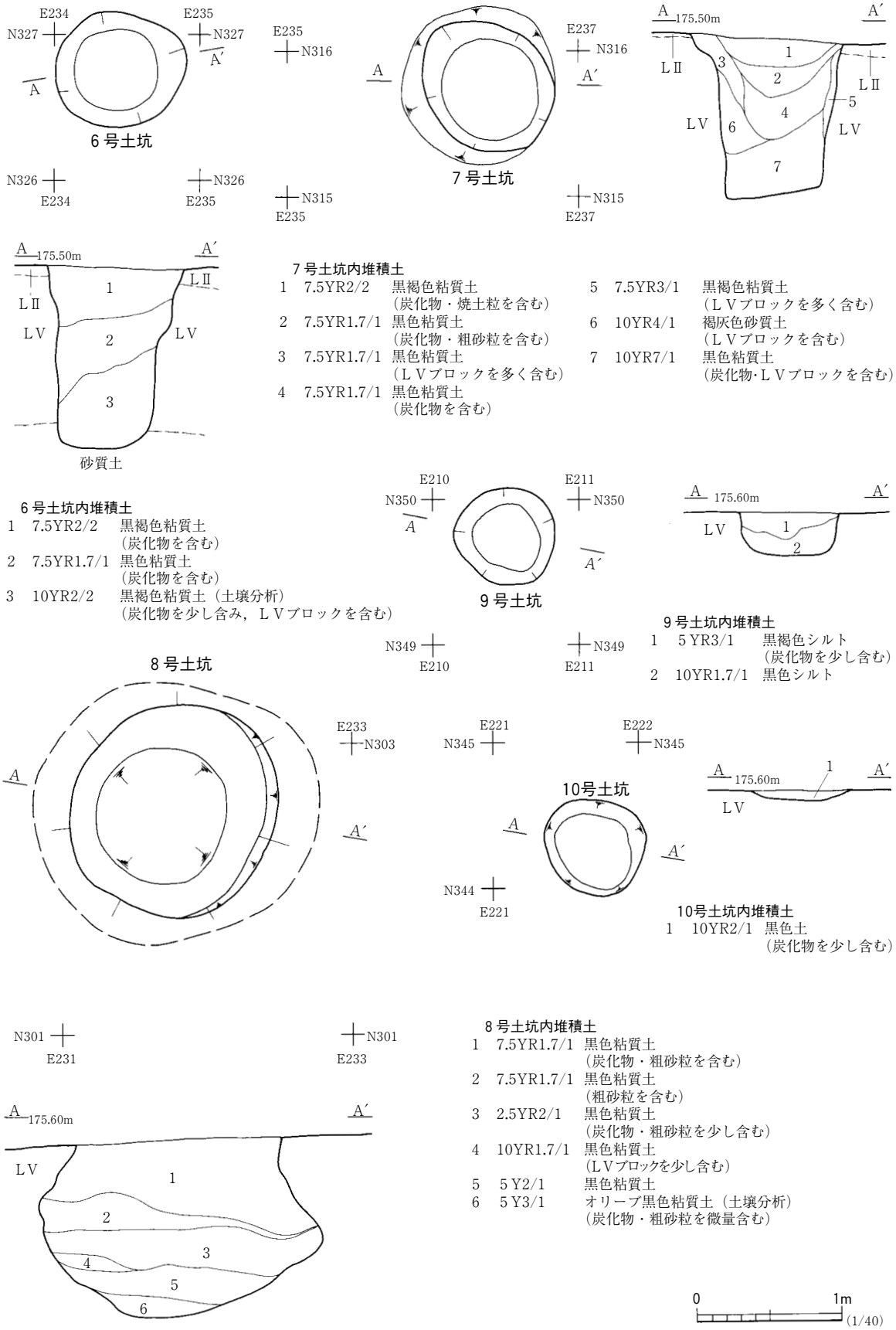
平面形は長径69㎝，短径64㎝の円形を呈し，深さは７㎝を測り，今回調査した土坑の中では非常に浅い方である。周壁の立ち上がりは緩く，底面との境は不明瞭である。断面形は皿状を呈する。

本遺構からの出土遺物はなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 11号土坑　ＳＫ11（図18，写真16）

本土坑は調査区中央部の南側，Ｐ・Ｑ－８グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅡ上面で，南東側で30号土坑と重複しており，30号土坑に切られているため本土坑の方が古い。遺構内堆積土は３層に分けたが，いずれの層も黒褐色を呈しており基本的には同じ土質である。土質及び堆積状況からすべて自然堆積土と考えた。

平面形は推定長径33㎝，短径29㎝の楕円形を呈し，深さは25㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁




**7号土坑内堆積土**

1　7.5YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物・焼土粒を含む）
2　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（炭化物・粗砂粒を含む）
3　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（ＬＶブロックを多く含む）
4　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（炭化物を含む）
5　7.5YR3/1　黒褐色粘質土
（ＬＶブロックを多く含む）
6　10YR4/1　褐灰色砂質土
（ＬＶブロックを含む）
7　10YR7/1　黒色粘質土
（炭化物･ＬＶブロックを含む）

**6号土坑内堆積土**

1　7.5YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を含む）
2　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（炭化物を含む）
3　10YR2/2　黒褐色粘質土（土壌分析）
（炭化物を少し含み，ＬＶブロックを含む）

**9号土坑内堆積土**

1　5YR3/1　黒褐色シルト
（炭化物を少し含む）
2　10YR1.7/1　黒色シルト

**10号土坑内堆積土**

1　10YR2/1　黒色土
（炭化物を少し含む）

**8号土坑内堆積土**

1　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（炭化物・粗砂粒を含む）
2　7.5YR1.7/1　黒色粘質土
（粗砂粒を含む）
3　2.5YR2/1　黒色粘質土
（炭化物・粗砂粒を少し含む）
4　10YR1.7/1　黒色粘質土
（ＬＶブロックを少し含む）
5　5Y2/1　黒色粘質土
6　5Y3/1　オリーブ黒色粘質土（土壌分析）
（炭化物・粗砂粒を微量含む）

図17　6～10号土坑

は急な角度で立ち上がっている。

本遺構からの出土遺物はなく，30号土坑との関連も不明であり，明確な所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 12号土坑　ＳＫ12（図18，写真16）

本土坑は調査区のほぼ中央部，Ｍ－13グリッドに位置する。２号溝跡と重複しており，本土坑の方が古い。検出面はＬＶ上面である。遺構内堆積土は４層に分けることができた。ℓ１は褐色を呈し，ℓ２～４には灰黄褐色粘土塊が斑状に多数混入しており，黒褐色を呈する。いずれの層も炭化物粒を含むシルトであり，基本的には同じ土質である。土質及び構造から，本土坑を人為的に埋めた後，２号溝跡を構築したと考えた。

平面形は長軸1.85ｍ，短軸1.07ｍの隅丸長方形を呈する。長軸方向はＮ８°Ｗで，２号溝跡と軸線を同一にする。深さは39㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁は検出面へ向け拡がるように立ち上がっている。

本遺構からの出土遺物はなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 13号土坑　ＳＫ13（図18，写真17）

本土坑は調査区中央部のやや北側，Ｋ－20グリッドに位置し，１号溝跡と隣接している。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は２層に分けることができ，ともに黒褐色を基調としている。ℓ１には暗褐色土・黄褐色砂質土が混入しており，橙色粒・炭化物も微量確認できた。ℓ２は粘質土で橙色粒が少量混入している。土坑のほぼ中心部には最大径25㎝，短径19㎝程の石があり，ℓ１とℓ２の境目に位置する。堆積状況からともに自然堆積土と考えた。

平面形は直径59㎝の整った円形を呈し，深さは45㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁の立ち上がりは急峻であり，断面形は台形を呈する。今回調査した土坑の中では，比較的小さい部類に属する。

本遺構からの出土遺物はなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 14号土坑　ＳＫ14（図19・31・32，写真17・59・60）

本土坑は調査区中央のやや西側，Ｐ－19グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，南東へ緩やかに斜面する比較的平坦な立地を呈し，ＬⅡ下位面で検出した。重複する遺構はないが，近接して６・41号土坑が存在する。遺構内堆積土は，９層に分層できた。上層のℓ１は基本土層第Ⅱ層に起因するが，中位～下位層は褐灰色を基調としている。ℓ４には炭化物が多く混入しており，中位層のℓ４・６・７からは木質遺物が比較的多く出土している。厚く堆積する最下層のℓ９は土質・層相等から判断して人為的堆積の様相を呈するが，壁際の崩落土と考えられるℓ３・８や木質遺物等を多く含む中位層（ℓ２～８）は自然堆積と判断している。

平面形は四隅がやや丸くなる比較的整った方形を呈する。規模は東西辺1.27ｍ，南北辺1.12ｍ

である。周壁は一部崩落し，オーバーハングしている部分もあるが，底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は基盤層であるＬＶ及びＬⅥ・Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で1.10ｍほどである。

本土坑内からは土師器片１点，木質遺物約25点，種子17点（モモ核）が出土しており，比較的遺存状態が良い19点について図31・32に掲載した。遺物の大半は中位層であるℓ４・６・７からの出土で，木質遺物の出土量が最も多い。図31－１はロクロ成形後のケズリ調整が施されており，土師器甕の胴部片と思われる。図31－２～14・図32は木質遺物である。図31－２は漆器椀の体部片で，内外面に黒色漆が施されている。木取りは縦木と思われ，材質はケヤキである。図31－４は形状から箸状製品，図31－５・11・12はやや薄手の箆状製品の欠損品で，図31－５の先端部は丸く加工されている。木取りは図31－５・12が板目，図31－11は柾目，材質はスギである。図31－６・10・13は棒状製品の欠損品，図32－４は先端部を鋭角に加工した杭状の製品と思われる。木取りは図31－13・図32－４は柾目，材質は図31－10・図32－４はスギ，図31－13はサワラである。図31－14・図32－１～３は板状製品である。図32－３は両面から面取りされ先端部が鋭角に加工されている。いずれも材質はスギで，木取りは図32－３が板目，他は柾目である。図31－７～９は枝切りした材をそのまま使用したもので，表皮が部分的に遺存している。先端部には炭化して焦げた痕跡が認められ，松明として使用された可能性がある。図32－５は角材を四方から面取り・加工した人形あるいは木偶の未製品であろうか。木取りは柾目，材質はコナラである。

本土坑は整った方形基調を呈し，他の検出された土坑と形態的に異なる。木質遺物・種子類の出土量も他の土坑と比して多く，性格的には分析結果等（付章参照）を勘案するとトイレ遺構である蓋然性は低く，ゴミ捨て穴の可能性が高いと考えている。機能時期については，年代を特定できる出土遺物に乏しいため，明確に判断することは難しいが，中世頃の所産と考えている。　　（井）

### 15号土坑　ＳＫ15（図18，写真17）

本土坑は調査区中央部の北側，Ｍ－21・22グリッドにまたがって位置する。検出面はＬＶ上面で，北側に10号土坑，南東側に16号土坑が近接するが重複関係はない。遺構内堆積土は５層に分けることができた。いずれも土質はシルトであるが，下層になるに従い粘性・締まりともに強くなっている。ℓ１～４は黒色を基調とする色相を呈する。ℓ１には明褐色シルトが約４割とかなり混じっており，ℓ２にも明褐色シルトが２㎝程度のブロック状になって混じっている。ℓ４には直径15㎝程の石が混入しており，焼け面を確認することができた。ℓ５は暗褐色粘性シルトであり，黄褐色とにぶい黄褐色の粘性シルトが斑状に混じっている。壁際が三角堆積を呈しており，またレンズ状に窪んでいる堆積状況から自然堆積の様相を呈する。

平面形は長軸1.03ｍ，短軸0.91ｍの隅丸方形を呈し，深さは0.34ｍを測る。底面は平坦で，周壁は検出面から約20㎝の深さまで急な角度で立ち上がり，その後緩やかな角度で拡がりながら検出面に向かっている。本土坑から遺物の出土はなく，所属時期及び性格は不明である。　（小笠原）

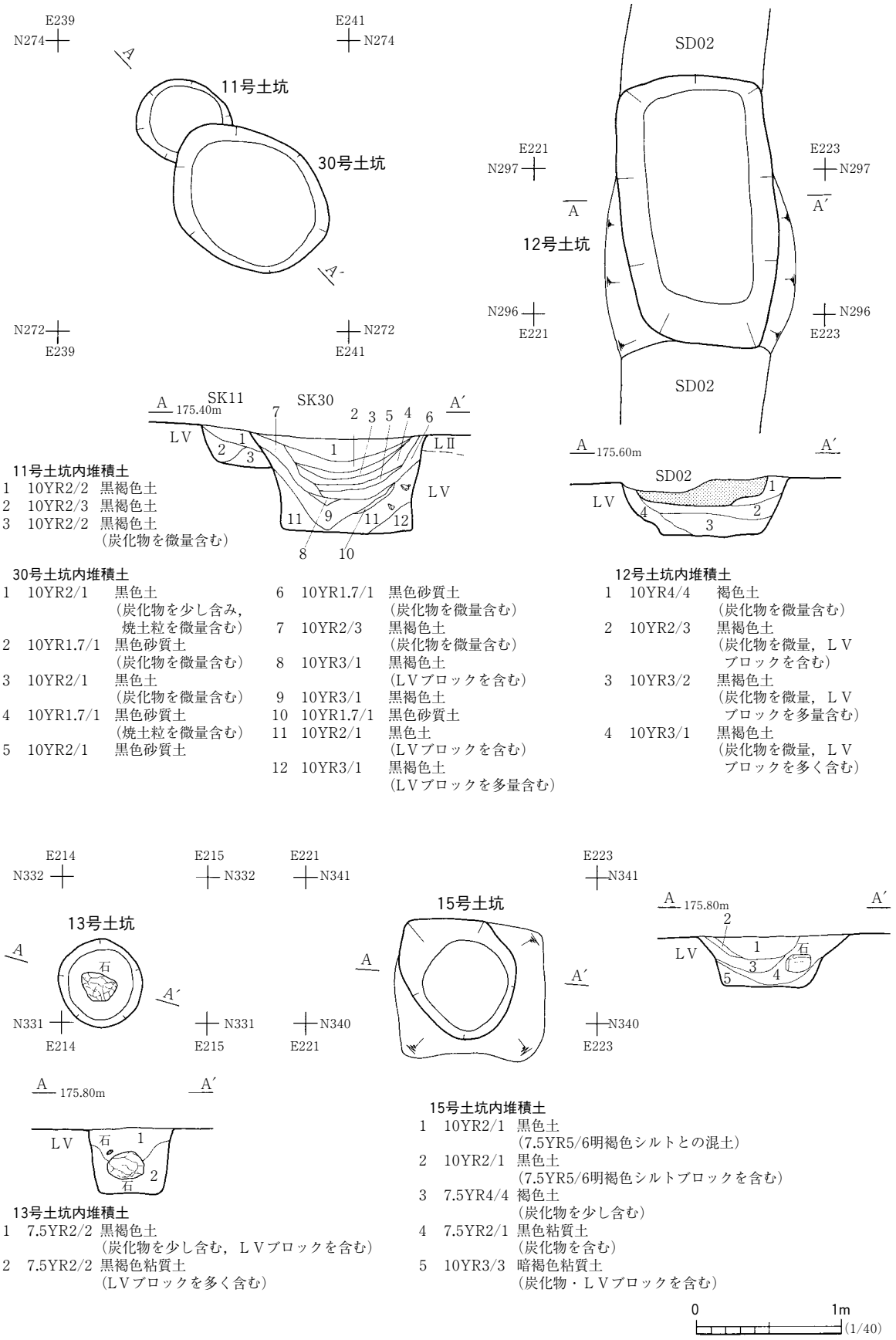



図18　11～13・15・30号土坑

### 16号土坑　ＳＫ16（図19・33，写真18・60・62）

本土坑は調査区中央のやや北側，Ｍ－21グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，南東へ緩やかに斜面する比較的平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して５・10・15号土坑が存在する。遺構内堆積土は５層に分層され，いずれも黒褐色系の粘質土を基調とする。最下層に厚く堆積したℓ５はＬＶブロックを多く混入し，人為堆積の様相を呈するが，上層のℓ１～４は西側からの自然流入土と判断される。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径1.08ｍを測る。周壁は上位で若干開口するが，底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で1.34ｍほどである。

本土坑内から出土した遺物は，土師器３点，須恵器10点，かわらけ４点，貿易陶磁器１点，中世陶器４点の総計22点である。このうち，遺存状態が良い５点について図33に掲載した。２は器表面が２次加熱を受け摩滅しているため，判然としないが須恵器杯の口縁部資料と思われる。１・４は中世陶器である。１は壺あるいは甕の胴部片で，外面に縄タタキの痕跡が認められる。４は粘土紐積み上げ後，ロクロ成形が施された内面素文の須恵系中世陶器鉢である。体部が直線的に外反する器形を呈し，口端部断面は角頭状である。底部切り離し技法は回転糸切りで，胎土は青灰色を基調とし，比較的緻密で白色鉱物細粒を含む。寸法は推定口径26.6㎝，底径10.7㎝，器高10.5㎝を測る。３は底部のみ遺存するかわらけの破片資料である。５は底部欠損の貿易陶磁器青磁碗である。直線的に外反する器形を呈し，推定口径16.5㎝を測る。内面には櫛書文が施され，釉は半透明な深い黄緑色を呈し，全面施釉されている。これらの資料は総じて12世紀後半から13世紀に比定される資料である。性格的には回虫卵が検出されたが明らかな消化残渣は認められず，分析結果を勘案するとトイレ遺構である蓋然性は低い（付章参照）。（井）

### 17号土坑　ＳＫ17（図19，写真18）

本土坑は調査区のほぼ中央，Ｍ－16グリッドに位置し，東側を２号溝跡が南北に流れている。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は単層で，黒褐色を基調とするが暗褐色土・黄褐色砂質土が斑状に混入する。薄い層のため，人為堆積か自然流入かは判断できなかった。

平面形は長径79㎝，短径69㎝の楕円形を呈し，深さは９㎝を測る。今回調査した土坑の中では非常に浅い方である。周壁の立ち上がりは緩く，底面との境は不明瞭である。断面形は皿状を呈する。

本土坑から遺物の出土がなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 18号土坑　ＳＫ18（図19，写真18）

本土坑は調査区のほぼ中央部，Ｎ－15・16グリッドにまたがって位置する。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は４層に分けることができた。ℓ１は黒褐色を呈

するが，褐色土・明褐色砂質土が斑状に混入する。ℓ２はℓ１と基本的に同層であるが，橙色粒が少量混入しておりℓ１よりやや締まりがある。ℓ３は褐色粘質土を基調とし，暗褐色土・灰黄褐色砂質土が斑状に混入する。ℓ４は褐灰色粘質土を基調とし，褐色土が斑状に混入する。土質からℓ１～３は人為堆積土，ℓ４は自然堆積と考えた。

平面形は長径1.08m，短径0.98mの円形を呈し，深さは最深部で0.87mを測る。底面は多少凹凸があり，周壁はほぼ直角に立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 19号土坑　ＳＫ19（図20・33，写真19）

本土坑は調査区のほぼ中央，Ｍ－14グリッドに位置し，東側に２号溝跡が近接する。検出面はＬＶ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は５層に分けることができた。ℓ１の土質はシルトであるが，ℓ２・３は粘性シルト，ℓ４はシルト質粘土，ℓ５は粘土と下層にいくに従い粘性・締まりが強くなる。ℓ１～３には炭化物及び赤褐色シルト塊等の異物が斑状に混入しており，人為堆積土と考えた。ℓ４・５は他の質のシルトや粘土がラミナ状に堆積しており，土質から自然堆積土と考えた。

平面形は長径0.75m，短径0.68mの円形を呈し，深さは1.16mを測る。底面はほぼ平坦で，周壁は急峻に立ち上がる。

本土坑から出土した遺物で図示できたのは，遺存状態が比較的良好であった土器片１点である。図33－６はロクロ成形による土師器甕の口縁部片と思われ，やや小型の器形を呈する。

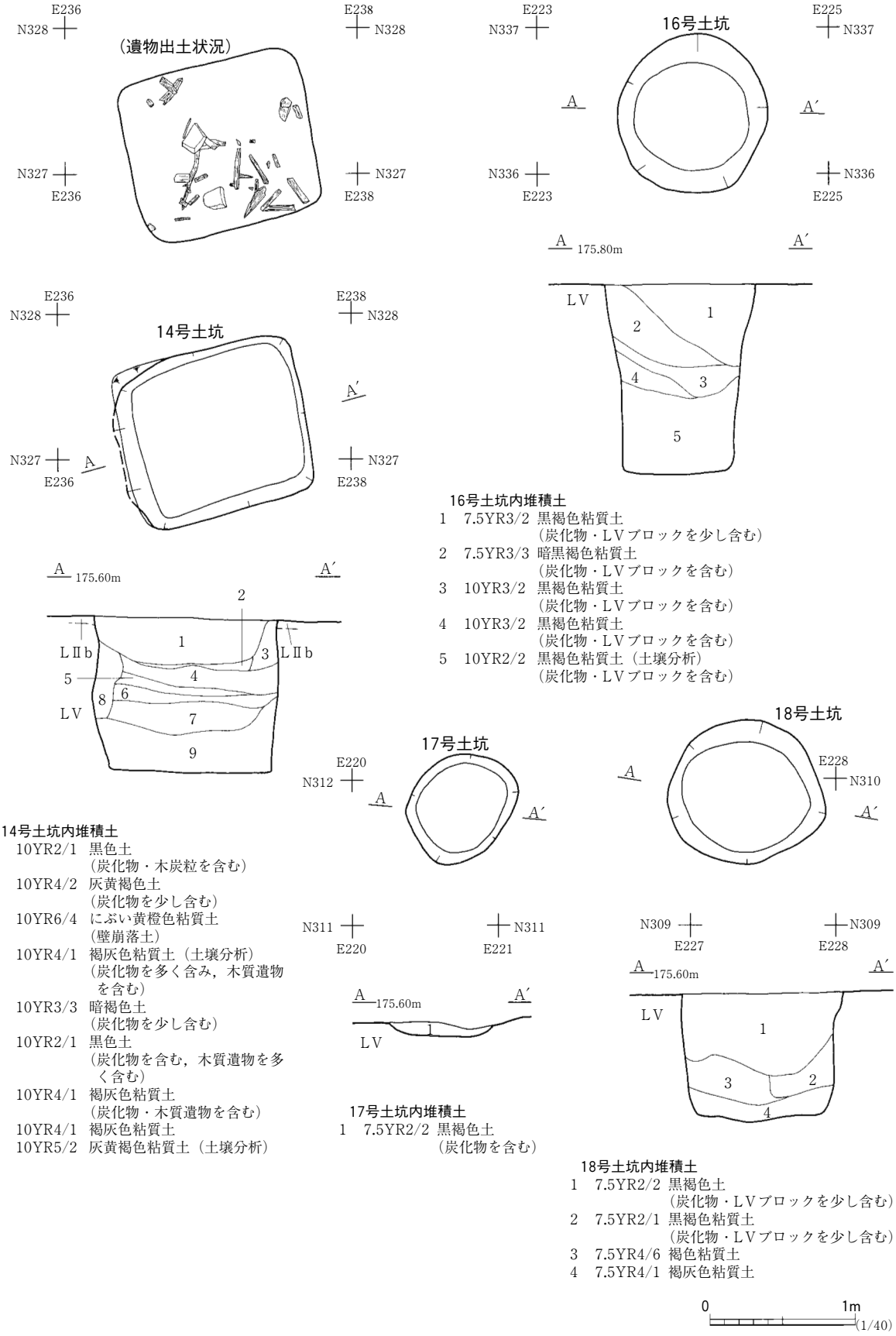
本土坑の所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 20号土坑　ＳＫ20（図20，写真19）

本土坑は調査区中央部の西側，Ｊ－14グリッドに位置する。検出面はＬⅡで，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は３層に分けることができ，いずれも黒を基調とした色相である。ℓ１はシルトであるが，ℓ２は粘性シルト，ℓ３は粘土と下層に行くに従い粘性が強くなる。ℓ１とℓ２は基本的に同層である。にぶい黄橙シルト・明黄橙シルトが斑状に混じり，0.2～５㎝大の礫が混じっている。この堆積状況は南側に位置する21号土坑の堆積状況と類似する。土質からすべて人為堆積土と考えた。

平面形は長径0.89m，短径0.80mの円形を呈し，深さは1.10mを測る。底面は平坦で，周壁は急峻に立ち上がっており，断面形はコップ状を呈する。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。しかし，形状や土質が隣接する21～23号土坑と類似することから，これらの土坑群と時期・機能を同一にする一連のものと判断している。（小笠原）




16号土坑内堆積土
1　7.5YR3/2 黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）
2　7.5YR3/3 暗黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）
3　10YR3/2 黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）
4　10YR3/2 黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）
5　10YR2/2 黒褐色粘質土（土壌分析）
（炭化物・ＬＶブロックを含む）



14号土坑内堆積土
1　10YR2/1 黒色土
（炭化物・木炭粒を含む）
2　10YR4/2 灰黄褐色土
（炭化物を少し含む）
3　10YR6/4 にぶい黄橙色粘質土
（壁崩落土）
4　10YR4/1 褐灰色粘質土（土壌分析）
（炭化物を多く含み，木質遺物を含む）
5　10YR3/3 暗褐色土
（炭化物を少し含む）
6　10YR2/1 黒色土
（炭化物を含む，木質遺物を多く含む）
7　10YR4/1 褐灰色粘質土
（炭化物・木質遺物を含む）
8　10YR4/1 褐灰色粘質土
9　10YR5/2 灰黄褐色粘質土（土壌分析）

17号土坑内堆積土
1　7.5YR2/2 黒褐色土
（炭化物を含む）

18号土坑内堆積土
1　7.5YR2/2 黒褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）
2　7.5YR2/1 黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）
3　7.5YR4/6 褐色粘質土
4　7.5YR4/1 褐灰色粘質土

0　1m
(1/40)

図19　14・16～18号土坑

### 21号土坑　ＳＫ21（図20，写真19）

本土坑は調査区中央部の西側，Ｊ－13グリッドに位置し，南側に６号溝跡が近接する。検出面はＬⅡ上面で，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は３層に分けることができたが，基本的に同層である。ℓ１・２は黒褐色粘性シルトであり，ℓ３は黒色シルト質粘土で，すべての層に0.2～２㎝大の礫が混じっている。特にℓ３の壁は礫層になっているためℓ３には多量の礫が混入していた。下層に行くに従い粘性・締まりが強くなる。20号土坑に土質が非常に類似しており，すべて人為堆積土と考えられる。

平面形は長径1.00ｍ，短径0.95ｍの円形を呈し，深さは1.18ｍを測る。底面は平坦で周壁は急峻に立ち上がる。

本土坑から木質遺物が出土したが，所属時期及び性格は不明である。しかし，形状・土質が類似する20号土坑とほぼ同時期に機能していた可能性が指摘できる。（小笠原）

### 22号土坑　ＳＫ22（図20・33，写真20・61）

本土坑は調査区中央部の西側，Ｊ－11・12グリッドに位置する。検出面はＬＶで，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は４層に分けることができ，いずれの層も黒色を基調とした粘質土である。ℓ１～３には炭化物粒が少量混じり，ℓ１には焼土粒，ℓ３からは20㎝大の礫が出土している。堆積状況からℓ４は自然堆積，他は人為堆積土と考えた。

平面形は長径1.49ｍ，短径1.27ｍの楕円形を呈し，深さは1.23ｍを測る。底面は凹凸があり，周壁は多少段をつけてオーバーハングしながらも，全体的には検出面へ軽く拡がるように立ち上がる。

本土坑から漆器椀・木質遺物が各１点出土している。図33－７はℓ３から出土した漆器椀で，口縁部と底部を欠損するが比較的遺存状態はよい。内外面に黒色漆が施され，材質はケヤキ，木取りは底が柾目となる横木取りと思われる。８は棒状木製品の欠損品と思われ，木取りは板目，材質はスギである。本土坑の明確な所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 23号土坑　ＳＫ23（図21・33，写真20・61）

本土坑は調査区中央のやや南西側，Ｋ－10・11グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して42・45号土坑が存在する。遺構内堆積土は４層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。最下層のℓ４は比較的厚く堆積し，上層のℓ１～３は中央部が窪むレンズ状の堆積状況を呈する。土質が均一で，ＬⅡに起因する堆積土と判断されることから，自然流入土と考えている。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径83㎝を測る。周壁は中位でやや開広するが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で76㎝ほどである。

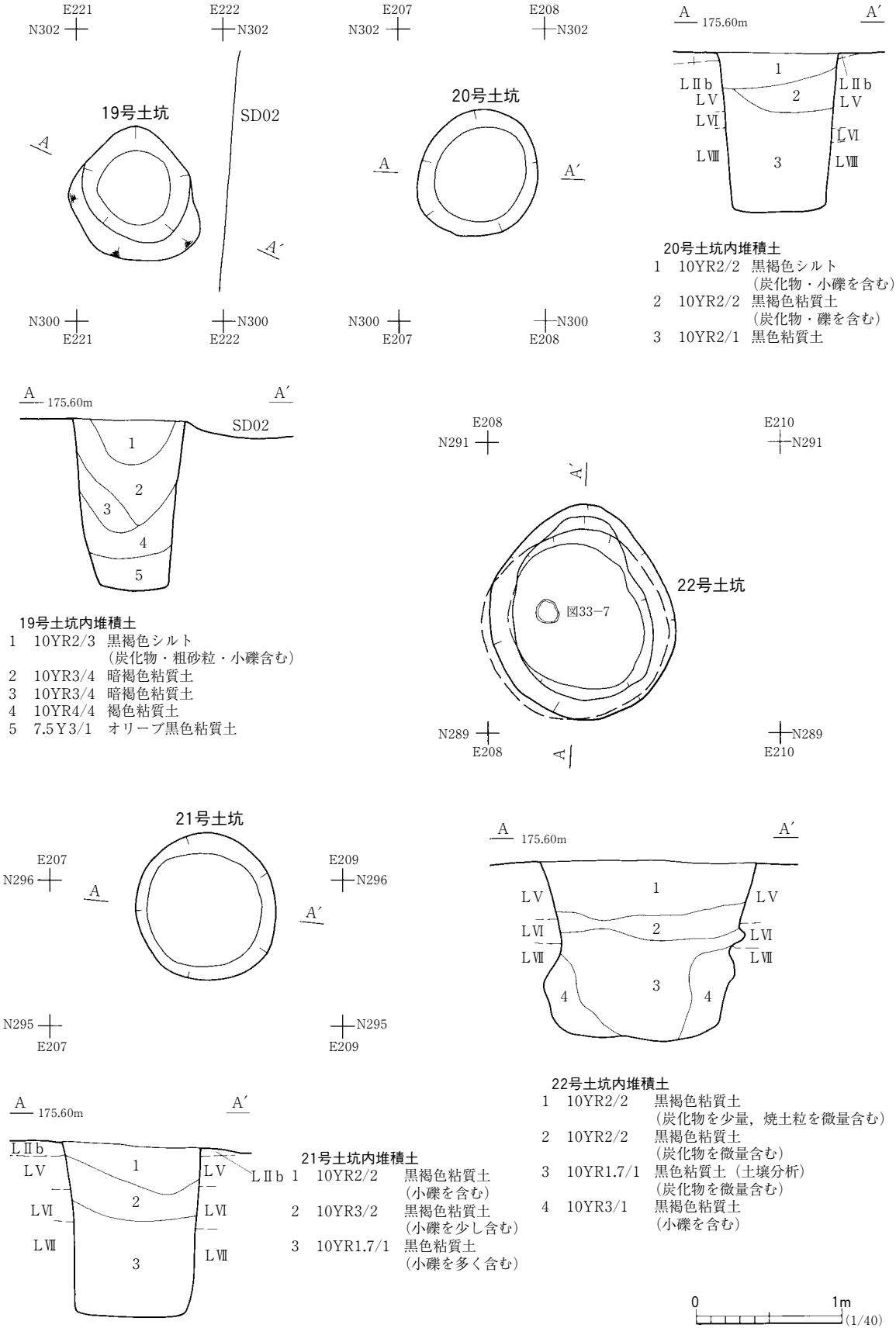

E221
N302
E222
N302
E207
N302
E208
N302
19号土坑
SD02
20号土坑
A
A′
N300
E221
N300
E222
N300
E207
N300
E208
175.60m
LⅡb
LⅤ
LⅥ
LⅧ
1
2
3
20号土坑内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色シルト
（炭化物・小礫を含む）
2　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物・礫を含む）
3　10YR2/1　黒色粘質土
4
5
19号土坑内堆積土
1　10YR2/3　黒褐色シルト
（炭化物・粗砂粒・小礫含む）
2　10YR3/4　暗褐色粘質土
3　10YR3/4　暗褐色粘質土
4　10YR4/4　褐色粘質土
5　7.5Y3/1　オリーブ黒色粘質土
E208
N291
E210
N291
22号土坑
図33−7
N289
E208
N289
E210
21号土坑
E207
N296
E209
N296
N295
E207
N295
E209
LⅦ
22号土坑内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を少量，焼土粒を微量含む）
2　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を微量含む）
3　10YR1.7/1　黒色粘質土（土壌分析）
（炭化物を微量含む）
4　10YR3/1　黒褐色粘質土
（小礫を含む）
21号土坑内堆積土
LⅡb 1　10YR2/2　黒褐色粘質土
（小礫を含む）
2　10YR3/2　黒褐色粘質土
（小礫を少し含む）
3　10YR1.7/1　黒色粘質土
（小礫を多く含む）
0
1m
(1/40)

図20　19～22号土坑

本土坑内から出土した遺物は，中世陶器６点である。全て同一個体であり，復元できた資料を図33に掲載した。図33－９は低平型の素文の片口鉢で，所謂捏ね鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり，口縁部でやや窄まって口端部が角頭状の器形を呈する。底部切り離し技法は静止糸切りで，色調は青灰色を呈し，胎土は比較的緻密で白色鉱物細粒を含む。寸法は推定口径25.1㎝，推定底径8.9㎝，器高9.6㎝，注口幅約３㎝を測る。16号土坑出土中世陶器鉢（図33－４）と寸法的に近似するが，色調・胎土・口縁部の形状等で若干異なる。

本土坑の性格は不明であるが，所属時期は出土遺物等から判断して中世前半期，12世紀～13世紀頃の所産と考えられる。（井）

### 24号土坑　ＳＫ24（図21・33，写真21・61・62）

本土坑は調査区中央の南西境，Ｍ－９グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して23・25・42号土坑が存在する。遺構内堆積土は８層に分層され，いずれも炭化物・焼土粒を混入する黒褐色系を基調としている。下層のℓ６は比較的厚く堆積するが，中央部が窪むレンズ状の堆積状況を呈することから，自然流入土と考えている。

平面形は不整楕円形を呈し，規模は長軸1.36ｍ，短軸1.14ｍを測る。周壁は中位でやや開広する部分もあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で93㎝ほどである。

本土坑内から出土した遺物はかわらけ１点，青磁１点，木質遺物が出土し，このうち遺存状態が良い２点について掲載した。図33－10は体部の屈曲が強く，碁笥底を呈する青磁の皿か碗と思われる。内面には櫛描文が施され，釉は半透明な深い緑色を呈し，全面施釉されている。11は棒状製品の未製品と思われ，木取りは板目，材質はスギである。

本土坑の性格は不明であるが，所属時期は出土遺物等から判断して中世前半期頃の所産と考えられる。（井）

### 25号土坑　ＳＫ25（図21，写真21）

本土坑は調査区中央の南西境，Ｍ－９グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して24・26号土坑，２号溝跡，１号建物跡等が存在する。遺構内堆積土は５層に分層され，いずれも炭化物を混入する暗褐色系を基調とする。下層のℓ２～５は壁際からの流入土や中央部がレンズ状に窪む堆積状況を呈することから自然流入土と考えているが，上層に厚く堆積するℓ１は人為的堆積と判断される。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径1.44ｍを測る。周壁は約70°ほどで立ち上がり，底面はＬＶ～Ⅵまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で78㎝ほどである。

本土坑内からは遺物は出土しておらず，明確な所属時期や性格は不明である。（井）

### 26号土坑　ＳＫ26（図21・33，写真21・61・62）

本土坑は調査区中央のやや南西側，Ｎ－９グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して１号建物跡，25・29号土坑が存在する。遺構内堆積土は11層に分層された。いずれも中央部が窪むレンズ状の堆積状況を呈し，土質が均一であることから，自然流入土と考えている。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径84㎝を測る。周壁は底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。底面中央には長径約75㎝ほどのピット状の窪みが認められた。深さは最深部で1.10ｍほどである。

本土坑内から出土した遺物は土師器底部１点，土製品１点，かわらけ１点，白磁１点の総計４点が出土し，うち遺存状態の良い３点について掲載した。図33－13は底部欠損のかわらけ小皿である。12は中世陶器の底部資料で，器厚が厚く，小型の短頸壺であろう。底部には静止糸切り痕が認められ，胎土等から珠洲系の製品の可能性がある。14は口縁部が直線的に外反する端反の白磁碗あるいは皿と思われる。内外面に半透明な深い白色系の釉が施釉されているが，体部下半は露胎となる。胎土は灰白色を呈し，緻密である。これらの資料は総じて12世紀中頃から13世紀に比定される資料である。（井）

### 27号土坑　ＳＫ27（図22・33，写真22）

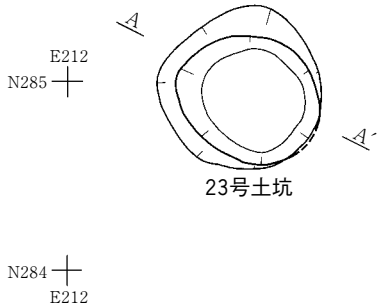
本土坑は調査区中央のやや南西側，Ｎ－11グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して１号建物跡や１号柱列跡，28号土坑，５号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は10層に分層され，いずれも黒褐色系の粘質土を基調とする。下層で壁側に堆積するℓ９・10や中央部が窪むレンズ状の堆積状況を呈する上層のℓ１～８から，自然流入土と考えられる。

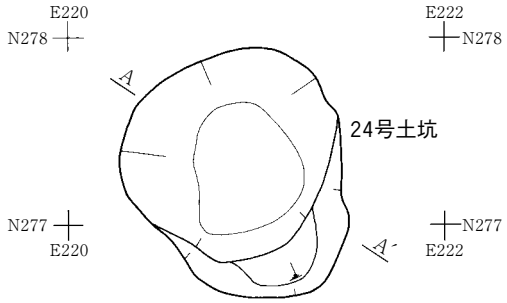
平面形は上端がほぼ円形，下端は隅丸方形を呈し，規模は開口部長径1.27ｍ，下端長軸0.61ｍ，短軸0.49ｍを測る。周壁は中位でやや開広し，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で94㎝ほどである。

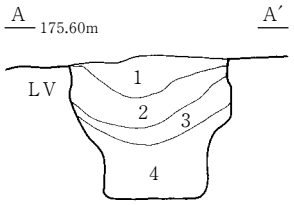
本土坑内から出土した遺物は，土師器８点，かわらけ６点の総計14点出土し，うち遺存状態が良い２点について掲載した。図33－15は小型のかわらけ口縁部片，16は形態的に柱状高台の破片資料と思われる。いずれも12世紀代に比定される資料であろう。（井）

### 28号土坑　ＳＫ28（図22，写真22）

本土坑は調査区中央のやや南西側，Ｏ－10グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して１号建物跡や１号柱列跡，27号土坑，５・15号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は４層に分層され，

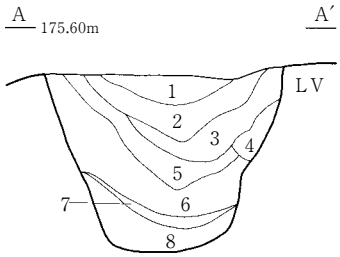


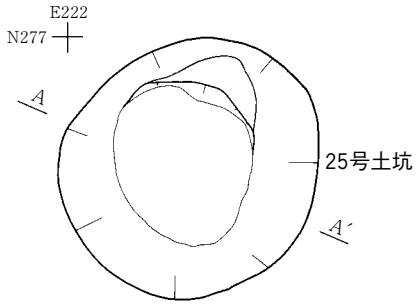

**23号土坑内堆積土**

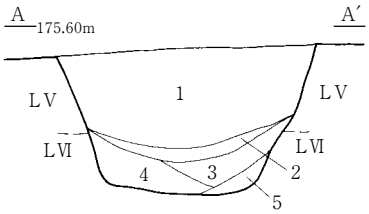
1　10YR2/2　黒褐色シルト
　　（粗砂粒を含む）
2　10YR2/1　黒色粘質土
3　10YR1.7/1　黒色粘質土
4　10YR2/3　黒褐色粘質土




**24号土坑内堆積土**

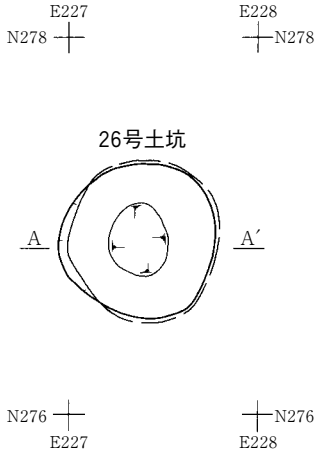
1　10YR2/3　黒褐色土
　　（炭化物を少量，焼土粒を微量含む）
2　10YR2/3　黒褐色土
　　（炭化物・焼土粒を微量含む）
3　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物・焼土粒を微量含む）
4　10YR3/3　暗褐色土
　　（炭化物・小礫を含む）
5　10YR3/1　黒褐色砂質土
　　（炭化物・焼土粒を微量含む）
6　10YR2/3　黒褐色土
　　（炭化物・焼土粒を微量含む）
7　10YR2/1　黒色土
　　（炭化物を含む）
8　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物を微量含む）

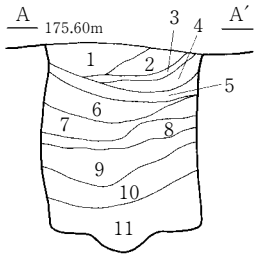



**25号土坑内堆積土**

1　10YR3/3　暗褐色土
　　（炭化物を少量含む）
2　10YR2/1　黒色土
　　（炭化物を含む）
3　10YR3/3　暗褐色土
　　（炭化物を少量含む）
4　10YR2/3　黒褐色土
　　（炭化物を少量含む）
5　10YR3/4　暗褐色土
　　（炭化物・ＬＶブロックを含む）




**26号土坑内堆積土**

1　2.5Y3/2　黒褐色粘質土
2　2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質土
3　2.5Y3/1　黒褐色粘質土
4　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土
5　2.5Y2/1　黒色粘質土
6　2.5Y4/1　黄灰色土
7　2.5Y5/3　黄褐色砂質土
8　2.5Y3/2　黒褐色土
9　10YR3/3　暗褐色粘質土
10　5YR2/2　オリーブ黒色粘質土（グライ化層）
11　10GY2/1　緑黒色粘質土（グライ化層）

0　1m
(1/40)

図21　23～26号土坑

上層のℓ１はにぶい黄褐色土，下層のℓ２～４はいずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。下層のℓ２～４は壁側からの堆積等が観察され自然流入土と考えられるが，上層の厚く堆積するℓ１は土質等から人為的堆積土の可能性が高いと判断している。

平面形は不整楕円形基調を呈し，規模は長径1.17ｍ，短径1.03ｍを測る。周壁は底面からほぼ垂直気味に立ち上がり，深さは最深部で65㎝ほどである。底面はＬⅥまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。

本遺構からは出土遺物がないため，明確な時期・性格等は不明である。（井）

### 29号土坑　ＳＫ29（図22，写真22）

本土坑は調査区中央のやや南西側，Ｏ・Ｐ－８・９グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦な立地を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して１号建物跡や11・26・30号土坑，５・14号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は単層で，基盤層であるＬ･ブロック・炭化物を含む土質であることから，人為的堆積と考えられる。

平面形はほぼ円形基調を呈し，規模は長径85㎝を測る。周壁は底面からほぼ垂直気味に立ち上がり，深さは最深部で58㎝ほどである。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦である。

本遺構からは出土遺物がないため，明確な時期・性格等は不明である。（井）

### 30号土坑　ＳＫ30（図18，写真22）

本土坑は調査区中央南側，Ｐ・Ｑ－８グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺はやや南側へ緩傾斜する地点で，近接して29･31号土坑，20号溝跡等が存在する。検出面はＬⅡ及び基盤層であるＬ･上面である。11号土坑と重複し，本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は12層に分層され，炭化物・ＬＶブロック等を含む黒褐色系の粘質土を基調とする。壁側に堆積する下層のℓ11･12や，中央部がレンズ状に窪む堆積状況（ℓ１～10）を呈することから，自然流入土と考えられる。

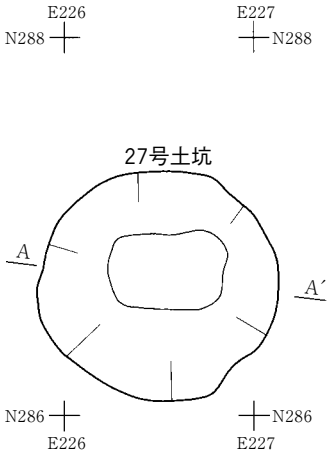
平面形は不整楕円形を呈し，規模は長軸58㎝，短軸46㎝を測る。周壁は南側はほぼ垂直に立ち上がるが，北西側は中位からやや開口する。深さは最深部で64㎝を測り，底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られ，ほぼ平坦である。

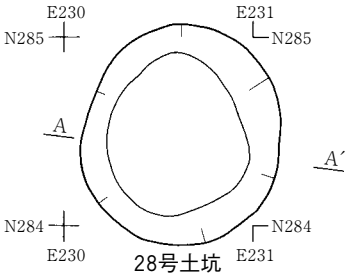
本土坑内からは土器・陶磁器類が５点出土しているが，遺存状態が悪く，砕片であるため図示できなかった。

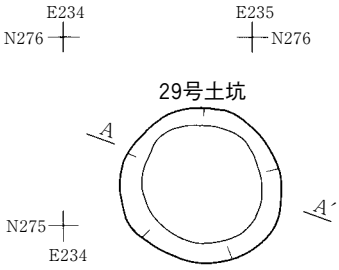
本遺構の明確な所属時期および性格は不明であるが，31号土坑と平面形・規模等が類似し，31・32号土坑と直線的に等間隔の配置を呈している。（井）

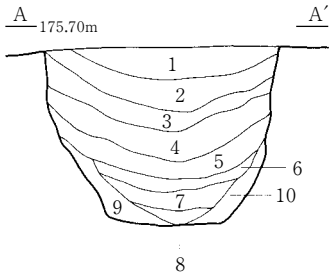
### 31号土坑　ＳＫ31（図22，写真23）

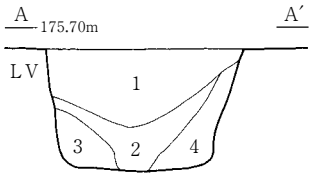
本土坑は調査区南西側，Ｑ－７グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺はやや南側へ緩傾斜する地点で，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して30・32号土坑，

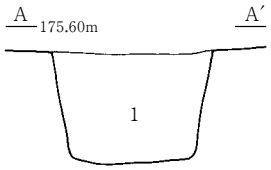



**28号土坑内堆積土**

1　10YR4/3　にぶい黄褐色土
　　（炭化物を少し含む）
2　10YR3/2　黒褐色土
3　10YR3/4　暗褐色土
4　10YR2/1　黒色土
　　（ＬＶブロックを多く含む）

**29号土坑内堆積土**

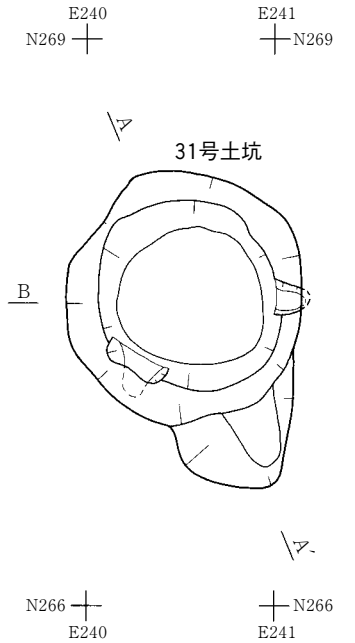
1　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）

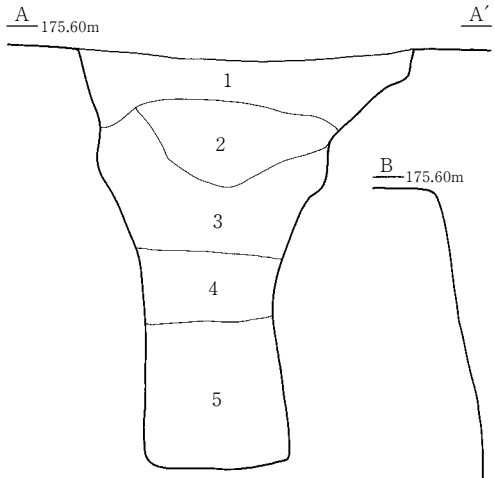
**27号土坑内堆積土**

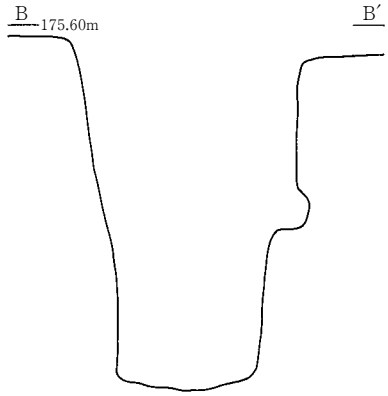
1　10YR4/4　褐色粘質土
2　10YR3/4　暗褐色粘質土
　　（炭化物を微量含む）
3　10YR3/3　暗褐色粘質土
　　（焼土粒を微量含む）
4　10YR3/2　黒褐色粘質土
　　（焼土粒を少量含む）
5　10YR3/3　暗褐色粘質土
　　（ＬＶブロックを少し含む）
6　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
7　10YR2/3　黒褐色粘質土
8　10YR4/1　褐灰色粘質土
9　10YR2/1　黒色土
10　10YR2/1　黒色土

**31号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物・小礫を含む）
2　7.5YR2/1　黒色粘質土
　　（炭化物・ＬＶブロック・小礫を含む）
3　10YR2/1　黒色粘土
　　（炭化物・ＬＶブロック・小礫を含む）
4　10YR2/1　黒色粘土（土壌分析）
　　（炭化物・木質遺物を含む）
5　10YR1.7/1　黒色粘質土
　　（ＬＶブロック・小礫を含む）




0　1m
(1/40)

図22　27～29・31号土坑

14・20号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は5層に分層され，いずれもＬＶブロックを含む黒褐色系の粘質土を基調とする。土質が均一で，ほぼ水平堆積を呈することから，人為的堆積の可能性が高いと考えている。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は長径1.79ｍを測る。周壁は中位でやや開広し，20㎝ほどの横孔が2箇所認められた。底面はＬＶ～Ⅶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で2.16ｍである。

本土坑内からは土師器片1点が出土しているが，遺存状態が悪く，砕片であるため図示しなかった。分析結果を勘案するとトイレ遺構である蓋然性は低く（付章参照），井戸状遺構の可能性が考えられる。（井）

### 32号土坑　ＳＫ32（図23・33，写真23・62）

本土坑は調査区南西側，Ｐ－6グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺はやや南側へ緩傾斜する地点で，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して31・35・46号土坑，20号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は9層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。最上層のℓ1は比較的厚く堆積し，中央部がレンズ状に窪む堆積状況を呈することから，自然流入土と考えている。

平面形は隅丸方形に近い不整楕円形を呈し，規模は長軸77㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。底面はＬⅥまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で75㎝ほどである。

本土坑内からは土師器片8点，かわらけ5点，白磁1点，種実3点（モモ核）の総計17点出土し，うち遺存状態が良い白磁1点について掲載した。図33－17は推定口径16.8㎝程の玉縁口縁を呈する白磁碗と思われる。内面2次被熱を受け釉薬が溶けているが，43号土坑（図34－14）・12号溝跡（図45－７）・遺構外（図87－16）出土白磁と類似する資料である。12世紀後半～13世紀頃に比定される資料と思われる。（井）

### 33号土坑　ＳＫ33（図23・34，写真23・63）

本土坑は調査区南西側，Ｎ・Ｏ－６グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺はやや南側へ緩傾斜する地点で，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して32・34号土坑，14・20号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は大きく8層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。下層のℓ6～8は比較的厚く堆積し，上層のℓ1～5は中央部がレンズ状に窪む堆積状況を呈することから，前者は人為的，後者は自然的要因による堆積土と考える。

平面形は不整楕円形を呈し，規模は長径1.60ｍを測る。周壁は中位でやや開広するが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬⅥまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で1.41ｍほどである。

本土坑内から出土した遺物は土師器片46点，かわらけ14点，硯１点の総計61点が出土した。検出された土坑のうち最も多くの遺物が出土しており，６点について掲載した。図34－１・２・４～８は土師器片，３はかわらけ片，９は硯である。１・２は底部欠損の土師器杯で，１の体部下端には回転ヘラケズリ再調整が認められる。４～６はロクロ成形による土師器甕の口縁部片で，いずれも頸部が「く」字状に屈曲し，口縁部がやや厚くなり端部が上方に摘み上げられている。７はロクロ成形による土師器甕の胴部片，８は底部片である。７・８の外面にはタタキ痕が観察される。３はやや器厚が厚いかわらけの口縁部片と思われる。９は小型の硯で，陸部分には使用した擦痕跡が観察され，浅い海部分とともに部分的に墨痕が遺存している。寸法は長さ9.3㎝，幅5.9㎝，厚さ2.5㎝，重さ225.0ｇである。石質は菫青石ホルンフェルスである。（井）

### 34号土坑　ＳＫ34（図23，写真24）

本土坑は調査区中央部の南側，Ｏ－７グリッドにあり，南東部には14号溝跡が所在しており，ピット群（地点３）の南側に位置する。検出面はＬＶで他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は基本的には同じ質であるが７層に分けることができた。いずれの層も黒色を基調とし，ℓ５・６は砂質シルトであり他の層は粘質シルトである。ℓ１には焼土及び炭化物が少量混じっており，ℓ２～７には酸化マンガンが少量混じっている。いずれの層もレンズ状に窪んでいる堆積状況から自然堆積土と考えられる。

平面形は長径0.84ｍ，短径0.70ｍの楕円形を呈し，深さは1.01ｍを測る。底面はほぼ平坦であり，周壁は検出面へ向けて急峻に立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 35号土坑　ＳＫ35（図23，写真24）

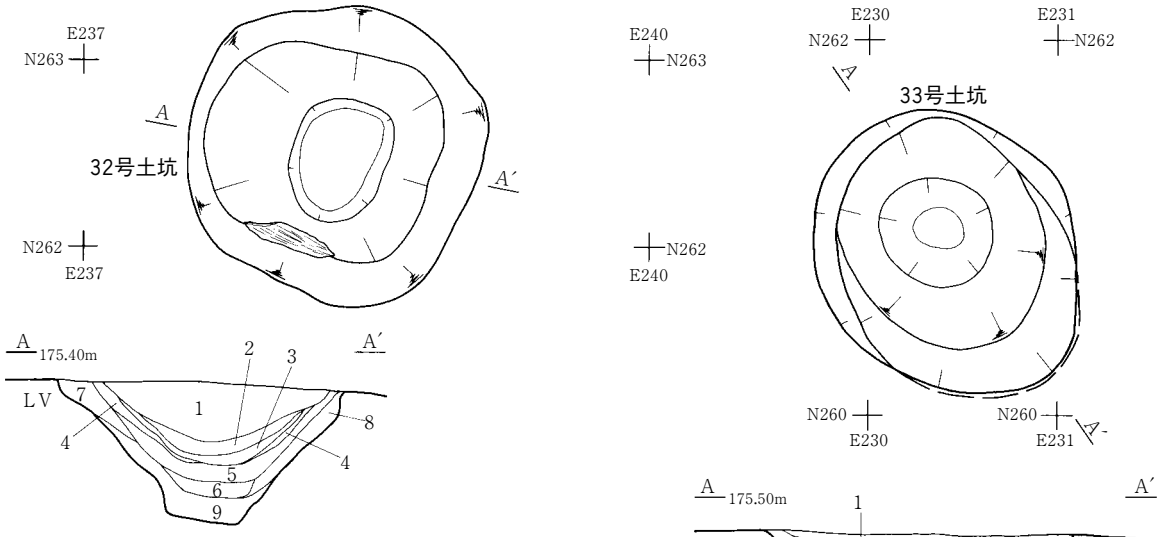
本土坑は調査区中央部の南側，Ｑ・Ｒ－６グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅡｂで，南東側で13号溝跡と重複しており，13号溝跡に切られているため本土坑の方が古い。遺構内堆積土は６層に分けられる。いずれの層も黒色を基調とする粘質シルトで，強湿グライ化している。堆積状況からℓ１～５は自然堆積土，ℓ６は人為堆積土と考えられる。

平面形は直径78㎝の円形を呈し，深さは88㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが西側に向けて低く傾いている。周壁は底面からややオーバーハングしながら中段で軽く窄まっており，さらに検出面へ向かって軽く開きぎみに立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 36号土坑　ＳＫ36（図24，写真24）

本土坑は調査区中央部の南東側，Ｑ－11グリッドに位置する。検出面はＬⅢとした暗褐色粘質土の上面で，北側に39号土坑が近接しているが重複関係はない。遺構内堆積土は２層に分けることが

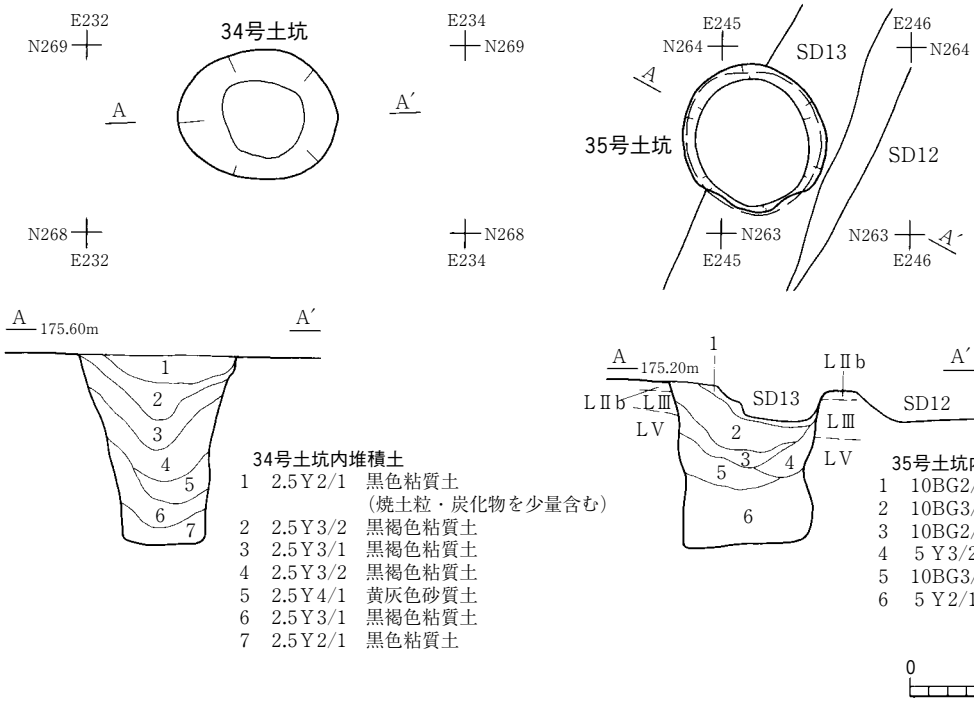



**32号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色土
（焼土粒・炭化物を少し含む）
2　10YR2/1　黒色砂質土
（焼土粒を微量含む）
3　10YR1.7/1　黒色砂質土
4　10YR2/1　黒色土
（焼土粒を微量含む）
5　10YR1.7/1　黒色砂質土
（ＬＶブロックを含む）
6　10YR1.7/1　黒色土
7　10YR2/2　黒褐色土
8　10YR2/2　黒褐色土
（ＬＶブロックを含む）
9　10YR2/1　黒色土
（ＬＶブロックを少し含む）

**33号土坑内堆積土**

1　10YR3/4　暗褐色土
（炭化物を少し含む）
2　10YR2/3　黒褐色土
（炭化物を微量含む）
3a　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を含む）
3b　10YR4/4　褐色土
3c　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を少し含む）
3d　10YR4/4　褐色土
（炭化物を含む）
3e　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を少し含む）
4　10YR2/3　黒褐色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）
5　10YR4/4　褐色粘質土
（炭化物を含む）
6　10YR5/8　黄褐色粘質土
7　10YR2/1　黒色粘質土
8　10YR5/6　黄褐色粘質土




**34号土坑内堆積土**

1　2.5Ｙ2/1　黒色粘質土
（焼土粒・炭化物を少量含む）
2　2.5Ｙ3/2　黒褐色粘質土
3　2.5Ｙ3/1　黒褐色粘質土
4　2.5Ｙ3/2　黒褐色粘質土
5　2.5Ｙ4/1　黄灰色砂質土
6　2.5Ｙ3/1　黒褐色粘質土
7　2.5Ｙ2/1　黒色粘質土

**35号土坑内堆積土**

1　10BG2/1　青黒色粘質土
2　10BG3/1　暗青灰色粘質土
3　10BG2/1　青黒色粘質土
4　５Ｙ3/2　オリーブ黒色粘質土
5　10BG3/1　暗青灰色粘質土
6　５Ｙ2/1　黒色粘質土

0　1m
(1/40)

図23　32～35号土坑

できる。ℓ１は炭化物や３㎝大の礫が混入する黒色粘性シルトで，ℓ２は黄褐色粘性シルトが斑状に混入する黒褐色粘性シルトである。堆積状況から２層とも自然堆積土と考える。

平面形は長径83㎝，短径77㎝の円形を呈している。底面は凹凸があり，深さは西側で最深となり13㎝を測る。周壁と底面との明瞭な境はなく，底面から検出面に向けて緩やかな角度で立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 37号土坑　ＳＫ37（図24・34，写真24）

本土坑は調査区中央部の東側，Ｓ－13グリッドに位置する。検出面はＬⅢで周辺に遺構はない。遺構内堆積土は３層に分けられる。いずれの層も黒色を基調とするシルトで，下層へ行くに従い粘性は強くなる。堆積状況と混入物の少ない土質からすべて自然堆積土と考える。

平面形は長軸87㎝，短軸80㎝の隅丸方形を呈し，深さは23㎝を測る。底面は平坦で，周壁は急峻に検出面まで立ち上がっている。

本土坑からは須恵器片が１点出土している。図34－10は須恵器甕の胴部片で，外面にタタキ痕，内面はナデ調整によってアテ具痕が消されている。

本土坑の所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 38号土坑　ＳＫ38（図24，写真25）

本土坑は調査区中央部の東側，Ｒ－16グリッドに位置する。検出面はＬⅢで周辺に遺構はない。遺構内堆積土は黒色粘性シルトの単層で，褐色のシルトと灰色の粘土が斑状に混じっている。堆積土が浅いため，人為堆積か自然流入かは判断できなかった。

平面形は長径86㎝，短径77㎝の円形を呈し，深さは９㎝を測る。底面は凹凸があり，周壁は底面から緩やかに立ち上がる。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 39号土坑　ＳＫ39（図24・34，写真25・61）

本土坑は調査区中央部の南東側，Ｑ－11・12グリッドにまたがって位置する。検出面はＬⅡｂで，南側に36号土坑が近接するが重複関係はない。遺構内堆積土は４層に分けることができた。すべて黒色を基調とする粘質土である。ℓ１～３は底部中心に向けレンズ状に窪んでおり，ℓ４は周壁に三角堆積の様相を呈する。堆積状況からすべて自然堆積土と考える。

平面形は長径1.53ｍ，短径1.40ｍの円形を呈し，深さは最深部で0.75ｍを測る。底面は中心部が窪んでおり，周壁に向かうに従い緩やかに立ち上がっている。周壁低部が最大幅になっており，検出面に向かって軽く窄まった後，さらに拡がりを見せ立ち上がっている。

本土坑から出土した遺物で図示できたのは木質遺物１点のみである。図34－11は先端部が加工さ

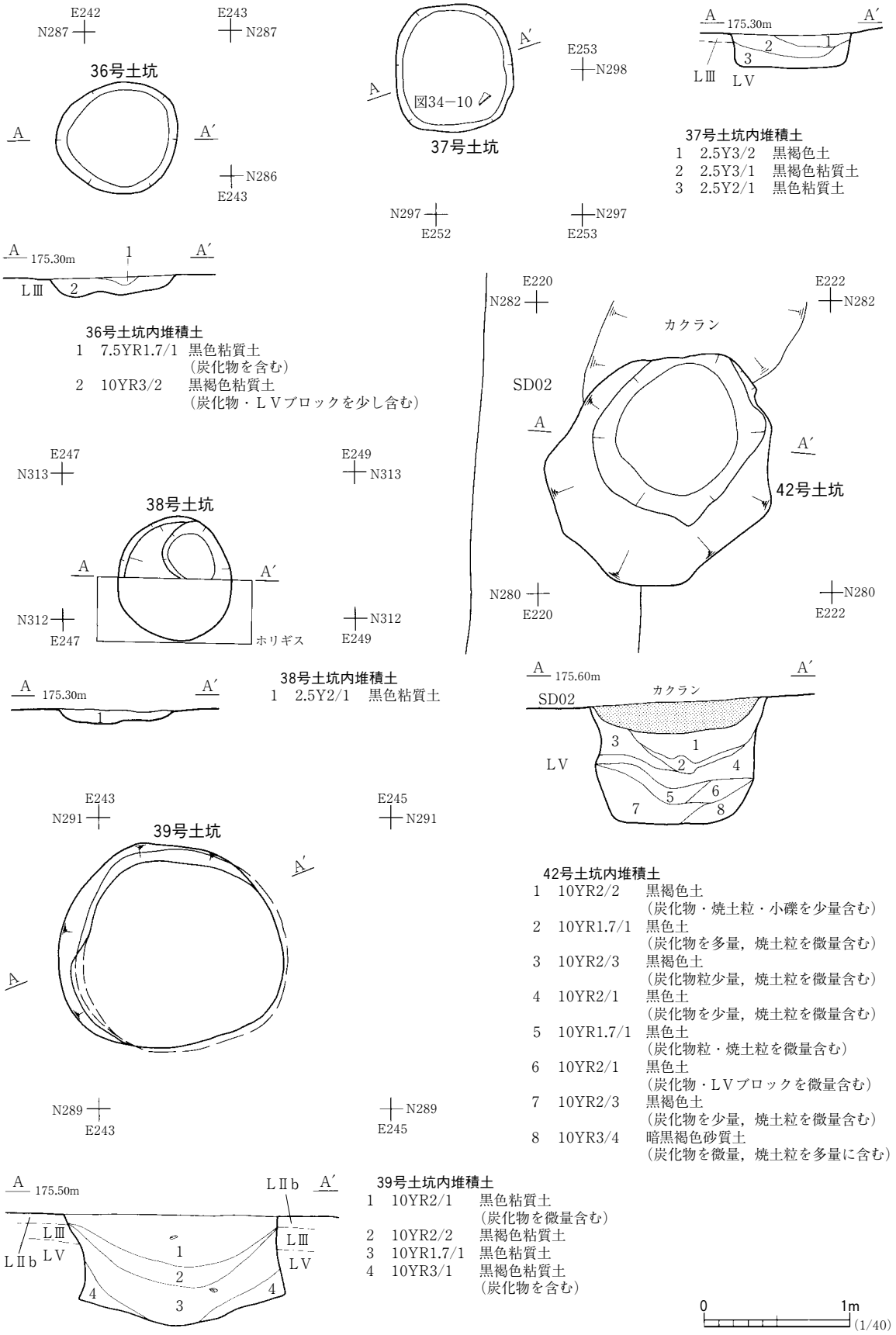



図24　36～39・42号土坑

れた用途不明の板状木製品の欠損品で，木取りは柾目，材質はスギである。

本遺構の所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 40号土坑　ＳＫ40（図25，写真25）

本土坑は調査区中央部の西側，Ｊ－16グリッドに位置する。検出面はＬＶ上面で東側に３号溝跡が近接するが重複関係はない。遺構内堆積土は３層に分けることができた。いずれの層も黒色を基調とし，ℓ１には炭化物粒を微量確認できた。ℓ２には褐色土粒が混じり，ℓ３には灰黄褐色粘土塊が微量混じり粘性は強い。混入物の少ない堆積状況からすべて自然堆積土と考える。

平面形は長径54㎝，短径52㎝の円形に近い不整形を呈し，深さは43㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁は底面から緩やかなカーブを描いた後，急峻に検出面まで立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 41号土坑　ＳＫ41（図25，写真25）

本土坑は調査区中央部の北側，Ｏ－19グリッドに位置する。検出面はＬＶで，重複する遺構はないが，東側に６号土坑が近接する。遺構内堆積土は４層に分けることができた。ℓ１はにぶい黄褐色シルト，ℓ２・３は暗褐色系の同質の粘性シルトである。ℓ４はにぶい黄褐色粘性シルトであり，下層に行くに従い粘性・締まりが強くなる。いずれの層にも黄褐色や黒色・灰白色のシルト塊が斑状に混じっているが，特にℓ１には多く混入している。土質からℓ１は人為堆積土，ℓ２～４は壁側の三角堆積と中央部が窪んでいるレンズ状の堆積状況から自然堆積土と考えた。

平面形は直径70㎝のよく整った円形を呈し，深さは29㎝を測る。底面は中央から西側ではほぼ平坦であるが，東側では周壁に向かい緩やかに立ち上がっている。周壁は東側ではほぼ直角に立ち上がり，西側では急峻に立ち上がっている。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 42号土坑　ＳＫ42（図24・34，写真26）

本土坑は調査区中央部よりやや北側，Ｍ－10グリッドに位置し，検出面はＬＶである。重複関係は，２号溝跡を切っているため本土坑の方が新しい。また検出面から20㎝程撹乱を受けている。遺構内堆積土は８層に分けることができた。ℓ１～７は黒色を基調とするシルトでいずれの層にも炭化物粒・焼土粒が混入していた。基本的には同質のものである。ℓ８は暗褐色砂質土で炭化物粒は微量だが，焼け面が確認できた層でもあることから焼土粒は多量含まれていた。堆積状況からすべて自然堆積土と考えた。

平面形は長径1.71ｍ，短径1.45ｍの不整形を呈するが，調査中，長雨で検出面が多少崩れてしまったため楕円形もしくは隅丸方形だった可能性がある。深さは84㎝を測る。底面はほぼ平坦で，東側では周壁にかけ焼け面を確認することができた。周壁は底面からオーバーハングしながら立

ち上がった後軽く窄まり，その後やや拡がりを見せ検出面へ向かっている。断面形はほぼ左右対称になっている。

本土坑から須恵器片１点が出土しているが，所属時期及び性格は不明である。　　（小笠原）

### 43号土坑　ＳＫ43（図25・34，写真26・62・64）

本土坑は調査区のほぼ中央，Ｍ・Ｎ－16グリッドにまたがって位置し，検出面はＬＶである。重複関係は西側に位置する２号溝跡を切っているため本土坑のほうが新しい。遺構内堆積土は13層に分けることができた。暗褐色・灰色・黄褐色を基調とするシルトが交互に堆積する様相を呈し，下層に行くに従い粘性が強くなっている。ℓ２・３・７・８には灰白色粘土塊が混入しており，ℓ７には約20％，ℓ８には約50％確認できた。堆積状況及び土質からℓ７・８は人為堆積土の可能性が高いと考えた。

平面形は長径2.15ｍ，短径2.01ｍの円形を呈し，深さは0.69ｍを測る。底面は２段で最深部は60㎝程の幅でほぼ平坦である。西側は15㎝程高くなっており，40㎝程の幅でほぼ平坦である。

本土坑からは，白磁１点とその他土器片８点，木製品１点が出土し，うち遺存状態の比較的良い２点について掲載した。図34－13は器壁が薄い底部片である。底部は回転糸切り無調整であるが，内面の調整は摩滅が著しいため判然としない。14は推定口径16.8㎝程の玉縁口縁を呈する白磁碗の口縁部片で，外面の体部下半は露胎を呈する。15は板状製品の欠損品と思われ，木取りは板目，材質はスギである。

本土坑の性格は不明であるが，所属時期は出土した白磁や土器の特徴から，中世頃の所産と思われる。　　（小笠原）

### 44号土坑　ＳＫ44（図25，写真26）

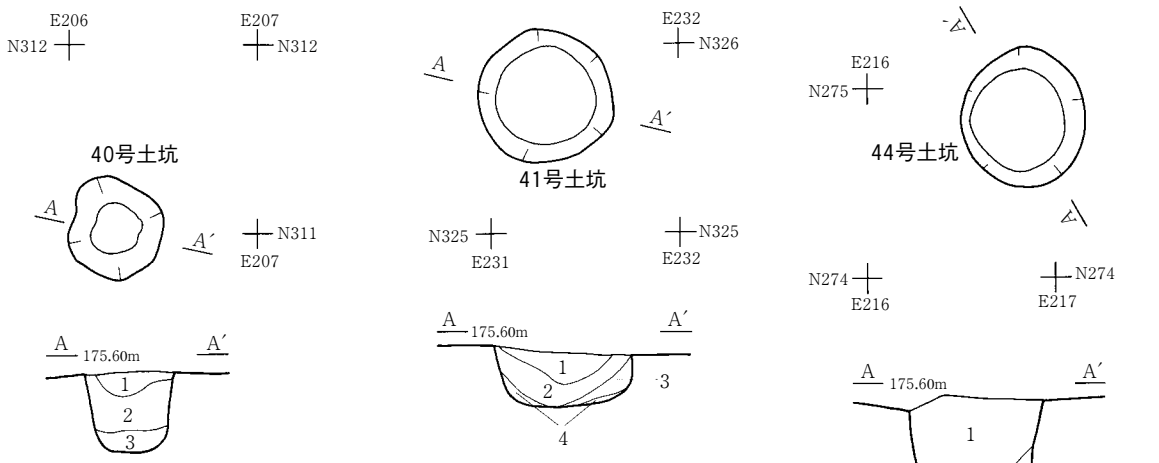
本土坑は調査区中央部の南側，Ｌ－８・９グリッドにまたがって位置しており，検出面はＬＶである。東側に２号溝跡が近接するが重複関係はない。遺構内堆積土は２層に分けることができた。ℓ１は炭化物や褐色・黄褐色シルトが斑状に混入する黒褐色シルトであり，ℓ２は黄褐色粘性シルトが斑状に混入する粘性シルトである。土質から２層とも一気に埋め戻した可能性が高く，人為堆積土と思われる。

平面形は長径74㎝，短径65㎝の楕円形を呈し，深さは58㎝を測る。底面はほぼ平坦で，周壁から検出面に向けて急峻に立ち上がっている。

本土坑から土師器片４点が出土しているが，所属年代および性格は不明である。　　（小笠原）

### 45号土坑　ＳＫ45（図25，写真26）

本土坑は調査区中央部の南西側，Ｊ－11グリッドに位置しており，検出面はＬＶである。すぐ西側が調査区外になっており，他遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は，どの層も粘性・締まり




**40号土坑内堆積土**

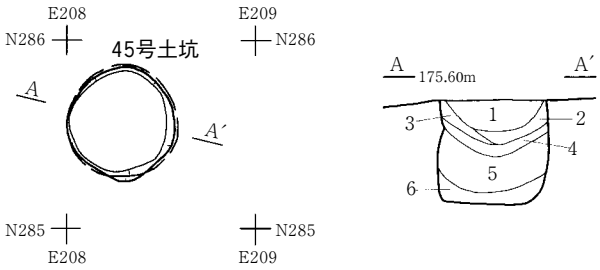
1　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物を微量含む）
2　10YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物を微量含む）
3　10YR2/1　黒色土

**41号土坑内堆積土**

1　10YR6/4　にぶい黄橙色土
　　（炭化物を含む）
2　10YR3/3　暗褐色粘質土
3　7.5YR4/4　褐色粘質土
4　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土

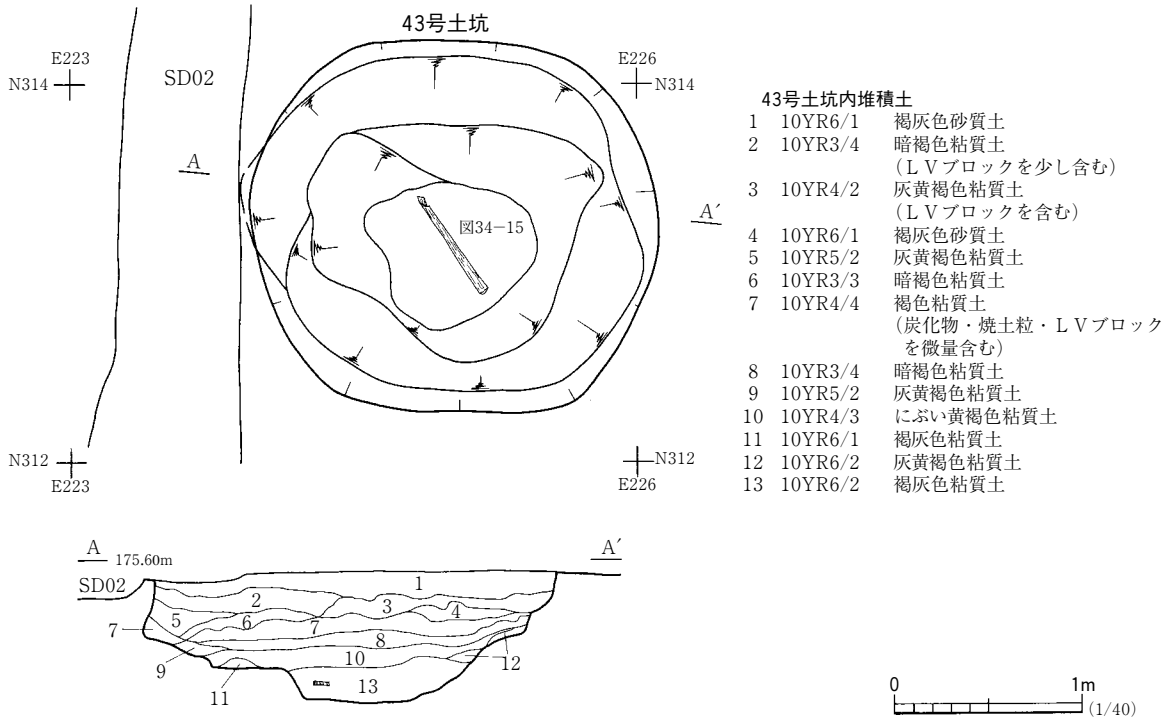
**44号土坑内堆積土**

1　7.5YR2/2　黒褐色土
　　（炭化物を少し含む）
2　7.5YR4/6　褐色粘質土




**45号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色粘質土
2　10YR3/4　暗褐色粘質土
3　10YR4/2　灰黄褐色粘質土
4　10YR2/3　黒褐色粘質土
5　10YR3/4　暗褐色粘質土
6　10YR2/1　黒色粘質土




**43号土坑内堆積土**

1　10YR6/1　　褐灰色砂質土
2　10YR3/4　　暗褐色粘質土
　　（ＬＶブロックを少し含む）
3　10YR4/2　　灰黄褐色粘質土
　　（ＬＶブロックを含む）
4　10YR6/1　　褐灰色砂質土
5　10YR5/2　　灰黄褐色粘質土
6　10YR3/3　　暗褐色粘質土
7　10YR4/4　　褐色粘質土
　　（炭化物・焼土粒・ＬＶブロック
　　を微量含む）
8　10YR3/4　　暗褐色粘質土
9　10YR5/2　　灰黄褐色粘質土
10　10YR4/3　　にぶい黄褐色粘質土
11　10YR6/1　　褐灰色粘質土
12　10YR6/2　　灰黄褐色粘質土
13　10YR6/2　　褐灰色粘質土

図25　40・41・43～45号土坑

が強いシルトで基本的には同じ土質であり，違う色の土が入っている割合により６層に分けた。レンズ状に窪んでいる堆積状況からすべて自然堆積土と考えた。

平面形は長径60㎝，短径57㎝の円形を呈し，深さは56㎝を測る。底面はほぼ平坦であり，周壁は，東側では底面からややオーバーハングしながら緩やかに検出面で窄まるものの，西側では底面からオーバーハングしℓ５上部で一度窄まった後，検出面へ向けて軽く開いて収束している。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。　　（小笠原）

### 46号土坑　ＳＫ46（図26・35，写真27・64）

本土坑は調査区南西側，Ｏ・Ｐ－４・５グリッドに位置し，周辺はやや南側へ緩傾斜する地点である。西半部分で20号溝跡と重複していたが，確認が遅れたため覆土上位を掘りすぎてしまった。新旧関係は，本土坑が47号土坑及び20号溝跡より新しく，検出面は東側では基盤層であるＬＶ上面，西半部分は20号溝跡覆土上面である。遺構内堆積土は５層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。４層上面には規則的に配列されていた板材・角材片等の木質遺物が認められ，土質・層相から人為的要因による堆積土と考えている。

平面形はほぼ隅丸方形を呈し，規模は一辺1.37ｍを測る。周壁はやや凹凸はあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅷまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で約1.70ｍである。

本土坑内からは木質遺物が比較的多く出土し，遺存状態の良い１点を掲載した。図35－３は両端を面取り・加工を施した角材（枠材）で，木取りは板目～柾目，材質はスギである。

本遺構の性格は分析結果（寄生虫卵及び明らかな消化残渣は認められず，トイレ遺構である蓋然性は低い）を勘案すると，木質遺物の出土状況等から井戸状遺構の可能性が考えられる。時期的には明確には判然としないが，20号溝跡より新しいことから，近世以降の所産である。　（井）

### 47号土坑　ＳＫ47（図26・35，写真27・28）

本土坑は調査区南西側，Ｏ・Ｐ－４グリッドに位置し，周辺はやや南側へ緩傾斜する地点である。西半部分で20号溝跡と重複していたが，確認が遅れたため覆土上位を掘りすぎてしまった。新旧関係は本土坑が46号土坑より古く，20号溝跡より新しい。検出面は東側では基盤層であるＬＶ上面，西半部分は20号溝跡覆土上面である。遺構内堆積土は大きく２層に分層され，いずれも褐色系を基調とする粘質土である。ＬＶブロックを含み，厚く水平堆積する層相等から，人為的要因による堆積土と考えられる。

平面形はほぼ隅丸方形を呈し，規模は一辺1.27ｍを測る。周壁はやや凹凸はあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬＶ～Ⅷまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で約1.50ｍである。

本土坑内からは青磁１点，木質遺物等が出土し，青磁１点，木質遺物１点を掲載した。図35－１

は，龍泉窯系青磁碗の胴部破片資料である。釉は内外面全体に半透明な深い青白色が施釉されている。胎土は，灰白色を呈し緻密である。12世紀後半から13世紀頃に比定される資料と考えられる。２は両端を欠損する芯持材で，部分的に表皮が遺存している。

本遺構の所属時期は明確には判然としないが，46号土坑同様，20号溝跡より新しいことから，近世以降の所産と考えられる。（井）

### 48号土坑　ＳＫ48（図26・35，写真28）

本土坑は調査区中央部の南東側，Ｕ－７・８グリッドにまたがって位置しており，検出面はＬⅢである。重複する遺構はないが，近接して21号溝跡等が存在する。本土坑が構築された周辺は，上層のＬⅡから断ち割り調査を実施したため，北西側約半分を欠損してしまった。そのため正確な平面形及び規模は不明である。遺構内堆積土は２層に分けることができ，どちらも黒褐色を基調としている。ℓ１はシルト質粘土でℓ２は粘土であるが，基本的には同じ土質である。混入物の少ない土質からどちらも自然堆積土と考えた。

検出できた規模は長径1.91ｍ，深さは0.87ｍを測る。周壁は20㎝程急峻に立ち上がった後，約45°の角度で検出面へ向け拡がっている。底面はほぼ平坦である。

本土坑から縄文土器片４点，土師器片16点，須恵器片２点と多くの遺物が出土したが，図示できたのは２点である。図35－４は須恵器蓋あるいは横瓶の破片資料と思われる。５は内外面摩滅が著しいが，ナデ・ケズリ調整が部分的に認められる底部欠損の深みのある土師器杯である。

本土坑の明確な所属時期及び性格は不明であるが，検出面や出土遺物から判断して古代頃の所産と考えられる。（小笠原）

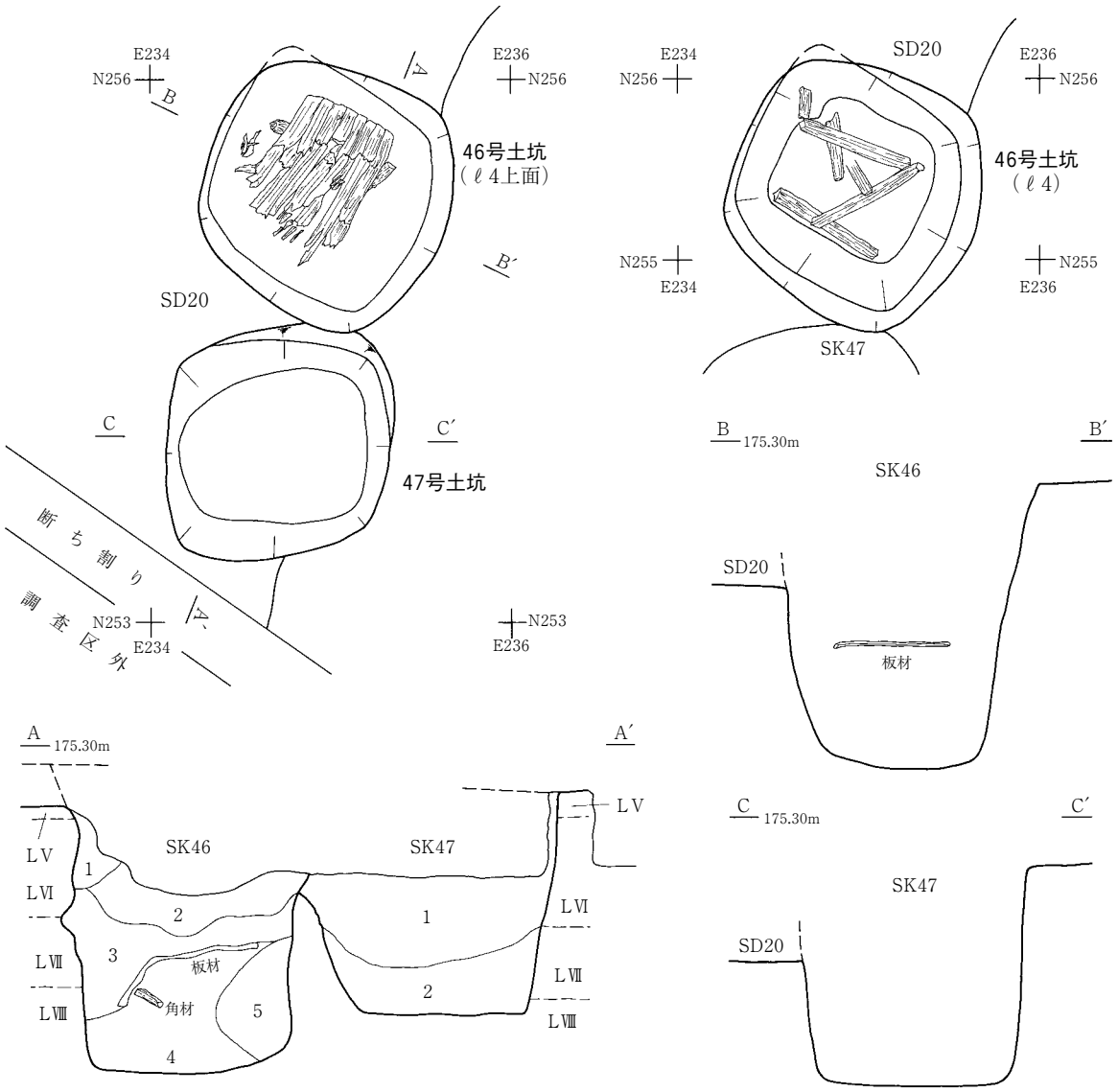
### 49号土坑　ＳＫ49（図27・35，写真28・63）

本土坑は調査区南側，Ｖ－２グリッドに位置しており，検出面は25号溝跡のℓ１とℓ２の境目付近である。本土坑全体が25号溝跡と上下に重複しており，25号溝跡のℓ１より古く，ℓ２下層よりも本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は５層に分けることができた。ℓ１は炭化物粒が少量混じっており，粘性・締まりの強いシルト質粘土である。ℓ２～５は粘性・締まりが強く，基本的には同じ質の粘土である。土質と堆積状況からℓ１は人為堆積土，ℓ２～５は自然堆積土と考えた。

平面形は長径98㎝，短径81㎝の楕円形を呈し，深さは75㎝を測る。底面はほぼ平坦であり，周壁はほぼ直角に立ち上がった後，検出面付近で軽く開いて収束している。

本土坑から出土した遺物は25点である。図示できたのは，土師器片・かわらけ各１点である。図35－６はやや大振りの土師器杯で，器形的には椀状を呈する。内面体部には横位方向への丁寧なミガキ調整が加えられ，外面体部上半にも認められる。７はかわらけ大皿で，寸法は口径14.5㎝，底径6.2㎝，器高4.4㎝を測る。

本土坑の所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

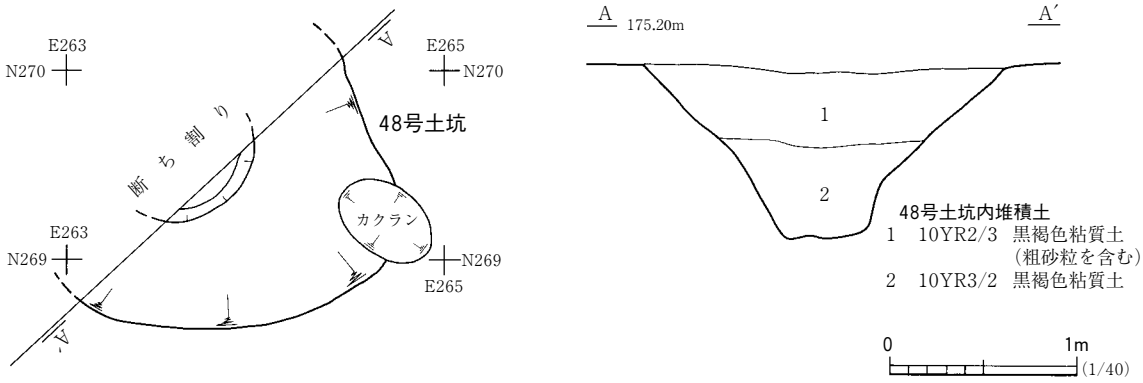



**46号土坑内堆積土**

1　10YR5/2　灰黄褐色粘質土
2　10YR1.7/1　黒色粘質土
3　10YR5/6　黄褐色粘質土
4　10YR4/1　褐灰色粘質土（土壌分析）
5　7.5Y2/1　黒色粘質土
（炭化物・木製品含む）

**47号土坑内堆積土**

1　10YR3/1　黒褐色粘質土
2　10YR6/2　灰黄褐色粘質土
（炭化物・粗砂粒を微量含む）




**48号土坑内堆積土**

1　10YR2/3　黒褐色粘質土
（粗砂粒を含む）
2　10YR3/2　黒褐色粘質土

図26　46～48号土坑

### 50号土坑　ＳＫ50（図27，写真29）

本土坑は調査区南側，Ｖ－２グリッドに位置している。25号溝跡および51号土坑と重複しており，25溝跡より新しく，51号土坑より古い（ＳＤ25⇒ＳＫ50⇒ＳＫ51）。遺構内堆積土は検出面中央部での撹乱を除き２層に分けることができた。ℓ１は黒色を呈しており，ℓ２は黒色の煤が薄くラミナ状に混入する粘性シルトである。堆積土は混じりあっている部分もあり，レンズ状に窪んだ堆積状況を呈することから，自然堆積土と考えた。

平面形は長径1.40ｍ，推定短径1.28ｍの円形を呈し，深さは最深部で0.46ｍを測る。底面は中央部を中心に窪んでおり，底面から検出面まで緩やかに立ち上がっており，底面と周壁の境は不明瞭である。断面形はレンズ形を呈する。

本土坑から遺物の出土はなく，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 51号土坑　ＳＫ51（図27・35，写真29）

本土坑は調査区南側，Ｖ・Ｗ－２グリッドに位置している。25号溝跡および50号土坑と重複しており，本土坑が最も新しい。検出面は25号溝跡のℓ１上面である。遺構内堆積土は３層に分けることができた。どの層も黒色を基調とし，粘性・締まりが強く基本的には同じ質のものであり，混入物の違いにより３層に分けた。いずれの層にも25号溝跡の壁土が斑状に多数混入しており，すべて人為堆積土と考えた。ℓ１・３には石が混入していたが加工痕は確認できなかった。

平面形は長径2.22ｍ，短径1.61ｍの不整形を呈し，深さは最深部で0.60ｍを測る。底面は中央部が窪んでおり，周壁は底面から検出面にかけて緩やかに立ち上がる。

本土坑から出土した遺物は，縄文土器片１点，須恵器２点の計３点である。うち，比較的遺存状態が良かった須恵器瓶類の胴部片１点を図35－８に掲載した。

本土坑の所属時期及び性格は不明である。（小笠原）

### 52号土坑　ＳＫ52（図28，写真29）

本土坑は調査区北側，Ｊ－31グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅡ中位面で検出した。重複する遺構はないが，近接して53号土坑や26～28号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は９層に分層された。北側斜面上位からの流入堆積や中央部がレンズ状に窪む堆積状況が観察されることから，自然流入土と考えている。

平面形はほぼ楕円形を呈し，規模は長径1.42ｍを測る。周壁は中位でやや開広するが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬⅡ～Ｖまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で87㎝である。

本土坑内からは縄文・弥生土器，土師器片，かわらけ，石器等が出土したが，細片で摩滅が著しいため図示できなかった。（井）

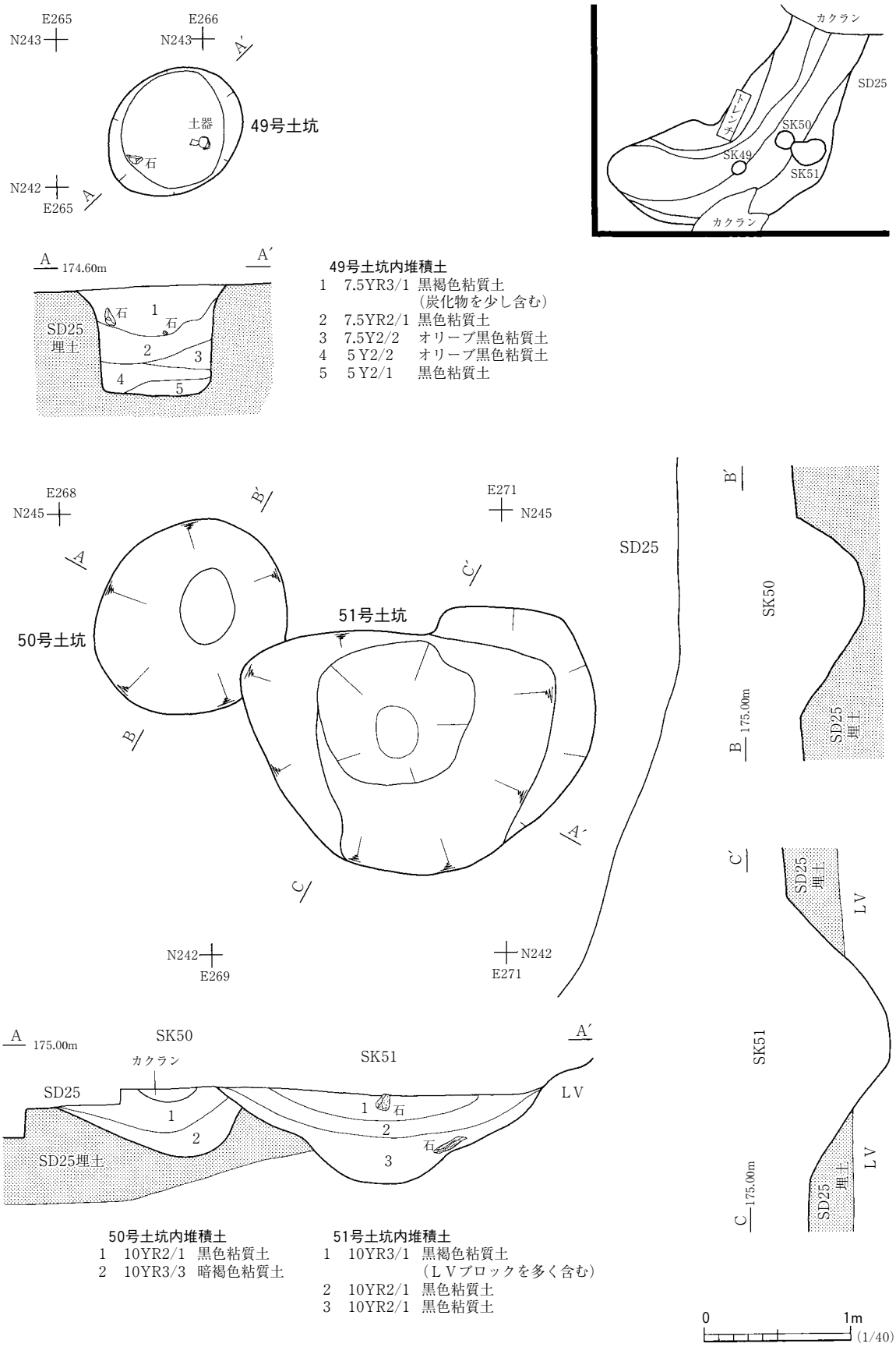

E265
N243
E266
N243
A′
土器
49号土坑
石
N242
E265
A
A′
174.60m
SD25
埋土
石
1
石
2
3
4
5
49号土坑内堆積土
1　7.5YR3/1　黒褐色粘質土
（炭化物を少し含む）
2　7.5YR2/1　黒色粘質土
3　7.5Y2/2　オリーブ黒色粘質土
4　5Y2/2　オリーブ黒色粘質土
5　5Y2/1　黒色粘質土
カクラン
SD25
トレンチ
SK50
SK49
SK51
カクラン
E268
N245
B′
A
50号土坑
51号土坑
E271
N245
C′
SD25
B
C
A′
N242
E269
N242
E271
B′
SK50
B
175.00m
SD25
埋土
C′
SD25
埋土
LV
SK51
C
175.00m
SD25
埋土
LV
A
175.00m
SK50
カクラン
SK51
A′
SD25
LV
1
2
1
石
2
石
3
SD25埋土
50号土坑内堆積土
1　10YR2/1　黒色粘質土
2　10YR3/3　暗褐色粘質土
51号土坑内堆積土
1　10YR3/1　黒褐色粘質土
（ＬＶブロックを多く含む）
2　10YR2/1　黒色粘質土
3　10YR2/1　黒色粘質土
0
1m
(1/40)

図27　49～51号土坑

### 53号土坑　ＳＫ53（図28・35，写真29）

本土坑は調査区北側，Ｊ－31グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，基盤層であるＬＶ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して52号土坑や26～28号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は炭化物を含む黒褐色の単一層で，北側斜面からの流入堆積土と考えられる。

平面形は不整長方形を呈し，規模は長軸1.29ｍ，短軸0.58ｍを測る。周壁は底面から緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。深さは最深部で12㎝である。

本土坑内からは土師器片，かわらけが９点出土し，うち１点を掲載した。図35－９は口縁部破片資料で，摩滅が著しく判然としないがロクロ成形による土師器甕片であろうか。（井）

### 54号土坑　ＳＫ54（図28・35，写真30・64）

本土坑は調査区北側，Ｌ・Ｍ－28グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して26・30・35号溝跡，ピット群等が存在する。遺構内堆積土は３層に分層され，土質・層相から流入堆積土と考えられる。

平面形はやや南北に長い楕円形を呈し，規模は長軸1.34ｍ，短軸1.20ｍを測る。周壁は底面から緩やかに立ち上がり，底面はほぼ平坦である。深さは最深部で19㎝である。

本土坑内からは弥生土器，土師器，かわらけ，陶器など計27点が出土した。全て流入によるもので，明確な時期を示すものではない。比較的遺存状態が良い２点について掲載した。図35－10・11は同一個体の中世陶器片である。16号土坑（図33－１）・１号溝跡（図45－１）・遺構外（図86－13）出土遺物等と類似し，塩川町４号溝跡出土資料（図92－35）と接合している。珠洲系の壺ないし甕と思われ，11の外面には緻密な平行タタキ痕が右下がりに施され，内面には無文のアテ具痕が認められる。12世紀後半頃の所産である。（井）

### 55号土坑　ＳＫ55（図28・35，写真30）

本土坑は調査区北側，Ｌ－30グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅡ上面で検出した。31号溝跡と重複し，本土坑の方が新しい。遺構内堆積土は６層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。各層とも木炭粒・焼土粒・ＬＶブロック等を含み，壁側からの流入土や中央部がレンズ状に窪む堆積状況が観察されることから，自然堆積土と考えている。

平面形はほぼ楕円形を呈し，規模は長径1.33ｍを測る。周壁はやや凹凸はあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬⅡ～Ⅵまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。底面ほぼ中央からは，径26㎝，深さ20㎝程のピットが検出された。深さは最深部で1.03ｍである。

本土坑から出土した遺物は土師器片30点で，うち２点について図示した。全て流入によるもので，明確な時期を示すものではない。図35－12は土師器杯の底部片で，体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。13は内外面摩滅しており判然としないが，ロクロ成形による小型の土師器甕片と思われる。

本遺構の明確な性格は不明であるが，所属時期は重複関係や検出面を考慮すると中世以降と考えられる。（井）

### 56号土坑　ＳＫ56（図29・35，写真30）

本土坑は調査区北側，Ｈ－32グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して57～59号土坑，29号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は７層に分層され，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土である。木炭粒・焼土粒・ＬＶブロック等を含み，壁側からの流入土や中央部がレンズ状に窪む堆積状況が観察されることから，自然堆積土と判断される。

平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸1.28ｍ，短軸0.76ｍを測る。周壁はやや凹凸はあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬⅢ～Ⅵまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で1.10ｍである。

本土坑内からは縄文土器，土師器等計３点が出土した。全て流入によるもので，明確な時期を示すものではなく，比較的遺存状態がよかった１点について掲載した。図35－14は器面の摩滅が著しい底部片で，器外面に０段多条の斜縄文が施文されている。

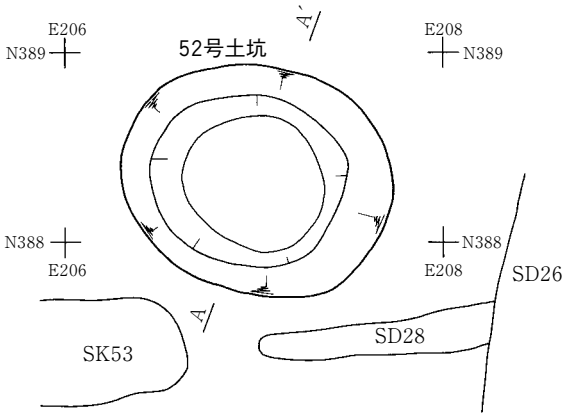
本遺構の明確な所属時期は判然としないが，形態的特徴と堆積土の状況から落し穴状土坑の可能性が高いと判断される。（井）

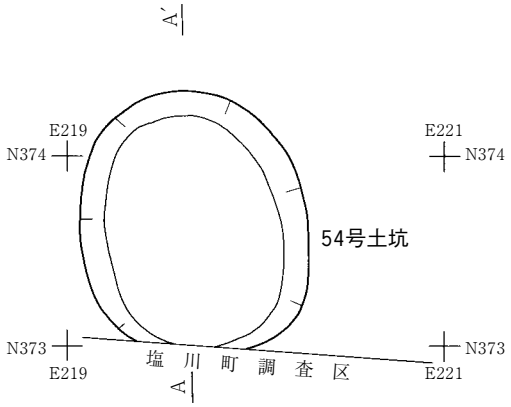
### 57号土坑　ＳＫ57（図29，写真31）

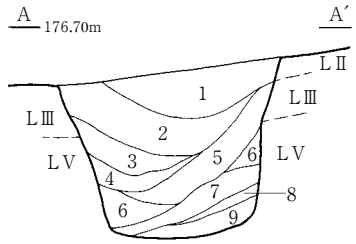
本土坑は調査区北側，Ｇ－33グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，本遺構を境に南側ではＬⅡ及びＬⅢ層が堆積している。したがって検出面は，斜面上位の北側では基盤層であるＬＶ上面，南側はＬⅢ上面で検出した。重複関係はＧ33Ｐ２より本遺構の方が古く，近接して56・58・59号土坑，29号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は，いずれも黒褐色系を基調とする粘質土で，５層に分層される。炭化物・ＬＶブロックを含み，北側斜面上位からの流入状況が認められることから，自然的要因による堆積土と考える。

平面形は楕円形を呈し，規模は長径1.00ｍを測る。周壁はやや凹凸はあるが，底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。底面はＬ･層まで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは最深部で65㎝である。

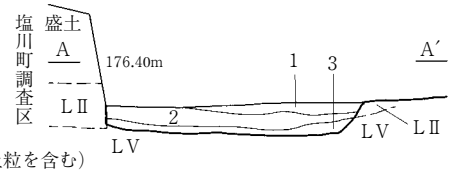
本土坑内からは土師器片，かわらけなど総計35点出土した。全て流入によるもので，遺存状態が悪く，細片であるため図示できなかった。（井）



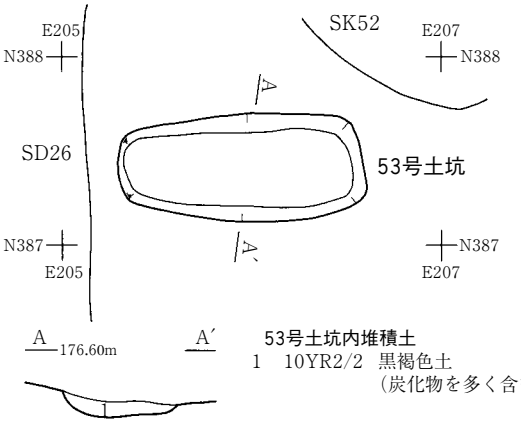




54号土坑内堆積土
1　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物を少し含む）
2　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・木炭粒・焼土粒を含む）
3　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを微量含む）

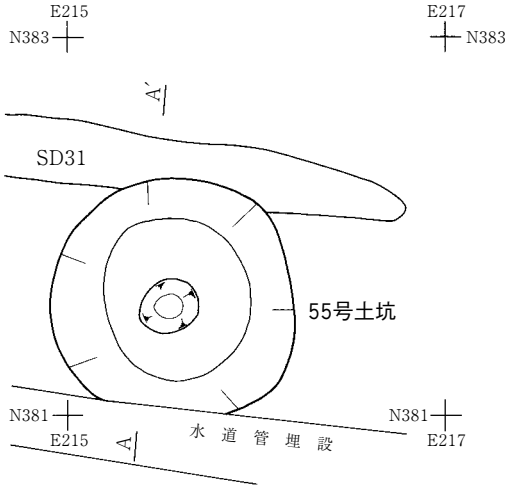



52号土坑内堆積土
1　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物を含む）
2　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物・焼土粒・ＬＶブロックを少し含む）
3　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を少し含む）
4　10YR3/3　暗褐色土
（ＬＶブロックを含む）
5　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を少し含む）
6　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物を少し含み，ＬＶブロックを多く含む）
7　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物を少し含む）
8　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを少し含む）
9　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を多く含む）




53号土坑内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を多く含む）

55号土坑内堆積土
1　7.5YR3/2　黒褐色土
（炭化物・木炭粒・焼土粒を含む）
2　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物・木炭粒・焼土粒を含む）
3　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を多く含む）
4　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物を少し含み，ＬＶブロックを含む）
5　10YR2/1　黒色土
（炭化物・木炭粒を多く含み，ＬＶブロックを少し含む）
6　10YR3/1　黒褐色土



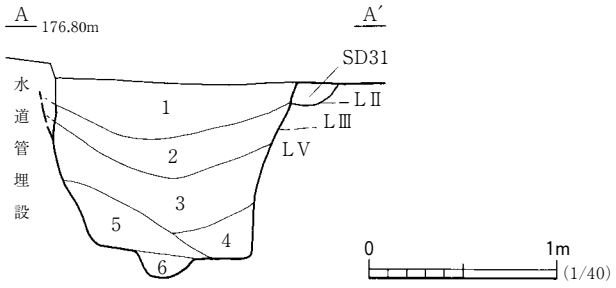




図28　52～55号土坑

### 58号土坑　ＳＫ58（図29・35，写真31）

本土坑は調査区北側，Ｇ－32・33グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して56・57・59号土坑，29号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は３層に分層され，いずれも炭化物を含む黒褐色系を基調とする粘質土である。斜面上位からの流入状況が認められることから，自然的要因による堆積土と考えられる。

平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸1.46ｍ，短軸0.97ｍを測る。周壁は底面からほぼ垂直気味に立ち上がり，深さは最深部で22㎝である。底面はＬＶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。

本遺構内からは縄文土器片，土師器など計11点が出土した。全て流入によるもので，比較的遺存状態がよかった２点について掲載した。図35－15・16はロクロ成形による土師器甕片である。15は頸部が強く屈曲し，口縁部先端が上方へ摘み上げられている。16は胴部片で，器外面にタタキ痕，内面にはナデ調整が施されている。（井）

### 59号土坑　ＳＫ59（図29，写真31）

本土坑は調査区北側，Ｇ－33グリッドに位置する。本遺構の周辺は南側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，ＬⅢ上面で検出した。重複する遺構はないが，近接して56～58号土坑，29号溝跡等が存在する。遺構内堆積土は２層に分層され，いずれも炭化物を含む黒褐色系を基調とする粘質土である。斜面上位からの流入状況が認められることから，自然的要因による堆積土と考えられる。

平面形は楕円形を呈し，規模は長径76㎝，短径65㎝を測る。周壁は底面から緩やかに立ち上がり，深さは最深部で15㎝である。底面はＬＶまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。

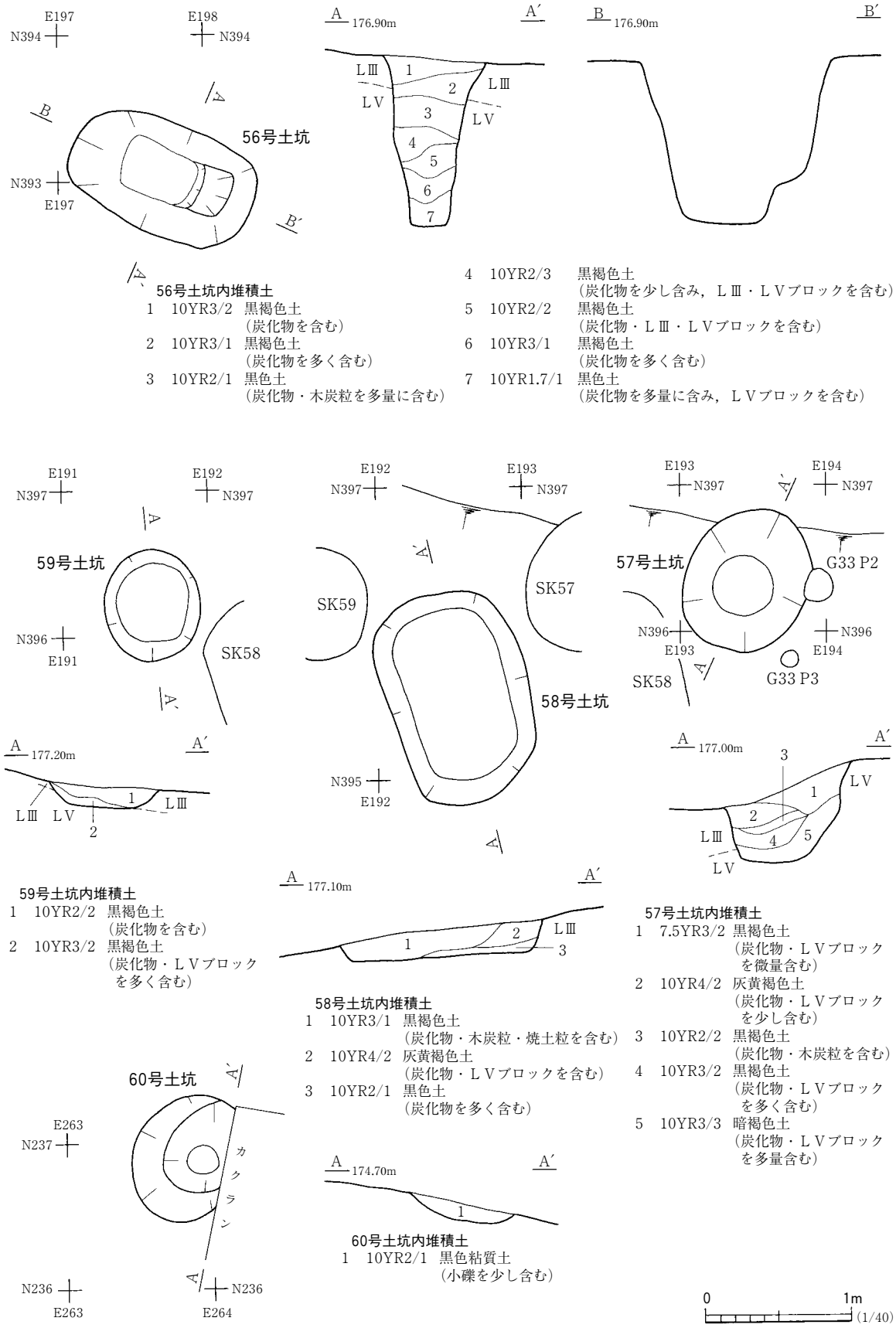
本土坑内からの出土遺物がないため，所属時期及び性格等は不明である。（井）

### 60号土坑　ＳＫ60（図29，写真31）

本土坑は調査区南側，Ｕ－１グリッドに位置しており，検出面はＬⅥとしたにぶい黄褐色砂質シルトである。25号溝跡の南側Ｕ・Ｖ－１グリッド周辺に位置する撹乱を除去した際に検出できた。本遺構は他の遺構と重複関係はないが，上記とは別の撹乱を東側で受けている。遺構内堆積土は単層で，灰色シルト及び0.2㎝大の礫が薄くラミナ状に混入する黒色のシルト質粘土である。堆積状況から自然流入土と考えた。

撹乱で東側を欠損しているものの，平面形は長径91㎝の円形を呈していたものと思われる。深さは最深部で12㎝を測る。底面から検出面にかけて緩やかに立ち上がっており，底面と周壁の明瞭な境はなく断面形はレンズ状を呈する。

本土坑から遺物の出土はないため，所属時期及び性格は不明である。（小笠原）




**56号土坑内堆積土**

1　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物を含む）

2　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物を多く含む）

3　10YR2/1　黒色土
（炭化物・木炭粒を多量に含む）

4　10YR2/3　黒褐色土
（炭化物を少し含み，ＬⅢ・ＬⅤブロックを含む）

5　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・ＬⅢ・ＬⅤブロックを含む）

6　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物を多く含む）

7　10YR1.7/1　黒色土
（炭化物を多量に含み，ＬⅤブロックを含む）

**59号土坑内堆積土**

1　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を含む）

2　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを多く含む）

**58号土坑内堆積土**

1　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物・木炭粒・焼土粒を含む）

2　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを含む）

3　10YR2/1　黒色土
（炭化物を多く含む）

**57号土坑内堆積土**

1　7.5YR3/2　黒褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを微量含む）

2　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを少し含む）

3　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・木炭粒を含む）

4　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを多く含む）

5　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物・ＬⅤブロックを多量含む）

**60号土坑内堆積土**

1　10YR2/1　黒色粘質土
（小礫を少し含む）

図29　56～60号土坑

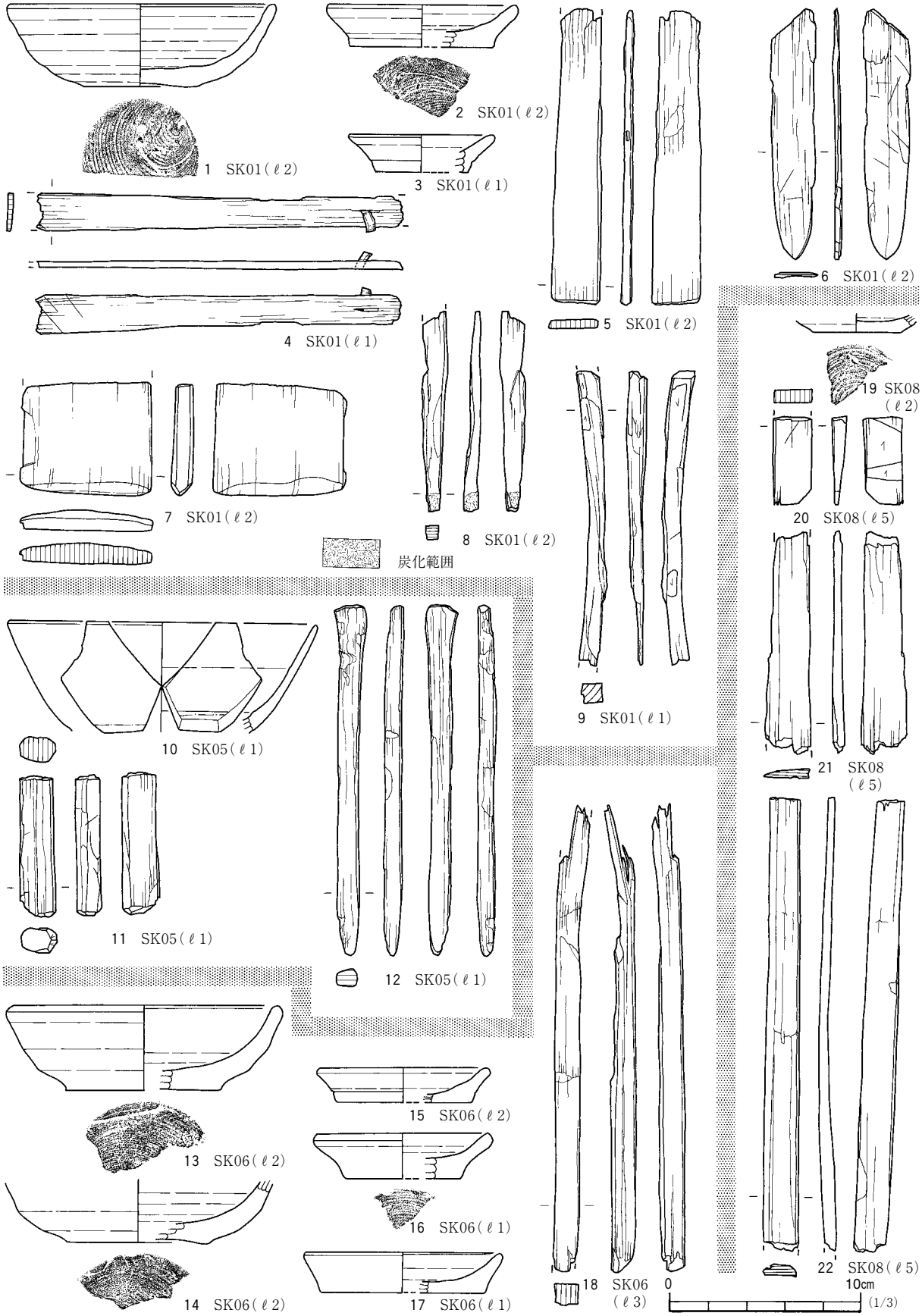



図30　1・5・6・8号土坑出土遺物

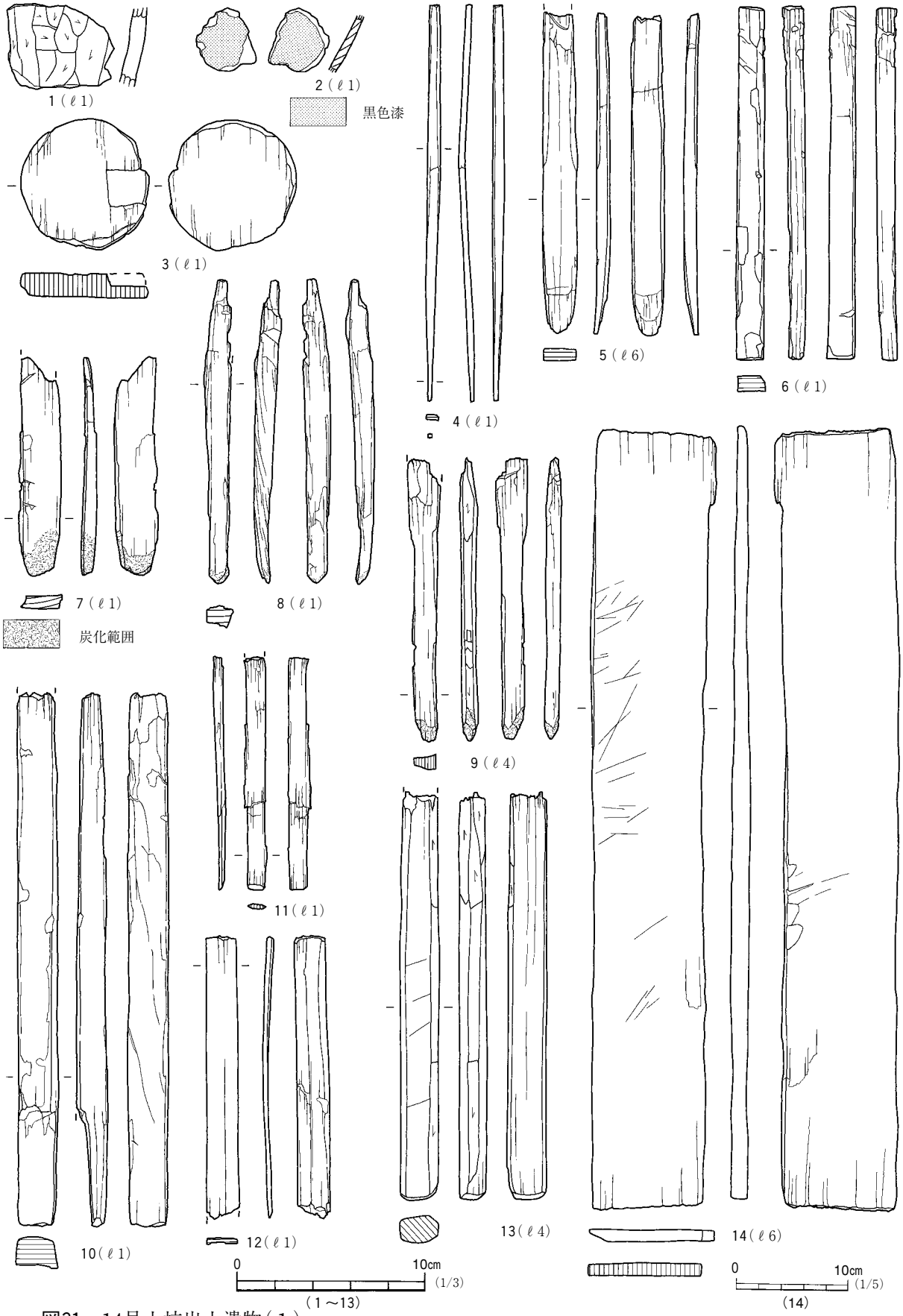



図31　14号土坑出土遺物（１）

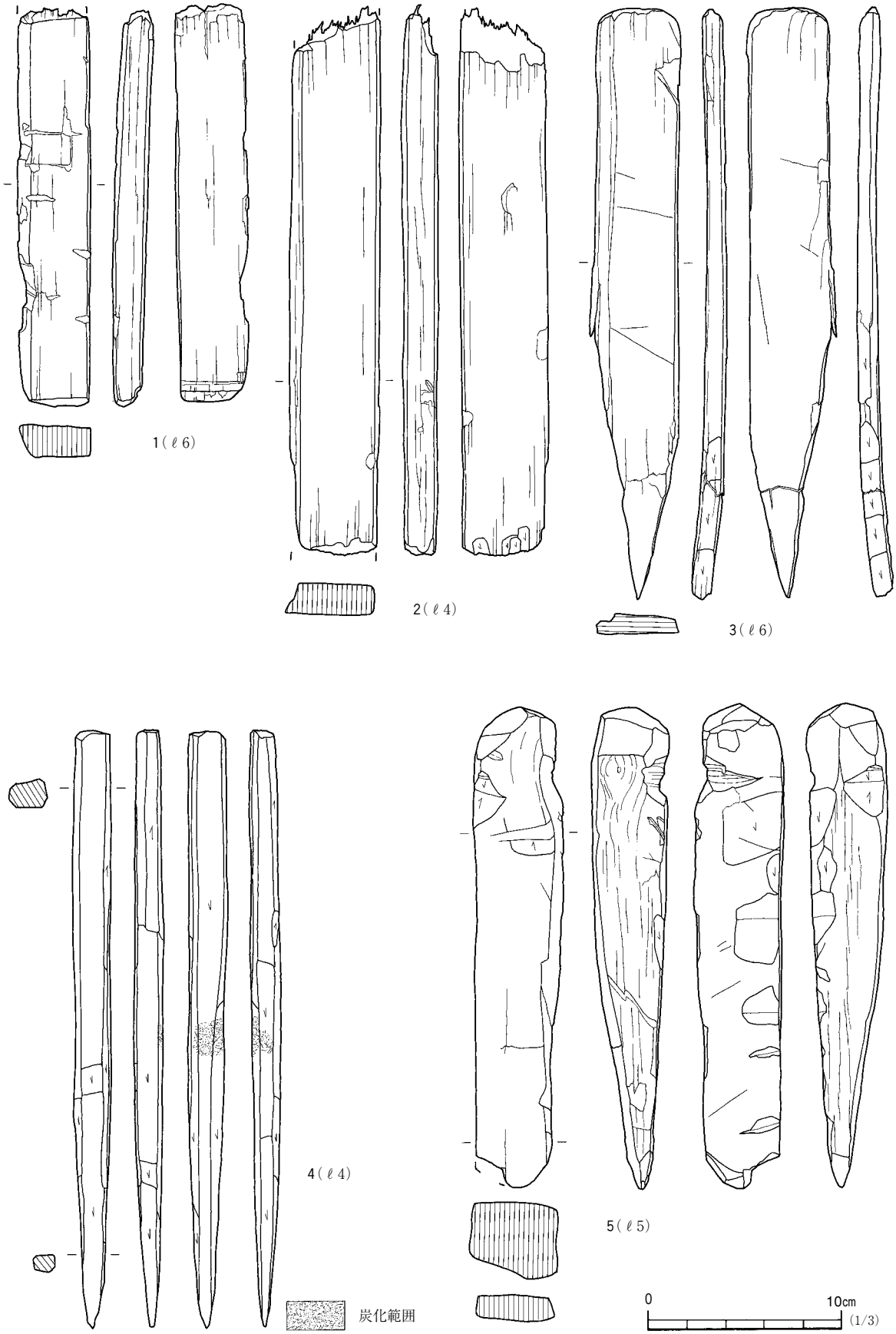



図32　14号土坑出土遺物(2)

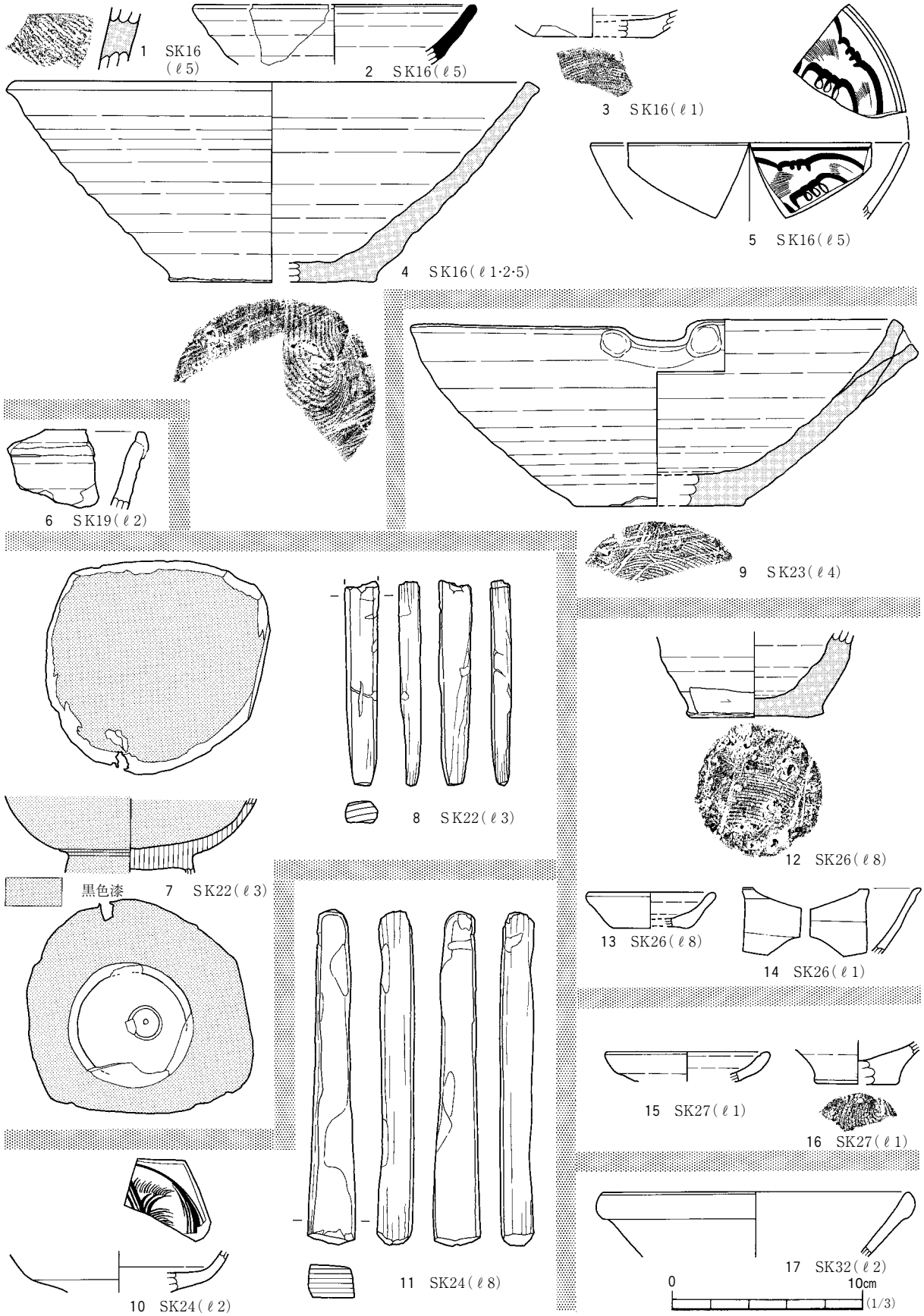



図33　16・19・22～24・26・27・32号土坑出土遺物

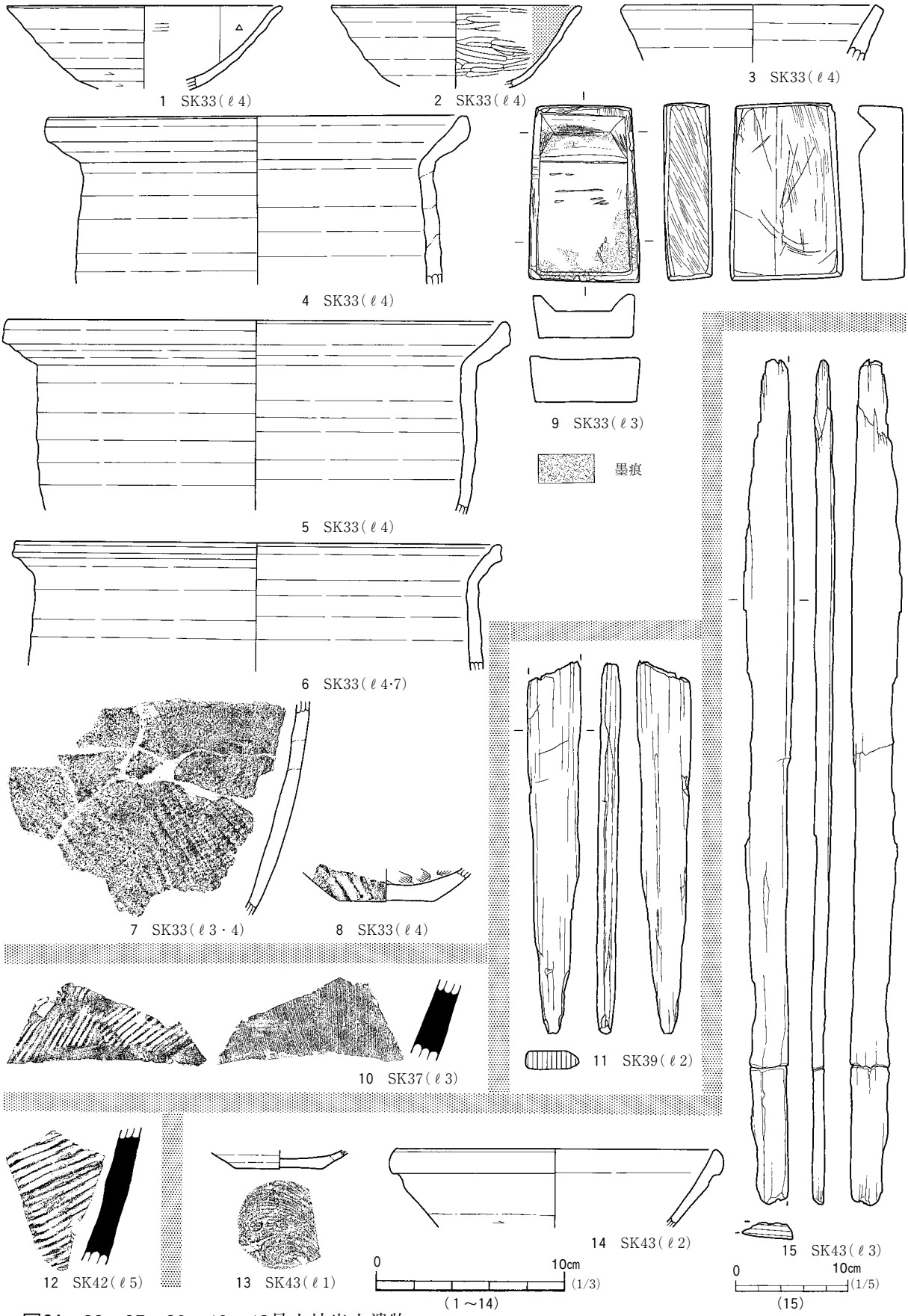



図34　33・37・39・42・43号土坑出土遺物

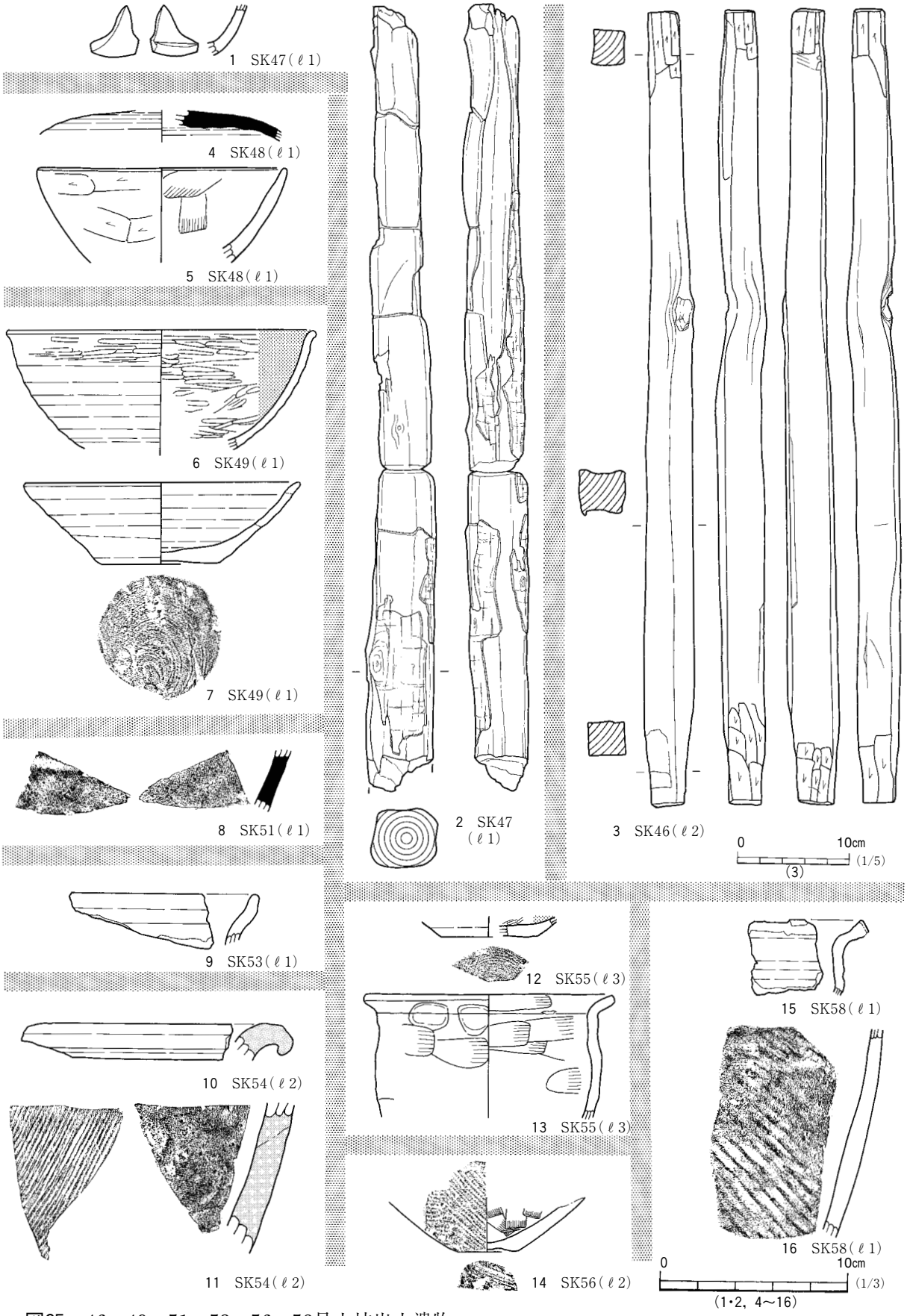



図35　46～49・51・53～56・58号土坑出土遺物

# 第５節　　溝　　跡

今回の調査で検出された溝跡は計35条である。塩川町（１・２次）調査部分の18条を含めると総計53条となる。ただ，前章や本章第１節で述べたように，連続する同一の遺構でありながら別番号を付したものもあり，本来は40条ほどの検出数と考えられる。また，削平の影響や調査区外に延びるものなど，全体の形状や規模が明確に把握できないものも多い。これらの整合性等については，各報文や表17に示した。調査区北側および中央付近で検出された溝跡の多くは人工的に掘り込んで整形されたものであり，堆積土からは常時流水していたとは考え難く，高低差もほとんどないことから，排水機能というよりはむしろ区画を目的として設けられたものが大半を占めている。一方，調査区南側で検出された溝跡（ＳＤ21・23～25・32～34）は，自然流跡もしくは旧河川跡であり，数時期に渡って氾濫を繰り返しながら存在していたものである。遺物の出土量も少なく，大半の遺物が流入による出土のため明確な年代を把握することは困難であるが，おおよそ前者が中世～近世頃，後者が古墳時代～古代にかけて機能していたものと考えられる。

報告にあたっては，調査区内における位置関係を把握するために便宜的に呼称した調査区北側・中央・南側地区に大別し，中央付近の溝跡（番号順）から順次報告する。また，18・19号溝跡は欠番であり，規模・堆積土等が類似するものや関連性のある溝跡はまとめて報告した。なお１～９・12・13・20・23～25・32～34号溝跡等の詳細な図版は割愛し，図36～38・41・69に合わせて掲載した。また遺構の性格上，平面図と土層断面図は同縮尺で掲載していない。溝跡の分布状況や規模，他遺構との位置関係については図６を参照願いたい。

## １．調査区中央付近（１～17・20号溝跡）

### １～３号溝跡　ＳＤ01～03（図36～39・45，写真35・37・65）

１～３号溝跡は，調査当初，東側部分が削平されていたため，別遺構を想定して番号を付したが，規模や堆積土等が類似し，１号溝跡と２号溝跡との明確な重複関係も認められなかったことから，一連の連続する溝跡の可能性が高いためまとめて報告する。

本溝跡群は，調査区中央やや西側寄りのＧ～Ｍ－８～20グリッド，旧河川跡が存在する東半よりやや高い標高175.60ｍ前後の平坦地に位置する。検出面は全てＬＩ及び耕作土直下のＬＶ上面で，上位は削平が著しかった。１号溝跡は西側へ，２号溝跡は南側へ更に延伸するため，正確な全体規模は不明であるが，長方形状の区画配置を呈する。２号溝跡は，12・42号土坑及び４号溝跡と重複関係にあり，いずれも本跡のほうが新しい。

遺構内堆積土は炭化物を含む黒褐色粘質土系で自然の土砂流出による堆積土と判断される。北側１号溝跡付近では３層に分層されるが，他地点では単一層を示している。１・２号溝跡の溝幅は90

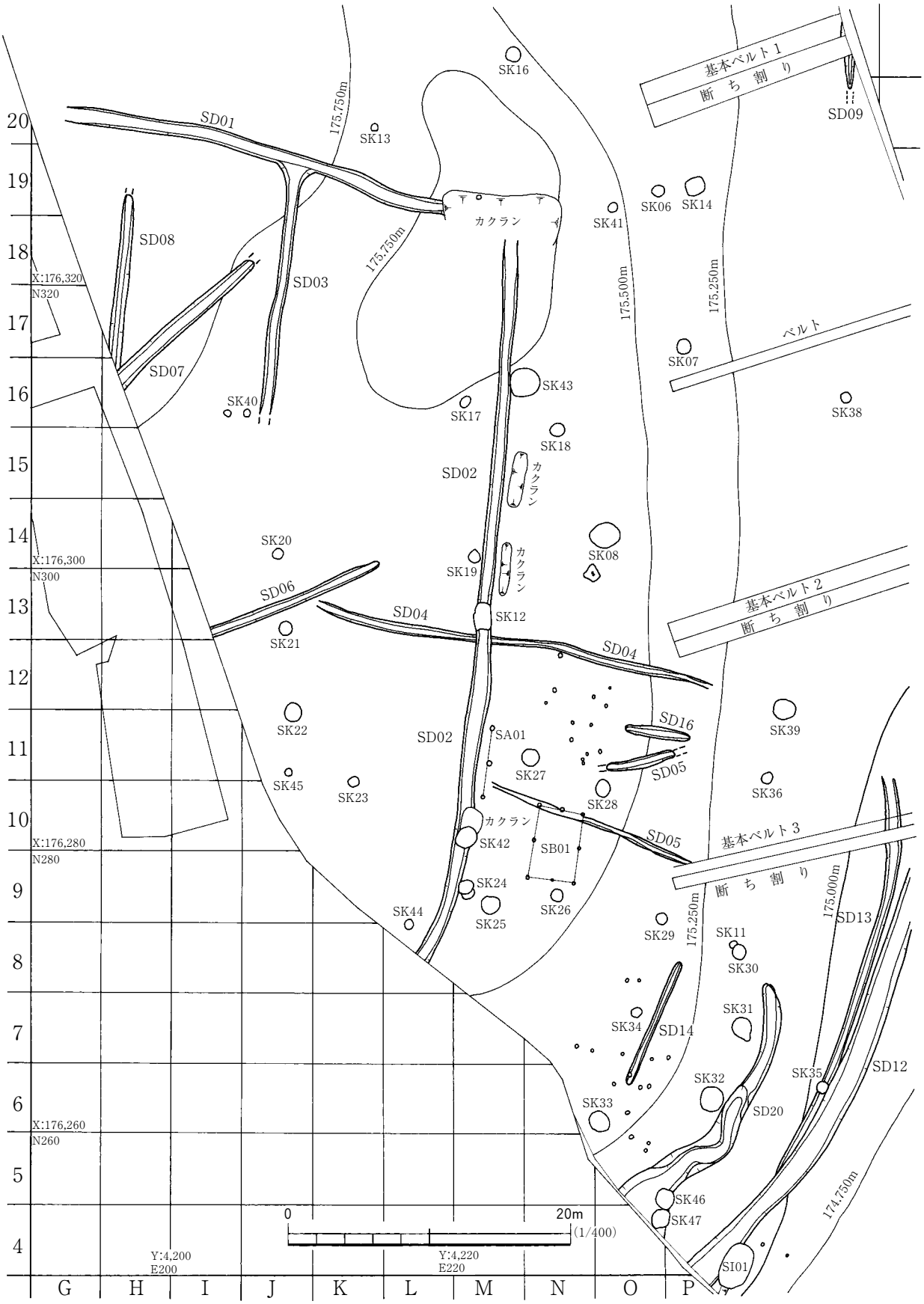



図36　調査区中央付近溝跡（１）

㎝前後を測り，３号溝跡の溝幅は約75㎝とやや狭いが比較的一定幅で直線的に配置されている。調査区内で検出できた範囲は，東西約28ｍ，南北約52ｍである。周壁は緩く立ち上がり，底面は北側の１号溝跡側では西側へ，東側の２号溝跡では南側へ向かって緩く傾斜し，底面の高低差は最大で30㎝である。いずれも断面形は鍋底状を呈し，深さは平均して15㎝前後を測る。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦である。

遺物は，１号溝跡及び２号溝跡から陶磁器類が計13点出土し，うち３点を図45に掲載した。１・３は中世陶器，２は近世陶器である。１は珠洲系陶器甕の胴部片と思われ，外面に右斜め方向へのタタキ痕，内面に指頭状のナデ調整と布目圧痕が認められる。３は素文鉢の注口部に近い口縁部片で，器形的に23号土坑出土土器（図33－９）に類似する片口鉢と思われる。２は内面に卸し目が認められる本郷焼擂鉢である。

本溝跡群は長方形状の区画を呈するもので，北側の東西に伸びる１号溝跡部分や南北の２号溝跡での大きな高低差がない。明確な所属時期は判断できないが，出土遺物や他遺構との重複関係等から，中世前半期頃の可能性が高いと考えられる。（井）

### ４号溝跡　ＳＤ04（図36～39，写真35）

本溝跡は，Ｋ～Ｐ－12・13グリッドのＬＶ上面で検出した。本遺構が検出できた周辺には，土坑群等や他溝跡群等の遺構が比較的多く散在する地域である。２号溝跡と直交するように重複しており，本溝跡の方が古い。遺構内堆積土は暗褐色系の堆積土で，分層された２層はいずれも土砂流出による自然流入堆積土と判断される。

溝跡は多少蛇行するがほぼ直線的で，比較的一定幅に配置されてある。規模は東西約25ｍ，溝幅約0.55ｍである。周壁は緩く立ち上がり，底面は東側へ向かって緩傾斜している。東西での底面の高低差は，最大で14㎝を測る。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明であるが，重複関係や隣接する遺構群等から判断して中世以降の所産と考えられる。（井）

### ５号溝跡　ＳＤ05（図36・38・39，写真36）

本溝跡は，Ｍ～Ｐ－９・10グリッドのＬＶ上面で検出した。本遺構が構築された周辺には，１号建物跡や土坑群等が散在し，南東に向かって緩やかに傾斜する地形を呈する。１号建物跡と重複しており，本溝跡の方が古い。遺構内堆積土は２層に分層され，壁側からの自然流入堆積土と判断される。

溝跡は一部蛇行するがほぼ直線的で，規模は東西約15ｍ，溝幅約0.30ｍである。周壁は緩く立ち上がり，底面は東側へ向かって緩傾斜している。東西での底面の高低差は，最大で16㎝である。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明であるが，重複関係や隣接する遺構群等から判断して中世頃の所産と考えたい。（井）

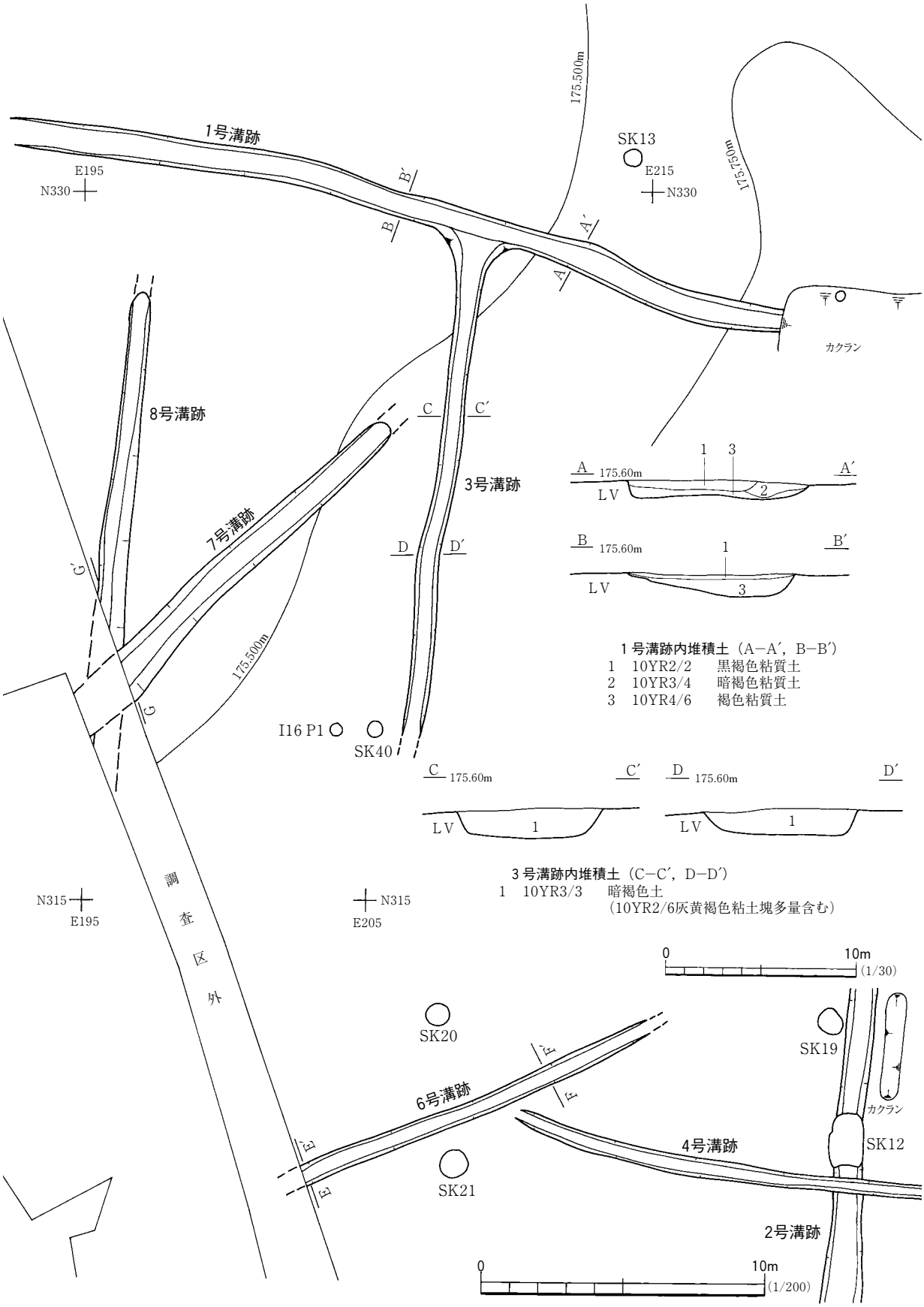



図37　調査区中央付近溝跡（２）

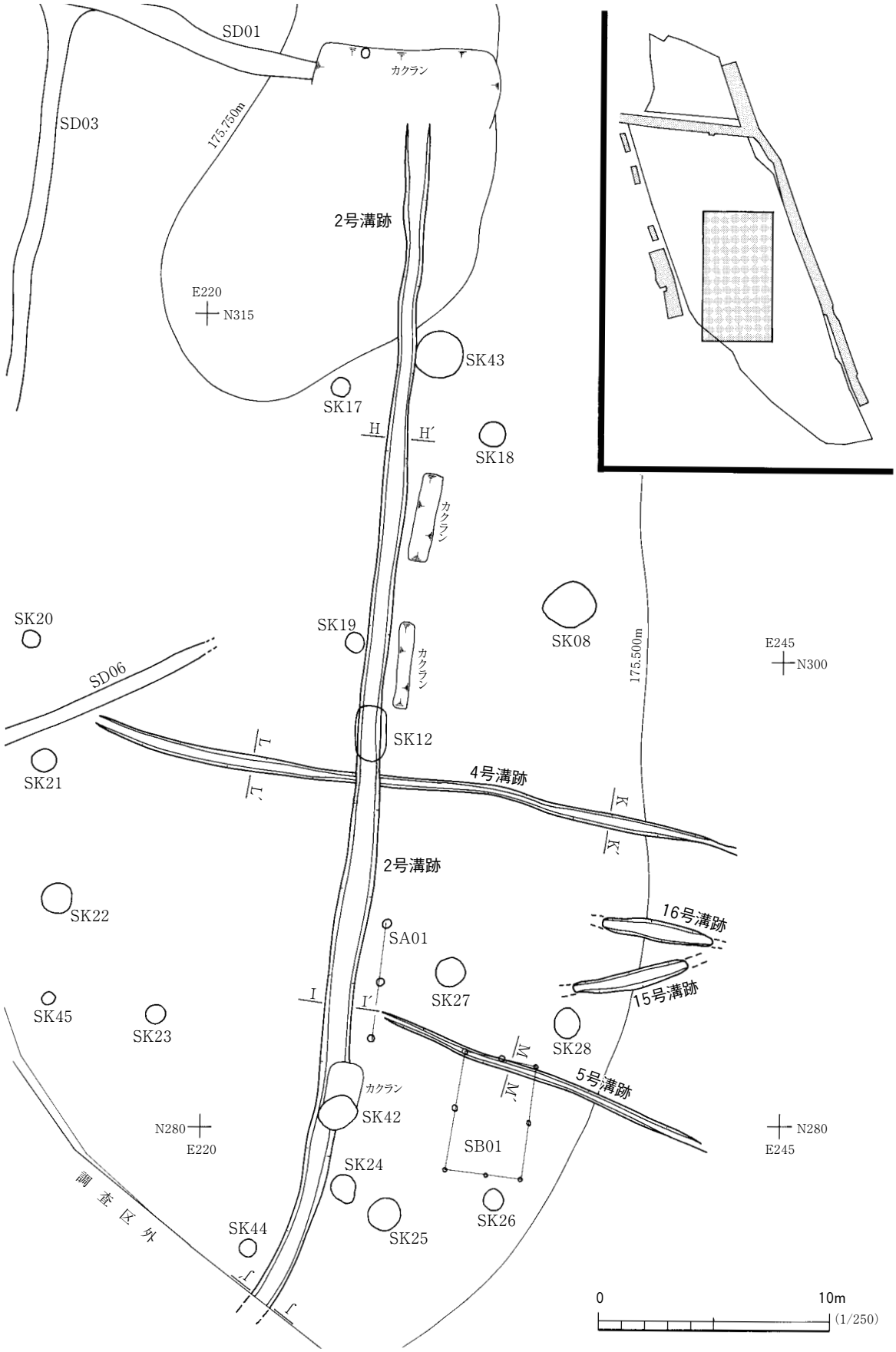



図38　調査区中央付近溝跡（３）

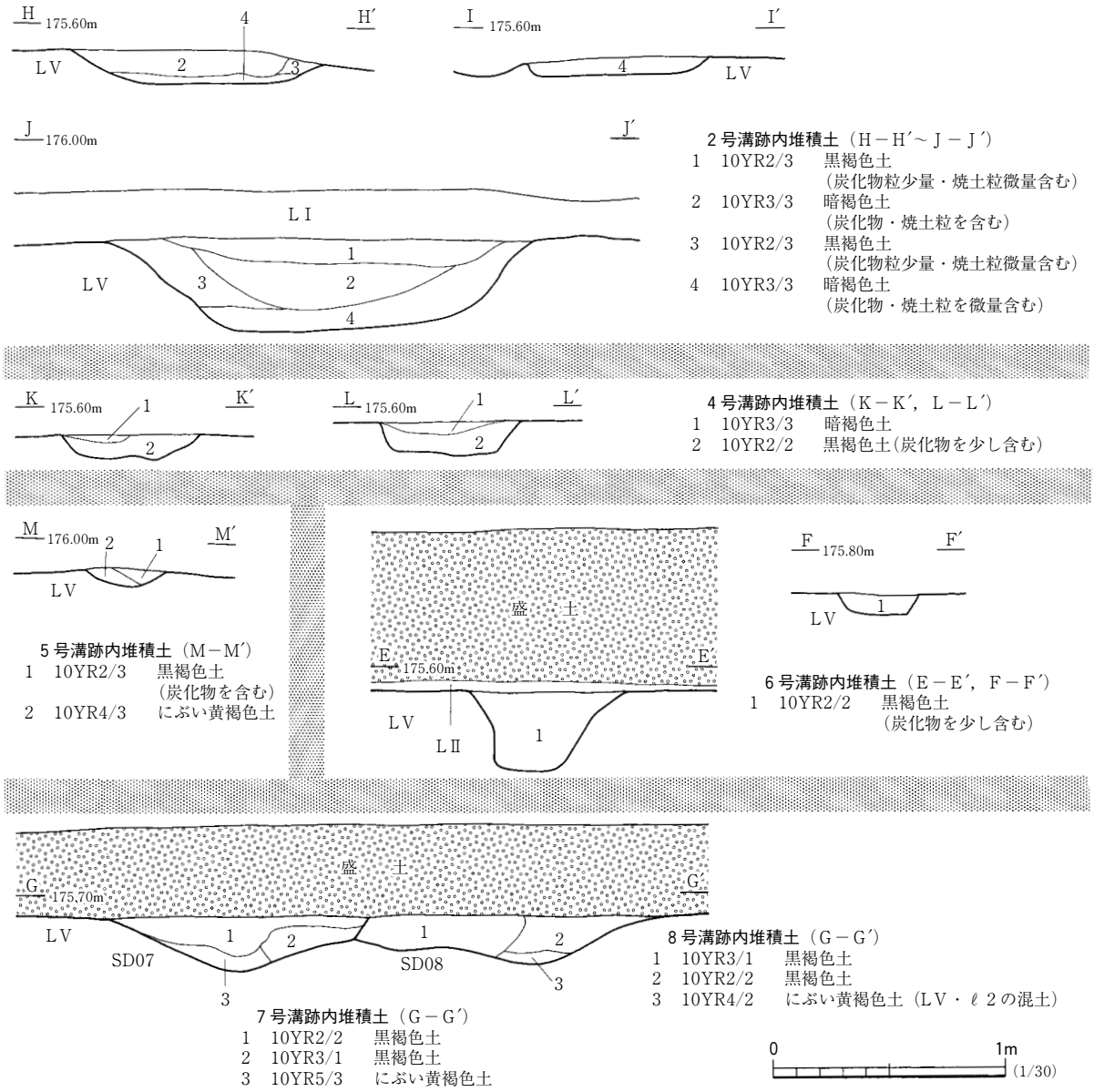



図39　２・４～８号溝跡

### ６～８号溝跡　ＳＤ06～08（図36・37・39，写真36）

本溝跡群は，平成13年度に塩川町教育委員会が実施した立合調査によって確認された溝跡に連続する遺構群である（和田：2002）。調査区南西のＩ～Ｋ－13・14グリッド及びＨ・Ｉ－16～19グリッドのＬＶ上面で検出した。本遺構群の周辺には，20～22・40号土坑や，１～４号溝跡等が近接し，南東に向かって緩やかに傾斜する地形に位置する。７号溝跡と８号溝跡が重複しており，７号溝跡の方が新しい。

遺構内堆積土は６号溝跡が単層，７・８号溝跡は３層に分層される。いずれも黒褐色系の粘質土を呈し，炭化物や基盤層であるＬＶブロックを僅かに混入している。堆積状況や層相から判断して自然流入による堆積土と考えた。溝跡は若干蛇行するがほぼ直線的で，調査区内で検出できた規模

はいずれも全長13ｍ程である。溝幅は６号溝跡が約60㎝で幅狭であるが，７・８号溝跡は90～100㎝前後を測り，やや幅広である。断面形は６号溝跡がＵ字状，７・８号溝跡は擂鉢状を呈し，いずれも南側へ向かって緩傾斜している。底面の高低差は最大で６号溝跡が約25㎝を測り，７・８号溝跡は14㎝前後である。検出面から最深部までの深さは，６号溝跡が30㎝前後，７・８号溝跡は平均して約20㎝である。底面はやや凹凸はあるが滑らかである。

本溝跡からは遺物が出土していないため，明確な所属時期・性格は不明である。しかし，遺構の検出状況や近接する他遺構等の存在を考慮すると中世頃の所産の可能性が高い。　（菊　田）

### ９号溝跡　ＳＤ09（図36）

本溝跡は，調査区中央部の北東境，Ｒ－20・21グリッドのＬⅢ下面で検出した。本溝跡が検出された周辺は，削平が著しく他遺構は検出できなかった。遺構内堆積土は黒褐色粘質土の単層で，炭化物を若干混入している。調査区内で検出できた規模は，直線的に南北に延びる僅か３ｍ程である。溝幅は70㎝前後を測り，周壁は緩く立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。底面は南側へ向かって緩やかに傾斜し，底面の高低差は最大で６㎝である。

本溝跡からは遺物が出土していないため，明確な所属時期・性格は不明である。しかし，塩川町教育委員会で調査した13号溝跡あるいは８号溝跡と配置的に連続する可能性があり，これらの溝跡との整合性を考慮すれば中世頃の所産の可能性が想定される。　（菊　田）

### 10・11号溝跡　ＳＤ10・11（図40・45，写真37・40）

本溝跡群は，Ｓ・Ｔ－15～17グリッドのＬＶ上面で検出した。本溝跡が検出された周辺は，南西に向かって緩やかに傾斜する地形に位置し，東側調査区外へ蛇行しながら連続する。削平が著しく他遺構は検出できなかったが，10号溝跡と11号溝跡は重複関係にあり，10号溝跡の方が新しい。また，土層断面や完掘状況から10号溝跡は２小期が認められている。

遺構内堆積土は黒褐色を基調とする粘質土で，10・11号溝跡ともに４層に分層される。壁側からの流入堆積状況や中央部が窪むレンズ状の堆積が認められることから，共に自然流入による堆積土と判断される。検出できた溝跡の規模は，緩く「く」字状に屈曲する10号溝跡が南北約11ｍ，溝幅約1.2ｍ，11号溝跡は南北約４ｍを測る。周壁は緩く立ち上がり，底面はやや凹凸はあるが滑らかで南側へ向かって緩傾斜している。南北での底面の高低差は，最大で26㎝である。

遺物は，10号溝跡から縄文土器・弥生土器・土師器等の計19点が出土し，うち１点を掲載した。図45－４はロクロ成形による小型の土師器甕の口縁部片で，口端部が上方に摘み上げられている。

本溝跡群の性格・所属時期は明確には判断できないが，出土遺物や遺構検出状況等から古代以前の旧河川跡と判断される。　（井）

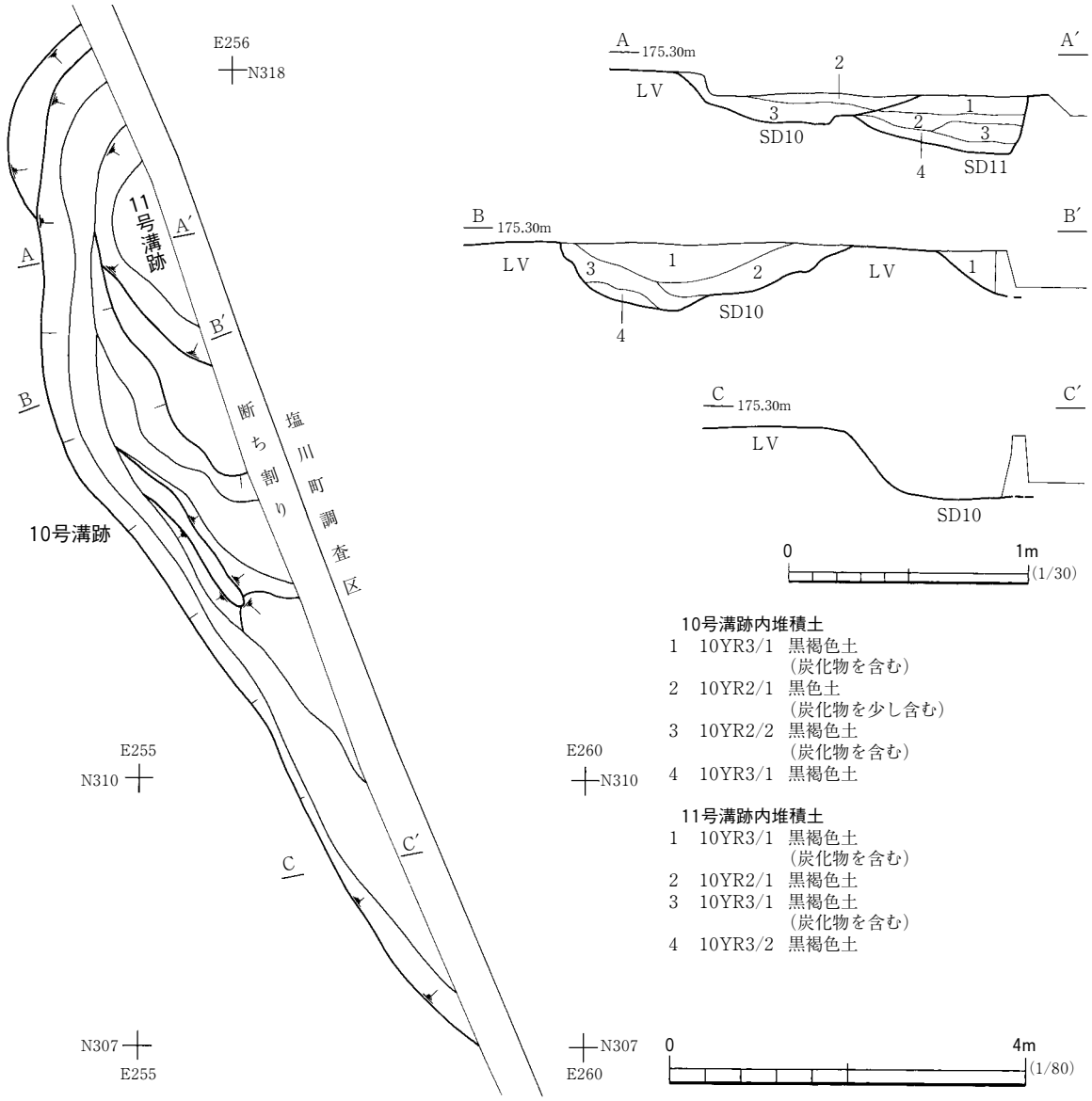



図40　10・11号溝跡

### 12・13号溝跡　ＳＤ12・13（図36・41・45，写真37・40・65）

本溝跡群は，調査区やや南側のＰ～Ｔ－３～11グリッド，ＬＩ直下のＬＶ上面で検出した。本溝跡が検出された周辺は，南西に向かって緩やかに傾斜する地形を呈し，南西調査区外へ延びている。近接して30～32号土坑や46・47号土坑，20号溝跡等が存在し，１号竪穴状遺構や35土坑と重複している。重複関係は35号土坑が最も古く，13号溝跡⇒12号溝跡⇒１号竪穴状遺構の順で新しくなる。

遺構内堆積土は12・13号溝跡ともに黒褐色粘質土の単層で，自然流入による堆積土と判断される。調査区内で検出できた溝跡の規模は，地形と同様の緩やかな曲線を描く12号溝跡が南北約40ｍ，溝幅約1.8ｍ，13号溝跡は南北約34ｍ，溝幅約0.8ｍを測る。周壁は12・13号溝跡ともに緩く立ち上がり，底面は南側へ向かって緩傾斜している。双方の溝とも底面は若干凹凸はあるが滑らかで，南北の底面の高低差は最大で38㎝である。

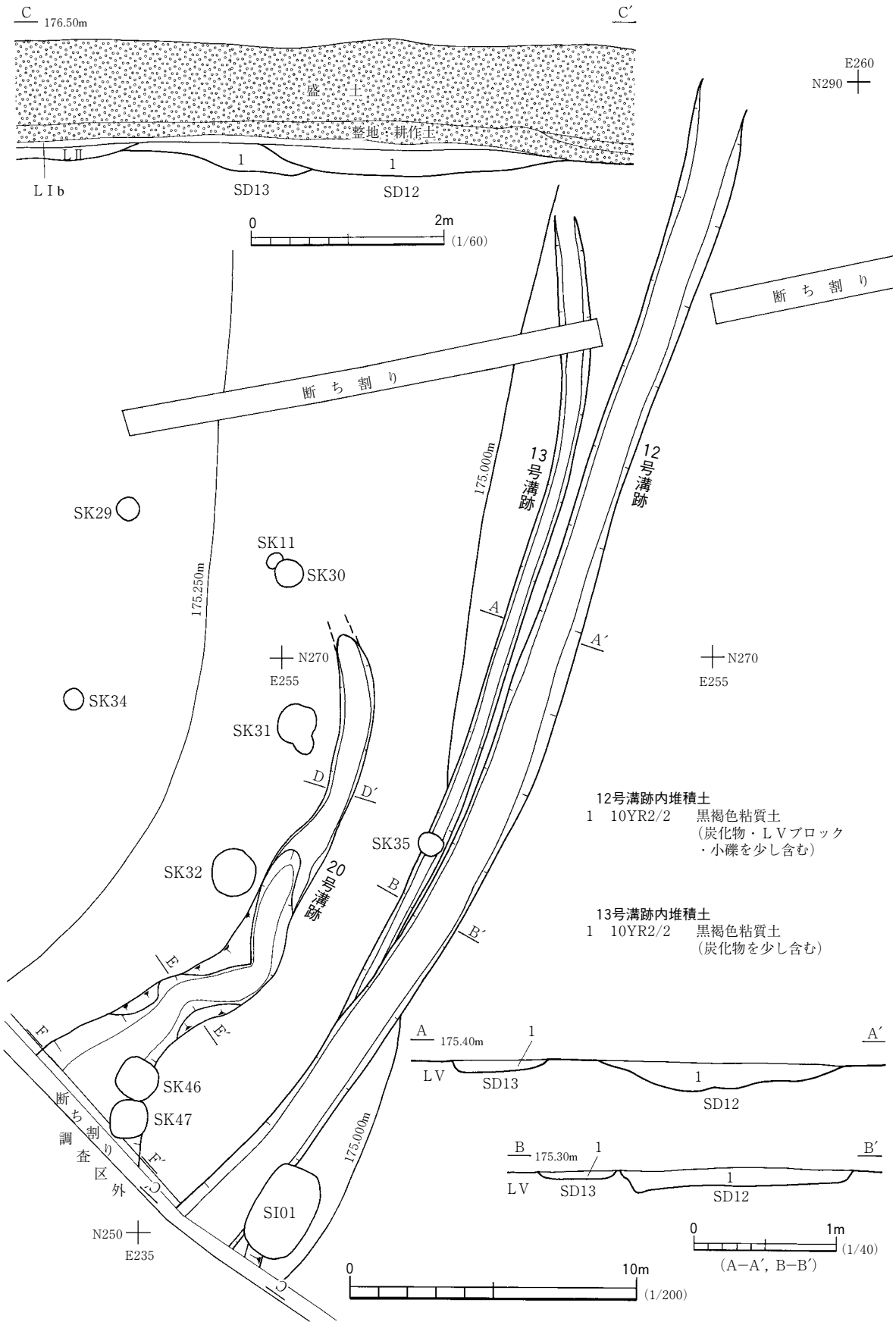



図41　12・13・20号溝跡(1)

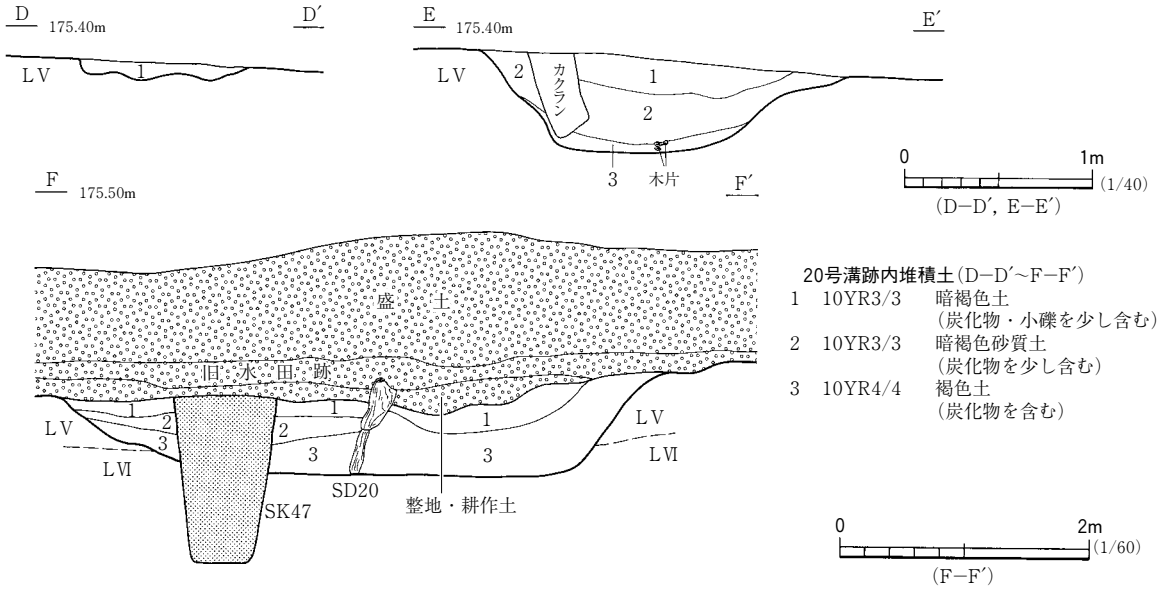



図42　12・13・20号溝跡(2)

遺物は12号溝跡から土師器・陶磁器・かわらけ・鉄滓・羽口片等計27点が出土し，うち遺存状態の比較的良好な４点について掲載した。図45－５は須恵器脚部片と思われ，６はロクロ成形によるかわらけ小皿である。６の口端部はやや上方に摘み上げられており，推定口径8.7㎝，器高1.9㎝，推定底径5.9㎝である。７は玉縁状の口縁を有する白磁碗で，玉縁状の口縁部は大きく，推定口径16.1㎝を測る。８は小型の白磁四耳壺と思われ，上胴肩部に横位のブリッジ状の耳が貼り付く。耳には３条の型押沈線，耳下位と内面には段が認められる。７・８ともに内外面に灰白色の釉がかけられ，胎土は青灰色を呈し，緻密である。

本溝跡群の性格・所属時期は明確には断定できないが，貿易陶磁器やかわらけ等の出土遺物，重複関係等から判断して，中世前半期の12世紀後半頃に機能した自然流路跡と判断される。（井）

### 14号溝跡　ＳＤ14（図36・43，写真41）

本溝跡は調査区南西側のＯ・Ｐ－６～８グリッド，Ｌ・上面で検出した。本遺構は南東に向かって緩やかに傾斜する地形に位置する。重複する遺構はないが，周辺には29・33・34号土坑等が隣接する。遺構内堆積土は炭化物を含む暗褐色土の単層で，流入による堆積土と判断される。

溝跡はほぼ直線的で，検出できた規模は南北約9.8m，溝幅0.35m前後である。周壁は緩く立ち上がり，底面は南西側へ向かって緩傾斜している。南北での底面の高低差は，最大で11㎝である。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明であるが，規模や堆積土，隣接する遺構群等から判断して中世頃の所産の可能性が高いと考えられる。（菊　田）

### 15・16号溝跡　ＳＤ15・16（図36・38・43，写真37・41）

本溝跡群は調査区南西側のＯ・Ｐ－11グリッド，基盤層であるＬＶ上面で検出した。本遺構は南東に向かって緩やかに傾斜する地形に位置し，４号溝跡と５号溝跡のほぼ中間で検出された。重複

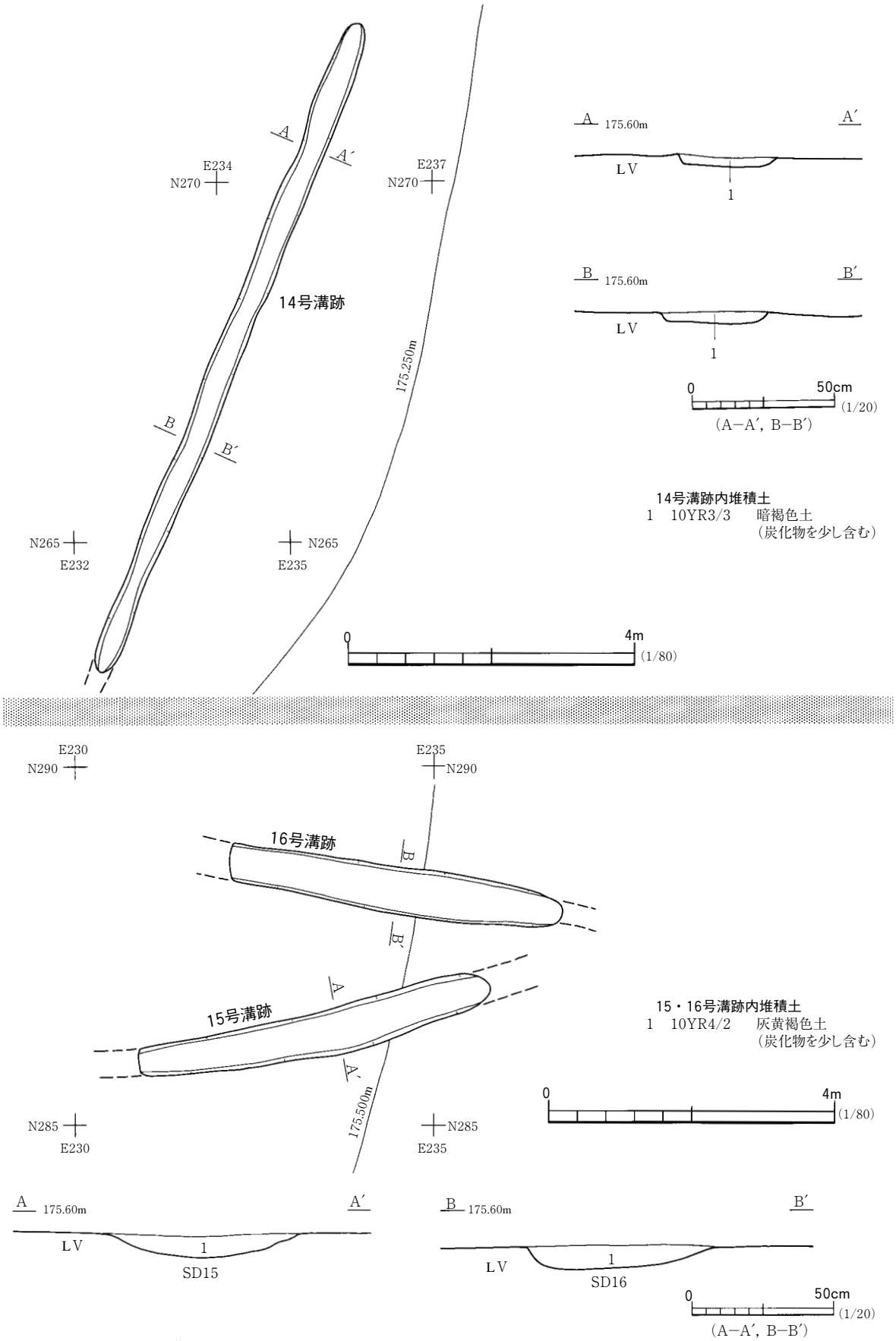

14号溝跡
A
A′
B
B′
E234
N270
E237
N270
175.250m
N265
E232
N265
E235
0
4m
(1/80)
A 175.60m
A′
LV
1
B 175.60m
B′
LV
1
0
50cm
(1/20)
(A−A′, B−B′)
14号溝跡内堆積土
1　10YR3/3　暗褐色土
(炭化物を少し含む)
E230
N290
E235
N290
16号溝跡
15号溝跡
175.500m
N285
E230
N285
E235
15・16号溝跡内堆積土
1　10YR4/2　灰黄褐色土
(炭化物を少し含む)
0
4m
(1/80)
A 175.60m
A′
LV
1
SD15
B 175.60m
B′
LV
1
SD16
0
50cm
(1/20)
(A−A′, B−B′)

図43　14～16号溝跡

する遺構はなく，周辺には28号土坑やピット群が隣接する。遺構内堆積土はともに炭化物を含む灰黄褐色土の単層で，ＬⅡにＬⅤブロックが混入した堆積土である。

溝跡は「ハ」字状に配され，検出できた規模はともに東西約５ｍ，溝幅約0.65ｍである。周壁は緩く立ち上がり，底面は東側へ向かって緩傾斜している。15・16号溝跡の東西での底面の高低差は，最大で７㎝程である。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明であるが，隣接する遺構群等から判断して中世以降に機能していた可能性が考えられる。（菊　田）

### 17号溝跡　ＳＤ17（図44，写真37）

本溝跡は調査区南東側のＵ・Ｖ－８，Ｖ－９グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で，23号溝跡と上下に重複しており，本遺構の方が新しい。遺構内堆積土は暗灰色を呈する粘性シルトの単層である。炭化物粒及び橙色シルト粒が斑状に少量混入しており，自然流入土と考えている。

溝跡の規模は，全長9.7ｍ，最大幅0.80ｍ，最小幅0.45ｍで，検出面からの深さは約0.10ｍを測り，今回調査した溝跡の中では小さい方である。軸線は円を描くように「ノ」字形に湾曲しており，短い距離で北側と南側それぞれが収束しているため，傾斜方向は判断できなかった。底面はほぼ平坦で周壁は緩やかに立ち上がっており，断面形は皿状を呈する。

本溝跡の周辺に関連性のある遺構を確認することはできず，また遺物の出土もないため，所属時期及び機能を特定することはできなかった。（小笠原）

### 20号溝跡　ＳＤ20（図36・41・42・45，写真38・41・66）

本溝跡は調査区南西側のＯ～Ｑ－４～８グリッドにかけて位置する。南西側は調査区外に延びており，遺構の全容は不明である。検出面はＬⅤ上面で，南西側で46・47号土坑と重複しており，いずれの土坑にも切られているため，本遺構の方が古い。遺構内堆積土は３層に分けることができた。いずれも褐色を基調としたシルトで，ℓ１には小礫，ℓ３には流木片が混入していた。ℓ２には砂質土がラミナ状に堆積しており，数度に渡って流水した痕跡が認められる点や，土質等から判断して自然流入土と考えている。

溝跡は地形的に南東へ向かって緩やかに傾斜する地点に位置し，地形に平行するように「ノ」字形に認められた。調査区内で確認できた溝跡の規模は，長さ約20ｍ，最大幅約3.8ｍ，検出面からの深さは最深部で1.2ｍを測る。底面はほぼ平坦であるが，北側では凹凸がみられた。周壁は全体的になだらかに立ち上がっているが，地形的に下位斜面の南西側では比較的急峻な傾向がある。

遺物は，小さく蛇行するＱ－６グリッド付近のℓ１から多く出土した。土師器・かわらけ・須恵器・陶磁器類など総計75点が出土し，遺存状態の良好な14点について図45－９～22に掲載した。９～11は須恵器片，12～15は白磁・青磁，16～21は本郷焼，22は煙管である。９・10は器形的に小型瓶類の底部片と思われ，11は外面に平行叩きが施された甕胴部片である。12は内面に櫛描

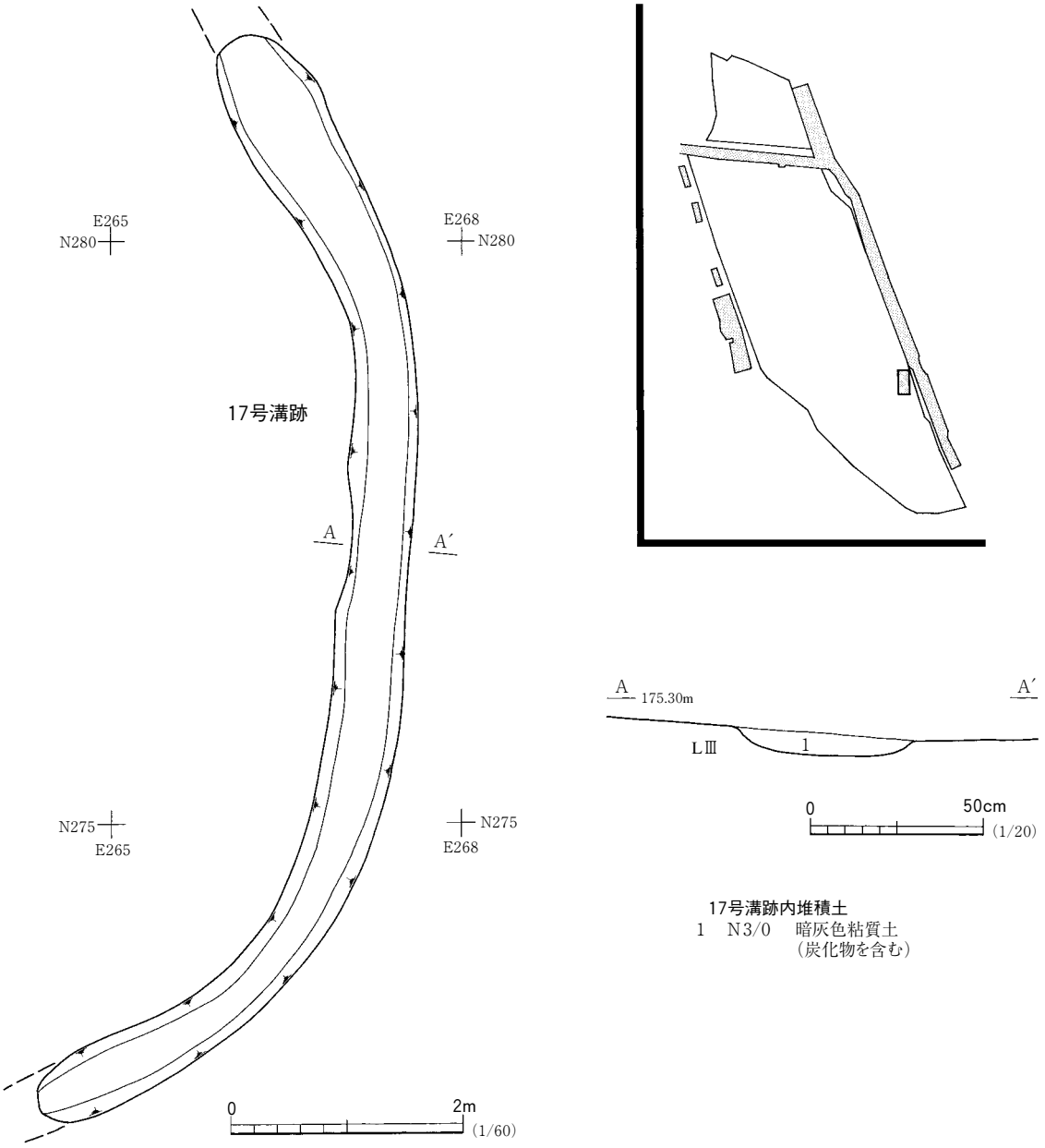



図44　17号溝跡

文が施された端反り口縁の白磁碗，13は内面に刻花文が施文された青磁碗である。いずれも胎土は灰白色・緻密であり，内外面が施釉されている。14・15は13より釉調が悪い青磁碗の破片資料である。12・13は12世紀後半～13世紀頃，14・15は14～15世紀頃に比定される資料であろう。16～21は本郷焼と思われ，16は型作りの紅皿，17は染め付け碗，18は鉄釉白流し釉徳利である。19～21は擂鉢で，20の内面には卸し目が認められる。22は青銅製（銅と錫系の合金）の煙管で，雁首付根と側面に明瞭な繋ぎ目が認められる。

本溝跡は南西へ延びるに従い幅・深さ共に規模が大きくなる自然流路跡である。所属時期は46・47号土坑より古く，流入した出土遺物等を考慮すると，近世頃に比較的短い期間機能していた流路跡と判断される。（小笠原）

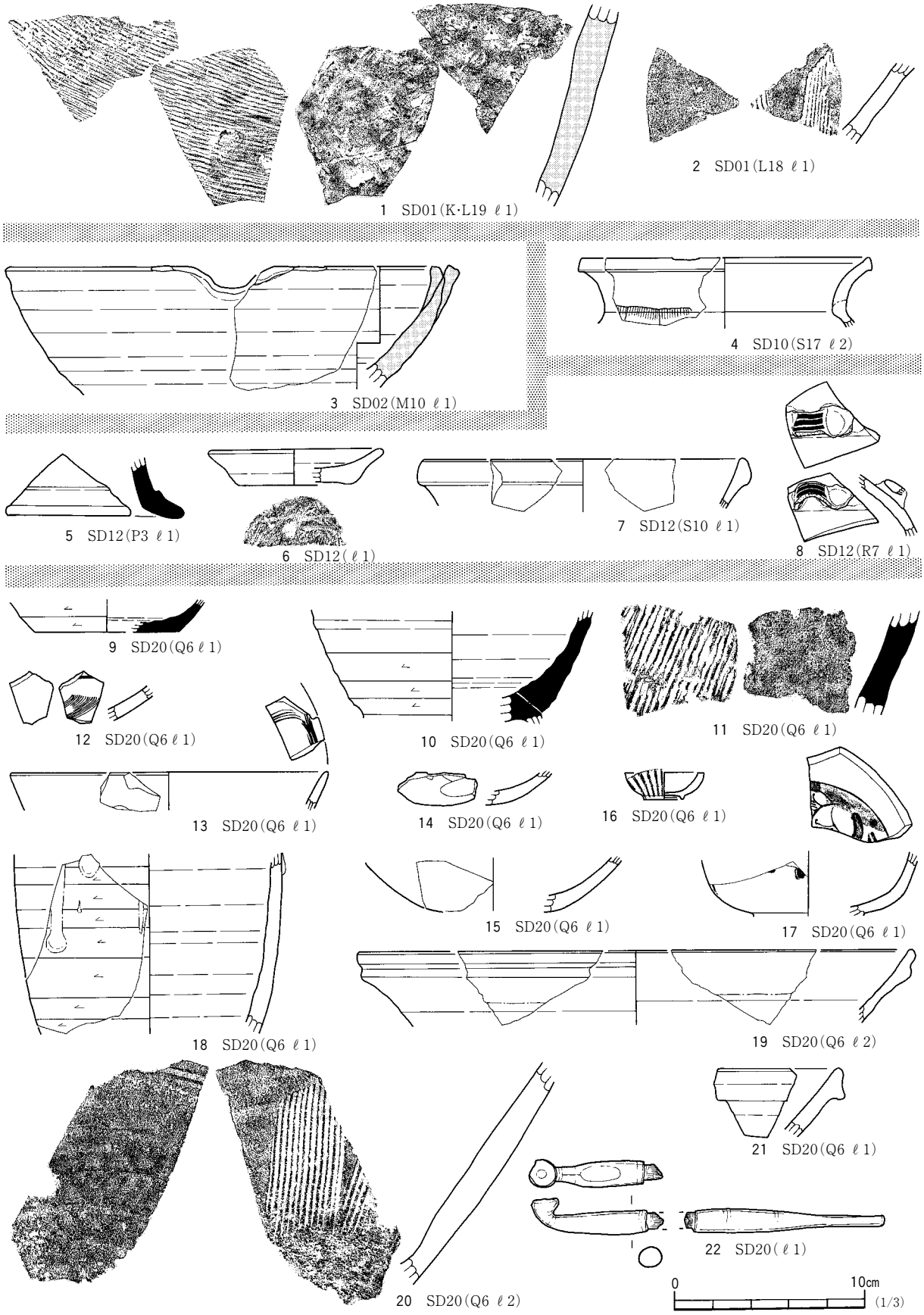



図45　１・２・10・12・20号溝跡出土遺物

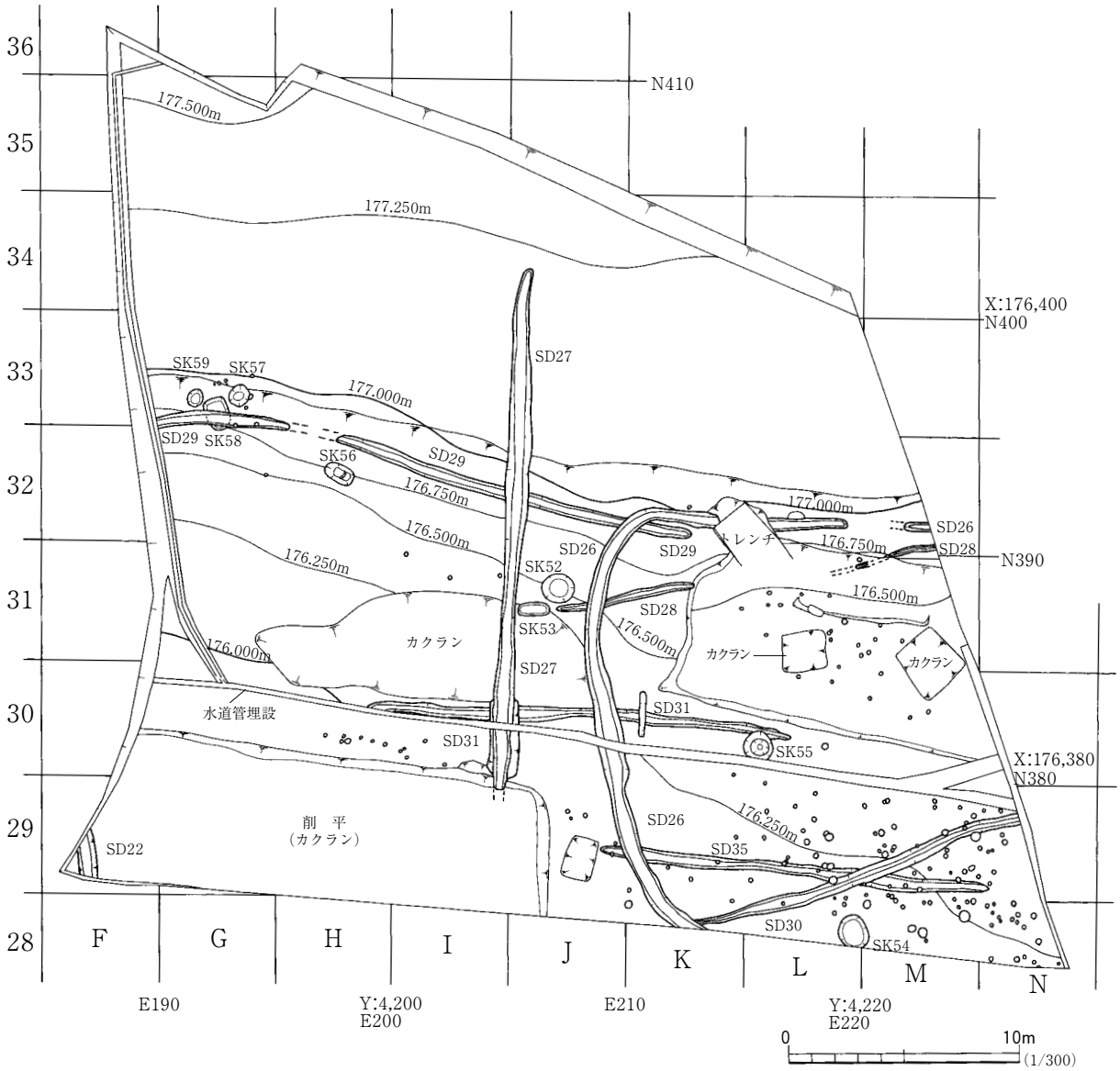



図46　調査区北側溝跡

## ２．調査区北側（22・26～31・35号溝跡）

### 22号溝跡　ＳＤ22（図46・47，写真48）

本溝跡は調査区北西境であるＦ－29グリッドで検出した。本遺構が構築されていた周辺は下水管や農道基礎工事等によって著しく削平されていた場所であり，基盤層であるＬＶで検出した。重複する遺構はなく，付近からも削平が著しいため遺構は確認されていない。遺構内堆積土は炭化物を含む黒褐色土の単層である。

調査区内で確認できた溝跡の長さは南北約1.8m，溝幅約１m，深さは0.20m程である。周壁は緩く立ち上がり，底面はほぼ平坦で，僅かに南側へ向かって緩傾斜している。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明である。（井）

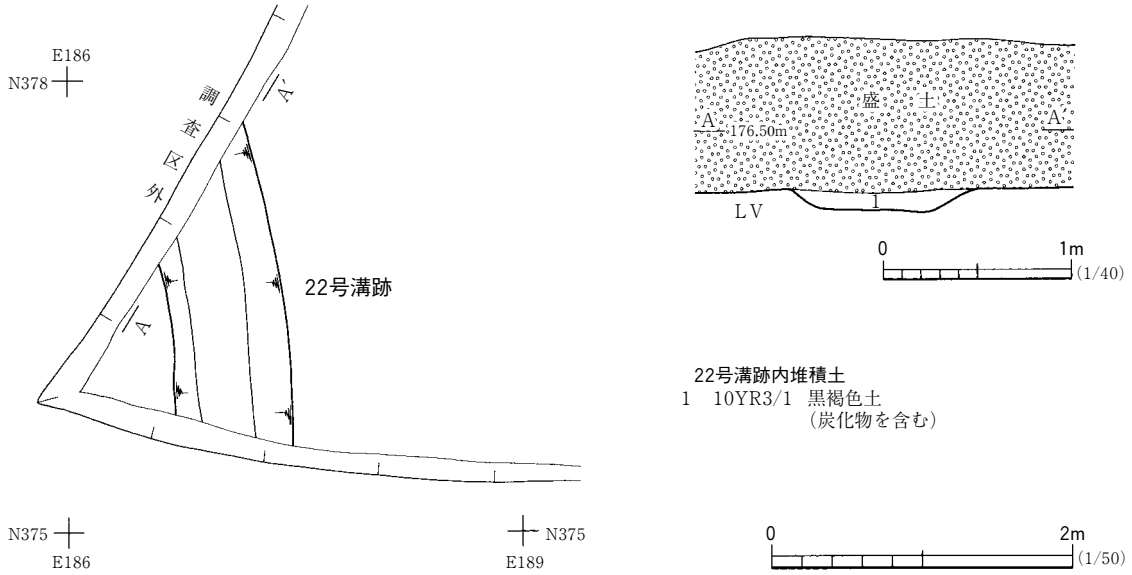



図47　22号溝跡

### 26号溝跡　ＳＤ26（図46・48・53，写真50～52）

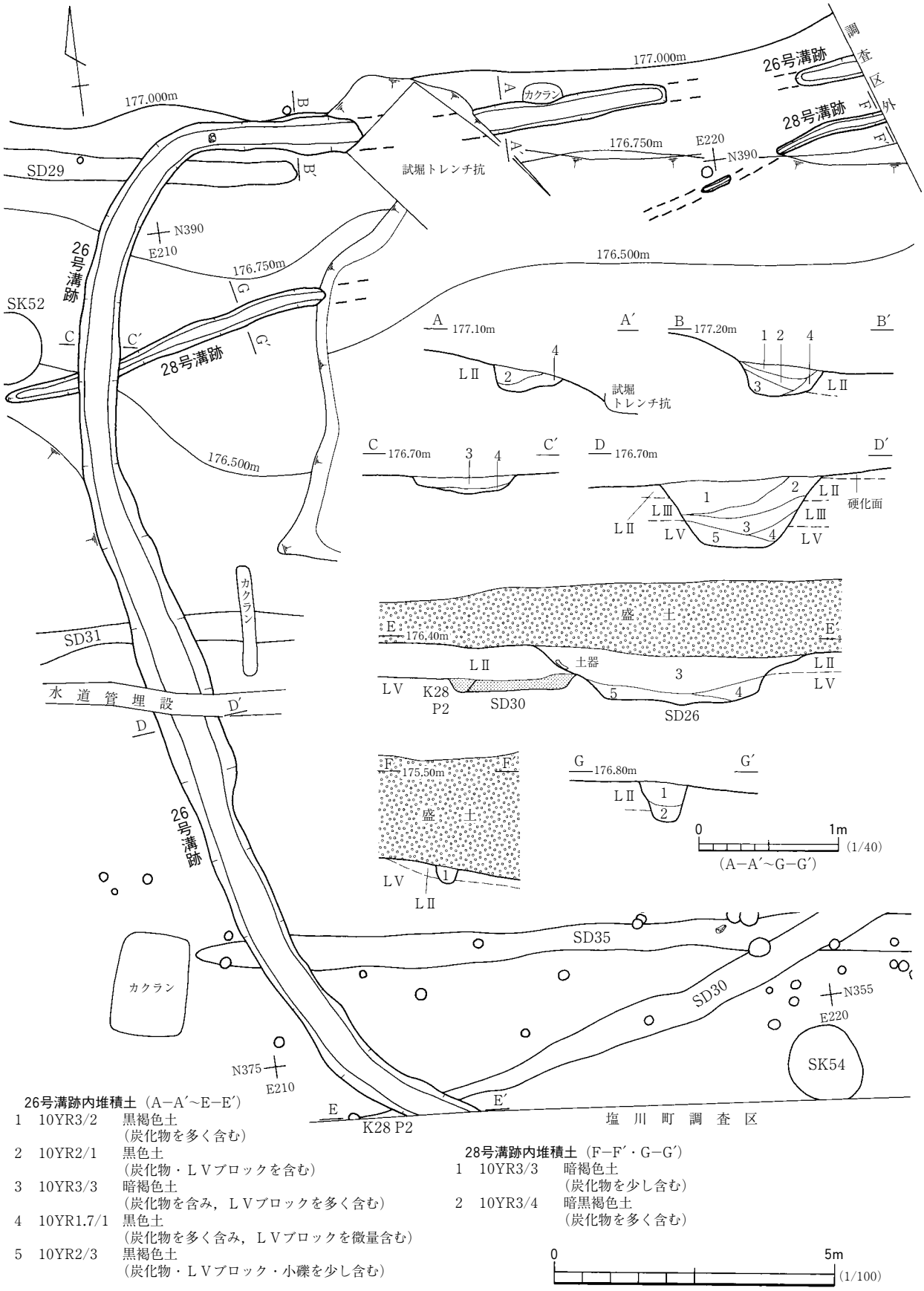
本溝跡は調査区北側のＪ～Ｍ－28～32グリッドで検出した遺構であり，塩川町調査Ｂ区で検出された１号溝跡に連続する。本遺構が構築されていた周辺は，後世の削平が著しい場所であり，ＬⅡ・Ⅲが一部欠層していた。そのため，遺存状態の比較的良い北側ではＬⅡ上面で検出しているが，一部ＬＶ上面で検出した場所もある。地形的に南側へ向かって緩やかに傾斜する地点に位置し，28～31・35号溝跡と重複している。重複関係は本溝跡が最も新しい。

遺構内堆積土は大きく５層に分層できた。炭化物を含む黒褐色系のシルトで，ℓ２下位層にはＬＶブロック，最下層のℓ５には３～５㎝程の小礫が混入している。斜面上位の壁側からの流入堆積状況や中央部が窪むレンズ状の堆積が認められることから，自然流入による堆積土と判断される。

溝跡はＫ－28・32グリッド付近で「コ」字状に屈曲する形状を呈し，調査区内で検出できた規模は東西辺約12m，南北辺約18m，溝幅0.5～1.3mである。周壁は緩く立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦であり，南側へ向かって緩傾斜している。溝跡の北東側と南西側では底面の高低差は最大で78㎝程である。

遺物はℓ１～３の上層から多く出土した。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器類など総数138点の破片資料が得られ，比較的遺存状態の良好な５点について図53－１～５に掲載した。１～３はロクロ成形による内面黒色処理が施された土師器杯で，１～３の体部下位には回転ヘラケズリ，３の底部外縁には手持ちヘラケズリ再調整が加えられている。１の外面体部中央には判読不明な墨書痕が認められる。４は非ロクロ成形の土師器甕の口縁部破片資料である。５は須恵器甕の胴部片で，外面に平行叩き，内面には同心円のアテ具痕が認められる。

本溝跡の性格については，周辺に隣接する土坑やピット群等との明確な関係が認められなかったため不明であるが，「コ」字状に屈曲する形状を呈することから何らかの施設を区画する溝跡と考え




**26号溝跡内堆積土**（A−A′〜E−E′）

1　10YR3/2　黒褐色土
（炭化物を多く含む）

2　10YR2/1　黒色土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）

3　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を含み，ＬＶブロックを多く含む）

4　10YR1.7/1　黒色土
（炭化物を多く含み，ＬＶブロックを微量含む）

5　10YR2/3　黒褐色土
（炭化物・ＬＶブロック・小礫を少し含む）

**28号溝跡内堆積土**（F−F′・G−G′）

1　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を少し含む）

2　10YR3/4　暗黒褐色土
（炭化物を多く含む）

0　5m
(1/100)

図48　26・28号溝跡

られる。所属時期については遺構の重複関係や出土遺物等から判断して，古代～中世頃に機能していた可能性が高いと考える。（井）

### 27号溝跡　ＳＤ27（図46・49・53，写真50・51）

本溝跡は調査区北側のＩ・Ｊ－29～34グリッドで検出した。本遺構が構築されていた南半では著しく削平されていたため遺存状態が悪い。遺構周辺は地形的に南側へ向かって緩傾斜しており，下位斜面側ではＬⅡ上面，Ｉ・Ｊ－32グリッド上位ではＬ。直下が基盤層であるためＬＶ上面で検出した。重複関係は29・31号溝跡と重複しており，本溝跡が29・31号溝跡よりも新しい。遺構内堆積土は黒褐色系を基調としたシルトで，大きく４層に分層できた。いずれも炭化物を含み，下位層にはＬＶブロックが混入する自然流入土である。

溝跡はほぼ南北に直線的に配され，調査区内で検出できた規模は南北約23ｍ，溝幅0.5～1.2ｍである。周壁は緩く立ち上がる断面擂鉢状を呈するが，東壁側ではやや広がる形状を呈する。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦であり，南側へ向かって緩傾斜している。溝跡南・北底面の高低差は1.25ｍ程である。

遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・砥石など総数318点の多くの資料が得られたが，大半が細片であり，摩滅が著しいため４点のみ図53－６～９に掲載した。６は内面黒色処理が施された土師器杯の底部片である。７は須恵器長頸瓶の頸部片，８は内外面の摩滅が著しいため判然としないが，かわらけの口縁部資料であろうか。９は表面に使用痕である擦痕が認められる砥石の欠損品である。厚さ1.5㎝を測り，石質は流紋岩である。

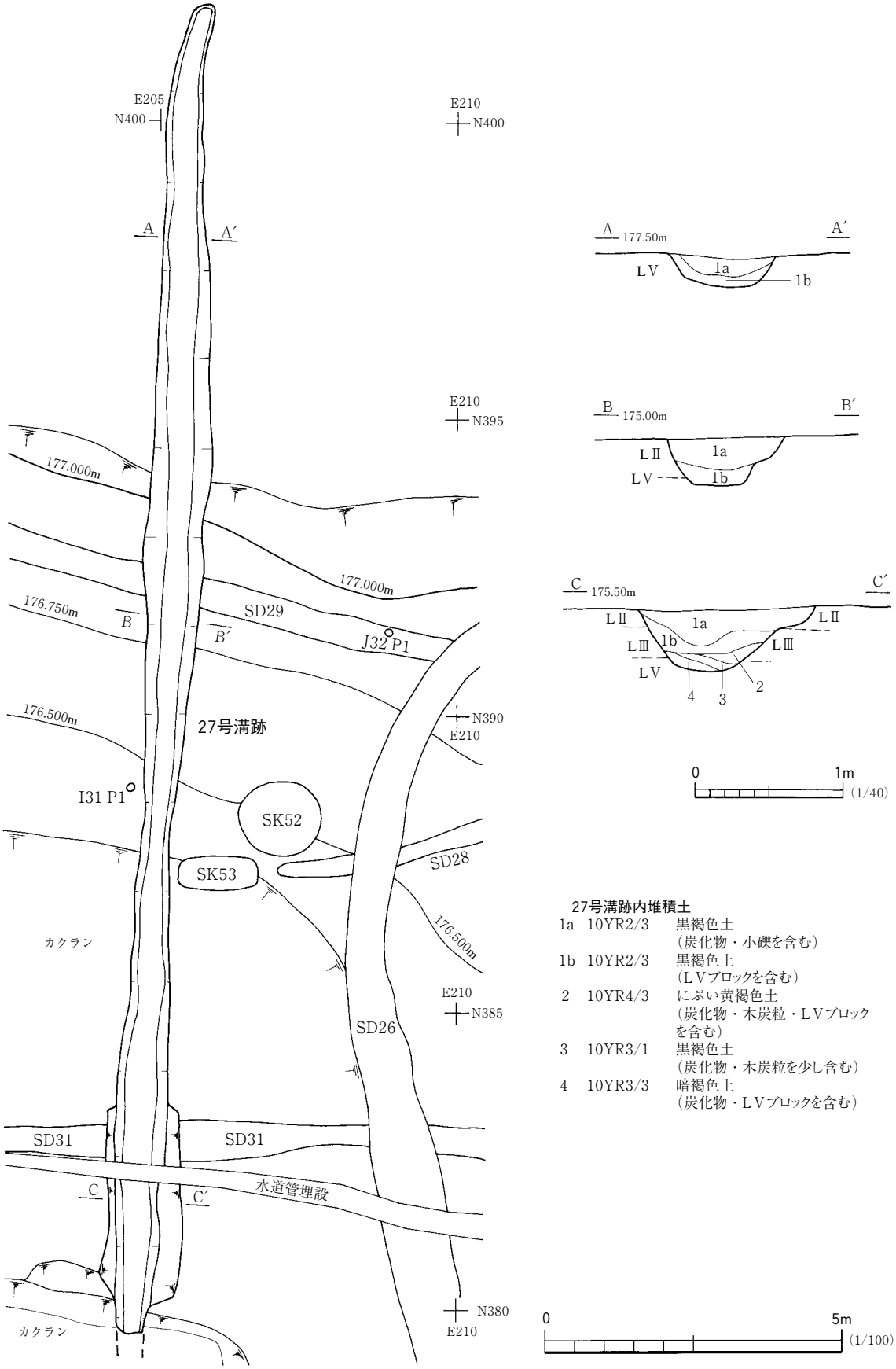
本溝跡の明確な所属時期・性格は不明であるが，重複する遺構や検出面等から判断して中世頃に機能していた可能性が高いと考えている。（井）

### 28号溝跡　ＳＤ28（図46・48・53，写真54）

本溝跡は調査区北側のＪ～Ｍ－31・32グリッドで検出した。途中大きく削平されているが，塩川町調査Ｂ区で検出された２号溝跡に連続する遺構である。検出面はＬⅡ上面である。26号溝跡と重複しており，本溝跡の方が古い。遺構内堆積土は２層に分けられるが，いずれも黒褐色系を基調としたシルトで，ＬⅡに起因する流入堆積である。

溝跡は東西に直線的に配されており，調査区内で検出できた規模は東西約17ｍ，溝幅0.15～0.30ｍである。周壁は垂直気味に立ち上がり，底面は若干凹凸があるがほぼ平坦で，東側へ向かって傾斜している。底面の高低差は東西で約65㎝である。

遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・かわらけなど総数30点が出土し，比較的遺存状態の良好な３点について図53－10～12に掲載した。いずれも口縁部の破片資料であり，判然としないが10は内面被熱した土師器杯，11は頸部が「く」字状に屈曲するロクロ成形による小型甕である。12はかわらけの小皿と思われる。




**27号溝跡内堆積土**

| | | |
|---|---|---|
| 1a | 10YR2/3 | 黒褐色土<br>（炭化物・小礫を含む） |
| 1b | 10YR2/3 | 黒褐色土<br>（ＬＶブロックを含む） |
| 2 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色土<br>（炭化物・木炭粒・ＬＶブロックを含む） |
| 3 | 10YR3/1 | 黒褐色土<br>（炭化物・木炭粒を少し含む） |
| 4 | 10YR3/3 | 暗褐色土<br>（炭化物・ＬＶブロックを含む） |

図49　27号溝跡

本溝跡の明確な所属時期・性格は不明であるが，重複する遺構や検出面等から判断して古代～中世頃に機能していた可能性が考えられる。（井）

### 29号溝跡　ＳＤ29（図46・50・53，写真54）

本溝跡は調査区北側のＧ～Ｋ－32・33グリッドで検出した。本遺構が構築されていた周辺には57～59号土抗やピット群が存在し，地形的に南側へ向かって緩傾斜している。検出面はＬⅡ上面で，58号土坑，26・27号溝跡等と重複している。重複関係は58号土坑より新しく，26・27号溝跡より古い。遺構内堆積土は黒褐色系を基調としたシルトで，２層に分層できた。いずれも炭化物を含む自然流入土である。

溝跡は地形と平行するようにやや蛇行しながら東西に配され，調査区内で検出できた規模は東西約6.2m，溝幅0.60m前後である。周壁は緩く立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。底面は若干凹凸があるがほぼ平坦であり，東西底面の高低差は殆どない。

遺物は縄文土器・弥生土器・土師器など総数27点出土し，うち比較的遺存状態の良好な３点について図53－13～15に掲載した。全て口縁部の破片資料で，摩滅が著しいため判然としないが，13は比較的器壁が厚い土師器杯，14は頸部が「く」字状に屈曲するロクロ成形の土師器甕，15は頸部が外反し，口端部が上方に摘み上げられている甕型土器である。いずれも外面口縁部付近には横位方向のナデ，頸部から体部上半には縦位方向へのナデ・ケズリ調整が認められる。

本溝跡の明確な所属時期・性格は不明であるが，重複する遺構や出土遺物等から判断して中世を遡るものではないと考えられる。（井）

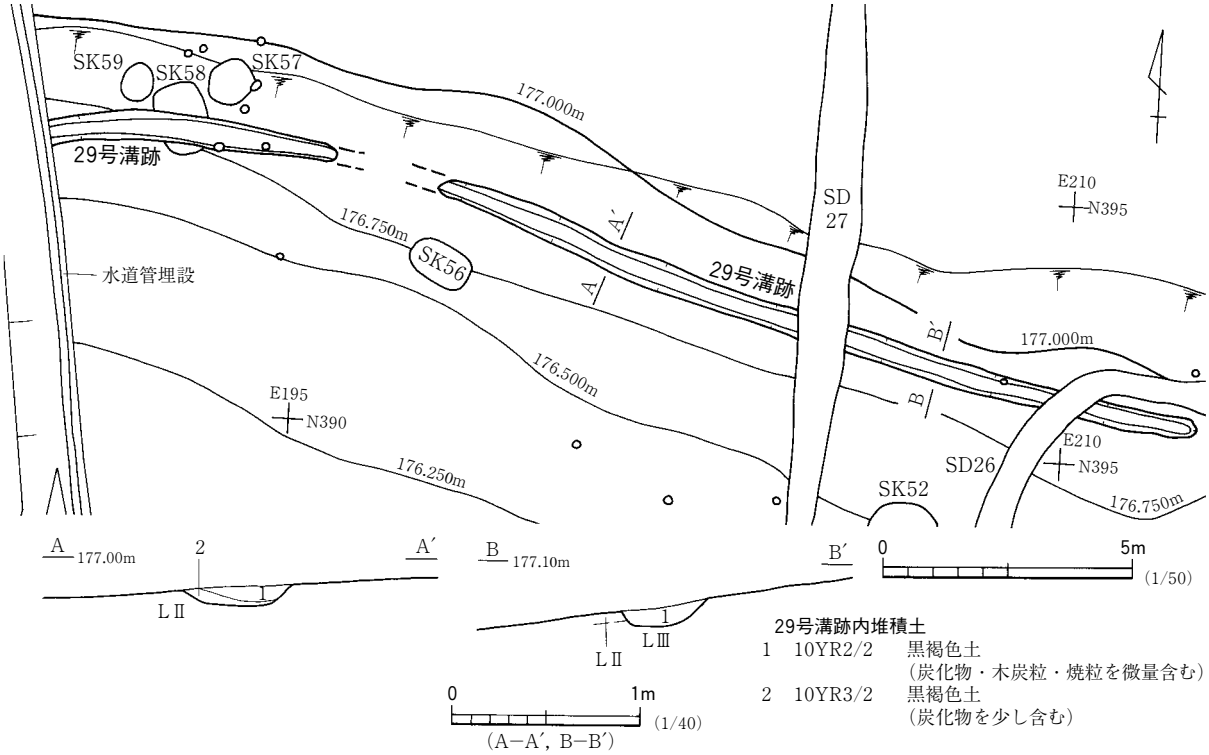



図50　29号溝跡

### 30号溝跡　ＳＤ30（図46・51・53，写真53・54）

本溝跡は調査区北側のＧ～Ｋ－32・33グリッドで検出した。塩川町調査Ａ区で検出された３号溝跡に連続する遺構である。本遺構が構築されていた周辺には多くの遺構群が存在し，地形的にほぼ平坦な位置にある。検出面は遺存状態の良い東側ではＬⅡ下面，西側ではＬⅤ上面である。重複関係は26・35号溝跡やピット群と重複しており，35号溝跡より新しく，26号溝跡より古い。また，本溝跡よりピット群の方が新しい。遺構内堆積土は黒褐色を基調とする堆積土で，２層に分層できた。いずれも炭化物を含み，下層にＬⅤブロックが混入する自然流入土である。

溝跡は若干蛇行しながら東西に配され，調査区内で検出できた規模は東西約16ｍ，溝幅0.45～0.70ｍである。周壁は緩く立ち上がり，断面形は擂鉢状を呈する。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦で，南西側へ向かって緩やかに傾斜している。底面の高低差は東西で24㎝程である。

遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・かわらけなど総数24点出土し，うち比較的遺存状態の良好な２点について図53－16・17に掲載した。全て口縁部の破片資料で，摩滅が著しいため判然としないが，16はミガキ・ナデ調整が加えられた非ロクロ成形の土師器の口縁部資料，17はかわらけの柱状高台脚部であろう。

本溝跡の明確な所属時期・性格は不明であるが，重複する遺構や出土遺物等から判断して中世前半期に機能していた可能性が考えられる。（井）

### 31号溝跡　ＳＤ31（図46・52，写真55）

本溝跡は調査区北側のＨ～Ｌ－30グリッドで検出した。本遺構が構築されていた周辺は削平されていたため，遺存状態は悪い。地形的には南側へ向かって緩やかに傾斜しているが，比較的平坦な位置に構築されている。上位層が削平・盛土されているため，ＬⅡで検出している。重複関係は55号土坑，26・27号溝跡と重複しており，本溝跡が切られているため最も古い。遺構内堆積土は炭化物を含む灰黄褐色土の単層で，ＬⅡにＬⅤブロックが混入した堆積土である。

溝跡は東西にほぼ直線的に配され，検出できた規模は東西約18ｍ，溝幅0.45～0.56ｍである。周壁は緩く立ち上がり，底面は西側へ向かって緩傾斜している。溝跡の東西での底面の高低差は，最大で22㎝程である。溝跡内からは縄文土器・土師器・鉄製品など総計38点の遺物が出土したが，全て細片資料で摩滅が著しいため，図示しなかった。

本溝跡は明確な所属時期・性格は不明であるが，遺構の重複関係や隣接する遺構群等から判断して，古代～中世頃に機能していた可能性が高い。（井）

### 35号溝跡　ＳＤ35（図46・51，写真53・55）

本溝跡は調査区北側のＪ～Ｍ－29グリッドで検出した。本遺構が構築されていた周辺には多くのピットが存在し，地形的にほぼ平坦な位置にある。上位が削平されＬⅡ・Ⅲが欠層しているため，

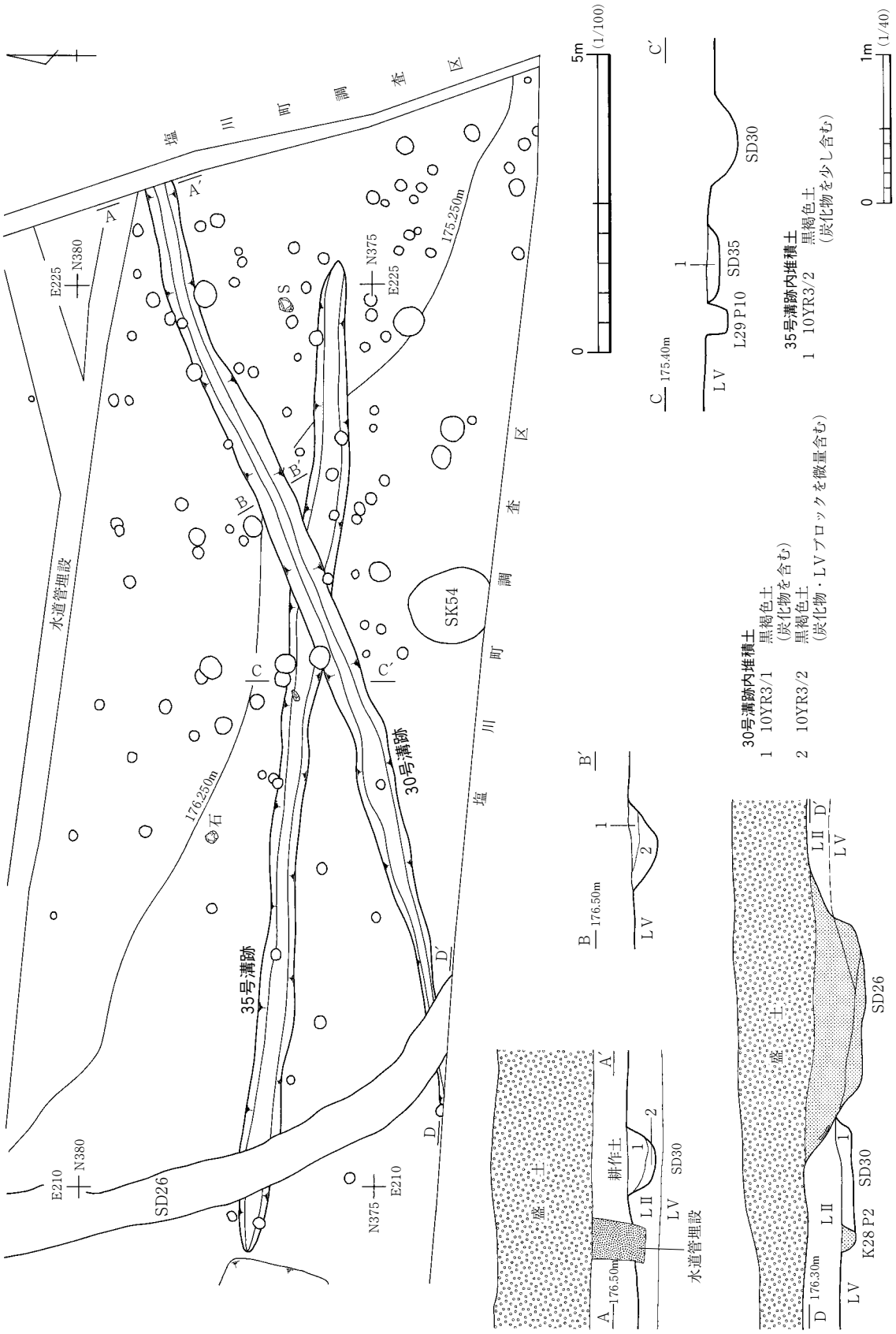

塩川町調査区
水道管埋設
SK54
30号溝跡
35号溝跡
SD26
SD30
SD35
175.250m
176.250m
176.50m
175.40m
176.30m
N380
N375
E225
E210
5m (1/100)
1m (1/40)
30号溝跡内推積土
1 10YR3/1 黒褐色土 (炭化物を含む)
2 10YR3/2 黒褐色土 (炭化物・LVブロックを微量含む)
35号溝跡内推積土
1 10YR3/2 黒褐色土 (炭化物を少し含む)
盛土
耕作土
LII
LV
L29 P10
K28 P2

図51　30・35号溝跡

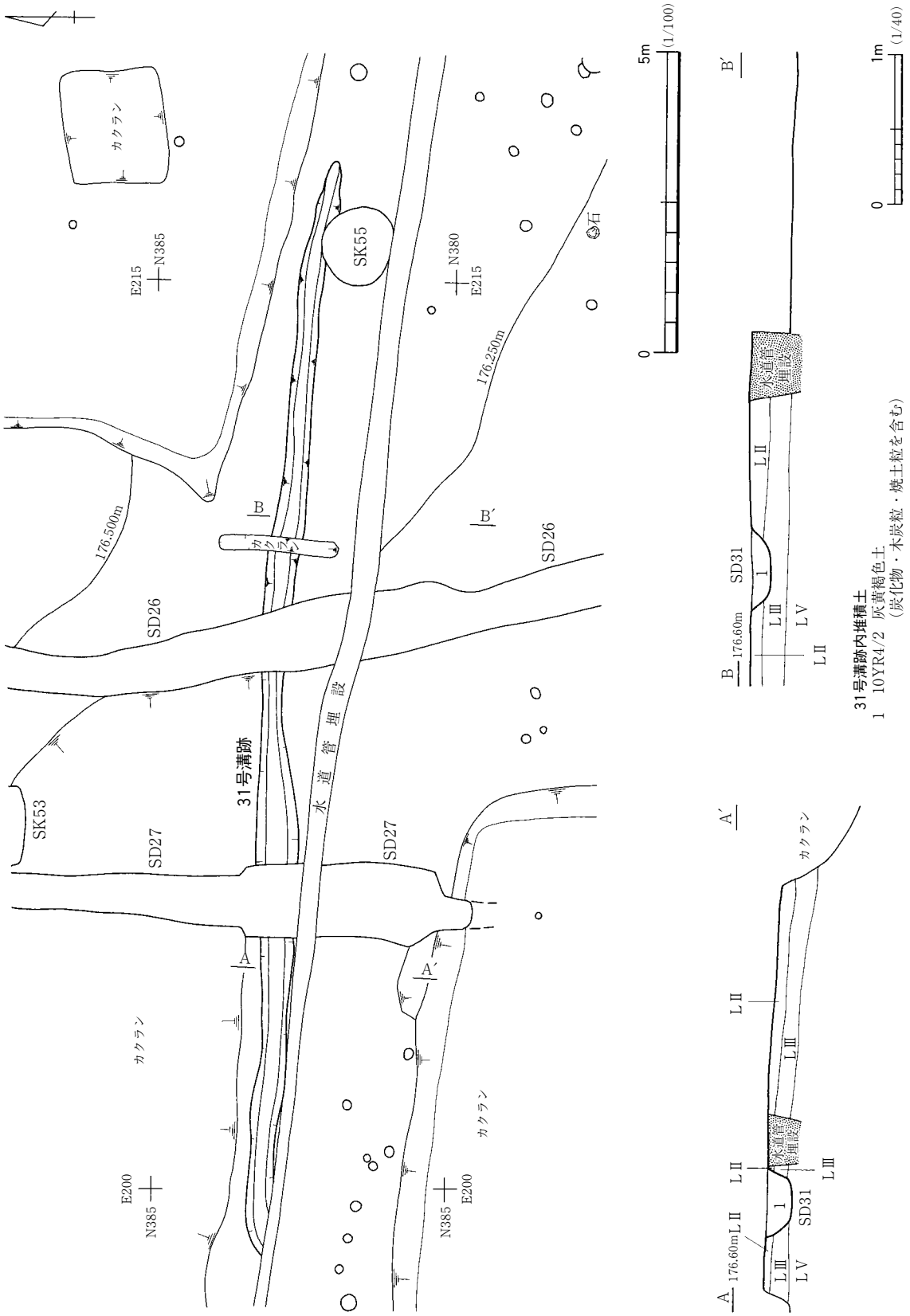

カクラン
E215
N385
SK55
N380
E215
176.250m
176.500m
B
B′
SD26
SD26
31号溝跡
水道管埋設
SK53
SD27
SD27
A
A′
カクラン
カクラン
E200
N385
E200
N385
5m
0
(1/100)
B′
水道管埋設
LⅡ
SD31
1
LⅢ
LⅤ
LⅡ
B
176.60m
31号溝跡内堆積土
1　10YR4/2　灰黄褐色土
（炭化物・木炭粒・焼土粒を含む）
1m
0
(1/40)
A′
カクラン
LⅡ
LⅢ
水道管埋設
LⅡ
LⅢ
1
SD31
A
176.60m
LⅡ
LⅢ
LⅤ

図52　31号溝跡

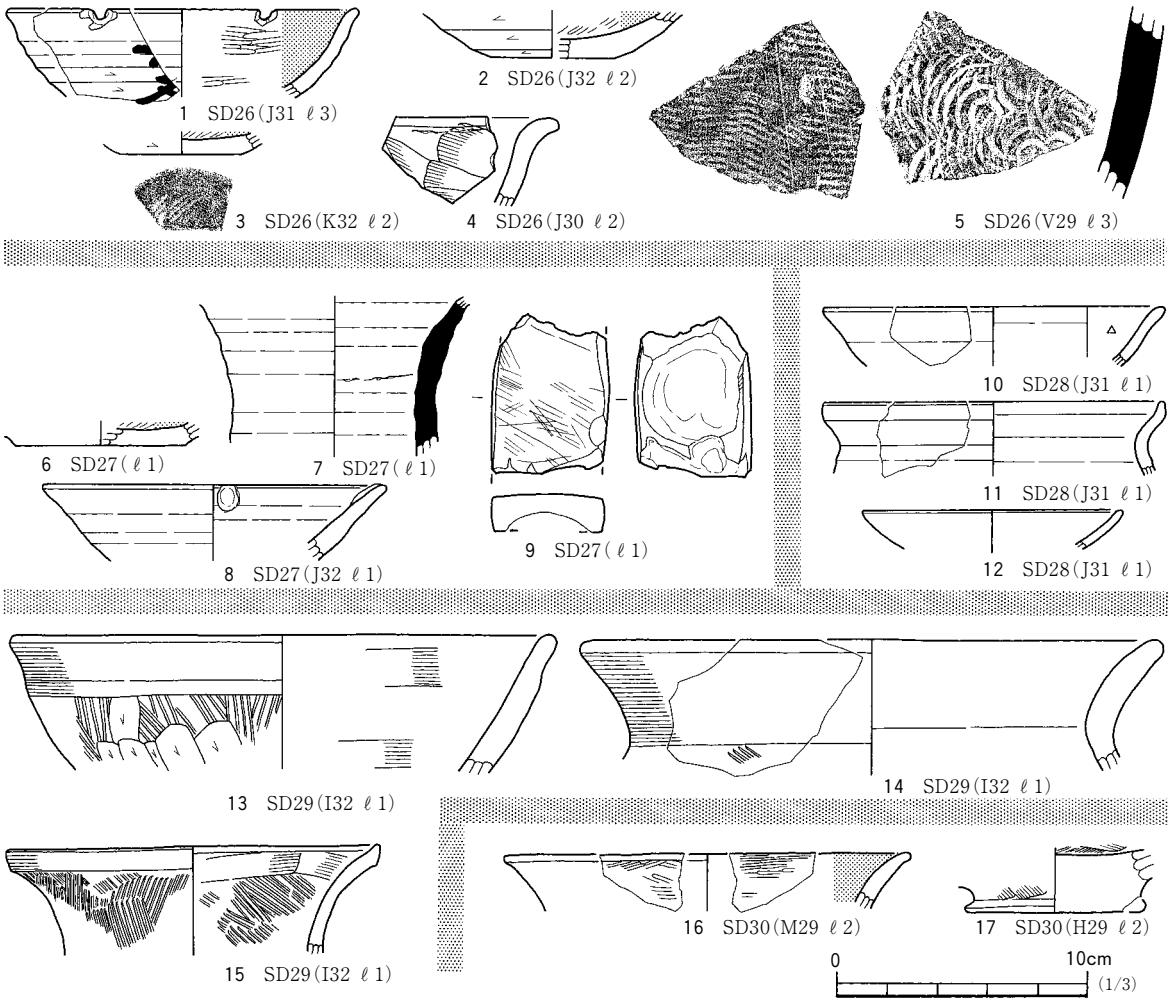



図53　26～30号溝跡出土遺物

検出面はＬＶである。重複関係は26・30号溝跡やピット群と重複しており，本溝跡が最も古い。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で，炭化物を含む混入した流入堆積土である。

溝跡は東西に直線的に配されており，検出できた規模は東西約17ｍ，溝幅0.50ｍ程である。周壁は緩く立ち上がり，深さは７㎝程である。底面はやや凹凸があるがほぼ平坦で，東西での底面の高低差は殆どない。

本溝跡からは出土遺物がないため，明確な所属時期・性格は不明であるが，重複関係や隣接する遺構群等から判断して中世以前に機能していた可能性が考えられる。（井）

## ３．調査区南側（21・23～25・33・34号溝跡）

### 21号溝跡　ＳＤ21（図54～69，写真39・42～47・49・67～77）

本溝跡は，調査区南側のＱ～Ｖ－２～11グリッドにかけて確認した遺構で，Ｕ－９グリッド付近でほぼ直角に曲がり，南西調査区外へとさらに延伸する。本遺構が構築されていた周辺は，地形的に南側へ向かって緩傾斜しており，やや蛇行しながら比高を減じる南西側は自然河川跡と判断される

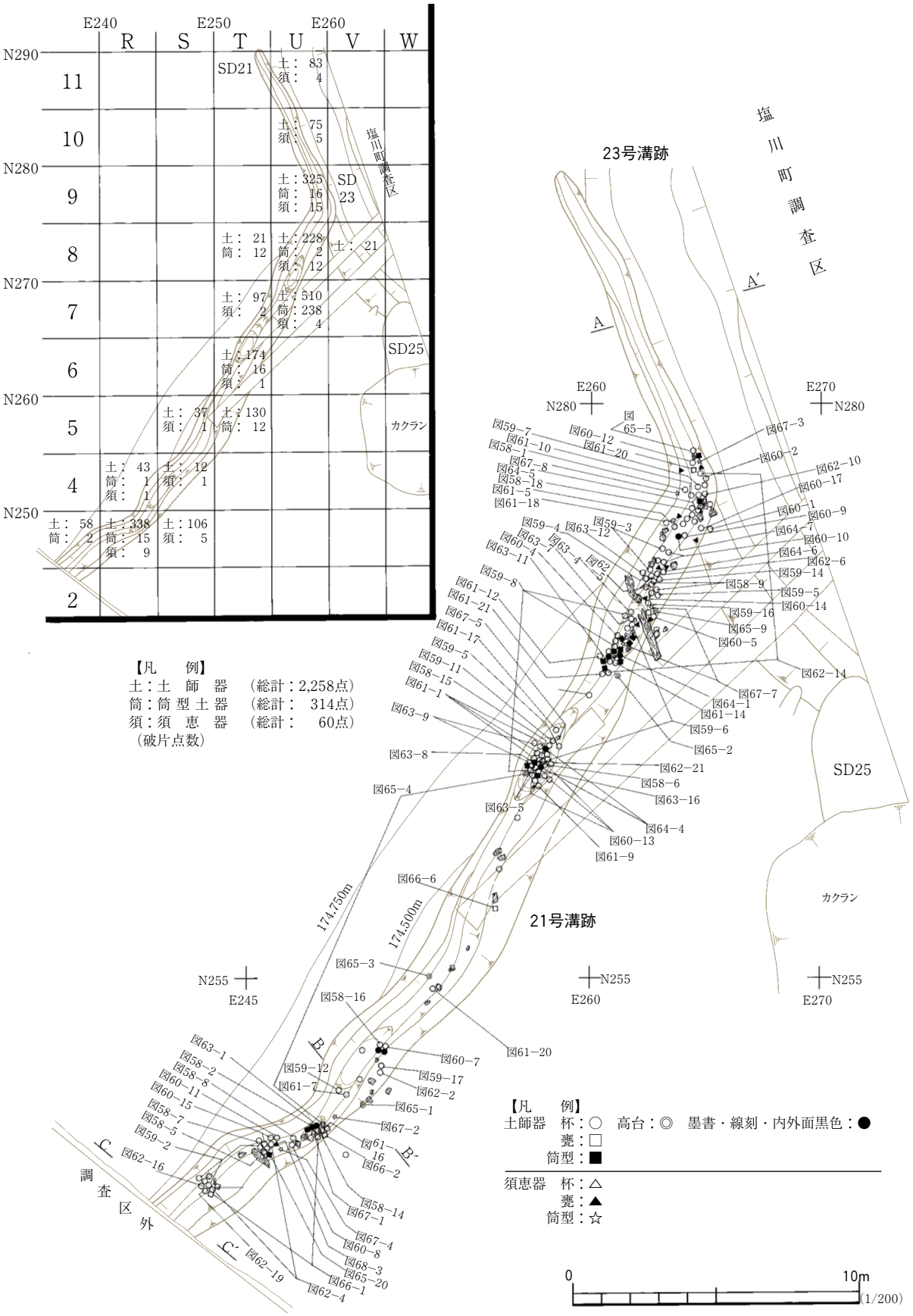

E240
E250
E260
R
S
T
U
V
W
N290
N280
N270
N260
N250
11
10
9
8
7
6
5
4
2
SD21
土： 83
須： 4
土： 75
須： 5
土：325
筒： 16
須： 15
SD
23
土： 21
土：228
筒： 2
須： 12
土： 21
土： 97
須： 2
土：510
筒：238
須： 4
土：174
筒： 16
須： 1
SD25
土： 37
須： 1
土：130
筒： 12
カクラン
土： 43
筒： 1
須： 1
土： 12
須： 1
土： 58
筒： 2
土：338
筒： 15
須： 9
土：106
須： 5
塩川町調査区
23号溝跡
塩川町調査区
A
A′
E260
N280
E270
N280
図65−5
図59−7
図60−12
図61−20
図61−10
図58−1
図67−8
図64−3
図58−18
図61−5
図61−18
図67−3
図60−2
図62−10
図60−17
図60−1
図60−9
図64−7
図60−10
図64−6
図62−6
図59−14
図59−3
図59−4
図63−12
図63−7
図63−4
図62−5
図60−4
図63−11
図58−9
図59−5
図60−14
図59−8
図61−12
図61−21
図67−5
図61−17
図59−5
図59−11
図58−15
図61−1
図59−16
図65−9
図60−5
図62−14
図67−7
図64−1
図61−14
図59−6
図65−2
図63−9
図63−8
図62−21
図58−6
図63−16
図65−4
図63−5
図64−4
図60−13
図61−9
SD25
図66−6
174.750m
174.500m
21号溝跡
カクラン
図65−3
N255
E245
N255
E260
N255
E270
図58−16
図61−20
B
図60−7
図59−12
図61−7
図59−17
図62−2
図65−1
図67−2
図63−1
図58−2
図58−8
図60−11
図60−15
図58−7
図58−5
図59−2
図62−16
C
図61−16
図66−2
B′
図58−14
図67−1
図67−4
図60−8
図68−3
図65−20
図66−1
図62−4
図62−19
C′
調査区外
【凡　例】
土：土　師　器　（総計：2,258点）
筒：筒 型 土 器　（総計：　314点）
須：須　恵　器　（総計：　　60点）
（破片点数）
【凡　例】
土師器　杯：○　高台：◎　墨書・線刻・内外面黒色：●
甕：□
筒型：■
須恵器　杯：△
甕：▲
筒型：☆
0
10m
(1/200)

図54　21号溝跡（１）

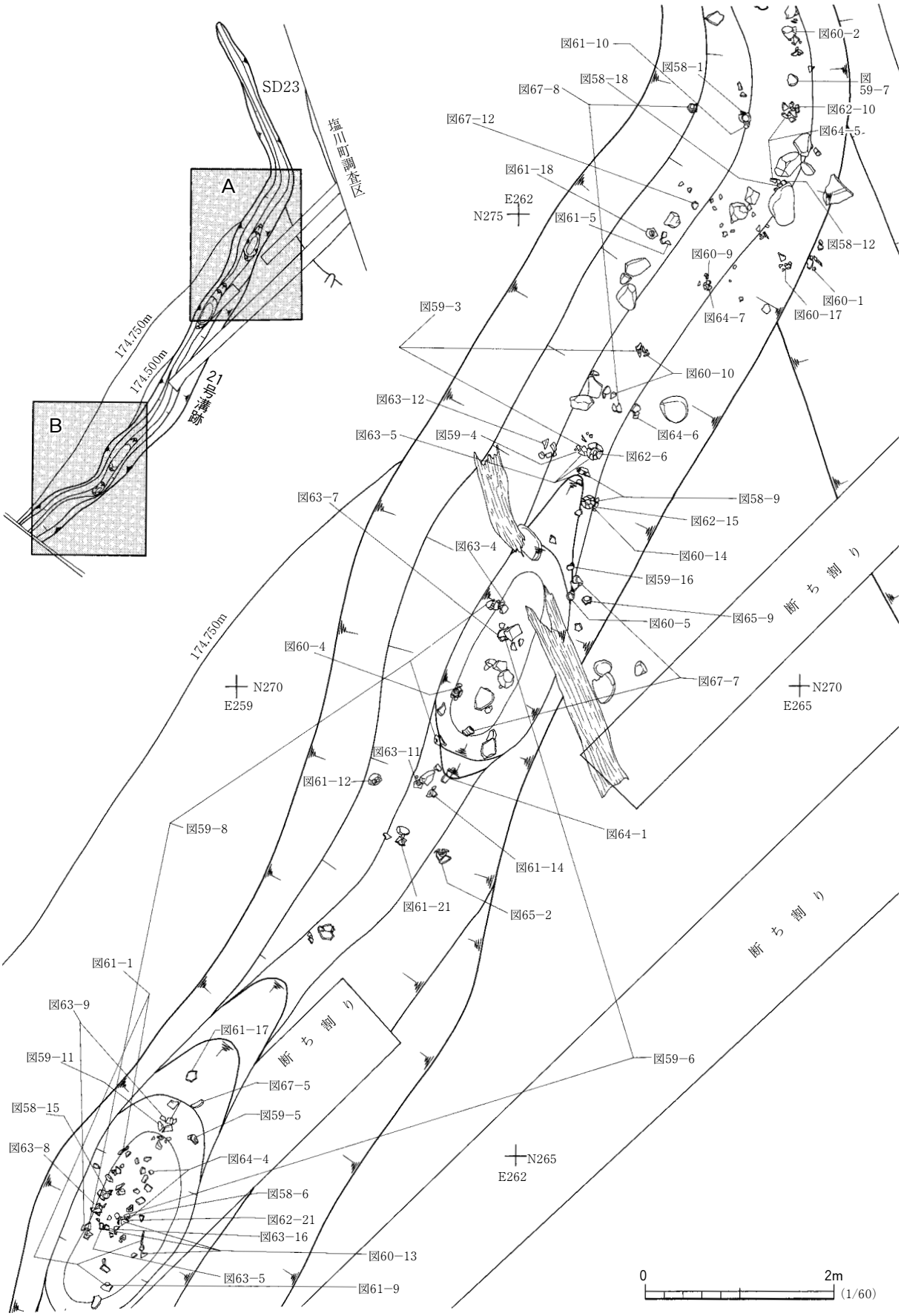

SD23
塩川町調査区
A
B
174.750m
174.500m
21号溝跡
174.750m
N275
E262
N270
E259
N270
E265
N265
E262
断ち割り
断ち割り
断ち割り
図61−10
図58−1
図58−18
図67−8
図67−12
図61−18
図61−5
図60−2
図59−7
図62−10
図64−5
図58−12
図60−9
図64−7
図60−1
図60−17
図59−3
図60−10
図63−12
図64−6
図63−5
図59−4
図62−6
図58−9
図63−7
図62−15
図63−4
図60−14
図59−16
図65−9
図60−5
図60−4
図67−7
図63−11
図61−12
図64−1
図59−8
図61−14
図61−21
図65−2
図61−1
図63−9
図61−17
図59−11
図67−5
図59−6
図58−15
図59−5
図63−8
図64−4
図58−6
図62−21
図63−16
図60−13
図63−5
図61−9
0
2m
(1/60)

図55　21号溝跡（２）　A

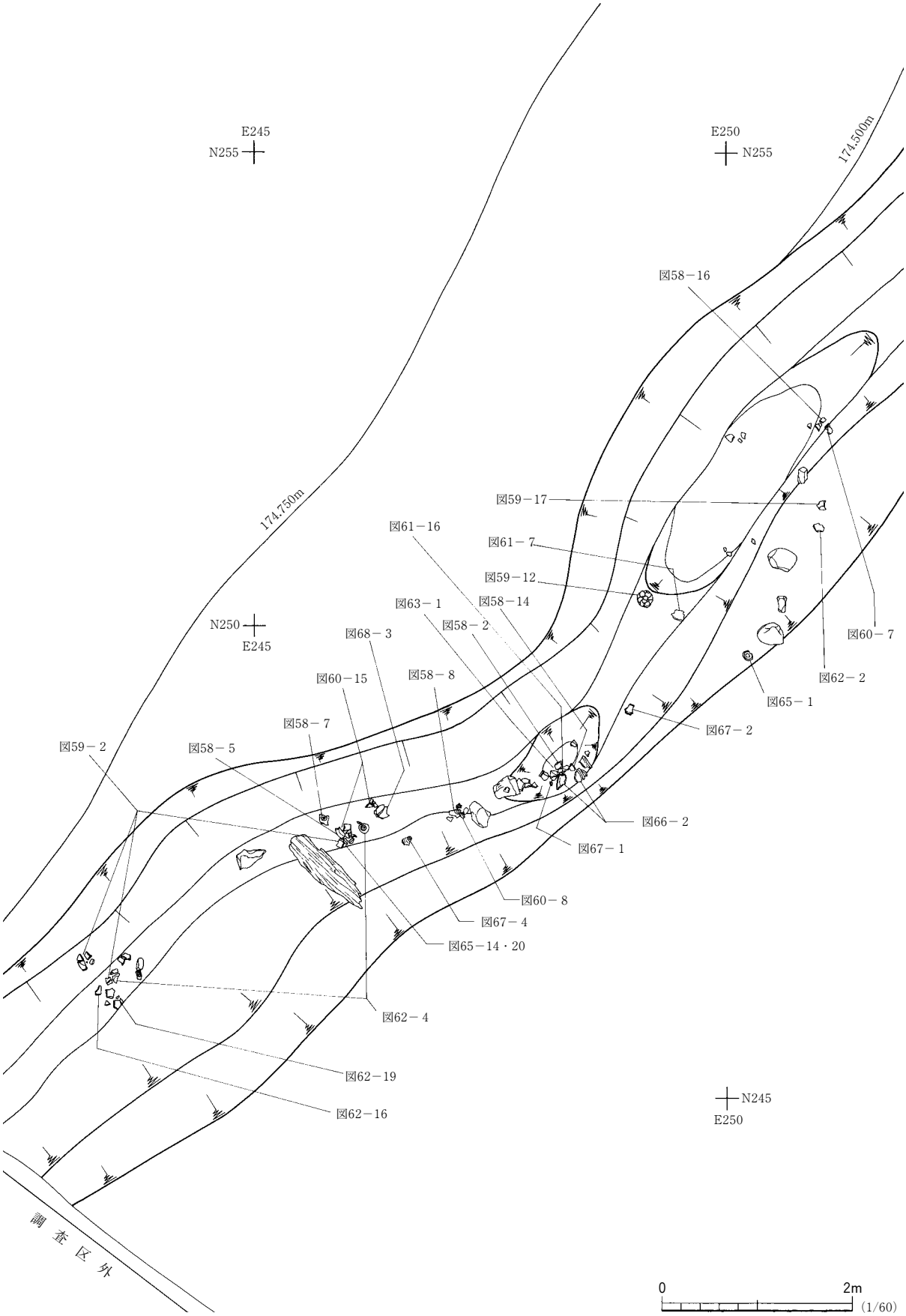

E245
N255
E250
N255
174.500m
174.750m
図58－16
図59－17
図61－16
図61－7
図59－12
図63－1
図58－14
図58－2
図68－3
図60－7
N250
E245
図60－15
図58－8
図62－2
図65－1
図58－7
図67－2
図59－2
図58－5
図66－2
図67－1
図60－8
図67－4
図65－14・20
図62－4
図62－19
図62－16
N245
E250
調査区外
0
2m
(1/60)

図56　21号溝跡（３）　B

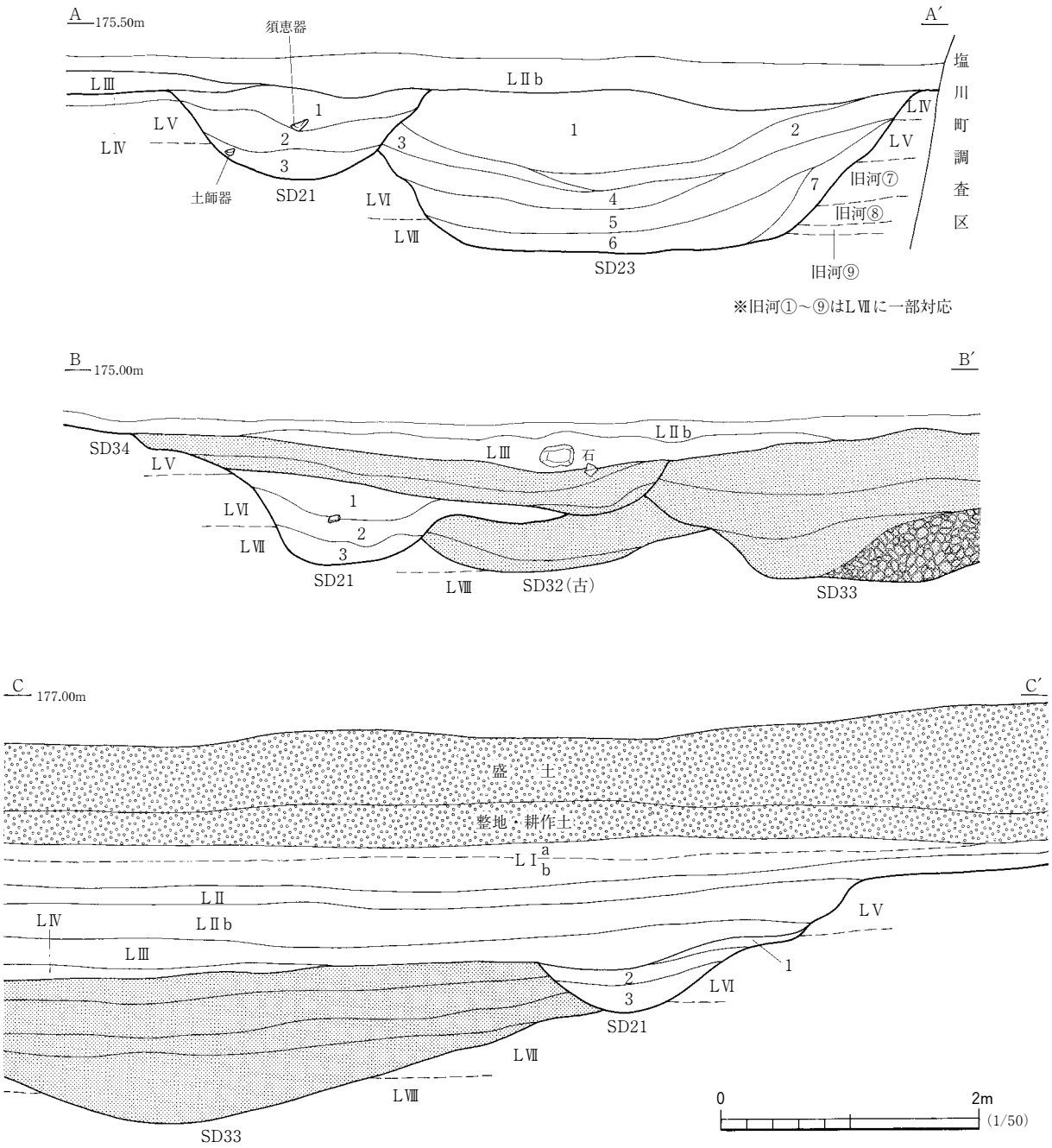
が，直線的で地形とはやや異なる「Ｌ」字状の屈曲を呈する北側は人為的に構築・改変された可能性が高いと考える。上層部が著しく削平されていたため遺存状態は悪いが，検出面・掘り込み面（図57ＡＡ’・ＣＣ’）ともにＬⅥ上面である。調査区南半には旧河川跡が多く存在し，近接して23・32～34号溝跡と重複している。重複関係は34号溝跡が最も古く，23・32・33号溝跡より新しい。

遺構内堆積土は３地点で観察を行っている（図54）。いずれの地点の土層観察においても３層に分層され，炭化物を含む黒褐色系の粘質土が主体となる。下層のℓ３には小礫が部分的に混入しており，粘性・グライ化が強いことから，この層までは常時水位の浸透があったものと考えられる。中央部がレンズ状に窪む堆積状況から，すべて自然流入による堆積土と判断される。

調査区内で検出できた規模は，直線的な北側部分が12.5ｍ程，Ｌ字状の屈曲部から南西が約32ｍの計45ｍ程を測る。溝幅は北側ＡＡ’付近では規則的で約1.8ｍであるが，中央付近から南西側では1.5～2.8ｍで不規則である。周壁は断面「Ｕ」字状の比較的緩い立ち上がりを呈するが，Ｓ・Ｔ－４～６グリッド（ＢＢ’）付近においては浸食により垂直気味に立ち上がる。底面は若干凹凸があるが滑らかで，確認面から底面までの深さは最深部で85㎝を測る。底面の標高は北端で約174.50ｍ，中央付近で173.80ｍ，南西端で174.10ｍ程を測り，南北の底面の高低差は最大で0.70ｍ程である。このことから北東側から南西側へ向かって緩やかに流入していたものと判断される。

遺物の出土状況や接合関係については図54～56に示した。これを見ると，大きく屈曲するＵ－８・９グリッド周辺や３箇所の窪みに土器溜まり状となって出土しているものの，図59－６・８や図62－４・14，図65－４，図66－１等のようにやや離れた地点同士の接合資料や異なる層位であっても接合された資料も多い。また出土した資料観察の結果，底部穿孔を施したものや被熱（２次的）を受けたもの，意図的に細片に破壊し廃棄・投棄等を行った痕跡は認められなかった。河川内や水辺における祭祀的な行為を明確に行った出土状況は示しておらず，ある程度まとめて廃棄された後，河川氾濫等によって流れ込んだ資料と考えられる。

本溝跡内からは土師器・須恵器・筒型土器・木質遺物等計2,530点の遺物が出土している。これは遺跡内総出土点数（9,326点）の約27％，遺構内出土点数（4,070点）の約62％に相当する。組成的には土師器類が約84％（約2,150点）で最も多く，次いで筒型土器が12％（約320点），須恵器類は僅か2.2％程の出土である。傾向としては土師器類では杯類が圧倒的に多く，体部下半回転ヘラケズリ再調整のものや無調整のものは僅かの出土で，大半は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ再調整を施したものである。また，内外面黒色処理が施されたものや墨書・刻書土器も僅かであるが認められている。出土量が少ない須恵器類では，特に杯類が極端に少ない傾向がある。これらの出土遺物のうち，遺存状態の比較的良好な172点について図58～68に掲載した。掲載した遺物の内訳は，土師器147点（うち杯：120点，高台付杯：13点，甕：14点），筒型土器９点，須恵器15点（うち杯：１点，瓶類：８点，鉢・甕類：６点），木質遺物１点である。以下，出土遺物について概説する。




**21号溝跡内堆積土**

1　10YR2/1　黒色粘質土
　　（炭化物を含む）
2　10YR3/2　黒褐色土
　　（炭化物を少し含む）
3　7.5YR2/1　黒色粘質土
　　（炭化物を多く含み，小礫を少し含む）

**23号溝跡内堆積土**

1　10YR3/2　黒褐色粘質土
　　（炭化物・遺物混入）
2　10YR2/1　黒色粘質土
3　10YR3/1　黒色粘質土
4　10YR3/3　暗褐色土
　　（炭化物混じる）
5　10YR4/2　灰黄褐色土
6　2.5YR3/1　黒褐色粘質土
　　（木質・腐食土を多く含む）
7　10YR5/3　にぶい黄褐色土
　　（炭化物・ＬⅤブロックを含む）

図57　21・23号溝跡（４）

**土師器**（図58～66）

**土師器杯**　図58～62は内面黒色処理が施されたロクロ成形による土師器杯で，最も多く出土している。図58は体部下半にヘラケズリ再調整を施すもの，図59～図62－10は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリ再調整が施されたものである。前者には底部切り離し技法が回転ヘラ切りのもの（図58－１～３・12・16・17）と，回転糸切りのもの（図58－13）がある。後者の場合手持ちヘラケズリ再調整を施すものには，底部全面に行うもの（図59～図60－６）と，底部外縁にのみ行うもの（図60－７～18・図61～図62－３）とがある。また，体部下端から底部にかけて再調整を施さない無調整のもの（図62－11～13）も僅かであるが認められている。器形的には体部にやや丸味を持って緩やかに外傾するものが多いが，図58－９，図59－５・16，図60－13・15等のようにやや直線的に外反するものや，図58－６・17，図60－10，図61－５，図62－19等のように深みがある椀状となるものもある。図58－12，図59－４・18，図60－３・14等はロクロ目がやや強く，口縁部付近で緩やかに外反するものである。内面は比較的丁寧なミガキ調整を施すものが大半であるが，図58－12，図59－２・５・13・18，図60－１～３，図61－４～６等のように一部摩滅・消滅しているものもある（内面：△印）。内面底部には放射状に施すものが多いが，井桁状に施すもの（図58－６）や，比較的太い工具によりミガキ調整を加えているもの（図58－１・３・４・８・15，図59―８・９・16，図60－８）等がある。

図89には半個体以上を遺存する70点の土師器杯の底径／口径比及び器高／口径比を示した。底径／口径比では最小のものが0.29（図59－24），最大のものが0.52（図58－10）を測るが，ほぼ0.3～0.5の範疇に収まる。比較的口径に対する底径値が小さいものが多く，0.34～0.43で約80％を占めている。器高／口径比は，0.3～0.4の範疇に収まり，0.30～0.36のものが80％を占める。

図64－５～７は内外面黒色処理が施された土師器杯である。出土量が極端に少なく，５個体程認められたうち，３個体を図示した。いずれも体部下端には手持ちヘラケズリ再調整が施されたもので，５は比較的丁寧なミガキ調整を内外面に加えており，椀型に近い器形を呈する。

**墨書・刻書土器**　図63・図64－４は墨書土器である。破片資料が多いため，判読できたものは少ないが，杯の体部外面や底部に１字あるいは２字墨書されている。図63－１～３は「入」，同図４～６は「六」と判読でき，同図７は「峯」であろうか。いずれも体部下端から底部にかけて再調整を施したもので，図63－３・４・７・13・14は回転ヘラケズリ再調整，図63－１・２・５・８・９・11・15・16は手持ちヘラケズリ再調整が施されている。底部切り離し技法は前者が回転ヘラ切り，後者が回転糸切りである。１は他と比して深みのある椀状の器形を呈し，内面底部には太い工具による放射状のミガキ調整と銀白色の光沢が認められる。

図64－１～４は刻書土器で，出土量は極端に少ない。１は倒位の状態で出土した約半個体遺存の刻書土器である。内面には丁寧な蓮華状のモチーフ，底部には異体字の「岡本」が焼成前に線刻されている。推定口径14.3㎝，底径6.1㎝，器高5.7㎝を測り，仏教関係の金工品の模倣的な資料と思われる。内面に線刻する例は会津坂下町三本木遺跡（暗文），「岡本」は墨書例としていわき市

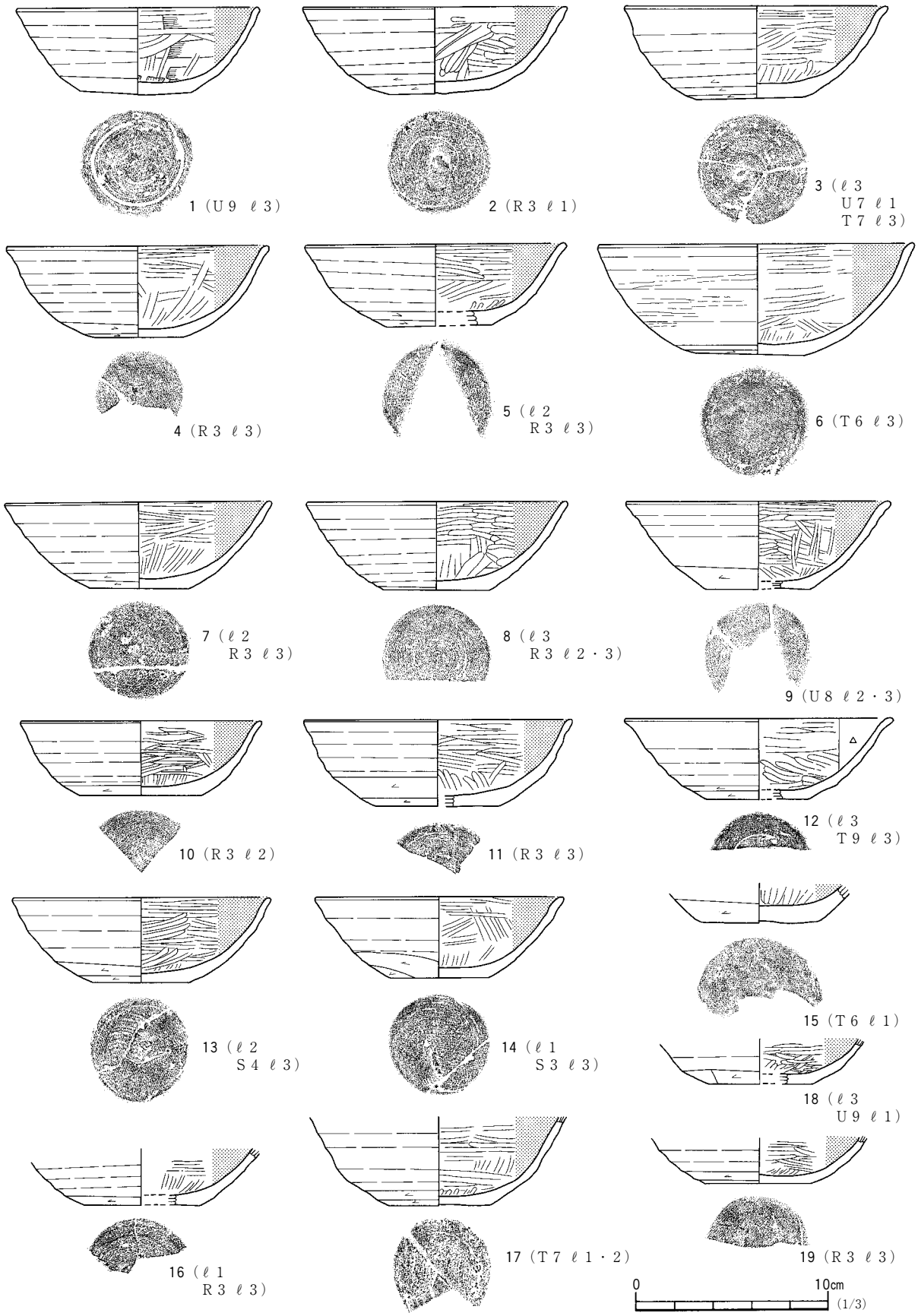



図58　21号溝跡出土遺物（1）

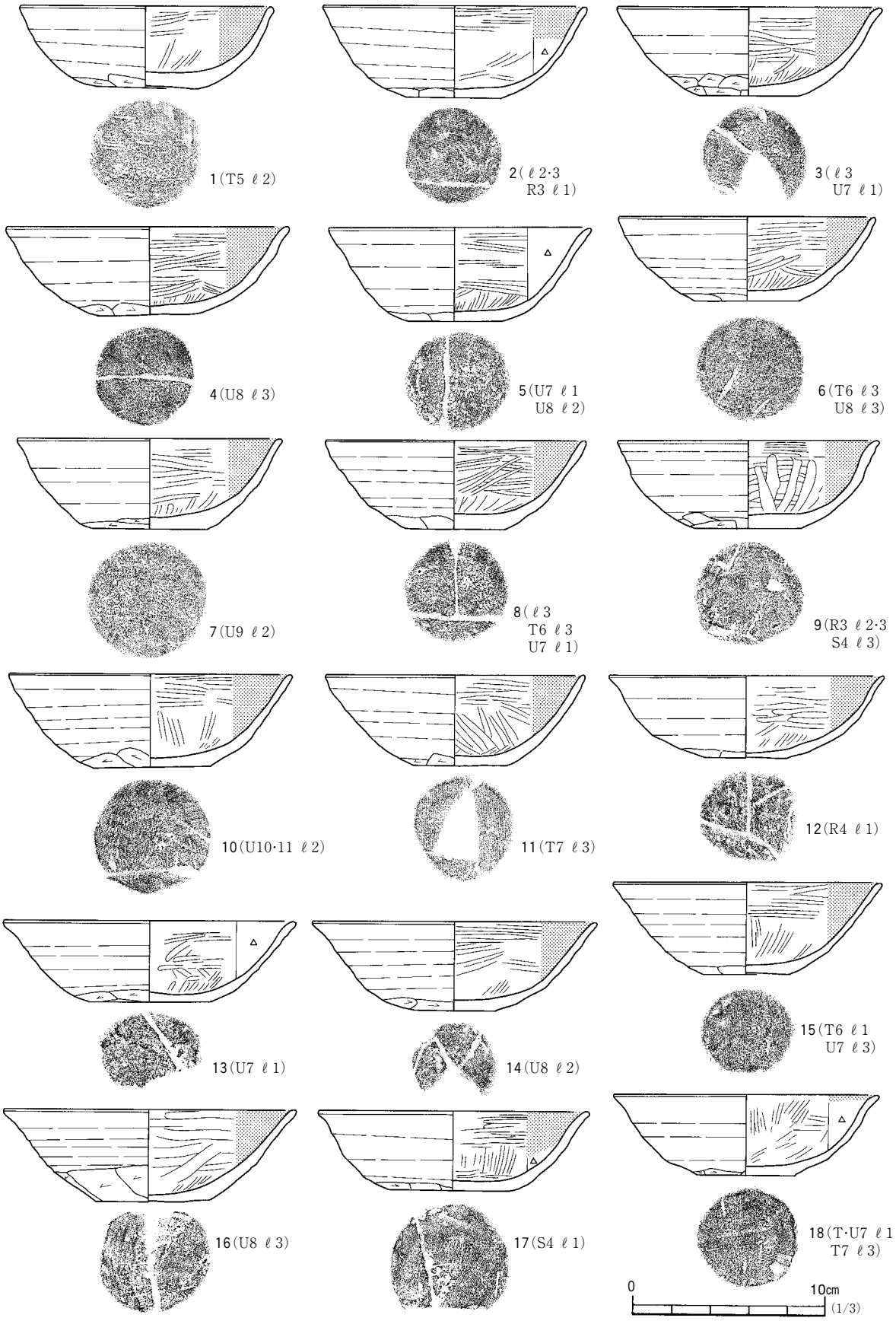



図59　21号溝跡出土遺物（２）

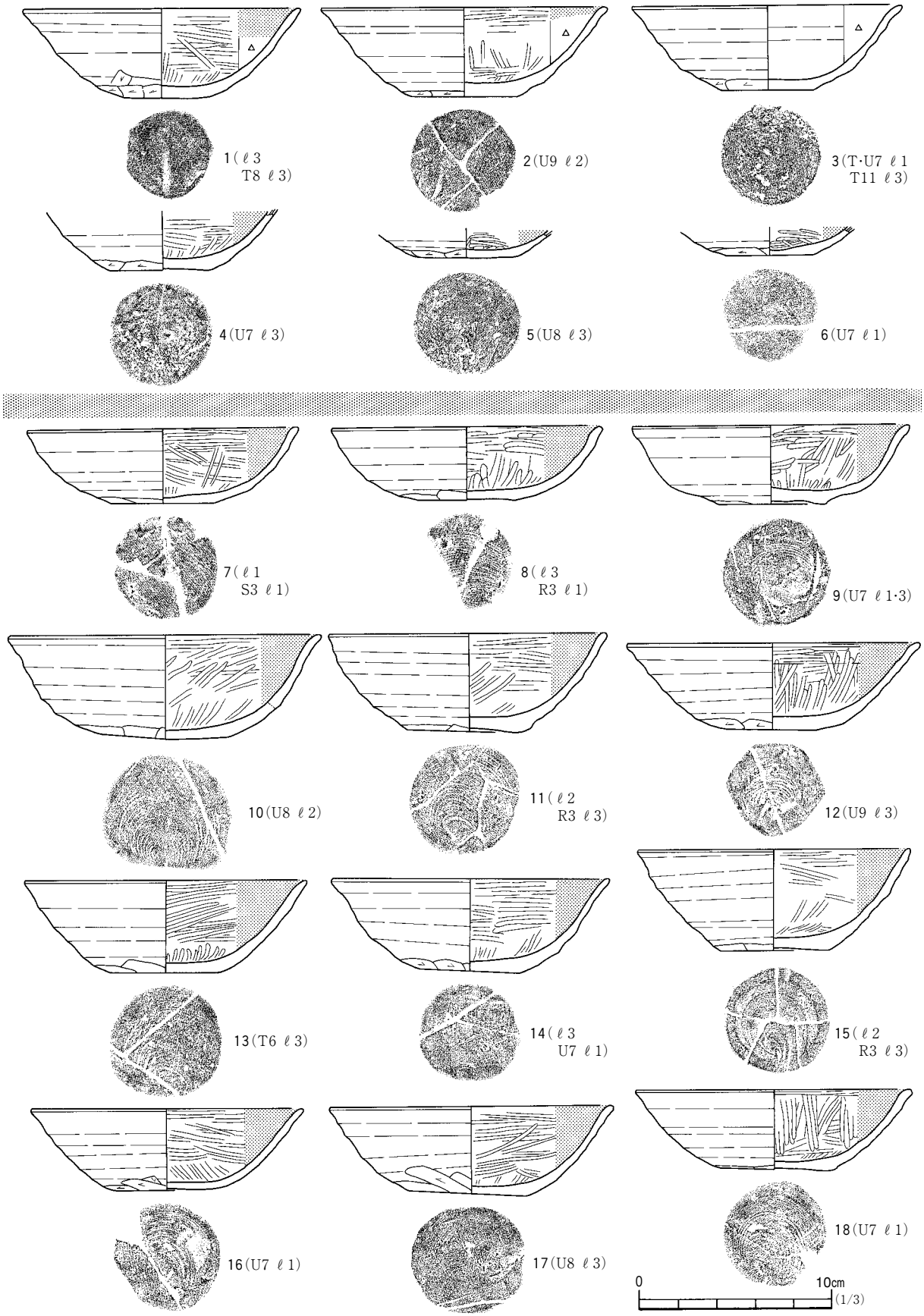



図60　21号溝跡出土遺物(3)

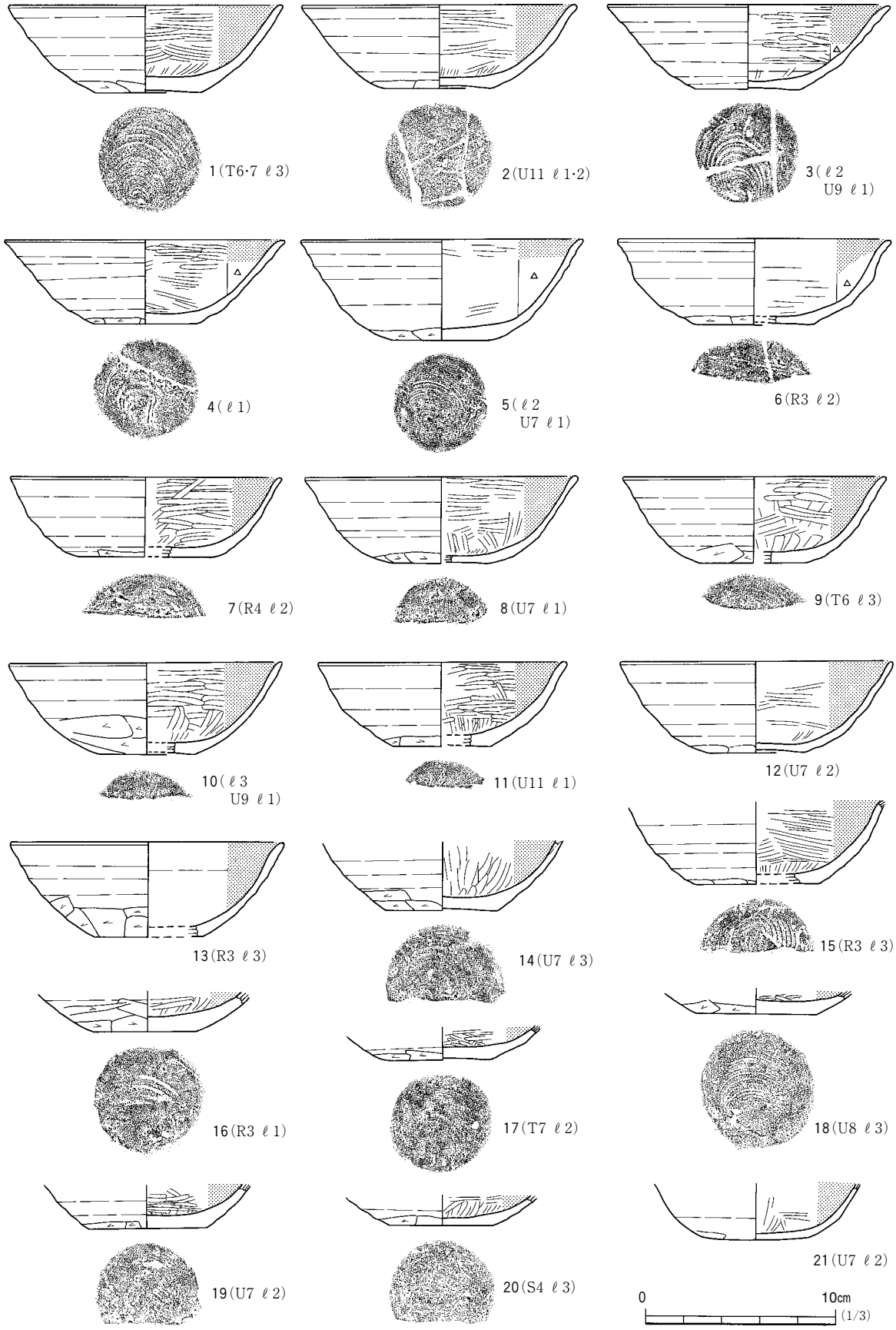



図61　21号溝跡出土遺物（４）

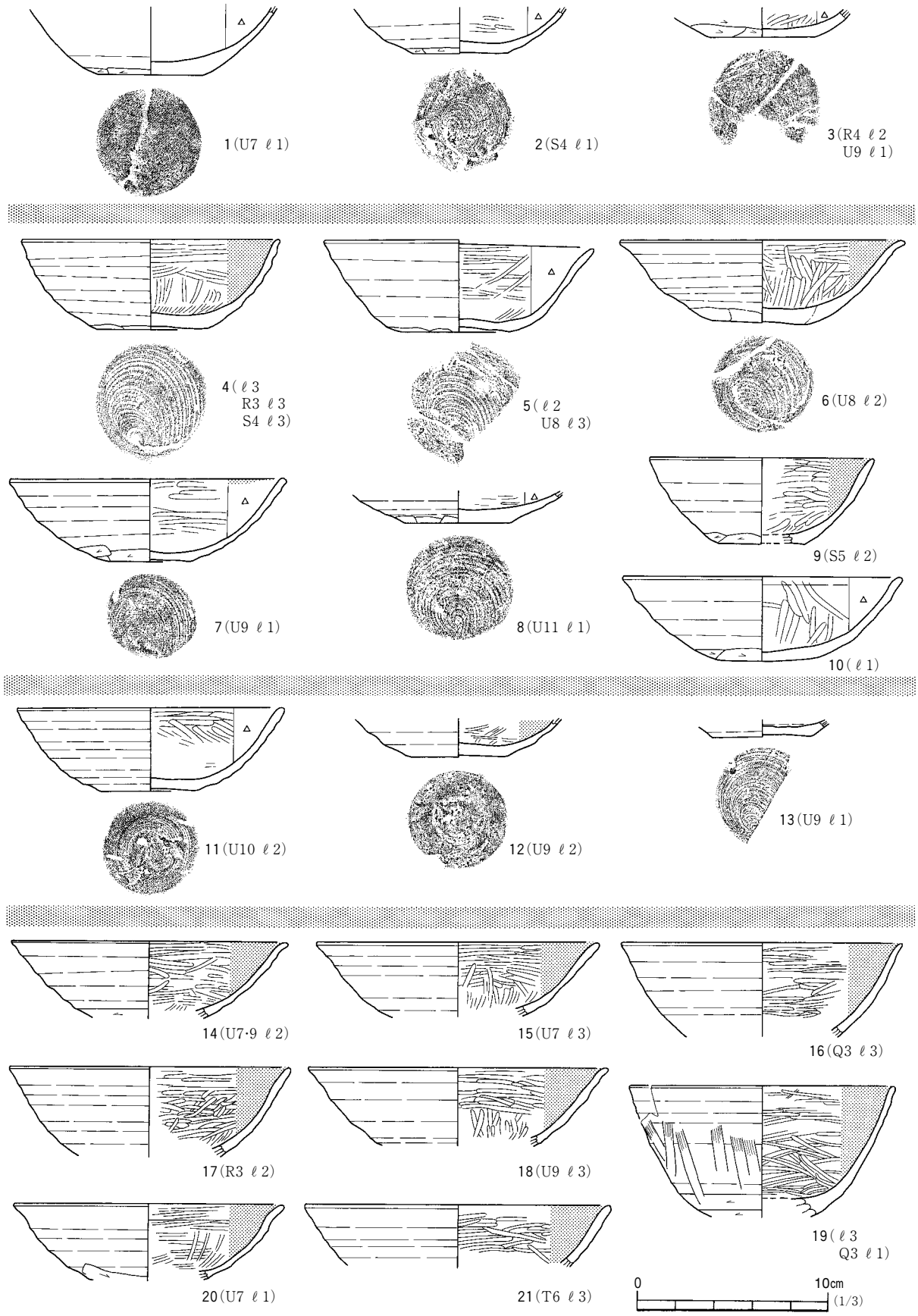



図62　21号溝跡出土遺物(5)

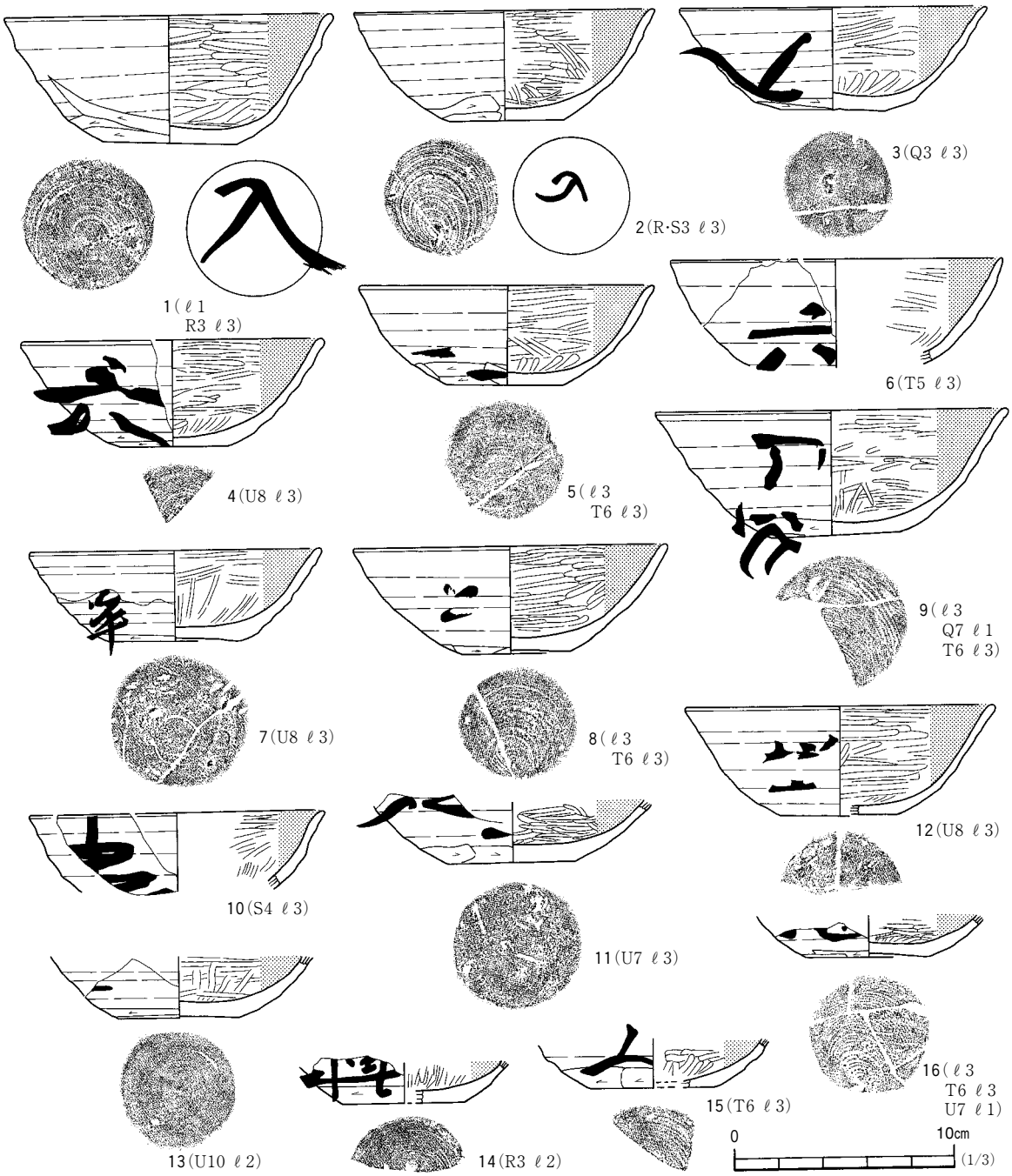



図63　21号溝跡出土遺物（６）

岸遺跡や富岡町小浜代遺跡等で認められている。２・４の底部，３の体部には「×」や「キ」状の線刻文が認められる。

**高台付杯**　図65－１～13は高台付杯で，遺存状態が良く全体の器形を把握できるものは５点程である。内面ミガキ調整・黒色処理されるものが多く，１はやや杯身の部分が深く，２の脚部は他と比して高い。図65－13は内面ロクロナデ調整が施されており，器形的に小型皿を呈することから，他と比して後出的な資料である。

**筒型土器**　図65－14～22は筒型土器の口縁部片である。土師器杯に次いで出土量が多く（12％：

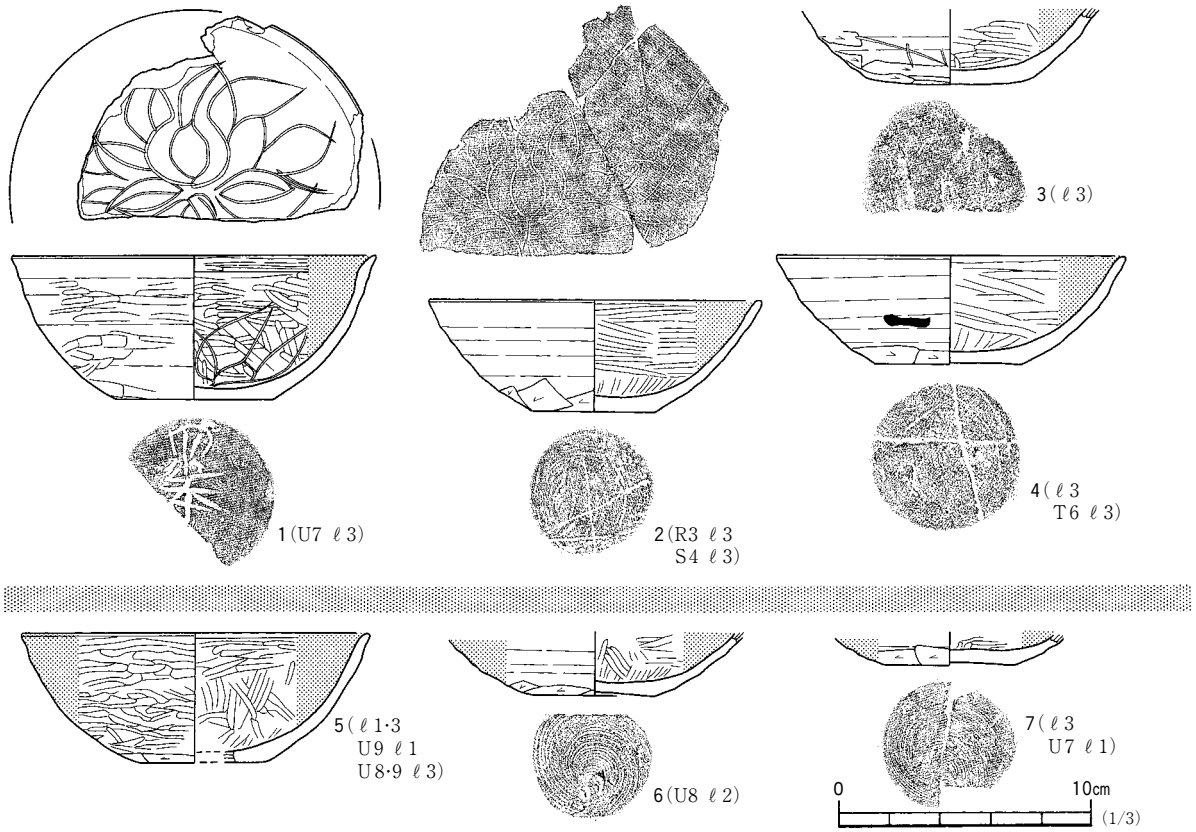



図64　21号溝跡出土遺物(7)

約320点)，全体の器形が分かる資料は出土していない。器形的に口縁部付近が直線的になるものが多いが，やや内傾するもの(図65－17・18・22)や内湾状となるもの(図65－19・20)等がある。器内外面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に観察され，表面が2次加熱を受けて赤変しているものや摩滅しているものが大半である。推定口径11㎝前後のものが多く，器壁は0.6㎝前後である。

**土師器甕**　図66はロクロ成形による長胴甕で，本遺構内からは非ロクロ成形によるものは出土していない。中型から小型の器形のものが多く，口頸部が「く」字状に屈曲し，口縁端部が上方へ引き出されるものが大半である。胴部にはロクロナデ調整のものとタタキ調整を施したものが認められ，やや後者が多い傾向にある。胴部にタタキ調整を施すものは，5のように胴部下半に縦位の手持ちヘラケズリ調整を施すものと，6・7・9のように胴部下端までタタキ調整を施すものが認められる。後者には，内面無文アテ具痕を部分的にナデ消したものが多い。1は横位方向のカキメ調整が施された希少な資料である。9の底部は丸底状の小さな底径である。

**須恵器**(図67～図68－3)

**杯**　杯類は1点のみ認められた(図67－1)。口縁部から底部まで約20％遺存している。推定口径13.3㎝，器高3.9㎝，推定底径5.9㎝を測る。

**長頸瓶**　図67－2～8は長頸瓶の口縁部及び胴部資料で，全体の形状が把握できた資料はない。3・4の頸部下端にはリング状の突帯が1段巡り，3の頸部と体部は2段接合である。5～8は胴部上半に最大径を有する資料で，7・8の高台は貼り付けである。いずれも自然釉がやや厚く，8

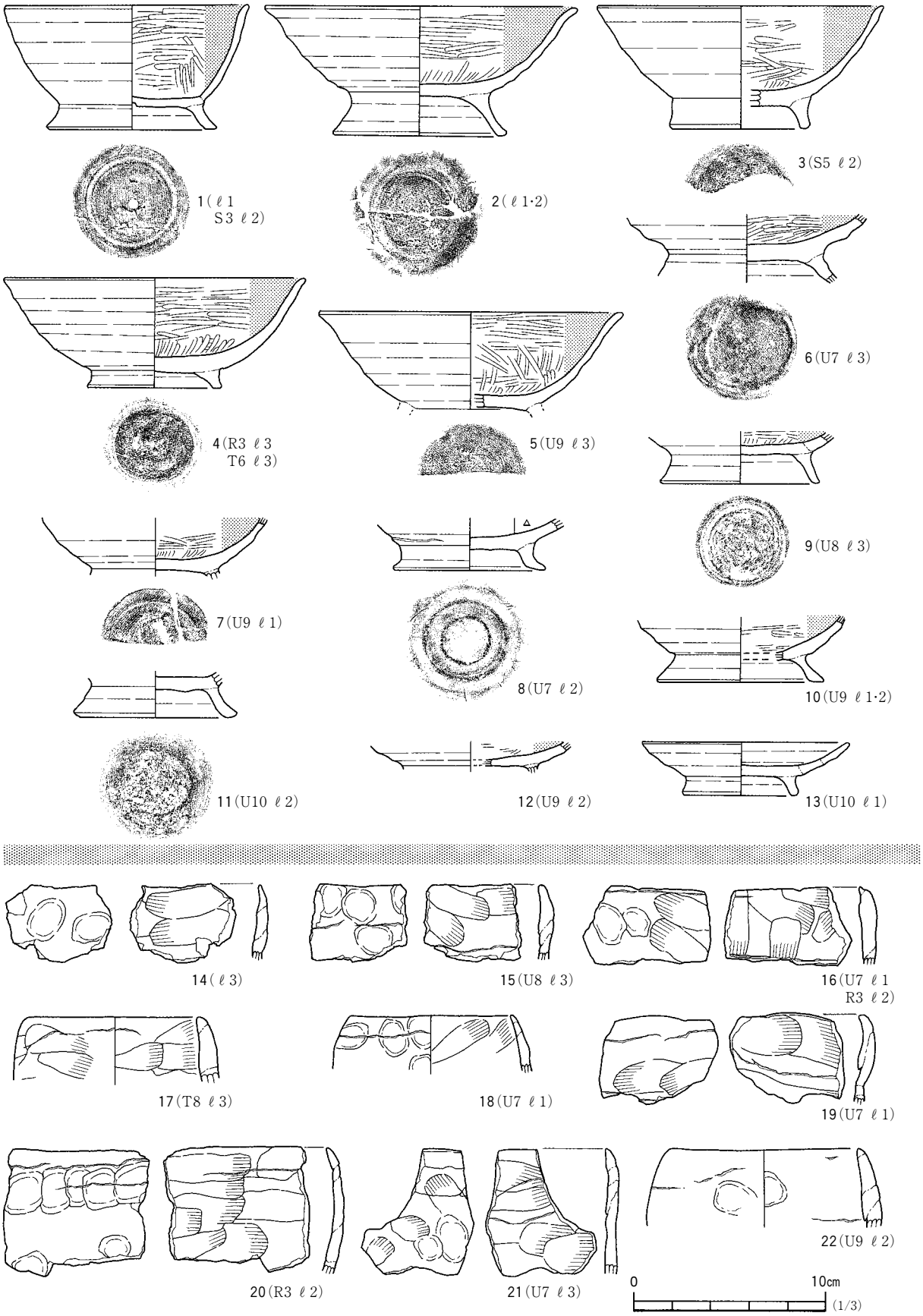



図65　21号溝跡出土遺物（８）

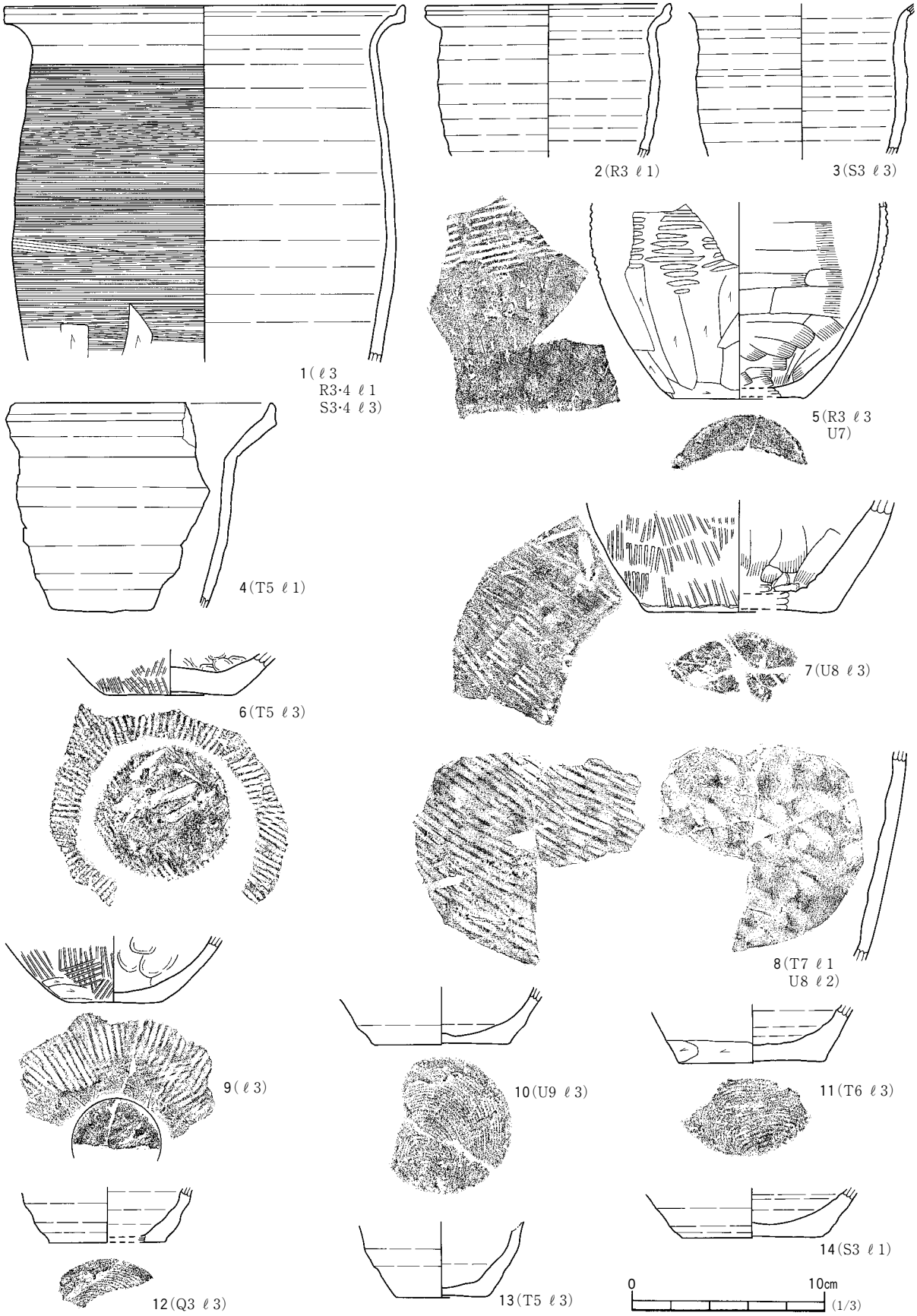



図66　21号溝跡出土遺物(9)

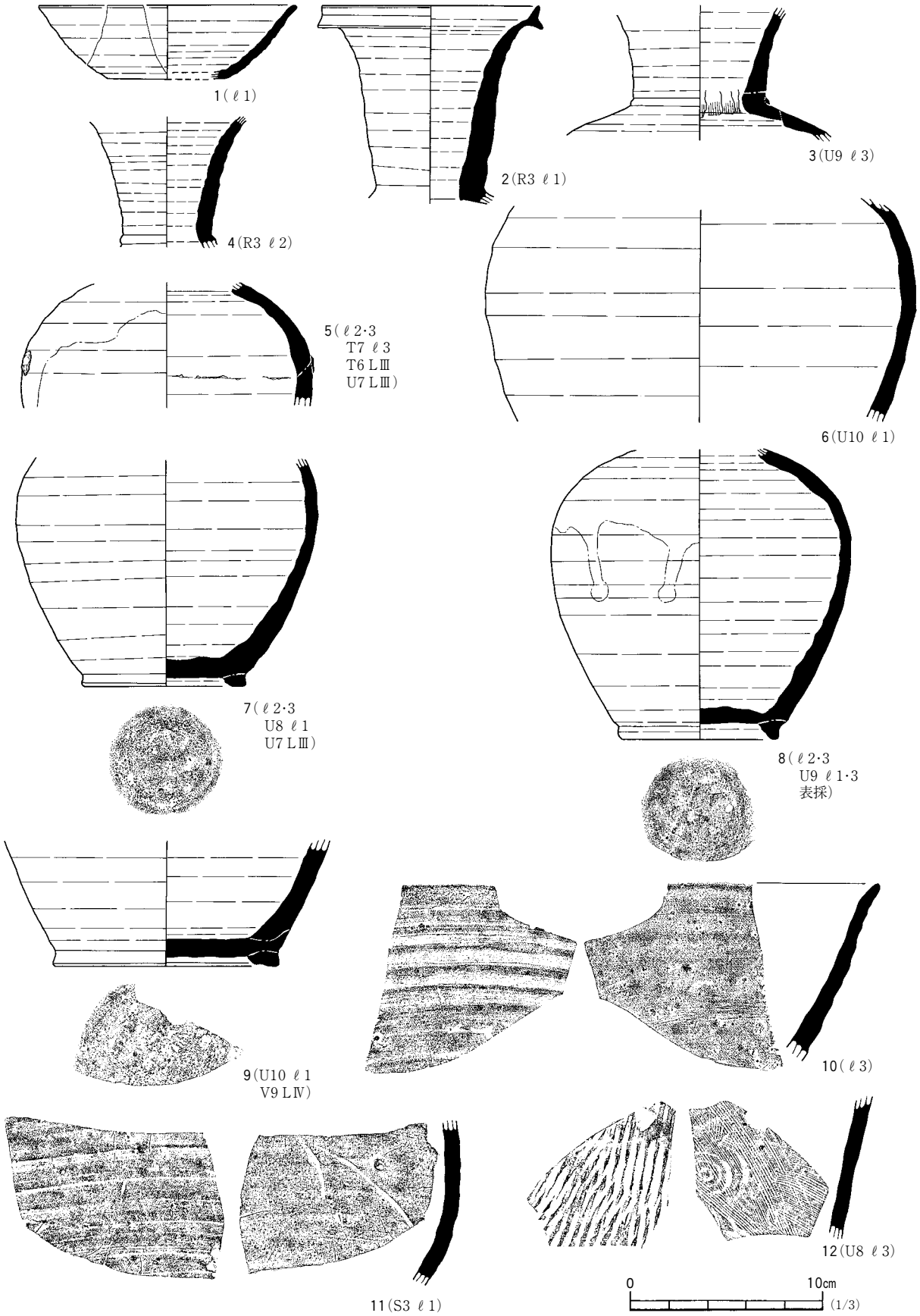



図67　21号溝跡出土遺物(10)

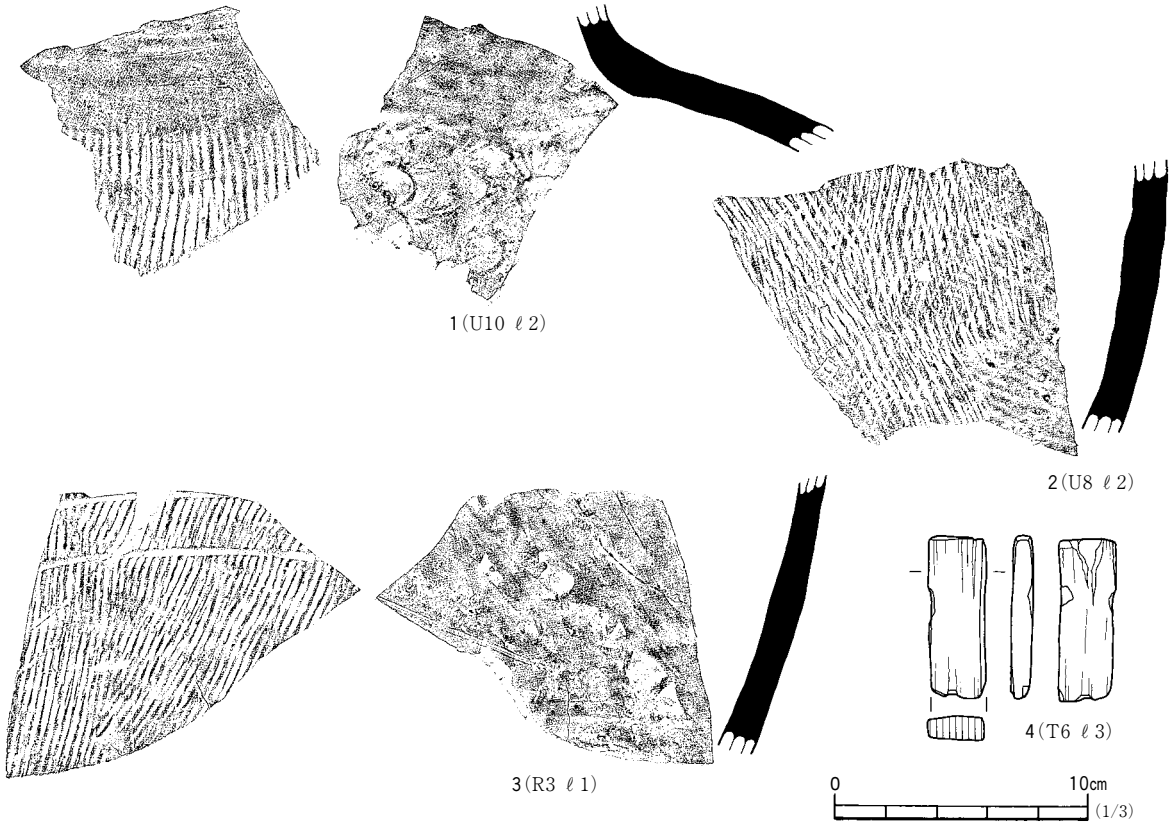



**図68**　21号溝跡出土遺物(11)

の胴部下端には焼台痕が認められる。図67－９は底径が広く，高台部が潰れており，器形的には広口瓶であろう。胎土はいずれも緻密で，４が茶褐色，５・８・９が灰色を呈するが，２・３・７は白色鉱物細粒を含む灰白色である。概ね大戸古窯編年(石田：1994)のＭＨ－19号窯式期～ＫＡ－107号窯式期に位置付けられる資料であろう。

**鉢・甕類**　図67－10・11は器形･胎土等から同一個体と判断される。直線的に外傾するやや大振りの器形を呈す，鉢型土器(大平鉢：石田氏)と思われる。図67－12・図68－１～３は甕の頸部及び胴部片である。図67－12の内面は同心円状のアテ具痕をナデ消しており，図68－１には菊花状のアテ具痕が認められる。図68－３の外面には２条の螺状沈線が施されている。

**木質遺物**　出土した木質遺物は２点で，うち１点のみ図68－４に図示した。箆状木製品の欠損で，遺存長6.4㎝，幅2.3㎝，厚さ0.8㎝を測る。木取りは柾目，材質はスギである。

本溝跡の性格は明確には断定できないが,自然河川を一部人為的に改変した流路跡と判断される。墨書土器が少ない点や，土器の底部穿孔，細片に破壊後の廃棄・投棄等を行った痕跡が認められないことから，調査区内における本河川付近の水辺で所謂祭祀的行為(国家的祭祀・律令的祭祀)が行われた可能性は低いと考えられる。しかし，2,000点以上もの土師器杯の破片資料が出土したことや希少な刻書土器(図64－１)の出土例を考慮すれば，生活空間に移行し個人的祭祀へ変貌を遂げた(巽・浅川：1996)一端として，周辺でこれらの行為が行われていた可能性が指摘できる。

機能時期については，出土遺物等から判断して平安時代，９世紀～10世紀前半に位置付けられ

る。９世紀後半を主体とし，僅かにその前後期で河川氾濫を繰り返しながら機能していたものと考えられる。（井）

### 23号溝跡　ＳＤ23（図69・70・73，写真43・48・49・78）

本遺構は調査区南東側のＴ～Ｗ－７～13グリッドに位置する。湾曲している一部しか確認できず，東側は調査区外に延びているため，遺構の全容は不明である。検出面はＬⅣとした黒褐色土で，西側では21号溝跡，南側では25号溝跡と重複しており，どちらの溝跡にも切られているため，本遺構の方が古い。また，17号溝跡と上下に重複しており，本遺構の方が古い。

本遺構の軸線は北方から南方へ向けて「く」字形に緩やかに湾曲しているが，全容が明らかでないためどちらに傾斜しているかは判断できなかった。規模は調査区内で確認できた長さ24ｍ，遺存幅の最大値は約５ｍで検出面からの深さは1.2ｍであった。底面はほぼ平坦で，周壁はなだらかに立ち上がっており断面形は鍋底状を呈する。

遺構内堆積土は７層に分かれる。ℓ１～３は黒色を基調とする粘質土で，ℓ４は暗褐色土，ℓ５は灰黄褐色シルト，ℓ６はグライ化している黒褐色粘質土，ℓ７はにぶい黄褐色粘質土である。ℓ１には木片や炭化物を含む土器片が混入しており，厚い層である。いずれも土質と堆積状況から自然流入土と考えている。

遺物は弥生土器片１点・土師器片261点・筒型土器片61点・須恵器片10点・石器１点が出土している。このうち図73－１～15までの15点を図示した。１は器面が剥落しており調整は不明であるが，弥生土器の壺と推定される。２～６は土師器杯である。いずれも破片から復元図示した。ロクロ成形で内面に黒色処理が施されている。２と４の底部には体部下端から底部全面に回転ヘラケズリ再調整が，５の体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ再調整が加えられている。８はロクロ使用の土師器小型甕体部片である。９・10は土師器高台付杯である。高台部の破片から復元図示し，杯部内面に黒色処理が施されている。11～13は須恵器杯である。11は底部が欠損し，切り離し方や再調整は不明である。12は回転糸切りで，13は回転ヘラ切りで切り離されている。14は須恵器高台付杯で杯部底面は回転ヘラ切り痕が観察される。15は須恵器大甕の体部片で，器面にはタタキ痕やアテ具痕が観察される。

本遺構は調査区内でも比較的大きい溝跡であり，土層中に水性堆積を確認することができなかったため，湿地帯を流れる河川だった可能性がある。所属時期は，21・25号溝跡より古く，遺物の出土状況を考慮すると，平安時代以前に機能していたものと思われる。（小笠原）

### 24号溝跡　ＳＤ24（図69・70・73，写真49・78）

本遺構は調査区南側のＶ－７グリッドからＴ－５・Ｕ－６グリッドにかけて位置する。検出面はＬＶであるがはっきりとしたプランを確認することができず，断ち割りを２本入れて確認した。北東側には23号溝跡が位置するが，本遺構検出以前に完掘してしまい，規模については不明な点

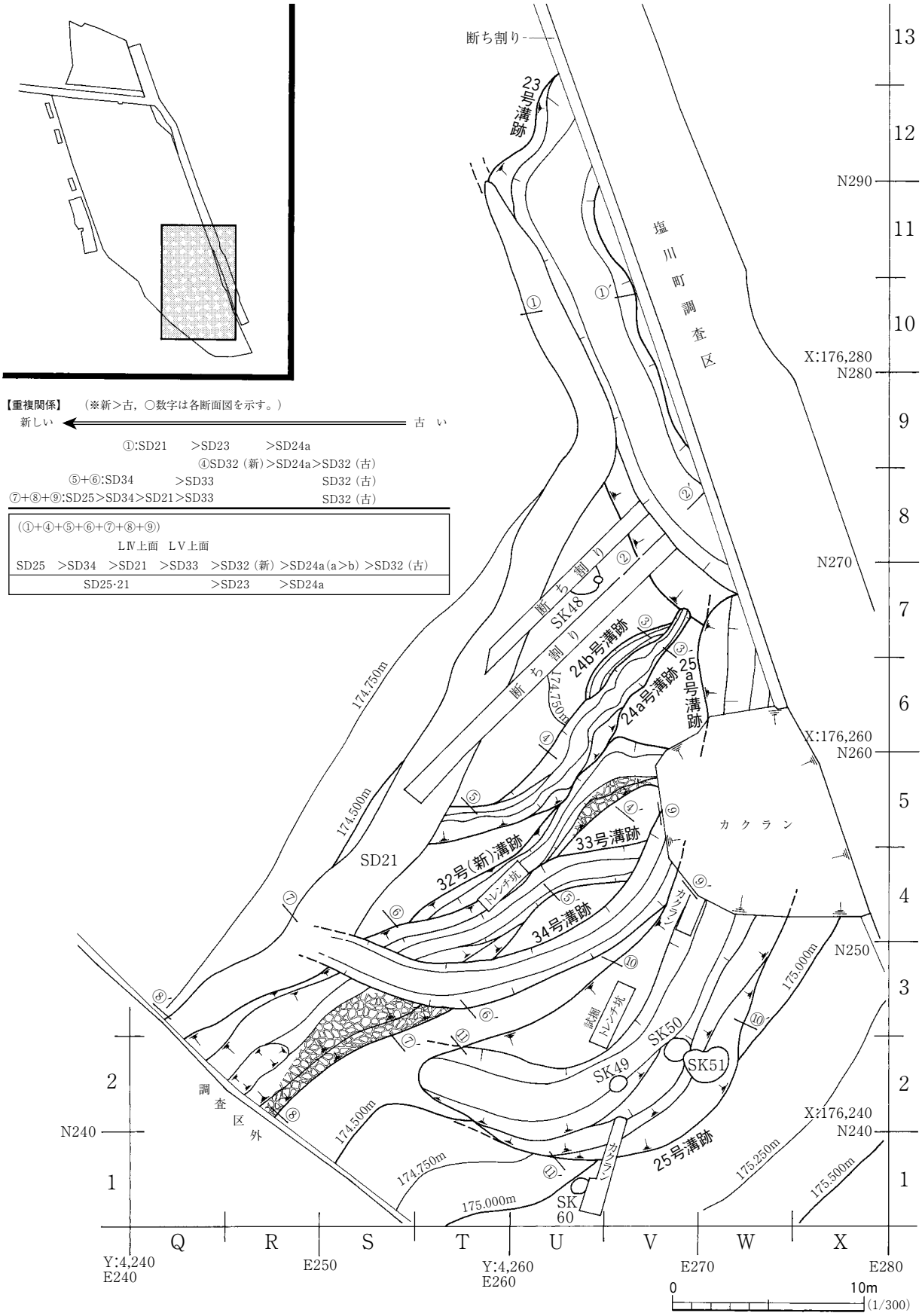
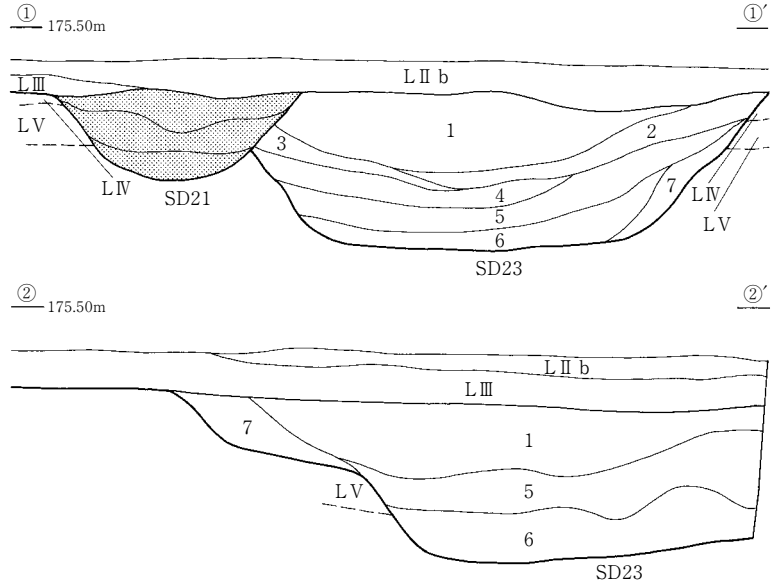
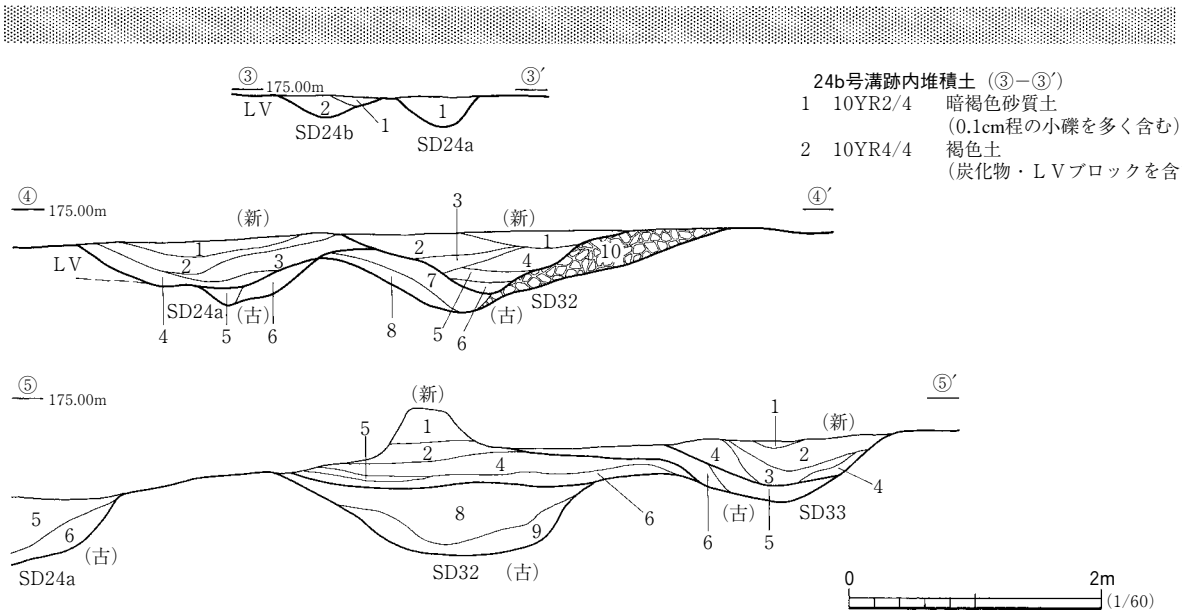



図69　調査区南側検出溝跡




**23号溝跡内堆積土**（①－①′, ②－②′）

1　10YR3/3　黒褐色粘質土
（炭化物・遺物混入）
2　10YR2/1　黒色粘質土
3　10YR3/1　黒色粘質土
4　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物混じる）
5　10YR4/2　灰黄褐色土
6　2.5YR3/1　黒褐色粘質土
（木質・腐食土を多く含む）
7　10YR5/3　にぶい黄褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）




**24b号溝跡内堆積土**（③－③′）

1　10YR2/4　暗褐色砂質土
（0.1cm程の小礫を多く含む）
2　10YR4/4　褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）

**24a号溝跡内堆積土**（③－③′～⑤－⑤′）

1　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を含む）
2　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を含む）
3　10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土
（2～10cm大の黒褐色粘質土塊を少し含む）
4　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物を含む）
5　10YR5/2　灰黄色粘質土
（炭化物を少量含む）
6　10YR2/3　黒褐色砂質土
（0.5～7cm大の礫を多く含む）

**32号溝跡内堆積土**（④－④′～⑦－⑦′）

1　10YR3/3　暗褐色土
（炭化物を少し含む）
2　10YR3/1　黒褐色土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）
3　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・ＬＶブロック・0.5cm大の礫を含む）
4　10YR3/2　黒褐色砂質土
（炭化物・小礫を含む）
5　10YR2/2　黒褐色砂質土
6　10YR3/1　黒褐色砂質土
（0.5～1cm大の小礫を含む）
7　10YR4/4　褐色土
（ＬＶブロックを含む）
8　10YR3/3　暗褐色砂質土
（0.5～2cmの小礫を含む）
9　10YR3/2　黒褐色粘質土
10　礫層　（2～5cm程の小礫を多量に含む）

図70　23・24・32号溝跡

が多い。南東側には32号溝跡が重複しており，時期を交互に機能していることが確認できた。また，堆積土の観察から，新旧２時期に渡って使用されており，新期（ａ）・旧期（ｂ）とした。

新期（ａ）は北東から南西へ向けほぼ真っ直ぐに傾斜しており，規模は調査区内で確認できた長さ17ｍ，最大幅2.5ｍ，検出面からの深さ0.50ｍである。底面はあちこちで起伏が見られ，周壁はなだらかに立ち上がっているものの，凹凸のある個所も目立った。

遺構内堆積土は６層に分かれる。ℓ１～４の土質はシルトで，24a号溝跡の中でも新しい層である。ℓ５は灰黄色シルト質粘土であり，ℓ６は黒褐色砂である。土層の堆積状況から少なくても３時期にわたり機能していたと考えられる。

南西部では32号溝跡との重複関係がはっきりせず，プラン確認のため検出面を下げていったが，明確な境界は確認できなかった。さらにその周辺は礫層まで下げてしまった。これらの２つの溝跡は時期を交互に機能していたため不明確な部分もあり，そのため一部図上で復元したものを含んでいる。

旧期（ｂ）は，新期（ａ）から西方へ向かった後湾曲し，再度南西側へ戻っている。規模は長さ5.5ｍ，最大幅0.9ｍ，検出面からの深さ0.33ｍである。断面は，底面から検出面へ向けてなだらかに立ち上がっており，底面と周壁の明瞭な境はない。形状は皿状を呈する。遺構内堆積土は２層に分けることができた。ℓ１は暗褐色砂質シルトで，ℓ２は褐色シルトである。いずれも土質から自然流入土と考えている。

遺物は縄文土器片３点，土師器片18点が出土している。そのうち図示できたのは縄文土器１点，土師器１点である。図73－16は器面が剥落しており調整などは不明であるが，晩期の深鉢と考えられる。17は土師器高杯の脚部で，中空を呈し，古墳時代中期頃と推定される。

全容の解明には至らなかったが，本遺構はさらに南西へ延びていた可能性が高い。調査区南側には似たような溝が北東から南西へ向けて数条流れており，古代から近年に至るまで，河川が氾濫を繰り返している様相である。本遺構もその一つと考えることができる。　　（小笠原）

### 25号溝跡　ＳＤ25（図69・72・74，写真49・78）

本遺構は調査区南側のＴ－２グリッドからＷ－７グリッドにかけて位置する。北東側は調査区外に延びており，遺構の全容は不明である。検出面はＬＶの上面で，北側で34号溝跡及び33号溝跡と重複しており，いずれの溝跡も切っているため，本遺構の方が新しい。北東側では，近年のものと思われる比較的大きな撹乱を受けている。

本遺構は北東から南西へ向けて「ノ」字形に緩やかに湾曲している。傾斜方向は全容が不明なため確認できなかったが，北東・南西両方向へ向けて高くなっている様相である。規模は調査区内で確認できた長さ34ｍ，最大幅9.3ｍ，検出面からの深さ1.00ｍである。底面はほぼ平坦で，周壁は東側ではなだらかに，西側では約45°の角度でやや拡がりながら立ち上がっており，断面形は船底形を呈する。

遺構内堆積土は16層に分けることができたが，氾濫を繰り返しながら，大きく５時期にわたり機能していた可能性がある。新しい時期の層はℓ１で，粘性・締まりが少し確認できた暗褐色シルトである。この層には，４世紀頃の土師器片や，中世の土師器片・須恵器片など多数の遺物が混入していた。恐らく氾濫によって流されてきたものが混入したものと考えられる。

次の時期はℓ２で，溝の中央部を抉るように堆積している。粘性・締まりともに強い黒色粘性シルトである。南側の断面では確認できず，どのような性格かは不明である。遺物は混入してなかった。

３番目の時期の層はℓ３～７である。粘性･締まりともあるシルトの層である。ℓ４・５・７は基本的には同じ土質である。

４番目の時期の層はℓ８である。これは，北側の断面で確認されたもので，西側にしか確認できなかった。恐らく東側では氾濫の際，削られて流されたか，崩れてしまったのであろう。

旧河川の層はℓ９～16である。東側でℓ16がℓ９に落ち込んでいるが，これはℓ16が崩落したものと考えられる。ℓ１～16はいずれも土質から自然流入土と考えている。

遺物は弥生土器片23点，土師器片319点，須恵器片29点が出土している。図74－１・２は複合口縁部片で２点共に剥落が著しく調整は不明である。ただ２の内外面に朱彩の痕跡が確認される。３・４はロクロ土師器杯である。器面の剥落は１・２同様に著しいが，内面に黒色処理とヘラミガキ痕が観察される。５～７は土師器甕である。５は底部片で外面にはタタキ痕が，６・７は口縁部片で器面にはロクロ調整が加えられている。８～15は須恵器である。８・９は杯で，底部にはヘラ切り痕が観察される。10・12は長頸瓶，11は小型な壺，13～15は大甕の体部片である。器面にはロクロ痕やタタキ痕が観察される。16はかわらけの小皿である。

本遺構は，南西部Ｔ－２グリッド付近で底面が急に高くなり礫層に吸収されている。Ｔ－２グリッド付近に遺物や流木等は留まっていなかったため，北東部からの溝の流れを吸収する部分とは考えられない。このため25号溝跡は，溝としての機能でなく貯水池としての機能を果たしていた可能性も指摘できる。しかし，周辺には関連性のある遺構を確認することはできなかったため，性格を位置づけることはここでは避けたい。所属時期は，土層の堆積状況を考慮すると，比較的長期にわたり機能していたと思われる。ℓ１の遺物出土状況を考慮すると中世まで機能していた可能性が高い。（小笠原）

### 32号溝跡　ＳＤ32（図69・70）

本遺構は調査区南東側のＶ－５グリッドからＳ－４グリッドにかけて位置する。24a号溝跡検出の際の断ち割りで確認できた遺構である。北東側は近年のものと思われる撹乱に続いている。南東側では33号溝跡が重複しており，33号溝跡に切られているため本遺構の方が古い。また，北側では24a号溝跡が重複しており，堆積状況から時期を交互に機能していたことが確認できた。そのため明確なプランが判断できず，表土を削りながら確認しようとしたが南側では削り過ぎてしまった。

本遺構は北東から南西へ向けて傾斜しており，規模は調査区内で確認できた長さ19m，最大遺存幅2.7m，検出面からの深さ0.49mである。底面はほぼ平坦であり，周壁は波を打つように立ち上がっている個所もあるが，全体的にはなだらかに立ち上がっている。

遺構内堆積土は９層に分けることができた。ℓ９は黒褐色を呈するシルト質粘土であるが，他はシルト及び砂質土で，各層で0.5㎝程度の細かな礫がラミナ状に堆積しており，水性堆積の様相を呈する。すべて自然流入土と考えている。

発掘調査中は確認を怠ってしまったが，後に図面等で検討してみるとℓ９の下は砂層になっており，その北側・南側が礫層になっているため，ℓ９の下の砂層は32号溝跡に伴う層だった可能性も指摘できる。

本遺構の南側は礫層になっており，本遺構が礫層に吸収される様相を呈している。本遺構は周辺の溝跡同様，河川の氾濫によって作り出されたものの一つであろうと考える。遺物の出土はないため，所属時期及び機能を特定することはできなかった。（小笠原）

### 33号溝跡　ＳＤ33（図69）

本遺構は調査区南東側のＶ－５グリッドからＲ－３グリッドにかけて位置する。18・34号溝跡と上下に重複し，北西側では21号溝跡と重複しており，いずれの溝跡よりも本遺構の方が古い。また北側では32号溝跡と重複しており，本遺構の方が新しい。

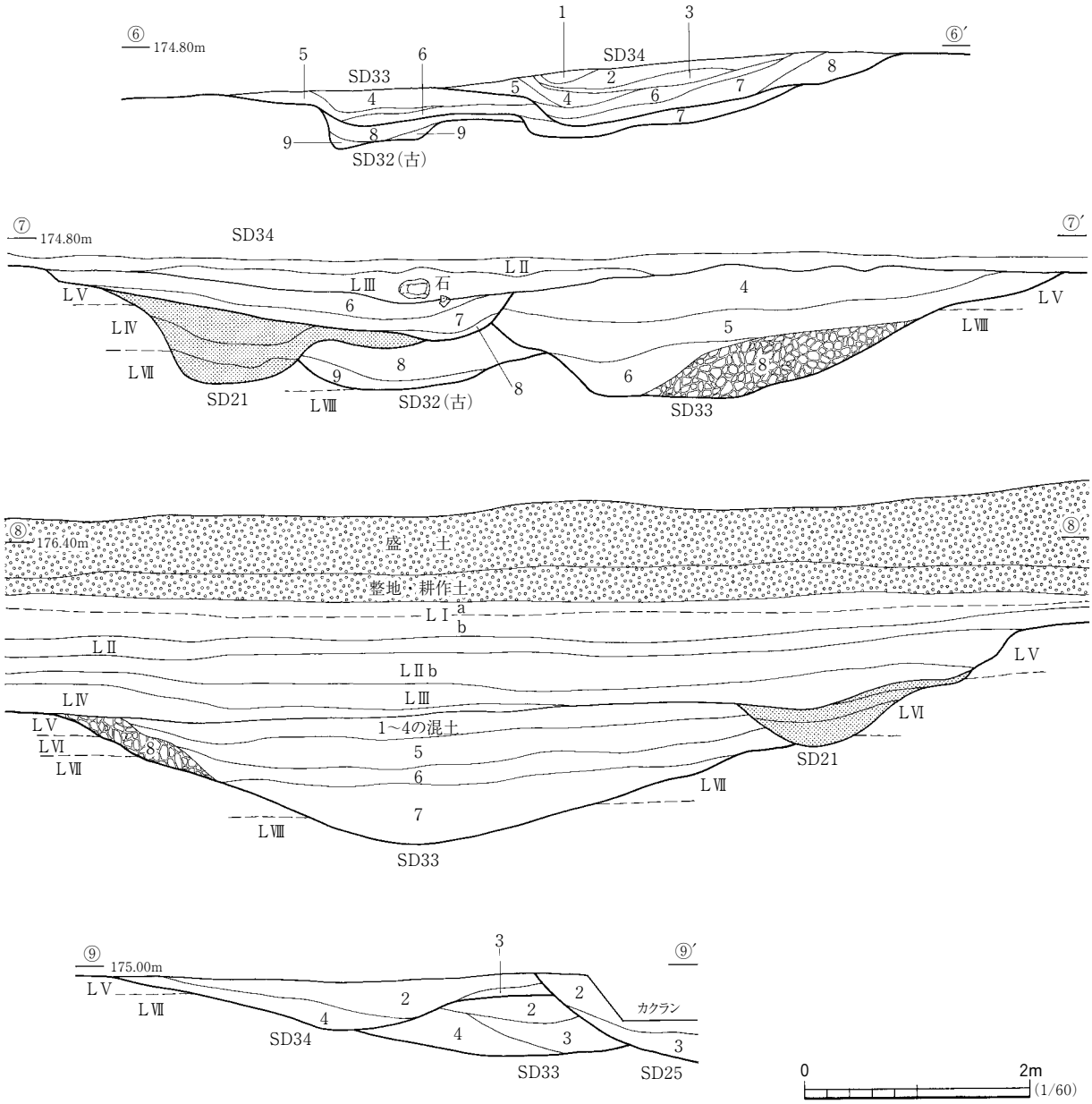
本遺構は，北東側で撹乱を受けており，さらに多くの遺構と重複関係にあるため全容は確認できなかったが，北東から南西へ向かってほぼ真っ直ぐに傾斜しており，調査区外へ延びている。規模は調査区内で確認できた長さ26m，最大遺存幅５m，検出面からの深さ0.67mである。底面から検出面へ向かい緩やかに立ち上がりを見せる。

遺構内堆積土はさらに細分可能ではあったが，北側の断面と南側の断面との対比により，大きく４層に分けた。土質はℓ１～３はシルトであり，南側に行くに従い粘性・締まり共に強くなる傾向がある。ℓ４は南側の断面で確認できた層で，細かな植物遺体など腐植土が多量に混じっている。土質からすべて自然流入土と考えている。

本遺構も周辺の溝跡同様，河川の氾濫によって作り出されたものと考える。遺物の出土はないため，所属時期及び機能を特定することはできなかった。（小笠原）

### 34号溝跡　ＳＤ34（図69，写真55）

本遺構は調査区南東側のＶ－４グリッドからＲ－３グリッドにかけて位置する。重複関係は南東側で25号溝跡に切られているため本遺構の方が古く，南西側では21・32・33号溝跡を切っているため本遺構の方が新しい（ＳＤ21・32・33⇒ＳＤ34⇒ＳＤ25）。本遺構調査の段階ですでに21号溝跡を完掘していたため，21号溝跡との新旧関係は土層断面での検討により本遺構の方が新しいと判断した。



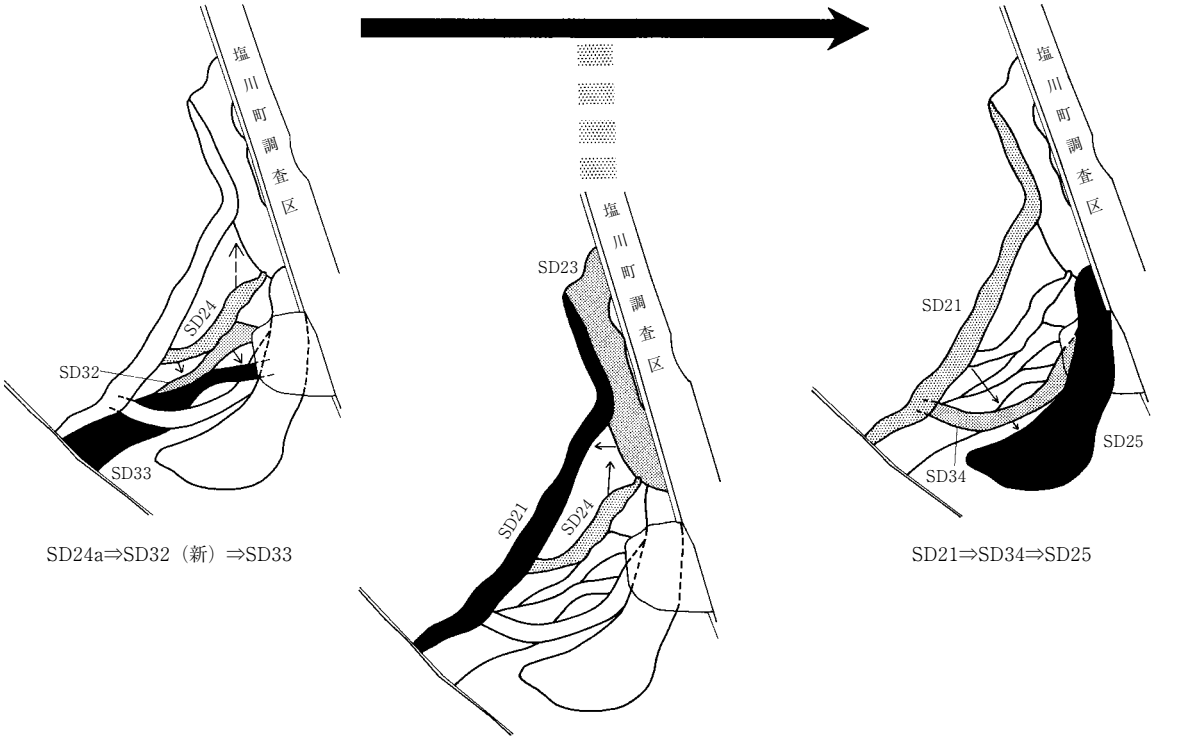

**33号溝跡内堆積土**（⑤－⑤′～⑨－⑨′）

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 |
| 2 | 10YR3/4 | 暗褐色土<br>（炭化物・ＬＶブロックを含む） |
| 3 | 7.5YR3/4 | 暗褐色砂質土<br>（炭化物・ＬＶブロックを含む） |
| 4 | 7.5YR3/3 | 暗褐色土<br>（炭化物・ＬＶブロックを含む） |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色土<br>（炭化物・ＬＶブロック・0.5cm大の小礫を多く含む） |
| 6 | 10YR2/1 | 黒色土<br>（炭化物を含む） |
| 7 | 7.5YR4/3 | 暗オリーブ色砂質土<br>（木質・植物等の腐食物を多く含む） |
| 8 | 礫層 | （2～5cmの小礫を多く含む） |

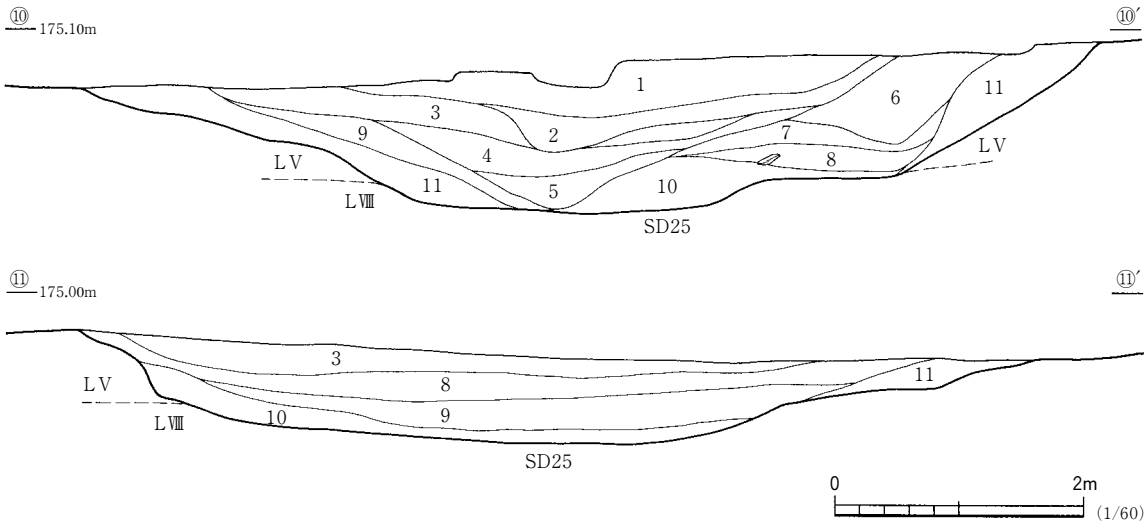
**34号溝跡内堆積土**（⑥－⑥′，⑦－⑦′，⑨－⑨′）

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 5YR3/2 | 暗赤褐色土<br>（炭化物を含む） |
| 2 | 5YR3/3 | 暗赤褐色砂質土<br>（炭化物を含む） |
| 3 | 5YR3/6 | 暗赤褐色粘質土<br>（炭化物を含む） |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土<br>（炭化物を含む） |
| 5 | 10YR3/2 | 黒褐色土<br>（炭化物を多く含む） |
| 6 | 10YR4/1 | 褐灰色土<br>（炭化物を含む） |
| 7 | 10YR4/1 | 褐灰色土<br>（炭化物を含む） |
| 8 | 10YR4/4 | 褐色土<br>（炭化物を含む） |

図71　33・34号溝跡




溝跡変遷模式図




**25号溝跡内堆積土**（⑨―⑨′～⑪―⑪′）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 5YR3/2 | 暗褐色土（炭化物を含む） | 6 | 7.5YR2/2 | 黒褐色土（炭化物・ＬＶブロックを含む） |
| 2 | 10YR2/1 | 黒色粘質土（炭化物を含む） | 7 | 10YR4/2 | 灰黄褐色砂質土 |
| 3 | 5YR2/3 | 極暗赤褐色土 | 8 | 10YR6/2 | 灰黄褐色土（炭化物を含む） |
| 4 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土（炭化物を含む） | 9 | 10YR4/1 | 褐灰色砂質土 |
| 5 | 10YR2/3 | 黒褐色土（炭化物を含む） | 10 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 |
| | | | 11 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色土（炭化物・ＬＶブロックを多く含む） |

図72　25号溝跡・溝跡変遷模式図

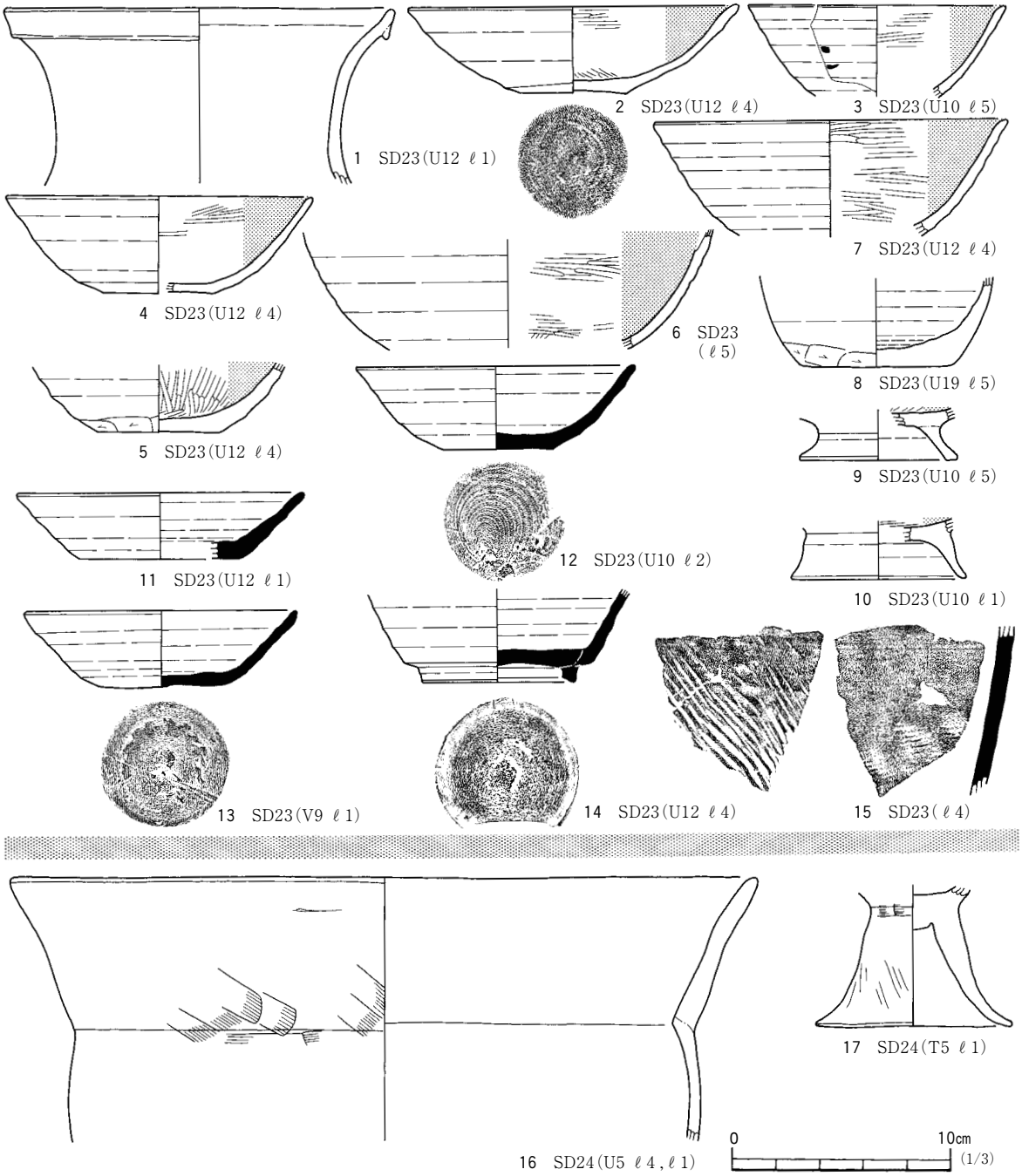



図73　23・24号溝跡出土遺物

本遺構のプランの確認及び掘り込み調査を行う際には，土層観察用ベルトと断ち割り部分を設けて徐々に検出面を下げながら行った。河川の氾濫に伴う礫層が一部遺存しており，下層の礫層と誤認してしまった部分もあるため，掘り過ぎてしまった箇所もある。

本遺構は北東から南西へ向けて「ノ」字形に湾曲しながら傾斜しており，規模は調査区内で確認できた長さ16.5m，最大遺存幅3.4m，検出面からの深さ0.48mである。底面はほぼ平坦であり，周壁は波を打つように立ち上がっている個所もあるが，全体的になだらかに立ち上がっている。

遺構内堆積土は南側の断面では８層に分けることができた。いずれの層も土質はシルト土であ

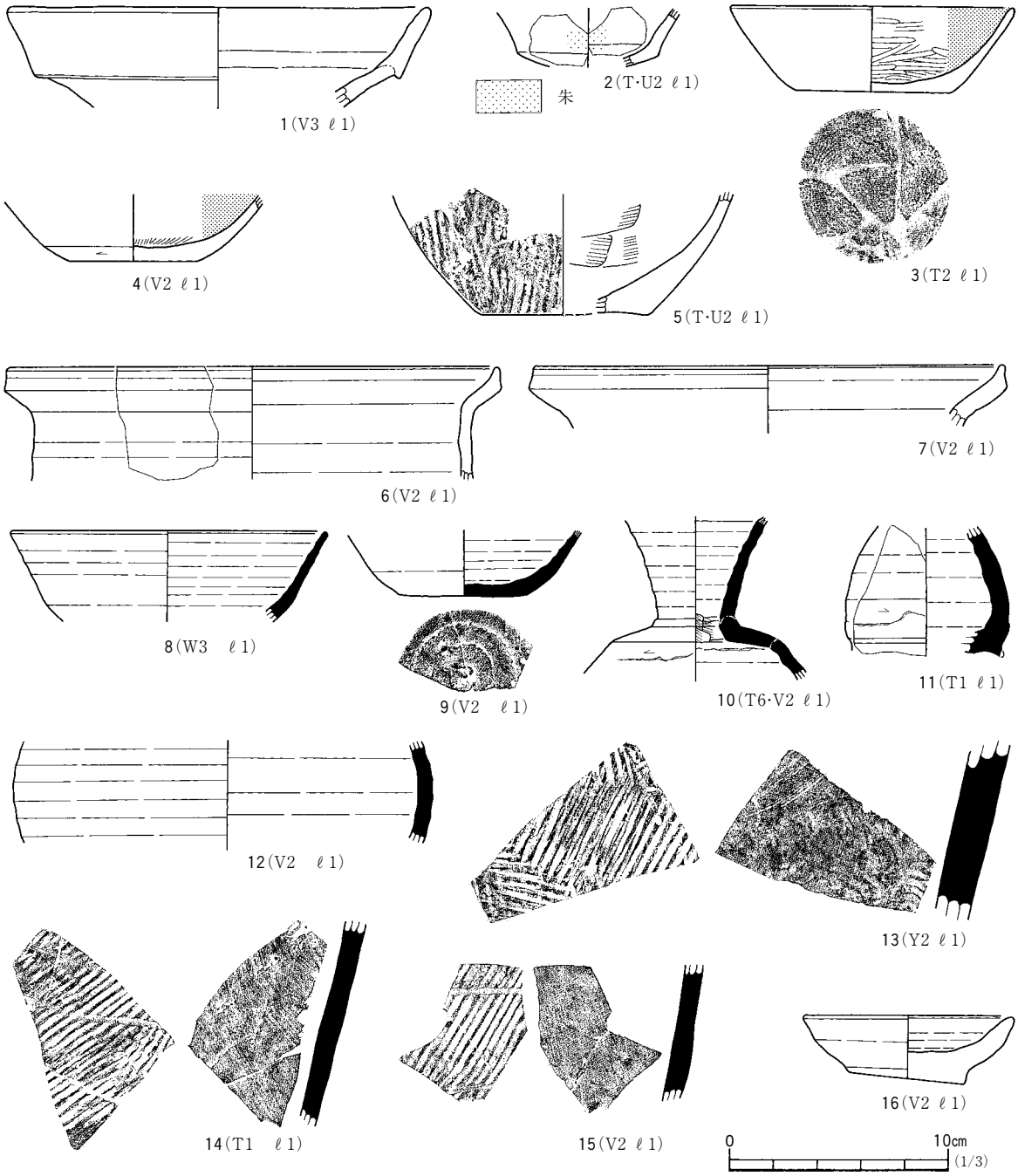



図74　25号溝跡出土遺物

り，すべての層に炭化物が混入している。基本的には同じ土質であり，水性堆積の様相を呈する層が目に付く。すべて自然流入土と考えている。また，北側での土層観察の結果，大きく2層に分けることができた。この2層は黒褐色を基調とするシルト土で，下層に行くに従い粘性が強くなる土質であった。調査中は，この層を鍵層とし，掘り込みを行ったが，北と南側に至る土層変化については明確に判断できなかった。

本遺構は周辺の溝跡同様，河川の氾濫によって作り出されたものの一つであろうと考える。遺物は土師器片6点が出土しているが，所属時期及び機能を特定することはできなかった。　（小笠原）

# 第６節　ピ　ッ　ト　群

今回の調査では溝跡や土坑等と一緒にピット（小穴）が多数検出された。これらは規模や堆積土，配列等からは建物跡や柱列跡，個々の住居跡等に付設するピットとして認識できなかったものである。ここでは各地区で検出状況や性格が異なるため，各グリッド検出のピット群をＡ～Ｉの大きく４地点に区分し，調査区北側から順次報告する。

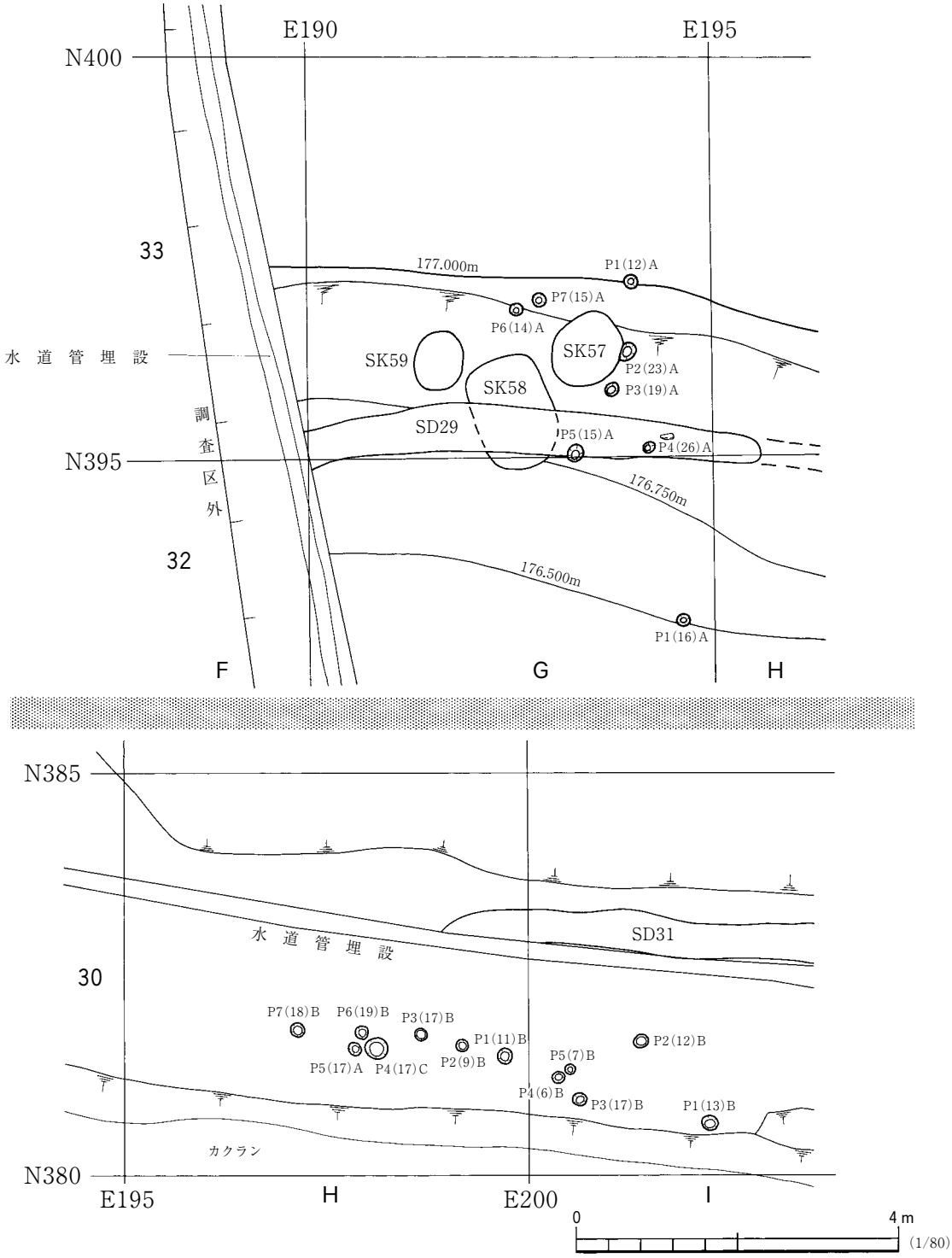
## １．地点１（図75～77）

調査区北側のＦ～Ｎ－28～33グリッドの範囲で検出できたピット群である。ピット群は散在しているため，大きくＡ～Ｄ地点に区分した。土坑や溝跡等の遺構が集中する南東側のＣ・Ｄ地点からの検出が多く，Ｃ・Ｄで143個，Ａで８個，Ｂで12個の総計163個検出した。周辺域は削平が著しく，すでに消失してしまったものもあるが，Ｃ・Ｄの北側や西側付近ではほとんど検出されなかった。標高177.00ｍ～176.25ｍの緩斜面及び平坦な地形からの検出であるが，削平が著しいためＬⅡ・ＬⅢ層が部分的に欠如している。このため，遺存状態が良いＡ区ではＬⅡ上面で検出しているが，他のピット群の大半はＬ・上面での検出である。重複関係はＪ29Ｐ１，Ｋ29Ｐ３，Ｌ29Ｐ10，M29Ｐ９・20・23・25は35号溝跡，Ｋ28Ｐ２，Ｌ28Ｐ３，Ｌ29Ｐ11，M29Ｐ３・４・14・18・27は30号溝跡，Ｇ33Ｐ４・５は29号溝跡，Ｇ33Ｐ２は57号土坑と重複しており，いずれもピットの方が新しい。ピット内堆積土が上層のＬＩ・Ⅱに類似する埋土であることや，ある程度規格性が一致することなどから，重複関係が認められなかった個々のピット群についても隣接する溝跡や土坑等よりも新しいものと判断している。

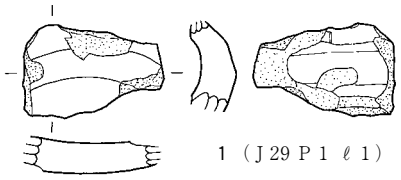
各ピットの平面形は円形または楕円形のものが多い。規模は長径８～42㎝前後とやや幅があるが，12～18㎝のものが多い。検出面から底面までの深さは５～28㎝である。各ピットの堆積土は柱痕と掘形埋土とに大別される。柱痕は黒褐色土を基調にしているものが多く，柱痕が確認できたＫ28Ｐ３，Ｌ29Ｐ７，Ｌ31Ｐ３，M28Ｐ２，M29Ｐ１・10のピットから柱材の推定径は10㎝前後と判断される。掘形埋土はＬＶブロックを多く含む黄灰色土からなり，M28Ｐ２は掘形底面から５㎝ほど下方に堀り込まれている。

遺物はＪ29Ｐ１，Ｋ29Ｐ１，M30Ｐ１から土師器片等が出土し，うち遺存状態の良い１点を掲載した。図75－１は土製品あるいは羽口片の一部と思われ，外面に手持ちケズリ，湾曲する内面にはナデ調整が施されている。器壁はやや厚く1.3㎝を測り，胎土には長石が含まれる。

多くのピットの所属時期は，ピット同士の重複から２時期以上にわたる変遷が想定され，溝跡等との重複関係や出土遺物等から判断して，平安時代から中世頃の所産と考えられる。ピットが集中して認められたＣ・Ｄ周辺域には26号溝跡などがあり，これらの溝跡と関連する建物跡や柵列跡等を構成するものもあると考えられるが，配列等を明らかにすることはできなかった。（井）




**地点１ピット内堆積土**
A：7.5YR3/1 黒褐色土（ＬⅡ相当）
B：10YR2/2 黒褐色土
C：10YR4/2 灰黄褐色土
D：10YR5/3 灰黄褐色土



1（Ｊ29Ｐ１ℓ１）

0　10m
(1/3)

**図75**　ピット群（１）　Ａ・Ｂ，出土遺物

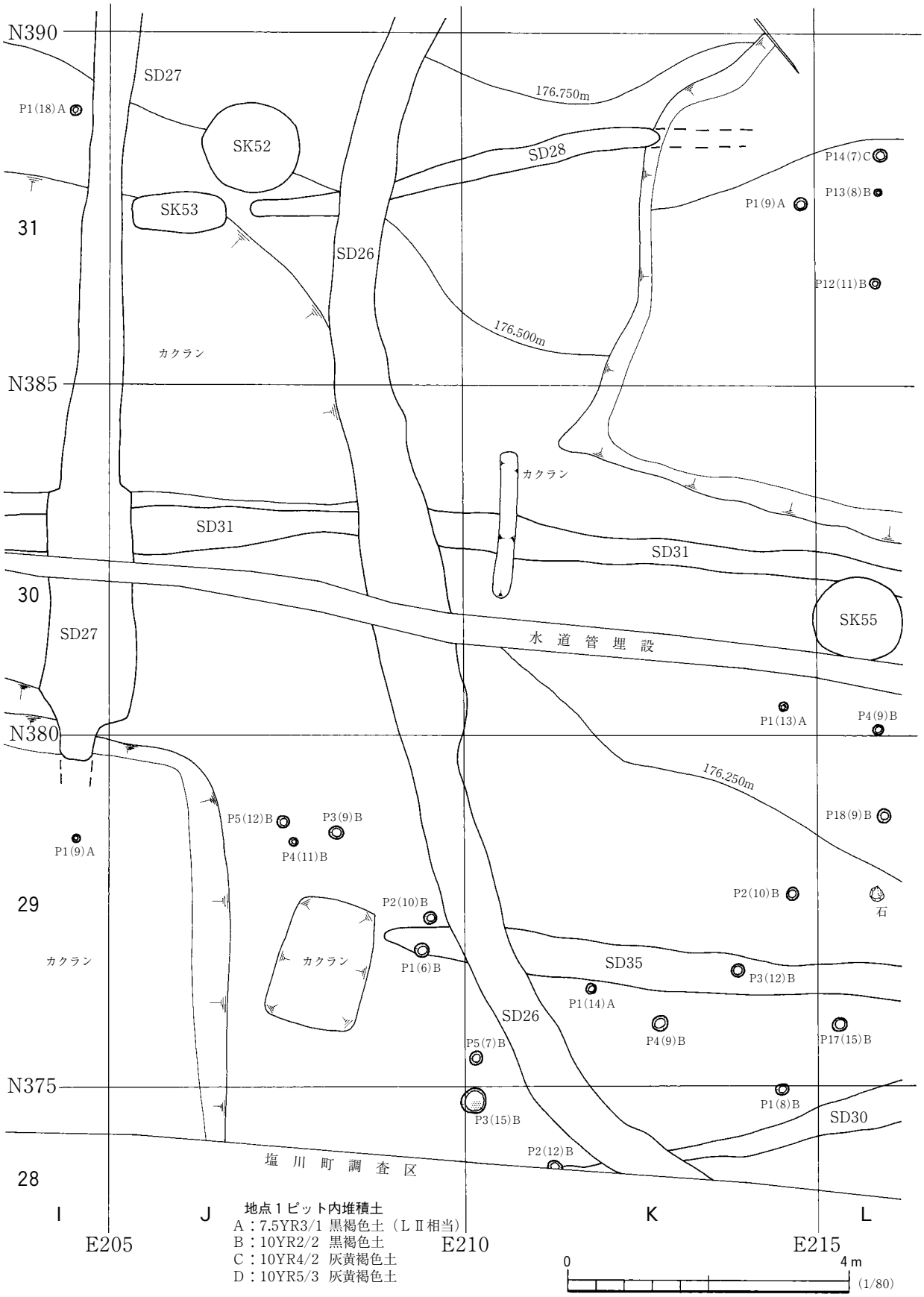

N390
N385
N380
N375
31
30
29
28
I
J
K
L
E205
E210
E215
SD27
SD28
SD26
SD31
SD35
SD30
SK52
SK53
SK55
176.750m
176.500m
176.250m
カクラン
水道管埋設
塩川町調査区
石
P1(18)A
P1(9)A
P14(7)C
P13(8)B
P12(11)B
P1(13)A
P4(9)B
P18(9)B
P5(12)B
P3(9)B
P4(11)B
P2(10)B
P1(6)B
P3(12)B
P1(14)A
P4(9)B
P17(15)B
P5(7)B
P3(15)B
P1(8)B
P2(12)B
地点１ピット内堆積土
A：7.5YR3/1 黒褐色土（LⅡ相当）
B：10YR2/2 黒褐色土
C：10YR4/2 灰黄褐色土
D：10YR5/3 灰黄褐色土
0
4m
(1/80)

図76　ピット群（２）　C

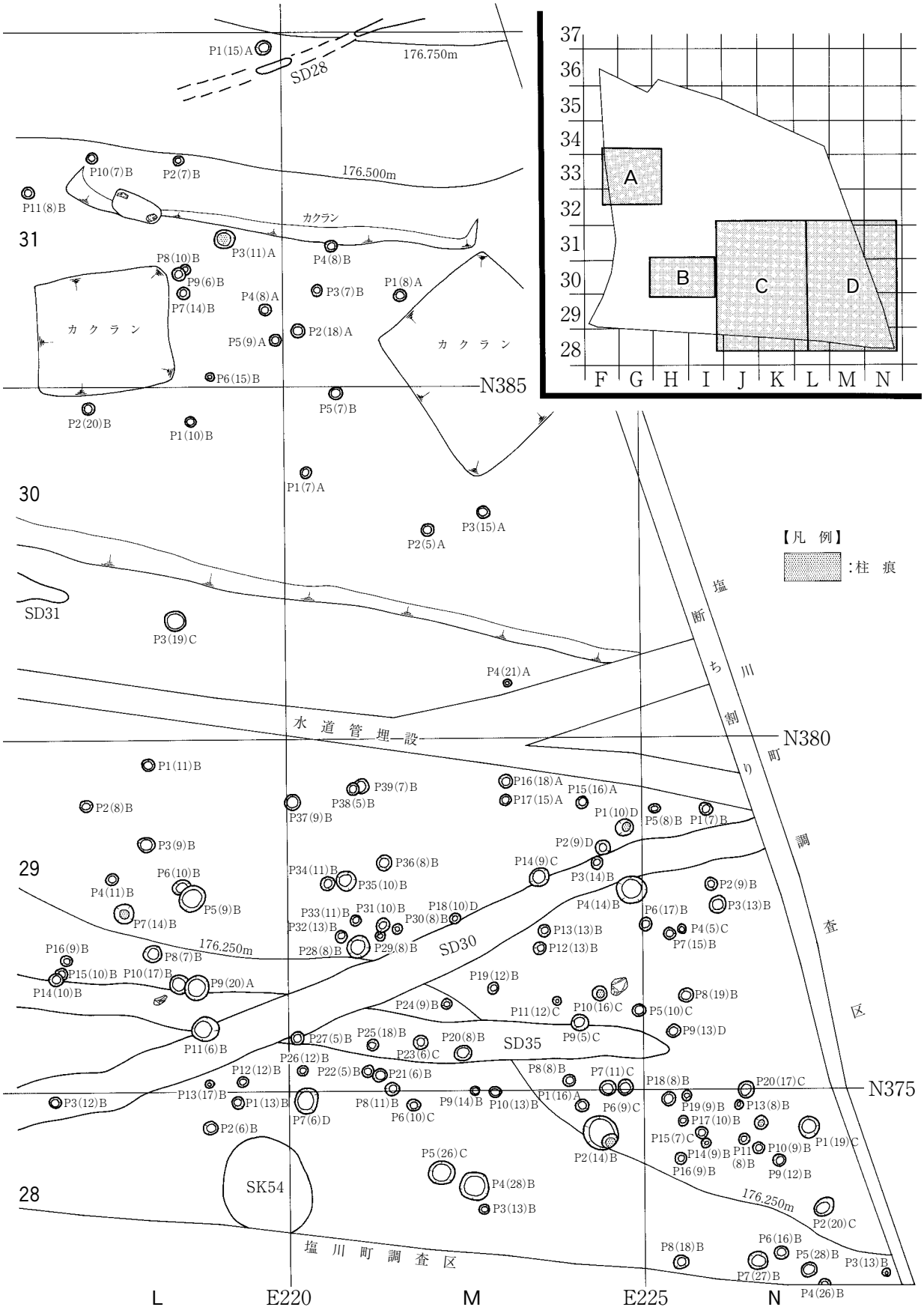

SD28
176.750m
176.500m
カクラン
カ　ク　ラ　ン
N385
SD31
水　道　管　埋　設
N380
塩　断　ち　川　割　り　町　調　査　区
SD30
176.250m
SD35
N375
SK54
塩　川　町　調　査　区
L
E220
M
E225
N
31
30
29
28
【凡　例】
:柱　痕
A
B
C
D

図77　ピット群（３）　D

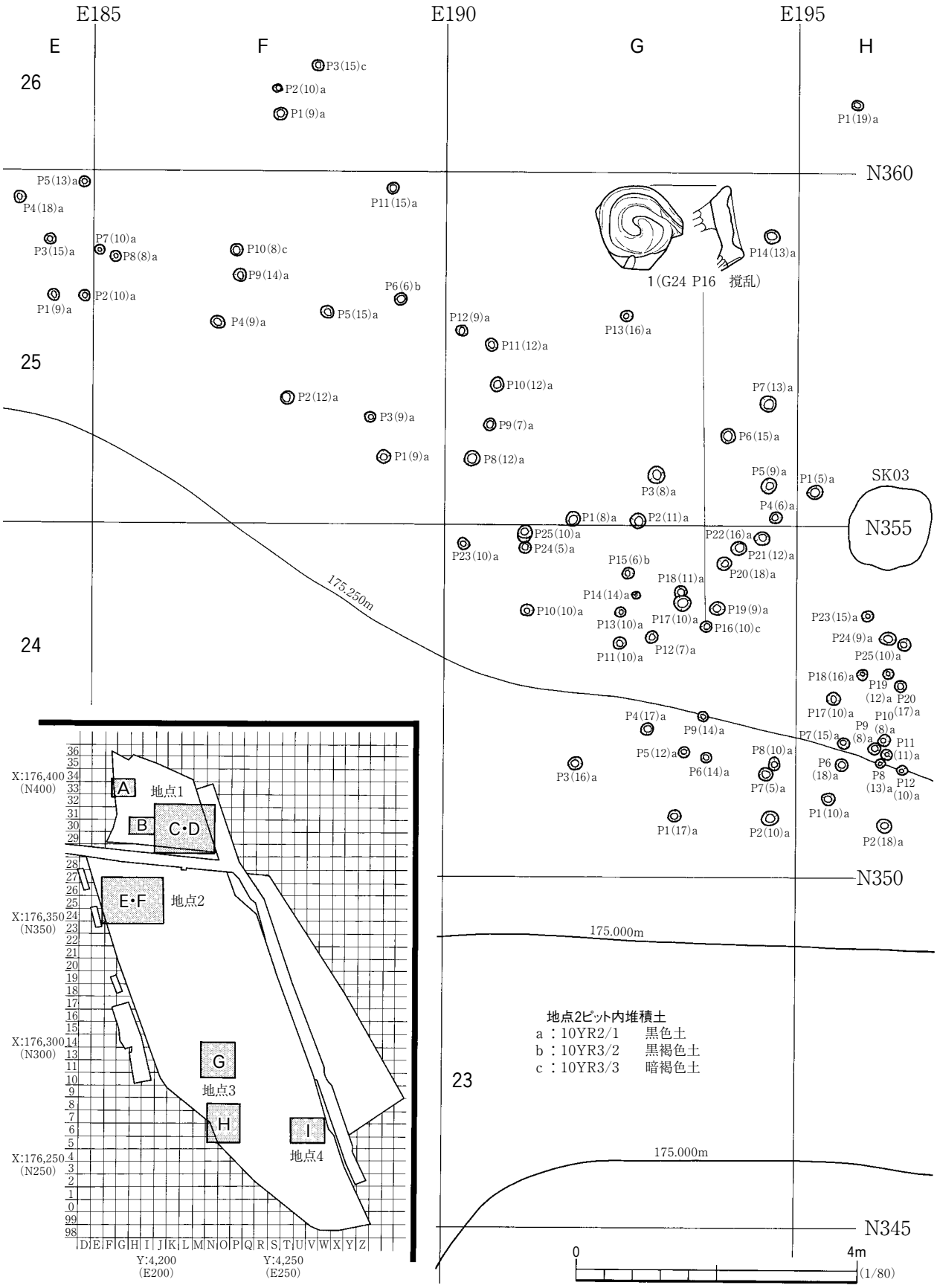



図78　ピット群（４）　E，出土遺物

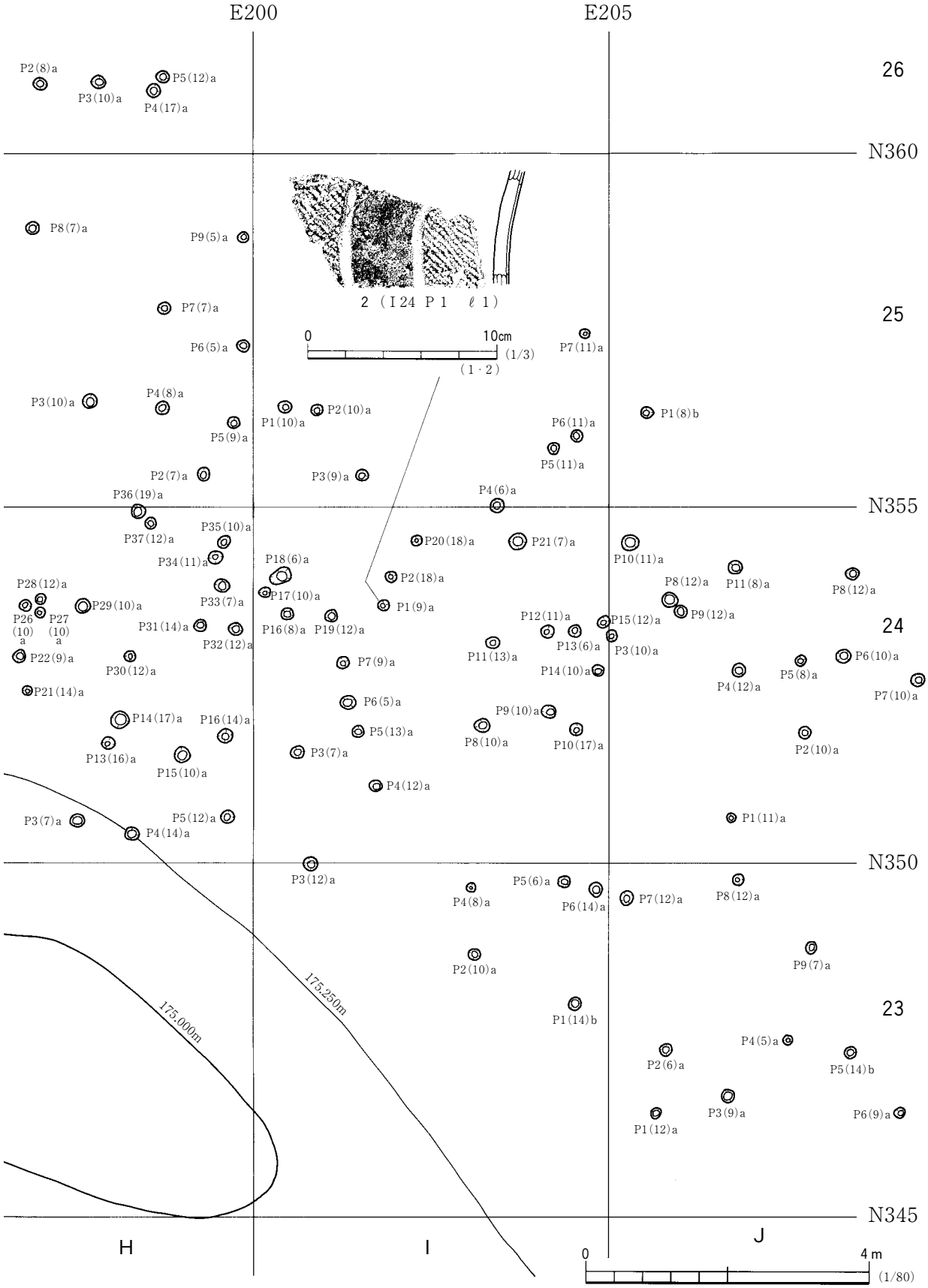



図79　ピット群(5)　F，出土遺物

### ２．地点２（図78・79，写真56）

本ピット群は調査区中央の北側に位置し，３・４・９号土坑がピット群内及び周辺に存在する。小穴同士で重複しているものは幾つかあるが，他遺構と重複関係にあるものはない。小穴は合計169個検出され，検出面はすべてＬＶ上面である。ピットの平面形は円形が大半を占め，規模的にＩ24Ｐ18の長軸35㎝程のものも存在するが，直径15～25㎝のものが大半である。ピット群の中で規則的な配置関係があるものは確認できず，Ｈ－24・Ｉ－24グリッドを中心に密集している。

遺物はピット内から縄文土器片４点，土師器片２点が出土した。図78－１はＧ24Ｐ16から出土した深鉢型土器の口縁部資料で，隆帯による渦巻き状の貼付文が造形されている。図79－２はＩ24Ｐ１から出土した深鉢型土器の胴部片で，平行する縦長の太沈線によってモチーフが縁取られている。縄文施文は縦方向回転で，無文部はナデ・ミガキ調整が施されている。図78－１は縄文中期中葉の大木８式期，図79－２は縄文中期後葉の大木10式期に比定される資料であろう。

ピット群は他遺構と検出面はほぼ同じで遺構内堆積土も特に異なる様相を呈していないため，明確に所属時期を判断することは出来なかった。（小笠原）

### ３．地点３（図80・81）

本ピット群は調査区中央付近から南側にかけて認められた小穴で，北側には４号溝跡が，西側には２号溝跡が隣接している。ピット群は全体的に散在しており，合計13個検出された。検出面はすべてＬＶ上面である。ピット内堆積土はいずれもＬⅡに近似した黒褐色系のシルトである。

ピットの平面形は，円形あるいは楕円形を呈するものが大半で，規模は直径15～30㎝である。Ｎ－12グリッド内に位置するＰ１・Ｐ２は直径が30㎝，40㎝を測り，他の小穴と比して大きく，Ｐ２からは柱痕が確認できた。検出面から底面までの深さは2.5～38.5㎝とかなり開きがあるが，10～20㎝のものが多い。

遺物はＮ12Ｐ１から土器片が３点出土しているが，摩滅が著しく図示できなかった。（小笠原）

### ４．地点４（図82，写真57）

本ピット群は調査区南東部に位置し，北西部には21号溝跡，北東部には23号溝跡，東側には25号溝跡，南側には33号溝跡が存在する。小穴は合計８個検出され，検出面はすべてＬⅢ上面である。ピット内堆積土は４つに大別されるが，基本的にはＬⅡに近似した黒褐色系のシルトを呈する。

ピットの平面形は直径10～20㎝の円形を呈するものが大半である。検出面から底面までの深さは９～40.5㎝とかなり開きがあり，15㎝前後のものが多い。

配置的に規則性が見られず，また柱痕や出土遺物も認められなかった。時期的には24a号溝跡や32号溝跡等と重複しており，これらの遺構よりは確実に新しいことを考慮すれば，古代以降のピット群と判断される。（小笠原）

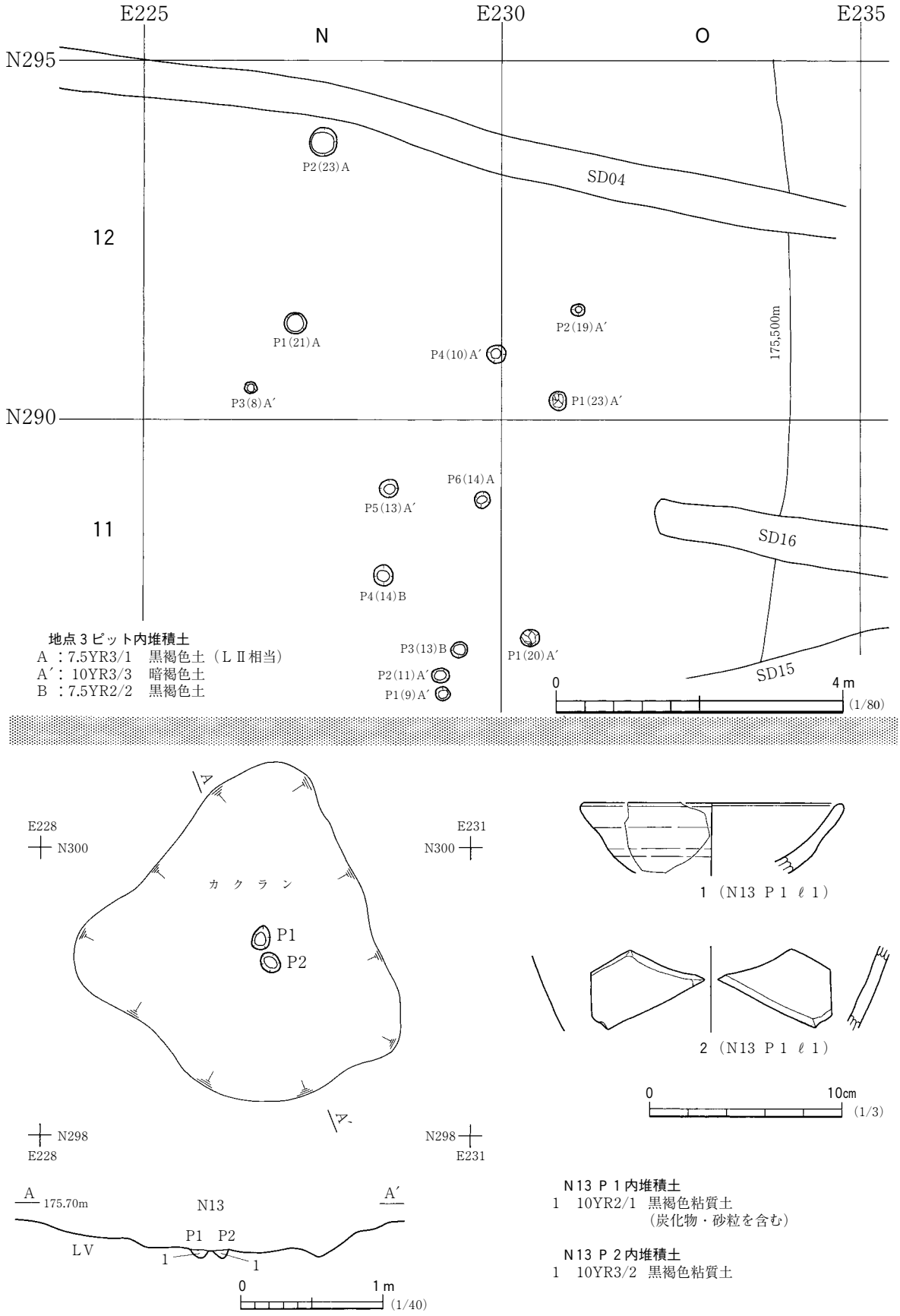



図80　ピット群(6)　G，出土遺物

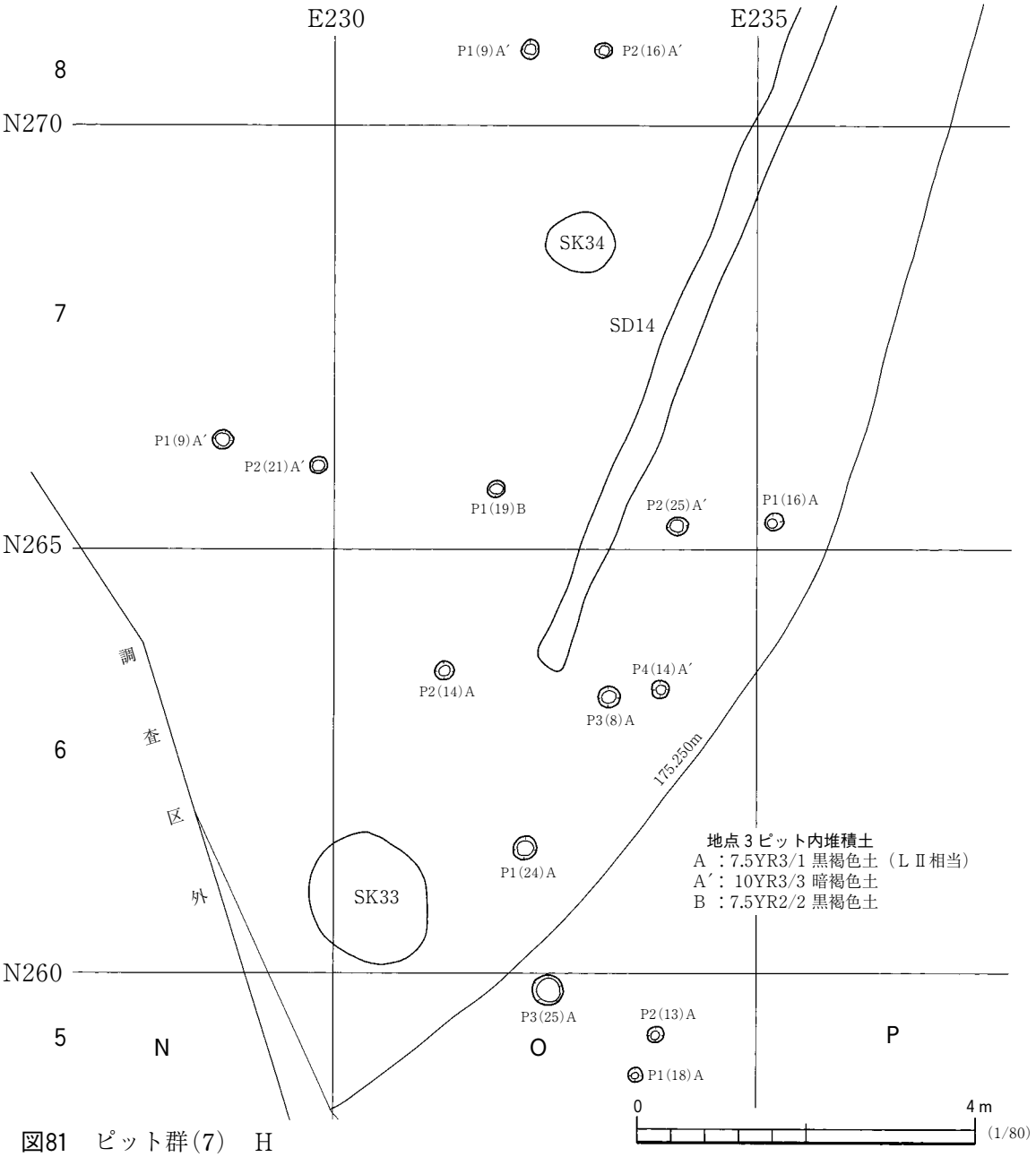



図81　ピット群(7)　H

## ５．その他のピット（図80・82，写真58）

上述した地点以外からも僅かであるがピットが検出されている。N－13・L－21グリッドから２個，L－22・M－19・I－16グリッドから各１個検出された。堆積土はいずれもＬⅡに近似した黒褐色系の粘質土で，柱痕等は確認できなかった。平面形は楕円形のものが多いが，L21Ｐ２のように隅丸方形に近いものや，M19Ｐ１・I16Ｐ１のように若干オーバーハングし規模が大きいものもある。

遺物は地点３の北東側で検出されたN13Ｐ１から２点出土した。図80－１はやや厚みがあるかわらけ小皿の口縁部片，２は貿易陶磁器の白磁片である。２は器形的に壺あるいは瓶類の胴部片と思われ，内外面に施釉，胎土は灰白色を呈し緻密である。概ね12世紀後半頃に比定される資料である。

（井）

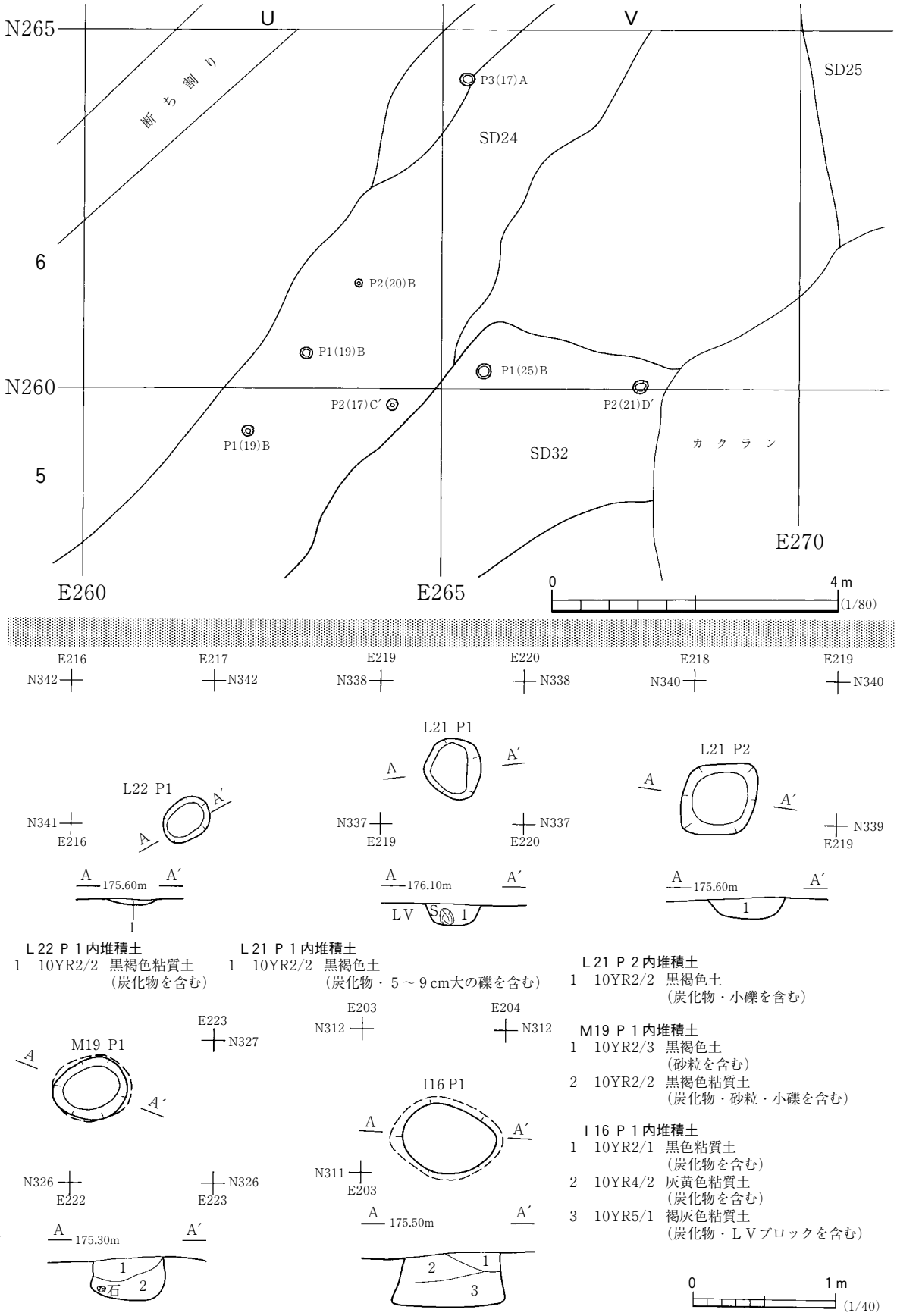

N265
U
V
断ち割り
P3(17)A
SD24
SD25
6
P2(20)B
P1(19)B
P1(25)B
N260
P2(17)C′
P2(21)D′
P1(19)B
SD32
カクラン
5
E270
E260
E265
0
4 m
(1/80)
E216
N342
E217
N342
E219
N338
E220
N338
E218
N340
E219
N340
L22 P1
N341
E216
A
A′
175.60m
1
L21 P1
N337
E219
N337
E220
176.10m
LV
S
1
L21 P2
N339
E219
175.60m
1
L22 P１内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物を含む）
L21 P１内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・５～９cm大の礫を含む）
L21 P２内堆積土
1　10YR2/2　黒褐色土
（炭化物・小礫を含む）
E223
N327
M19 P1
N326
E222
N326
E223
175.30m
1
2
石
E203
N312
E204
N312
I16 P1
N311
E203
175.50m
1
2
3
M19 P１内堆積土
1　10YR2/3　黒褐色土
（砂粒を含む）
2　10YR2/2　黒褐色粘質土
（炭化物・砂粒・小礫を含む）
I 16 P１内堆積土
1　10YR2/1　黒色粘質土
（炭化物を含む）
2　10YR4/2　灰黄色粘質土
（炭化物を含む）
3　10YR5/1　褐灰色粘質土
（炭化物・ＬＶブロックを含む）
0
1 m
(1/40)

図82　ピット群（８）　Ⅰ

## 第７節　遺構外出土遺物

今回の調査では遺構外から総数5,256点の遺物が出土した。これは出土した総点数の約56％に相当する。内訳は土師器類が最も多く約4,000点（約76％），次いで縄文・弥生土器が約600点（約11％），須恵器類が約80点（約1.5％），陶磁器類が約50点（約１％），木質遺物等が約50点（約1.5％），その他石器類・鉄製品など（約0.5％）が僅かに出土している。これら遺構外出土遺物のうち，遺存状態の良い109点を図化し掲載した。出土した遺物の大部分はＬⅡからの出土であるが，層位による明確な時代差は認められない。

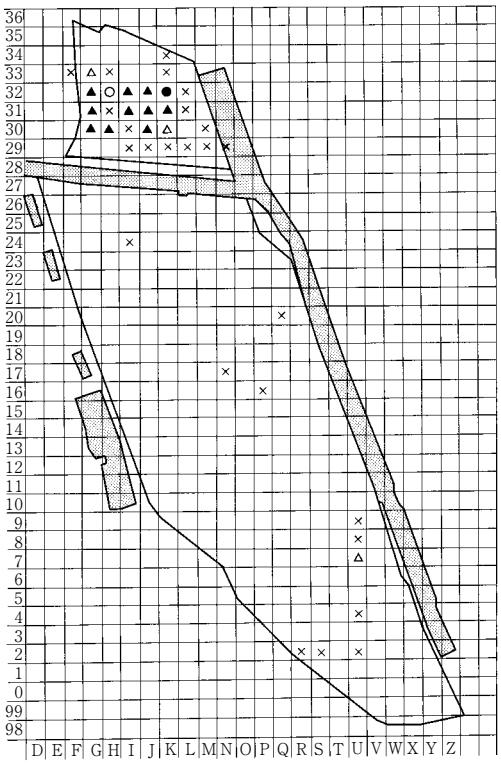
図83に掲載したグリッド別出土点数を見ると，各時代の遺物を通して調査区北側のＧ～Ｎ－29～34グリッドに集中していることが分かる。また，土師器・須恵器等の古代の遺物は調査区南側から確認された溝跡及び旧河川跡近辺から出土しており，中世の遺物は概ね調査区北側からの出土である。遺構の密度が高い区域の周辺で，出土遺物が多い傾向にある。また，調査区北半及び北東側の撹乱中でも遺物がある程度出土しており，遺構が破壊されている可能性が想定される。以下，順次概説するが，各遺物の特徴や計測値については表６～９に合わせて掲載している。

**縄文・弥生土器**（図84－１～24，写真79）

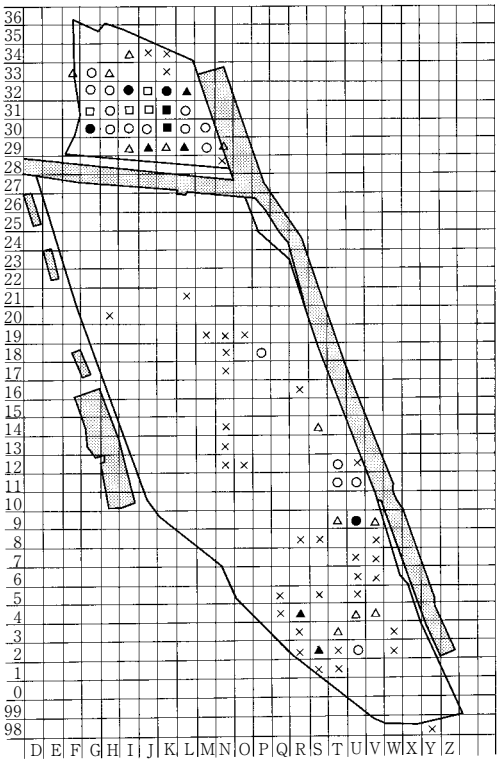
縄文・弥生土器の大半は調査区北側のＧ～Ｋ－30～33グリッド周辺のＬⅡ及びＬⅢから出土しており，図84－１～24に掲載した。出土量は弥生土器より縄文土器の方が多い傾向にある。

**縄文土器**　図84－１～４・６はいわゆる瘤付土器で，縄文後期後半の新地式期頃に比定される資料である。１～３は口縁部片で，１・３は半精製の壺型土器，２は粗製の鉢型土器である。１は平行沈線間に小瘤を貼り付けており，２は箆状工具で器面を盛り上げて瘤状に施文している。４は壺あるいは鉢型土器の頸部片で，曲線的な微隆起線文の交点に小瘤を貼り付けている。６は小底部を有する鉢あるいは注口土器と思われ，球胴部下半を遺存する。胴部は丁寧なミガキ・ナデ調整が施され，下半部と区画する３本の横位平行沈線間に貼り瘤，その上位には半弧状の文様が描かれている。図84－5・７・21は縄文晩期の資料である。５は台付浅鉢の四脚部分の破片資料で，脚部の約半分を遺存する。横位の沈線下に連弧状の沈線が施文され，その交点には刺突が加えられている。縄文晩期前半頃の所産であろうか。７は推定口径39.4㎝を測るやや大型の深鉢型土器である。口頸部は緩く「く」字状に外反し，胴部は直線的な円筒形を呈する。器壁はやや厚みがあり，口端には刻み目が加えられている。口縁部と頸部の境には掘りの深い横位の平行沈線が施され，沈線間には羊歯状の刺突文が加えられている。地文は頸部に斜縄文，頸部の沈線下の胴部には網目状撚糸文が施文されている。縄文晩期中葉の大洞Ｃ１式に比定される資料であろう。図84－21は口頸部遺存の無文粗製土器甕で，縄文晩期の資料と思われる。口縁部は緩やかな波状を呈し，頸部が括れ，やや胴部が膨らむ器形である。器外面は横位のミガキ調整，内面はナデ調整が施されている。

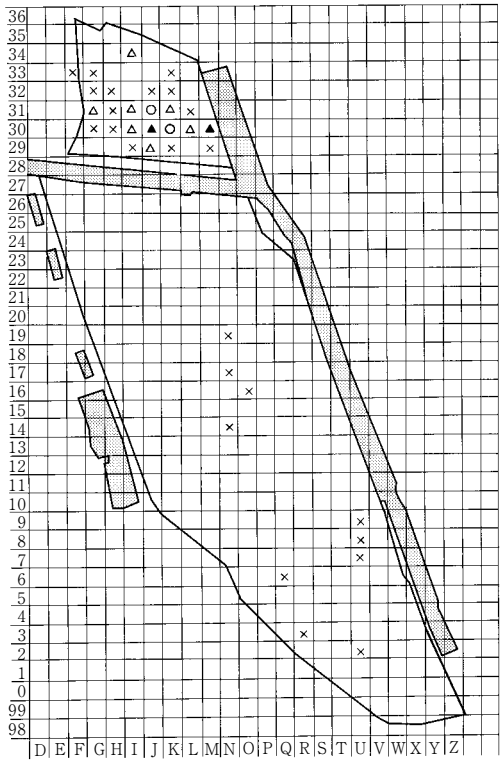
**弥生土器**　図84－８～17には弥生時代後期頃の資料を一括した。大半は壺型土器であるが，10の



縄文・弥生・石器　641点



土師器・須恵器・筒型土器　4,246点



中世陶器・からわけ・その他　377点

【凡　例】

- × ：1～10点
- △ ：11～30点
- ▲ ：31～50点
- ○ ：51～100点
- ● ：101～200点
- □ ：201～300点
- ■ ：301点以上
- ：塩川町調査区

0　100m
(1/2,000)

図83　遺溝外出土遺物グリッド別点数

ような高杯も出土している。８・９・13・16は受け口状，15はやや広口状の口縁を有する壺型土器である。８・９の口端には内外から刻み目が加えられ，８・10・11には曲線的な沈線文と交互刺突が施されている。８の地文及び９・13の口頸部には０段多条縄文，15・17には条の細かい撚糸を回転施文している。12の頸部には波状の櫛描文が施文されている。８～11は天王山式期，12～14はやや後出的であり十王台式期頃であろうか。

底部資料は18～20の３点を掲載した。19は上げ底状，20は器形的にやや大型の底部である。時代判別は明確でないが，20は縄文土器，19が弥生土器に伴う底部であろう。

**土製品**　図84－22は小型の土製品と思われる。円筒形を呈するが，両端側がやや裾広がりとなる。胴部には粘土紐が貼り巡らされ，先端が尖った工具によって刺突文が施されている。遺存長5.9㎝，径2.9㎝を測る。縄文後期頃の所産であろう。

**石　鏃**　図84－23・24は凸基有茎鏃で，24の先端は欠損している。形状はいずれも左右対称に整った縦長の二等辺三角形状を呈し，長さに対する基部幅の割合は0.4前後である。調整は側縁部に両面から細かい調整剥離を連続的に加え，先端部を鋭く作出している。厚さは23が0.4㎝，24が0.5㎝で，石質はともにデイサイトである。

**土師器・須恵器**（図84－25～28，図85・86，図87－１～13・26～34，写真79～81）

土師器・須恵器類は調査区南側の溝跡・旧河川跡近辺で出土したものが大半である。平安時代の資料が多いが，僅かに古墳時代の資料も出土している。器種的には土師器は甕及び杯類が多く，須恵器は甕・瓶類が主体を占め，杯類は極僅かの出土である。遺存状態の良い古墳時代の資料を図84－25～28，平安時代の土師器・須恵器類を図85・図86に掲載したが，ここではかわらけや筒型土器を土師器の中で，中世陶器を須恵器の中で合わせて概述する。

図84－25～28は古墳時代前期の所謂古式土師器である。25～27は高杯の脚部片で，27の裾は「ハ」字状に広がる。器形的に25・27は円錐台状，26は脚上部が柱状で脚下部が円錐状を呈する器形と思われる。25・27の杯身と脚部の接合部分は，箆状工具で押さえ・ナデ調整が施され，26・27の器外面には丁寧な縦位のミガキ調整，25にはナデ調整が加えられている。26には朱彩が認められる。28は器壁が薄い直線的な脚部を呈し，小型の台付甕あるいは器台と思われる。いずれも円窓及び貫通孔は認められない。これらの資料は概ね４世紀後半の塩釜式期頃に位置付けられる資料であろう。

**土師器杯**　図85－１～10はロクロ成形による土師器杯である。１～５・７・８・10は内面に黒色処理が施され，丁寧なミガキ調整が加えられている。器形的には体部にやや丸味を持って緩やかに外傾するものが多く，体部下端から底部にかけて再調整を施すものが大半である。２・３・８・10は回転ヘラケズリ，１・４・５・７は手持ちヘラケズリ再調整が体部下端から底部にかけて施されている。５の底部切り離し技法は静止糸切りである。概ね前者が９世紀前半頃，後者が９世紀後半頃の範疇で捉えられる。６・９は摩滅しているが，非黒色処理の可能性が高く，後出的な資料である。

**高台付杯**　図85－11・12は底部から台部遺存の高台付杯で，出土量は少ない。12の内面は黒色処理後のミガキ調整が認められ，脚部がやや高い。遺存する脚部径はともに９㎝程である。

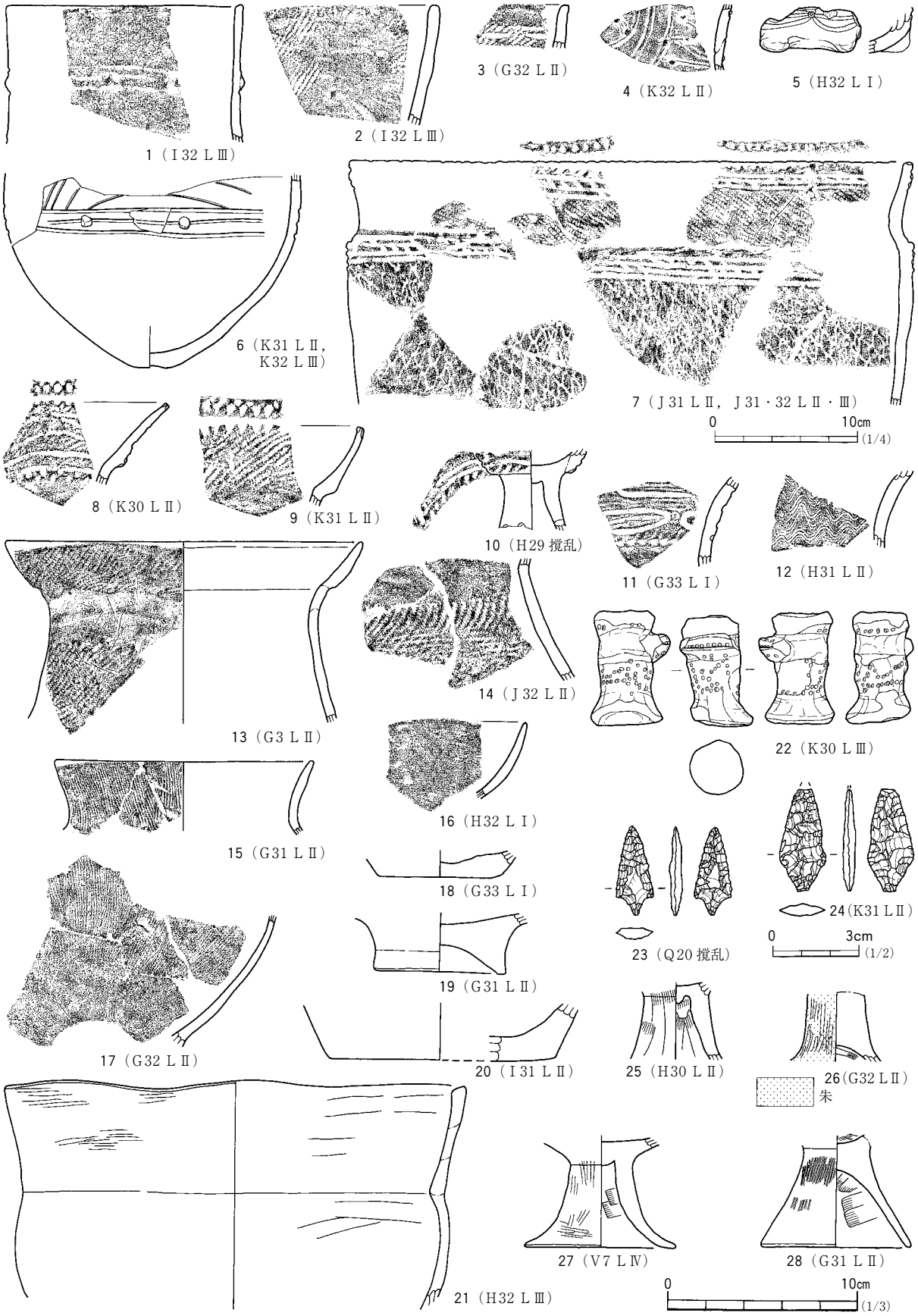



図84　遺溝外出土遺物（１）

**土師器甕**　図85－13～19はロクロ成形による長胴甕で，13の胴部はやや膨らみがある。器形的に中型から小型のものが多い。13～15の口頸部は「く」字状に屈曲し，口縁端部が上方へ引き出されている。胴部にはロクロナデ調整のもの（13～15）と胴部下端までタタキ調整を施したもの（16～18）がある。後者の底部は，ヘラケズリ再調整によって狭い平坦面を作出している。

**かわらけ**　図87－１～13はロクロ成形による底部回転糸切り・無調整のかわらけである。非ロクロ成形で手捏ね土器は出土していない。大半は底部が厚く，器形的に１～４は大皿，他と比して計測値が小さい５～12は小皿と思われる。１・７・10の口端はやや上方に摘み上げられている。２の身込み部分には，指頭圧痕による右回転の渦状の調整と付着物が認められる。灯明皿として使用された可能性がある。大皿の１の推定口径は12.3㎝，底径5.8㎝，器高4.3㎝を測り，最も小さい６は推定口径6.4㎝，推定底径4.0㎝，器高1.9㎝を測る。11は柱状高台皿，13は柱状高台の欠損品である。器表面が摩滅して判然としないが，土器の特徴等から概ね11～12世紀頃に位置付けられる。

**筒型土器**　図87－26～34は筒型土器の口縁部片である。すべて破片資料であるため，全体の器形が分かるものはない。口縁部付近が直線的になる器形が多いが，27・31・33のようにやや内湾状となるものもある。器内外面には指頭圧痕やナデ調整，粘土紐積み上げ痕が明瞭に観察されるが，被熱を受けて赤変しているものも多い。器壁は0.6㎝前後である。

**須恵器杯**　図85－20・21は須恵器杯の底部片で，出土量は極端に少ない。推定底径は20が7.0㎝，21が6.0㎝を測り，21の切り離し技法は判然としなが回転ヘラ切りで，底部には「×」状の線刻が施されている。胎土は比較的緻密で白色鉱物細粒を含んでいる。

**須恵器壺・瓶類**　図85－22～26は瓶類あるいは壺型土器の口頸部資料である。器形的には22が短頸壺あるいは広口瓶，23が長頸瓶，24・26は小型壺と思われる。22・24は頸部と体部が２段接合であり，23の頸部下端にはリング状の突帯が１段巡る。概ね大戸古窯編年（石田：1994）のＭＨ－19号窯式期～ＫＡ－107号窯式期に比定され，９世紀後半頃に位置付けられる。

**須恵器甕**　図85－27，図86－１～７が該当する。図85－27・図86－６・７は大甕の口縁部及び胴部片で，図85－27の頸部には２段の波状文が施文されている。２・５の器外面には螺状の沈線文が施されている。外面は平行タタキ痕が施され，内面には１が菊花状，３・４が同心円状のアテ具痕，２・５はアテ具痕をナデ消している。

図86－８～12は器種が特定できない胴部下半から底部の資料である。外面にはロクロ目とナデ調整が施され，９は底径が広く高台部がやや潰れていることから広口瓶，８・12は平底の資料である。

**中世陶器**　図86－13は頸部遺存の須恵系中世陶器の中壺である。54号土坑（図35－10・11）や１号溝跡（図45－１）出土資料に器面調整や胎土等が類似する。粘土紐巻き上げと判断され，外面にはやや右下がりの密なタタキ痕，内面は押圧具のアテ具痕をナデ消している。胎土は緻密で，青灰色を呈し，白色鉱物細粒を含む。珠洲系中世陶器と判断される。

**陶磁器**（図87－14～25，写真82）

**貿易陶磁器**　図87－14～22は白磁及び青磁である。全て破片資料のため全体を把握できた資料

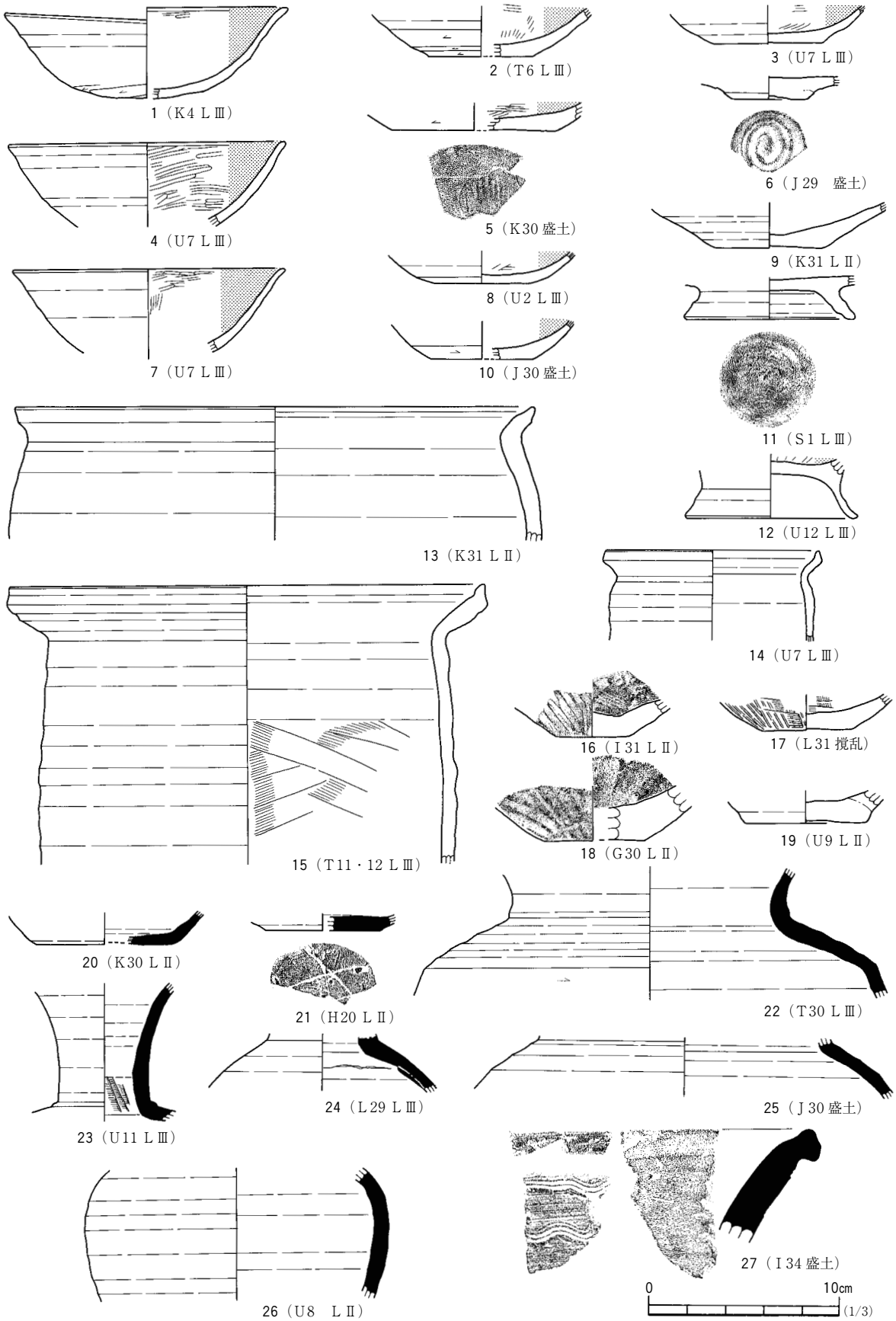



図85　遺溝外出土遺物（２）

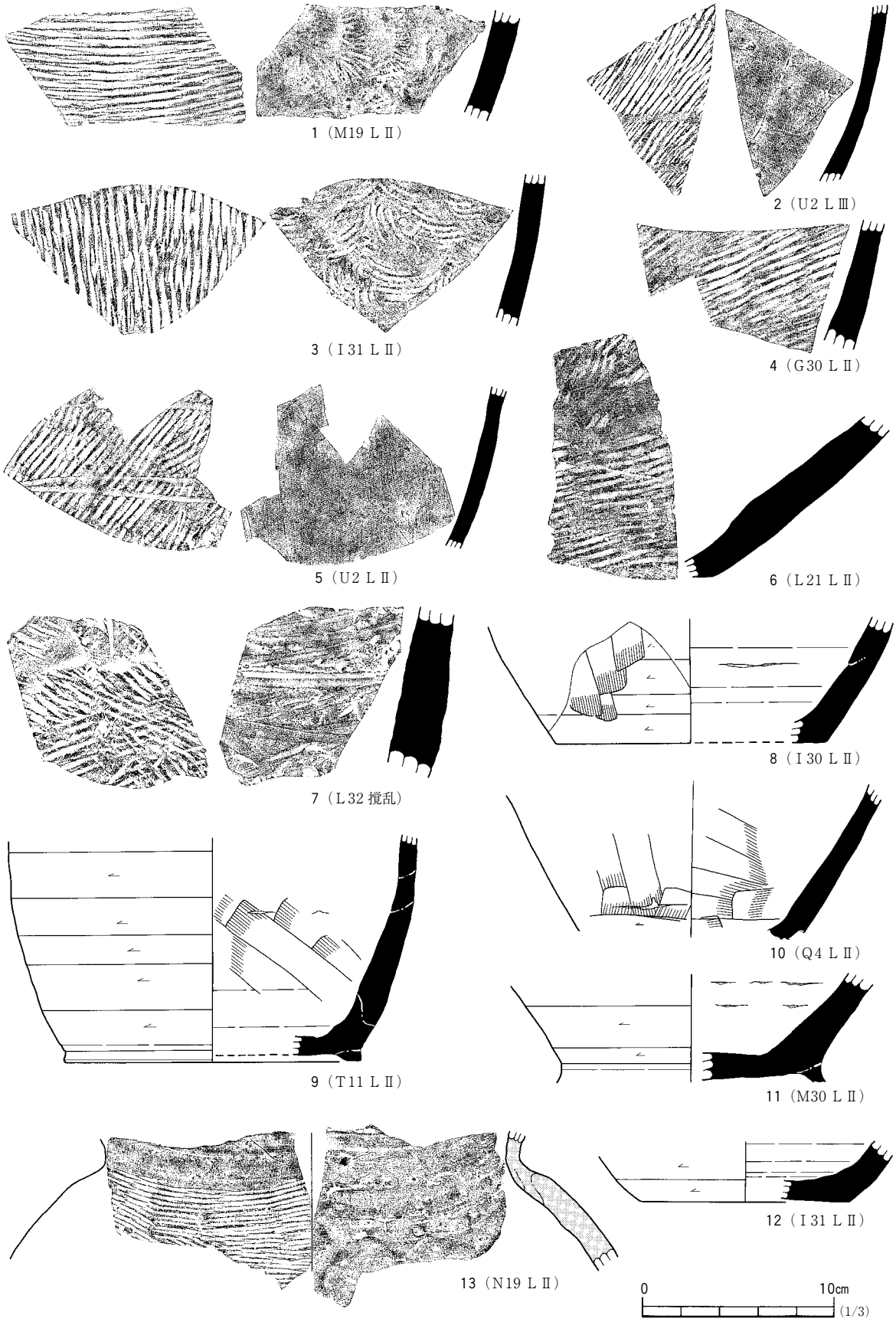



図86　遺構外出土遺物（３）

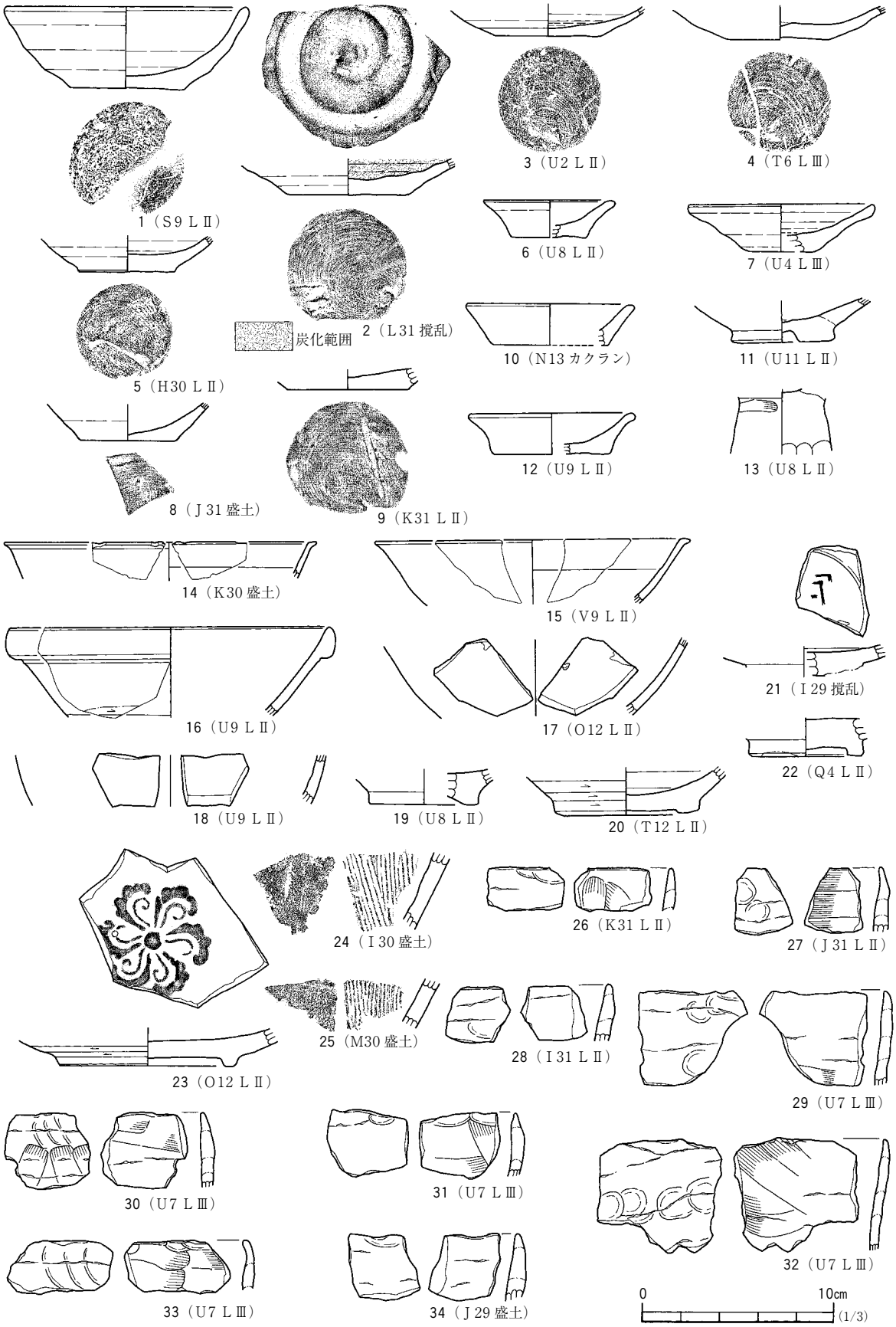



図87　遺溝外出土遺物（４）

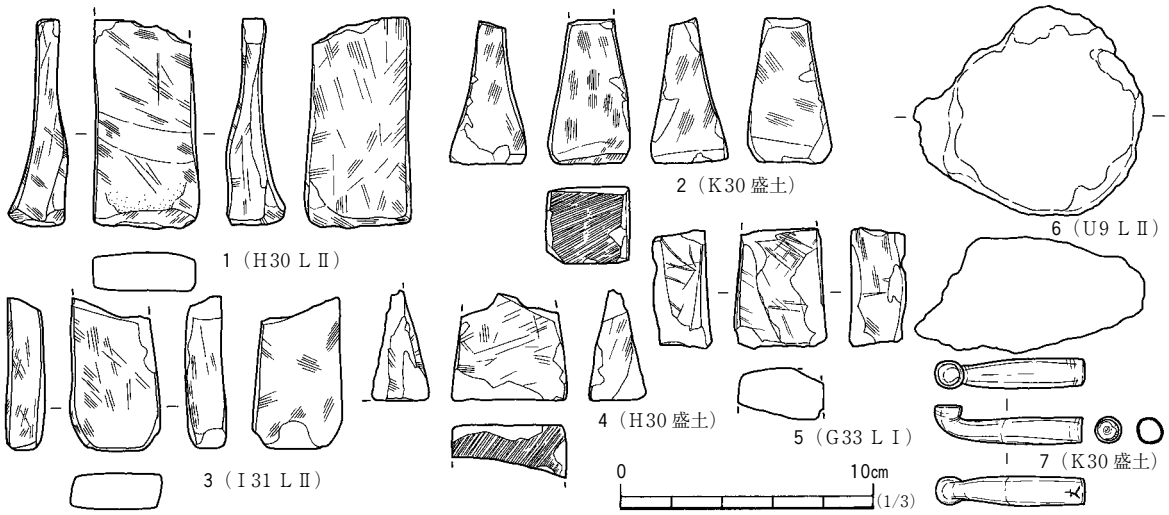



**図88**　遺溝外出土遺物（５）

はないが，調査区内では遺構外から９点出土している。大半は白磁であり，青磁の出土量は少ない。この傾向は遺構内出土のものと同様である。器種的には白磁碗・皿・四耳壺，青磁椀などが認められる。14・15は推定口径17㎝程の端反りの白磁碗と思われる。14・15の内面には沈線が認められる。16は玉縁状の口縁を有する白磁碗である。推定口径16.8㎝を測り，口縁の玉縁は比較的大きい。破片資料のため判然としないが，17は白磁碗，18は四耳壺の体部片と思われる。いずれの資料も器内外面には半透明な灰白色を呈する釉が全面に施釉されている。胎土は，灰白色を呈し緻密である。19・20は白磁，21・22は青磁椀の底部片である。高台部は19が逆台形，22は四角高台を呈し，丁寧な面取りの削りを行い断面角形状となっている。20の内面底部付近には沈線が認められる。これら青磁や白磁は概ね大宰府編年（横田・森田：1974・1987・1995）の12世紀後半から13世紀に比定される資料であるが，21は内面底部に四角状のスタンプ文が施されており，14世紀～15世紀頃の資料と思われる。

その他の陶磁器類としては，23～25がある。23は内面底部に花文が施された鉢，24・25は内面に卸し目がある擂鉢の体部片である。23は型紙刷りの可能性があり，19世紀頃の本郷焼きと思われる。

**その他の遺物**（図88，写真82）

**砥　石**　図88－１～５は砥石の欠損品である。１・３・５は長方形状，２・４は三角形状を呈する。器表面には使用時の擦痕が認められ，２・４には顕著な線状痕が認められる。石質は１～３・５が流紋岩，４は変質流紋岩である。

**椀型滓**　図88－６は椀型滓である。火熱により侵蝕されて溶着滓および錆が付着している。遺存する外径は9.0㎝，厚さ4.8㎝を測る。出土地点の周辺からは羽口片も２点出土しているが，精錬・鍛冶関連の遺構は確認されていない。

**煙　管**　図88－７は銀合金の煙管で，板状に丸めて繋ぎ合わせている。首部の湾曲は小さく，火皿は上径1.1㎝，断面形は台形皿状を呈する。裏側には「大」の文字が線刻されている。吸口は発見されなかった。火皿や首部の雁首形態等から見て江戸時代以降のものと推察される。　（井）

表３　土器観察表(1)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30-1 | かわらけ 大皿 | SK01 ℓ2 | (13.6) | 6.0 | 4.2 | (0.44) | (0.31) | 口～底 50% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-2 | かわらけ 小皿 | SK01 ℓ2 | (9.6) | (7.5) | 2.2 | (0.78) | (0.23) | 口～底 25% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-3 | かわらけ 小皿 | SK01 ℓ1 | (7.4) | (4.7) | [1.9] | (0.64) | (0.26) | 口～底 5% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-10 | 白磁 碗 | SK05 ℓ1 | (16.0) | － | [5.7] | | | 口～体 10% | 白色釉 体部下半露胎 | 白色釉 見込み掻取 | |
| 30-13 | かわらけ 大皿 | SK06 ℓ2 | (13.7) | (8.0) | 4.4 | (0.58) | (0.32) | 口～底 35% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-14 | かわらけ 大皿 | SK06 ℓ2 | － | (7.4) | [3.3] | | | 口～底 20% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-15 | かわらけ 小皿 | SK06 ℓ2 | (8.7) | (6.9) | 1.8 | (0.79) | (0.21) | 体～底 15% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-16 | かわらけ 小皿 | SK06 ℓ1 | (8.8) | (6.0) | 2.4 | (0.68) | (0.27) | 口～底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 30-17 | かわらけ 小皿 | SK06 ℓ1 | (10.1) | (8.4) | 2.1 | (0.83) | (0.21) | 口～底 17% | | ロクロナデ | |
| 30-19 | 土師器 杯 | SK08 ℓ2 | － | (4.6) | [1.0] | | | 体～底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 31-1 | 土師器 甕 | SK14 ℓ1 | － | － | － | | | 体 破片 | 手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 33-1 | 中世陶器 甕 | SK16 ℓ5 | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | ナデ | |
| 33-2 | 須恵器 杯 | SK16 ℓ5 | (14.4) | － | [3.1] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 33-3 | かわらけ ? | SK16 ℓ1 | － | (6.1) | [1.5] | | | 底 5% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 33-4 | 中世陶器 鉢 | SK16 ℓ1･2･5 | (26.6) | 10.7 | 10.5 | | | 口～底 50% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 33-5 | 青磁 碗 | SK16 ℓ5 | (16.5) | － | [3.9] | | | 口～体 5% | 緑色釉 | 緑色釉 刻花文 | |
| 33-6 | 土師器 甕 | SK19 ℓ2 | － | － | － | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 33-9 | 中世陶器 片口鉢 | SK23 ℓ4 | (25.1) | (8.9) | 9.6 | | | 口～底 35% | ロクロナデ 静止糸切り | ロクロナデ | |
| 33-10 | 青磁 皿 | SK24 ℓ2 | － | － | [1.7] | | | 体 5% | 緑色釉 | 緑色釉 櫛描文 | 碁笥底 |
| 33-12 | 中世陶器 小壺？ | SK26 ℓ8 | － | 7.1 | [4.4] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 静止糸切り | ロクロナデ | |
| 33-13 | かわらけ 小皿 | SK26 ℓ8 | (6.6) | (4.6) | 1.9 | (0.70) | (0.29) | 口～底 15% | | ロクロナデ | |
| 33-14 | 白磁 碗 | SK26 ℓ1 | － | － | － | | | 口～体 破片 | 白色釉 | 白色釉 | |
| 33-15 | かわらけ 小皿 | SK27 ℓ1 | (8.4) | － | [1.6] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 33-16 | かわらけ 皿？ | SK27 ℓ1 | － | (4.4) | [2.3] | | | 底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | 調整不明 | |
| 33-17 | 白磁 碗 | SK32 ℓ2 | (16.8) | － | [3.3] | | | 口～体 5% | 白色釉 | 白色釉 | 玉縁口縁 |
| 34-1 | 土師器 杯 | SK33 ℓ4 | (14.3) | － | [4.4] | | | 口～体 40% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 34-2 | 土師器 杯 | SK33 ℓ4 | (13.0) | － | [4.4] | | | 口～体 20% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 34-3 | かわらけ | SK33 ℓ4 | (13.3) | － | [2.6] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 34-4 | 土師器 甕 | SK33 ℓ4 | (22.0) | － | [8.8] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 34-5 | 土師器 甕 | SK33 ℓ4 | (26.3) | － | [10.1] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 34-6 | 土師器 甕 | SK33 ℓ4･7 | (25.5) | － | [7.7] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 34-7 | 土師器 甕 | SK33 ℓ3･4 | － | － | － | | | 体 破片 | ロクロナデ タタキメ | ロクロナデ ヘラナデ | |

表４　土器観察表(2)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 34-8 | 土師器<br>甕 | SK33<br>ℓ4 | － | 4.8 | [1.8] | | | 底<br>5% | タタキメ | ヘラナデ | 墨跡有り |
| 34-10 | 須恵器<br>甕 | SK37<br>ℓ3 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | ヘラナデ | |
| 34-12 | 須恵器<br>甕 | SK42<br>ℓ5 | － | － | － | | | 体～底<br>破片 | タタキメ | ヘラナデ | |
| 34-13 | かわらけ<br>杯 | SK43<br>ℓ1 | － | 4.6 | [1.0] | | | 底<br>20% | ロクロナデ<br>回転糸切り | 調整不明 | |
| 34-14 | 白磁<br>碗 | SK43<br>ℓ2 | (16.8) | － | [4.1] | | | 口～体<br>5% | 白色釉<br>体部下半露胎 | 白色釉 | |
| 35-1 | 青磁<br>碗？ | SK47<br>ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | 緑色釉 | 緑色釉 | |
| 35-4 | 須恵器<br>？ | SK48<br>ℓ1 | － | － | [1.6] | | | 体<br>15% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 35-5 | 土師器<br>杯 | SK48<br>ℓ1 | (13.1) | － | [5.0] | | | 口～体<br>10% | 手持ちヘラケズリ | ヘラナデ | |
| 35-6 | 土師器<br>杯 | SK49<br>ℓ1 | (16.2) | － | [6.4] | | | 口～体<br>15% | ロクロナデ・ミガキ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 35-7 | かわらけ<br>大皿 | SK49<br>ℓ1 | 14.5 | 6.2 | 4.4 | 0.43 | 0.30 | 口～底<br>100% | ロクロナデ<br>回転糸切り | ロクロナデ | |
| 35-8 | 須恵器<br>瓶 | SK51<br>ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 35-9 | 土師器<br>甕 | SK53<br>ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 35-10 | 中世陶器<br>甕 | SK54<br>ℓ2 | － | － | － | | | 口<br>破片 | ロクロナデ | ロクロナデ | 町と接合 |
| 35-11 | 中世陶器<br>甕 | SK54<br>ℓ2 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | ヘラナデ | |
| 35-12 | 土師器<br>杯 | SK55<br>ℓ3 | － | (5.0) | [1.4] | | | 底<br>10% | ロクロナデ<br>回転糸切り | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 35-13 | 土師器<br>甕 | SK55<br>ℓ3 | (13.1) | － | [6.5] | | | 口～体<br>15% | ヘラナデ | ヘラナデ | |
| 35-14 | 土師器<br>甕 | SK56<br>ℓ3 | － | 3.1 | [2.8] | | | 体～底<br>20% | ハケメ | ヘラナデ | |
| 35-15 | 土師器<br>甕 | SK58<br>ℓ1 | － | － | － | | | 口<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 35-16 | 土師器<br>甕 | SK58<br>ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | ヘラナデ | |
| 45-1 | 中世陶器<br>甕 | SD01<br>K･L19ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 45-2 | 近世陶器<br>擂鉢 | SD01<br>L18ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | ロクロナデ | | |
| 45-3 | 中世陶器<br>片口鉢 | SD02<br>M10ℓ1 | (23.6) | － | [6.3] | | | 口～体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 45-4 | 土師器<br>甕 | SD10<br>S17ℓ2 | (15.0) | － | [3.6] | | | 口～体<br>5% | ヘラナデ | | |
| 45-5 | 須恵器<br>脚部 | SD12<br>P3 ℓ1 | － | － | － | | | 体～底<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 45-6 | かわらけ<br>小皿 | SD12<br>ℓ1 | (8.7) | (5.9) | 1.9 | (0.68) | (0.22) | 口～底<br>45% | ロクロナデ<br>回転糸切り | ロクロナデ | |
| 45-7 | 白磁<br>碗 | SD12<br>S10ℓ1 | (16.1) | － | [2.5] | | | 口～体<br>5% | 白色釉 | 白色釉 | 玉縁口縁 |
| 45-8 | 白磁<br>四耳壺 | SD12<br>R7ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>5% | 白色釉 | 白色釉 | |
| 45-9 | 須恵器<br>瓶類 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | (7.4) | [1.7] | | | 体～底<br>5% | 回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 45-10 | 須恵器<br>瓶類 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | [5.8] | | | 体<br>20% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 45-11 | 須恵器<br>甕 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 45-12 | 白磁<br>碗 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | 白色釉 | 白色釉<br>櫛描文 | |
| 45-13 | 青磁<br>碗 | SD20<br>Q6ℓ1 | (16.6) | － | [1.9] | | | 体<br>5% | 緑色釉 | 緑色釉<br>彫文 | |

表5　土器観察表(3)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45-14 | 青磁<br>碗？ | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>5% | 緑色釉 | 緑色釉 | |
| 45-15 | 青磁<br>碗 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | [2.8] | | | 体<br>10% | 緑色釉 | 緑色釉 | |
| 45-16 | 陶器<br>紅皿 | SD20<br>Q6ℓ1 | 4.2 | (2.0) | 1.4 | | | 口～底<br>40% | 施釉 | 施釉 | 型押し |
| 45-17 | 陶器<br>碗 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | [2.8] | | | 体<br>5% | 呉須絵付け | 呉須絵付け | |
| 45-18 | 陶器<br>徳利 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | [9.4] | | | 体<br>5% | 回転ヘラケズリ<br>鉄釉 | ロクロナデ | |
| 45-19 | 陶器<br>擂鉢 | SD20<br>Q6ℓ2 | － | － | [3.8] | | | 体<br>5% | 回転ヘラケズリ<br>鉄釉 | ロクロナデ<br>施釉 | |
| 45-20 | 陶器<br>擂鉢 | SD20<br>Q6ℓ2 | － | － | － | | | 体<br>5% | ロクロナデ | | |
| 45-21 | 陶器<br>擂鉢 | SD20<br>Q6ℓ1 | － | － | － | | | 口～体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 45-22 | 金属製品<br>煙管 | SD20<br>ℓ1 | 長<br>[17.3] | 幅<br>1.1 | 厚<br>1.3 | | | | | | 青銅製 |
| 53-1 | 土師器<br>杯 | SD26<br>J31ℓ3 | (13.7) | － | [3.5] | | | 口～体<br>10% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | 墨書　判読不可 |
| 53-2 | 土師器<br>杯 | SD26<br>K32ℓ2 | － | (4.8) | [1.7] | | | 体～底<br>10% | 回転ヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 53-3 | 土師器<br>杯 | SD26<br>K32ℓ2 | － | (4.8) | [0.9] | | | 体～底<br>10% | 回転ヘラケズリ<br>回転糸切り | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 53-4 | 土師器<br>甕 | SD26<br>J30ℓ2 | － | － | － | | | 口～体<br>5% | ヘラナデ | ヘラナデ | |
| 53-5 | 須恵器<br>甕 | SD26<br>V29ℓ3 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 53-6 | 土師器<br>杯 | SD27<br>ℓ1 | － | (6.6) | [0.9] | | | 底<br>10% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 53-7 | 須恵器<br>長頸瓶 | SD27<br>ℓ1 | － | － | [6.4] | | | 体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 53-8 | かわらけ | SD27<br>J32ℓ1 | (13.4) | － | [3.0] | | | 口～体<br>10% | ロクロナデ | ロクロナデ | 粘土貼付け有り |
| 53-10 | 土師器<br>杯 | SD28<br>J31ℓ1 | (13.3) | － | [2.4] | | | 口～体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ<br>黒色処理 | |
| 53-11 | 土師器<br>小型甕 | SD28<br>J31ℓ1 | (13.3) | － | [3.0] | | | 口～体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 53-12 | かわらけ<br>小皿 | SD28<br>J31ℓ1 | (10.2) | － | [1.5] | | | 口～体<br>10% | | | |
| 53-13 | 土師器<br>杯 | SD29<br>I32ℓ1 | (21.0) | － | [5.4] | | | 口～体<br>5% | ヨコナデ　ハケメ<br>手持ちヘラケズリ | ヘラナデ | |
| 53-14 | 土師器<br>甕 | SD29<br>I32ℓ1 | (22.5) | － | [5.2] | | | 口～体<br>5% | ヨコナデ<br>ハケメ | | |
| 53-15 | 土師器<br>甕 | SD29<br>I32ℓ1 | (14.6) | － | [4.3] | | | 口～体<br>5% | ヨコナデ<br>ハケメ | ヘラナデ<br>ハケメ | |
| 53-16 | 土師器<br>杯 | SD30<br>M29ℓ2 | (16.0) | － | [2.2] | | | 口～体<br>5% | ミガキ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 53-17 | かわらけ<br>柱状高台 | SD30<br>H29ℓ2 | － | (7.1) | [2.5] | | | 口～体<br>5% | ヘラナデ | ヘラナデ<br>ハケメ | |
| 73-1 | 弥生土器<br>壺 | SD23<br>U12ℓ1 | (17.6) | － | [8.0] | | | 口～体<br>5% | | | |
| 73-2 | 土師器<br>杯 | SD23<br>U12ℓ4 | (15.0) | 4.8 | 3.9 | (0.32) | (0.26) | 口～底<br>60% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-3 | 土師器<br>杯 | SD23<br>U10ℓ5 | (11.6) | － | [4.2] | | | 口～体<br>10% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | 墨書　判読不可 |
| 73-4 | 土師器<br>杯 | SD23<br>U12ℓ4 | (13.9) | (5.0) | 4.4 | (0.36) | (0.32) | 口～底<br>35% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-5 | 土師器<br>杯 | SD23<br>U12ℓ4 | － | (5.5) | [3.2] | | | 体～底<br>35% | ロクロナデ<br>手持ちヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-6 | 土師器<br>杯 | SD23<br>ℓ5 | － | － | [5.3] | | | 体<br>10% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-7 | 土師器<br>杯 | SD23<br>U12ℓ4 | (16.1) | － | [5.2] | | | 口～体<br>10% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |

**表６　土器観察表(4)**　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 73-8 | 土師器<br>甕 | SD23<br>V9ℓ5 | － | 7.0 | [4.1] | | | 体～底<br>5% | ロクロナデ<br>手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 73-9 | 土師器<br>高台付杯 | SD23<br>U10ℓ5 | － | 7.2 | [2.3] | | | 台<br>25% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-10 | 土師器<br>高台付杯 | SD23<br>U10ℓ1 | － | (8.0) | [2.7] | | | 台<br>20% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 73-11 | 須恵器<br>杯 | SD23<br>U12ℓ1 | (13.0) | (7.4) | 3.0 | | | 口～底<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 73-12 | 須恵器<br>杯 | SD23<br>U10ℓ2 | (12.6) | 5.0 | 3.8 | (0.40) | (0.30) | 口～底<br>50% | ロクロナデ<br>回転糸切り | ロクロナデ | |
| 73-13 | 須恵器<br>杯 | SD23<br>V9ℓ1 | 12.3 | 5.9 | 3.5 | 0.48 | 0.28 | 口～底<br>80% | ロクロナデ<br>回転ヘラ切り | ロクロナデ | |
| 73-14 | 須恵器<br>高台付杯 | SD23<br>U12ℓ4 | － | 6.9 | [4.2] | | | 体～台<br>50% | ロクロナデ<br>回転ヘラ切り | ロクロナデ | |
| 73-15 | 須恵器<br>甕 | SD23<br>ℓ4 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | アテ具痕<br>ヘラナデ | |
| 73-16 | 縄文土器<br>深鉢 | SD24<br>ℓ1, U5ℓ4 | (33.8) | － | [12.0] | | | 口～体<br>10% | ヘラナデ | | 古式土師器 |
| 73-17 | 土師器<br>高杯 | SD24<br>T5ℓ1 | － | (8.6) | [6.4] | | | 脚<br>20% | ヘラナデ<br>ミガキ | | 古式土師器 |
| 74-1 | 土師器<br>壺 | SD25<br>V3ℓ1 | (18.9) | － | [4.5] | | | 口<br>5% | | | |
| 74-2 | 土師器<br>高杯 | SD25<br>T･U2ℓ1 | － | － | [2.7] | | | 体<br>10% | | | 古式土師器<br>朱彩有り |
| 74-3 | 土師器<br>杯 | SD25<br>T2ℓ1 | (12.8) | 7.0 | 3.9 | (0.55) | (0.30) | 口～底<br>60% | ロクロナデ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 74-4 | 土師器<br>杯 | SD25<br>V2ℓ1 | － | 5.8 | [3.0] | | | 体～底<br>10% | 回転ヘラケズリ | ミガキ<br>黒色処理 | |
| 74-5 | 土師器<br>甕 | SD25<br>T･U2ℓ1 | － | (7.4) | [5.4] | | | 体～底<br>5% | ヘラナデ<br>タタキメ | ヘラナデ | |
| 74-6 | 土師器<br>甕 | SD25<br>V2ℓ1 | (22.0) | － | [5.2] | | | 口～体 | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 74-7 | 土師器<br>甕 | SD25<br>V2ℓ1 | (21.2) | － | [2.8] | | | 口<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 74-8 | 須恵器<br>杯 | SD25<br>W3ℓ1 | (14.2) | － | [4.1] | | | 口～体<br>5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 74-9 | 須恵器<br>杯 | SD25<br>V2ℓ1 | － | (6.0) | [2.9] | | | 体～底<br>20% | ロクロナデ<br>回転ヘラ切り | ロクロナデ | |
| 74-10 | 須恵器<br>長頸瓶 | SD25<br>T6･V2ℓ1 | － | － | [7.5] | | | 体<br>10% | ロクロナデ | ロクロナデ<br>ヘラナデ | 1段リング突帯 |
| 74-11 | 須恵器<br>小壺 | SD25<br>T1ℓ1 | － | － | [5.9] | | | 体～底<br>20% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 74-12 | 須恵器<br>長頸瓶 | SD25<br>V2ℓ1 | － | － | [4.7] | | | 体<br>5% | ロクロナデ<br>回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 74-13 | 須恵器<br>甕 | SD25<br>Y2ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ | アテ具痕<br>ヘラナデ | |
| 74-14 | 須恵器<br>甕 | SD25<br>T1ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ<br>螺状沈線 | ヘラナデ | |
| 74-15 | 須恵器<br>甕 | SD25<br>V2ℓ1 | － | － | － | | | 体<br>破片 | タタキメ<br>螺状沈線 | ヘラナデ | |
| 74-16 | かわらけ<br>小皿 | SD25<br>V2ℓ1 | 9.4 | 5.2 | 3.1 | 0.55 | 0.33 | 口～底<br>95% | ロクロナデ<br>回転糸切り | ロクロナデ | |
| 84-1 | 縄文土器<br>壺？ | I32<br>LⅢ | (12.4) | － | [7.2] | | | 口～体<br>5% | | | |
| 84-2 | 縄文土器<br>鉢 | I32<br>LⅢ | － | － | － | | | 体<br>破片 | | | |
| 84-3 | 縄文土器 | G32<br>LⅡ | － | － | － | | | 体<br>破片 | | | |
| 84-4 | 縄文土器 | K31<br>LⅡ | － | － | － | | | 体<br>破片 | | | |
| 84-5 | 縄文土器<br>浅鉢 | H32<br>LⅠ | － | － | [2.3] | | | 底<br>5% | | | 四脚 |
| 84-6 | 縄文土器 | K31LⅡ,<br>K32LⅢ | － | － | [10.1] | | | 底～体<br>50% | | | |

表７　土器観察表(5)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 84-7 | 縄文土器 深鉢 | J31ＬⅡ，J31･32ＬⅡ･Ⅲ | (39.4) | － | [17.0] | | | 口～体 20% | | | |
| 84-8 | 弥生土器 壺 | K30 ＬⅡ | － | － | － | | | 口 破片 | | | |
| 84-9 | 弥生土器 壺 | K31 ＬⅡ | － | － | － | | | 口 破片 | | | |
| 84-10 | 弥生土器 高杯 | H29 撹乱 | － | － | [4.0] | | | 体 40% | | | |
| 84-11 | 弥生土器 | G33 ＬⅠ | － | － | － | | | 体 破片 | | | |
| 84-12 | 弥生土器 壺 | H31 ＬⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | | | |
| 84-13 | 弥生土器 壺 | G3 ＬⅡ | (18.4) | － | [9.5] | | | 口～体 10% | | | |
| 84-14 | 弥生土器 壺 | J32 ＬⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | | | |
| 84-15 | 弥生土器 壺 | J32 ＬⅡ | (13.6) | － | [3.7] | | | 口～体 5% | | | |
| 84-16 | 弥生土器 壺 | H32 ＬⅠ | － | － | － | | | 口 破片 | | | |
| 84-17 | 弥生土器 壺 | G32 ＬⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | | | |
| 84-18 | 縄文土器 | G33 ＬⅠ | － | 6.2 | [1.4] | | | 底 5% | | | |
| 84-19 | 弥生土器 | G31 ＬⅡ | － | (6.8) | [3.2] | | | 底 5% | | | |
| 84-20 | 縄文土器 | I31 ＬⅡ | － | (12.0) | [3.0] | | | 底 5% | | | |
| 84-21 | 縄文土器 甕 | H32 ＬⅢ | (24.1) | － | [11.7] | | | 口～体 10% | ミガキ | ヘラナデ | |
| 84-22 | 縄文 土製品 | K30 ＬⅢ | 長 5.9 | 幅 2.9 | | | | | | | |
| 84-25 | 土師器 高杯 | H30 ＬⅡ | － | － | [4.2] | | | 脚 20% | ヘラナデ | ヘラナデ | 古式土師器 |
| 84-26 | 土師器 高杯 | G32 ＬⅡ | － | － | [3.5] | | | 脚 20% | ミガキ | ヘラナデ | 古式土師器 朱彩有り |
| 84-27 | 土師器 高杯 | V7 ＬⅣ | － | 7.9 | [5.8] | | | 体～脚 40% | ミガキ | ヘラナデ | 古式土師器 |
| 84-28 | 土師器 | G31 ＬⅡ | － | (7.8) | [5.9] | | | 体～脚 35% | ハケメ | ヘラナデ | |
| 85-1 | 土師器 杯 | K4 ＬⅢ | 14.1 | 5.2 | 4.8 | 0.37 | 0.34 | 口～底 80% | ロクロナデ 手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-2 | 土師器 杯 | T6 ＬⅢ | － | (5.4) | [2.5] | | | 体～底 20% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-3 | 土師器 杯 | U7 ＬⅢ | － | (5.6) | [2.0] | | | 体～底 30% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-4 | 土師器 杯 | U7 ＬⅢ | (14.2) | － | [4.3] | | | 口～体 20% | ロクロナデ 手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-5 | 土師器 杯 | K30 盛土 | － | (8.7) | [1.3] | | | 体～底 20% | 手持ちヘラケズリ 静止糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-6 | 土師器 杯 | J29 盛土 | － | (3.8) | [1.2] | | | 底 20% | 回転ヘラケズリ | | |
| 85-7 | 土師器 杯 | U7 ＬⅢ | (14.0) | － | [4.2] | | | 口～体 20% | ロクロナデ 手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-8 | 土師器 杯 | U2 ＬⅢ | － | (5.0) | [1.6] | | | 体～底 20% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-9 | 土師器 杯 | K31 ＬⅡ | － | 5.9 | [2.4] | | | 体～底 60% | ロクロナデ | | |
| 85-10 | 土師器 杯 | J30 盛土 | － | (5.2) | [2.0] | | | 体～底 20% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 85-11 | 土師器 高台付杯 | S1 ＬⅢ | － | 8.8 | [2.2] | | | 脚 40% | ロクロナデ 回転糸切り | | |
| 85-12 | 土師器 高台付杯 | U12 ＬⅢ | － | 8.9 | [3.1] | | | 脚 15% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |

**表８　土器観察表(6)**　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 85-13 | 土師器 甕 | K31 LⅡ | (26.8) | － | [6.9] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 85-14 | 土師器 小型甕 | U7 LⅢ | (11.0) | － | [4.7] | | | 口～体 30% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 85-15 | 土師器 甕 | T11･12 LⅢ | (24.6) | － | [14.5] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ロクロナデ ヘラナデ | |
| 85-16 | 土師器 甕 | I31 LⅡ | － | (3.8) | [2.0] | | | 底 5% | タタキメ | ハケメ | |
| 85-17 | 土師器 甕 | L31 撹乱 | － | 4.7 | [1.8] | | | 底 5% | タタキメ ヘラナデ | ヘラナデ | |
| 85-18 | 土師器 甕 | G30 LⅡ | － | (5.2) | [2.9] | | | 底 5% | タタキメ | ヘラナデ | |
| 85-19 | 土師器 甕 | U9 LⅡ | － | (6.3) | [1.7] | | | 底 5% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 85-20 | 須恵器 杯 | K30 LⅡ | － | (7.0) | [1.5] | | | 体～底 15% | ロクロナデ 回転ヘラ切り | ロクロナデ | |
| 85-21 | 須恵器 杯 | H20 LⅡ | － | (6.0) | [0.7] | | | 底 10% | ロクロナデ 回転ヘラ切り | ロクロナデ | 線刻有り |
| 85-22 | 須恵器 広口瓶 | T3 LⅢ | － | － | [7.0] | | | 体 5% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 85-23 | 須恵器 長頸瓶 | U11 LⅢ | － | － | [6.9] | | | 頸 15% | ロクロナデ | ロクロナデ ヘラナデ | １段リング突帯 |
| 85-24 | 須恵器 小型壺 | L29 LⅢ | － | － | [3.0] | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 85-25 | 須恵器 瓶？ | J30 盛土 | － | － | [2.7] | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 85-26 | 須恵器 小型壺 | U8 LⅡ | － | － | [5.8] | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 85-27 | 須恵器 大甕 | I34 盛土 | － | － | － | | | 体 破片 | ２段の波状文 | ロクロナデ | |
| 86-1 | 須恵器 甕 | M19 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 86-2 | 須恵器 甕 | U2 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ 螺状沈線 | ヘラナデ | |
| 86-3 | 須恵器 甕 | I31 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 86-4 | 須恵器 甕 | G30 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | アテ具痕 | |
| 86-5 | 須恵器 甕 | U2 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ 螺状沈線 | ヘラナデ | |
| 86-6 | 須恵器 大甕 | L21 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | アテ具痕 ヘラナデ | |
| 86-7 | 須恵器 大甕 | L32 撹乱 | － | － | － | | | 体 破片 | タタキメ | ヘラナデ | |
| 86-8 | 須恵器 甕 | I30 LⅡ | － | (14.0) | [6.1] | | | 体 5% | 回転ヘラケズリ ヘラナデ | ロクロナデ | |
| 86-9 | 須恵器 広口瓶？ | T11 LⅡ | － | (15.3) | [11.6] | | | 体 5% | 回転ヘラケズリ | ロクロナデ ヘラナデ | |
| 86-10 | 須恵器 甕 | Q4 LⅡ | － | － | [7.8] | | | 体 5% | ヘラナデ ヘラケズリ | ヘラナデ | |
| 86-11 | 須恵器 甕 | M30 LⅡ | － | (13.8) | [5.7] | | | 体～底 5% | 回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 86-12 | 須恵器 甕 | I31 LⅡ | － | (10.8) | [2.4] | | | 体～底 5% | 回転ヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 86-13 | 中世陶器 壺 | N19 LⅡ | － | － | [7.2] | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 ヘラナデ | |
| 87-1 | かわらけ 大皿 | S9 LⅡ | (12.3) | 5.8 | 4.3 | (0.47) | (0.35) | 口～底 60% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-2 | かわらけ 大皿 | L31 撹乱 | － | 6.6 | [1.9] | | | 体～底 40% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ 渦状指頭痕 | 内面炭化物付着 |
| 87-3 | かわらけ 大皿 | U2 LⅡ | － | 5.5 | [1.5] | | | 体～底 30% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-4 | かわらけ 大皿 | T6 LⅢ | － | 5.2 | [1.7] | | | 体～底 30% | 調整不明 回転糸切り | 調整不明 | |

表９　土器観察表(7)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 87-5 | かわらけ 小皿 | H30 LⅡ | － | 5.0 | [1.9] | | | 体～底 30% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-6 | かわらけ 小皿 | U8 LⅡ | (6.4) | (4.0) | 1.9 | (0.63) | (0.30) | 口～底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-7 | かわらけ 小皿 | U4 LⅢ | (9.6) | (3.4) | 2.4 | (0.35) | (0.25) | 口～底 20% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-8 | かわらけ 小皿 | J31 盛土 | － | (5.1) | 2.0 | | | 体～底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 87-9 | かわらけ 小皿 | K31 LⅡ | － | 6.2 | [1.1] | | | 体～底 20% | ロクロナデ 回転糸切り | 手持ちヘラケズリ | |
| 87-10 | かわらけ 小皿 | N13 撹乱 | (8.4) | (6.0) | 2.1 | (0.17) | (0.25) | 口～底 10% | 回転糸切り | | |
| 87-11 | かわらけ 柱状高台皿 | U11 LⅡ | － | (5.4) | [2.0] | | | 体～底 10% | 回転糸切り | | |
| 87-12 | かわらけ 小皿 | U9 LⅡ | (8.4) | (6.0) | 2.1 | (0.71) | (0.25) | 口～底 25% | 回転糸切り | | |
| 87-13 | かわらけ 柱状高台皿 | U8 LⅡ | － | － | [3.2] | | | 台 10% | ヘラナデ 回転糸切り | | |
| 87-14 | 白磁 碗 | K30 盛土 | (17.0) | － | [1.9] | | | 口～体 5% | 白色釉 | 白色釉 | 端反口縁 |
| 87-15 | 白磁 碗 | V9 LⅡ | (17.0) | － | [3.3] | | | 口～体 5% | 白色釉 | 白色釉 | 端反口縁 |
| 87-16 | 白磁 碗 | U9 LⅡ | (16.8) | － | [4.7] | | | 口～体 15% | 白色釉 体部下半露胎 | 白色釉 | 玉縁口縁 |
| 87-17 | 白磁 碗 | O12 LⅡ | － | － | [3.8] | | | 体 5% | 白色釉 | 白色釉 | |
| 87-18 | 白磁 四耳壺？ | U9 LⅡ | － | － | [2.6] | | | 体 5% | 白色釉 | 白色釉 | |
| 87-19 | 白磁 碗 | U8 LⅡ | － | (5.6) | [1.8] | | | 底 5% | 体部下半～底部露胎 | 白色釉 | |
| 87-20 | 白磁 碗 | T12 LⅡ | － | (7.4) | [2.5] | | | 体～底 15% | 体部下半～底部露胎 | 白色釉 | |
| 87-21 | 青磁 碗 | I29 撹乱 | － | － | [1.6] | | | 体 5% | 緑色釉 | 緑色釉 スタンプ文？ | |
| 87-22 | 青磁 碗 | Q4 LⅡ | － | 5.5 | [2.0] | | | 底 10% | 緑色釉 | 緑色釉 | |
| 87-23 | 陶器 鉢 | O12 LⅡ | － | (9.0) | [2.0] | | | 底 10% | ロクロナデ 回転ヘラケズリ | 絵付け | 型紙刷 |
| 87-24 | 陶器 擂鉢 | I30 盛土 | － | － | － | | | 体 破片 | | 卸し目 | |
| 87-25 | 陶器 擂鉢 | M30 盛土 | － | － | － | | | 体 破片 | | 卸し目 | |
| 87-26 | 筒型土器 | K31 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ユビナデ | |
| 87-27 | 筒型土器 | J31 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ナデ | |
| 87-28 | 筒型土器 | I31 LⅡ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ナデ | |
| 87-29 | 筒型土器 | U7 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ナデ | |
| 87-30 | 筒型土器 | U7 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ナデ | |
| 87-31 | 筒型土器 | U7 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ユビオサエ ナデ | |
| 87-32 | 筒型土器 | U7 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ナデ | |
| 87-33 | 筒型土器 | U7 LⅢ | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ユビナデ | |
| 87-34 | 筒型土器 | J29 盛土 | － | － | － | | | 体 破片 | ユビナデ・オサエ | ユビナデ | |

表10　土器観察表(8)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 58-1 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ3 | 12.5 | 5.7 | 4.5 | 0.46 | 0.36 | 口～底 100% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-2 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ1 | 13.6 | 5.3 | 4.6 | 0.39 | 0.34 | 口～底 95% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-3 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U7ℓ1,T7ℓ3 | 13.6 | 5.8 | 4.9 | 0.43 | 0.36 | 口～底 70% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-4 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ3 | (13.5) | 4.4 | 4.8 | (0.33) | (0.36) | 口～底 35% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-5 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, R3ℓ3 | 13.5 | 5.5 | 4.4 | 0.41 | 0.33 | 口～底 50% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-6 | 土師器 杯 | SD21 T6ℓ3 | 16.3 | 5.5 | 5.8 | 0.34 | 0.36 | 口～底 85% | ミガキ・ロクロナデ 回転ヘラケズリ，回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-7 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, R3ℓ3 | (13.8) | 5.2 | 4.6 | (0.38) | (0.33) | 口～底 35% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-8 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, R3ℓ2･3 | 13.4 | 5.5 | 4.6 | 0.41 | 0.34 | 口～底 60% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-9 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ2･3 | (13.7) | (5.4) | 4.6 | (0.39) | (0.34) | 口～底 30% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-10 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ2 | (12.4) | (6.4) | 3.9 | (0.52) | (0.31) | 口～底 10% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-11 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ3 | (13.9) | (6.5) | 4.5 | (0.47) | (0.32) | 口～底 15% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-12 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T9ℓ3 | (13.9) | (5.3) | 4.2 | (0.39) | (0.30) | 口～底 15% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-13 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, S4ℓ3 | 13.3 | 5.1 | 4.4 | 0.38 | 0.33 | 口～底 55% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 手持ちヘラケズリ・回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-14 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1, S3ℓ3 | (12.7) | 5.1 | 4.8 | (0.40) | (0.38) | 口～底 30% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-15 | 土師器 杯 | SD21 T6ℓ1 | － | 6.3 | [2.0] | | | 底 10% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-16 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1, R3ℓ3 | － | (6.0) | [3.0] | | | 体～底 10% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-17 | 土師器 杯 | SD21 T7ℓ1･2 | － | 5.3 | [4.6] | | | 体～底 30% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-18 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U9ℓ1 | － | (5.5) | [2.3] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 58-19 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ3 | － | 5.5 | [2.4] | | | 体～底 15% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-1 | 土師器 杯 | SD21 T5ℓ1 | 13.0 | 5.4 | 4.3 | 0.42 | 0.33 | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-2 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2･3, R3ℓ1 | 13.6 | 4.9 | 4.8 | 0.36 | 0.35 | 口～底 80% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-3 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U7ℓ1 | 13.6 | 5.2 | 4.6 | 0.38 | 0.34 | 口～底 80% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-4 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | 14.5 | 5.0 | 4.7 | 0.34 | 0.32 | 口～底 55% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-5 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ1, U8ℓ2 | 13.4 | 4.8 | 4.9 | 0.36 | 0.37 | 口～底 80% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-6 | 土師器 杯 | SD21 T6･U8ℓ3 | 13.2 | 5.4 | 4.4 | 0.41 | 0.33 | 口～底 85% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-7 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ2 | (13.6) | 6.1 | 4.7 | (0.45) | (0.35) | 口～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-8 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T6ℓ3, U7ℓ1 | 13.4 | 5.1 | 4.6 | 0.38 | 0.34 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-9 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ2･3, S4ℓ3 | (13.4) | 5.4 | 4.6 | (0.40) | (0.34) | 口～底 30% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-10 | 土師器 杯 | SD21 U10･11ℓ2 | 14.6 | 6.1 | 4.9 | 0.42 | 0.34 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-11 | 土師器 杯 | SD21 T7ℓ3 | 13.3 | 4.8 | 4.7 | 0.36 | 0.35 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-12 | 土師器 杯 | SD21 R4ℓ1 | (14.2) | 4.2 | 4.3 | (0.30) | (0.30) | 口～底 65% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-13 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ1 | 15.1 | 6.3 | 4.2 | 0.42 | 0.28 | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-14 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ2 | 14.7 | 4.2 | 4.6 | 0.29 | 0.31 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-15 | 土師器 杯 | SD21 T6ℓ1, T7ℓ3 | (13.8) | 4.4 | 4.8 | (0.32) | (0.35) | 口～底 25% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-16 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | (15.0) | (5.8) | 4.8 | 0.39 | (0.32) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 59-17 | 土師器 杯 | SD21 S4ℓ1 | 13.9 | 6.2 | 4.1 | 0.45 | 0.29 | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |

表11　土器観察表(9)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 59-18 | 土師器 杯 | SD21 T･U7 ℓ1, T7 ℓ3 | (13.7) | 5.0 | 4.2 | (0.36) | (0.31) | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-1 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T8 ℓ3 | 14.3 | 4.4 | 4.6 | 0.31 | 0.32 | 口～底 85% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-2 | 土師器 杯 | SD21 U9 ℓ2 | (14.8) | 5.5 | 4.6 | (0.37) | (0.31) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-3 | 土師器 杯 | SD21 T･U7 ℓ1, T11 ℓ3 | (14.0) | 4.9 | 4.4 | (0.35) | (0.31) | 口～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-4 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ3 | － | 5.3 | [3.1] | | | 体～底 30% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-5 | 土師器 杯 | SD21 U8 ℓ3 | － | 5.5 | [1.4] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-6 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ1 | － | 4.6 | [1.5] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-7 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1, S3 ℓ1 | (13.9) | 5.3 | 3.9 | (0.38) | (0.28) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-8 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, R3 ℓ1 | (14.0) | 5.0 | 3.8 | (0.36) | (0.27) | 口～底 25% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-9 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ1･3 | (14.3) | 5.7 | 4.1 | (0.40) | (0.29) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-10 | 土師器 杯 | SD21 U8 ℓ2 | 16.1 | 6.5 | 5.4 | 0.40 | 0.34 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-11 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, R3 ℓ3 | 14.3 | 5.9 | 5.2 | 0.41 | 0.36 | 口～底 80% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-12 | 土師器 杯 | SD21 U9 ℓ3 | 15.1 | 4.5 | 4.5 | 0.30 | 0.30 | 口～底 75% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-13 | 土師器 杯 | SD21 T6 ℓ3 | 14.5 | 5.8 | 4.8 | 0.40 | 0.33 | 口～底 65% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-14 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U7 ℓ1 | 14.3 | 5.3 | 4.9 | 0.37 | 0.34 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-15 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, R3 ℓ3 | 14.1 | 5.7 | 5.3 | 0.40 | 0.38 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-16 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ1 | 14.0 | 5.2 | 4.3 | 0.37 | 0.31 | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-17 | 土師器 杯 | SD21 U8 ℓ3 | 14.7 | 6.0 | 4.7 | 0.41 | 0.32 | 口～底 65% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 60-18 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ1 | (14.2) | 6.0 | 4.2 | (0.42) | (0.30) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-1 | 土師器 杯 | SD21 T6･7 ℓ3 | 14.0 | 5.4 | 4.5 | 0.39 | 0.32 | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-2 | 土師器 杯 | SD21 U11 ℓ1･2 | 14.9 | 5.4 | 4.3 | 0.36 | 0.29 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-3 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, U9 ℓ1 | 14.4 | 5.5 | 4.4 | 0.38 | 0.31 | 口～底 70% | ロクロナデ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-4 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1 | (14.3) | 5.2 | 4.4 | (0.36) | (0.31) | 口～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-5 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, U7 ℓ1 | (14.4) | 5.0 | 5.2 | (0.35) | (0.36) | 口～底 50% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-6 | 土師器 杯 | SD21 R3 ℓ2 | (13.9) | (6.2) | 4.4 | (0.45) | (0.32) | 口～底 25% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-7 | 土師器 杯 | SD21 R4 ℓ2 | (13.8) | (6.7) | 4.1 | (0.49) | (0.30) | 口～底 30% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-8 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ1 | (13.9) | (4.9) | 4.5 | (0.35) | (0.32) | 口～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-9 | 土師器 杯 | SD21 T6 ℓ3 | (13.4) | (5.4) | 4.5 | (0.40) | (0.34) | 口～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-10 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U9 ℓ1 | (14.0) | (4.9) | 4.7 | (0.35) | (0.34) | 口～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-11 | 土師器 杯 | SD21 U11 ℓ1 | (12.7) | (5.0) | 4.4 | (0.39) | (0.35) | 口～底 10% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-12 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ2 | 13.8 | 5.0 | 4.8 | 0.36 | 0.35 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-13 | 土師器 杯 | SD21 R3 ℓ3 | (13.9) | (5.6) | 4.9 | (0.40) | (0.35) | 口～底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-14 | 土師器 杯 | SD21 U7 ℓ3 | － | 5.3 | [3.6] | | | 口～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-15 | 土師器 杯 | SD21 R3 ℓ3 | － | (6.3) | [4.3] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-16 | 土師器 杯 | SD21 R3 ℓ1 | － | 5.4 | [2.1] | | | 底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 静止糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-17 | 土師器 杯 | SD21 T7 ℓ2 | － | 5.1 | [1.7] | | | 底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |

表12　土器観察表(10)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 61-18 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | － | 6.2 | [1.2] | | | 底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-19 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ2 | － | 6.1 | [2.3] | | | 体～底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-20 | 土師器 杯 | SD21 S4ℓ3 | － | 5.4 | [1.6] | | | 底 10% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 61-21 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ2 | － | 5.5 | [2.9] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-1 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ1 | － | 5.6 | [3.5] | | | 体～底 35% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-2 | 土師器 杯 | SD21 S4ℓ1 | － | 4.9 | [2.4] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-3 | 土師器 杯 | SD21 R4ℓ1, R3ℓ2 | － | 5.6 | [1.5] | | | 底 10% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-4 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, R3･S4ℓ3 | 13.3 | 5.8 | 4.7 | 0.44 | 0.35 | 口～底 80% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-5 | 土師器 杯 | SD21 ℓ2, U8ℓ3 | 14.0 | 5.5 | 4.8 | 0.39 | 0.34 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-6 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ2 | 14.6 | 5.0 | 4.4 | 0.34 | 0.30 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-7 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ1 | (14.2) | 4.5 | 4.3 | (0.32) | (0.30) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-8 | 土師器 杯 | SD21 U11ℓ1 | － | 5.5 | [1.7] | | | 体～底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-9 | 土師器 杯 | SD21 S5ℓ2 | (11.6) | (4.5) | 4.5 | (0.39) | (0.39) | 口～底 10% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-10 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1 | 14.4 | 5.0 | 4.4 | 0.35 | 0.31 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-11 | 土師器 杯 | SD21 U10ℓ2 | (13.8) | 5.0 | 4.3 | (0.36) | (0.31) | 口～底 30% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-12 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ2 | － | 5.0 | [2.0] | | | 体～底 15% | ロクロナデ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-13 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ1 | － | 5.2 | [0.8] | | | 底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-14 | 土師器 杯 | SD21 U7･9ℓ2 | (14.3) | － | [4.0] | | | 口～体 20% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-15 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ3 | (14.6) | － | [3.9] | | | 口～体 15% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-16 | 土師器 杯 | SD21 Q3ℓ3 | (14.5) | － | [4.9] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-17 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ2 | (14.6) | － | [4.7] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-18 | 土師器 杯 | SD21 U9ℓ3 | (15.5) | － | [4.1] | | | 口～体 10% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-19 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, Q3ℓ1 | (13.7) | － | [6.8] | | | 口～体 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ ヘラナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-20 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ1 | 14.0 | － | [3.9] | | | 口～体 25% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 62-21 | 土師器 杯 | SD21 T6ℓ3 | (15.8) | － | [3.3] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 63-1 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1, R3ℓ3 | (14.8) | 6.1 | 6.0 | (0.41) | (0.41) | 口～底 55% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「入」 |
| 63-2 | 土師器 杯 | SD21 R･S3ℓ3 | (13.5) | 5.2 | 5.0 | (0.39) | (0.37) | 口～底 60% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「入」 |
| 63-3 | 土師器 杯 | SD21 Q3ℓ3 | 13.8 | 4.8 | 4.8 | 0.35 | 0.35 | 口～底 100% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「入」 |
| 63-4 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | (13.6) | (5.0) | 4.9 | (0.37) | (0.36) | 口～底 20% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「六」 |
| 63-5 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T6ℓ3 | (13.3) | 5.3 | 4.6 | (0.40) | (0.35) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「六」 |
| 63-6 | 土師器 杯 | SD21 T5ℓ3 | (14.9) | － | [4.9] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | 墨書「六」 |
| 63-7 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | (13.1) | 6.0 | 4.2 | (0.46) | (0.32) | 口～底 40% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書「峯」? |
| 63-8 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T6ℓ3 | 14.2 | 5.0 | 4.8 | 0.35 | 0.34 | 口～底 100% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-9 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U7ℓ1, T6ℓ3 | 15.9 | 5.8 | 5.8 | 0.36 | 0.36 | 口～底 50% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-10 | 土師器 杯 | SD21 S4ℓ3 | (13.2) | － | [3.5] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-11 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ3 | － | 5.7 | [2.7] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |

表13　土器観察表(11)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 63-12 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ3 | 13.9 | (5.0) | 5.0 | (0.36) | 0.36 | 口～底 50% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-13 | 土師器 杯 | SD21 U10ℓ2 | － | 5.4 | [2.9] | | | 体～底 40% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-14 | 土師器 杯 | SD21 R3ℓ2 | － | (5.5) | [1.9] | | | 体～底 10% | ロクロナデ・回転ヘラケズリ 回転ヘラ切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-15 | 土師器 杯 | SD21 T6ℓ3 | － | (5.8) | [2.1] | | | 体～底 5% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 63-16 | 土師器 杯 | SD21ℓ3, T6ℓ3,U7ℓ1 | － | 5.6 | [1.9] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 墨書 判読不可 |
| 64-1 | 土師器 杯 | SD21 U7ℓ3 | (14.3) | 6.1 | 5.7 | (0.43) | (0.40) | 口～底 30% | ロクロナデ・ミガキ | ミガキ 黒色処理 | 内面蓮華文 外面「岡本」の線刻 |
| 64-2 | 土師器 杯 | SD21 R3·S4ℓ3 | － | 6.7 | [3.0] | | | 体～底 20% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | 外面に線刻 |
| 64-3 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3 | (13.0) | 4.8 | 4.5 | (0.37) | (0.35) | 口～底 40% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 外面に線刻 |
| 64-4 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, T6ℓ3 | 13.7 | 5.7 | 4.3 | 0.42 | 0.31 | 口～底 70% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | 外面に線刻 墨書 判読不可 |
| 64-5 | 土師器 杯 | SD21 ℓ1·3, U9ℓ1,U8·9ℓ3 | 13.6 | 4.8 | 5.1 | 0.35 | 0.38 | 口～底 65% | 手持ちヘラケズリ | ミガキ 黒色処理 | |
| 64-6 | 土師器 杯 | SD21 U8ℓ2 | － | 4.8 | [2.5] | | | 体～底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 64-7 | 土師器 杯 | SD21 ℓ3, U7ℓ1 | － | 5.2 | [1.2] | | | 底 15% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-1 | 土師器 高台付杯 | SD21 ℓ1, S3ℓ2 | (12.5) | 8.5 | 6.5 | | | 口～台 55% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-2 | 土師器 高台付杯 | SD21 ℓ1·2 | 16.2 | 8.8 | 6.8 | | | 口～台 65% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-3 | 土師器 高台付杯 | SD21 S5ℓ2 | (14.7) | (7.0) | 6.5 | | | 口～台 15% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-4 | 土師器 高台付杯 | SD21 R3·T6ℓ3 | 15.5 | 6.7 | 5.8 | | | 口～台 70% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-5 | 土師器 高台付杯 | SD21 U9ℓ3 | (16.6) | － | [5.1] | | | 口～体 25% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-6 | 土師器 高台付杯 | SD21 U7ℓ3 | － | － | [3.6] | | | 体～台 25% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-7 | 土師器 高台付杯 | SD21 U9ℓ1 | － | － | [3.0] | | | 底～体 10% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-8 | 土師器 高台付杯 | SD21 U7ℓ2 | － | 7.8 | [2.7] | | | 底～台 15% | ロクロナデ | 黒色処理 | |
| 65-9 | 土師器 高台付杯 | SD21 U8ℓ3 | － | 8.1 | [2.7] | | | 底～台 15% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-10 | 土師器 高台付杯 | SD21 U9ℓ1·2 | － | 6.7 | [3.5] | | | 底～台 15% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-11 | 土師器 高台付杯 | SD21 U10ℓ2 | － | 8.4 | [2.4] | | | 底～台 10% | ロクロナデ | ロクロナデ 黒色処理 | |
| 65-12 | 土師器 高台付杯 | SD21 U9ℓ2 | － | － | [1.6] | | | 底 10% | ロクロナデ | ミガキ 黒色処理 | |
| 65-13 | 土師器 高台付杯 | SD21 U10ℓ1 | (10.6) | 5.7 | 2.8 | | | 口～台 35% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 65-14 | 筒型土器 | SD21 ℓ3 | － | － | － | | | 口 5% | ユビオサエ | ユビナデ | |
| 65-15 | 筒型土器 | SD21 U8ℓ3 | － | － | － | | | 口 5% | ユビオサエ | ユビナデ | |
| 65-16 | 筒型土器 | SD21 U7ℓ1, R3ℓ2 | － | － | － | | | 口 5% | ユビオサエ・ユビナデ | ユビナデ | |
| 65-17 | 筒型土器 | SD21 T8ℓ3 | － | － | － | | | 口 5% | ユビナデ | ユビナデ | |
| 65-18 | 筒型土器 | SD21 U7ℓ1 | (8.5) | － | [2.9] | | | 口 10% | ユビオサエ | ユビナデ | |
| 65-19 | 筒型土器 | SD21 U7ℓ1 | － | － | － | | | 口 5% | ユビナデ | ユビナデ | |
| 65-20 | 筒型土器 | SD21 R3ℓ2 | － | － | － | | | 口 5% | ユビオサエ | ユビナデ | |
| 65-21 | 筒型土器 | SD21 U7ℓ3 | － | － | － | | | 口 5% | ユビオサエ・ユビナデ | ユビナデ | |
| 65-22 | 筒型土器 | SD21 U9ℓ2 | (9.8) | － | [4.1] | | | 口 5% | ユビオサエ | ユビオサエ | |
| 66-1 | 土師器 甕 | SD21ℓ3, R3·4ℓ1,S3·4ℓ3 | (20.8) | － | [18.5] | | | 口～体 35% | ロクロナデ・回転ハケメ・手持ちヘラケズリ | ロクロナデ | |
| 66-2 | 土師器 甕 | SD21 R3ℓ1 | (12.7) | － | [7.9] | | | 口～体 20% | ロクロナデ | ロクロナデ | |

表14　土器観察表(12)　　（　）：復元値，〔　〕：遺存値　（単位：cm）

| 挿図 No. | 遺物名 器種 | 出土位置 層位 | 法量 口径 | 法量 底径 | 法量 器高 | 底径／口径 | 器高／口径 | 遺存部位 遺存度 | 調整 外面 | 調整 内面 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 66-3 | 土師器 甕 | SD21 S3ℓ3 | － | － | [7.8] | | | 体 10% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 66-4 | 土師器 甕 | SD21 T5ℓ1 | － | － | － | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 66-5 | 土師器 甕 | SD21 R3ℓ3,U7 | － | (6.8) | [10.2] | | | 体～底 40% | 手持ちヘラケズリ・タタキメ | ロクロナデ | |
| 66-6 | 土師器 甕 | SD21 T5ℓ3 | － | 6.7 | [2.2] | | | 底 5% | タタキメ | アテ具痕 | |
| 66-7 | 土師器 甕 | SD21 U8ℓ3 | － | (9.8) | [5.8] | | | 底 5% | タタキメ | ユビナデ | |
| 66-8 | 土師器 甕 | SD21 T7ℓ1,U8ℓ2 | － | － | － | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 | |
| 66-9 | 土師器 甕 | SD21 ℓ3 | － | 4.6 | [3.4] | | | 底 5% | ヘラケズリ・タタキメ | アテ具痕 | |
| 66-10 | 土師器 甕 | SD21 U9ℓ3 | － | 7.1 | [2.9] | | | 底 5% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 66-11 | 土師器 甕 | SD21 T6ℓ3 | － | (7.5) | [2.9] | | | 底 5% | ロクロナデ・手持ちヘラケズリ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 66-12 | 土師器 甕 | SD21 Q3ℓ3 | － | (6.0) | [2.8] | | | 底 10% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 66-13 | 土師器 甕 | SD21 T5ℓ3 | － | 4.8 | [3.9] | | | 底 30% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 66-14 | 土師器 甕 | SD21 S3ℓ1 | － | (7.3) | [2.6] | | | 底 5% | ロクロナデ 回転糸切り | ロクロナデ | |
| 67-1 | 須恵器 杯 | SD21 ℓ1 | (13.3) | (5.9) | 3.9 | (0.44) | (0.29) | 口～底 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-2 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 R3ℓ1 | (11.2) | － | [10.3] | | | 口 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-3 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 U9ℓ3 | － | － | [6.9] | | | 口～体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ ヘラナデ | |
| 67-4 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 R3ℓ2 | － | － | [7.8] | | | 口 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-5 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 ℓ2･3,T7ℓ3, T6LⅢ,U7LⅢ | － | － | [6.5] | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-6 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 U10ℓ1 | － | － | [10.1] | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-7 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 ℓ2･3,U8ℓ1, U7LⅢ | － | 8.2 | [12.0] | | | 体～底 35% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-8 | 須恵器 長頸瓶 | SD21 ℓ2･3,U9ℓ1･3, 表面採集 | － | 8.0 | [15.1] | | | 体～底 40% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-9 | 須恵器 広口瓶 | SD21 U10ℓ1, V9LⅣ | － | 11.6 | [6.6] | | | 体～底 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-10 | 須恵器 鉢 | SD21 ℓ3 | － | － | － | | | 口 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-11 | 須恵器 鉢 | SD21 S3ℓ1 | － | － | － | | | 体 5% | ロクロナデ | ロクロナデ | |
| 67-12 | 須恵器 甕 | SD21 U8ℓ3 | － | － | － | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 | |
| 68-1 | 須恵器 甕 | SD21 U10ℓ2 | － | － | － | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 | |
| 68-2 | 須恵器 甕 | SD21 U8ℓ2 | － | － | － | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 | |
| 68-3 | 須恵器 甕 | SD21 R3ℓ1 | － | － | － | | | 体 5% | タタキメ | アテ具痕 | |

## 表15　木製品観察表

［　］：現存長　　単位；cm

| 挿図 No. | 出土位置 層　位 | 木取り | 計測値 長さ | 計測値 幅 | 計測値 厚さ | 種　別 | 樹　種 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30-4 | SK01 ℓ1 | 柾目 | [19.2] | [2.0] | 0.4 | 曲物側板 | スギ | 桜皮有り |
| 30-5 | SK01 ℓ2 | 柾目 | [15.4] | [2.6] | 0.5 | 板状木製品 | スギ | |
| 30-6 | SK01 ℓ2 | 板目 | 13.1 | 2.3 | 0.4 | 箆状木製品 | スギ | |
| 30-7 | SK01 ℓ2 | 柾目 | [5.8] | [7.0] | 1.1 | 板状木製品 | スギ | |
| 30-8 | SK01 ℓ2 | 板目 | [10.4] | [1.3] | 0.8 | | スギ | 先端炭化部分有り |
| 30-9 | SK01 ℓ1 | 柾目 | [15.3] | [1.2] | 1.0 | 棒状木製品 | スギ | |
| 30-11 | SK05 ℓ1 | 柾目～板目 | 7.3 | 1.9 | 1.3 | 棒状木製品 | スギ | |
| 30-12 | SK05 ℓ1 | 板目 | 18.3 | 1.7 | 0.9 | 棒状木製品 | サワラ | |
| 30-18 | SK06 ℓ3 | 柾目 | [24.4] | [1.3] | 1.3 | 棒状木製品 | スギ | |
| 30-20 | SK08 ℓ5 | 柾目 | [4.6] | [2.0] | 0.7 | 板状木製品 | | |
| 30-21 | SK08 ℓ5 | 板目 | [11.6] | [2.4] | 0.5 | 板状木製品 | スギ | |
| 30-22 | SK08 ℓ5 | 板目 | [23.6] | [1.8] | 0.6 | 板状木製品 | スギ | |
| 31-2 | SK14 | 縦木 | － | － | － | 漆器椀 | ケヤキ | 内外面黒漆破片 |
| 31-3 | SK14 ℓ1 | 柾目 | 6.9 | 6.8 | 1.3 | | | |
| 31-4 | SK14 ℓ1 | 板目 | 21.0 | 0.7 | 0.3 | 箸状木製品 | スギ | |
| 31-5 | SK14 ℓ6 | 板目 | [17.0] | 1.7 | 0.8 | 箆状木製品 | スギ | |
| 31-6 | SK14 ℓ1 | 板目 | 18.7 | 1.5 | 0.8 | 棒状木製品 | スギ | |
| 31-7 | SK14 ℓ1 | 板目 | [11.6] | [2.2] | 0.7 | | | 先端炭化部分有り |
| 31-8 | SK14 ℓ1 | 板目 | 16.1 | [1.4] | 1.2 | | | 先端炭化部分有り |
| 31-9 | SK14 ℓ4 | 柾目 | [14.9] | [1.7] | 1.0 | | | 先端炭化部分有り |
| 31-10 | SK14 ℓ1 | 板目 | [28.4] | [2.1] | 1.7 | 棒状木製品 | スギ | |
| 31-11 | SK14 | 柾目 | [12.3] | [1.3] | 0.3 | 箆状木製品 | スギ | |
| 31-12 | SK14 | 板目 | [15.0] | [1.7] | 0.3 | 箆状木製品 | スギ | |
| 31-13 | SK14 ℓ4 | 柾目 | [21.7] | 2.1 | 1.3 | 棒状木製品 | サワラ | |
| 31-14 | SK14 ℓ6 | 柾目 | 69.3 | 10.8 | 1.1 | 板状木製品 | スギ | |
| 32-1 | SK14 ℓ6 | 柾目 | [20.5] | [3.8] | 1.7 | 板状木製品 | スギ | |
| 32-2 | SK14 ℓ4 | 柾目 | [28.1] | 4.6 | 1.7 | 板状木製品 | スギ | |
| 32-3 | SK14 ℓ6 | 板目 | 30.4 | 4.3 | 1.0 | 板状木製品 | スギ | |
| 32-4 | SK14 ℓ4 | 柾目 | 30.8 | 1.9 | 1.5 | 杭状木製品 | スギ | |
| 32-5 | SK14 ℓ5 | 柾目 | 24.8 | 4.6 | 4.1 | 人形(未) | ｺﾅﾗ属ｺﾅﾗ亜属 ｺﾅﾗ節 | |
| 33-7 | SK22 ℓ3 | 横木 | 器高 [3.9] | － | － | 漆器椀 | ケヤキ | 内外面黒漆 |
| 33-8 | SK22 ℓ3 | 板目 | [10.7] | [1.7] | 1.0 | 棒状木製品 | スギ | |
| 33-11 | SK24 ℓ8 | 板目 | 17.5 | 2.5 | 1.8 | 棒状木製品 | スギ | |
| 34-11 | SK39 ℓ2 | 柾目 | [18.6] | [2.8] | 1.0 | 板状木製品 | スギ | |
| 34-15 | SK43 ℓ3 | 板目 | [74.9] | [4.5] | 1.7 | 板状木製品 | スギ | |
| 35-2 | SK47 ℓ1 | 芯持ち | [41.9] | [3.6] | 3.1 | | | |
| 35-3 | SK46 ℓ2 | 柾目～板目 | 70.8 | 4.1 | 4.1 | 角材(枠材) | スギ | |
| 68-4 | SK21 ℓ4 | 柾目 | 6.4 | 2.3 | 0.8 | 箆状木製品 | スギ | |

## 表16　石製品観察表

単位；cm, 重さ；g

| 挿図 No. | 種　別 | 出土位置 層　位 | 計測値 長さ | 幅 | 厚さ | 重さ | 石　質 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 34-9 | 硯 | SK33 ℓ3 | 9.3 | 5.9 | 2.5 | 225.0 | 菫青石ホルンフェルス | |
| 53-9 | 砥　石 | SD27 ℓ1 | [6.3] | [4.6] | 1.5 | 63.8 | 流　紋　岩 | |
| 84-23 | 石　鏃 | Q20　撹乱 | 3.2 | 1.4 | 0.4 | 1.1 | デイサイト | |
| 84-24 | 石　鏃 | K31　LⅡ | 3.6 | 1.6 | 0.5 | 2.1 | デイサイト | |
| 88-1 | 砥　石 | H30　LⅡ | [8.2] | 4.1 | 1.5 | 83.4 | 流　紋　岩 | |
| 88-2 | 砥　石 | K30　盛　土 | [5.7] | 3.3 | 3.0 | 64.4 | 流　紋　岩 | |
| 88-3 | 砥　石 | I31　LⅡ | [6.0] | 3.6 | 1.4 | 43.7 | 流　紋　岩 | |
| 88-4 | 砥　石 | H30　盛　土 | [4.2] | 4.5 | [2.1] | 39.5 | 変質流紋岩 | |
| 88-5 | 砥　石 | G33　LⅠ | [4.7] | 3.6 | [2.0] | 38.9 | 流　紋　岩 | |

## 表17　荒屋敷遺跡における溝跡の整合性

| | 塩川町調査区（1・2次） 時代・時期 | 地区 | 遺　構 | | 平成13年度県調査区 遺　構 | 地区 | 時代・時期 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1次調査区 | | A区 | － | ← | SD22 | 北側 | 古代～中世 | |
| | | | － | ← | SD26 | | 古代～中世 | |
| | | | － | ← | SD27 | | 古代～中世 | 削平顕著 |
| | 中世前半頃 | | SD03 | = | SD30 | | 古代～中世 | |
| | | B区 | SD01 | = | SD26 | | 古代～中世 | 1号（町）+26号：L字状の区画? |
| | 平安時代頃 | | SD02 | = | SD28 | | 古代～中世 | |
| | | | － | | SD30 | | 古代～中世 | |
| | | C区 | SD05 | ← | － | 中央部 | | 5号+10号+13号：L字状の区画? |
| | | | SD07 | → | － | | | 6号+7号+9号：L字状の区画? |
| | | | SD09 | → | － | | | |
| | | | SD13 | ? | SD09 | | 中世頃 | 削平顕著 |
| | 中世初頭頃 | | SD16 | → | － | | | 9号+16号：L字状の区画? |
| | | | － | ← | SD10 | | 古代以前 | SD10＞SD11 |
| | | | － | ← | SD11 | | 古代以前 | SD11＜SD10 |
| | | | － | ← | SD23 | 南側 | 中世～古代 | SD23＜SD25 |
| | | | － | ← | SD25 | | 中世～古代 | SD25＞SD23 |
| 立会部 | | 南西 | SD○ | = | SD06 | 中央西 | 中世頃 | 立会部（町）：確認のみ |
| | | | SD○ | = | SD07 | | 中世頃 | |
| | | | SD○ | = | SD08 | | 中世頃 | |
| 2次 | 13世紀前半 | | SD17 | | | | | 道路状・区画溝? |
| | | | SD18 | | | | | |
| | 1·2次調査合計 | | 18条 | | 33条 | | | ※溝跡合計：51条−4条（同一遺構） |
| | | | 47条 | | | | | ※溝跡総計：47条～42条 |

※＝：同一遺構，→・←：連続する遺構

## 表18　各遺構内外における土器組成

| | | | 土器類 | | | | | | 中世陶器 | | 貿易陶磁器 | | | | | | その他 | 木質遺物 | 種子類 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 縄文弥生 | 土師器 | 筒型 | 須恵器 | かわらけ | | | 分類 | 白磁 | | | 青磁 | | | | | | | |
| | | | | | | | 大 | 小 | | | 碗 | 皿 | 他 | 碗 | 皿 | 他 | | | | 数 | |
| 遺構内 | SI01 | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| | SB01 | | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| | S | 01 | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | 曲物･板状 他 | ○ | 9 | |
| | | 05 | | | | | | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | 5 | 大宰府:Ⅴ1類 |
| | | 06 | | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 08 | | | | | | | | | | | | | | | | 箆状 | ○ | 5 | |
| | | 14 | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | 漆器･箆状･箸状 | ○ | 17 | |
| | | 16 | | ○ | | | ○ | | ○ | Ⅰ～Ⅱ | | | | ○ | | | | | | | 大宰府:Ⅰ2類 |
| | | 19 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 22 | | | | | | | | | | | | | | | | 漆器椀(黒色漆) | | | |
| | | 23 | | | | | | | ○ | Ⅰ～Ⅱ | | | | | | | | | | | 片口鉢(珠洲系) |
| | | 24 | | | | | | | | | | | | | ○ | | | ○ | | | 大宰府:Ⅰ1類 |
| | | 26 | | | | | | ○ | ○ | ? | ○ | | | | | | | | | | 大宰府:Ⅴ3類 |
| | | 27 | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| | | 32 | | | | | | | | | ○ | | | | | | | | ○ | 3 | 大宰府:Ⅳ1類 |
| | | 33 | | ◎ | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | 小型硯 |
| | | 37 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 39 | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 42 | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | K | 43 | | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | 板状　他 | ○ | 8 | 大宰府:Ⅳ1類 |
| | | 46 | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | |
| | | 47 | | | | | | | | | | | | ○ | | | | 板状　他 | | | 大宰府:Ⅰ4類 |
| | | 48 | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 49 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 51 | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 53 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 54 | ○ | | | | | | ○ | Ⅰ～Ⅱ | | | | | | | | | | | 珠洲系甕(町と接合) |
| | | 55 | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 56 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 58 | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | SD 中央 | 01 | | | | | | | ○ | Ⅰ～Ⅱ | | | | | | | ○ | | | | 珠洲系甕, 近世陶磁器 |
| | | 02 | | | | | | | ○ | | | | | | | | | | | | 片口鉢? |
| | | 10 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 12 | | | | | | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | | | | 大宰府:Ⅲ1･Ⅳ1類 |
| | | 20 | | | | ○ | | | | | ○ | | | ○ | | | ○ | | ○ | 1 | 大宰府:Ⅰ4･Ⅴ4類,近世陶磁器 |
| | SD 北側 | 26 | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | 墨書土器 |
| | | 27 | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| | | 28 | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| | | 29 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | 古式土師器 |
| | | 30 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | 古式土師器 |
| | SD 南側 | 21 | | ◎ | | ○ | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | 1 | 墨書･刻書･大戸産 |
| | | 23 | ○ | ◎ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | 墨書土器 |
| | | 24 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | 古式土師器 |
| | | 25 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| | ピット | 北側 | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| | | 中央 | ○ | ○ | | | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| | | 南側 | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 遺構外 | | | 縄:○<br>弥:○ | 古:○<br>平:○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | Ⅰ～Ⅱ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | 4 | |
| 遺構内 | | | 89 | 3,328 | 375 | 58 | 52 | | 12 | | 9 | | | 4 | | | 22 | 約70 | 49 | | 4,070点(約44%) |
| 遺構外 | | | 620 | 4,056 | 113 | 77 | 154 | | 10 | | 7 | | | 2 | | | 204 | 約10 | 4 | | 5,256点(約56%) |
| 総計 | | | 709 | 7,384 | 488 | 135 | 206 | | 22 | | 16 | | | 6 | | | 227 | 約80 | 53 | | 9,326点 |

◎:主体を成すもの

# 第３章　　ま　と　め

今回の調査で検出された遺構・遺物は，前章で述べた通り平安時代から中世を主体としている。遺物は平安時代の土師器・須恵器類と，古代末から中世前半期にかけてのかわらけ・陶磁器類の大きく２時期に大別される。また，遺構は出土遺物が希少なためにその性格や時期比定が困難なものが多く，全容を把握できたものは少なかった。遺構の構成は溝跡・建物跡群・土坑群など，調査区外に延びるものも多く，個々の遺構の規模や在り方が遺跡そのものの性格を一変する可能性も含んでおり，詳細に言及できなかった部分も多い。そのため，ここでは本遺跡から出土した遺物の特徴や問題点を中心にまとめ，２次調査に向けての課題を列挙しておく。

## 第１節　平安時代の遺物

平安時代の遺物は調査区南側で検出された流路跡やその近辺で出土したものが大半である。土師器・須恵器類等約8,000点出土しているが，その多くは21号溝跡内から出土したものである。土師器類が圧倒的に多く，須恵器類は僅かの出土量であった。以下，比較的まとまりがある21号溝跡出土遺物を中心に，器種構成やその特徴を概観し，該期の他遺跡群と比較検討してみる。

〔土師器〕

土師器類は遺構内から約3,300点，遺構外から約4,000点の総計約7,300点が出土している。器種組成は土師器杯（約5,200点）・高台付杯（約40点），墨書・刻書土器（23点），ロクロ土師器甕（約160点），筒型土器（約400点）等から成り，食膳具である杯が多く，他は少ない傾向にある。杯・甕はすべてロクロ成形によるもので，底部資料は杯類が約320点，甕類が約30点である。

**杯**　杯は内面の調整技法から内面ミガキ調整・黒色処理されたもの（Ⅰ群）とロクロナデ調整のみのもの（Ⅱ群）の大きく２つに分けられる。また，外面調整技法では体部下端から底部にかけて回転ヘラケズリを施すもの（１類），手持ちヘラケズリを施すもの（２類），無調整のもの（３類）に細分できる。１・２類は，さらに再調整を行う部位により，体部下端から底部全面まで施すもの（①類），体部下端から底部外縁に施すもの（②類），体部下端のみに施すもの（③類）がある。底部切り離しは相対的に１類がヘラ切り，２・３類が回転糸切りとなるが，希に糸切りであっても１類がある（図58－13）。また，遺存状態が良好であった約70点の法量（図89上段）をみると，底径／口径比が0.5以上のものは１点のみ（図58－10）で，他は0.3～0.5以下に収まる。大きくは底径／口径比0.42以上のもの（ａ類），0.35～0.41のもの（ｂ類），0.29～0.34のもの（ｃ類）に大別され，ｂ類が多い。器高／口径比はａ類が0.35前後，ｂ類が0.30～0.36，ｃ類が0.30に集中している傾向がある。

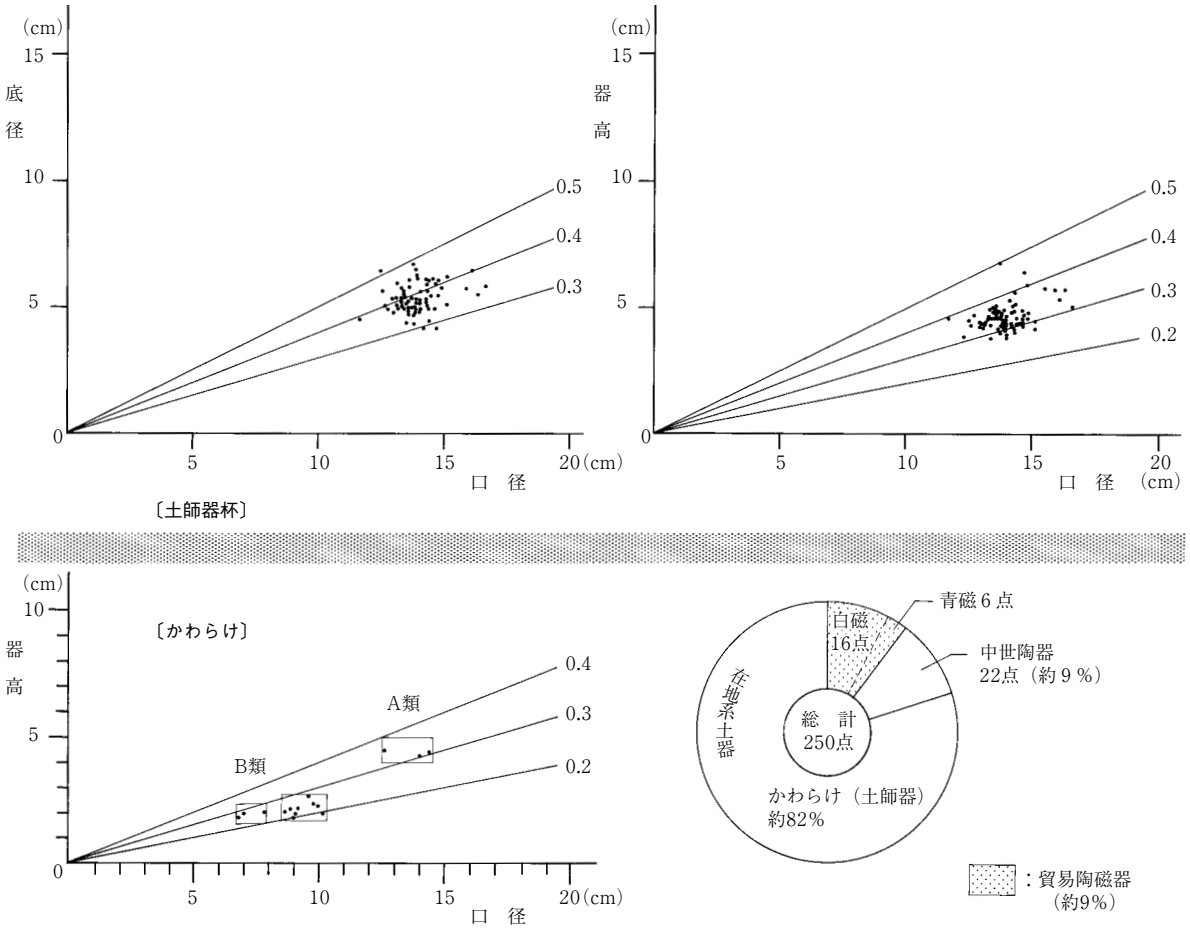



**図89**　平安時代及び中世土器の法量・構成比

上記分類を整理すると，内外面の調整技法では。群２類が約88％，Ⅰ群１類が約10％であり，Ⅰ群３類・Ⅱ群は全体の出土量からみれば１％にも満たない。再調整を行う部位では，Ⅰ群１類に①類が，Ⅰ群２類に①・②類が伴う場合が多く，③類はⅠ群２類で僅かに認められる程度である。器形・法量ではｂ類が約80％を占め，深みのある椀状のものや浅い器形のものは少なく，規格性が強いことが窺える。また，口径16㎝程の大型杯と思われる資料が５点程（図35－６，図58－６・17，図73－６・８）認められている。基本的には出土量が多いⅠ群１①類とⅠ群２②類の調整技法をとるが，図35－６と図58－６の外面体部にはミガキ調整が加えられている。

**墨書・刻書土器**　ロクロ土師器杯に限定され，出土量は少ない。墨書土器19点，刻書土器４点の計23点を数え，同一個体内で両者が認められたものは２点である。ほとんどが21号溝跡からの出土（20点）であるが，23号溝跡（図73－３）や26号溝跡（図53－１）からも各１点認められた。墨書土器は破片資料も多いため判読できたものは少ないが，「入」（３点）・「六」（３点）などがある。「入」の墨書文字例は，会津盆地内での類例はないが，数字を示す「六」の文字は河川跡や井戸跡等から多くの墨書土器を出土した屋敷遺跡（木本他：1991）の１例がある。また，文字自体は異なるが同じ属性に含まれるものとして「万」と組み合わせた上吉田遺跡（藤谷：1990）例（「六万」）もある。

刻書土器では，約半個体遺存の図90－11が特筆される。黒色処理が施された内面には蓮華状の線

刻文，底部には異体字である「岡本」が焼成前にヘラ書きされている。県内の出土例としては会津坂下町三本木遺跡第32号井戸跡（暗文）例（渡邉：1992）などが知られ，「岡本」の線刻例はないが墨書例としてはいわき市岸遺跡（吉田：1990），富岡町小浜代遺跡（山田・馬目：1995）例が挙げられる。県外では岐阜県雨田遺跡で「岡本」銘須恵器のヘラ書き（７世紀末～８世紀前）があり，横浜市東耕地遺跡の「岡本寺」墨書例も知られる（2001）。本例は内面に非常に丁寧な蓮華状の文様が描かれている点や土器の使用頻度の点などを考慮すると，仏教関連の金工品的な性格が強い資料と思われる。これらの墨書・刻書土器は，上記杯分類のⅠ群１③類やⅠ群２①～③類に相当し，ほぼ同比率を占めている。ただ，外面ミガキ調整を施すもの（図90－11）や口径16cm前後の大型になるもの（図63－９）の他，底径／口径比がｂ類の範疇にほぼ収まるが深みのある器形もあり，多様性が窺える。

この他に，内外面を黒色処理させた土師器杯も27点程出土している。すべて21号溝跡からの出土であり，底部片や口縁部片から５個体程の個体数と考えられる。図90－12は唯一全体の器形が把握できた資料である。外面にも丁寧な横位ミガキが施され，２①類の調整技法をとる。底径／口径比は0.35程でｂ類に相当するが，やや深みのある器形（器高／口径比0.37程）である。

**高台付杯**　高台付杯は約40点出土しているが，破片資料が多く全体の器形が分かるものは少ない。遺構内では21号溝跡出土資料（22点）が大半を占め，他に23号溝跡から２点程出土している。器形が把握できたものは21号溝跡から出土した５点のみである（図65－１～４・13）。内面ミガキ調整・黒色処理されたもの（Ⅰ群）とロクロナデ調整のみのもの（Ⅱ群）が認められる。杯身は深みのある椀状の器形となるもの（１類），１類よりも比較的浅い杯状のもの（２類），皿状のもの（３類）などがある。高台部はすべて貼付け高台であり，脚部形態から裾部の屈曲が強く「Ｌ」字状となるもの（①類），「ハ」字状に直線的に外傾し，高台高がやや高いもの（②類），垂直ぎみに立ち上がり，高台が低いもの（③類）に分けられる。杯身は図90－17以外，上記土師器杯分類のａ類（底径／口径比0.42以上）に属し，器高／口径比は0.30前後で，大振りで浅めの器形が多い傾向にある。Ⅰ群２②・③類が主体を占め，Ⅰ群１②類（図90－13）やⅡ群３③類（図90－17），①類（図90－16）など希少な資料も認められる。

**甕**　本遺跡から出土した甕は，すべてロクロ土師器甕であり，総数約160点出土した。33号土坑や58号土坑，21号溝跡（56点）や25号溝跡などで比較的まとまって出土している。口頸部や胴部下半の破片資料であるため，全体の器形を把握できた資料はないが，器形的には口縁部が「く」字状に屈曲し，口端部が上方へ摘み上げられる長胴形のもの（Ⅰ類）と，口頸部が短く「く」字状に屈曲し，胴部が膨らむ器形のもの（Ⅱ類）があり，これに。類に類似する小型甕がある。胴部外面に施される調整技法は，ロクロナデ（①類）の他に，カキメ痕（②類），タタキ（③類），縦位のケズリ（④類）がある。Ⅰ類の長胴甕は破片資料が大半であるが，出土状況や共伴関係を見ると，基本的には胴上部①類と胴部下半③類（図90－21）・④類・③類＋④類（図90－20），胴上部②類と胴部下半④類（図90－19）で構成されるものと認識される。底部資料はすべて平底のものであり，③類

にヘラケズリ調整によって狭い底部を作出しているものが多い（図34－８，図35－14，図66－６・９，図90－54）。Ⅱ類（図90－51）と小型甕は①類が主体となり，小型甕の胴部下半から底部は図66－10～14などの資料が伴うものと判断される。本遺跡で主体となるのは圧倒的にⅠ類であり，①＋③類や①＋③＋④類などの調整技法をとる。

**筒型土器**　筒型土器は約400点出土しているが，すべて破片資料のため全体の器形を把握できたものはない。大半が口縁部資料であり，底部資料は僅か３点のみ認められた。21号溝跡からの出土（約320点）が主体を占め，他は散在している。器形的には推定口径10㎝～13㎝程の円筒形を呈するものと思われる。器内外面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に認められ，表面が被熱を受けて赤変しているものが多い。胎土には白色針状物質の混入が認められる資料もあり，焼塩壺的な用途が強い容器と考えられる。

〔須恵器〕

須恵器類は土師器と比して非常に少なく，遺構内外から約130点出土した。破片資料が多く，全体の器形を把握できたものはほとんどない。器種構成は杯・長頸瓶・壺・甕・鉢などがあるが，杯類は少ない。遺構内からは調査区南側で検出した21・23・25号溝跡から比較的多く出土している。

**杯類**　須恵器杯は８点程の出土で，器形が把握できたものは僅かに４点であった。体部が直線的に外傾するものとやや丸味をもって立ち上がるものがある。推定底径／口径比は0.40～0.55程，器高／口径比は0.30以下で浅い器形のものである。底部は確認できた４点のうち３点が回転ヘラ切り，１点が回転糸切り（図73－12）である。この他，破片資料ではあるが高台付杯あるいは深杯（図90－23・30）と思われる資料も認められた。

**長頸瓶**　他器種同様すべて破片資料であり，口頸部や胴部片約20点が出土している。口縁部は緩やかに広がるもの（１類）と，口縁部の広がりが１類よりも強く，ややラッパ状となるもの（２類）がある。胴部形状は最大径が胴部上半（肩側）にある胴長のものが主である。また，頸部下端にリング状凸帯が巡るものや頸部と体部の２段接合が多い。瓶類の高台付部はすべて貼付け高台であり，脚部形態は断面逆台形状のものや三角形状のものがある。

**壺・甕類**　破片資料が多く，器形等は判然としないが28点程出土している。壺類は明確に器形が分かるものはないが，短頸壺と思われる資料（図90－39）や小型壺あるいは小瓶と思われる資料も僅かに出土している。甕は口縁部が「く」字状に屈曲するもの（図90－８・44），胴部調整技法ではタタキ調整のみのものや，タタキ調整後に螺状沈線文が施されるものなどがある。

**鉢**　大平鉢と思われる破片資料が21号溝跡から２点程出土している。体部は直線的に外傾する器形を呈し，ロクロナデ調整痕を明瞭に残す。比較的器壁は薄い。

〔年代的検討〕

以上，杯・甕類を中心にその特徴から分類を行い，傾向を示してきた。以下では本遺跡における土器群の編年的位置付けを考えてみる。まず，本遺跡で出土数は少ないが，年代観の基準となる須恵器についてみてみよう。

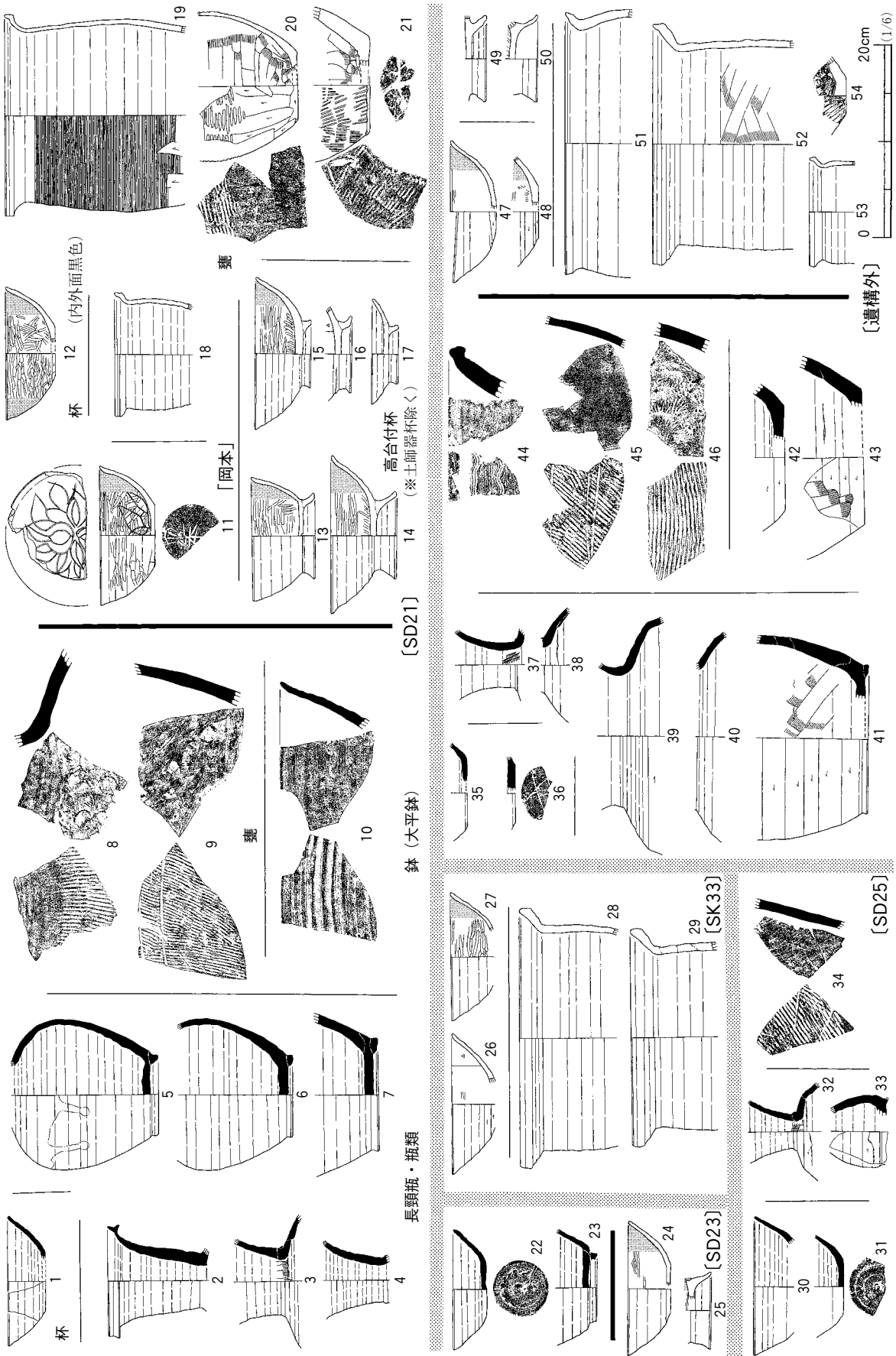



図90　荒屋敷遺跡出土遺物(1)　土師器・須恵器

会津盆地内では８世紀末葉から10世紀末に至るまで連綿と須恵器生産が行われた東北最大の会津若松市大戸古窯跡群（石田：1994）がある。最も整理されたこの大戸古窯跡群の編年観に本遺跡出土須恵器を照らし合わせると，上限は頸部に波状文が施された須恵器甕（図90－44）のＫＡ－12号窯式期頃に，下限を平底甕の出現期であるＫＡ－112号窯式併行期頃に求めることができ，概ね８世紀後半から10世紀前半の範疇で捉えられる。ただ，長頸瓶では頸部下端のリング状凸帯や頸部と体部の２段接合，甕類では螺状沈線文が卓越していること，器種構成では大平鉢の出現や長頸瓶から広口瓶への転換などが認められる点から，主体はＭＨ－19号～ＫＡ－107号窯式併行期（９世紀中頃～９世紀後半）を中心とした時間幅で考えておきたい。

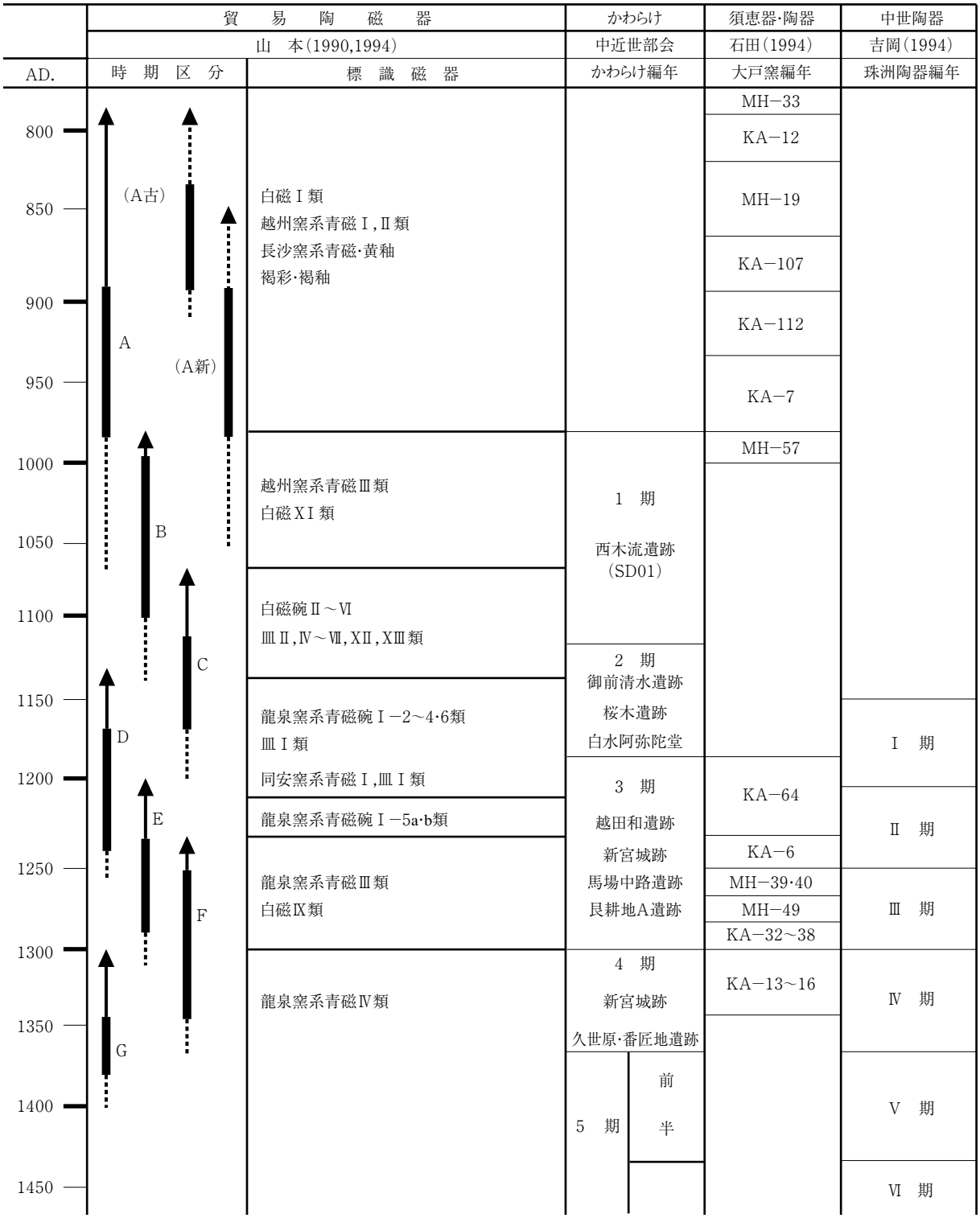
次に土師器について整理する。土師器編年については，氏家氏が早くから東北地方南部を中心とする土器群についてまとめており，平安時代を代表する「表杉ノ入式」（第７型式）が設定されている（氏家：1957）。この表杉ノ入式期段階の土器様相の違いから，これまで多くの研究者によって土師器杯類を中心に幾つかの段階設定が示されてきた（白鳥：1980，木本：1990，仲田：1994，石本：1995，安田：1998）。特に，９世紀から10世紀に架かる変遷過程の傾向として，底部切り離しや再調整技法の簡略化，法量的には底径の縮小化と小型化傾向などが挙げられ，これに遺構内における器種構成や須恵器（杯類）・施釉陶器等との対比を踏まえた検討がなされてきている。

本遺跡で主体となるのは，土師器杯分類で約80％を占めるⅠ群２①・②類であり，Ⅰ群１①類が約15％，Ⅰ群３類及びⅡ群は僅かな出土量となる。Ⅰ群土器，特に１・２類及び①・②類が示す特徴・構成比は，多賀城出土土器の一括資料をもとにＡ～Ｆ群の６群に分類し，その変遷を明らかにした白鳥編年（白鳥：1980）のＤ群土器にほぼ相当する可能性が高い。また，杯の底部切り離しと再調整の組み合わせによりⅢ群５タイプに土器群を設定した木本編年（木本：1976・1990）の２・３段階，郡山市広網遺跡資料をもとに該期の編年をまとめた仲田編年（仲田：1994）の広網第３群土器，安田編年（安田：1998）の３・４群土器に相当するものと考えられる。これらの土器群の実年代については，各氏とも概ね９世紀中頃～９世紀後半を中心とする年代観を与えている。

また，煮炊具であるロクロ土師器甕からみれば，丸底の底部形態はなく，本遺跡ではすべて平底という点で「陸奥型甕」に属するが，須恵器製作技法に起因する「タタキ出し技法」という点では「出羽型甕」・「北陸型甕」と判断される（伊藤：1990，坂井：1990）。これらの折衷的な長胴甕については山中氏の論考に詳しく，図90－20・21・54などはタタキ出し成形を行う丸底もしくは尖底状のＢ類系甕の派生型である「会津型長胴甕」として理解される（山中：1999・2000）。図90－20・21は山中編年のⅡＣ１類あるいはＤ類（９世紀代：前半以降）に，54はⅡＣ３類（９世紀後半～末葉）に比定される。ロクロ成形による小型甕（図90－18・53）は，Ⅱｅ③類あるいは④に類似し，第２段階２小期（９世紀後半～末）頃に位置付けられる資料であろう。

僅かな出土量である土師器杯Ⅱ群は，従来「赤焼き土器」・「須恵系土器」・「土師質土器」などと呼称される土器群であるが，近年「土師器」の一形態として捉えようとする動きが増えてきた（村田：1995・菅原：1998）。こうした土器群の変遷については，多賀城における層位的な調査成果と

**表19**　古代末～中世の土器・陶磁器編年




〔山本:時期区分〕

A期:8世紀末～10世紀中頃

B期:11世紀前後(10C後半～11C初頭)～中頃

C期:11世紀後半～12世紀前半

D期:12世紀中頃～後半

※編年案に一部加筆・修正

E期:13世紀前後～前半

F期:13世紀前半ないし中頃～14世紀前後

G期:14世紀初頭以降

↑出現　▮増加　⋮減少

灰白色火山灰をもとにまとめた村田氏の論考に詳しい（村田：1995）。ここでは１群～５群土器に分類され，内面黒色処理が施された土師器Ａ類と非内黒の土師器Ｂ類に細分されている。本遺跡土師器杯Ⅰ群が土師器Ａ類，土師器杯Ⅱ群が土師器Ｂ類に概ね相当するものと考えられる。この年代観を参考にすれば，１群土器は食膳具の主体である杯類の法量（底径／口径比）がやや本遺跡Ⅱ群より大きいことや，２群土器で土師器杯Ｂ類の比率がＡ類と逆転（約２倍）している点，本遺跡Ⅰ群における内面幅広工具による放射状のミガキが認められることや高台付杯の構成などを勘案すると，１群土器から２群土器への過渡的段階として捉えられる。１群土器は９世紀第４四半期を中心とした時期，２群土器は10世紀前半代に比定されており，本遺跡土師器杯Ⅱ群はある程度の時間幅内における。群からの連続する土器群と理解されるため，９世紀末～10世紀前葉頃と考えて大過ないと思われる。このことは，近接する鏡ノ町遺跡ＳＫ20を中心とする一括資料の土器組成や足高高台付皿等が認められない点からも同様なことが見て取れる。

以上の検討の結果，土師器・須恵器の齟齬は認められず，大枠では８世紀後葉～10世紀前半の範疇にすべて収まる。これは，一括性の高い資料（土坑等）をもとに，時期区分を行った鏡ノ町遺跡１～４群土器に包括される資料でもある。21号溝跡を中心とした土器組成・構成比・法量等をみた場合，鏡ノ町遺跡Ｂ第１号河川跡とほぼ近似した傾向を示し，上吉田遺跡・矢玉遺跡等と比較して須恵器杯の衰退と土師器杯類を主体とする特定器種の増加が顕著に認められる。本遺跡において一括性の高い資料はほとんどないが，遺構内における伴出関係を概観すると，ＳＤ23・ＳＫ33は２群土器（Ⅱ期：９世紀前半頃），ＳＤ25は３群土器（Ⅲ期：９世紀中～後半）にほぼ併行する年代観が与えられ，遺構の重複関係にも矛盾はない。（井）

## 第２節　中世の遺構と遺物

### １．遺　　物

今回の調査で得られた中世の遺物としては，在地系土器（かわらけ）を中心に貿易陶磁器・中世陶器・木質遺物・種子類などがある。土器類は調査区ほぼ全域に散在しているが，調査区北側からの出土量が多い傾向がある。遺構内からの出土量は少ないが，セット関係が把握できる資料としては16・26号土坑や12号溝跡等が挙げられる。図89下段にはかわらけ法量と土器類の構成比を図示し，表18には各遺構から出土した遺物の組成状況を掲載した。これをみると，かわらけが約82％で最も多くを占め，貿易陶磁器や中世陶器は各々22点の出土で，概ね８：１：１の構成比率を示している。

中世の遺物の分類については，基本的には先行して調査が成された和田氏（和田：2002）の分類基準に準拠したが，必要に応じて分類項目を設けて細別・修正を行っている。また，遺物の年代観については，第２章も含めて貿易陶磁器類は大宰府分類編年（横田・森田：1978・1995）及び山本編年（山本：1990・1994），かわらけは福島県考古学会中近世部会（1996・1997）・中山編年（中山：1985・1988）・飯村編年（飯村：1997），中世陶器は吉岡編年（吉岡：1994）・大戸窯編年

（石田：1994）に準拠し，表19に代表的なものを掲載している。また，中世土器については「土師質土器」・「須恵系土器」・「赤焼土器」・「かわらけ」など各研究者間での用語統一がなされていないため，ここでは中山氏に準拠し，時代的象徴として捉えられる「かわらけ」を用いる。以下，本遺跡において画期を迎える古代末から中世前半期の遺物を中心にまとめていく。

〔貿易陶磁器〕

貿易陶磁器は白磁16点，青磁６点の計22点が出土している。塩川町調査区内で出土した資料（13点）も含めると，白磁26点，青磁８点となり白磁優勢の傾向が窺える。器種構成的には日常生活物資の性質が強い碗・皿類が主体（白磁24点，青磁８点）であるが，希少な例である白磁四耳壺

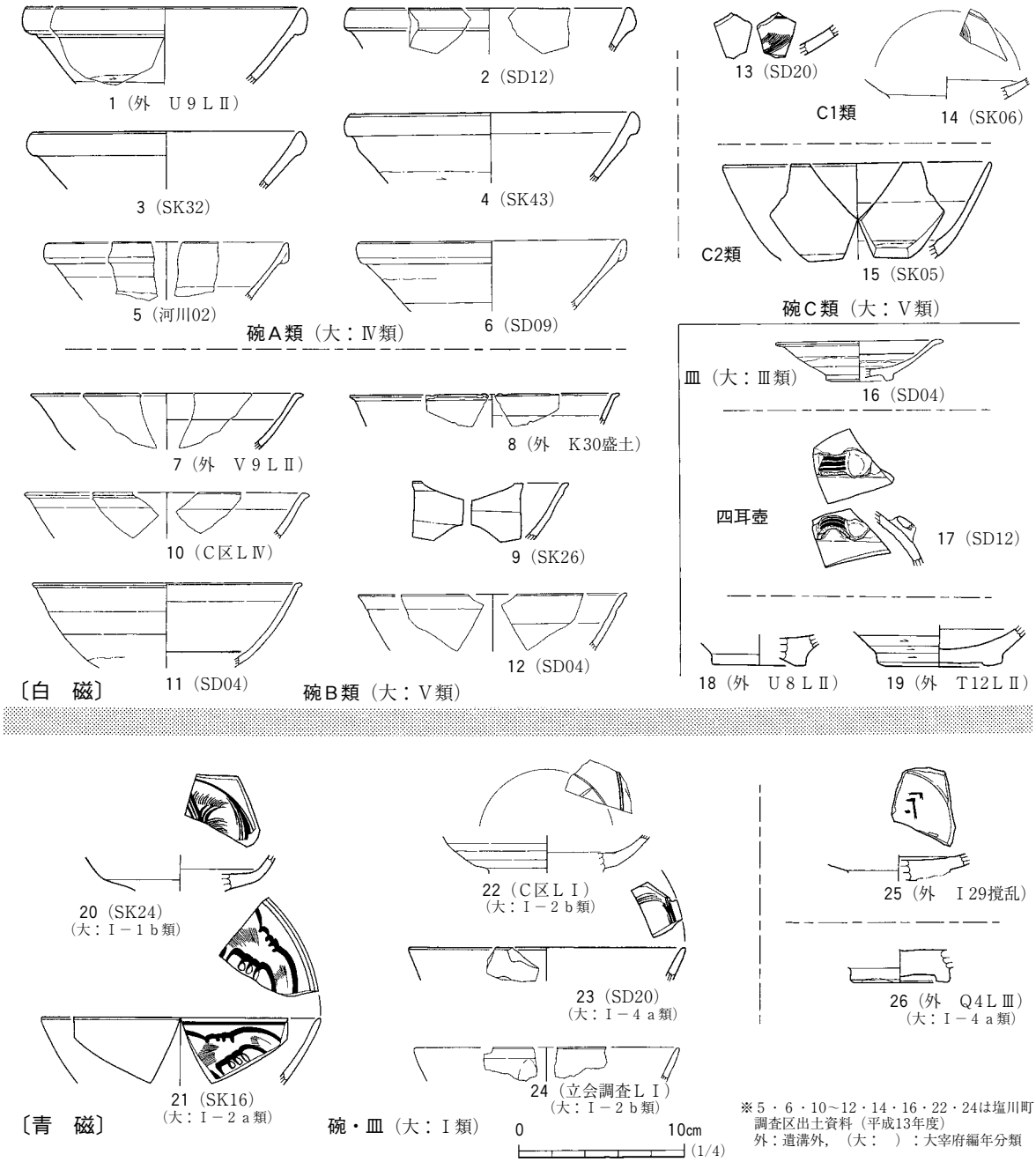



図91　荒屋敷遺跡出土遺物（2）　貿易陶磁器

片（２点）や 褐釉壺底部片（塩川町：１点）も僅かに出土している。胎土は緻密で白色釉を呈し，釉調は比較的良好であるが図91－３のように二次的な被熱を受け釉が剥落しているものもある。

**白磁碗**（総数26点）：図91－１～15が該当し，Ａ～Ｃ類に細分できる。

Ａ類：玉縁状の口縁部を有するもの（１～６）。玉縁口縁の大小により２分される。

１．比較的大きめの玉縁状の口縁を有するもの。（６点）

２．やや小さめの玉縁状の口縁を有するもの。今回の調査では出土していない。

Ｂ類：口縁端部を外反させる端反口縁を呈するもの（７～12）。（６点）

Ｃ類：体部が直線的に外傾するもの。（３点）

**白磁皿**（１点）：図91－16が該当する。口径は10㎝程である。

Ａ類：低い高台を有して口縁部が外反する。

**四耳壺**（２点）：図87－18・図91－17が該当する。耳部と胴部片が出土している。

**青磁碗・皿**（８点）：図91－20～26が該当する。

Ａ類：体部下半で急に立ち上がり，碁笥底状となるもの（図91－20）。

Ｂ類：体部が直線的に外傾するもの（図91－21～25）。

器内外面に施文される文様構成や施文技法などからは，以下のように分類される。

ⅰ：無文のもの（釉薬のみ）。白磁に多い。

ⅱ：内外面に文様が施されるもの。青磁に多い。

ａ．劃花文（図91－21），ｂ．櫛描文（13・14・20・23），ｃ．草花文状（22），

ｄ．鎬連弁文（24），ｅ．スタンプ文（25）等の文様がある。

イ．内面体部や見込みに沈線が巡るもの（図91－５～12・14～16・19・20・22・25）。

ロ．内面見込み部分が輪状に掻き取られているもの（図91－15・16）。

ハ．体部下半及び底部が露胎（無釉）となるもの（図91－１・４～６・９・11・15・16・19）。

底部高台は，角高台状のもの，畳付・台内側を斜めに削り逆台形状となるもの等がある。

〔かわらけ〕

全てロクロ成形・回転糸切り・無調整のものであり，総数約200点出土している。調査区内では散在しているが，比較的北側からの出土量が多い。明確に器形を把握できたものは少ないが，底部器壁が厚いものが多く，器形的に椀・杯状を呈するものや小型の皿，柱状高台皿などが認められる（図92）。遺構内では１・６号土坑などでセット関係が把握できる。

**Ａ類**：椀・杯状（大皿）のやや大型の器形を呈するもので，図92－１～５が該当する。

口径13㎝～15㎝程で，底径／口径比が0.5前後，器高／口径比が0.33前後のもの。

**Ｂ類**：皿状の器形を呈するもので，図92－６～27が該当する。

１．体部が直線的に外傾し，Ａ類より小型で器壁が薄手のもの（図92－６～10）。

２．小型の皿状を呈し，器高が２㎝前後の浅い器形となるもの（図92－11～27）。

Ｂ２類は法量的に①口径７㎝程で，底径／口径比が0.6前後のものと，②口径８～10㎝程で，

底径／口径比が0.7～0.8前後のものに２細分できる。

**Ｃ類**：柱状高台を持つもの（柱状高台皿の高台部）。図92－28～30が該当する。

〔中世陶器〕

出土した中世陶器は，破片資料のため器形を把握できたものはないが，遺構内外から総数22点出土している。調査区内では北側からの出土量が多く，主なものを図92下段に掲載した。器種構成は塩川町調査部分から出土した遺物（17点）も加えると，壺（中・小壺・四耳壺）・甕（大甕）・鉢となる。16・23・26・54号土坑や１・２号溝跡から僅かに出土している。須恵器系と瓷器系が認められ，前者が多い。以下，各器種の特徴を記す。

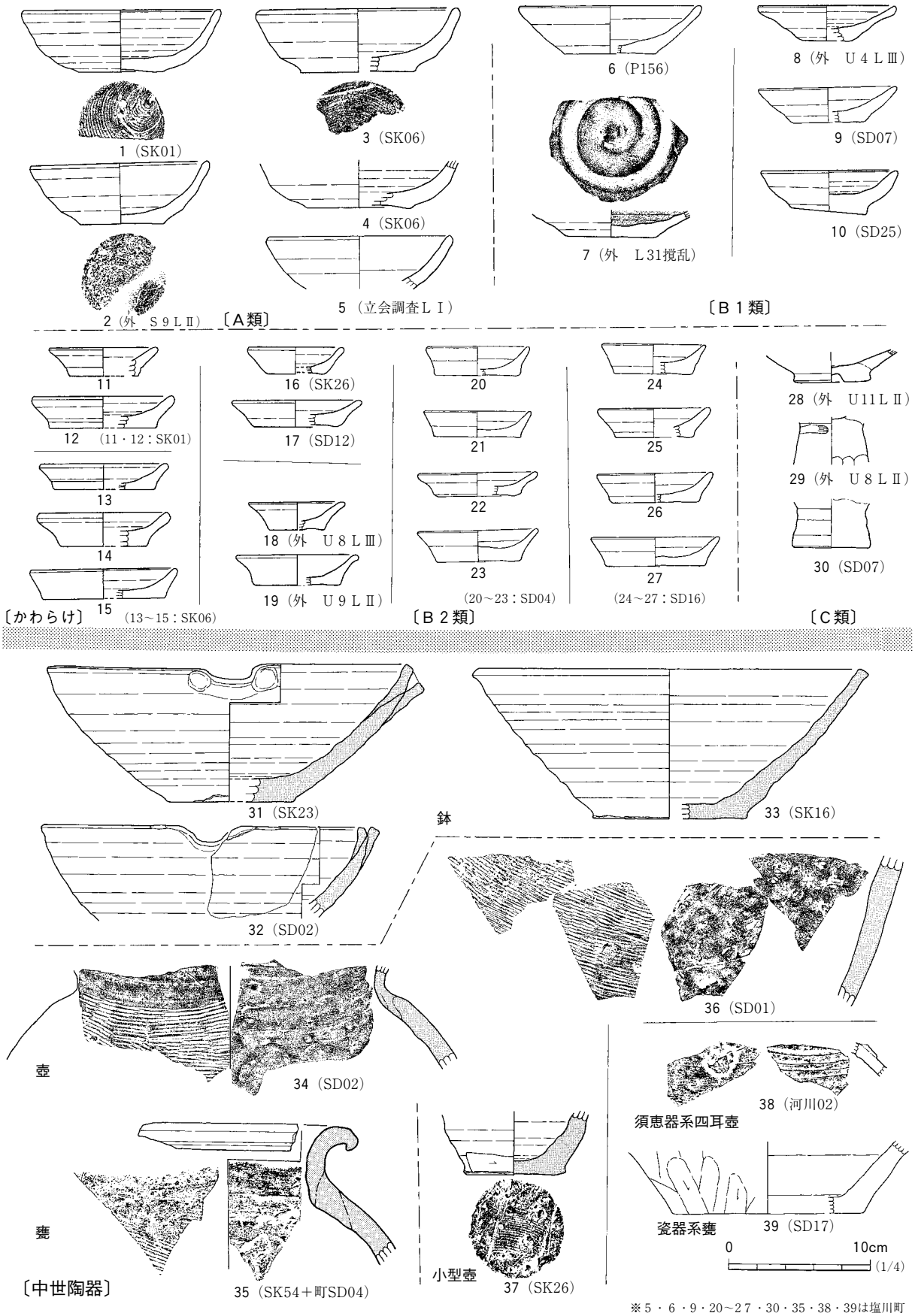
**壺・甕類**　今回の調査では12点程出土しており，図92－34～39が該当する。39が瓷器系，それ以外は須恵器系である。須恵器系中世陶器の胎土は青灰色を基調とし，比較的緻密で白色鉱物細粒を含むものが多い。すべて破片資料であり，唯一塩川町出土資料（ＳＤ04）と接合した甕型土器（図92－35）のみ口縁形態が分かる。35は舌端状に垂下する口縁部を呈し，吉岡編年の口縁型式変遷図ではⅠ３～Ⅱ２期のａ類に属する。粘土紐巻き上げとタタキ締め成形を施しており，外面には条溝を刻んだ打圧具による右下がりのタタキ，内面は押圧具のアテ具痕をナデ消している。基本的には大甕胴部片（36）や図92－34の外面にも同様なタタキが施されている。また小型壺（37）の底部は静止糸切りである。製作技法・胎土等の特徴から，これらの資料は珠洲系中世陶器と判断される。

**鉢**　３個体程認められた（図92－31～33）。いずれも素文で卸し目がない所謂「こね鉢」である。図92－31・32は注口が付く片口鉢であり，31の注口幅は約３㎝（指２本分）を測る。吉岡編年の口縁型式変遷図では，図92－31・32がⅠ２～Ⅱ２期のｂ２類，33はａ３類に相当する。法量は片口鉢である図92－31が33よりも若干小さく，31の底径／口径比は0.35，器高／口径比が0.38，33の底径／口径比は0.40，器高／口径比は0.39である。底部切り離し技法は31が静止糸切り，33は回転糸切りである。吉岡編年のⅠ新期～Ⅱ期併行期と考えられるが，口縁部の特徴や法量等を勘案すると，33が31よりも後出的な要素を持つ。

〔編年的検討〕

以上，古代末から中世前半期の遺物について，器種構成やその特徴を概観し，分類・傾向を示してきた。貿易陶磁器は土器と比して耐久性があり，生産から消費・廃棄に至る年代幅が大きく，該期の在地系土器（かわらけ・中世陶器）は遺跡からの出土例が少なく，資料不足の観がある。そのため，大枠での年代幅を捉え，遺構内における共伴・伴出状況をみてみる。

まず，年代の指標となるかわらけをみてみよう。かわらけの器種構成は厚手の椀（Ａ類）と小皿（Ｂ２類）の大小セット，それに柱状高台皿（Ｃ類）となるが，Ｂ２類が多く，Ａ類及びＣ類は僅かの出土である。この土器組成は，山都町御前清水遺跡（古川：1985）出土資料とほぼ類似するものであるが，Ａ類（椀状）には体部に箆状工具による２段あるいは１段のケズリを施すものもあり，白水阿弥陀堂境内域出土資料（創建期：1160年）よりも新しく，いわき市岸遺跡よりも古様相を呈している。Ｂ類では御前清水遺跡と類似する口縁端部を上方へ摘み上げるもの（図92－11～15）




※５・６・９・20～２７・30・35・38・39は塩川町調査区出土資料（平成13年度）
外：遺溝外，35は一部修正

図92　荒屋敷遺跡出土遺物(3)　かわらけ・中世陶器

以外に，口縁付近が窄まり外反する（西）木流遺跡に類似するもの（図92－８・19・22）がある。また，右回転の成形によるものが多く，見込み中央がマウンド状（凸）に形成されるものもあるが，底面の板状圧痕・身込みのナデ調整が明瞭に残るものは殆ど認められない。

石田氏は木流遺跡（ＳＤ１）例は11世紀中頃，御前清水遺跡は12世紀前半に比定しており，飯村編年の中世Ⅰ期（後半）～Ⅱ期，中近世部会の１期（新）～２期に位置付けられる。上限は11世紀中頃，下限は所謂京都系土器が認められないことも考慮して13世紀までは下らないと判断され，概ね12世紀前～中葉頃を中心とする年代観が与えられる。ただ，土器の器形や成形技法，法量から２タイプは存在し，少なくても２小期に時期区分できるものと考えられる。

次に貿易陶磁器を概観する。本遺跡における器種構成やその特徴を山本編年から窺えば，Ｃ期～Ｅ期の範疇に収まる資料である（表19）。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類が出土していない点（Ⅱ類からⅣ類への変遷）やＣ期からＤ期への組成変化（白磁優勢から青磁優勢へ），及び白磁碗Ⅴ４類がＤ期初め頃に増加傾向があること，さらにＥ期に代表される龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類を勘案すると，一部13世紀まで下る資料もあるが，概ねＤ期（12世紀中～後半）を主体とする年代観と理解される。

中世陶器においては，図92－35は塩川町報告で新潟県五頭古窯跡群（北越窯跡群）の北沢窯址を中心とした珠洲系中世陶器と判断され，四耳壺（図92－38）も同様に珠洲。新期（12世紀後半）段階に位置付けられている（和田：2002）。また，僅かに認められた大戸窯産で瓷器系（12世紀末以降）とされる図92－39は，下丸Ａ群段階と判断され，13世紀前葉頃に位置付けられている（和田：2002）。産地別でみた場合，須恵器系である珠洲窯産系，瓷器系である大戸窯産が認められるが，図92－33の鉢底部は回転糸切りであることから，底部静止糸切りである珠洲窯産以外の中世須恵器系窯産（飯坂：毘沙門平窯など）の存在が考えられる。概ね吉岡編年の珠洲。新期（12世紀後半）を中心に，下限は瓷器系（図92－39）の下丸Ａ群段階，13世紀前葉頃に位置付けられよう。

以上，これまでかわらけを中心とする在地系土器と貿易陶磁器・中世陶器の個々の遺物について概観してきた。これらの土器組成・器形的特徴を総合的に見た場合，かわらけがやや先行する年代観となるが，概ね12世紀代を主体とする土器群と判断される。かわらけ成形法は異なるが，柳之御所跡と類似する組成内容であることから，ほぼ同時期であると考えられる。ただ，柳之御所跡の下限は文治５年（1189年）であり，本遺跡で龍泉窯系青磁碗（Ⅰ－５類）や瓷器系中世陶器が出土している点を考慮すれば，柳之御所跡よりやや後出的な内容であると考えられる。

なお，上述した遺物以外に項目立はしなかったが，木質遺物も僅かに出土している。漆器椀（ＳＫ22）や曲物（ＳＫ01）のほか，井戸枠の材，箸・串状製品（図31－４など：挿串・斎串），箆状製品（図30－12，図31－５・６，図33－８），先端が焦げた棒状の木質遺物などがある。土坑内から出土しているものが多く，比較的良好な製品類は漆器椀（１点）のみで，他は欠損・破損品である。先端が尖った箆状・棒状のものは，用途的に「籌木」の可能性もあるが，漆器類の指物木地の窪みや合わせ目に細かい木屑と漆を混ぜたコクソを押し込むための道具，所謂「コクソ箆」（四柳：1995）の可能性もある。また，先端が焦げた棒状の木質遺物は，松明として使用された可能性がある。

〔遺物の共伴関係〕

本遺跡において，該期の遺構の重複が認められ，遺物が遺構内からまとまって出土したものは殆どない。そのため，年代の指標となるものは少ないが，遺構内における遺物の伴出状況を概観（表18）すると，ＳＫ01・06：かわらけＡ類とＢ類，ＳＫ16：青磁碗Ｂⅱａ類と珠洲系甕・須恵器系鉢，ＳＫ26で白磁碗Ｂ類・かわらけＢ類・珠洲系中世陶器，ＳＤ12でかわらけＢ類と白磁碗Ａ類・四耳壺，ＳＤ16で青磁碗と中世陶器，ＳＤ20で白磁碗Ｃ類と青磁碗Ｂⅱｂ類が遺構内から認められる。これらの遺構の時期比定は，上述の遺物変遷観に準拠すれば，概ね下記のようになる。

| 12世紀：前　半 | | 中　頃 | 後　半 | | | 13世紀 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＫ01 | ⇒ | ＳＫ06 | ＳＫ23 | ⇒ | ＳＫ16 | ＳＫ24 |
| | | ＳＫ05 | ＳＫ26・54・ＳＤ01・02 | | | |

２．遺　構

今回の調査で検出された遺構は第２章で述べたとおり，竪穴状遺構１軒，建物跡１棟，柵列跡１基，土坑60基，溝跡35条，それにピット群等である。今回の調査では，本来遺跡の主要な構成となる住居跡や建物跡，それに関連する溝跡などは明確に把握できなかった。今後の調査成果次第によっては遺跡の性格が一変する可能性があるため，ここでは土坑を中心にまとめておく。

検出された土坑は，重複関係や伴出遺物が少なく，時期・性格が不明なものが多いが，形態や規模，土層の堆積状況から，以下のように分類した。

〔重複関係〕

ＳＫ11⇒ＳＫ30，ＳＫ12⇒ＳＤ02，ＳＫ35⇒ＳＤ13，ＳＤ20⇒ＳＫ47⇒ＳＫ46，ＳＫ50⇒ＳＫ51

〔形態分類〕

Ａ類：円形および楕円形基調のもの（48基）。

ＳＫ01～11・13・15～31・33～42・44・45・49・50・52・54・55・57・59・60

Ｂ類：方形基調のもの（７基）。ＳＫ14・32・43・46～48・51

Ｃ類：長方形基調のもの（５基）。ＳＫ12・43・53・56・58

〔埋土状況〕

①自然堆積（38基）。

ＳＫ02～04・09～13・15・17・24・26・27・32～34・36～43・45

②人為的堆積（６基）。　ＳＫ06・20・21・31・44・47

③自然堆積＋人為的堆積（16基）。

ＳＫ01・05・07・08・14・16・18・19・22・23・25・28・29・35・46・49

〔出土遺物〕

土坑内から僅かに出土した遺物についてみてみると，土師器・須恵器はＳＫ33・37・42，古代末～中世の土器・陶磁器類はＳＫ01・05・06・16・23・24・26・27・32・43，木質遺物はＳＫ01・05～08・14・22・24・30・32・33・39・46・47から出土している。また，種子類は総計53点中47

点が土坑内（ＳＫ01・05・08・14・32・43）から，モモ（核）がまとまって出土している。

以上，形態分類ではＡ類が最も多く，Ｂ・Ｃ類は僅かな傾向を示す。Ａ類の規模は，径0.8m未満のもの（ａ）が17基，径0.8～1.1m程のもの（ｂ）が18基，径1.3m程のもの（ｃ）が８基，径1.5m程の大型のもの（ｄ）が５基認められる。検出面からの深さをみると，ａ類は0.1～0.5m程と浅く，ｂ類は0.7～1.3m程，ｃ類は0.5～１m程，ｄ類は0.8～1.4m程であるがＳＫ31は2.2m程で最も深い。断面形は基本的にはＡｂ類に底面から垂直に立ち上がる箱形状を呈するものが多く，希に鍋底状やフラスコ状を呈するものがある。Ｂ類は箱形状のもの（ＳＫ14・46・47）と擂鉢状（ＳＫ32・43・48・51）の２者がある。また，埋土状況では②・③が比較的多い傾向がある。

このことから，本遺跡で主体を占め，規格性が強いのはＡｂ類であり，これに小規模で掘込みが浅いＡａ類やＢ類の一部が伴うものと考えられる。また埋土状況ではＡ・Ｂ類に②・③が多く，遺構配置的にも隣接地に同様な土坑の造り替えや他の遺構構築に携わる整地等を行っていた可能性が示唆される。これらの土坑群は，出土遺物がなく，時期比定が困難なものが多いが，形態・規模・埋土状況の類似性から判断して，ほぼ限られた時間幅内で継続的に機能していたものと推察される。

本遺跡Ａ・Ｂ類の土坑の大半は，柳之御所跡（三浦・松本：1995）にみる「井戸状遺構」（松本：1995）の範疇に入るものである。性格的にはＡｂ類等は「貯蔵用トイレ」の可能性も指摘されるが，分析結果からトイレ遺構である蓋然性は低いと判断されており，今後の課題としたい。　（井）

## 第３節　調査の成果と今後の課題

〔遺跡の存続期間〕

今回の調査で検出された遺構・遺物は，前章及び本章第１・２節で述べてきた通りである。遺物は縄文後・晩期の土器や弥生土器，古式土師器等も僅かに出土しているが，該期の遺構は認められず，本遺跡における画期は平安時代から中世前半期である。第１の画期である平安時代（９世紀頃～10世紀前半）には，該期に相当する住居跡や建物跡は認められなかったが，21号溝跡を中心とする流路跡から多量の土器類（土師器杯主体）が確認され，隣接地に遺構群の存在が窺えられる。

その後，10世紀後半から11世紀代の遺構・遺物は認められず，本遺跡では空白期となる。12世紀に至ると，建物跡や区画溝跡，土坑群等の遺構をはじめ，該期の遺物が飛躍的に認められるようになり，第２の画期が訪れる。12世紀後半には最盛期を迎え，13世紀頃まで継続するが，以後遺構・遺物は希薄となり，近世まで生活空間としての機能は途絶える。

〔歴史にみる荒屋敷遺跡〕

ここで，本遺跡第２の画期となる古代末から中世前半（平安～鎌倉期頃）の会津地域における歴史的背景について，遺跡の性格を考える上でも若干触れておきたい。

平安時代（９世紀初頭），会津は法相宗の徳一が慧日寺・勝常寺を開基させ，ほぼ制圧していたとされる。当時の塩川町地区は，律令制配下のもと会津郡に属していたが，９世紀前半頃には

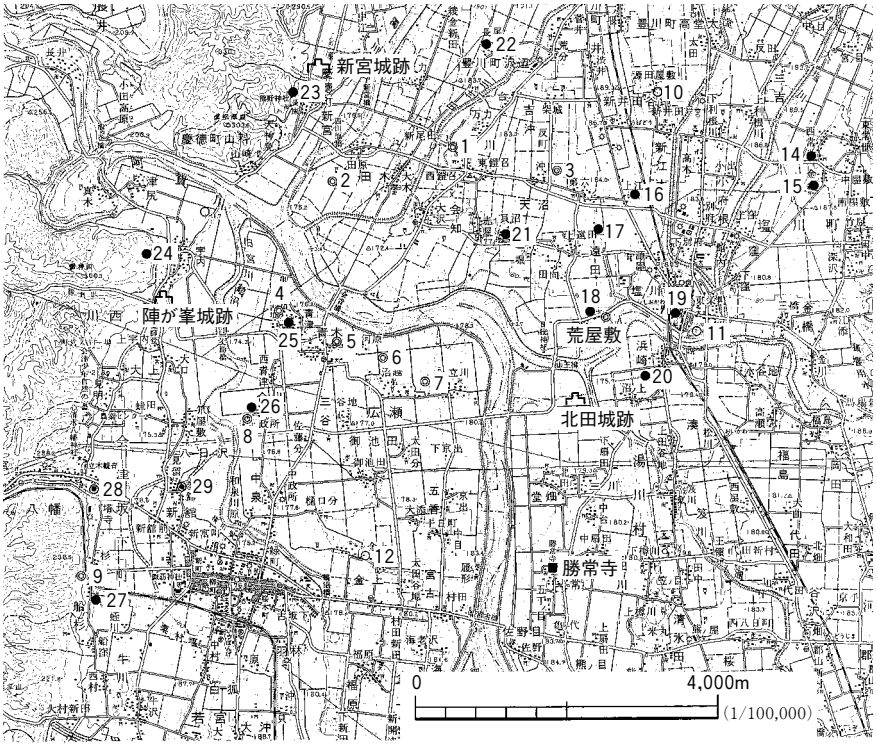
「和名抄」（弘仁年間：810～822年）や「続日本後紀」（承和七年：840年），「延喜式」等の史料で耶麻郡への分置が認められる。その後，地域史を知り得る史料・文献等は殆どないが，福島県史・喜多方市史・湯川村史等から，1172年には寺領を持つ慧日寺衆徒頭の乗丹坊が敵対していた越後国城氏（城四郎長茂）と姻戚関係を結ぶ。源平合戦が勃発すると，横田河原の合戦（1181年）において木曽義仲に敗れ，会津における慧日寺の勢力は衰退していく。一方，城助茂は国衙の在庁官人から逃れ，「会津八館」（或いは二十八館）の一つとされる陣が峯城跡に立て籠もったという説もある（註１）。また，この間に平泉の藤原秀衡が城氏の勢力下でもあった会津地方を押領しようとしたため，源頼朝に降伏したとされる。文治五年（1189年）には，源頼朝の側近であった佐原十郎左衛門尉義連（三浦大介義明の子）が会津の地を拝領し，三浦・佐原氏の関東武士の移住・土着がみられる。

「富田家年譜」を基幹とした「会津芦名一族」（林：1979）によれば，義連の長男景連が蜷河氏の初祖となり，蜷河（稲川）荘（河沼郡坂下町周辺）を領したという（註2）。また，二代盛連の時，６人の嫡子に会津の領地を分領し，領域支配が進んだとされている。一般的には地名を苗字として名乗り，長男経連は猪苗代氏（猪苗代町），次男広盛は北田氏（湯川村），三男盛義は藤倉氏（河東町），四男光盛は芦名氏（会津若松市），五男盛時は加納氏（熱塩加納村），六男時連は新宮氏（喜多方市）の祖とされている。長男から三男は第１の妻との子，四男から六男は盛連の従兄弟三浦義村の娘で三代執権北条泰時の前妻であった矢部禅尼（継妻）との子であり，家督は必然的に四男光盛が継いだとされる。後の会津における北条得宗領による地頭代など，北条氏との親密な関係が窺える。ただ，佐原義連及び二代盛連を含めたその嫡子の時代においても，鎌倉との往来が「吾妻鏡」からも読みとられ，本格的な統治を行うのは三浦氏が北条執権家（時頼）の挑発と謀略によって滅亡する宝治合戦（1247年）以降と推察される。

このように会津における該期の歴史は激動の時代でもあり，遺跡から確認された遺構・遺物からもその繁栄が読みとられる。貿易陶磁器の出土は，官的・公的な物資交易を示すものと思われ，珠洲系中世陶器など日本海を中心とする遠隔地への流通が盛んに行われた時代でもある。該期における荒屋敷遺跡周辺の遺跡群を概観した場合（図93），北田城や新宮城，そして陣が峯城跡を「核」とする阿賀川（大川）沿いやその支流に転々と貿易陶磁器を出土する遺跡群（１～８）が配置していることが分かる。また，盆地周縁には貿易陶磁器を伴出する館跡（28・29）や庭園跡が確認された薬王寺遺跡（９）等も認められる。荒屋敷遺跡は大塩川・姥堂川・笈川が集水する日橋川沿いの自然堤防上に立地し，盆地北東部における阿賀川合流地の主要な位置にある。陶磁器類が質・量共にまとまって出土する遺跡は，館跡・城・寺院・古代からの交通の要所等であり，地域において歴史的・地理的拠点であった可能性が高いことが指摘されている（山本：1995）。以上のように，遺跡の立地条件や貿易陶磁器に代表される遺物の出土量，歴史的背景を踏まえると，性格的には本遺跡と位置的にも隣接する北田氏あるいは新宮氏の支配下にあった「津」（川湊）の存在が推察される。

〔今後の課題〕

今回の調査は会津縦貫北道路本線部分の9,700㎡を対象とする調査であった。調査区周辺は大正




| No. | | 遺　跡　名 |
|---|---|---|
| 1 | ◎ | 鏡ノ町遺跡A・B |
| 2 | ◎ | 古屋敷遺跡 |
| 3 | ◎ | 舘ノ内遺跡 |
| 4 | ◎ | 男壇遺跡 |
| 5 | ◎ | 吉原遺跡 |
| 6 | ◎ | 古舘遺跡 |
| 7 | ◎ | 高畑遺跡 |
| 8 | ◎ | 宮ノ北遺跡 |
| 9 | ◎ | 薬王寺遺跡 |
| 10 | ○ | 鏡ケ城跡 |
| 11 | ○ | 柏木城跡 |
| 12 | ○ | 金上城跡 |
| 13 | ○ | 細谷館山城跡 |
| 14 | ● | 常世館跡 |
| 15 | ● | 三橋館跡 |
| 16 | ● | 上江館跡 |
| 17 | ● | 麻生館跡 |
| 18 | ● | 下遠田館跡 |
| 19 | ● | 小十郎館跡 |
| 20 | ● | 浜崎館跡 |
| 21 | ● | 貝沼館跡 |
| 22 | ● | 長尾館跡 |
| 23 | ● | 駿河館跡 |
| 24 | ● | 譲屋館跡 |
| 25 | ● | 生江館跡 |
| 26 | ● | 政所館跡 |
| 27 | ● | 杉館跡 |
| 28 | ◉ | 経塚館跡 |
| 29 | ◉ | 的場舘館跡 |

凡　例
◎：貿易陶磁器（白磁・青磁）出土遺跡
○：城　　跡
●：館　　跡
◉：貿易陶磁器を出土する館跡
（『福島県遺跡地図，会津地方』：1996）

**図93**　荒屋敷遺跡周辺の主な遺跡（古代末頃～中世）

７年の基盤整備や平成６年度のほ場整備のほか，下水道・水道管埋設・農道建設に伴う著しい削平や整地による改変もあり，遺跡本来の原形を保つものではなかった。平成12年及び13年度の試掘調査成果においても，今回の調査区範囲や塩川町調査部分を挟んだ北側及び南東堤防沿いでは遺構・遺物の確認はされておらず，遺跡の範囲から除外されている（横須賀他：2002）。このことは，比較的標高が高い北側付近にある程度の遺構・遺物が認められてはいるが，塩川町調査区（大型排水溝）との明確な整合性を掴むことができなかった要因にもなっており，今後の課題として残る。

今回の調査では前述したとおり，９世紀～10世紀前半と12世紀～13世紀頃に本遺跡の画期を見出すことができ，良好な資料を得ることができた。しかし，その一方で空白期となる10世紀後半～11世紀代の遺跡の存在や在地土器群の体系的な編年確立の問題がある。漆器（汁椀・皿）類を中心とする食器類や木製品のほか，鍋・釜類（石製・鉄製）など遺跡からの出土例が殆ど認められていない遺物の存在もあり，今後重要な課題の一つになってくるものと思われる。また，出土したこれらの遺物と関連して，古代・中世の窯跡の問題もある。本遺跡出土の須恵器でも認められたように，杯のヘラ切りが一貫して行われる大戸古窯跡群産以外の製品も混在（甕・瓶類含む）しており，盆地周縁に点在する古代須恵器窯（喜多方市小田高原窯跡・坂下町萩ノ窪窯跡など）との受給関係の実体解明が急務とされる。中世陶器からも，中世地方窯の存在の可能性や瓷器系の大戸古窯跡と須恵器系窯跡の存在競合ないし分業関係が指摘される（飯村：1988）。

以上，本遺跡における問題を提起してきたが，最後に今回の調査で十分検討できなかった課題について以下に挙げ，２次調査に向けてのまとめとしたい。

１．遺物の年代観と各遺構の変遷を明らかにし，遺構と遺物の相互関係を把握する。

２．分析結果を踏まえた遺跡の構造と性格を明確にする。

３．上記を踏まえ，周辺地域を含めた小地域圏の検討を行い，社会的・歴史的背景を推察する。（井）

## 補註，引用・参考文献

（註１）　湯川村史を参考にしている（第四章：佐藤健郎）。右大臣（のち摂政）九条兼実の日記『玉葉』養和元年（1181）による。中村五郎氏は早くから「藍津之城」の推定地を会津坂下町南宇内の陣が峯城跡と指摘している。喜多方市史（第二編Ⅰ古代：坂内三彦）では白河荘本城の「白川御館」に立て籠もったと推察。福島県史（第三編中世：小林清治・大石直正）等のいずれの文献でも城氏の佐渡への逃亡は否定している。

（註２）　「蜷河荘」は，大石直正氏によると11世紀後半には成立したとし，中村五郎氏は建長五年（1253年）の近衛家所領目録から，延久二年（1070年）には存在したとしている。また，中村氏は蜷河荘の範囲を『和名抄』の大江郷を中核としている（現在の会津坂下町に柳津町北半分及び只見川流域の山都町・高郷村分を加えた範囲）。


会津藩　編　1809　『新編会津風土記巻54』　歴史春秋出版本（第３冊　2001）

会津坂下町教育委員会　2002　「会津坂下町薬王寺遺跡の概要」 会津坂下町教育委員会社会文化課ふるさと社会振興班

飯村　均　1988　「福島県における中世陶器生産の様相」『東国土器研究 第１号』　東国土器研究会

飯村　均　1994　「中世の「宿」「市」「津」－陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物－」『中世都市研究３』　中世都市研究同人会

飯村　均　1995　「東北の中世窯と常滑窯」『考古学ジャーナルNo.396』ニュー・サイエンス社

飯村　均　1995　「各地の土器様相（東北）」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社

飯村　均　1997　「中世食器の地域性　東北南部」　『国立歴史民俗博物館研究報告 第71集』

石田　明夫　1994　「会津大戸窯（遺物編）」『会津若松市文化財調査報告書 第37号』会津若松市教育委員会

石田　明夫　1999　「会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書」『会津若松市文化財調査報告書 第62号』会津若松市教育委員会

石本　弘　1995　「丸底から平底へ」『論集しのぶ考古』 目黒吉明先生頌寿記念　論集しのぶ考古刊行会

伊藤　博幸　1990　「陸奥国における黒色土師器－その展開と終焉－」『東国土器研究 第３号』東国土器研究会

植村　泰徳　2002　「内屋敷遺跡発掘調査概報」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書６』塩川町教育委員会

氏家　和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史 第14号』東北史学会

氏家　和典　1988　『東北古代史の基礎的研究』　㈱東北プリント

大石直正・小林清治　1969　「第三編　中世」『福島県史　第一巻　通史編一』　福島県

大越　忠士　1982　「一般集落内における掘立柱建物跡について」『福島考古 第23号』福島県考古学会

小野正敏・飯村均 他　2001　『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

香川慎一・斎藤竜一 他　2001　「荒屋敷遺跡」『県内遺跡分布調査報告７』福島県教育委員会

喜多方市史編纂委員会　1995　「第二編古代・中世」『喜多方市史４　資料編Ⅰ』

木本　元治　1990　「福島県内の黒色土器（平安時代）」『東国土器研究 第３号』東国土器研究会

小井川　和夫　1984　「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要 10』

小柴吉男・渡邉満 他　1992　「三本木遺跡」『阿賀川地区遺跡調査報告書 第28集』会津坂下町教育委員会

斎藤義弘・冨田真衛　1995　「勝口前畑遺跡２」『一般国道13号福島西道路関連遺跡発掘調査報告』福島市教育委員会　㈶福島市振興公社　建設省東北地方建設局福島工事事務所

坂井　秀弥　1990　「東北古代ロクロ土師器甕の二系譜と須恵器との関係－丸底の出羽，平底の陸奥－」『新潟考古学談話会会報 第６号』

佐々木　修 他　1988　「下遠田館跡」『福島県の中世城館跡』 福島県教育委員会

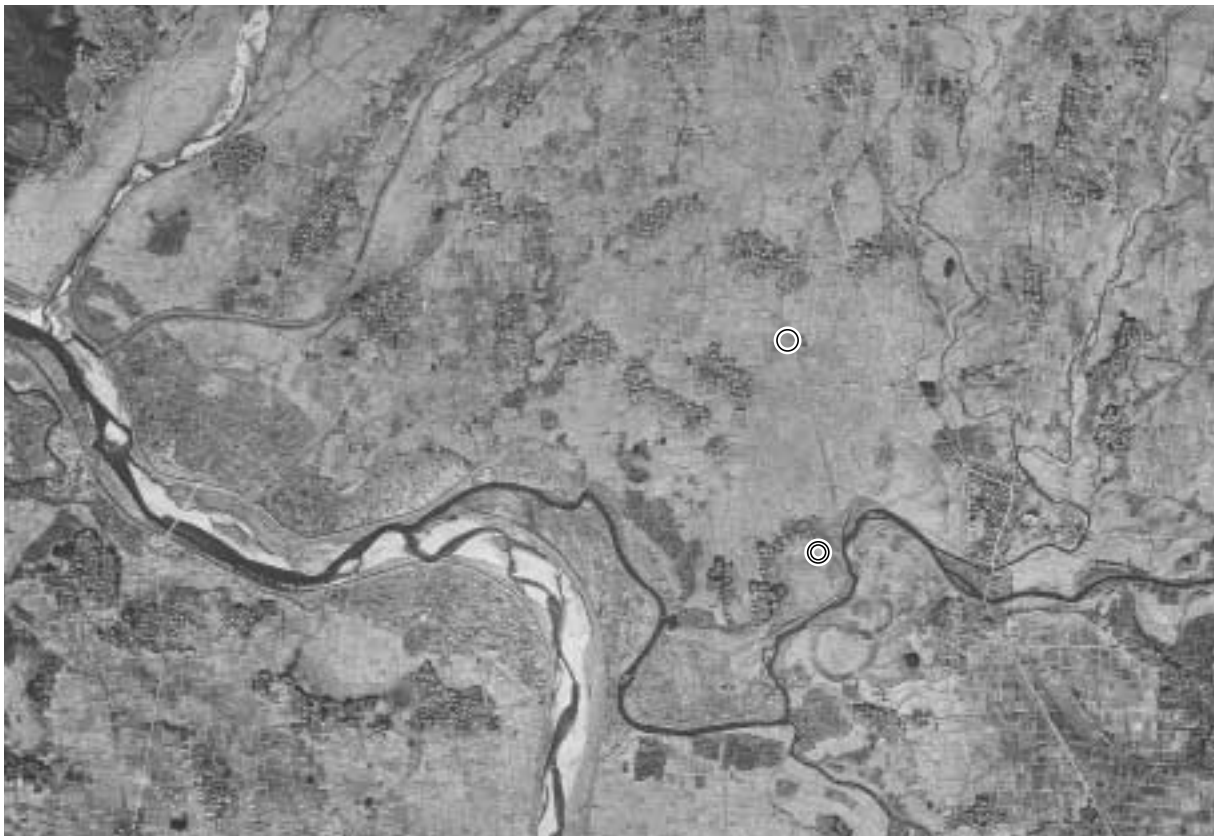
史跡白水阿弥陀堂境域復元調査団　1976～1983　『史跡白水阿弥陀堂境域復元整備１～７次調査報告書』 いわき市教育委員会

白鳥　良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要 Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所

菅原　祥夫　1996　「大久保Ｆ遺跡　第３章考察」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告８』福島県教育委員会㈶福島県文化センター

巽淳一郎・浅川滋男　1996　「まじないの世界Ⅱ（歴史時代）」『日本の美術 第361号』至文堂
東北中世考古学会　1997　『東北地方の在地土器・陶磁器 Ⅰ－11世紀から19世紀－』 第３回研究大会
東北中世考古学会　1998　『東北地方の在地土器・陶磁器 Ⅱ－11世紀から19世紀－』 第４回研究大会
山田　廣・馬目順一　1995　「小浜代遺跡－範囲確認調査－」　福島県双葉郡富岡町教育委員会
仲田　茂司　1994　「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」『考古学雑誌79－３』日本考古学会
中村　五郎　2000　「藍津之城考－蜷河荘と城氏－」『福島史学研究 第71号』
中山　雅弘　1985　「福島県における中世土器の覚書」『東洋文化研究 第４号』 東洋文化研究会
中山　雅弘　1988　「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究 第１号』 東国土器研究会
向井　吉重　1672　『会津旧事雑考』（「会津資料叢書４・７・８」会津資料保存会　1917）
萩生田和郎・石田明夫 他　1999　「矢玉遺跡」『若松北部地区県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅰ』 若松市教育委員会
林　哲　1975　『会津芦名一族』　歴史春秋出版株式会社
福島県考古学会　1996　「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その１）」『福島考古 第37号』
中近世部会　1997　「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その２）」『福島考古 第38号』
藤谷誠・小熊博治 他　1990　「上吉田遺跡・船ケ森遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告９』
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
古川　利意 他　1985　「御前清水遺跡」『御前清水遺跡・金山遺跡 第７集』 山都町教育委員会
三浦謙一・松本建速　1995　「柳之御所跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第228集』
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
村田　晃一　1995　「宮城県における10世紀前後の土器」『福島考古 第36号』
森田勉氏遺稿集　1995　『大宰府陶磁器研究』　追悼集刊行会
美濃加茂市民ミュージアム　2001　『文字の登場、そして広まり－古代中世の人と文字をめぐって－』 展示品図録
八重樫　忠郎　1994　『柳之御所跡発掘調査報告書』 平泉教育委員会
安田　稔　1998　「上宮崎Ａ遺跡　第３章考察」『福島空港・あぶくま南道路発掘調査報告１』
福島県教育委員会　㈶福島県文化センター
山中　雄志　1998　「福島県会津地方の出羽・日本海系長胴甕」『東国史論 13号』 群馬考古学研究会
山中　雄志　1999　「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（前編）」
『福島考古 第40号』　福島県考古学会
山中　雄志　2000　「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相（後編）」
『福島考古 第41号』　福島県考古学会
山本　信夫 他　1990　『貿易陶磁研究 No.10』　日本貿易陶磁研究会
山本　信夫　1995　「11．貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　真陽社
柳沢　和明 他　1992　「多賀城第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1991』
湯川村教育委員会　1994　「第３章古代，第４章中世」『湯川村史　第三巻通史』 湯川村
横須賀　倫達　2002　「麻生館遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１』
福島県教育委員会　㈶福島県文化振興事業団
横須賀　倫達 他　2002　「荒屋敷遺跡」『福島県内遺跡分布調査報告８』　福島県教育委員会
横田賢次郎・森田勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』 九州歴史資料館
四柳　嘉章　1995　「14．漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　真陽社
吉岡　康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館
吉田　生哉　1990　「岸遺跡」『いわき市埋蔵文化財発掘調査報告 第二十七冊』 いわき市教育委員会
吉田　博行　2000　「萩ノ窪窯跡」『会津坂下町内遺跡発掘調査報告書 51』 会津坂下町教育委員会
和田　聡　1997　「鏡ノ町遺跡Ａ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書』 塩川町教育委員会
和田聡・植村泰徳　他　2001　「鏡ノ町遺跡Ｂ」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書５』 塩川町教育委員会
和田　聡　他　2002　「荒屋敷遺跡－会津縦貫北道路整備に伴う付属施設建設並び同道路関連工事遺跡
発掘調査報告書－」『塩川町文化財調査報告 第10集』 塩川町教育委員会

# 写　真　図　版



1　航空写真１（1947年）

2　航空写真２（1963年）

◎：荒屋敷遺跡
○：麻生館遺跡

3　遺跡遠景（空中写真）（南から）

4　遺跡全景（南から）

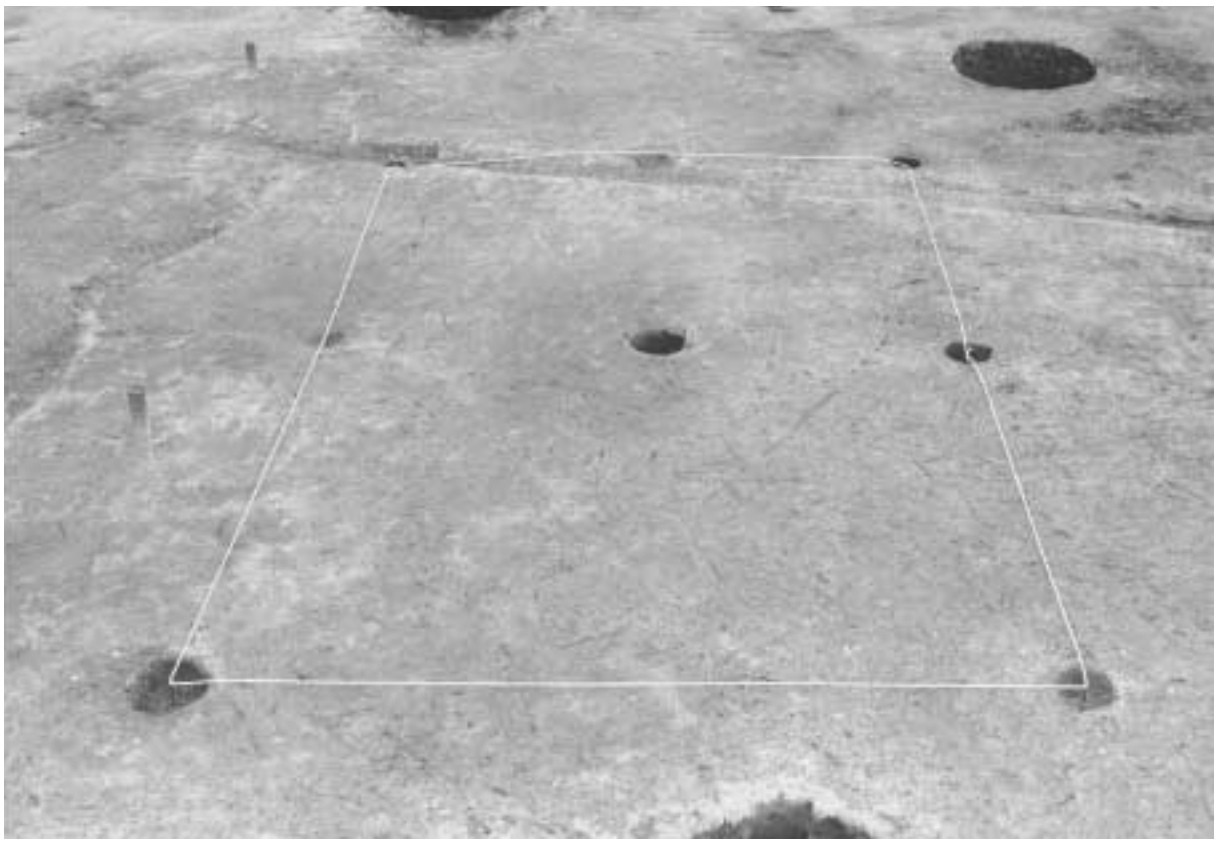
5　調査区北側全景（南から）

6　調査区南側全景（北から）

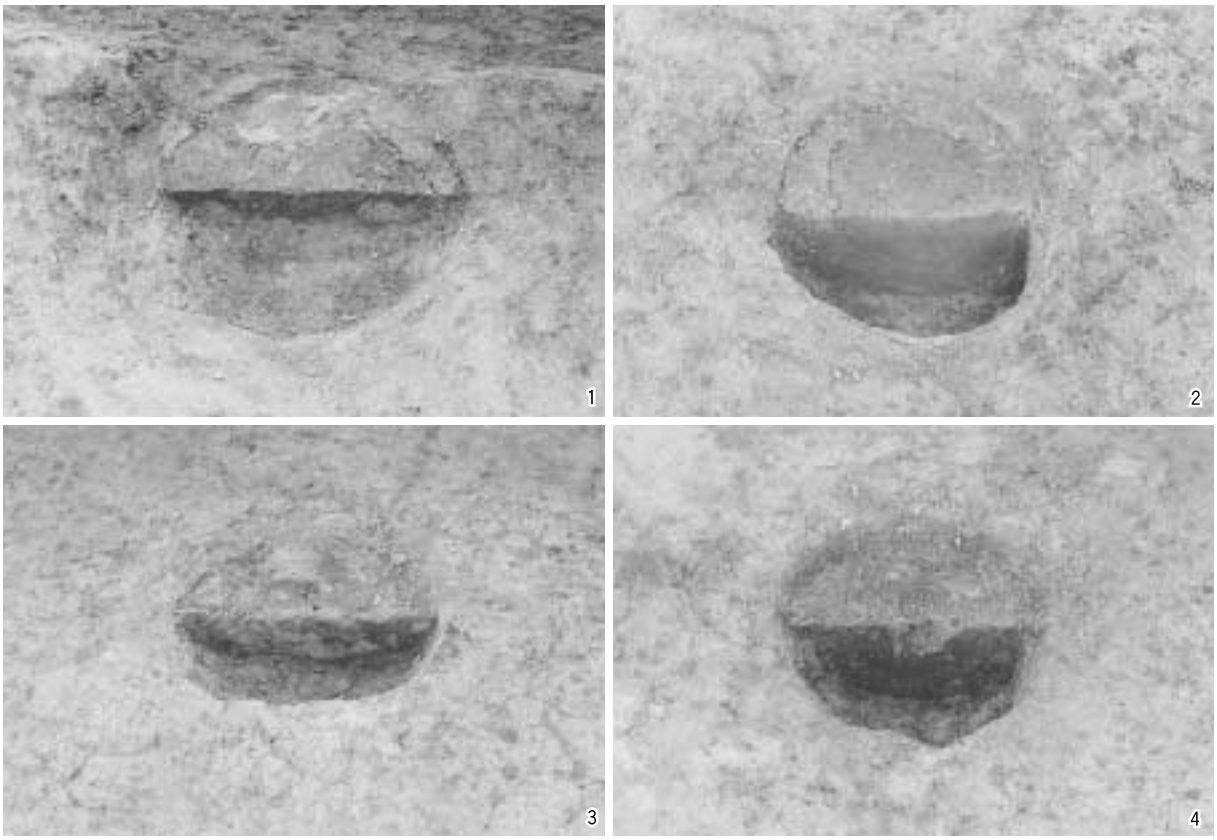
7　調査区南半西側溝跡・土坑群等（北西から）

8　調査区中央付近全景（南から）

9　１号竪穴状遺構全景（西から）

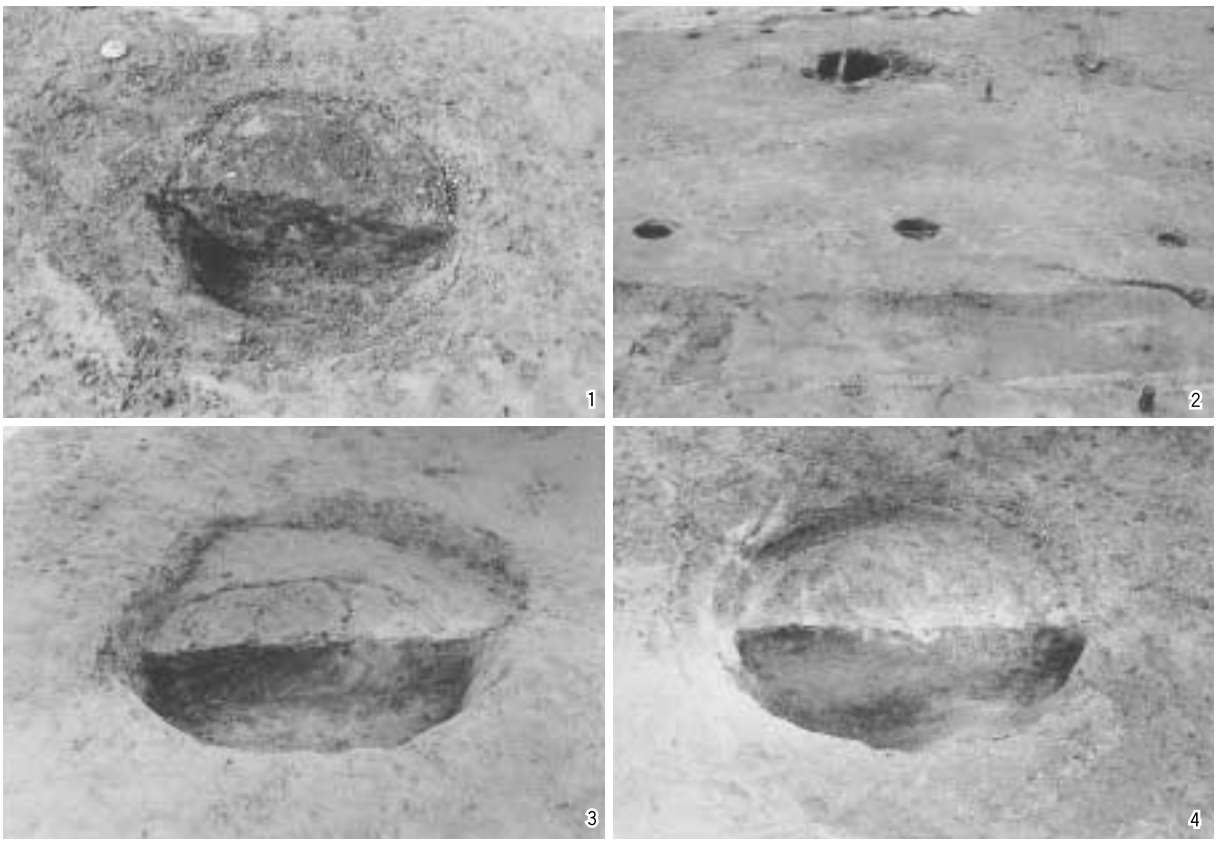


10　１号掘立柱建物跡（南から）



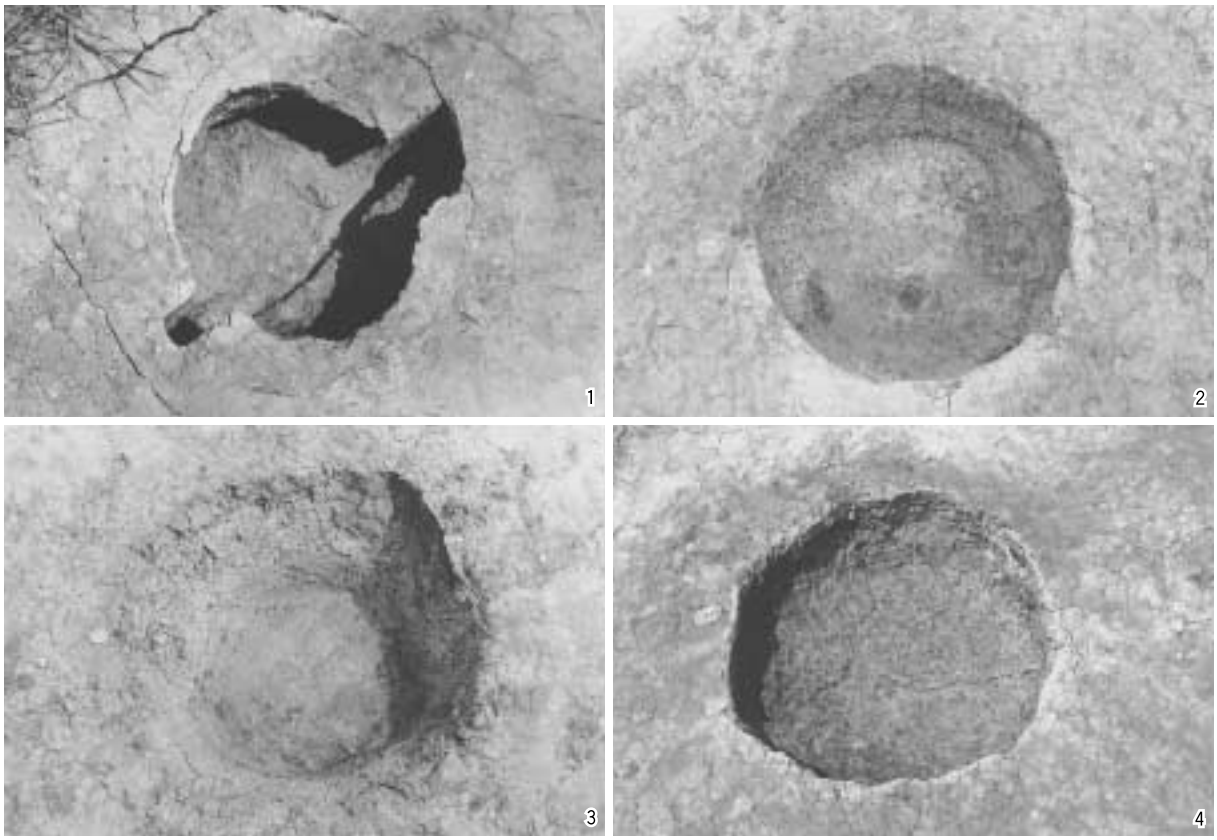
11　１号掘立柱建物跡

1　Ｐ２断面（北から）　2　Ｐ３断面（東から）
3　Ｐ５断面（東から）　4　Ｐ４断面（東から）



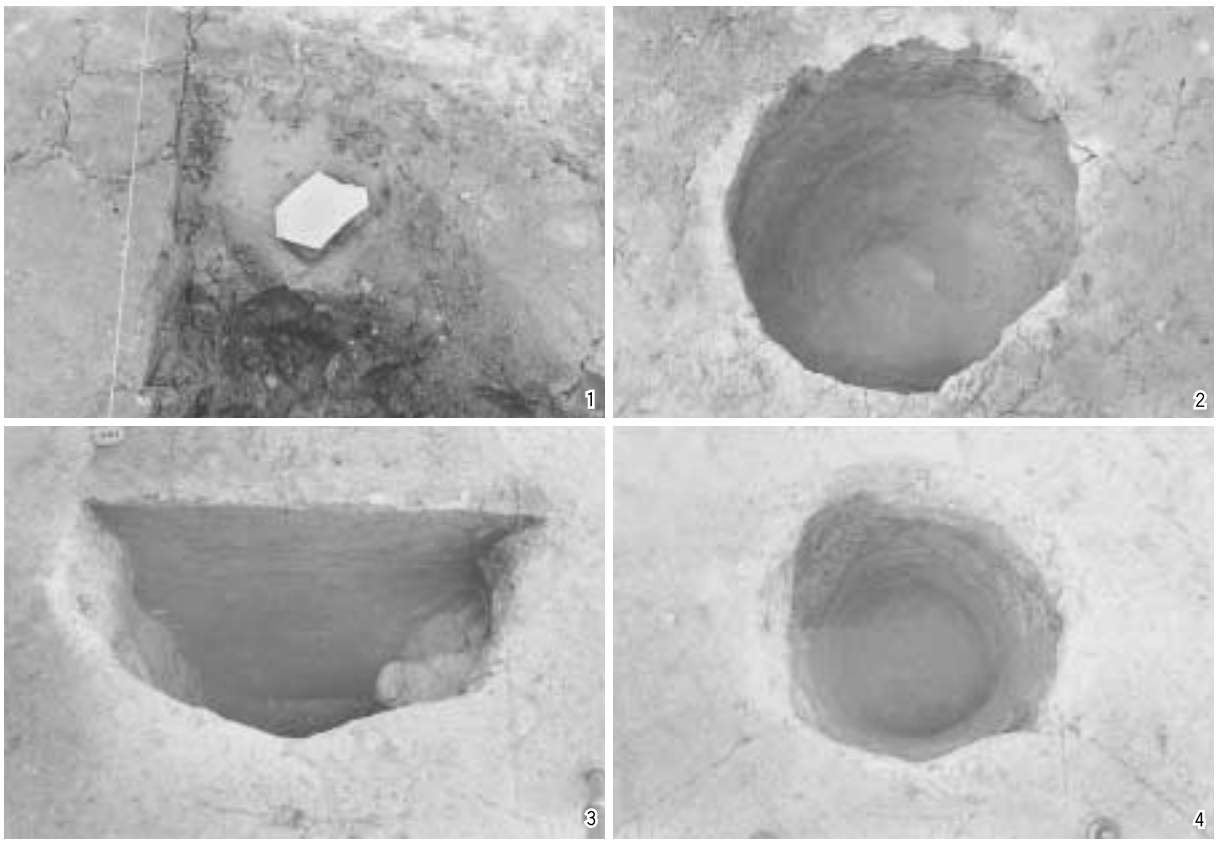
12　１号掘立柱建物跡，１号柱列跡

1　１号掘立柱建物跡Ｐ７断面（南から）　2　１号柱列跡全景（西から）
3　１号柱列跡Ｐ１断面（西から）　4　１号柱列跡Ｐ２断面（西から）



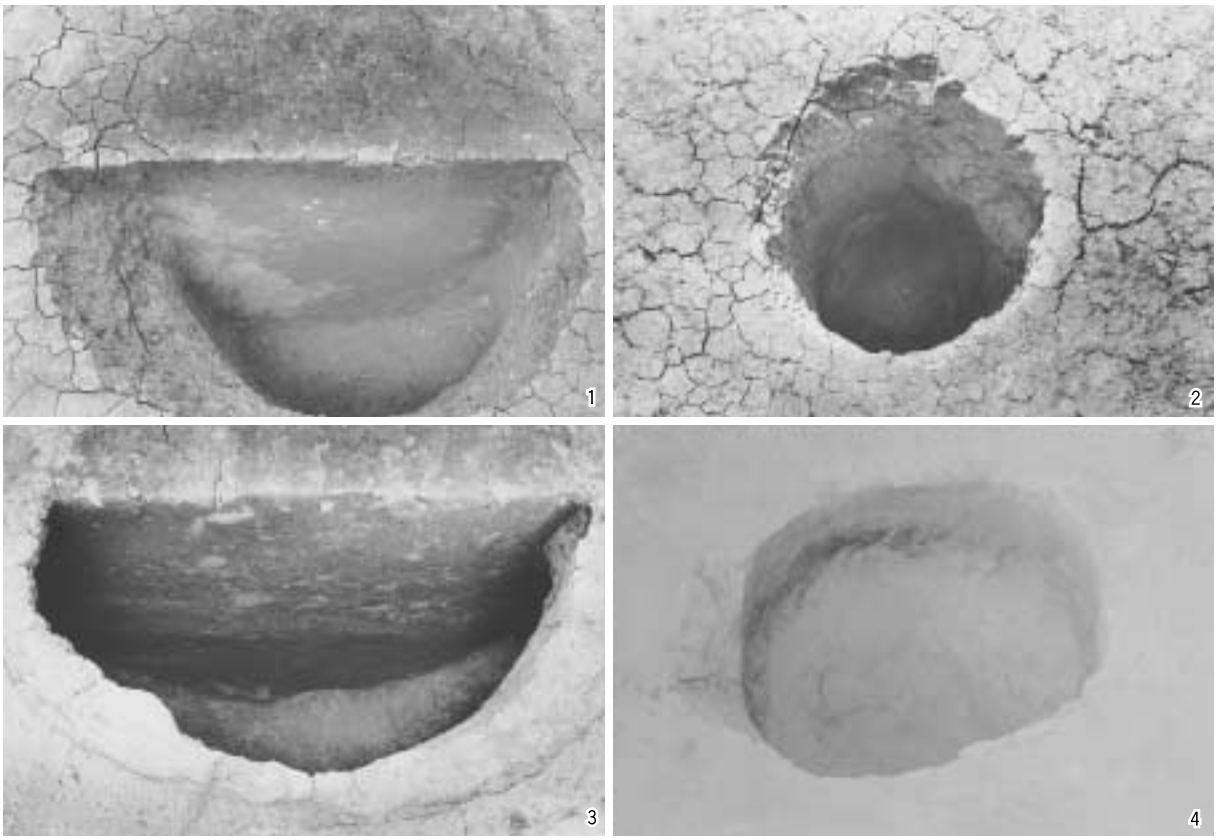
13　1～4号土坑

1　1号土坑完掘（南から）　2　2号土坑完掘（南から）
3　3号土坑完掘（南から）　4　4号土坑完掘（南から）



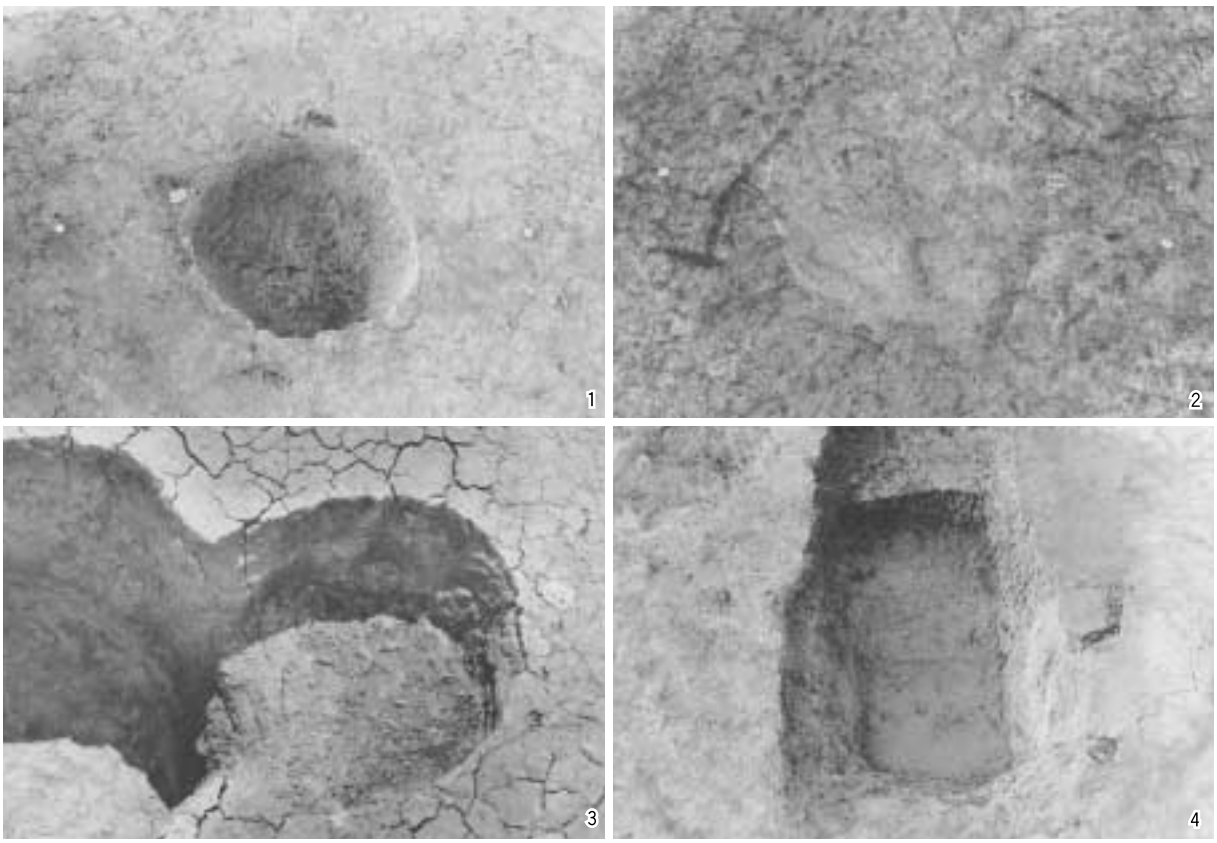
14　5・6号土坑

1　5号土坑遺物出土状況（西から）　2　5号土坑完掘（南から）
3　6号土坑断面（南から）　4　6号土坑完掘（南から）



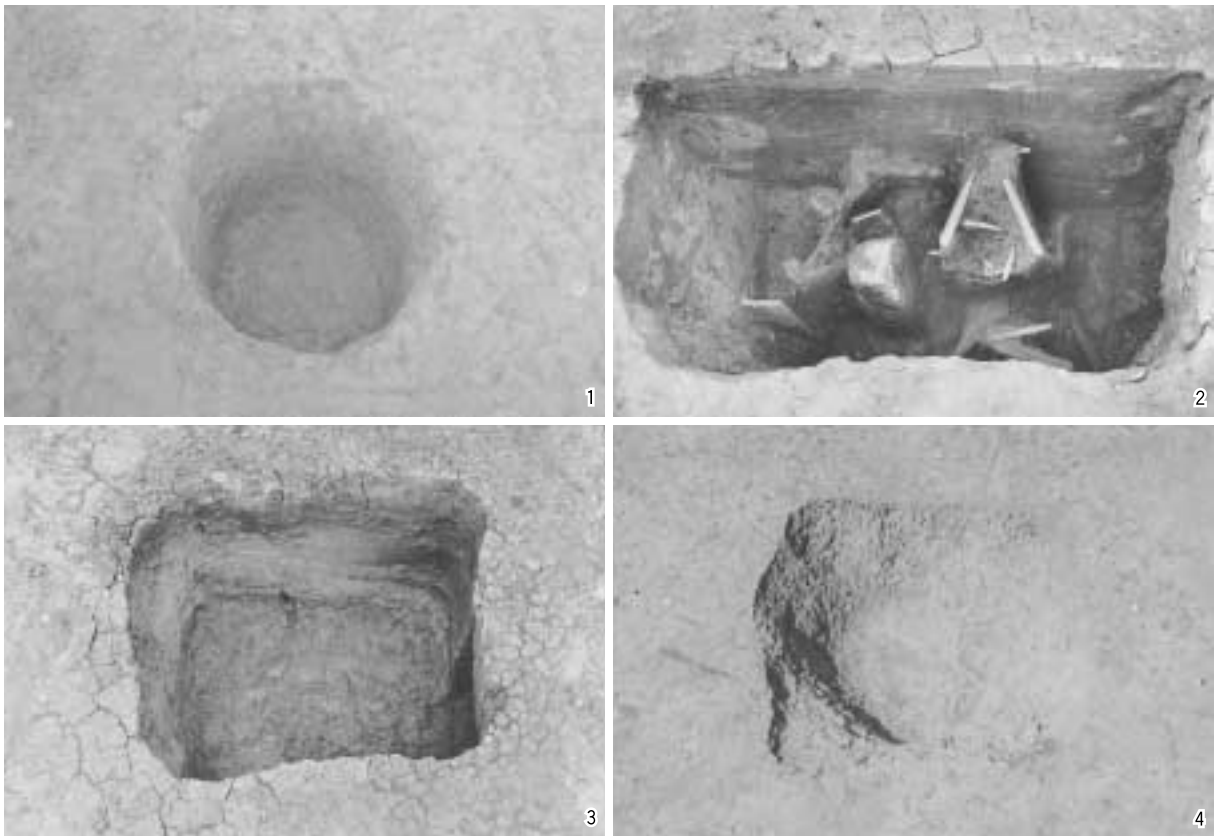
15　7・8号土坑

1　7号土坑断面（南から）　2　7号土坑完掘（東から）
3　8号土坑断面（南から）　4　8号土坑完掘（南から）



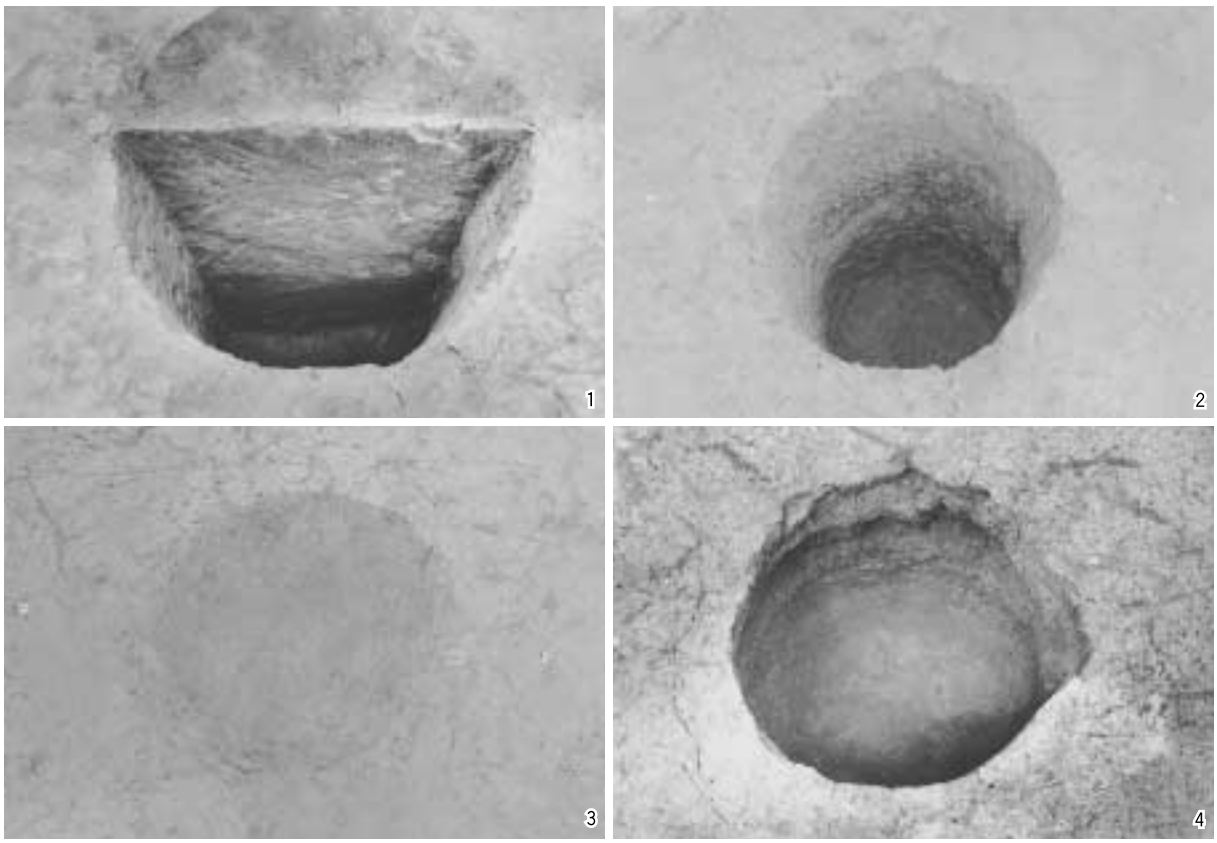
16　9～12号土坑

1　9号土坑完掘（南から）　2　10号土坑完掘（南から）
3　11号土坑完掘（北から）　4　12号土坑完掘（南から）



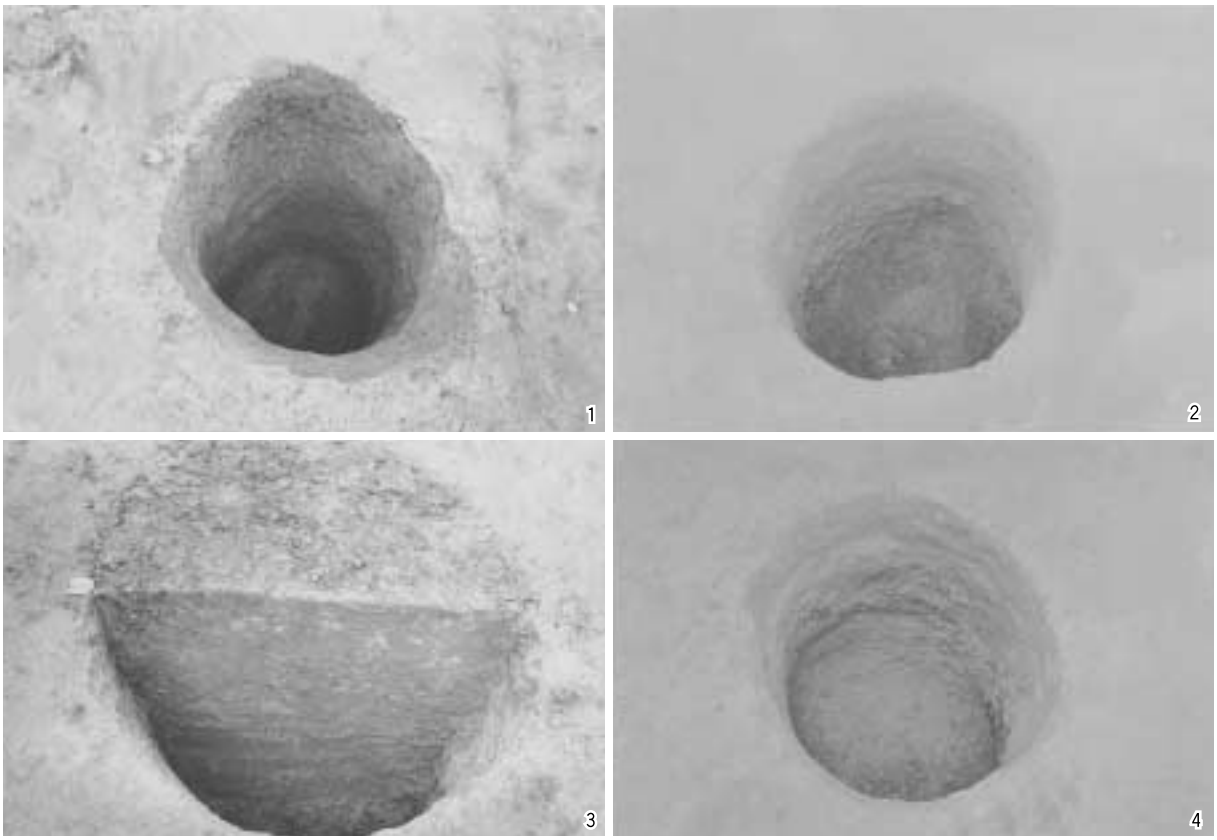
17　13～15号土坑

1　13号土坑完掘（南から）　2　14号土坑遺物出土状況（南から）
3　14号土坑完掘（南から）　4　15号土坑完掘（南から）



18　16～18号土坑

1　16号土坑断面（南から）　2　16号土坑完掘（南から）
3　17号土坑完掘（南から）　4　18号土坑完掘（南から）

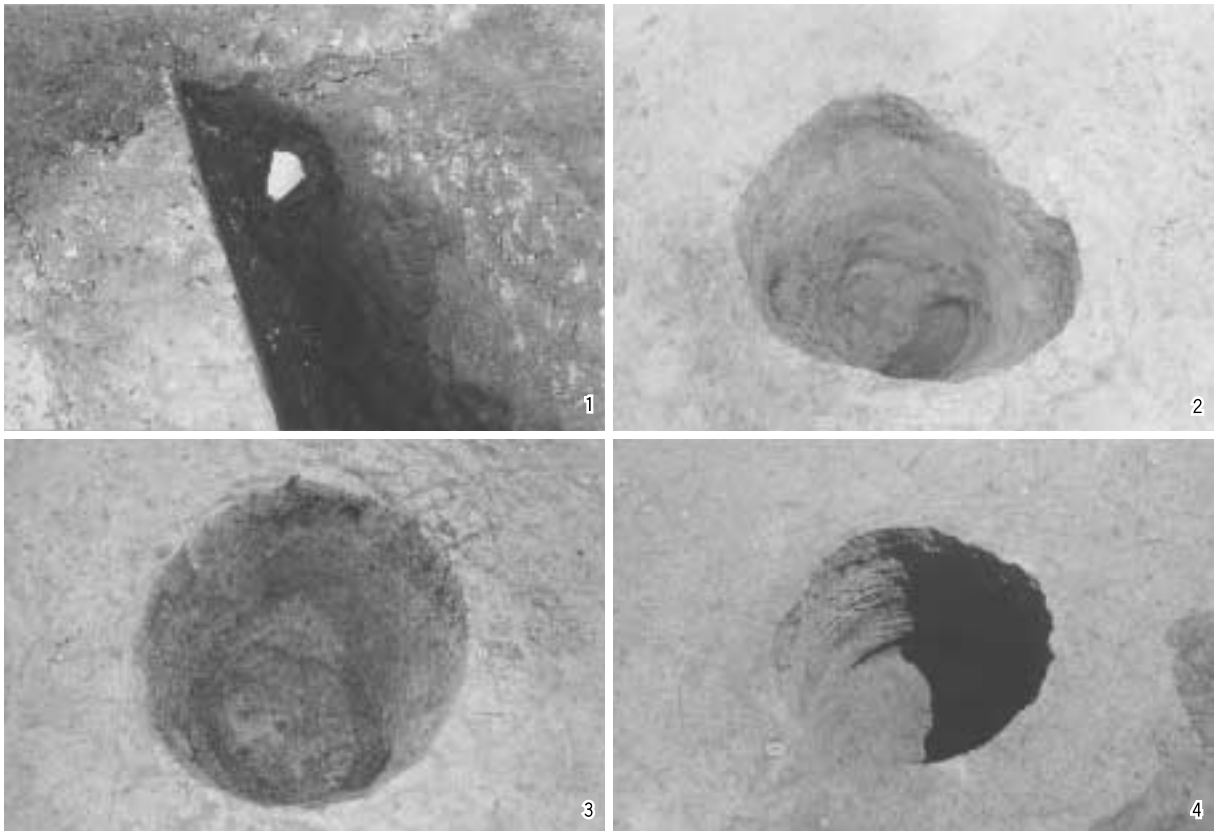


19　19～21号土坑

1　19号土坑完掘（南から）　2　20号土坑完掘（南から）
3　21号土坑断面（南から）　4　21号土坑完掘（南から）

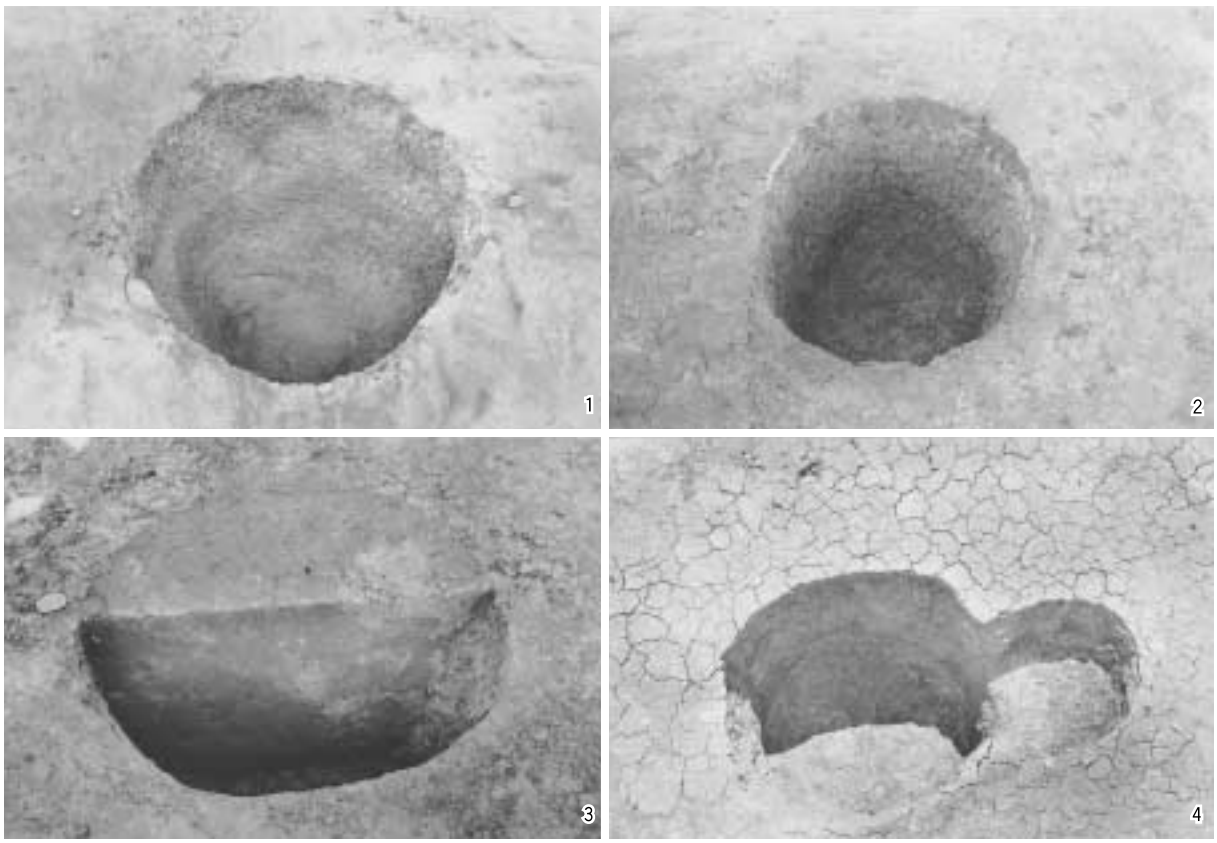
20　22・23号土坑

1　22号土坑遺物出土状況（東から）　2　22号土坑完掘（南から）
3　23号土坑断面（南から）　4　23号土坑完掘（東から）



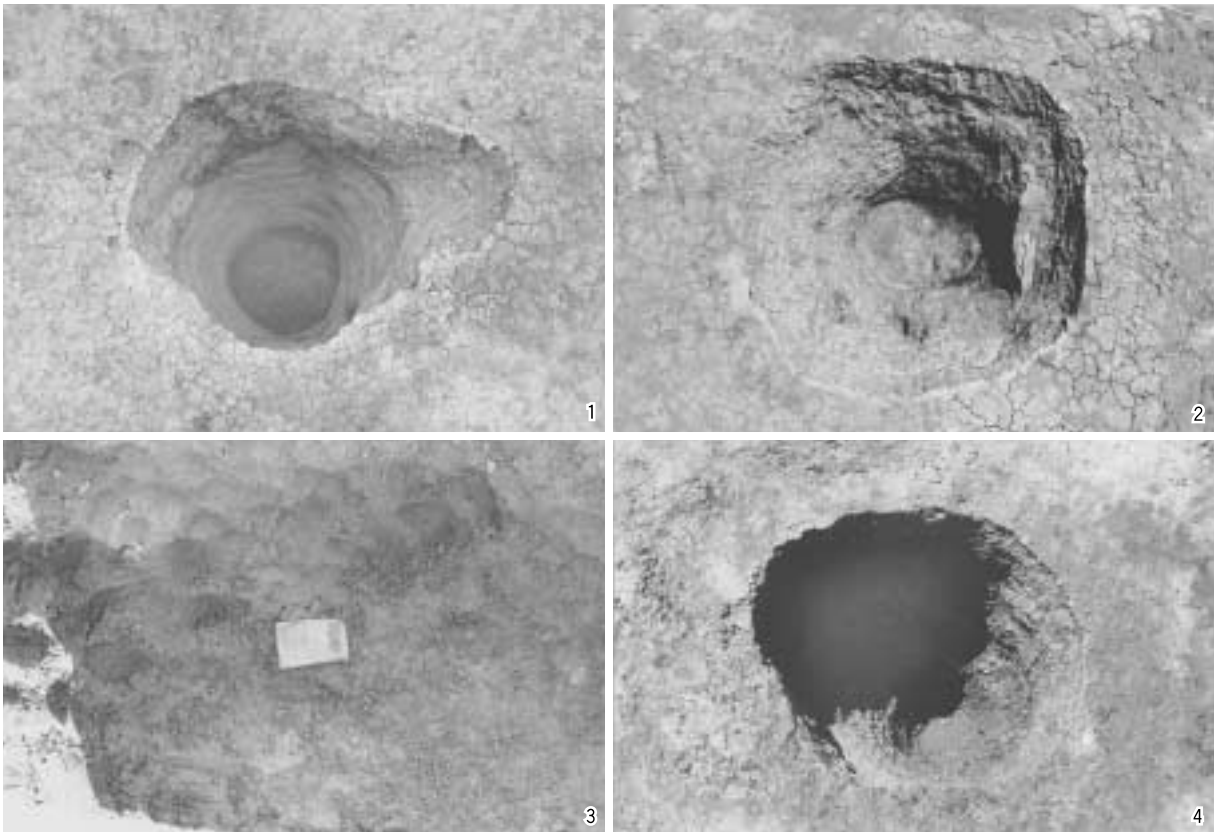
21　24～26号土坑

1　24号土坑遺物出土状況（北西から）　2　24号土坑完掘（南西から）
3　25号土坑完掘（南西から）　4　26号土坑完掘（南西から）



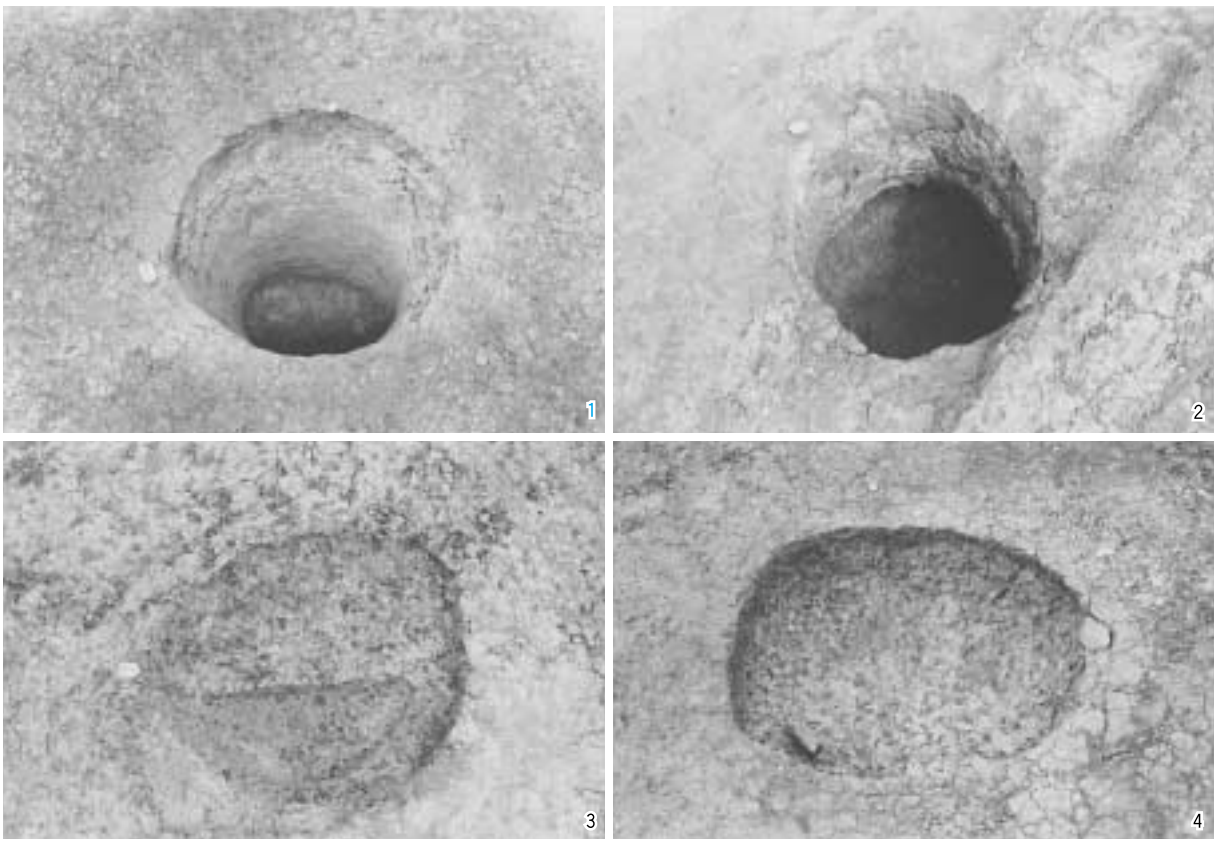
22　27～30号土坑

1　27号土坑完掘（南から）　2　28号土坑完掘（南から）
3　29号土坑断面（南から）　4　11・30号土坑完掘（北から）



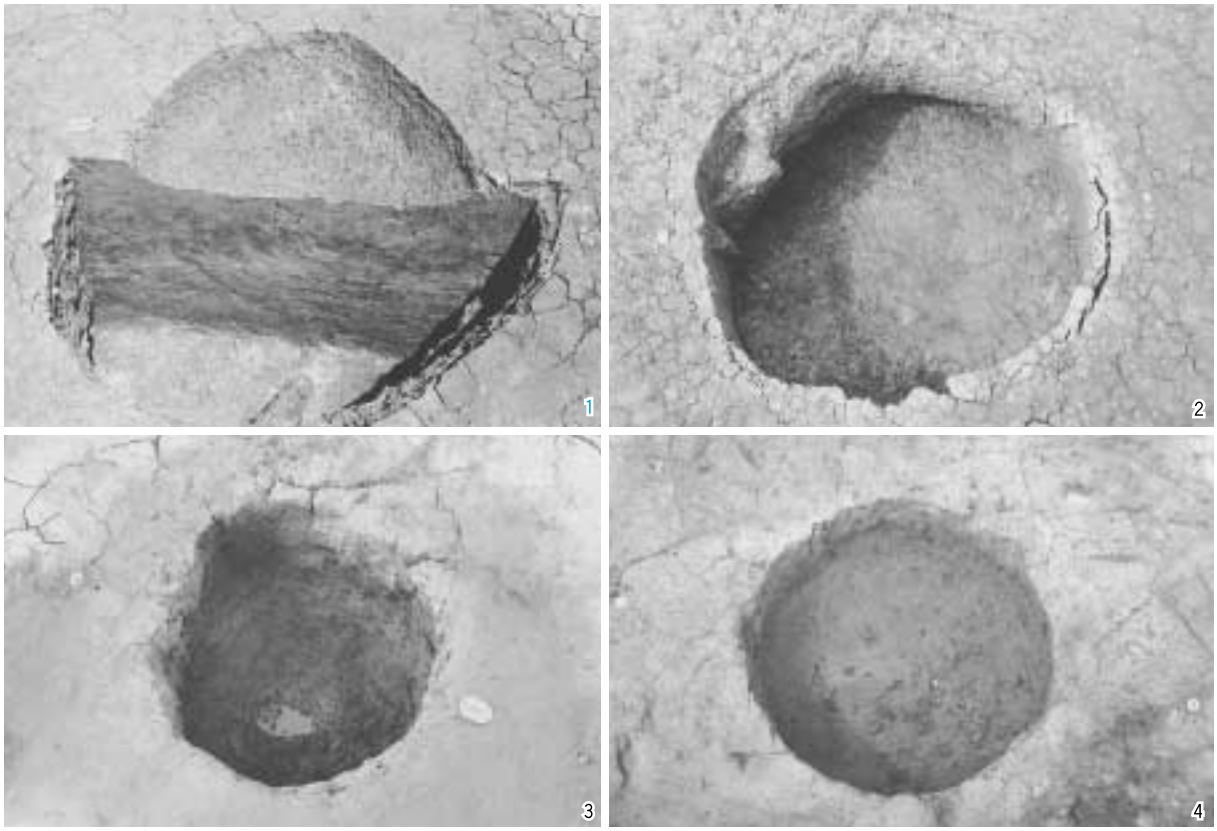
23　31～33号土坑

1　31号土坑完掘（西から）　2　32号土坑完掘（西から）
3　33号土坑遺物出土状況（東から）　4　33号土坑完掘（北から）



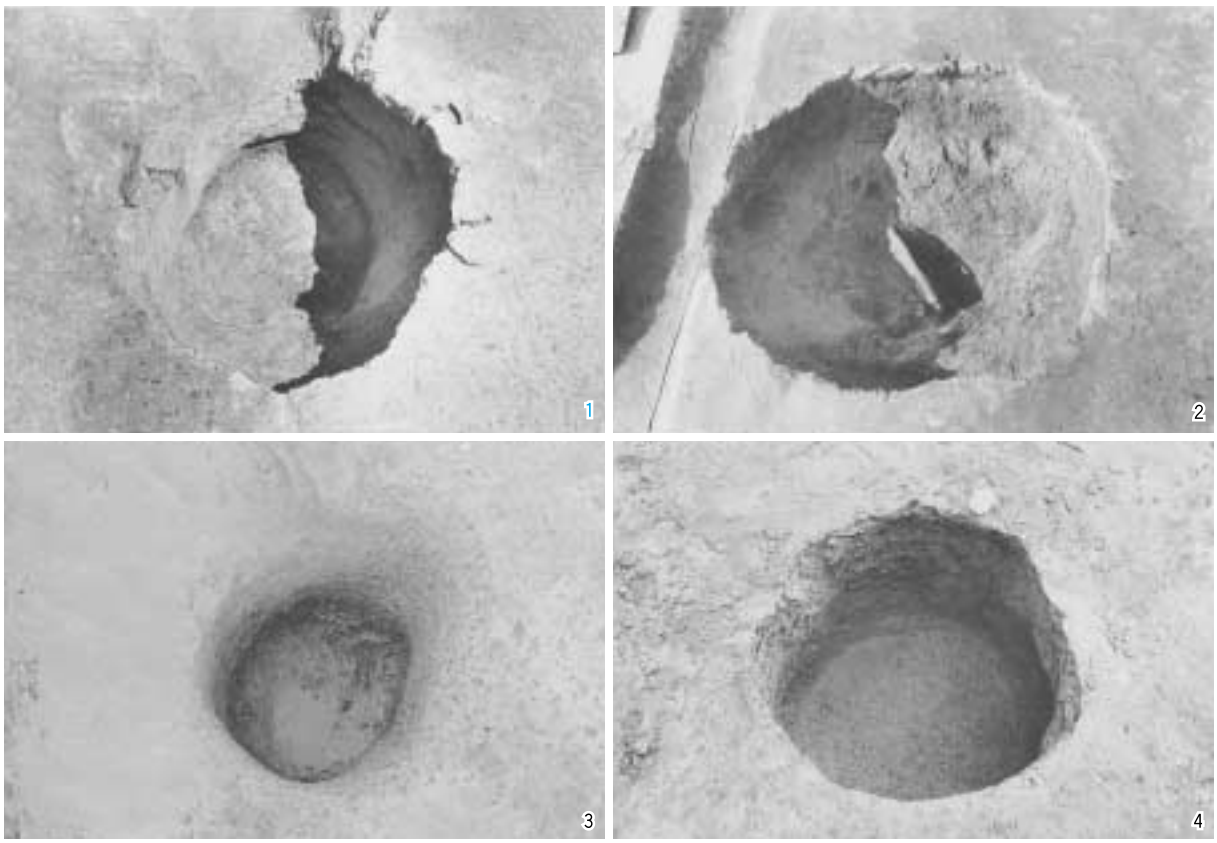
24　34～37号土坑

1　34号土坑完掘（南から）　2　35号土坑完掘（南から）
3　36号土坑完掘（南から）　4　37号土坑完掘（東から）



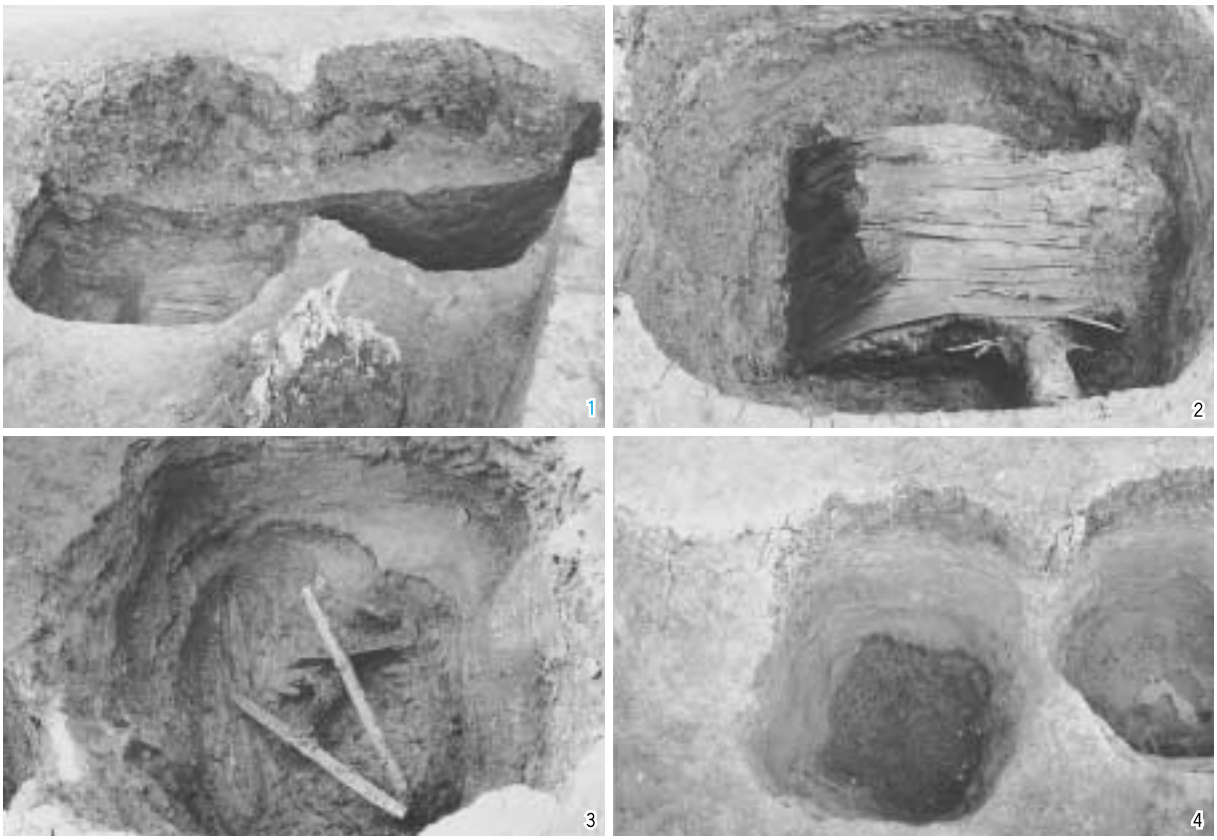
25　38～41号土坑

1　38号土坑完掘（南から）　2　39号土坑完掘（南から）
3　40号土坑完掘（南から）　4　41号土坑完掘（南から）



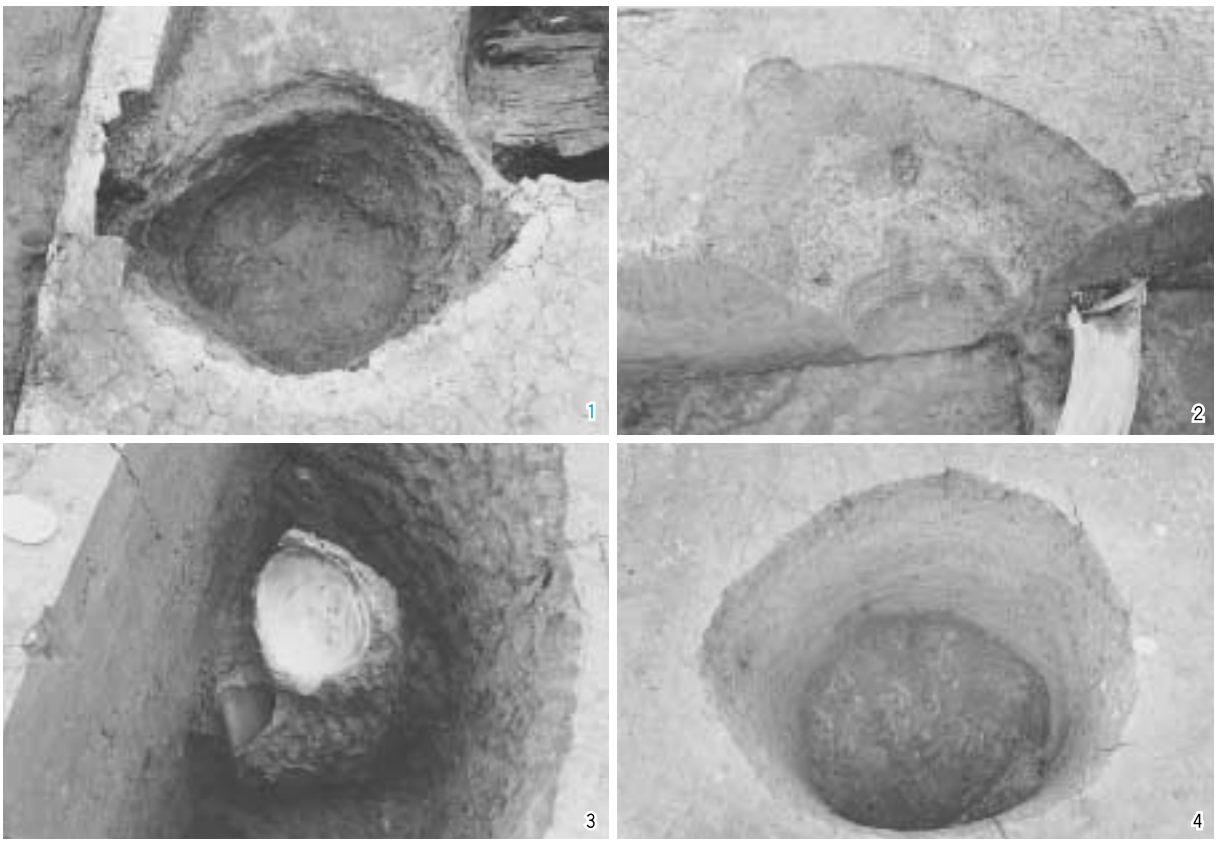
26　42～45号土坑

1　42号土坑完掘（南から）　2　43号土坑完掘（南から）
3　44号土坑完掘（南から）　4　45号土坑完掘（西から）



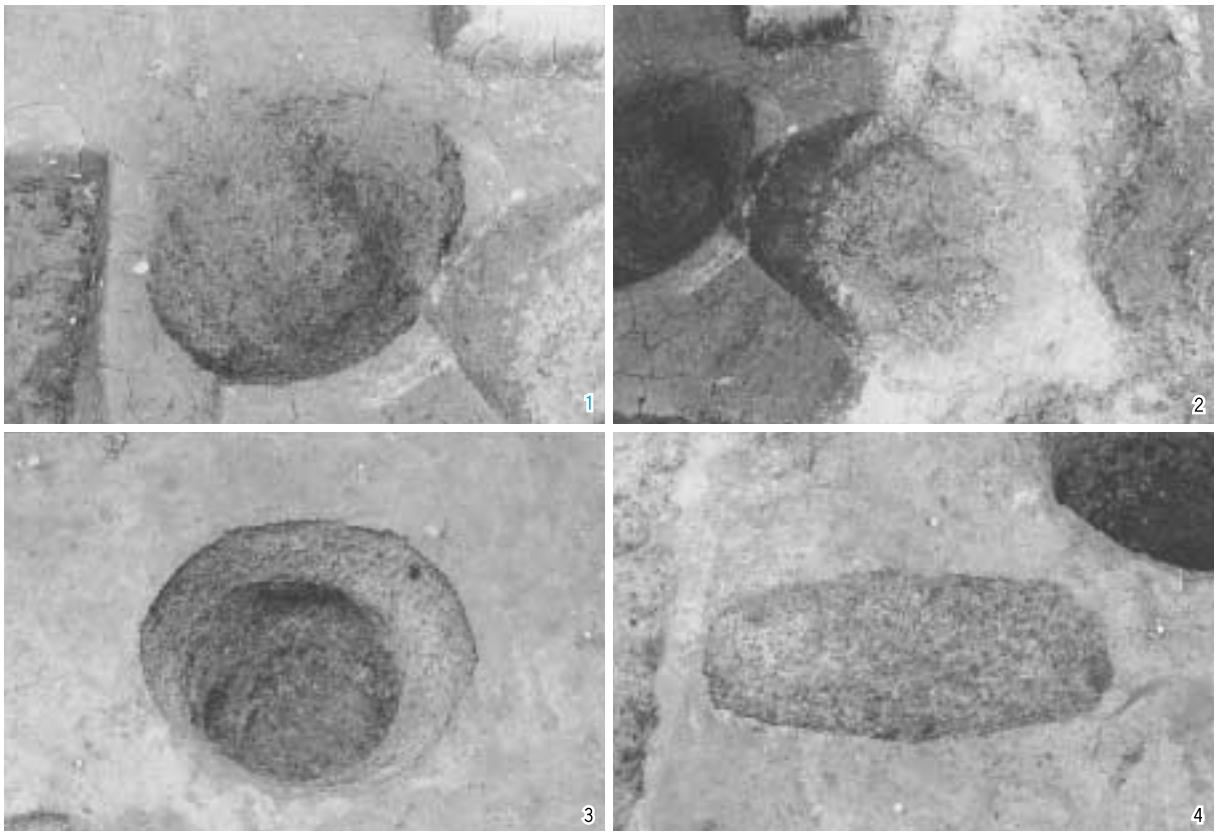
27　46・47号土坑

1　46・47号土坑断面（北から）　2　46号土坑遺物出土状況（北から）
3　46号土坑遺物出土状況（南から）　4　46号土坑完掘（北から）



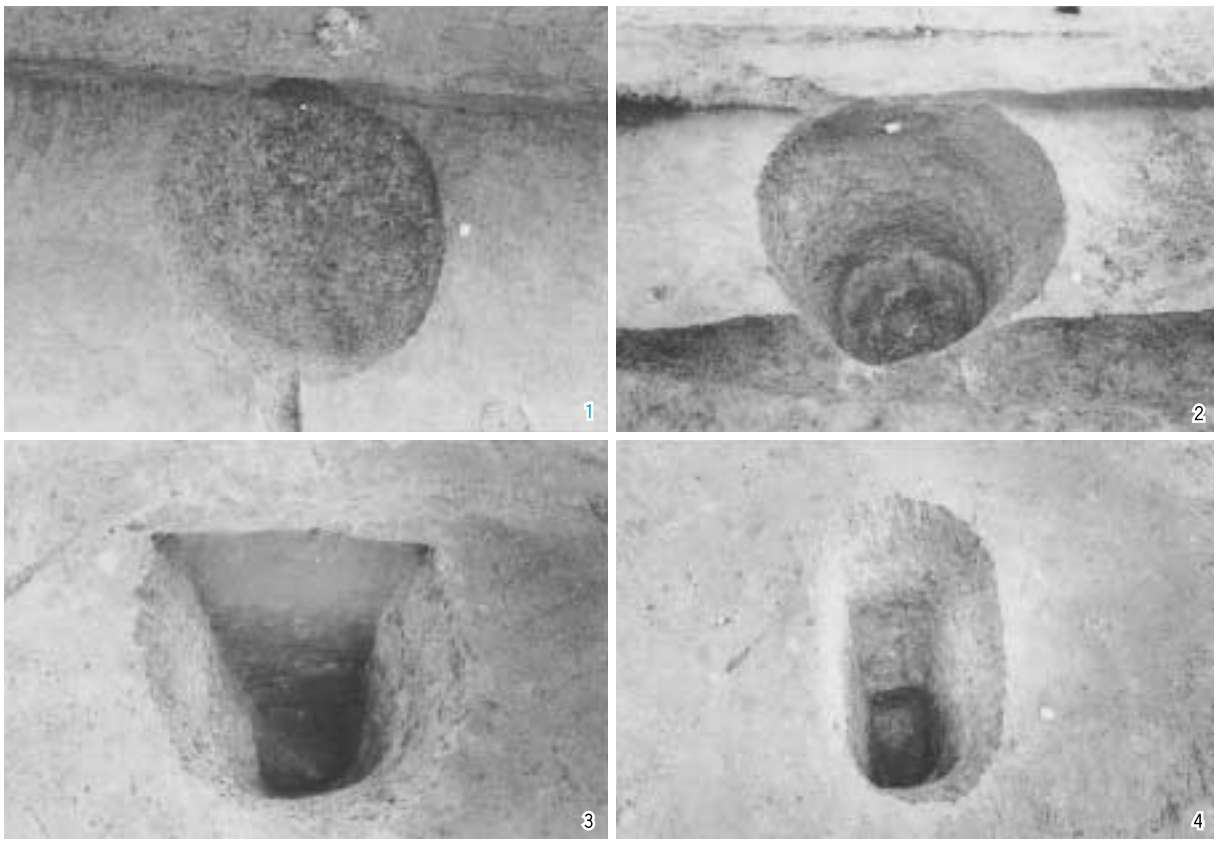
28　47～49号土坑

1　47号土坑完掘（南から）　2　48号土坑完掘（北から）
3　49号土坑遺物出土状況（南から）　4　49号土坑完掘（南から）



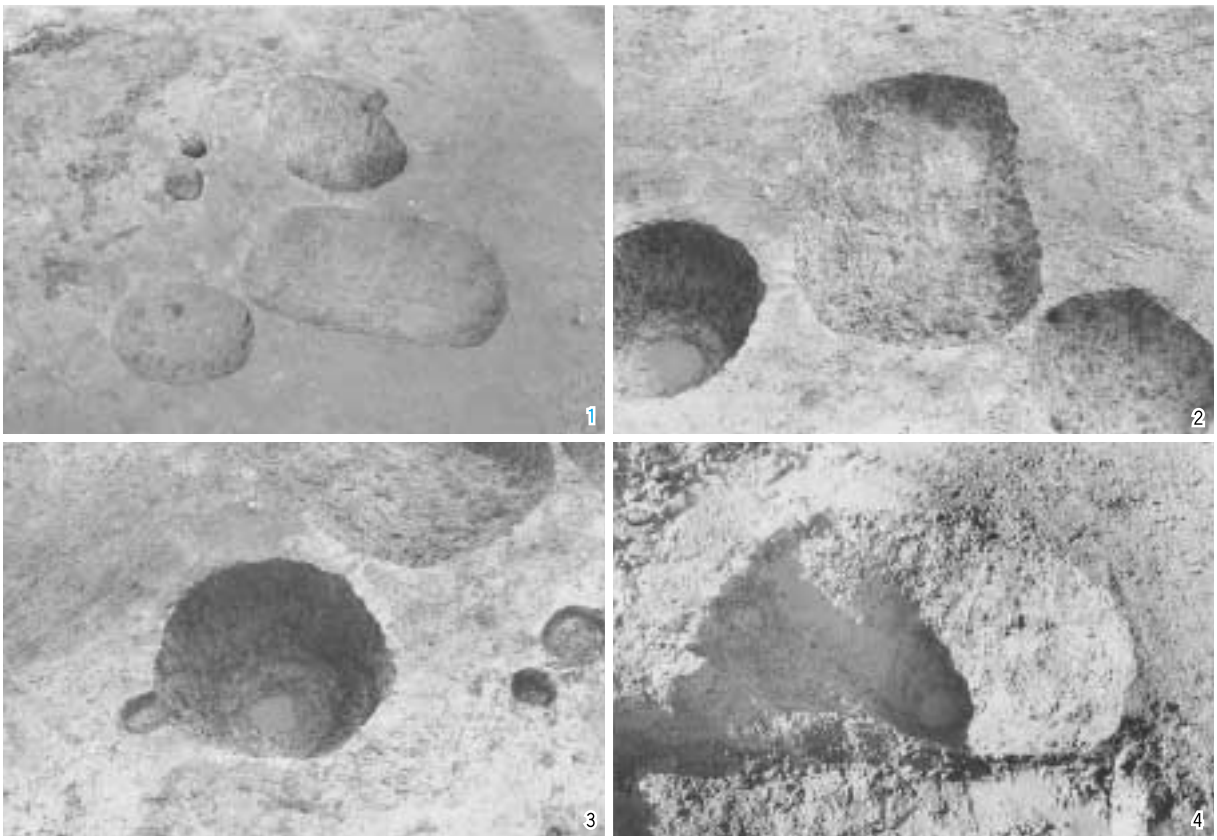
29　50～53号土坑

1　50号土坑完掘（南から）　2　51号土坑完掘（南から）
3　52号土坑完掘（南から）　4　53号土坑完掘（南から）



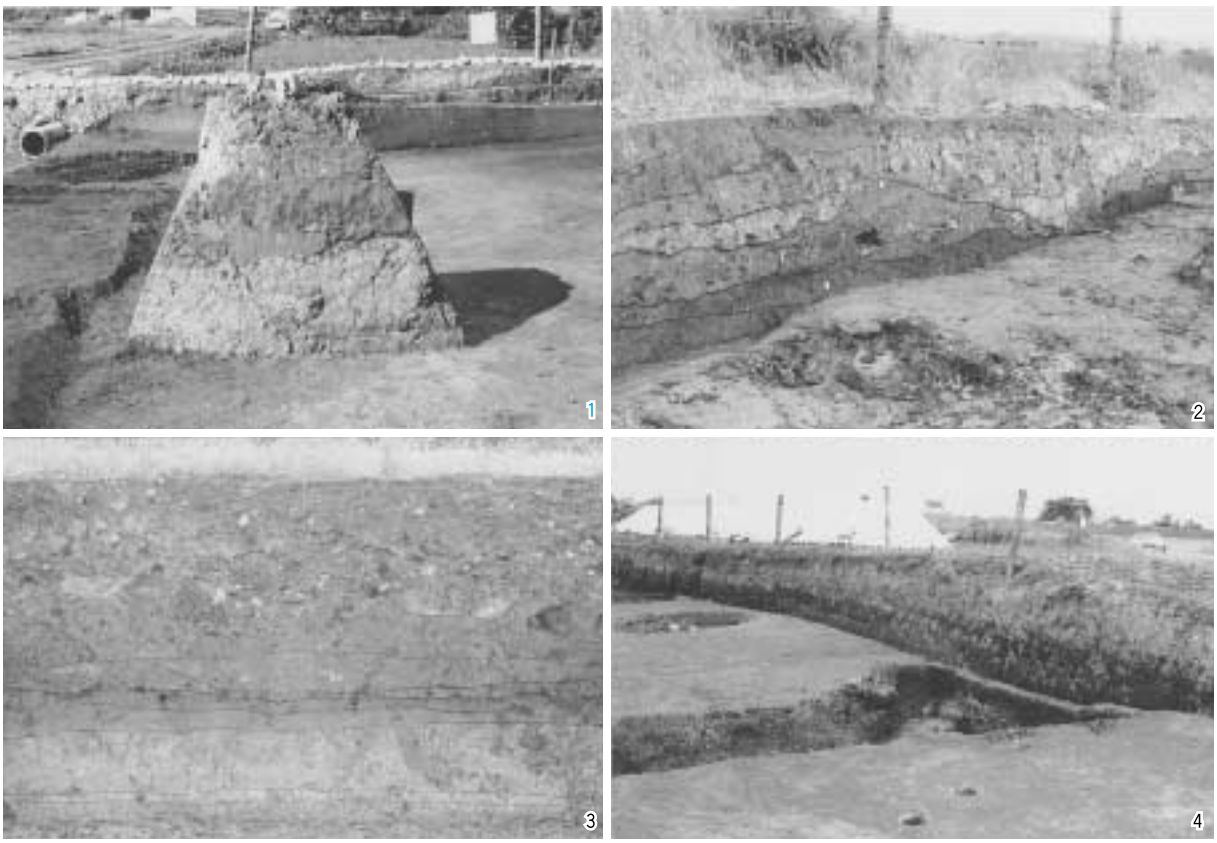
30　54～56号土坑

1　54号土坑完掘（北から）　2　55号土坑完掘（北から）
3　56号土坑断面（西から）　4　56号土坑完掘（西から）



31　57～60号土坑

1　57～59号土坑完掘（南から）　2　58号土坑完掘（北から）
3　57号土坑完掘（北から）　4　60号土坑完掘（東から）

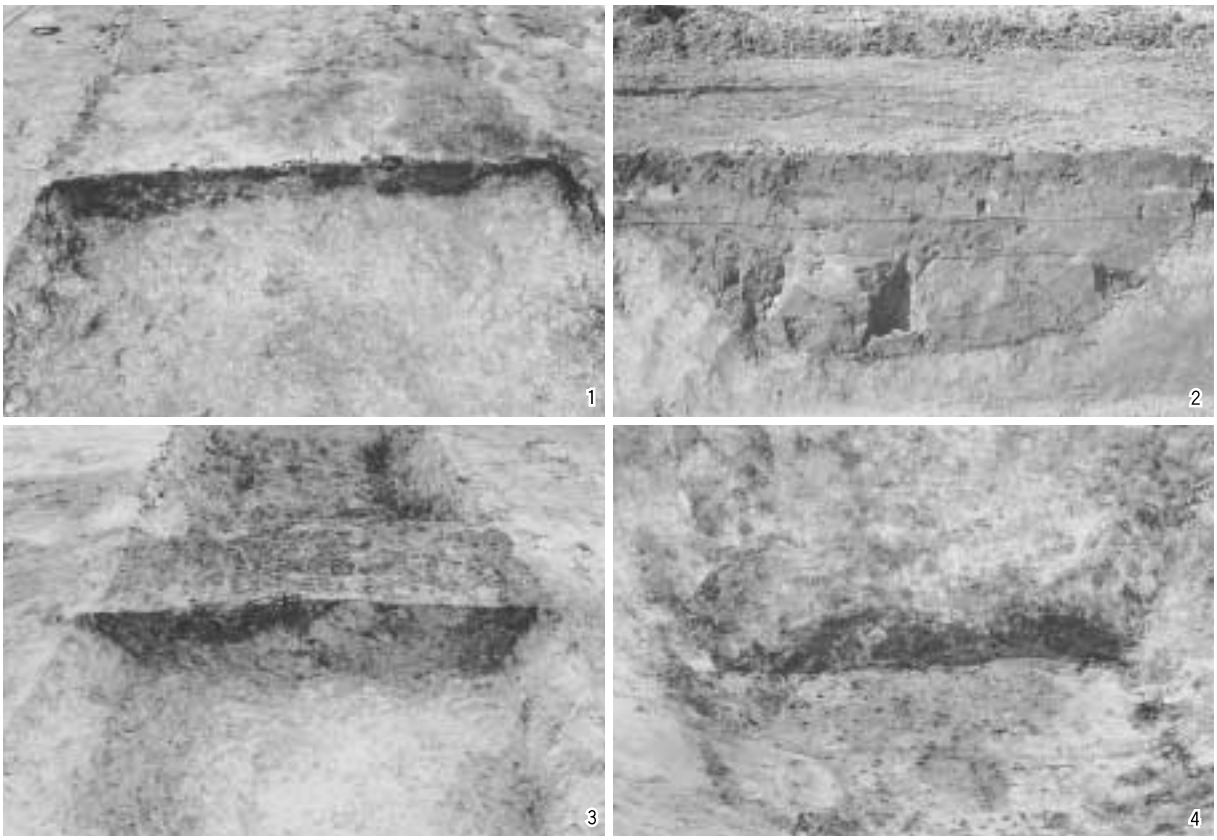


32　調査区基本土層

1　Ｉ30Ｇ土層断面（東から）　2　N30Ｇ土層断面（北西から）
3　D27Ｇ土層断面（東から）　4　Ｏ４～Ｑ３Ｇ土層断面（北から）

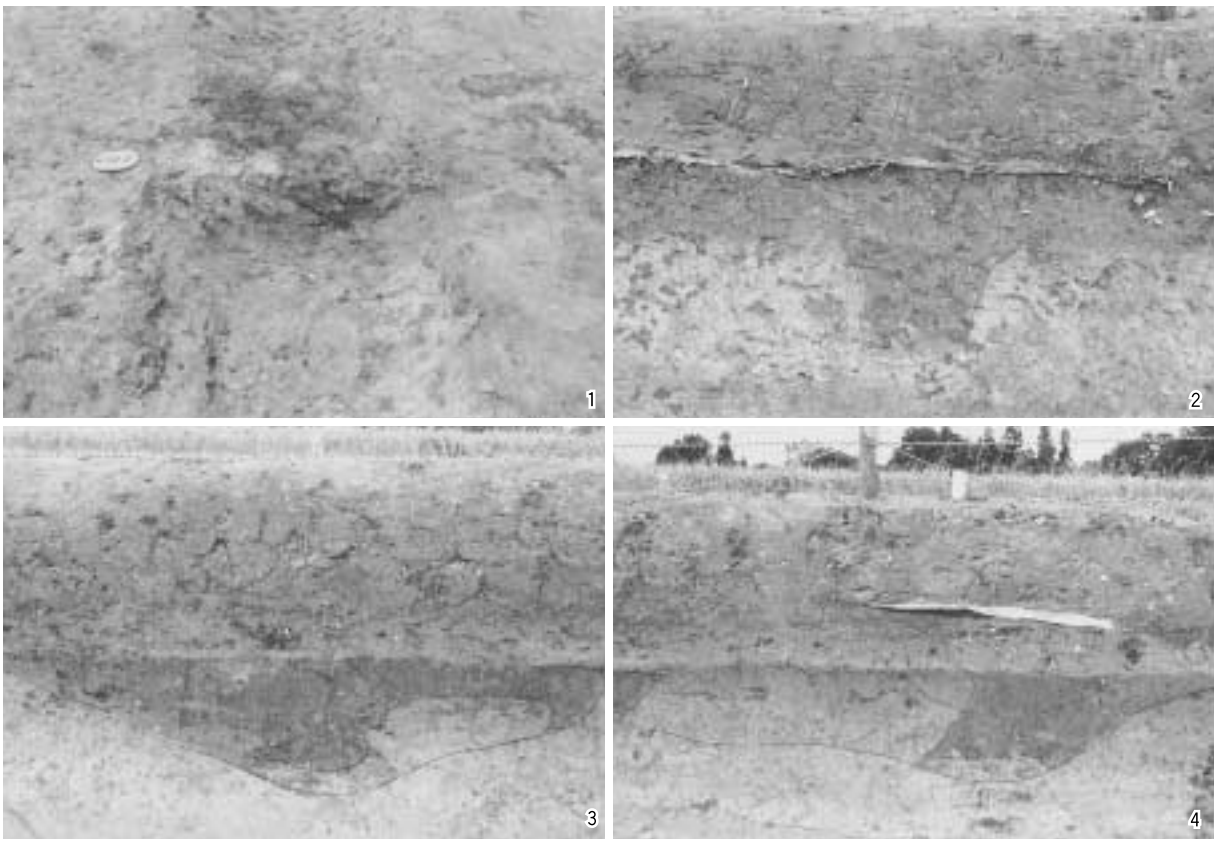
33　調査区中央南西側全景（南から）

34　調査区中央付近全景（北西から）



35　1～4号溝跡

1　1号溝跡断面（東から）　2　2号溝跡断面（東から）
3　3号溝跡断面（南から）　4　4号溝跡断面（東から）



36　5～8号溝跡

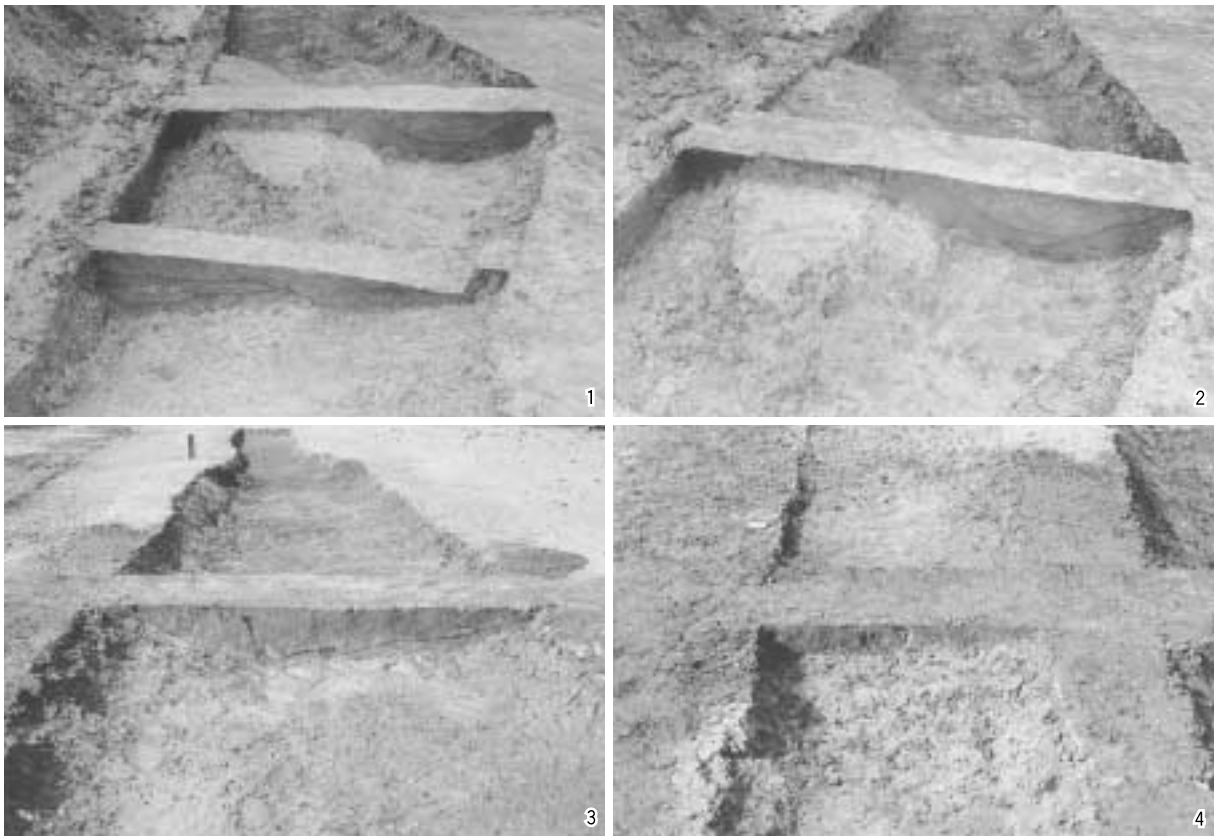
1　5号溝跡断面（東から）　2　6号溝跡断面（東から）
3　7号溝跡断面（東から）　4　8号溝跡断面（東から）

37　2・10～13・15～17号溝跡，1号掘立柱建物跡

1　2号溝跡周辺（南西から）　2　1号掘立柱建物跡周辺（南から）
3　10・11号溝跡完掘（北から）　4　12・13号溝跡完掘（南西から）
5　15・16号溝跡完掘（東から）　6　17号溝跡完掘（南から）

38　20号溝跡完掘（南西から）

39　21号溝跡調査風景（南から）



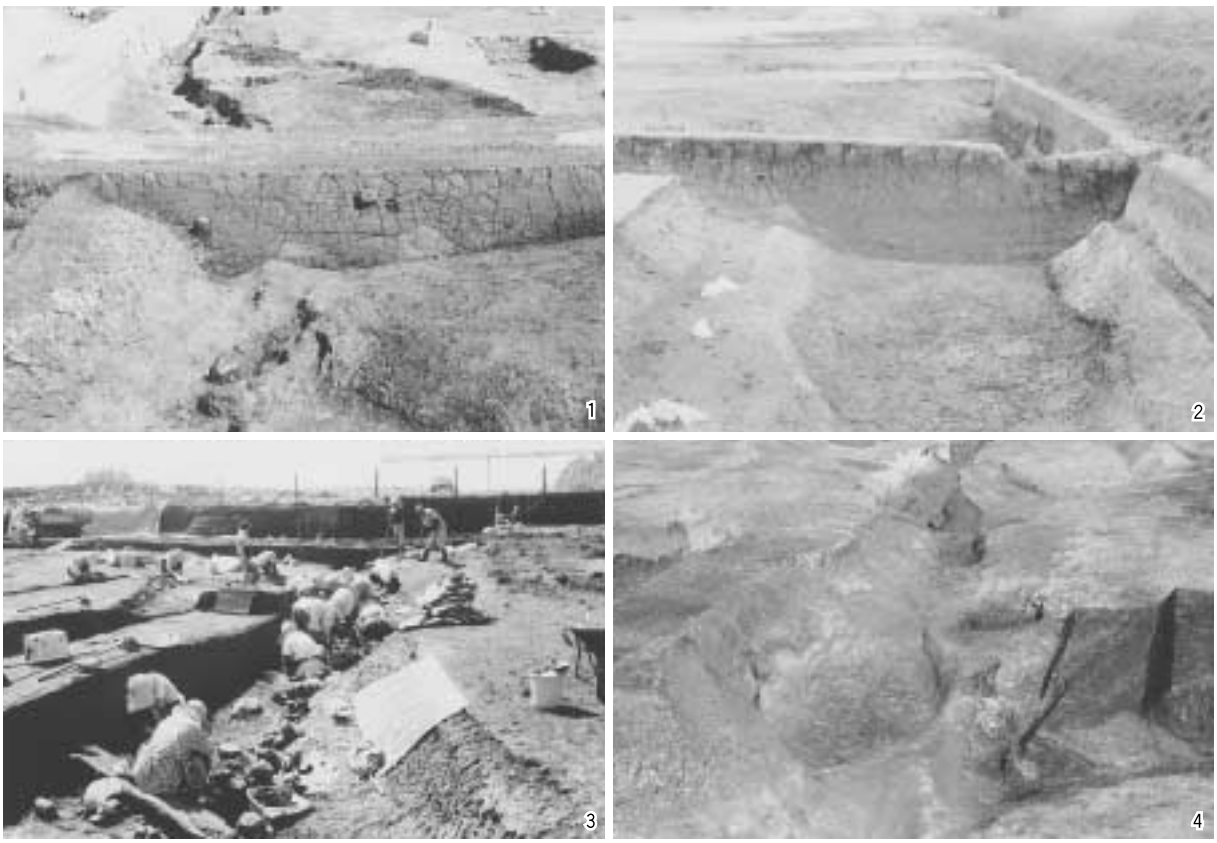
40　10～13号溝跡

1　10・11号溝跡断面（北から）　2　10・11号溝跡ＢＢ’断面（北から）
3　12号溝跡断面（南西から）　4　13号溝跡断面（南西から）

41　14・15・20号溝跡

1　14号溝跡断面（北から）　2　15号溝跡断面（西から）
3　20号溝跡断面（西から）　4　20号溝跡断面（北から）

42　21号溝跡全景（南西から）

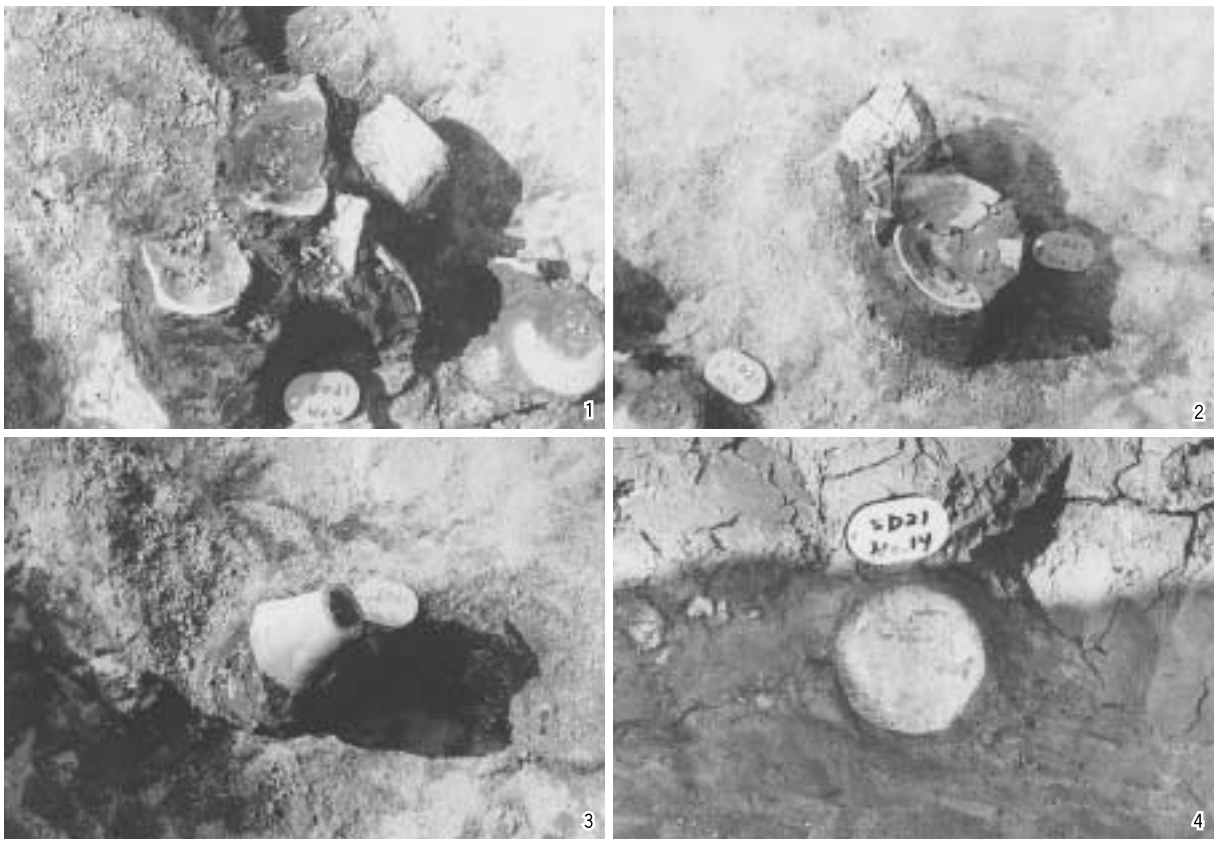


43　21・23号溝跡

1　21号溝跡断面（南西から）　2　21・23号溝跡断面（南東から）
3　21号溝跡作業風景（東から）　4　21号溝跡完掘（南から）

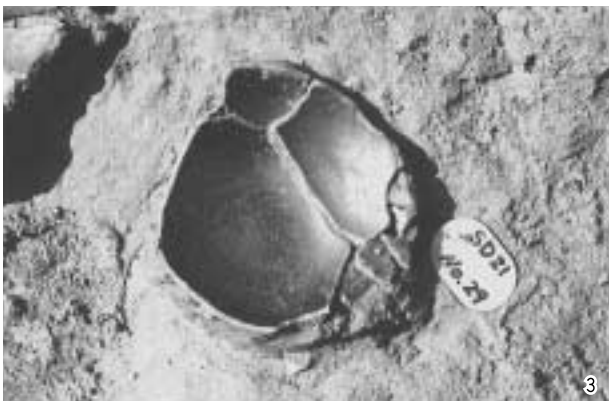
44　21号溝跡遺物出土状況（１）

1　Ｒ３・Ｓ４Ｇ周辺（北東から）　2　Ｔ６・Ｕ７Ｇ（西から）
3　Ｒ３Ｇ（南西から）　4　図58－６（南から）



45　21号溝跡遺物出土状況（２）

1　Ｑ３Ｇ（南から）　2　図58－８（南から）
3　図67－４（南から）　4　図66－６（北から）



46　21号溝跡遺物出土状況（３）

1　Ｔ６Ｇ（北から）　2　Ｔ６Ｇ（西から）
3　図61－14（東から）

47　21号溝跡遺物出土状況（４）

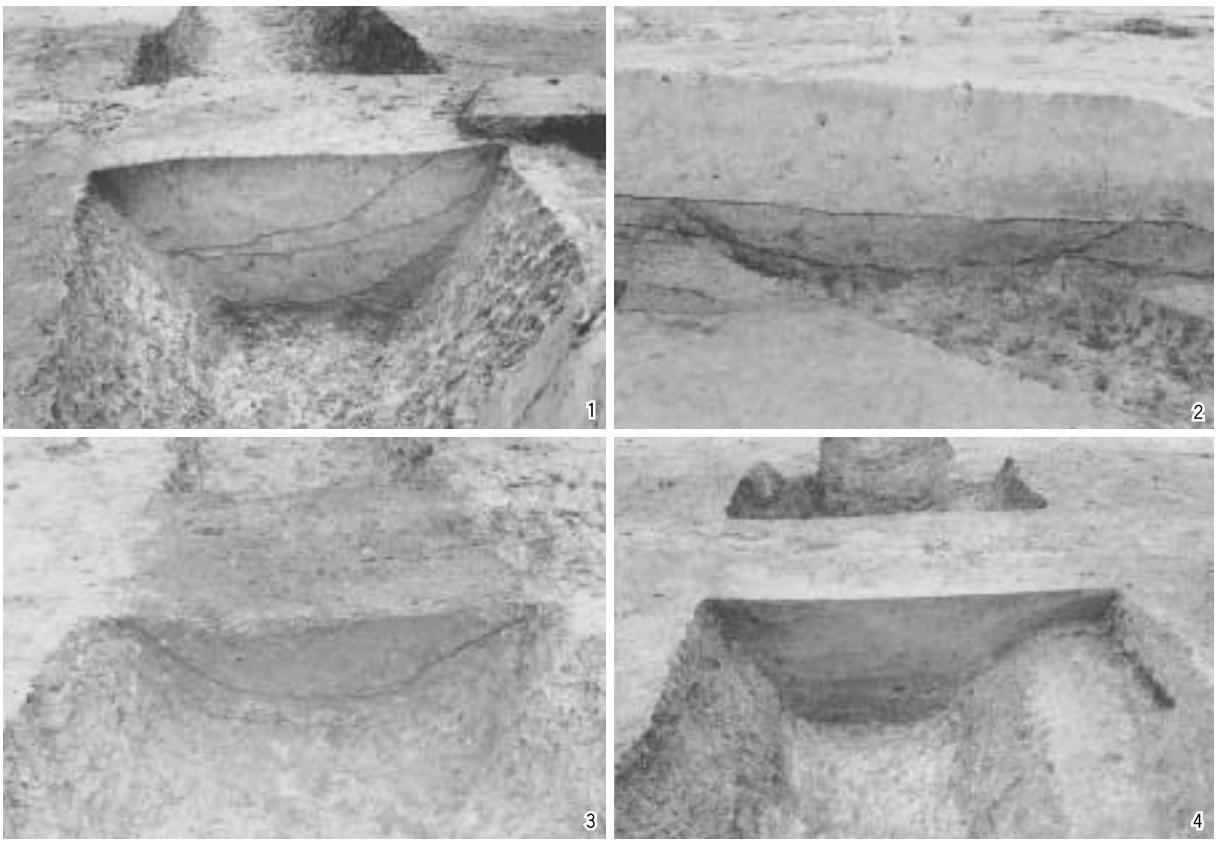
1　図61－12（東から）　2　Ｕ８Ｇ（東から）
3　Ｕ８Ｇ（東から）　4　図58 －１（東から）

48　21・23号溝跡完掘（南から）

49　21・23～25号溝跡

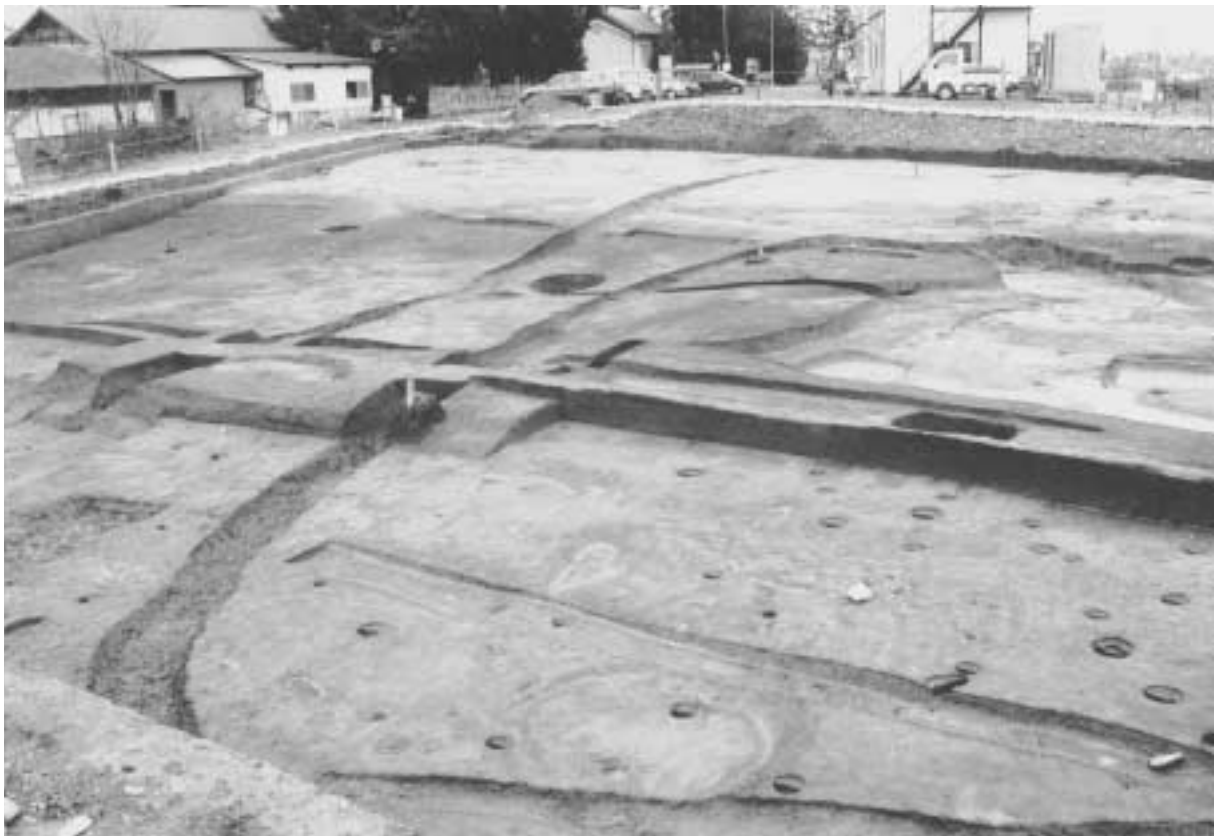
1　21・23号溝跡断面（南西から）　2　23号溝跡遺物出土状況（北東から）
3　24号溝跡断面（南から）　4　25号溝跡断面（北から）

50　26・27号溝跡完掘（南から）



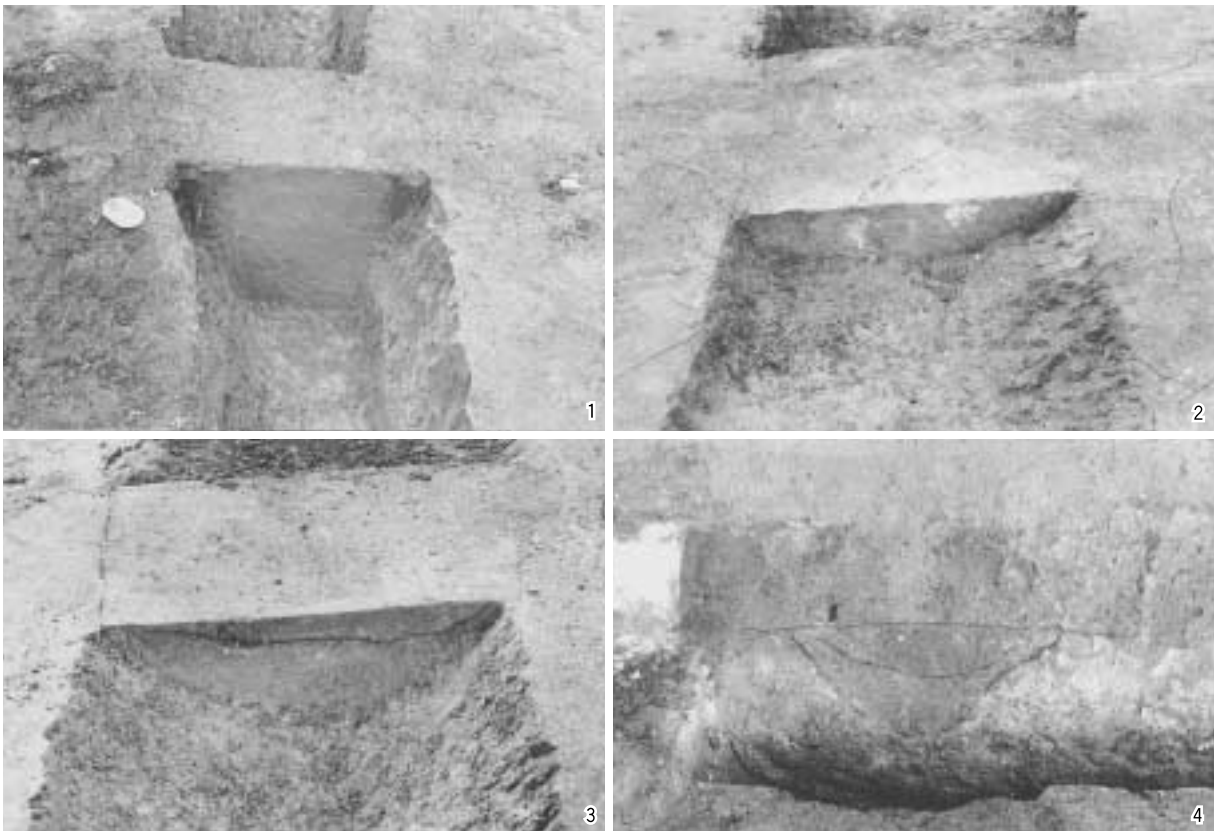
51　26・27号溝跡

1　26号溝跡ＤＤ’断面（南から）　2　26号溝跡ＥＥ’断面（北から）
3　27号溝跡ＡＡ’断面（南から）　4　27号溝跡ＣＣ’断面（南から）



52　26号溝跡周辺（南から）

53　30・35号溝跡完掘（南西から）



54　28～30号溝跡

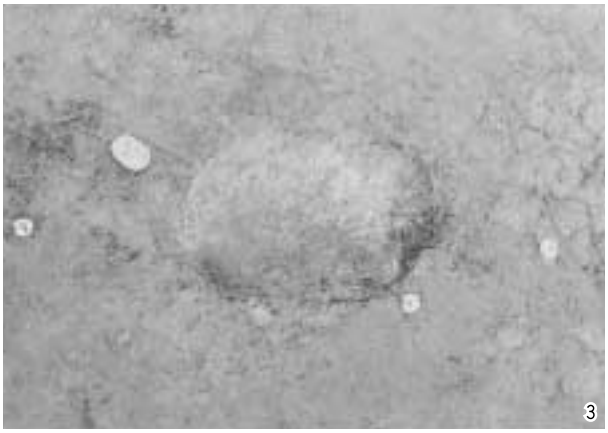
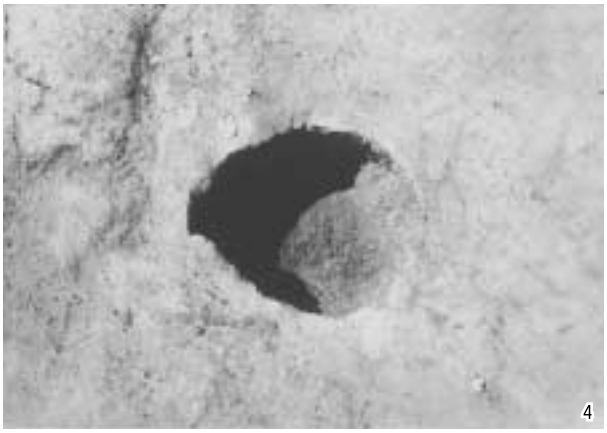
1　28号溝跡断面（西から）　2　29号溝跡ＡＡ’断面（東から）
3　30号溝跡断面（東から）　4　30号溝跡東境壁断面（西から）

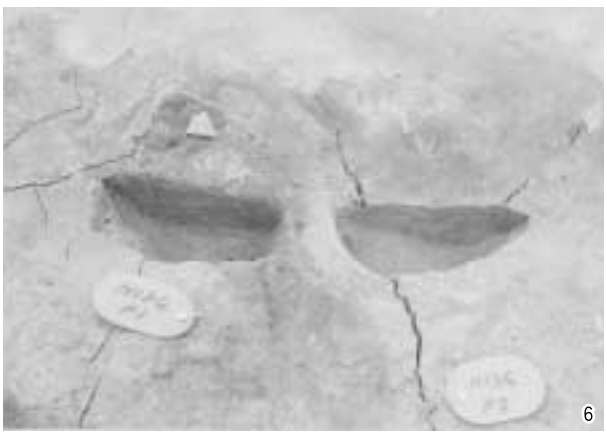
55　31・34・35号溝跡

1　31号溝跡完掘（西から）　2　31号溝跡断面（西から）
3　34号溝跡断面（南から）　4　35号溝跡断面（西から）

56　調査区北西側ピット群（地点２）（南から）

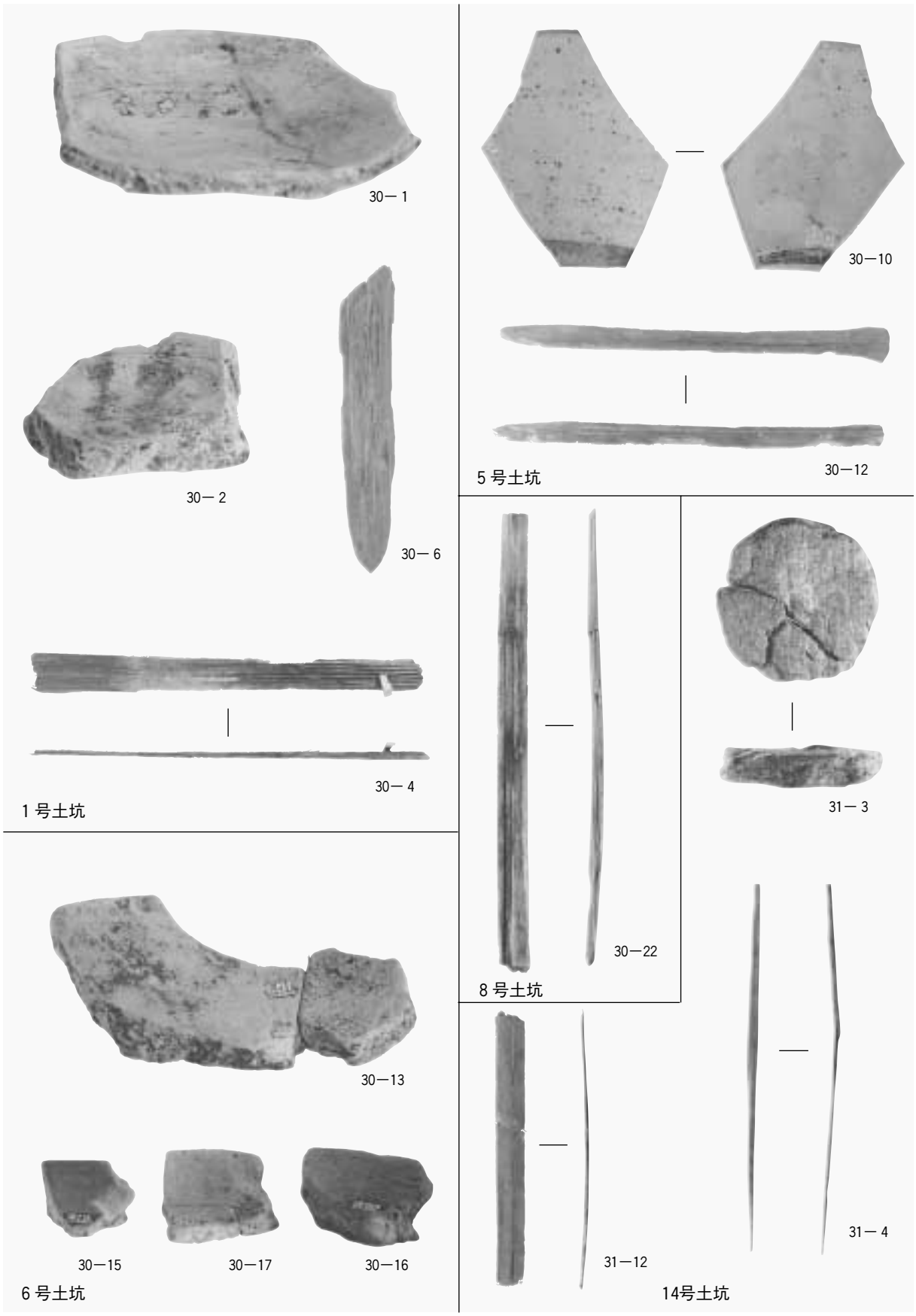
57　Ｕ５Ｇピット群（地点４）検出状況（南西から）

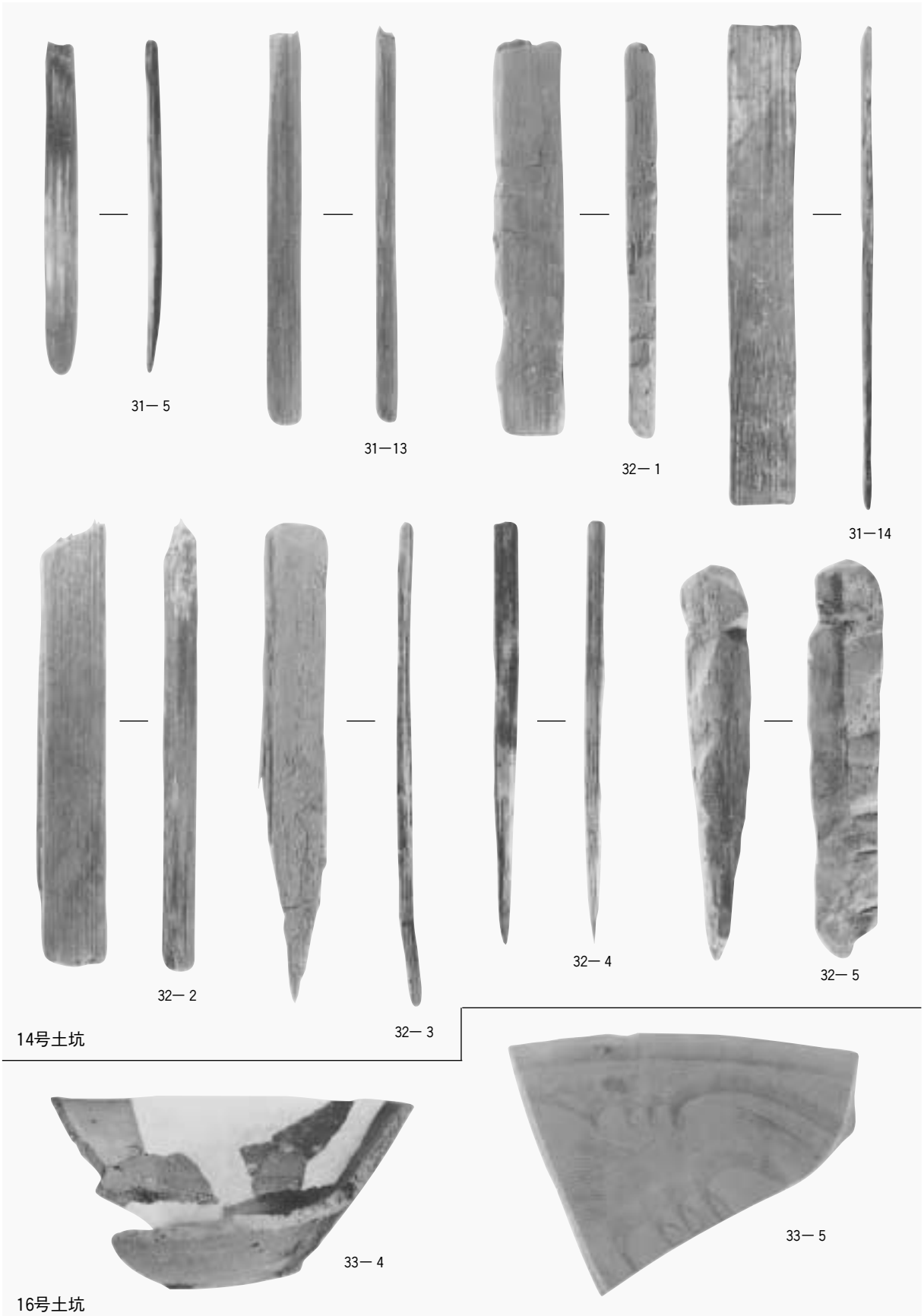


1　L21 P１完掘（南から）
2　L21 P２完掘（南から）
3　L22 P１完掘（南から）
4　M19 P１完掘（南から）
5　N12 P１断面（北から）
6　N13 P１・２断面（西から）
7　作業風景（北から）

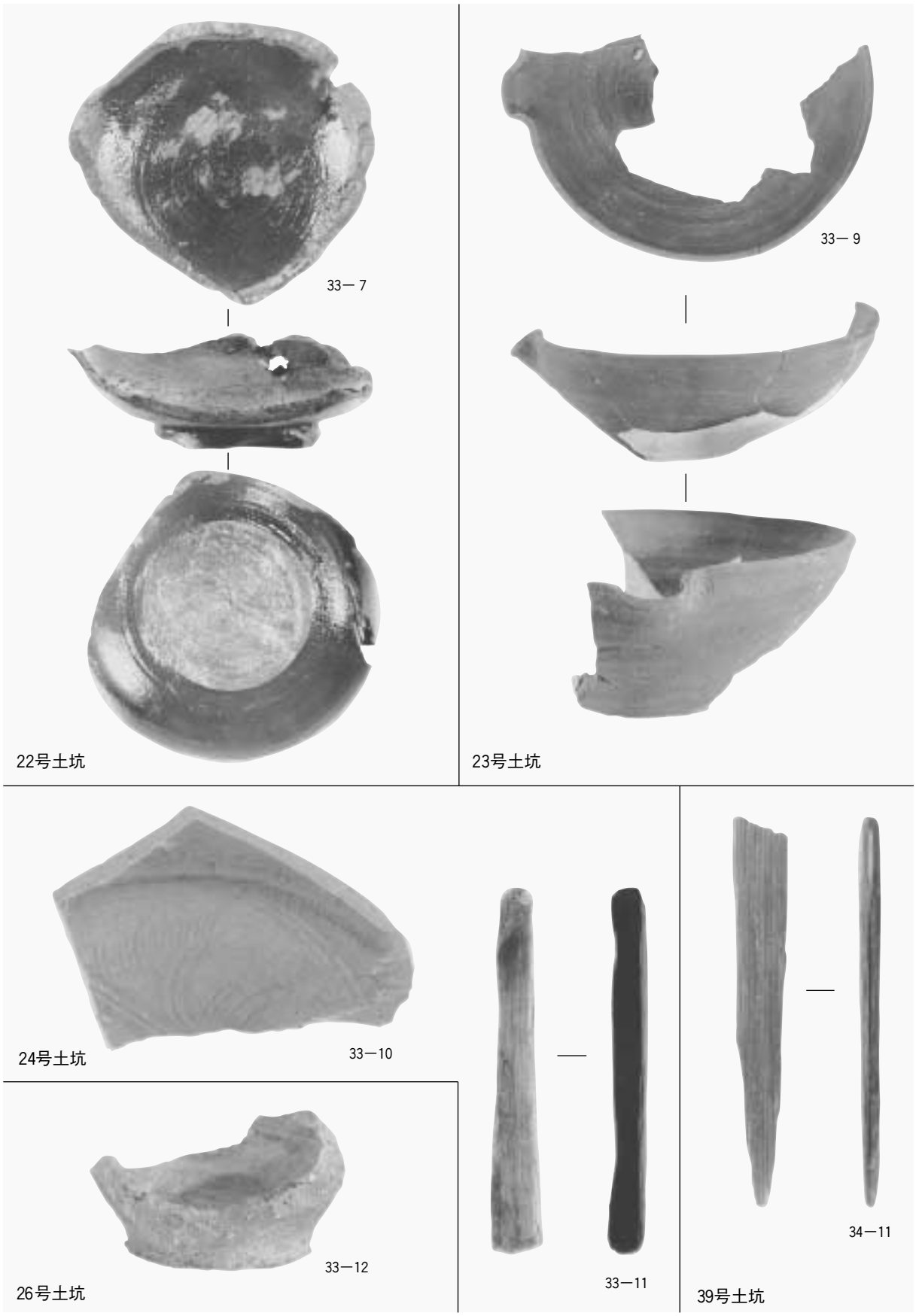
58　ピット群




59　1・5・6・8・14号土坑出土遺物

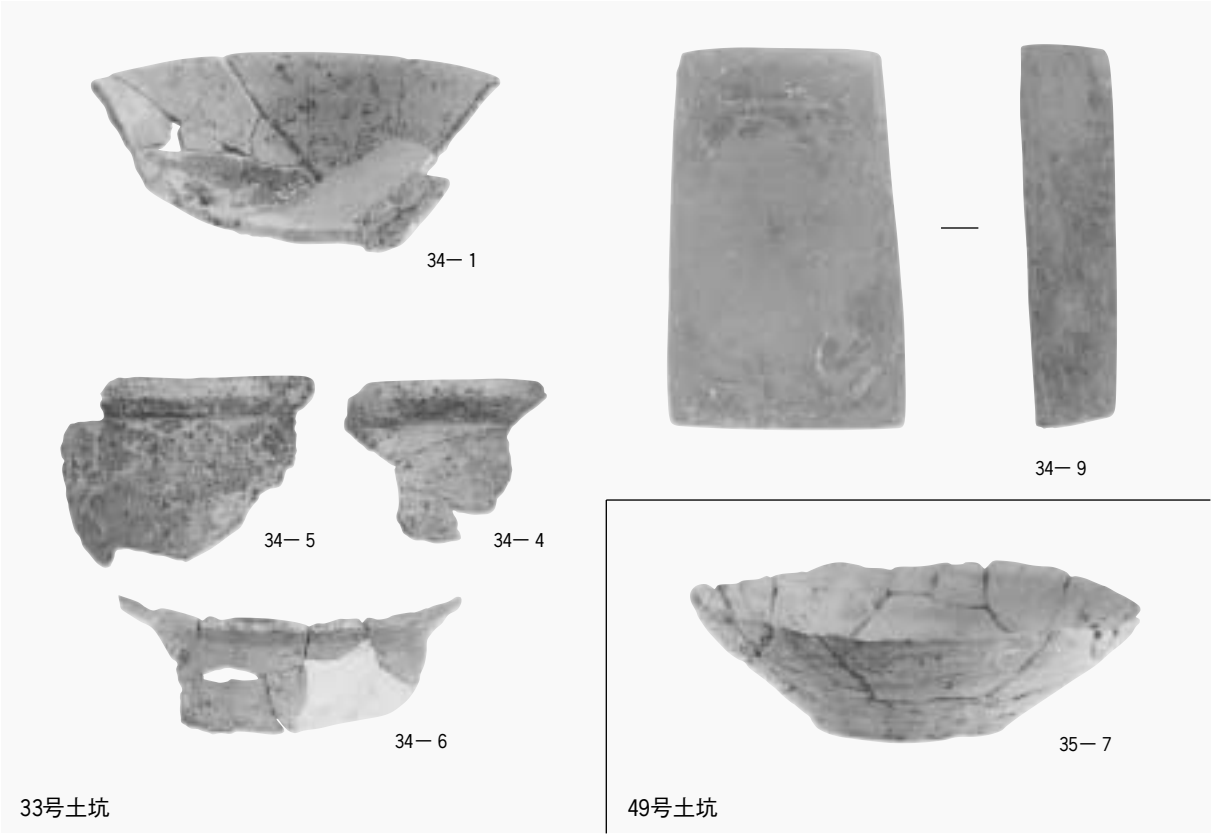



60　14・16号土坑出土遺物

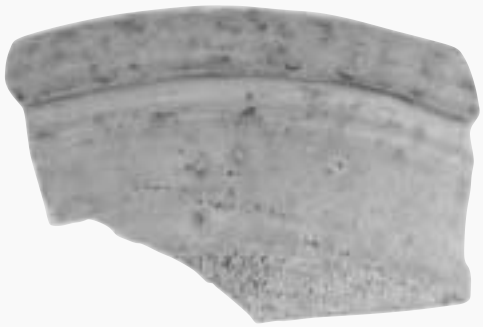



61　22～24・26・39号土坑出土遺物

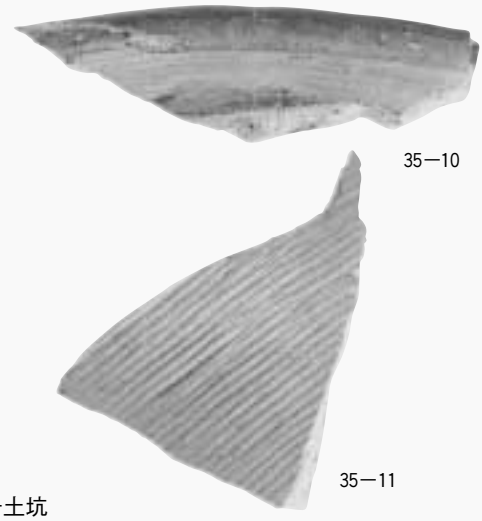
62　土坑出土貿易陶磁器



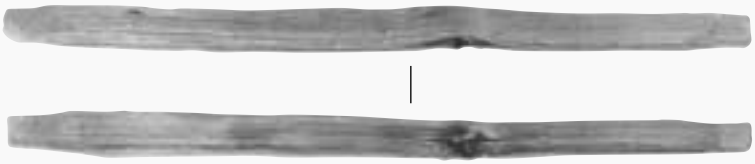

63　33・49号土坑出土遺物




43号土坑

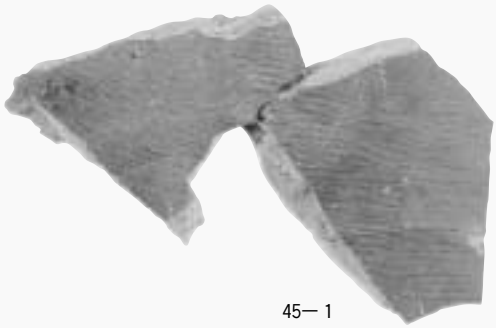



54号土坑

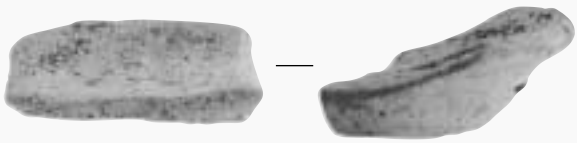


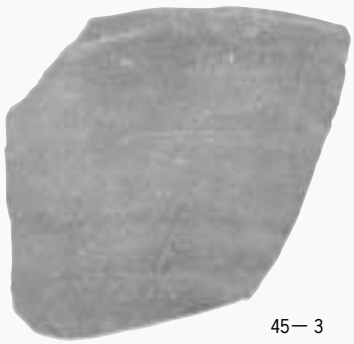

46号土坑

64　43・46・54号土坑出土遺物

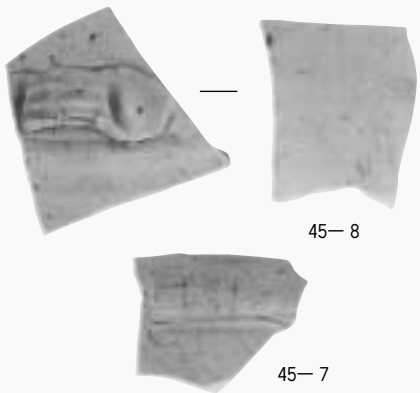



1 号溝跡



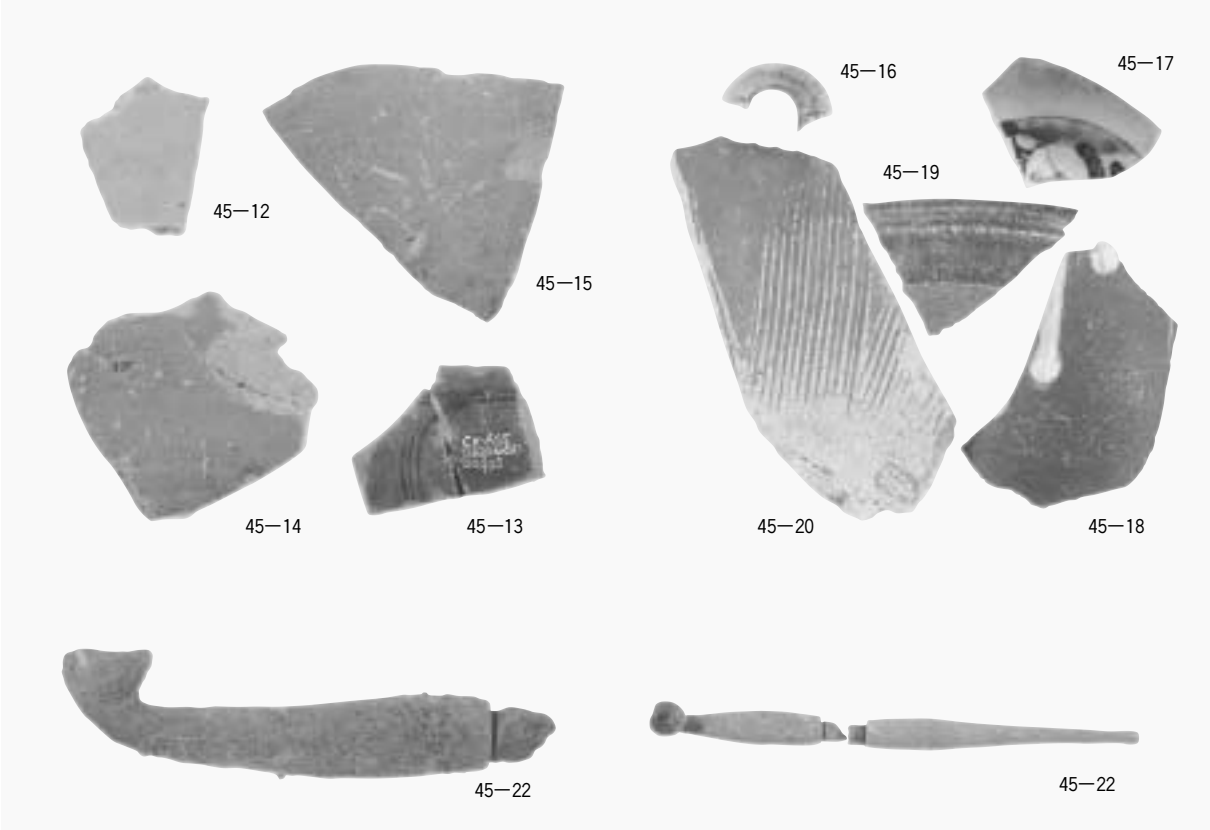




2 号溝跡

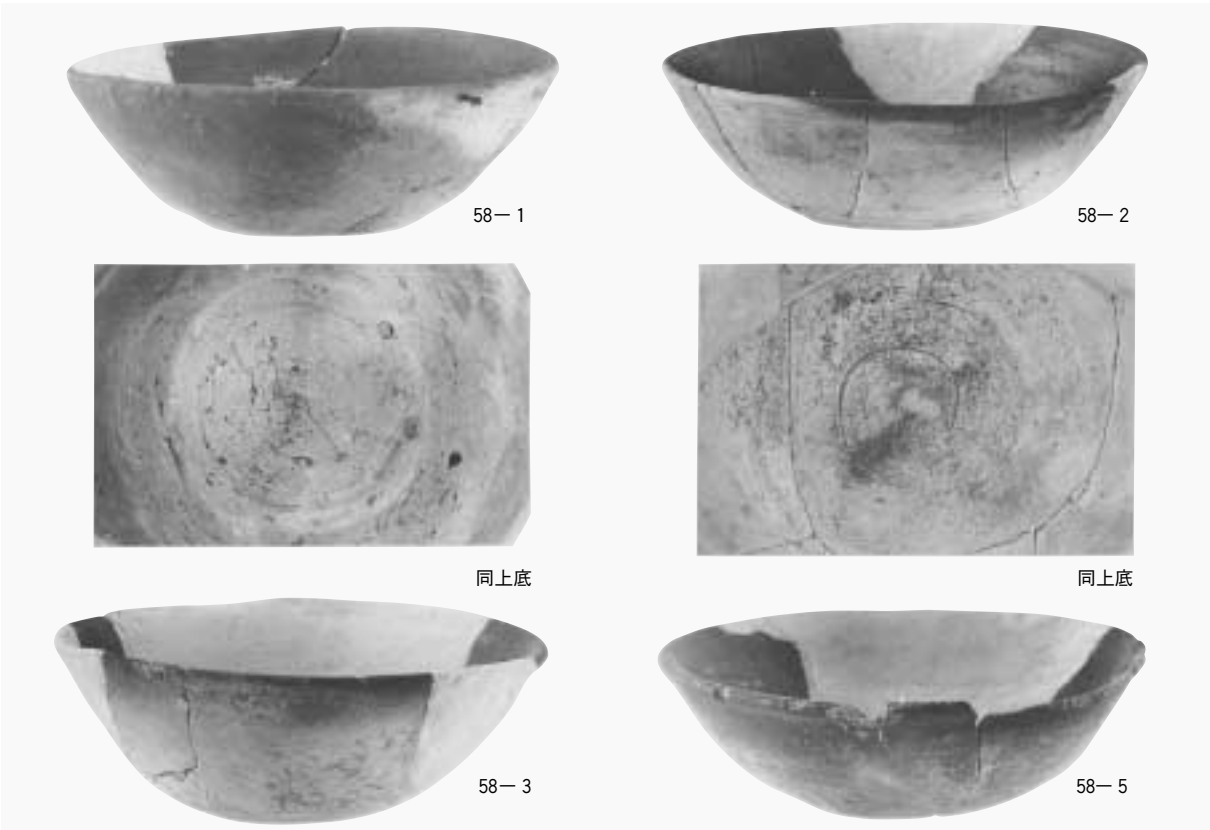



12号溝跡

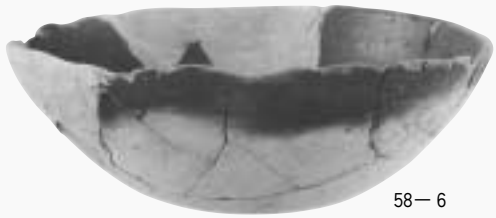
65　1・2・12号溝跡出土遺物




66　20号溝跡出土遺物




67　21号溝跡出土遺物（1）


58－6

59－1

59－2

59－3

59－4

59－5

59－6

59－8

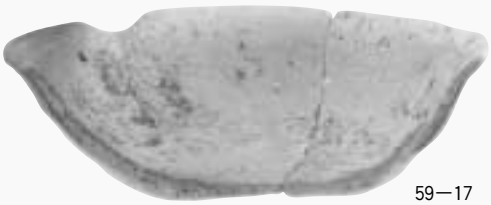
59－10

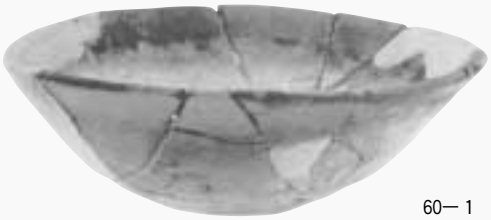
59－12

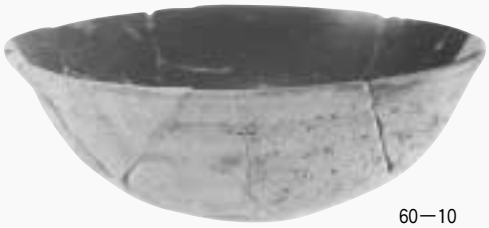
68　21号溝跡出土遺物（２）

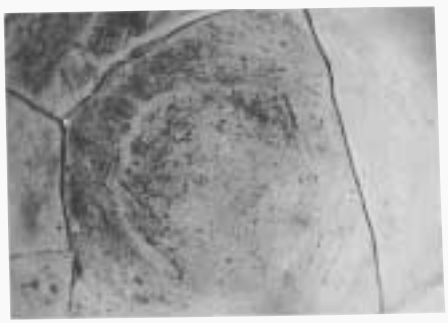
59—13

59—14

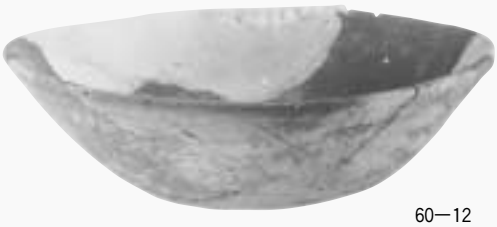

59—17


60— 1


60—10


同上底

60—11


60—12

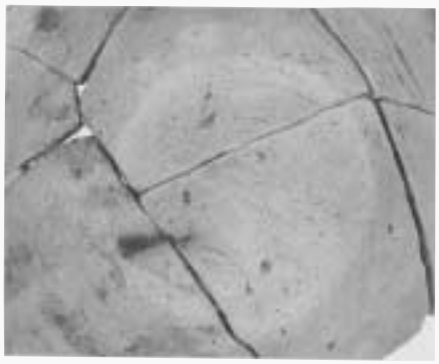
60—15

60—14

69　21号溝跡出土遺物（3）

60－13

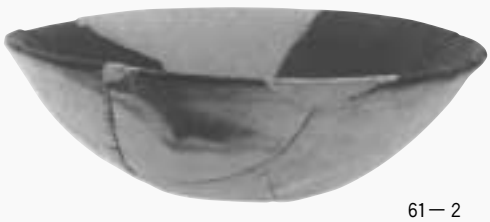
60－16



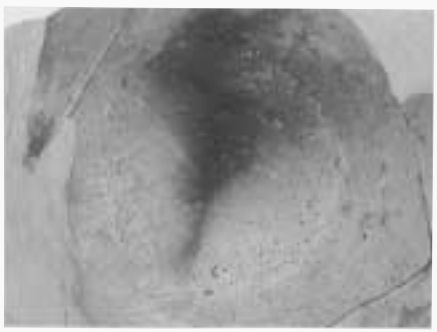
同上底

60－17

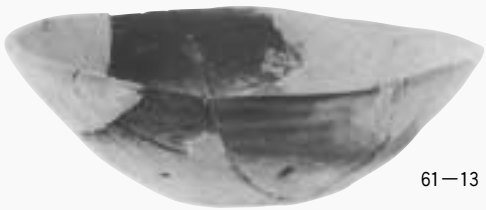
61－1



61－2

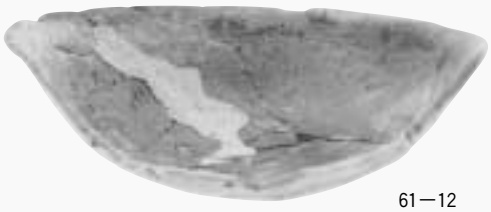


同上底



61－13

同上底



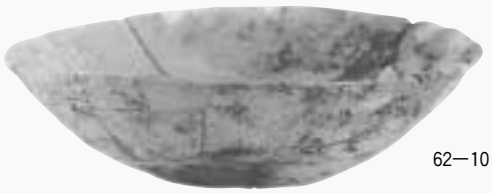
61－12

70　21号溝跡出土遺物（４）

62－4

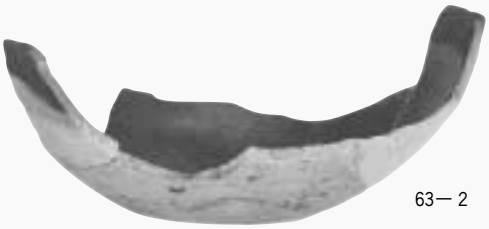
62－5

同上底

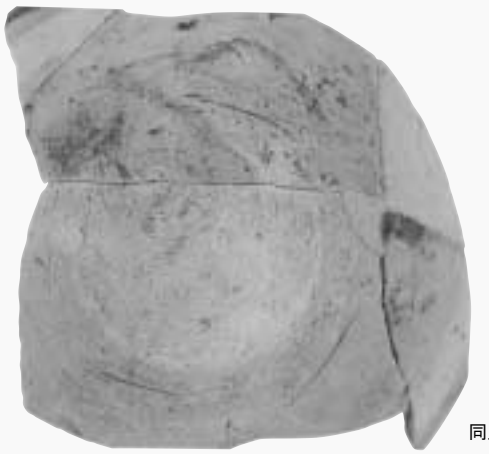

62－10

62－6

63－1

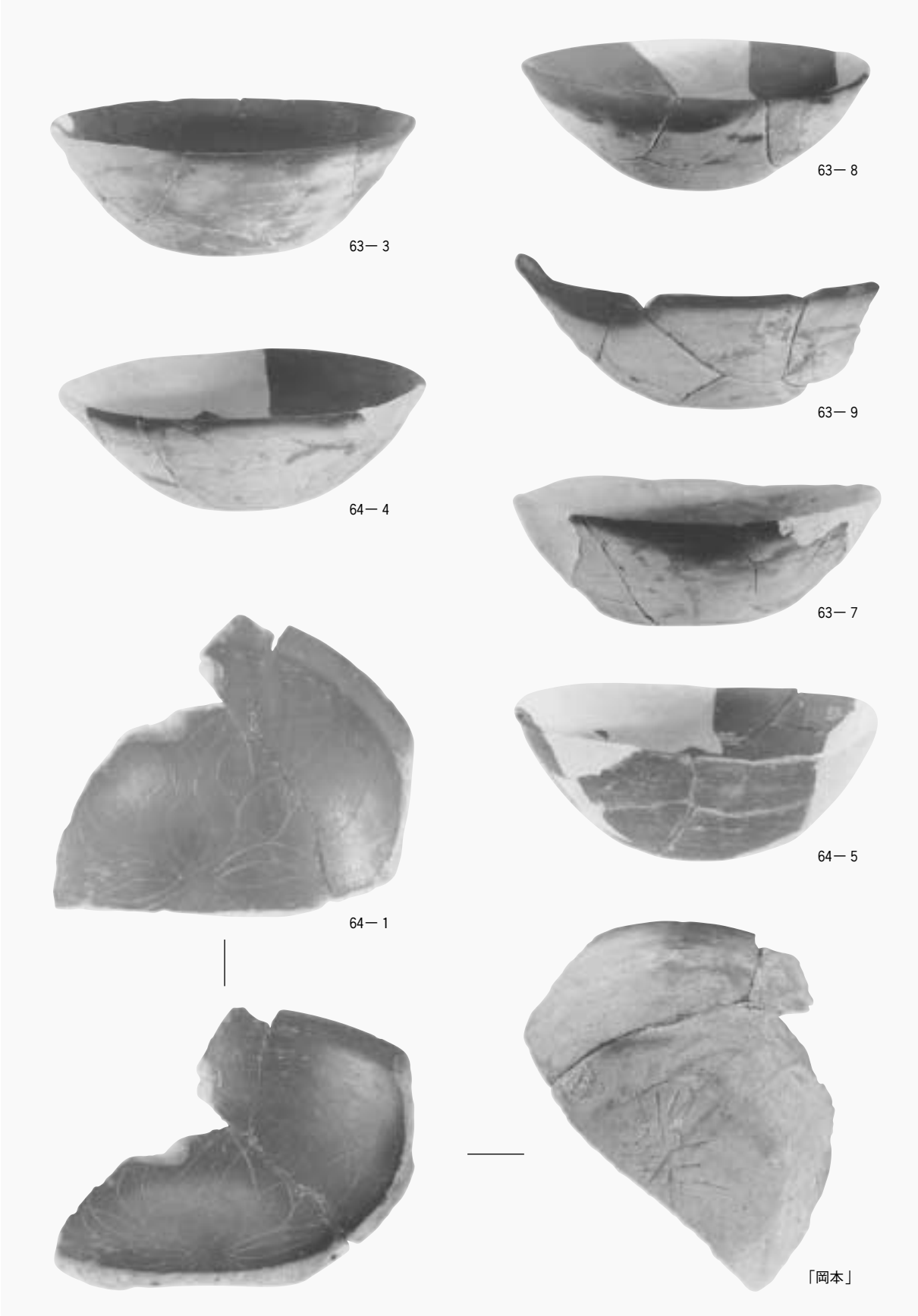

63－2

同上底


同上底

63－5

71　21号溝跡出土遺物（５）

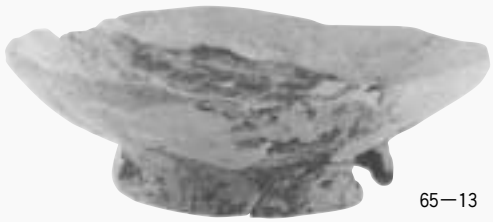



72　21号溝跡出土遺物（６）

65－1

65－2

65－4


65－13

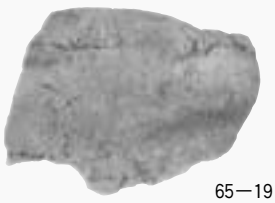
65－14

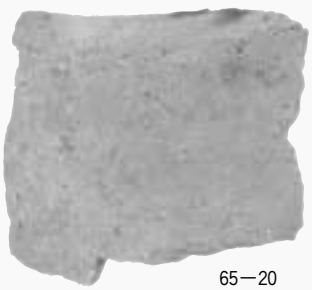
65－15

65－16

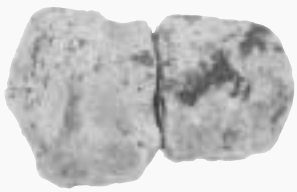
65－17

65－18

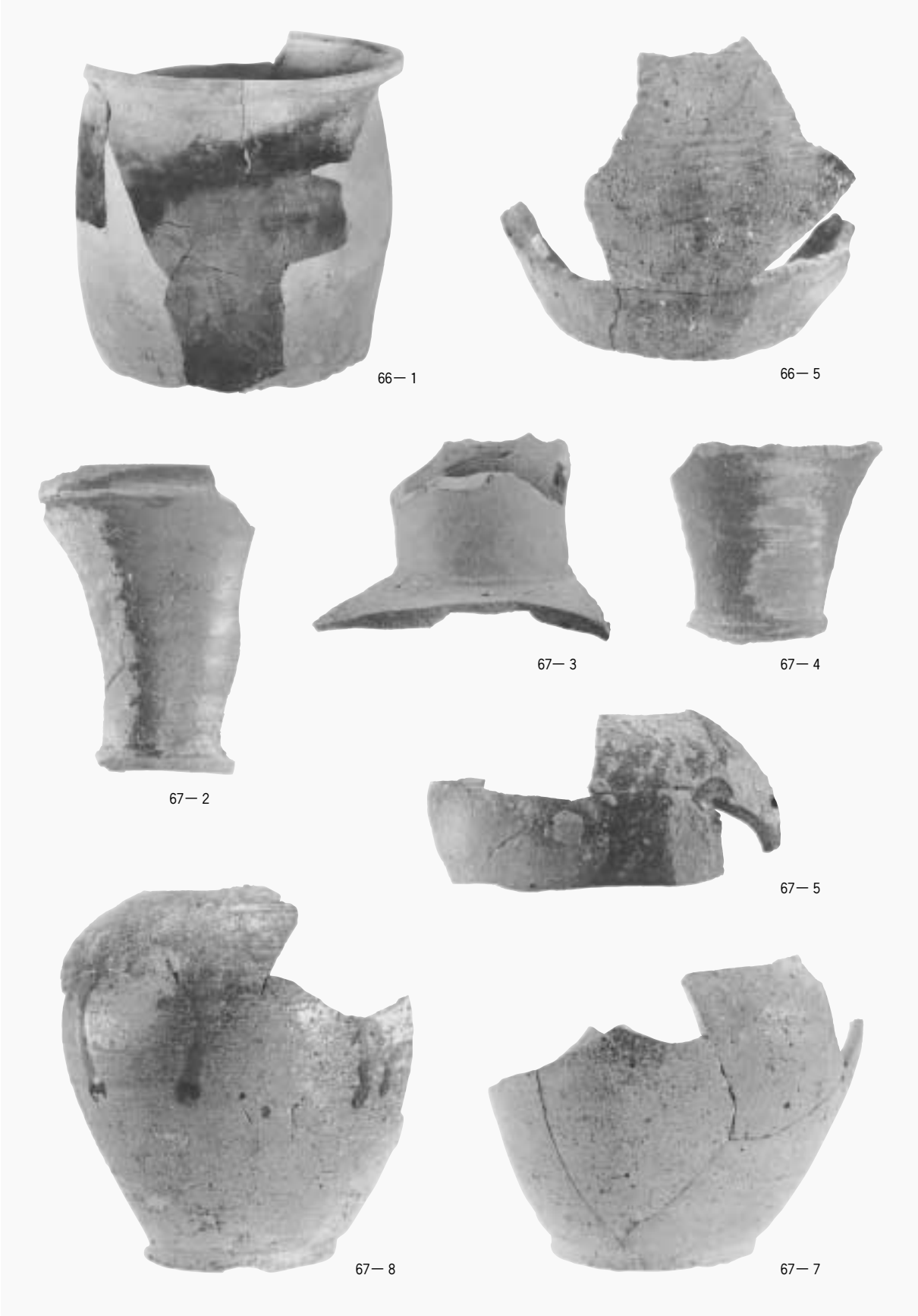

65－19


65－20

65－21


65－22

73　21号溝跡出土遺物（７）



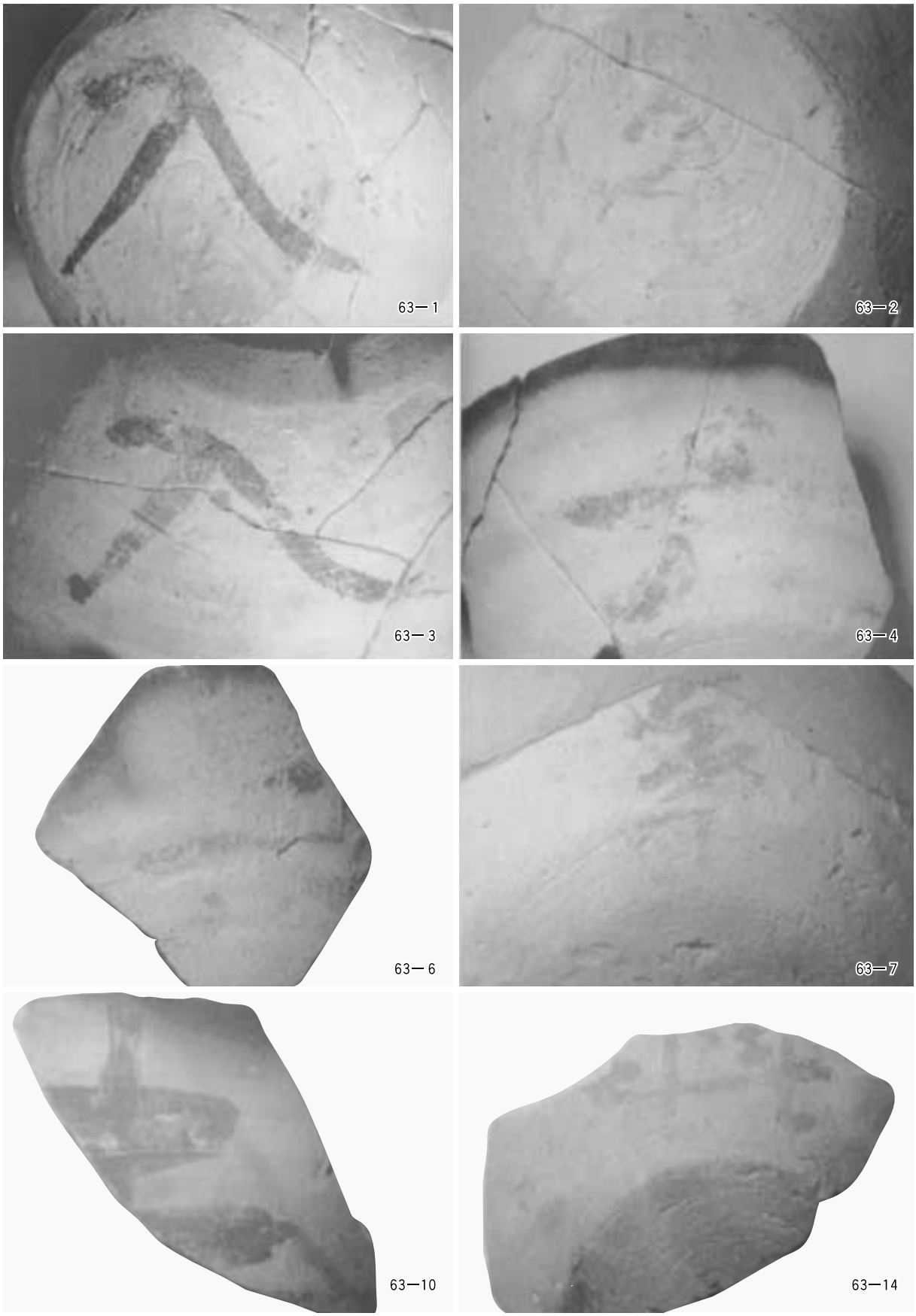

74　21号溝跡出土遺物（８）

（土師器杯）

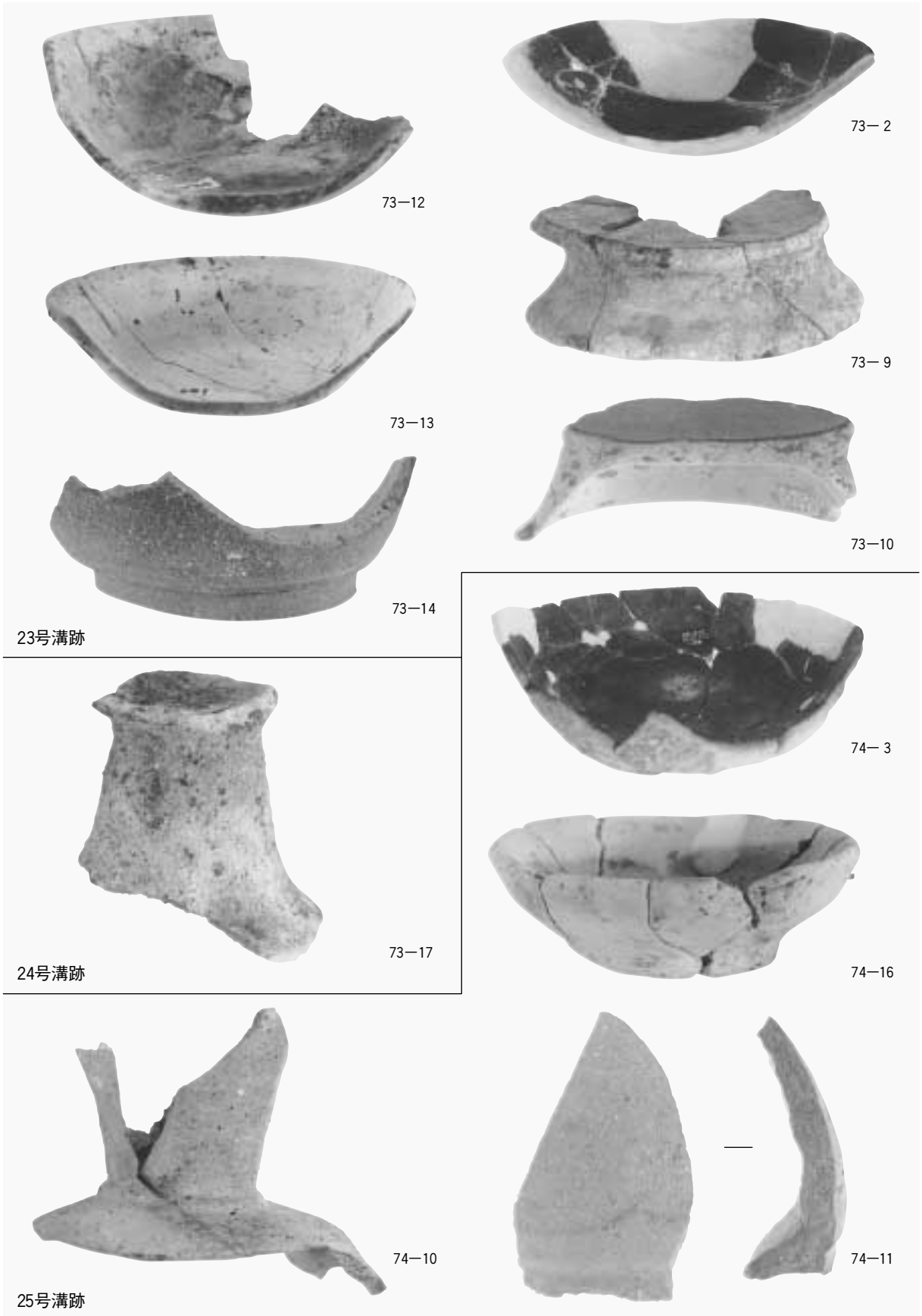
75　21号溝跡出土遺物（９）

（土師器高台付杯・甕）

76　21号溝跡出土遺物（10）



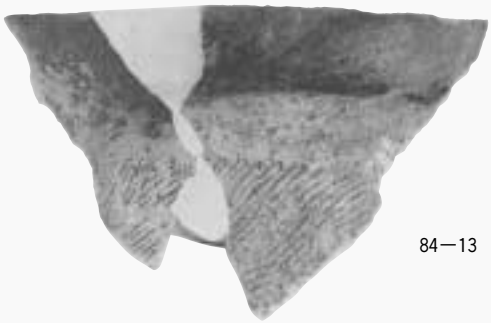

77　21号溝跡出土遺物（11）（墨書土器）




78　23～25号溝跡出土遺物

84－6

84－7


84－13

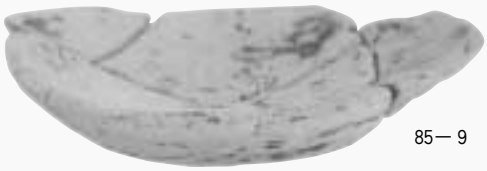
84－22

84－27

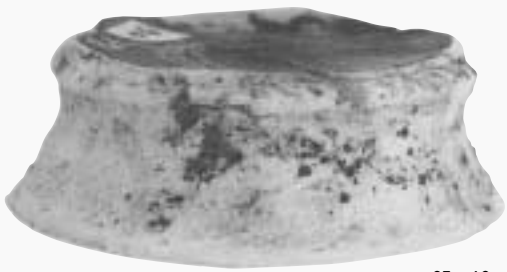
84－23

84－24

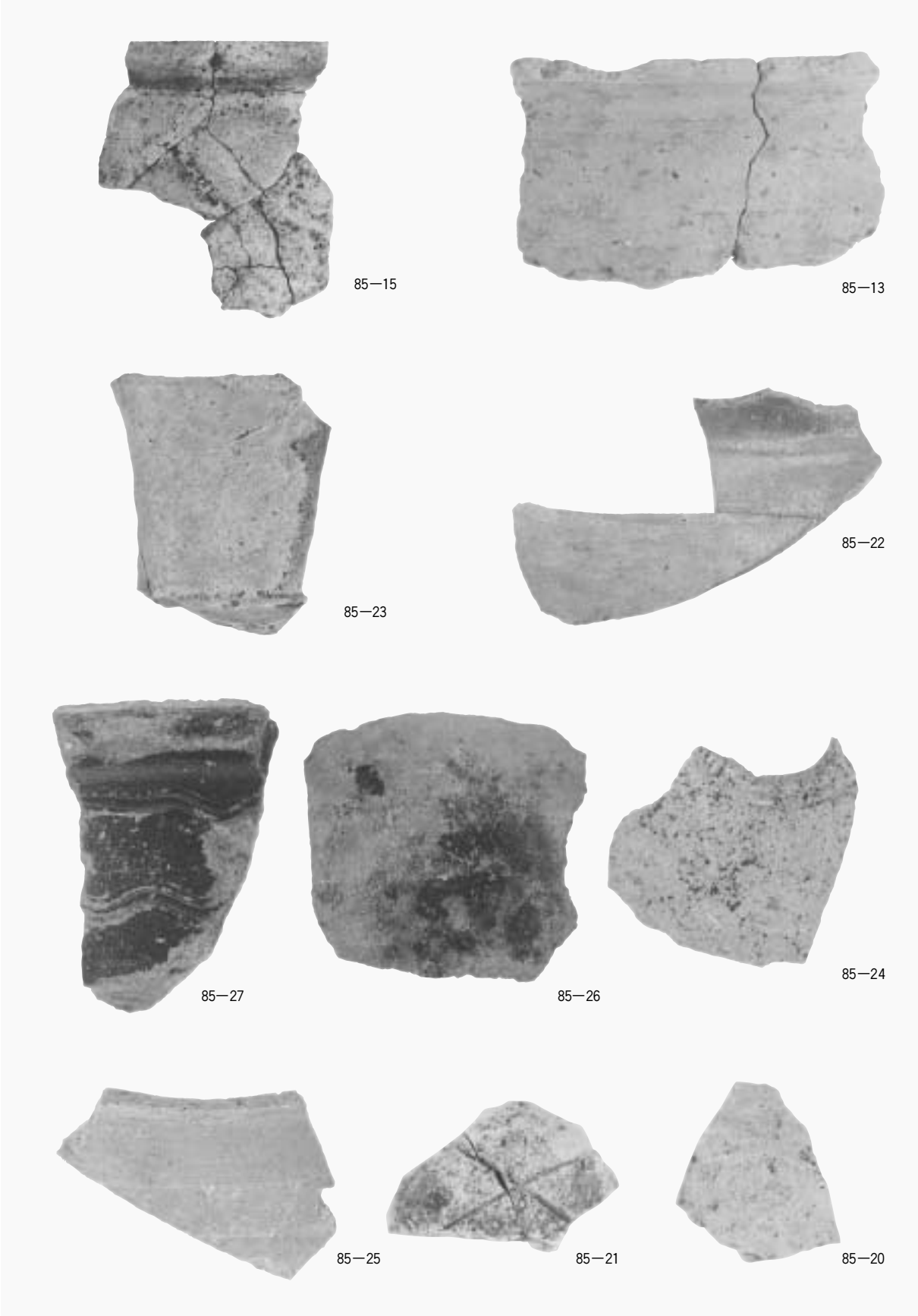
85－1


85－9

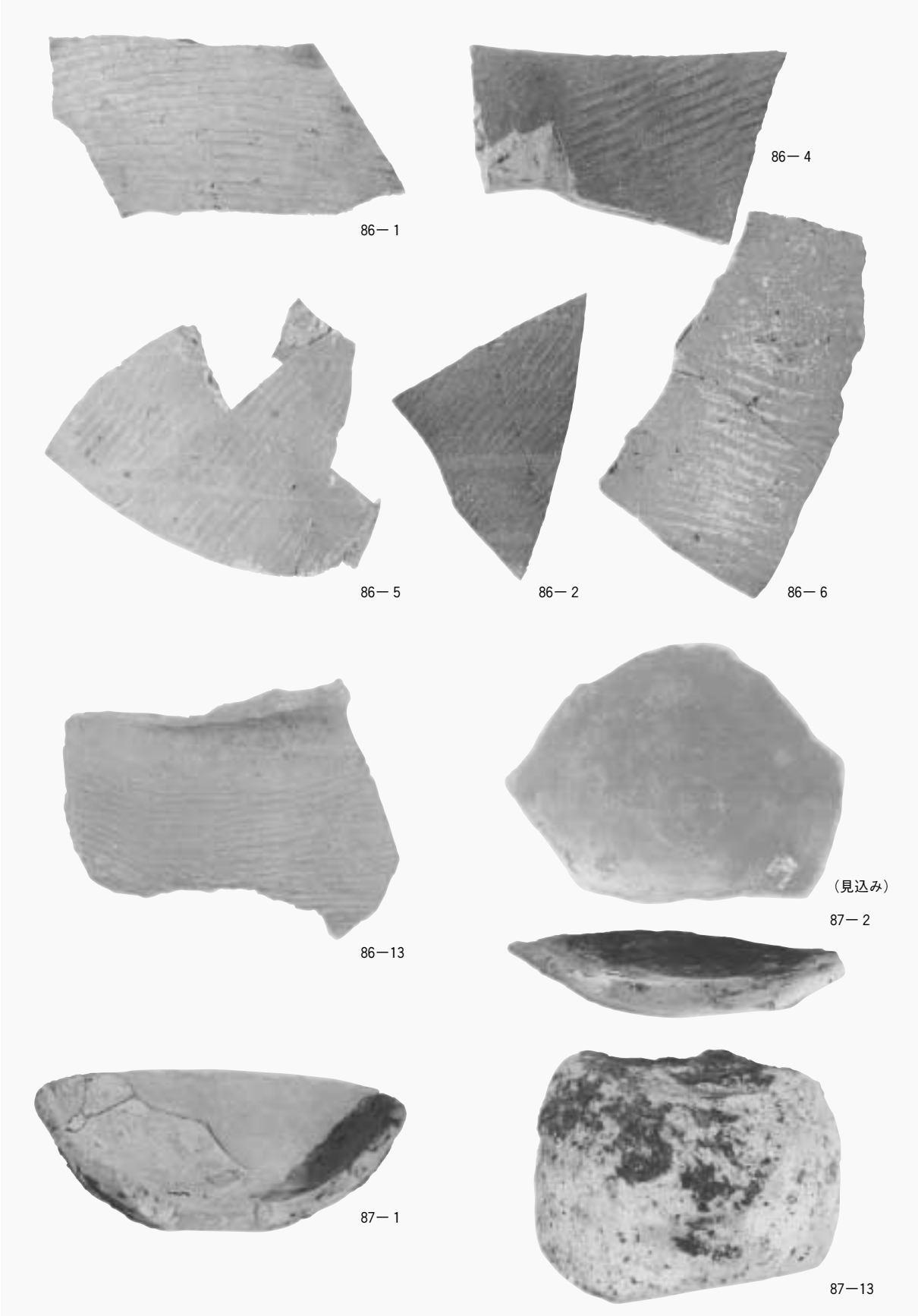
85－11


85－12

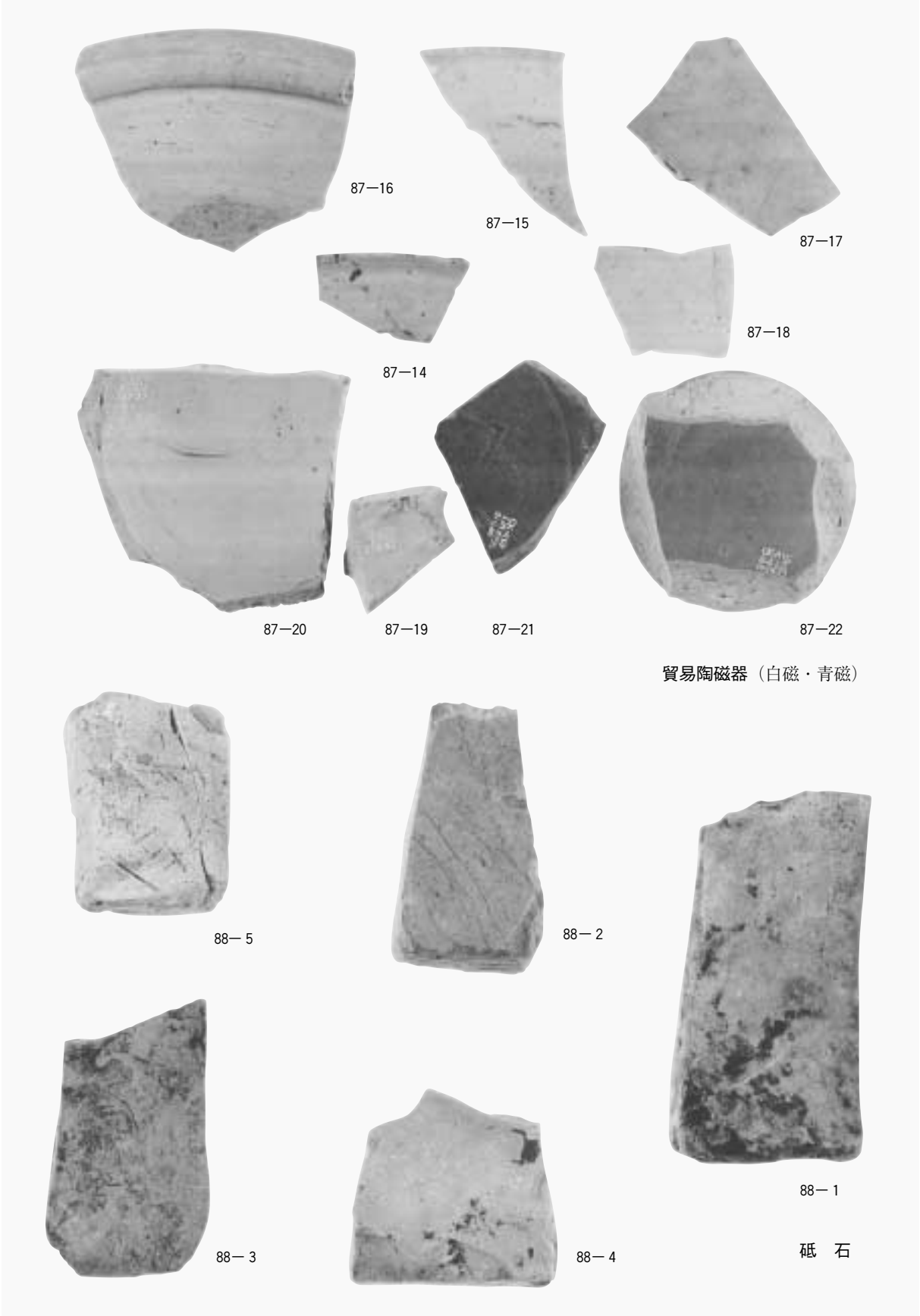
79　遺構外出土遺物（1）




80　遺構外出土遺物（２）




81　遺構外出土遺物（３）


87—16
87—15
87—17
87—18
87—14
87—20
87—19
87—21
87—22
貿易陶磁器（白磁・青磁）
88— 5
88— 2
88— 1
88— 3
88— 4
砥　石

82　遺構外出土遺物（４）

# 付　　章　－自然科学分析－

## 第１節　土壌分析

（株）　古環境研究所

### Ⅰ．はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示すことから、他の堆積物とは区別される。したがって、これらの分析を総合的に行うことで、トイレ遺構を識別することが可能である。また、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることもできる。

ここでは、荒屋敷遺跡の土坑より採取された堆積物について寄生虫卵、花粉分析、種実同定を行い、トイレ跡の可能性について検討する。

### Ⅱ．試　料

試料は、ＳＫ01の４層（試料１）、ＳＫ05の４層（試料２）、ＳＫ06の３層（試料３）、ＳＫ08の６層（試料４）、ＳＫ14の４層（試料５）と９層（試料６）、ＳＫ16の４層（試料５）、ＳＫ22の３層（試料８）、ＳＫ31の４層（試料９）、ＳＫ46の４層（試料10）の９つの土坑より採取された計10点の堆積物である。

### Ⅲ．寄生虫卵分析

１．原　理

人、動物などに寄生する寄生虫の卵殻は堆積物中に残存しやすい。人が密度高く居住すると周囲の寄生虫卵の汚染度が高くなる。また、トイレ遺構等の糞便の堆積物では寄生虫卵密度が高く、他の堆積物と識別することができトイレ遺構を確認することも可能である。さらに、寄生虫の特有の生活史や感染経路から食物を探ることもできる。なお、この分野の研究歴はまだ浅く分析例は少ない。

２．方　法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

１）サンプルを採量する。

２）脱イオン水を加え撹拌する。

３）篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。

４）25％フッ化水素酸を加え30分静置。（２・３度混和）

５）水洗後サンプルを２分する。

６）２分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。

７）両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

８）検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、２分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

３．結　果

出現した寄生虫卵は２分類群である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、出現した分類群は写真に示した。

１）ＳＫ01、４層（試料１）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

２）ＳＫ05、４層（試料２）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

３）ＳＫ06、３層（試料３）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

４）ＳＫ08、６層（試料４）

回虫卵が検出されたが明らかな消化残渣は検出されなかった。

５）ＳＫ14、４層（試料５）、９層（試料６）

４層（試料５）は鞭虫卵が検出されたが明らかな消化残渣は検出されなかった。９層（試料６）は寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

６）ＳＫ16、４層（試料５）

回虫卵が検出されたが明らかな消化残渣は検出されなかった。

７）ＳＫ22、３層（試料８）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

８）ＳＫ31、４層（試料９）

回虫卵が検出されたが明らかな消化残渣は検出されなかった。

９）ＳＫ46、４層（試料10）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

## Ⅳ．花粉分析

### １．原　理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

### ２．方　法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

１）５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

４）水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す。

５）再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、２分間）の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

### ３．結　果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉25、シダ植物胞子２形態の計55である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図１に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

トウヒ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ニワトコ属－ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、ノブドウ、ヒシ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オオバコ属、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

１）ＳＫ01、４層（試料１）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、とくにイネ属型を含むイネ科が優占する。次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、コナラ属コナラ亜属、ニワトコ属－ガマズミ属などが低率に出現する。

２）ＳＫ05、４層（試料２）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。次いでヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、コナラ属コナラ亜属、クリなどが低率に出現する。

３）ＳＫ06、３層（試料３）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科およびヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科、アカザ科－ヒユ科、ソバ属、な

どが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

４）ＳＫ08、６層（試料４）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。次いでヨモギ属、アカザ科－ヒユ科が多く、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、コナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

５）ＳＫ14、４層（試料５）、９層（試料６）

４層（試料５）は樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、クワ科－イラクサ科およびイネ属型を含むイネ科が優占する。次いでヨモギ属、アカザ科－ヒユ科が多く、カヤツリグサ科、オモダカ属、サジオモダカ属、ミズアオイ属などが出現する。樹木花粉は少なく、スギなどが低率に出現する。

９層（試料６）は、樹木花粉の占める割合が高い。草本花粉はイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属、アブラナ科、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などが出現する。樹木花粉はコナラ属コナラ亜属、ニワトコ属－ガマズミ属が多く検出される。他にはスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、クリ、ニレ属－ケヤキ、カエデ属などが出現する。

６）ＳＫ16、４層（試料５）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、ヨモギ属およびイネ属型を含むイネ科が優占する。また、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、クワ科－イラクサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギがやや多くコナラ属コナラ亜属などが低率に出現する。

７）ＳＫ22、３層（試料８）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科が優占する。次いでヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、クワ科－イラクサ科、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、クルミ属、ハンノキ属が低率に出現する。

８）ＳＫ31、４層（試料９）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、クワ科－イラクサ科が多い。次にヨモギ属、イネ属型を含むイネ科が多い。他にアカザ科－ヒユ科、カヤツリグサ科、アブラナ科などが出現する。樹木花粉は少なく、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキなどが低率に出現する。

９）ＳＫ46、４層（試料10）

樹木花粉よりも草本花粉の占める割合が非常に高く、イネ属型を含むイネ科およびヨモギ属が多く、カヤツリグサ科、アブラナ科、アカザ科－ヒユ科などが出現する。樹木花粉は少なく、ハンノキ属、スギ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ、トチノキ、ニワトコ属－ガマズミ属などが低率に出現する。

## Ⅴ．種実同定

１．原　理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

２．方　法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

１）試料20㎤に水を加え放置し、泥化を行う。

２）攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25㎜の篩で水洗選別を行う。

３）残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

３．結　果

（１）分類群

樹木１、草本19の計20が同定された。学名、和名および粒数を表３に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

クワ属　*Morus*　種子　クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　穎

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

イネ科　*Gramineae*　穎

灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。

ウキヤガラ　*Scirpus fluviatilis* A.Gray　果実　カヤツリグサ

科

黒灰色で倒卵形を呈す。表面は粗く、断面は三角形である。

ホタルイ属　*Scirpus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に４～８本の針状の付属物を持つ。

カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

カヤツリグサ科　Cyperaceae　果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は三角形である。

イボクサ　*Aneilema Keisak* Hassk.　種子　ツユクサ科

茶褐色～黒褐色で楕円形を呈す。腹部に一文字状のへそがあり、側面にくぼんだ発芽孔がある。

イグサ科　Juncaceae　種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色。表面には網目模様がある。

アサ　*Cannabis sativa* L.　種子　クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。

タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は扁平で、表面には光沢がある。

アカザ属　*Chenopodium*　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属　*Amaranthus*　種子　ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。

アカザ属－ヒユ属　*Chenopodium-Amaranthus*　種子

アカザ科－ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈する。へそ部分が欠けているためハイフン（-）で結んで示した。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属－キジムシロ属

*Duchesnea-Fragaria-Potentill*　種子　バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

スミレ属　*Viola*　果実　スミレ科

下端が尖る倒卵形を呈す。基部の側面にへそがある。

アブラナ科　Cruciferae　種子

茶褐色で楕円形を呈し、下端にへそがある。表面には長方形の網目がある。

ヤブジラミ属　*Torilis*　果実　セリ科

狭卵形を呈し、先端が尖る。背面には隆条が並び、それらの間と両側に鉤状の剛毛が密集している。

ナス科　Solanaceae　種子

黄褐色で円形を呈す。表面にはやや大きい網目模様がある。

（２）種実群集の特徴

１）ＳＫ01、４層（試料１）

ホタルイ属が１個検出された。

２）ＳＫ05、４層（試料２）

アカザ属－ヒユ属、スミレ属、ヤブジラミ属が検出された。

３）ＳＫ06、３層（試料３）

タデ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、アカザ属－ヒユ属が検出された。

４）ＳＫ08、６層（試料４）

アカザ属およびイボクサが検出された。

５）ＳＫ14、４層（試料５）、９層（試料６）

４層（試料５）は、イグサ科がやや多く検出され、他にアカザ属－ヒユ属、アサ、アカザ属、ナス科、ホタルイ属、ヒユ属、イネの穎（破片）が少量検出された。

９層（試料６）は、イネ科の穎、ヒユ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属－キジムシロ属が検出された。

６）ＳＫ16、４層（試料５）

クワ属、アカザ属、ナデシコ科、ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属－キジムシロ属が検出された。

７）ＳＫ22、３層（試料８）

種実は検出されなかった。

８）ＳＫ31、４層（試料９）

アブラナ科、ウキヤガラ、ヒユ属、アカザ属－ヒユ属が検出された。

９）ＳＫ46、４層（試料10）

種実は検出されなかった。

## Ⅵ．考　察

１．トイレ遺構である可能性について

１）ＳＫ01、４層（試料１）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、花粉や種実の検出数も少ない。検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。以上のことから、各遺体が分解された可能性もあり、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたかどうかの明らかな判断はできないが、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることから、ＳＫ01がトイレ遺構である蓋然性は低い。

２）ＳＫ05、４層（試料２）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、花粉や種実の検出数も少ない。検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。以上のことから、各遺体が分解された可能性もあり、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたかどうかの明らかな判断はできないが、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることからＳＫ05がトイレ遺構である蓋然性は低い。

３）ＳＫ06、３層（試料３）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、花粉や種実の検出数も少ない。検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。以上のことから、各遺体が分解された可能性もあり、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたかどうかの明らかな判断はできないが、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることからＳＫ06がトイレ遺構である蓋然性は低い。

４）ＳＫ08、６層（試料４）

寄生虫卵、花粉および種実の検出数は少ない。検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、カヤツリグサ科、クワ科－イラクサ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。以上のことから、各遺体が分解された可能性もあり、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたかどうかの明らかな判断はできないが、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることからＳＫ08がトイレ遺構である蓋然性は低い。

５）ＳＫ14、４層（試料５）、９層（試料６）

４層（試料５）から鞭虫卵が検出されたが少なく、明らかな消化残渣は検出されない。花粉密度はやや高く、検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、クワ科－イラクサ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。また、種実も人里植物が検出される。花粉密度は比較的高いため、寄生虫卵が分解されたことは考えにくい。したがって、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたのではなく、周囲の人為環境から汚水による汚染が若干あったと考えられる。また、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることから、ＳＫ14がトイレ遺構である蓋然性は低い。

６）ＳＫ16、４層（試料５）

回虫卵が検出されたが少なく、明らかな消化残渣は検出されない。花粉密度はやや高く、検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。また、種実も人里植物が検出される。花粉密度は比較的高いため、寄生虫卵が分解されたとは考えにくい。したがって、堆積物中には糞便の堆積物は含まれておらず、周囲の人為環境からの汚染が若干あったと考えられる。また、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることからもＳＫ16がトイレ遺構である蓋然性は低い。

７）ＳＫ22、３層（試料８）

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されず、種実も検出されない。花粉密度はやや高く、検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。花粉密度は比較的高いため、寄生虫卵が分解されたとは考えにくい。したがって、堆積物中には糞便の堆積物は含まれていなかったと推定され、ＳＫ22がトイレ遺構である蓋然性は低い。

８）ＳＫ31、４層（試料９）

回虫卵が少量検出されたが明らかな消化残渣は検出されず、花粉や種実の検出数も少ない。検出された花粉は、クワ科－イラクサ科、ヨモギ属、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などの草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。したがって、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていた可能性は低く、周囲の人為環境から汚水による汚染が若干あったと考えられる。こうしたことから、ＳＫ31がトイレ遺構である蓋然性は低い。

９）ＳＫ46、４層（試料１０）

寄生虫卵および明らかな消化残渣、種実は検出されず、

花粉の検出数も少ない。検出された花粉は、イネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科の草本であり、これらは人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ。各遺体が分解された可能性もあり、堆積物中に糞便の堆積物が含まれていたかどうかの明らかな判断はできないが、花粉および種実群集は人里植物ないし耕地雑草を主体とすることからＳＫ46がトイレ遺構である蓋然性は低い。

２．周囲の堆積環境

周辺地域は、スギが主に分布し、構成要素としてナラ類（コナラ属コナラ亜属）、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）が生育する森林植生であったと考えられる。これらは生態上二次林の可能性が高い。堆積地周辺は、イネ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本が繁茂する環境が示唆される。これらの草本は陽当たりの良い乾燥地を好む人里植物ないし耕地雑草の性格を持つことから、周辺は開けた人為環境が考えられる。なお、栽培植物であるイネ属やソバ属が検出されることから、イネおよびソバが水田や畑で栽培され、利用されていたと考えられる。

## Ⅶ．まとめ

荒屋敷遺跡において検出された土坑（ＳＫ01の４層、ＳＫ05の４層、ＳＫ06の３層、ＳＫ08の６層、ＳＫ14の４層、９層、ＳＫ16の４層、ＳＫ22の３層、ＳＫ31の４層、ＳＫ46の４層）の堆積物について分析を行いトイレ遺構の可能性を検討した。その結果、寄生虫卵は検出されないかわずかな検出数であり、花粉と種実は人里植物ないし耕地雑草の性格を持つものがほとんどであった。こうしたことから、堆積物中には明かに糞便とみられるものは含まれておらず、これらの遺構がトイレ遺構である蓋然性は低いと判断された。なお、周辺にはイネ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属など陽当たりの良い乾燥地を好む人里植物ないし耕地雑草の性格をもつ草本が生育し、水田やソバなどの畑が営まれていたと推定された。周辺地域の森林は、スギが主に分布し、二次林要素とみなされるナラ類（コナラ属コナラ亜属）などが分布していたと推定された。

参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard（1992）『Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science　19』 p.231-245
金原正明・金原正子（1992）「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－』奈良国立文化財研究所，p.14-15
金子清俊・谷口博一（1987）「線形動物・扁形動物．医動物学」『新版臨床検査講座　８』医歯薬出版，p. 9-55
金原正明（1999）「寄生虫」『考古学と動物学，考古学と自然科学　２』同成社，p.151-158
中村純（1973）『花粉分析』古今書院，p.82-110
金原正明（1993）「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本　第10巻　古代資料研究の方法』角川書店，p.248-262
島倉巳三郎（1973）「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集』p.60
中村純（1980）「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録　第13集』p.91
中村純（1974）「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究　13』p.187-193
中村純（1977）「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学第10号』p.21-30
笠原安夫（1985）『日本雑草図説』養賢堂，p.494
笠原安夫（1988）「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究　第２巻　生業』雄山閣，p.131-139
南木睦彦（1991）「栽培植物」『古墳時代の研究　第４巻　生産と流通Ⅰ』雄山閣，p.165-174
南木睦彦（1992）「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社，p.18-22
南木睦彦（1993）「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編，第四紀試料分析法』東京大学出版会，p.276-283
吉崎昌一（1992）「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社，p. 2-14
渡辺誠（1975）『縄文時代の植物食』雄山閣，p.187
金原正明（1996）「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナルNo.409』ニューサイエンス社，p.15-19

**表1**　荒屋敷遺跡における寄生虫卵分析結果

| 分類群 | | ＳＫ01 | ＳＫ05 | ＳＫ06 | ＳＫ08 | ＳＫ14 | | ＳＫ16 | ＳＫ22 | ＳＫ31 | ＳＫ46 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 4層 | 4層 | 3層 | 6層 | 4層 | 9層 | 5層 | 3層 | 4層 | 4層 |
| 学名 | 和名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| Helminth eggs | 寄生虫卵 | | | | | | | | | | |
| *Ascaris* | 回虫卵 | | | | 1 | | | 4 | | 2 | |
| *Trichuris* | 鞭虫卵 | | | | | 1 | | | | | |
| Total | 計 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 4 | 0 | 2 | 0 |
| | 試料1㎤中の寄生虫卵密度 | 0.0 ×10 | 0.0 ×10 | 0.0 ×10 | 0.7 ×10 | 1.2 ×10 | 0.0 ×10 | 3.2 ×10 | 0.0 ×10 | 1.2 ×10 | 0.0 ×10 |
| | 明らかな消化残渣 | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) | (−) |
| | 試料1㎤中の花粉密度 | 7.3 $\times10^{3}$ | 6.2 $\times10^{3}$ | 1.4 $\times10^{3}$ | 3.2 $\times10^{3}$ | 2.0 $\times10^{4}$ | 6.0 $\times10^{4}$ | 1.4 $\times10^{4}$ | 2.0 $\times10^{4}$ | 4.5 $\times10^{3}$ | 1.8 $\times10^{2}$ |

## 表２　荒屋敷遺跡における花粉分析結果

| 分類群 | | SK01 | SK05 | SK06 | SK08 | SK14 | | SK16 | SK22 | SK31 | SK46 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 4層 | 4層 | 3層 | 6層 | 4層 | 9層 | 5層 | 3層 | 4層 | 4層 |
| 学名 | 和名 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | | | | | | | | | | |
| *Picea* | トウヒ属 | | 1 | | | | | | | | |
| *Tsuga* | ツガ属 | | | | | | 1 | | | | |
| *Pinus subgen. Diploxylon* | マツ属複維管束亜属 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 | 4 | 2 | | | 1 |
| *Pinus subgen. Haploxylon* | マツ属単維管束亜属 | 1 | | | 1 | | 2 | 1 | | | |
| *Cryptomeria japonica* | スギ | 20 | 31 | 6 | 6 | 9 | 8 | 35 | 4 | 5 | 3 |
| Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae | イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 | | 1 | | | | | | | 1 | |
| *Salix* | ヤナギ属 | | | | | | 12 | | | | |
| *Juglans* | クルミ属 | 1 | 1 | | | | 1 | | 1 | 1 | |
| *Pterocarya rhoifolia* | サワグルミ | 1 | 1 | 2 | 1 | | 2 | 2 | | 2 | |
| *Alnus* | ハンノキ属 | | 1 | | 1 | 1 | 10 | 1 | 1 | 6 | 4 |
| *Betula* | カバノキ属 | | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 |
| *Carpinus-Ostrya japonica* | クマシデ属-アサダ | | | | | | 4 | | | | |
| *Castanea crenata* | クリ | | 6 | 1 | | 1 | 15 | 2 | | | 1 |
| *Castanopsis* | シイ属 | | | | 1 | | | | | | |
| *Fagus* | ブナ属 | 1 | 1 | | | | 2 | | | 1 | 1 |
| *Quercus subgen. Lepidobalanus* | コナラ属コナラ亜属 | 9 | 7 | 4 | 4 | | 141 | 5 | 2 | 5 | 2 |
| *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* | コナラ属アカガシ亜属 | 1 | | | 1 | 1 | 4 | 1 | | 1 | |
| *Ulmus-Zelkova serrata* | ニレ属-ケヤキ | 3 | 4 | | 1 | | 8 | 1 | | 5 | 2 |
| *Celtis-Aphananthe aspera* | エノキ属-ムクノキ | | | | 1 | | 1 | | | 1 | 1 |
| *Zanthoxylum* | サンショウ属 | | | | | | 1 | | | | |
| *Ilex* | モチノキ属 | | | | | | | | | | 1 |
| Celastraceae | ニシキギ科 | | | | | | 1 | | | | |
| *Acer* | カエデ属 | | | | | | 7 | | | | |
| *Aesculus turbinata* | トチノキ | 1 | 1 | | | | 2 | | | | 2 |
| *Sambucus-Viburnum* | ニワトコ属-ガマズミ属 | 4 | | | | | 82 | | | | 2 |
| Arboreal Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | | | | | | | | | | |
| Moraceae-Urticaceae | クワ科-イラクサ科 | 35 | 12 | 12 | 10 | 111 | 13 | 23 | 9 | 140 | 1 |
| Leguminosae | マメ科 | 1 | 3 | | | | | | | | |
| Araliaceae | ウコギ科 | | | | | | 1 | | | | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | | | | | | | | | | |
| *Typha-Sparganium* | ガマ属-ミクリ属 | | 1 | | | | | | | | |
| *Alisma* | サジオモダカ属 | 2 | 1 | | | 1 | | | | | |
| *Sagittaria* | オモダカ属 | | | | | 5 | 1 | 1 | | | |
| *Gramineae* | イネ科 | 187 | 116 | 113 | 195 | 98 | 40 | 92 | 316 | 52 | 42 |
| *Oryza type* | イネ属型 | 21 | 7 | 14 | 34 | 5 | 9 | 1 | 13 | 6 | |
| Cyperaceae | カヤツリグサ科 | 27 | 22 | 9 | 8 | 8 | 5 | 32 | 5 | 21 | 5 |
| *Monochoria* | ミズアオイ属 | | | | | 1 | | | | | |
| *Polygonum* | タデ属 | | | | 1 | 2 | 1 | | | | |
| *Polygonum sect. Persicaria* | タデ属サナエタデ節 | | | 3 | | 1 | 1 | 1 | 1 | | |
| *Fagopyrum* | ソバ属 | | | 1 | | | | | | | |
| Chenopodiaceae-Amaranthaceae | アカザ科-ヒユ科 | 5 | 6 | 5 | 40 | 20 | 1 | 31 | 21 | 17 | 2 |
| Caryophyllaceae | ナデシコ科 | 1 | 2 | 2 | | 1 | | 5 | 2 | 1 | |
| *Ranunculus* | キンポウゲ属 | | | | | | 1 | | | | |
| Cruciferae | アブラナ科 | 3 | 2 | 1 | | 1 | 7 | 7 | 14 | 13 | 2 |
| *Impatiens* | ツリフネソウ属 | | | | | | 1 | | | | 1 |
| *Ampelopsis brevipedunculata* | ノブドウ | | | | | | 1 | | | | |
| *Trapa* | ヒシ属 | | | | | | 1 | | | | |
| Hydrocetyloideae | チドメグサ亜科 | | 1 | | | | | | | 1 | |
| Apiodeae | セリ亜科 | | | | | 1 | 2 | 2 | | | |
| *Plantago* | オオバコ属 | 1 | | | | | | | | | |
| Valerianaceae | オミナエシ科 | | | | | | 1 | | | | |
| Lactucoideae | タンポポ亜科 | 1 | 4 | 1 | 2 | 1 | | 3 | 1 | 2 | |
| Asteroideae | キク亜科 | 4 | 8 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 |
| *Xanthium* | オナモミ属 | | | | 3 | | | | 3 | | |
| *Artemisia* | ヨモギ属 | 76 | 126 | 51 | 49 | 55 | 41 | 128 | 31 | 61 | 33 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | | | | | | | | | | |
| Monolate type spore | 単条溝胞子 | 26 | 12 | 28 | 8 | 5 | 4 | 12 | 10 | 17 | 40 |
| Trilate type spore | 三条溝胞子 | 5 | 6 | 4 | 1 | 1 | | 5 | 1 | 4 | 1 |
| Arboreal pollen | 樹木花粉 | 43 | 57 | 14 | 18 | 15 | 309 | 51 | 8 | 29 | 21 |
| Arboreal Nonarboreal pollen | 樹木・草本花粉 | 36 | 15 | 12 | 10 | 111 | 14 | 23 | 9 | 140 | 1 |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 328 | 296 | 202 | 333 | 201 | 114 | 304 | 408 | 174 | 86 |
| Total pollen | 花粉総数 | 407 | 368 | 228 | 361 | 327 | 437 | 378 | 425 | 343 | 108 |
| | 試料１㎤中の花粉密度 | 7.3 $\times10^3$ | 6.2 $\times10^3$ | 1.4 $\times10^3$ | 3.2 $\times10^3$ | 2.0 $\times10^4$ | 6.0 $\times10^4$ | 1.4 $\times10^4$ | 2.0 $\times10^4$ | 4.5 $\times10^3$ | 1.8 $\times10^2$ |
| Unknown pollen | 未同定花粉 | 5 | 4 | 1 | 4 | 1 | 5 | 3 | 3 | 2 | 5 |
| Fern spore | シダ植物胞子 | 31 | 18 | 32 | 9 | 6 | 4 | 17 | 11 | 21 | 41 |

## 表3　荒屋敷遺跡における種実同定結果

| 分類群 | | | ＳＫ01 | ＳＫ05 | ＳＫ06 | ＳＫ08 | ＳＫ14 | | ＳＫ16 | ＳＫ22 | ＳＫ31 | ＳＫ46 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 4層 | 4層 | 3層 | 6層 | 4層 | 9層 | 5層 | 3層 | 4層 | 4層 |
| 学名 | 和名 | 部位 | 043 | 044 | 045 | 046 | 047 | 048 | 049 | 050 | 051 | 052 |
| Arbor | 樹木 | | | | | | | | | | | |
| *Morus* | クワ属 | 種子 | | | | | | | 1 | | | |
| Herb | 草本 | | | | | | | | | | | |
| *Oryza sativa L.* | イネ | 穎 | | | | | 破片＋ | | | | | |
| Gramineae | イネ科 | 穎 | | | | | | 6 | | | | |
| *Scirpus fluviatilis* A. Gray | ウキヤガラ | 果実 | | | | | | | | | 1 | |
| *Scirpus* | ホタルイ属 | 果実 | 1 | | | | 1 | | | | | |
| *Cyperus* | カヤツリグサ属 | 果実 | | | 1 | | | 1 | | | | |
| Cyperaceae | カヤツリグサ科 | 果実 | | | 1 | | | | | | | |
| *Aneilema keisak* Hassk. | イボクサ | 種子 | | | | 1 | | 1 | | | | |
| Juncaceae | イグサ科 | 種子 | | | | | 37 | | | | | |
| *Cannabis sativa* L. | アサ | 種子 | | | | | 2 | | | | | |
| *Polygonum* | タデ属 | 果実 | | | 2 | | | | | | | |
| *Chenopodium* | アカザ属 | 種子 | | | | 5 | 2 | | 6 | | | |
| *Amaranthus* | ヒユ属 | 種子 | | | | | 1 | 3 | | | 1 | |
| *Chenopodium-Amaranthus* | アカザ属-ヒユ属 | 種子 | | 1 | 1 | | 3 | | | | 1 | |
| Caryophyllaceae | ナデシコ科 | 種子 | | | | | | | 2 | | | |
| *Duchesnea-Fragaria* | ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 | | | | | | | | | | | |
| *-Potentilla* | -キジムシロ属 | 種子 | | | | | | 1 | 1 | | | |
| *Viola* | スミレ属 | 種子 | | 1 | | | | | | | | |
| Cruciferae | アブラナ科 | 種子 | | | | | | | | | 4 | |
| *Torilis* Adans. | ヤブジラミ属 | 果実 | | 1 | | | | | | | | |
| Solanaceae | ナス科 | 種子 | | | | | 2 | | | | | |
| Total | 合格 | | 1 | 3 | 5 | 6 | 48 | 12 | 10 | 0 | 7 | 0 |
| Unknown | 不明種実 | | | | 1 | | | | | | | |

(20㎤中0.25㎜篩)

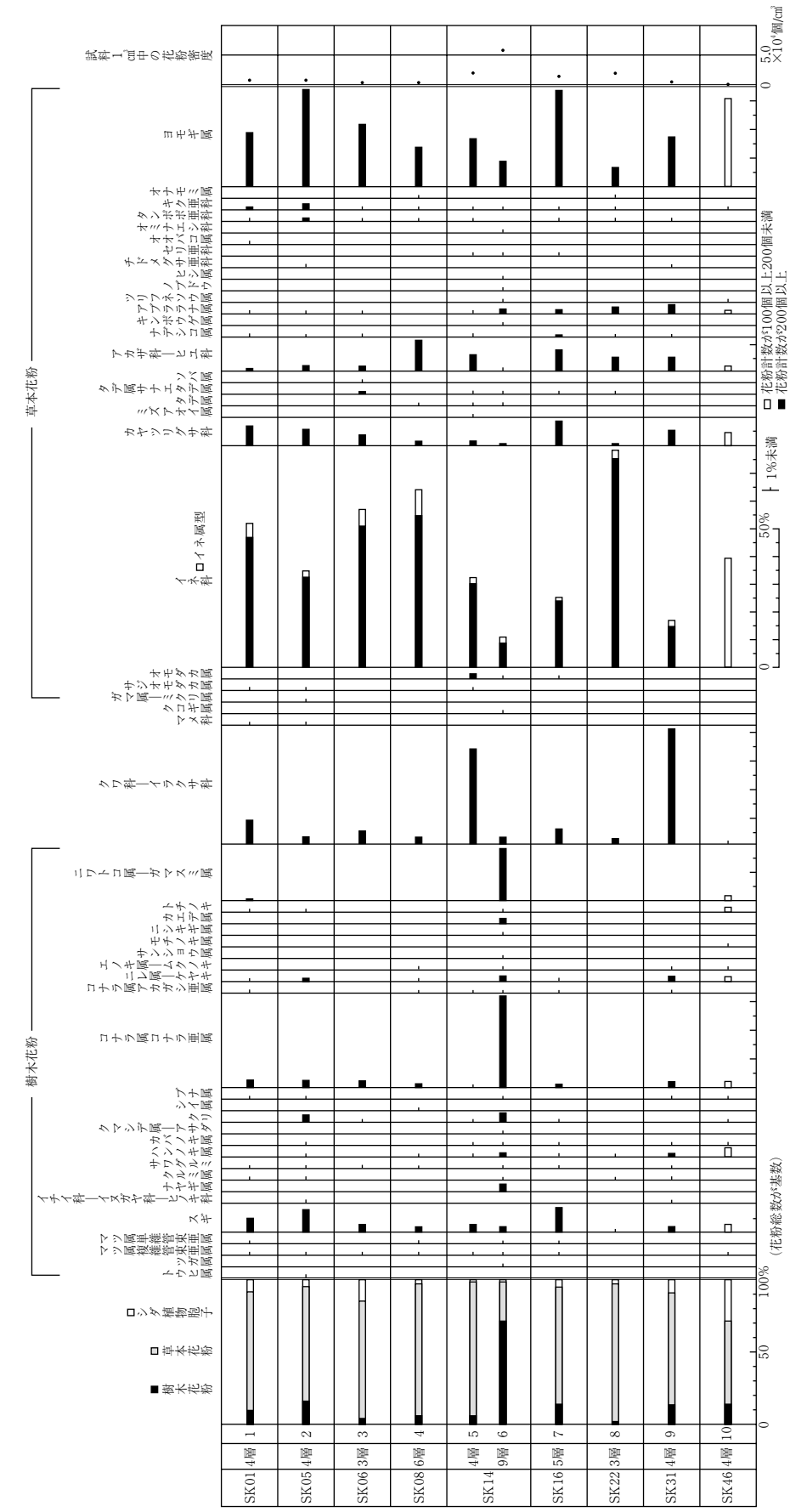
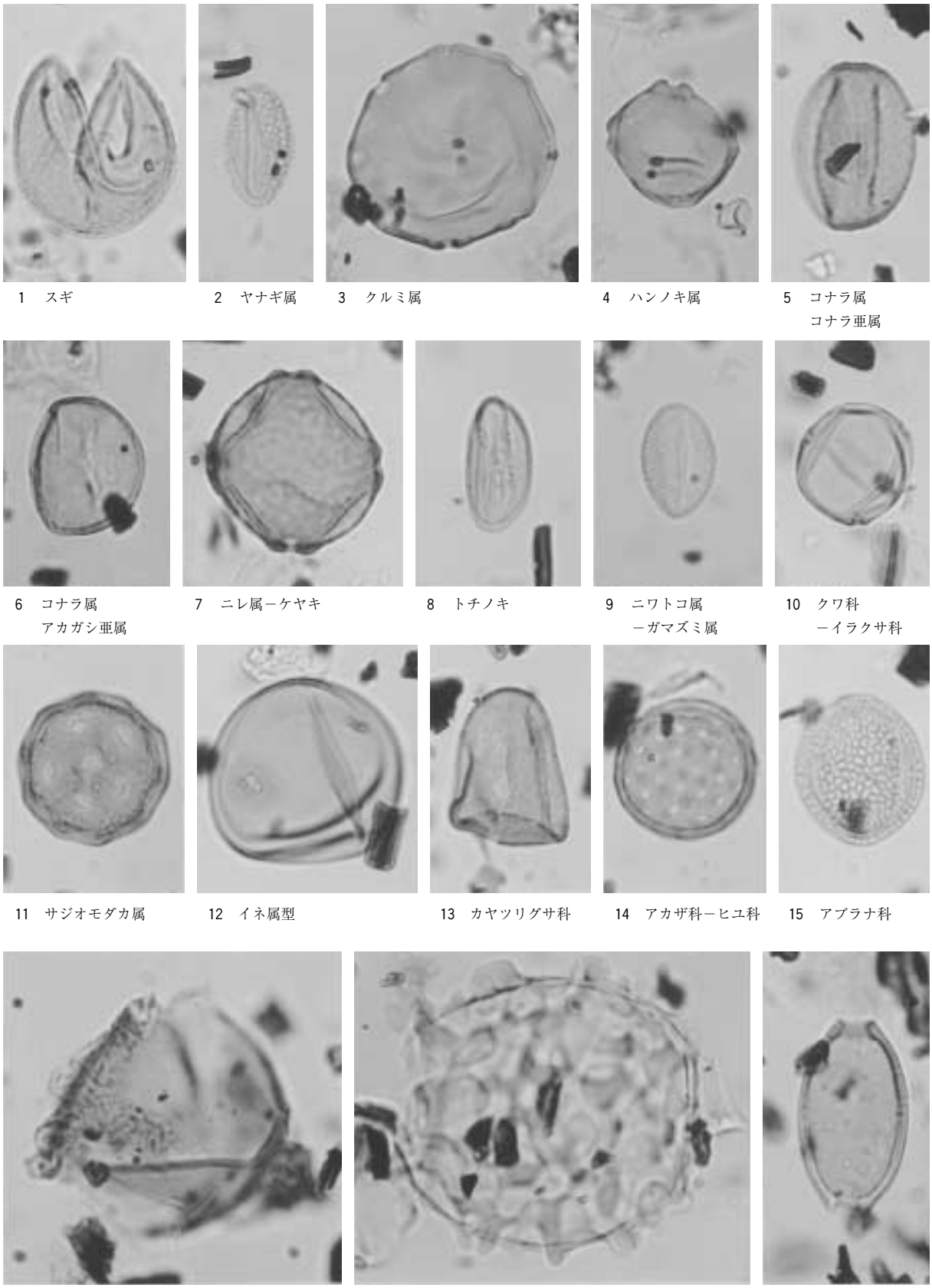



図1　荒屋敷遺跡における花粉ダイアグラム



1　スギ　2　ヤナギ属　3　クルミ属　4　ハンノキ属　5　コナラ属 コナラ亜属

6　コナラ属 アカガシ亜属　7　ニレ属－ケヤキ　8　トチノキ　9　ニワトコ属 －ガマズミ属　10　クワ科 －イラクサ科

11　サジオモダカ属　12　イネ属型　13　カヤツリグサ科　14　アカザ科－ヒユ科　15　アブラナ科

16　ヒシ属　17　回虫卵　18　鞭虫卵

10μm

1　花粉･寄生虫卵顕微鏡写真

1　ウキヤガラ果実
0.5㎜

2　ホタルイ属果実
0.5㎜

3　カヤツリグサ属果実
0.5㎜

4　カヤツリグサ科果実
0.25㎜

5　イボクサ種子
0.5㎜

6　イグサ科種子
0.25㎜

7　アサ種子
0.5㎜

8　タデ属果実
0.5㎜

9　アカザ属種子
0.5㎜

10　ヒユ属種子
0.5㎜

11　アブラナ科種子
0.5㎜

12　ナス科種子
0.5㎜

2　種実顕微鏡写真（1）

## 第２節　種実同定

（株）　古環境研究所

１．試　料

試料は、荒屋敷遺跡の各遺構より出土の選別済み植物遺体53点（053～105）である。

２．方　法

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

３．結　果

（１）分類群

樹木５分類群が同定された。学名、和名および粒数を表４に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

オニグルミ　*Juglans ailanthifolia* Carr．核　クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起がある。断面は円形である。

ウメ　*Prunus mume* Sieb.et Zucc．核　バラ科

茶褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面には小孔が散在する。

スモモ　*Prunus salicina* Lindley　核　バラ科

淡褐色で扁平楕円形を呈し、側面に縫合線が走る。表面は粗い。

モモ　*Prunus persica* Batsch　核　バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　種子　トチノキ科

黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

（２）種実群集の特徴

１）ＳＫ01

モモ、トチノキ、ウメが同定された。

２）ＳＫ05

すべてモモであった。

３）ＳＫ08

オニグルミ、モモが同定された。

４）ＳＫ14

モモが多く検出され、スモモが１個固定された。

５）ＳＫ32

すべてモモであった。

６）ＳＫ43（NO.1）

すべてモモであった。

７）ＳＤ20

オニグルミが同定された。

８）ＳＤ21

オニグルミが同定された。

９）盛　土

Ｊ30はモモ、Ｋ32、Ｌ30はオニグルミであった。

４．種実から推定される植生と農耕

荒屋敷遺跡において出土した種実は、オニグルミ、ウメ、スモモ、モモ、トチノキであり、モモ核が多いのが特徴的である。ウメ、スモモ、モモは栽培植物、オニグルミ、トチノキは食用になる有用植物である。

本遺跡の周辺でこれらの樹木が栽培もしくは採取され、利用されていたことが推定される。

参考文献

笠原安夫（1985）『日本雑草図説』養賢堂,p.494
笠原安夫（1988）「作物および田畑雑草種類」『弥生文化の研究　第２巻　生業』雄山閣,p.131-139
南木睦彦（1991）「栽培植物」『古墳時代の研究　第４巻　生産と流通Ⅰ』雄山閣,p.165-174
南木睦彦（1992）「低湿地遺跡の種実」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社,p.18-22
南木睦彦（1993）「葉・果実・種子」『日本第四紀学会編，第四紀試料分析法』東京大学出版会,p.276-283
吉崎昌一（1992）「古代雑穀の検出」『月刊考古学ジャーナルNo.355』ニューサイエンス社,p.2-14
渡辺誠（1975）『縄文時代の植物食』雄山閣,p.187
金原正明（1996）「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナルNo.409』ニューサイエンス社,p.15-19

**表 4**　荒屋敷遺跡における選別済み種実の同定結果

| No. | 試料番号 | 出土遺構 | グリッド | 層位 | 分類群（和名／学名） | 部位 | 個数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | FBC01A 053 | ＳＫ01 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 2 | FBC01A 054 | ＳＫ01 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 3 | FBC01A 055 | ＳＫ01 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 4 | FBC01A 056 | ＳＫ01 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 5 | FBC01A 057 | ＳＫ01 | | | トチノキ *Aesculus turbinata* Blume | 種子 | 1 |
| 6 | FBC01A 058 | ＳＫ01 | | | トチノキ *Aesculus turbinata* Blume | 種子 | 1 |
| 7 | FBC01A 059 | ＳＫ01 | | | ウメ *Prunus mume* Sieb. et Zucc. | 核 | 1 |
| 8 | FBC01A 060 | ＳＫ01 | | 2 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 9 | FBC01A 061 | ＳＫ01 | | 2 | トチノキ *Aesculus turbinata* Blume | 種子 | 1 |
| 10 | FBC01A 062 | ＳＫ05 | | 1 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 11 | FBC01A 063 | ＳＫ05 | | 1 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 12 | FBC01A 064 | ＳＫ05 | | 1 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 13 | FBC01A 065 | ＳＫ05 | | 1 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 14 | FBC01A 066 | ＳＫ05 | | 1 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 15 | FBC01A 067 | ＳＫ08 | | 3 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 16 | FBC01A 068 | ＳＫ08 | | 3 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 17 | FBC01A 069 | ＳＫ08 | | 3 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 18 | FBC01A 070 | ＳＫ08 | | 3 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 19 | FBC01A 071 | ＳＫ08 | | 3 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia Carr.* | 核 | 1 |
| 20 | FBC01A 072 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 21 | FBC01A 073 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 22 | FBC01A 074 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 23 | FBC01A 075 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 24 | FBC01A 076 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 25 | FBC01A 077 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 26 | FBC01A 078 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 27 | FBC01A 079 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 28 | FBC01A 080 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 29 | FBC01A 081 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 30 | FBC01A 082 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 31 | FBC01A 083 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 32 | FBC01A 084 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 33 | FBC01A 085 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 34 | FBC01A 086 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 35 | FBC01A 087 | ＳＫ14 | | | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 36 | FBC01A 088 | ＳＫ14 | | | スモモ *Prunus salicina* Lindly | 核 | 1 |
| 37 | FBC01A 089 | ＳＫ32 | | 3 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 38 | FBC01A 090 | ＳＫ32 | | 3 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 39 | FBC01A 091 | ＳＫ32 | | 3 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 40 | FBC01A 092 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 41 | FBC01A 093 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 42 | FBC01A 094 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 43 | FBC01A 095 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 44 | FBC01A 096 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 45 | FBC01A 097 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 46 | FBC01A 098 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 47 | FBC01A 099 | ＳＫ43(No.1) | | 13 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 48 | FBC01A 100 | ＳＤ20 | | 1 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 49 | FBC01A 101 | ＳＤ21 | | 3 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 50 | FBC01A 102 | | J30 | 盛土 | モモ *Prunus persica* Batsch | 核 | 1 |
| 51 | FBC01A 103 | | K32 | 盛土 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 52 | FBC01A 104 | | K32 | 盛土 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |
| 53 | FBC01A 105 | | L30 | 盛土 | オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. | 核 | 1 |

1　オニグルミ核（試料101）

2　同左

3　トチノキ堅果（試料058）

4　ウメ核（試料059）

5　同左

6　モモ核（試料075）

7　同左

8　モモ核（試料066）

9　同左

10　モモ核（試料102）

11　同左

12　モモ核（試料063）

13　同左

14　スモモ核（試料088）

15　同左

▬ 1.0㎜

## 3　種実顕微鏡写真（２）

## 第３節　樹種同定

パリノ・サーヴェイ（株）

はじめに

荒屋敷遺跡は、阿賀川の支流である日橋川右岸の沖積地に位置する。日橋川は、本遺跡の西側で阿賀川に合流しており、他にもいくつかの支流が合流している。経済企画庁総合開発局（1972）によれば、本遺跡周辺の地形は、複数の扇状地の先端部が集まっており、三角州性低地に分類されている。

本遺跡では、発掘調査により、縄文時代～古墳時代、平安時代、中・近世の遺構（竪穴状遺構、掘立柱建物跡、柱列跡、土坑、溝跡、ピット群）が検出されている。これらの遺構からは、土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品等と共に木製品も多数出土している。

本報告では、これらの木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

１．試　料

試料は、出土した木製品20点（FBC01A021～40）で、木製品そのもの、または製品から採取した５㎝角程度のブロックの状態である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表５に記した。

２．方　法

ブロック試料については、ブロックを採取した際の切断面から0.5～１㎝角程度の小ブロックを採取して試料とする。剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。木製品については、製品から直接切片を作製する。

作製した切片をスライドガラス状に載せ、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

３．結　果

樹種同定結果と切片作成時に観察した木取りを表５に示す。木製品は、針葉樹２種類（スギ・サワラ）と広葉樹２種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・ケヤキ）に同定された。また、木取りは、板材・角材とも、最も広い面の観察結果を記した。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don）

スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、ほぼ晩材部に限って認められ、接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・サワラ（*Chamaecyparis pisifera*（Sieb.et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。

表５　樹種同定結果

| 番　号 | 出土遺構 | 層位 | 送付試料 | 形　状 | 木 取 り | 器　種 | 樹　種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FBC01A021 | SK01 | 2 | 木製品 | 板材 | 板　目 | 箆状木製品 | スギ |
| FBC01A022 | SK01 | 1 | 木製品 | 板材 | 柾　目 | 曲物側板 | スギ |
| FBC01A023 | SK05 | 1 | 木製品 | 角材 | 板　目 | 棒状木製品 | サワラ |
| FBC01A024 | SK08 | 5 | 木製品 | 板材 | 板　目 | 箆状木製品 | スギ |
| FBC01A025 | SK14(No.1) | 4 | 木製品 | 角材 | 柾　目 | 棒状木製品 | サワラ |
| FBC01A026 | SK14(No.2) | 4 | 木製品 | 角材 | 柾　目 | 棒状木製品 | スギ |
| FBC01A027 | SK14(No.6) | 6 | 木製品 | 板材 | 板　目 | 板状木製品 | スギ |
| FBC01A028 | SK14(No.7) | 6 | 木製品 | 板材 | 板　目 | 箆状木製品 | スギ |
| FBC01A029 | SK14(No.8) | 6 | 木製品 | 板材 | 柾　目 | 板状木製品 | スギ |
| FBC01A030 | SK14(No.9) | 5 | 木製品 | 角材～板材 | 板　目 | 木偶(未) | コナラ属コナラ亜属コナラ節 |
| FBC01A031 | SK14(No.13) | 4 | 木製品 | 角材 | 板　目 | 箸状木製品 | スギ |
| FBC01A032 | SK14(No.17) | 4 | 木製品 | 板材 | 柾　目 | 板状木製品 | スギ |
| FBC01A033 | SK14 | | 木製品 | 破片 | 縦木? | 漆椀片 | ケヤキ |
| FBC01A034 | SK14 | | 木製品 | 角材 | 板　目 | 棒状木製品 | スギ |
| FBC01A035 | SK22 | 3 | 木　片 | 破片 | 縦木? | 漆　椀 | ケヤキ |
| FBC01A036 | SK22 | 3 | 木製品 | 角材 | 板　目 | 棒状(先端尖) | スギ |
| FBC01A037 | SK24 | 8 | 木製品 | 角材 | 板　目 | 棒状(未) | スギ |
| FBC01A038 | SK39 | 2 | 木製品 | 板材 | 柾　目 | 板状(先端尖) | スギ |
| FBC01A039 | SK46(No.1) | 4 | 木　片 | 角材 | 板目～柾目 | 角　材 | スギ |
| FBC01A040 | SK14 | 6 | 木　片 | 板材 | 柾　目 | 板　材 | スギ |

樹脂細胞は早材部の終わりから晩材部にかけて認められ、接線方向に配列する。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）

ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、１～10細胞幅、１～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

４．考　察

樹種同定を行った木製品は、容器類（曲物側板、漆椀）、祭祀具（木偶）、用途不明（箆状、棒状、箸状、角材、板材）に大別される。木偶１点と漆椀２点の合計３点を除く17点は、いずれも針葉樹材で、スギが多い。

容器類のうち、曲物側板は、スギの柾目板であった。近接する麻生館跡でも、曲物側板にスギが確認されており、今回の結果と一致する。農商務省山林局（1912）や成田（1996）に紹介されている民俗事例によれば、曲物はヒノキが最も高価とされ、スギとモミがそれに次ぎ、側板の木取りは柾目板とすることが一般的である。今回の結果は、民俗事例とも一致しており、同様の用材選択と木取りが行われていたことが指摘できる。ヒノキやサワラは、割裂性が高く、薄い板の作製が比較的容易であり、精油成分により耐水性や防虫性にも優れる（平井，1980ａ）。これらの材質を考慮した用材選択と考えられる。

一方、漆椀は２点とも落葉広葉樹のケヤキであった。ケヤキの椀は、県内の御山千軒遺跡、弓手原遺跡、久世原館・番匠地遺跡等でも多数確認されており（嶋倉，1983；鈴鹿，1983；パリノ・サーヴェイ株式会社，1993；松田，1996）、今回の結果とも一致する。ケヤキの木材は比較的重硬で、強度や耐水性に優れた材質を有する（平井，1980ｂ）。また、民俗事例では、挽物の椀や皿にブナ、トチノキ、ケヤキ等が利用され、ケヤキは靱性があって薄手物に適するとされる（橋本，1979）。

椀の木取りは、大きく分けて縦木地と横木地とがある（山田ほか，1990；北野，1990）。縦木地は、丸太から円盤をとり、木口面から抉りを入れるもので、芯持ちと芯抜きの２種類がある。縦木取りでは、椀の底が木口面になる。一方、横木地は、丸太を半裁またはミカン割にして割った面から抉りを入れる柾目取と、丸太を横にして直接椀型を削り出す板目取の２種類がある。横木取りでは、いずれも木口面が側面になる。今回の試料は、破片のために木取りの詳細は不明であるが、断面で軸方向が椀の上下方向に一致することから、縦木取りの可能性がある。会津漆器の民俗事例では、椀などの丸物は全て横木地を利用し、ブナやケヤキは柾目取、トチノキは板目取で加工される（農商務省山林局，1912）。今回の木地が縦木取とすれば、会津漆器の民俗事例とは異なっていることになり、古くは縦木取も存在したか、漆器自体が他地域から持ち込まれた可能性がある。今後、漆器の木取りの観察も含めて検討したい。

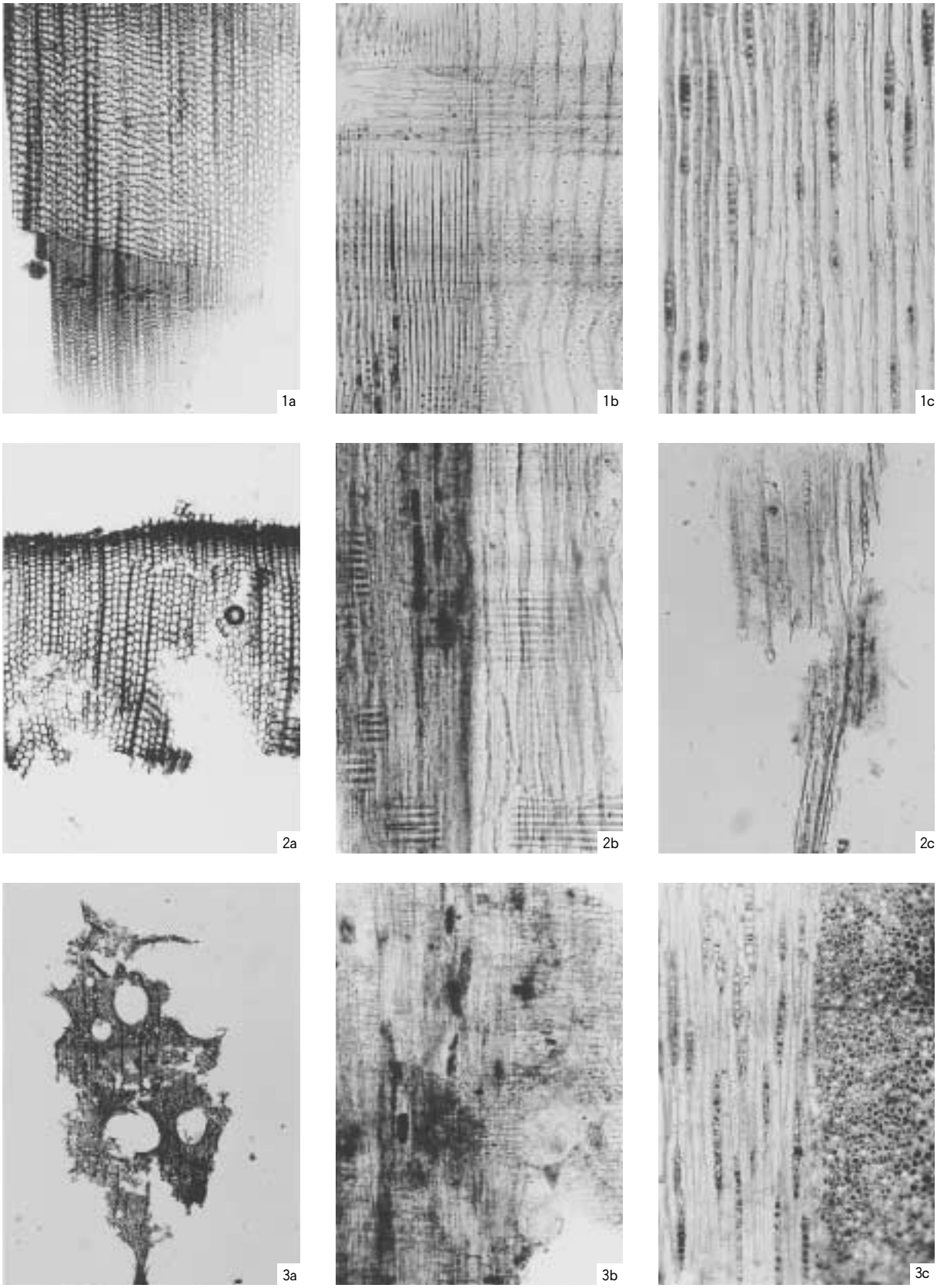
木偶はコナラ節であった。コナラ節の木材は重硬で強度が高い材質を有し、加工はやや困難である（平井，1979）。彫刻用材は、用途によって利用される種類が異なり、農商務省山林局（1912）のリストには軽軟な木材から重硬な木材まで様々な種類が挙げられている。コナラ節は、リスト中には見られないが、東京都の葛西城跡の陽物形に認められた例があり、彫刻材として利用されていたことが推定される。

その他の木製品は、箆状、棒状、箸状、角材、板材等があるが、用途の詳細は不明である。サワラの１点を除く16点がスギであり、スギ材が大量に利用されていたことがうかがえる。木製品の木取りは、最も広い面が板目になる例と柾目になる例とがあるが、今回の結果を見た限りでは、形状や木取りによる用材選択の差異は認められない。スギは、木理が通直で加工が容易であり、耐水性も比較的高い。日本の重要な有用材の一つであり、民俗事例では建築材や指物等に広く利用される（農商務省山林局，1912）。また、有用材であることと、成長が早いことから、広い地域で植林されており、現在の日本では植林面積が最も広い樹木でもあり、本地域周辺でも植林地がみられる（平井，1980ａ；宮脇，1987）。スギの本格的な植林は近世からとされるが、文献記録などでは少なくとも古代には若木の保護や植林が行われてきたことが推定されている（山田，1996；渡

辺,1996；Totman,1998)。これまで県内で行われた例では、スギが多くを占める例はほとんど報告されていない。本地域でスギが木製品の多くを占めている背景については、植林も含めた周辺植生との関係、遺跡の性格や使用者との関係等が考えられる。しかし、現時点では詳細は不明であり、今後さらに類例を蓄積して用材選択の傾向とその背景について検討したい。

引用文献

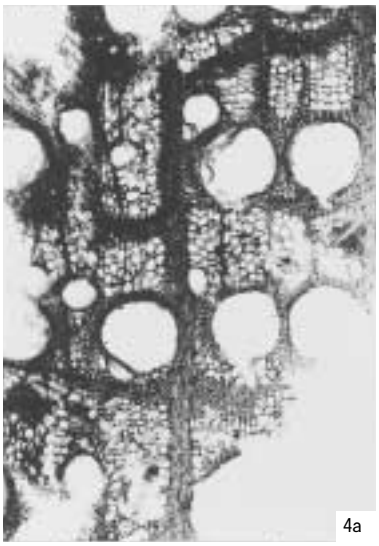
橋本鉄男（1979)『ものと木の文化史31　ろくろ』法政大学出版局,p.444
平井信二（1979)『木の事典　第２巻』かなえ書房
平井信二（1980ａ)『木の事典　第６巻』かなえ書房
平井信二（1980ｂ)『木の事典　第４巻』かなえ書房
経済企画庁総合開発局（1972)『土地分類図07（福島県)』
北野信彦（1990)「近世出土漆器に関する一調査方法」『月刊考古学ジャーナル№322』p.24-28
松田隆嗣（1996)「弓手原Ａ遺跡より出土した木製遺物の用材について」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅰ　弓手原Ａ遺跡（第１次調査)（福島県文化財調査報告書第319集)』福島県教育委員会,p.291-295
宮脇　昭編（1987)『日本植生誌　東北』至文堂,p.605
成田壽一郎（1996)『曲物・箍物』理工学社,p.205
農商務省山林局編（1912)『木材ノ工藝的利用』大日本山林會,p.1308
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993)「自然科学分析（花粉・材)」『久世原館・番匠地遺跡　第Ⅰ篇　－概要・附篇－（いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊)』福島県いわき市教育委員会･財団法人いわき市教育委員会文化事業団,p.74-88
嶋倉巳三郎（1983)「御山千軒遺跡から出土した木質遺物」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ　御山千軒遺跡（福島県文化財調査報告書第109集)』福島県教育委員会・日本国有鉄道,p.9-30
鈴鹿八重子（1983)「木製品の材質について」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ　御山千軒遺跡　（福島県文化財調査報告書第109集)』福島県教育委員会･日本国有鉄道,p.307-310
Totman Conrad（1998)『日本人はどのように森をつくってきたのか』熊谷　実訳，築地書館［To tman onrad（1989）*The Green Archipelago, Forestry in Preindustrial Japan*],p.200
山田昌久（1996)「植物と人間の暮らし」『江戸の町づくりと木材資源　都市のインフラストラクチャー　週間朝日百科　植物の世界14巻』朝日新聞社,p.278-282
山田昌久・鈴木三男・能城修一（1990)「考古学における木製遺物の樹種選択研究の現状　－木製品と樹種・森林資源の選択・仕様樹種と工具（製作法）－」『木と民具』日本民具学会編，雄山閣,p.121-135
渡邊定元（1996)「スギの林業史　単子葉植物３・裸子植物」『週間朝日百科　植物の世界11巻』朝日新聞社,p.210-211

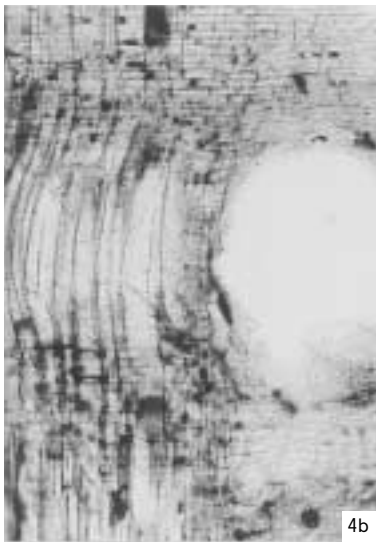



１．スギ（ＦＢＣ０１Ａ０４０）
２．サワラ（ＦＢＣ０１Ａ０２５）
３．コナラ属コナラ亜属コナラ節（ＦＢＣ０１Ａ０３０）
ａ：小口，ｂ：柾目，ｃ：板目

200μm：a
200μm：b,c

４　木製品樹種顕微鏡写真（１）



4．ケヤキ（ＦＢＣ０１Ａ０３３）
　a：小口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b,c

5　木製品樹種顕微鏡写真（２）

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | あいづじゅうかんきたどうろいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２ |
| シリーズ名 | 福島県文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第405集 |
| 編著者名 | 高橋　信一・小笠原　啓美・菊田　順幸・井　憲治 |
| 編集機関 | 財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部<br>〒960-8116　福島県福島市春日町５-54　TEL 024-534-2733 |
| 発行機関 | 福島県教育委員会<br>〒960-8688　福島県福島市杉妻町２-16　TEL 024-534-1111 |
| 発行年月日 | 2003年３月27日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 °′″ | 東経 °′″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 荒屋敷（あらやしき） | 福島県耶麻郡（ふくしまけんやまぐん）<br>塩川町大字遠田（しおかわまちおおあざとおだ）<br>字荒屋敷（あざあらやしき）　他（ほか） | 403 | 0073 | 37 35 22 | 139 52 50 | 2001年5月16日<br>～<br>2001年12月21日 | 9,700㎡ | 道路（会津縦貫北道路）建設に伴う事前調査 |

| 所収遺跡名 | 種類 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 荒屋敷（あらやしき） | 散布地 | 平安時代<br>～<br>中世 | 竪穴状遺構（１）　柱列跡（１）<br>掘立柱建物跡（１）　ピット群（４）<br>土坑（60）<br>溝跡（33） | 土師器・須恵器<br>陶磁器・木製品<br>など | 本遺跡は平安時代～中世を主体とする複合遺跡である。遺物は12世紀～13世紀を主体とする在地系のかわらけ･貿易陶磁器（白磁･青磁）･中世陶器（珠洲系･瓷器系）のほか,木質遺物など希少な資料が得られている。性格的には日橋川沿いの自然堤防上に立地する「津」（川湊）と判断される。 |


福島県文化財調査報告書第405集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2

荒屋敷遺跡（あらやしきいせき）

平成15年３月27日発行

| | | |
|---|---|---|
| 編　集 | 財団法人福島県文化振興事業団 | （遺跡調査部） |
| 発　行 | 福島県教育委員会 | （〒960-8668）福島市杉妻２-16 |
| | 財団法人福島県文化振興事業団 | （〒963-8116）福島市春日町５-54 |
| | 国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所 | （〒963-0111）郡山市安積町荒井字丈部内28-１ |
| 印　刷 | 石井電算印刷株式会社 | （〒963-0724）郡山市田村町上行合字南川田37-２ |